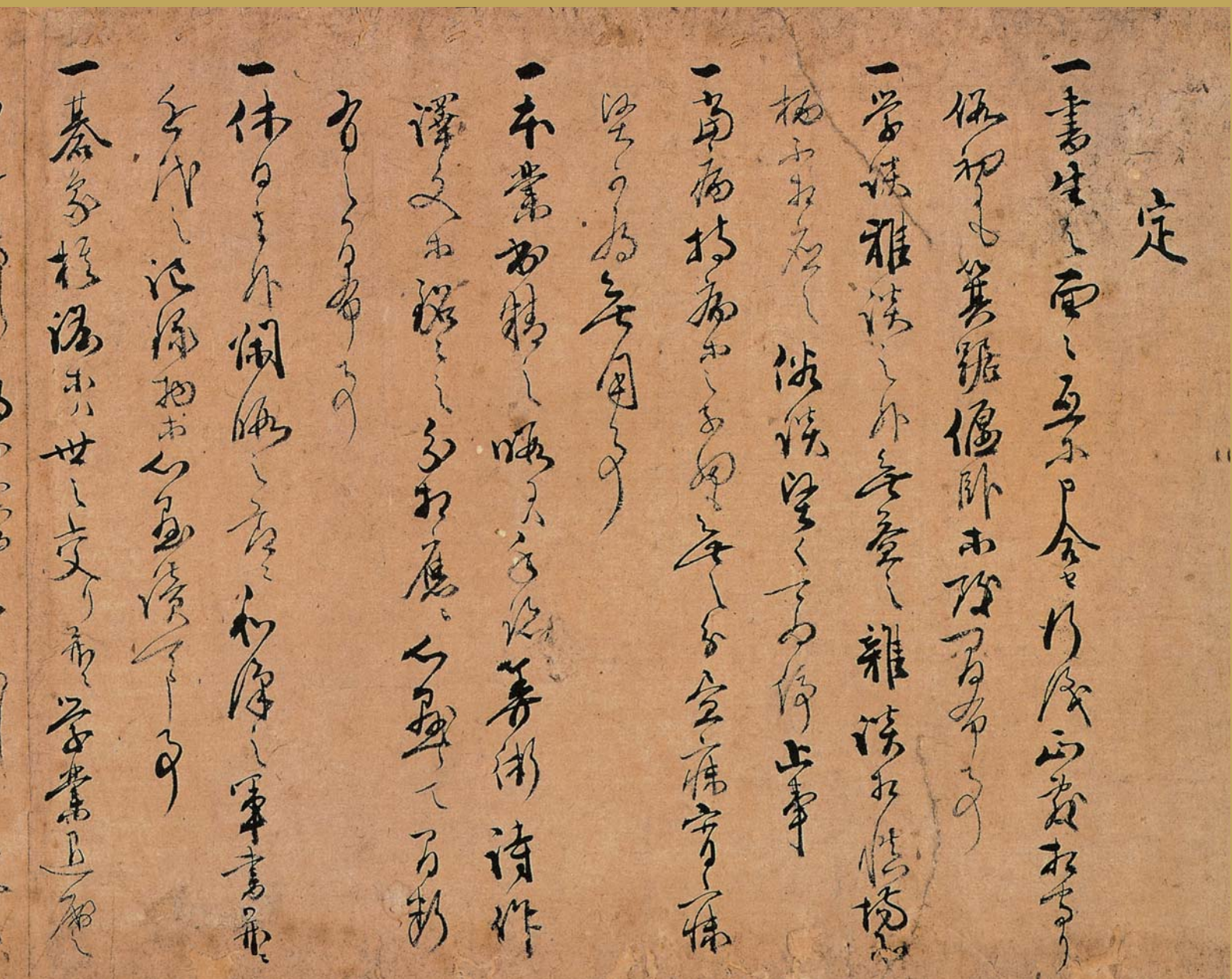


大阪大学大学院文学研究科

年報 2016

教育・研究(2014-2015 年度)



大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

大阪大学大学院文学研究科

年報 2016

教育・研究 (2014-2015 年度)

大阪大学大学院文学研究科

評価・広報室

表紙解説

中井竹山筆「懷徳堂定書」

大阪大学懷徳堂文庫蔵

三〇・七×六六・四センチ

享保九年（一二二四）、大坂の有力町人によって創設された学問所懷徳堂は、江戸時代の後半、約百四十年間にわたって、日本近世の学術史と商道德の形成に大きな影響を与えた。大阪大学は、この懷徳堂を精神的源流と位置づけ、現在、文学研究科が（財）懷徳堂記念会と協力して、資料調査や公開講座の開催など、各種の社会教育活動を推進している。

本資料は、その懷徳堂の貴重資料の一つである。懷徳堂内に寄宿していた書生の生活態度について、第四代学主の中井竹山が安永七年（一七七八）に定めた規定である。毎月、五と十の付く休日に、寄宿生を講堂に集め、読み聴かせるのがきまりであったという。「箕踞偃臥」「無益の雑談」「昼寝宵寝」などを禁ずる一方、「手跡・算術・詩作・訳文」「和訳の軍書」「近代の記録物」など広範な学芸領域に関心を持つよう勧奨している。

同じく中井竹山が宝暦八年（一七五八）に掲げた「書生の交わりは貴賤・貧富を論ぜず同輩たるべき事」という開明的な懷徳堂の基本精神を受け継ぎ、総じて、学生相互の自律・自助を勧める内容となっている。

〈訳文〉

定

- 一 書生の面々互に申合せ行儀正敷相守り仮初にも箕踞偃臥等致す間布き事
 - 一 学談雅談の外、無益の雑談相い慎み、場所柄不相応の俗談、堅く停止と為すべき事
 - 一 当病持病等の子細も之が分無く昼寝宵寝は堅く無用と為すべき事
 - 一 本業出精の暇には、手跡・算術・詩作・訳文等、銘々の分相應に心懸け候て、間断之れ有る間布き事
 - 一 休日其の外閑暇の節に、和訳の軍書并に近代の記録物等心懸け読み申すべき事
 - 一 碁象棋謡等は世の交り并に学業退屈の氣を転じ候為に兼ねて差免じ之有り候へども休日の外は昼迄の内右様の雑芸に懸り候儀、無用と為すべき事
 - 一 銘々行届き申さざる事は、同輩の内より互に心を添へ切磋有るべき事
 - 一 人の切磋を受け、却って立腹など致し候はば、傍人より早々その段、申し出るべき事
- 以上
- 安永七年戊ノ六月

年報2016

目 次

大阪大学大学院文学研究科『年報 2016』の刊行に寄せて	金水 敏	1
大阪大学大学院文学研究科『年報 2016』発刊の趣旨	評価・広報室	2

第1部 大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要

1-1	学部・大学院の教育活動	4
1-2	教育・研究の支援体制	8
	研究推進室	8
	評価・広報室	12
	教育支援室	17
	国際連携室	21
	国際交流センター・留学生相談室	24
1-3	国際交流活動	26
1-4	外部資金の導入	30
1-5	エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）	33
1-6	劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業 ー＜声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声＞芸術祭	34
1-7	国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター	37
	グローバル日本研究クラスター	37
	グローバルヒストリー研究	38
	日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター	40
	比較デザイン学クラスター	42
	アーツ&リサーチ	42
1-8	教育ゆめ基金調査研究助成制度	45
1-9	懐徳堂研究センターの活動	46
1-10	埋蔵文化財調査室の活動	48
1-11	ハラスメント問題委員会の活動	51

第2部 各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要

2-1	哲学哲学史	55
2-2	現代思想文化学	69
2-3	臨床哲学	85
2-4	中国哲学	99
2-5	インド学・仏教学	108
2-6	日本学	116

2-7	日本史学	132
2-8	東洋史学	158
2-9	西洋史学	178
2-10	考古学	198
2-11	人文地理学	213
2-12	日本文学	223
2-13	比較文学	244
2-14	中国文学	258
2-15	国語学	266
2-16	英米文学	277
2-17	ドイツ文学	290
2-18	フランス文学	299
2-19	英語学	311
2-20	日本語学	322
2-21	美学・文芸学	340
2-22	音楽学・演劇学	357
2-23	美術史学	385
2-24	共生文明論	409
2-25	アート・メディア論	420
2-26	文学環境論	431
2-27	言語生態論	438
2-28	留学生専門教育	447
編集後記		450

大阪大学大学院文学研究科 『年報2016』の刊行に寄せて

大阪大学文学研究科の教育研究活動の成果をまとめ、自己評価に役立てるための『年報』を隔年ごとに刊行しています。第7冊目からは、紙媒体からウェブ上での公開に切替え、今年度はウェブ公開の2冊目となります。

今回対象となる2014～2015年度は、第2期中期目標期間の最後の2カ年となり、第2期を総括し、第3期への課題を定める重要な期間と言えます。スーパーグローバル大学の採択を承け、教員の採用制度、入試制度などの見直しがますます活発化しました。前回刊行された『年報2014』で、和田章男・前研究科長は、「本研究科のこの期間の教育研究活動を振り返るなら、「国際化」と「連携」がキーワードとして浮かび上がります。」と書きましたが、この2年間で、その傾向はますます強められたと言えるでしょう。

前期に引き続き、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）の欧州域外協定校（2011年よりフル・パートナー）としての活動、また日独6大学学長会議（ヘキサゴン・プログラム）を起点とするISAPプログラムの協力大学としての活動が活発に行われており、今期、新たに海外3校との部局間交流協定を結びましたが、国際シンポジウムを2件も実現させたことは今期の国際交流の大きな成果と言えるでしょう。1つは、2015年12月、ハイデルベルク大学で実施したハイデルベルク大学・大阪大学ジョイント・シンポジウム「人文学における日本研究—江戸庶民文化の諸相—」であり、もう1つは海外5大学との協力のもと、2016年3月に本学で実施したグローバル日本研究国際シンポジウム「開く日本・閉じる日本—「人間移動学」事始め—」です。

これらの国際交流活動の母体となっているのが、前期に創設された「国際的社会連携型人文学研究教育クラスター」（通称「人文学クラスター」）です。これは学内の競争的資金「部局長裁量未来戦略経費」を基盤として、国内外の大学・研究機関等とのより積極的な共同研究の推進を目的として、5件の共同研究を採択したものです。このうちの「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター」が元となって、スマホ・タブレットのアプリ「くずし字学習支援アプリ KuLA」が生まれました。公開1週間で4,500回以上ダウンロードされ、Android新着アプリランキング（教育・無料カテゴリ）で1位にランクインするなど、大好評を博しました。人文学の成果を社会に届ける、新しいあり方が示されたと言ってよいでしょう。

今期の事業として特筆すべき事柄として、2015年度に外部評価を実施したことが挙げられます。従来の外部評価は他大学の教員や学識経験者など、ピアレビュー的な観点から評価委員をお願いしていましたが、今回は、文学部・文学研究科の卒・修了生を受け入れてくださっている阪企業として「読売新聞」「阪急電鉄」「朝日放送」の3社の人事担当者にお越しいただき、それぞれの企業における卒・修了生の評価をいただきました。その中で、社会的コミュニケーション力にやや不足を感じるという評言もありながら、「物事を一歩俯瞰したところから考察することが出来る」「物事の本質を見抜こうとする意識が高く、また「論理力」に秀でている」など、高い評価もいただいております。教員一同、我が意を得たりという思いを強くいたしました。

地域との連携にも引き続き力を入れています。懷徳堂記念会、21世紀懷徳堂、同窓会などと連携して、多くの市民向け講座を開講し、「開かれた大学」としての役割を果たしています。なかでも特徴的な試みとして、文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」の補助金を受けて、「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」を実施し、地域の芸術関係の機関等と連携して実践的な社会人教育を展開しました。また、考古学講座が所蔵する野中古墳出土品である鉄製甲冑11セット等が2015年に重要文化財の指定を受けましたが、それを記念して大阪大学総合学術博物館において「ミニ展示「野中古墳出土品」」を実施しました。これ以外にも、総合学術博物館主催、文学研究科共催で、2015年に「企画展 金銅仏きらきらし」を実施しております。

本研究科が擁する多彩な専門分野は、人文学の教育研究の重要な拠点を形成していることは確かですが、点を線に、線を面にすることによって、地域へそして世界へ、さらに開かれた知のネットワークを構築することをめざしています。

2016年9月

文学研究科長・文学部長 金水 敏

大阪大学大学院文学研究科 『年報2016』 発刊の趣旨

大阪大学大学院文学研究科 評価・広報室

本書『年報2016』は、2014年度・2015年度の2年間における大阪大学大学院文学研究科および文学部の教育・研究活動について客観的にデータを集積し、その点検・評価、また今後の改革に当たっての基礎資料とすべくまとめられたものである。『年報』としては8冊目、継続的なデータ蓄積の期間としては18～19年目に当たる。

本書の構成は、これまで通り二部構成である。第1部「大阪大学大学院文学研究科および文学部における教育・研究活動の概要」は、文学研究科・文学部の教育および研究活動の全般に関わる事項を報告する。

第2部「専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」は、各専門分野・コースの教育・研究活動について、その特色、所定の項目ごとのデータ、および各専門分野・コースによる自己評価を提示する。

こうした資料の性質上、データを比較する上での質的連続性が重要であるので、上記の構成はもとより、データ収集の範囲や方法等に関しても、基本的には前号以前のものを踏襲している。

前回から行われることになった変更点は、冊子体による発行を取りやめ、電子ファイルでの公開のみとしたことである。それまでも『年報』は、その全号についてpdfファイル化したものを文学研究科ウェブサイト(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>)を通して公開していたが、冊子体に対する補助的役割のものと位置づけていた。しかし、文書の電子化は加速度的に進んでいる。殊に『年報』のようなデータ集では、閲覧や過去のデータとの比較対照などの面で、電子データ化の利点が大きいの。一方で、冊子体の発行は、印刷・製本、送付などに多額の費用を要し、送付先にも保管の負担をかけるものである。周知の通り、国立大学法人には経済的な合理化が年々強く求められている。そうした現状を踏まえ、より利便性が低いと考えられる冊子体の発行を取りやめることとしたものである。

もう一つ前回から行われている変更点は、人材養成に関わるデータの収集方法についての変更である。これまで、第2部「各専門分野・コースにおける教育・研究活動の概要」では、「Ⅰ. 現在の組織 3. 修了生・卒業生」の表中「出身の研究者」において、当該年度中に学位を取得、ないし修了・卒業もしくは中途退学するなどし、かつ同年度中に常勤研究職への就職が決定した各専門分野・コース所属の正規学生の人数のみを示していた。また、「Ⅴ. 基本情報 6. 専門分野出身の研究者」においては、上記に該当する者について、具体的にその氏名、終了課程、所属機関名、職名、就職年月を示していた。しかし、近年の一般的なあり方からすると、学位を取得するなどした同年度に即、常勤研究職を得ることは極めて稀であることから、過年度の学位取得者・修了者・卒業生などについても、当該年度に初めて常勤研究職を得た場合には、基本的にその情報を収集することになっている。また、研究大学に対しては、以前に比してますます人材の流動性が求められている。本研究科でも、他大学で学位を取得したPD（ポストドクトラルフェロー）の受け入れや、本研究科で学位を取得した者の他大学でのPD採用がより増加しつつある。そうした人材の常勤研究職への就職もまた、本研究科における研究者人材養成の成果の重要な一端であることから、本号も、その情報も併せて収集している。

昨年は、国立大学法人の第2期中期計画が終了し、本年から第3期中期目標期間が始まった。文学研究科にとっても極めて重要な節目を控えている今、本書を通して本研究科の教育・研究活動全般について広く知っていただき、忌憚のないご意見を頂戴して今後の糧とできれば、無上の幸いである。

文学研究科 評価・広報室長
服部 典之

第 1 部

大阪大学大学院文学研究科および文学部 における教育・研究活動の概要

* コメントは、原則として 2014 年度および 2015 年度のデータに関するものであるが、『年報 2014』に掲載されたそれ以前のデータも、参考のため提示しておいた。なお数値は原則として各年度 5 月 1 日のものである。

教育活動の基礎的データ

1. 大学院の教育活動

1-1. 大学院博士前期・修士課程入学者

博士前期課程（定員 75 名）・修士課程（定員 19 名）の入学者数は、2009 年度・2010 年度には博士前期、修士課程ともに定員割れとなった。特に、2010 年度は前期 58 名、修士 16 名にまで落ち込んだ。その後増加に転じ、2013 年度には両課程ともに定員を満したものの、2014 年度には再び定員割れとなった。2015 年度は、前期課程は定員を満したが、修士課程は 2014 年度に続き、大きく定員を割った。少子化と構造的な不況、そして大学教員ポストの減少を背景とする将来の就職先に対する不安などがこのような状況をもたらしているが、今後いかに阪大大学院の魅力をアピールし、院生の確保に努めるかが課題である。また、一年に 2 回、入試の機会を設けてはいるものの、秋入試合格者の他大学大学院（東大・京大のほか有力私大など）への進学が相変わらず続いている。これに対する対策も必要である。

表 1-1-1 大学院(博士前期・修士課程)入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2006	61	3	9	73
2007	74	4	11	89
2008	70・18	4・3	10・0	84・21
2009	58・15	3・1	8・2	69・18
2010	48・12	4・2	6・2	58・16
2011	57・20	4・0	7・4	68・24
2012	50・13	5・2	11・3	66・18
2013	59・14	6・3	13・3	78・20
2014	47・8	3・3	12・1	62・12
2015	58・9	5・1	14・1	77・11

1-2. 大学院博士前期・修士課程学生

学生総数は、文化動態論専攻設置 2 年目の 2009 年度以降、200 名を切ることはなかったが、2015 年度は 198 名となった。休学者数と留年者数の合計の学生総数に対する割合は、2014 年度には博士前期課程 31%、修士課程 48%、2015 年度には同じく 24%、53%となっており、高い数値を示している。とりわけ修士課程の割合が高い。今後、改善の努力が必要である。

表 1-1-2 大学院(博士前期・修士課程)の学生数、休学者数、留年者数、修了者数

年度	学生数	休学者数	留年者数	修了者数
2006	187	15	30	78
2007	193	21	31	59
2008	208・21	22・0	40・―	83・―
2009	188・39	18・0	40・10	77・11

2010	158・43	16・8	32・10	68・17
2011	158・49	17・8	32・9	60・10
2012	161・55	13・6	27・14	60・22
2013	173・50	21・8	29・12	68・19
2014	164・42	23・7	28・13	72・17
2015	164・34	13・8	26・10	61・13

1-3. 大学院博士後期課程入学者

2012 年度・2013 年度の入学者はそれぞれ 35 名・32 名で、定員（41 名）を大きく割り込んだが、2014 年度・2015 年度はほぼ定員と同数となった。社会人の入学状況については、ここ 10 年ほどは 3 名前後で安定している。外国人入学者数は、2014 年度・2015 年度は 2012 年度・2013 年度に比べ、ほぼ倍増した。大学教員ポストが減少している昨今、博士後期課程を取り巻く状況は厳しく、絶えず定員割れの危険性がつきまとっている。本研究科だけの努力では如何ともしがたい部分があるが、これまで以上の努力が必要である。

表 1-1-3 大学院(後期課程)の入学者数

年度	一般	社会人	外国人	計
2006	44	3	9	56
2007	26	3	17	46
2008	30	4	13	47
2009	31	3	6	40
2010	36	4	8	48
2011	29	2	8	39
2012	27	4	4	35
2013	24	3	5	32
2014	31	1	10	42
2015	28	4	9	41

1-4. 大学院博士後期課程学生

休学者数、退学者数については大きな変化は認められない。休学者数は、学生数に対して 2014 年度 33%、2015 年度 29%と高い水準で推移している。退学者数は、学生数に対して 2014 年度 14%、2015 年度 13%となっている。

学位論文提出者は、2010 年度は前年に比べて半減、2011 年度には大幅に増加したが、翌年度は再び 2010 年と同水準となった。その後は順調に増加しつつある。学生数に対する学位論文提出者数の比率はかなり低いというべきであるが、この点は、人文科学という研究分野の性格を考慮しながら、学生自身の研究能力の向上や教員の指導、研究環境の整備などの要因を探るとともに、課程修了後の身分・行き先の確保という深刻な問題をどのようにするのか、継続的に検討する必要がある。

表 1-1-4 大学院(後期課程)の学生数、休学者数、学位論文提出者数、退学者数

年度	学生数	休学者数	学位論文提出者数*	退学者数
2006	304	81	24	50
2007	290	93	41	46
2008	276	80	48(25)	46
2009	248	68	45(18)	23
2010	245	68	23(12)	40

2011	232	71	33(19)	37
2012	215	69	22(9)	31
2013	195	54	24(18)	26
2014	202	66	27(14)	29
2015	198	57	29(17)	25

(注)退学者には単位修得退学者をふくむ。*()内は単位修得退学者の論文提出数で内数。

1-5. 大学院研究生

研究生数は2007年度まで20名以上であったが、2008年度以降、10名台、年によっては10名を割るまでになった。この減少傾向は、前期・修士課程の学生数の推移におおむね対応している。かつては研究生のうちの大半が日本人であったが(2004年度では日本人20名、留学生2名、2005年度では同じく21名、2名)、2006年度より留学生の比率が急上昇し、研究生総数の半数以上、年によっては日本人研究生を上回るようになった。これは、前期・修士課程における留学生の増加傾向をはるかに上回るものである。研究生は院生予備軍としての性格が強いが、留学生の比率が高まったことも考え合わせ、今後、文学研究科として研究生をどのように教育していくべきか検討する必要がある。

表 1-1-5 大学院研究生数

年度	日本人	留学生	計
2006	14	7	21
2007	13	8	21
2008	8	9	17
2009	8	6	14
2010	6	5	11
2011	8	4	12
2012	5	8	13
2013	4	4	8
2014	8	5	13
2015	3	8	11

2. 学部の教育活動

2-1. 学部入学者

一般入試による入学者の数は、2013年度までは例年定員(前期日程125名、後期日程40名、計165名)を5～10名程度上回る数で推移していたが、2014年度・2015年度は170名を切った。一方、外国人入学者は、2004・2005の両年度は0名であったが、2006年度以降は毎年入学者があり、2014年度の7名にみられるように、近年はその数を増しつつある。なお、志願者数はここ数年減少し、2015年度は最低を記録した。

表 1-2-1 学部入学者数

年度	一般	外国人	計
2006	177	2	179
2007	173	1	174
2008	170	2	172
2009	171	3	174
2010	175	2	177
2011	171	1	172

2012	171	2	173
2013	172	4	176
2014	165	7	172
2015	169	4	173

2-2. 学部学生

学生数・卒業生数は2012年度・2013年度に比べやや減少した。留年者数は減少しつつあるものの、休学者数については2014年度・2015年度はともに36名で、ここ10年間では最多となっている。

表 1-2-2 学部の学生数、休学者数、留年者数、卒業生数

年度	学生数	休学者数	留年者数	卒業生数
2006	785	28	74	163
2007	793	31	84	188
2008	770	16	80	165
2009	779	34	84	166
2010	786	28	79	174
2011	777	30	73	165
2012	780	25	82	170
2013	776	34	79	193
2014	756	36	63	166
2015	768	36	70	165

2-3. 学部研究生

研究生の総数は、2005年度より減少傾向が見られるようになり、2009年度には10名にまで落ち込んだが、その後回復し、2011年度からは20名台で推移している。2015年度には、2005年度と同じ数（26名）になった。留学生は、2011年度に20名に激増したあと、2012年度を除き、その水準をほぼ維持している。日本人と留学生の比率については2011年度以降、留学生数は日本人の2.5倍以上となっており、留学生の割合が非常に高い。今後も、中国をはじめアジアから多様な宗教・文化を背景にもつ留学生が増えることが予想でき、彼らのための環境作りが重要課題となっている。

表 1-2-3 学部研究生数

年度	日本人	留学生	計
2006	10	10	20
2007	9	10	19
2008	7	13	20
2009	2	8	10
2010	9	10	19
2011	8	20	28
2012	6	15	21
2013	5	18	23
2014	5	18	23
2015	5	21	26

(村田 路人、データ提供：教務係)

研究推進室

組織・体制

研究推進室は、文学研究科の学生・教員の研究活動を推進するために、さまざまな形で研究環境の整備や研究遂行の支援を行う組織である。室員は文学研究科の教職員からなり、室長、副室長は、総務委員会の議を経て、研究科長が委嘱する。室には部門を置き、室長が委嘱した部門チーフを中心に、それぞれ管掌する業務を実務的に進めた。

2014年度は科研・共同研究部門、図書管理部門、紀要・論叢部門、懷徳堂部門の4部門が室業務を分掌した。全学的に大学院学生を中心とする若手研究者への支援が強化され、文学研究科としてもその必要性がいつそう高まってきたことを受けて、科研・共同研究部門には2名のチーフ（科研・共同研究担当、若手支援担当）を配置して、円滑な対応が可能となるよう配慮した。

2015年度からは、さらにその方向性を強化して、あらたに若手支援を担当する部門を単独で立ち上げることとした。これにともなって内規の改正と部門の再編を行い、従来各部門でそれぞれ対応していた若手研究者支援関係の業務を新設の若手支援部門に集約するとともに、図書管理部門、紀要・論叢部門の業務を統合継承する形で図書部門を設けた。この結果、2015年度の室業務は、科研・共同研究部門、若手支援部門、図書部門、懷徳堂部門の4部門が担う体制となった。

室の活動は、構成員全員が参加する室会議（原則として教授会開催日の午後）において、必要事項を協議するとともに、各部門が担当する業務について状況を報告し、室員間の情報共有をはかりながら行った。室会議前には正副室長、教務職員からなる実務会議を開催して、室会議の議題整理と室業務執行状況の確認を行った。また、年度計画や達成度評価など重要案件の検討に際しては、室会議に先立ってチーフ会議を招集し、協議の機会を持った。このほか、大阪大学教員出版支援制度の推薦論文選考など特命的な事項については、その都度委員会やワーキンググループを設置して対応した。

活動状況

近年、若手研究者支援や研究公正化にかかわる業務が急増しており、本室としてもさまざまな新規案件への迅速な対応を迫られている。2014～2015年度に各部門が担当した主要な業務及び活動状況は以下の通りである。上述のように、この間に部門の再編を行ったため、活動状況はそれぞれの年度に分けて記すこととする。

＜2014年度＞

1. 科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科共同研究の募集・選定をおこない、2件を採択し、補助を行った。
- 2) 「公開研究会等への補助」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科教員が中心となって開催する各種の公開研究会等の経費補助として、10件を選定し、補助を行った。
- 3) 若手研究者のための研究支援に関すること
 - ・若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、選定した10件に対して、「外国語論文発表補助」（外国語による論文や口頭発表原稿のネイティブチェック費用の補助）を行った。
 - ・大学院学生を対象として研究科で創設した「教育ゆめ基金調査研究補助」の実施要領の策定及び助成者の選考、全学の若手研究者支援事業（「博士課程学生海外派遣支援事業（学長リーダーシップ枠）」「大阪大学未来基金若手研究者支援事業」）の推薦候補者の選考を行った。
 - ・若手研究者の科研費応募の機会を確保するため、「若手研究者等への招へい研究員資格付与の審査」を行った。
 - ・日本学術振興会特別研究員の応募にあたって、「若手研究者向けセミナー」を2回開催するとともに、申請書類のチ

ェック、面接候補者への模擬面接を実施した。2015年度分は申請者64名、採用者20名、採用率は31%であった。

4) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること

- ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。
- ・科研費の応募に関するセミナーを開催するとともに、申請書類のチェックを実施した。

5) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること

- ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。

6) その他

- ・日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、石橋湛山新人賞の候補者の選考・推薦を行った。
- ・研究科内に設置した「人文学クラスター室」の使用規定を策定した。

2. 図書管理部門

1) 文学研究科共同施設「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること

- ・学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。
- ・学生用のノートパソコンを6台増設し、学習環境の充実を図った。

2) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること

- ・附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。

3) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること

- ・貴重資料室運用規程を改正し、同室収蔵資料の返却に関する手続きを整えた。
- ・収蔵資料の閲覧、特別利用などへの対応を含めて、同室の日常的な管理・運営に務めた。

3. 紀要・論叢部門

1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行に関すること

- ・『大阪大学大学院文学研究科紀要』第55巻及び『待兼山論叢』第48号を刊行した。

2) 文学研究科の刊行物に関連する諸問題の処理に関すること

- ・2013年度に策定した「著作権・肖像権等に関するガイドライン」に付随するQ&Aを作成し、公開した。
- ・文学研究科刊行物へのISBNコード付与の手続きを定めるとともに、今後本室教務職員を「ISBN管理者」としてこれに対応することとした。今年度のISBNコード付与件数は2件。

4. 懐徳堂部門

1) 文学研究科の附属施設である懐徳堂研究センターの業務に関すること

- ・『懐徳堂研究』第6号を刊行し、研究成果と活動内容をひろく公表した。
- ・センターHPを随時更新するとともに、懐徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。
- ・学内外からの資料見学、調査依頼等に対応した。

2) 懐徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること

- ・古典講座、春秋講座、秋期講座、見学会等の企画・運営に協力した。
- ・『懐徳』83号、『記念会だより』の編集・刊行に協力した。

5. その他

- ・大阪大学教員出版支援制度（大阪大学出版会）推薦論文選考委員会を組織して選考にあたった。

・『文学研究科紀要』『待兼山論叢』を中心に、文学研究科刊行物の大阪大学機関リポジトリ（OUKA）での公表を進めた。

- ・教育支援室と協力して、名誉教授・現任教員の教育研究交流を目的とする「教育研究フォーラム」を企画した。

<2015 年度>

1. 科研・共同研究部門

- 1) 「文学研究科共同研究」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科共同研究の募集・選定をおこない、3件を採択し、補助を行った。
- 2) 「公開研究会等への補助」の募集・選定、運営に関すること
 - ・文学研究科教員が中心となって開催する各種の公開研究会等の経費補助として、6件を選定し、補助を行った。
- 3) 科研費その他の研究助成金等に関する公募情報の収集・提供および応募の支援に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供するとともに、各種研究助成プログラムが一覧で
きるリストを作成して本室のHPに掲載した。
 - ・科研費の応募に関するセミナーを開催するとともに、申請書類のチェックを実施し、採択率の向上を図った。2015
年度、2016年度の採択状況は次表の通りである。

年度	新規課題			新規課題＋継続課題	
	申請件数	採択件数	採択率(%)	交付件数	交付総額(円)
2015	49	22	45	80	205,150,000
2016	55	26	47	79	177,130,000

- 4) 教員・研究員の公募情報の収集・提供に関すること
 - ・情報収集を定期的に行い、教員メーリングリスト等を通じて提供した。

2. 若手支援部門

- 1) 独立行政法人日本学術振興会特別研究員の申請書作成等の補助に関すること
 - ・日本学術振興会特別研究員の応募にあたって、「若手研究者向けセミナー」を2回開催するとともに、申請書類のチ
ェック、面接候補者への模擬面接を実施した。2016年度分は申請者62名、採用者16名、採用率は26%であった。
- 2) 若手研究者等の招へい研究員資格審査に関すること
 - ・若手研究者の科研費応募の機会を確保するため、「若手研究者等への招へい研究員資格付与の審査」を行った。
- 3) 大学院学生の調査研究、成果発表等の支援に関すること
 - ・若手研究者による研究成果の世界的な発信を奨励・支援するために、選定した14件に対して、「外国語論文発表補
助」(外国語による論文や口頭発表原稿のネイティブチ
ェック費用の補助)を行った。
 - ・大学院学生を対象として研究科で創設した「教育ゆめ
基金調査研究補助」の助成者の選考、全学の若手研究者
支援事業(「博士課程学生海外派遣支援事業(学長リー
ダーシップ枠)」「大阪大学未来基金若手研究者支援事
業」)の推薦候補者の選考を行った。
- 4) その他
 - ・日本学術振興会賞、日本学術振興会育志賞、石橋湛山
新人賞の候補者の選考・推薦を行った。2015年度は本研
究科から推薦した候補者が「第6回日本学術振興会育志
賞」を受賞した。



若手研究者向けセミナー

3. 図書部門

- 1) 『大阪大学大学院文学研究科紀要』『待兼山論叢』の編集・発行に関すること
 - ・『大阪大学大学院文学研究科紀要』第56巻及び『待兼山論叢』第49号を刊行した。
- 2) 文学研究科の刊行物に関連する諸問題の処理に関すること
 - ・文学研究科の刊行物1件について、ISBNコード付与の手続きを行った。

- 3) 文学研究科共同施設「学生自習室」の管理・運営および同室設置図書・機器の充実に関すること
 - ・学生自習室の効果的な運営につとめ、夜間および土曜日開室も実施した。
- 4) 文学研究科の図書利用についての附属図書館との連絡・調整に関すること
 - ・附属図書館から依頼のあった各種調書の各専門分野・コース等への連絡・調整を行うとともに、研究科内図書業務を遂行し、雑誌・図書の利用を支援した。
- 5) 文学研究科「貴重資料室」の管理・運営に関すること
 - ・2014年度に改正した貴重資料室運用規定に対応させた「貴重資料室閲覧規則」の改正を行った。
 - ・収蔵資料の閲覧、特別利用などへの対応を含めて、同室の日常的な管理・運営に務めた。

4. 懷徳堂部門

- 1) 文学研究科の附属施設である懷徳堂研究センターの業務に関すること
 - ・『懷徳堂研究』第7号を刊行し、研究成果と活動内容をひろく公表した。
 - ・懷徳堂印章を適切に保管するための印章ケースの設計及び作成を行った。
 - ・梅花学園所蔵の中井終子関連資料のデジタルアーカイブ化を実施し、梅花女子大学・凸版印刷㈱との共同主催で関係のシンポジウムを開催した。
 - ・センターHPを随時更新するとともに、懷徳堂資料のデジタルコンテンツの作成を進めた。
 - ・学内外からの資料見学、写真撮影依頼、調査依頼等に対応した。
 - ・懷徳堂文庫資料の文化財指定の方向性を探るため、大阪府教育委員会と協議を行った。
- 2) 懷徳堂記念会業務の内、主として文学研究科に関わる業務に関すること
 - ・古典講座、春期講座、秋期講座、見学会等の企画・運営に協力した。
 - ・『懷徳』84号、『記念会だより』の編集・刊行に協力した。

5. その他

- ・平成27年度から義務化された「研究倫理教育」の実施にあたって、研究科内に設置されたワーキンググループに本室から室長、科研・共同研究部門チーフ、教務職員の3名が参加し、実施方法等について検討した。今年度はCITI Japanプロジェクトのe-learningの受講により研究倫理教育を行うこととなり、その実務的な作業を分担した。
- ・副室長を座長とするワーキンググループを設けて、本研究科の「研究データの保存等に関するガイドライン」を策定するとともに、各専門分野等の「研究データ保存に関する申し合せ」をとりまとめて、研究データ保存に関する研究科内の対応を整えた。
- ・大阪大学教員出版支援制度（大阪大学出版会）推薦論文選考委員会を組織して選考にあたった。
- ・今年度あらたに募集のあった「人文・社会科学系研究成果の国際的発信支援プログラム」にかかる部局推薦図書について、委員会を組織して選考にあたった。
- ・『文学研究科紀要』『待兼山論叢』を中心に、文学研究科刊行物の大阪大学機関リポジトリ（OUKA）での公表を進めた。
- ・教育支援室と協力して、名誉教授・現役教員の教育研究交流を目的とする「教育研究フォーラム」を企画した。

（福永 伸哉）

評価・広報室

組織・体制

評価・広報室は、文学研究科・文学部の自己評価・外部評価と広報活動を担っており、4 部門（研究評価、教育評価、広報、ネットワークの諸部門）から構成されている。研究評価部門は、教員・大学院生の研究業績をはじめとする各種データの収集や『年報』の刊行など、教育評価部門は、教育関係のアンケートやファカルティ・ディベロップメント（FD）の実施など、広報部門はオープンキャンパスの開催、高校生の大学見学や出張講義への対応、『文学研究科リーフレット』『文学部紹介』の刊行、文学研究科・文学部ホームページの運営など、また、ネットワーク部門は、部内サーバやネットワークの整備・運営などを担当している。

室長は副室長とともに、室全体の活動を統轄するとともに、全学基礎データの収集、外部評価、メディアラボの運営などの他、いずれの部門にも属さない仕事を担当している。各部門には、それぞれ部門チーフが置かれ、部門の活動を統轄している。また、事務補佐員 2 名が配置され、室の事務全般を担当している。

（荒川 正晴）

活動状況

1. 評価・広報室全般

1-1. 現況調査表

大阪大学に対する法人評価のための基礎資料となる部局単位の現況調査表を、本研究科評議員および評価・広報室員と教育支援室の副室長により現況調査表作成委員会を組織し、下記の項目ごとに執筆担当者を決めて草稿を作成した。作業にあたっては、とくに第 2 期中期目標・中期計画期間における国際化に向けての新規事業（後述の人文学クラスター研究ほか）の内容とその意義を、関連するデータをできる限り収集しながらアピールした。草稿の集約と調整、データの整理にあたっては、評価・広報室長が中心になって進め、総長室企画部との意見のやり取りを通じて、5 稿を重ねて現況調査表を完成させた。

1) 教育

学部・大学院（a. 教育目的と特徴の記載、b. 分析項目Ⅰ／教育実施体制、教育内容・方法、分析項目Ⅱ／学業の成果、進路・就職の状況、c. 「質の向上度」の分析）

2) 研究

学部・大学院（a. 研究目的と特徴の記載、b. 分析項目Ⅰ／研究活動の状況、分析項目Ⅱ／研究成果の状況、c. 「質の向上度」の分析）

1-2. データ収集（年度計画・達成状況と全学基礎データ）

全学規模の取り組みである「全学基礎データ」と「教員基礎データ」の収集については、評価・広報室長の下、事務補佐員が担当し、その収集、データの整理などを行った。なお 2011 年に運用を終了した ReaD を継承した「リサーチマップ」に、2014～2015 年度の研究業績データを提供した。

また、全学規模の取り組みである「部局別年度計画達成状況」に関するデータを教員と研究室から収集・整理し、報告した。内容からみて他の室の管掌である項目も含まれるが、データを提供する側と収集する側の双方の効率を鑑み、評価・広報室でまとめて収集整理した後、当該部署へデータを提供した。

このほか、文学研究科独自のものとして、2014 年度および 2015 年度においても引き続き、専門分野・コース別年度目標・達成状況シートを配布し、自己評価およびデータ収集を行った。

（荒川 正晴）

2. 研究評価部門

2-1. 年報

2014 年度に、過去 2 年間（2012～2013 年度）における教育・研究活動の情報を収集・整理した『大阪大学大学院文学研究科年報 2014』（A4 判頁。以下、『年報 2014』と略称）を刊行し、各教員および各専門分野、各室、事務部と、後述の PDF ファイルを通じて（教員および事務部の責任者には、特別に冊子体にして配布）、教育・研究活動に関する情報を共有した。基本的な体裁は過去の年報類に従った。第 1 部には研究科全体としての教育・研究活動に関する記事を、第 2 部には各専門分野・コース単位の活動をまとめた記事を、それぞれ掲載した。各専門分野・コースの記事では、組織・目標・活動の概要のほか、前々号・前号に引き続き、過去 2 年間の「自己点検・自己評価」を掲載することにより、これを作成する作業自体が自己点検の機会となるように考慮した。なお第 1 部では、研究・教育の国際化および連携強化のために「国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター」を新たに創設し、5 件の共同研究が動き始めたことが特筆されている。

また『年報 2014』は、基本的に冊子体による発行をとりやめ、電子ファイルでの公開となり、文学部・文学研究科の公式サイトにおいて PDF ファイルとして公開中である。なお、2015 年度末には『外部評価報告書 2015』を刊行し、これも公式サイトにおいて公開している。



文学部・文学研究科公式 WEB サイトにて公開中

2-2. 専門分野・コース別年度目標

前記の『年報 2014』を 2014 年度に刊行したことを受けて、各専門分野においてその後の改善状況の検証を行った。具体的には次期に刊行予定の『年報 2016』に関して、早くも 2014～2015 年度の評価用データを収集し、その収集を通じて、さらなる自己点検・評価を行うとともに、改善状況も検討した。また、専門分野・コースごとに、それぞれ年度当初に設定した年度目標に基づき、自己評価を実施した。具体的には、前記の『年報 2016』に関するデータ収集プロセスの中で、各部署・専門分野における教育・研究・社会連携などの項目にわたる目標を示したうえで、それに関する活動の概要を報告し、あわせてさらなる自己評価・自己点検を実施した。このようにして、点検・評価・改善が連続して実行されていく動きが本格化し、実質性を持った自己点検・自己評価が実現することとなった。

2-3. 外部評価報告書

2015 年度に、本研究科が掲げる教育目標「人文学の幅広い教養を身につけたグローバルな人材の育成」に適った人材を実社会に送り出しているか、その教育効果を検証することを目的として、在阪企業 3 社（阪急電鉄・読売新聞大阪本社・朝日放送）に依頼して外部評価を行った。その結果、各社の担当委員から本学部卒業生の特長として、論理的思考能力の高さとそれに基づく仕事の緻密さが挙げられ、人文学的素養が企業人として活かされているとの評価を得、座談会形式で行った会議記録とともに、それらを報告書としてまとめた（『外部評価報告書 2015』）。

（荒川 正晴）

3. 教育評価部門

2014～2015 年度に、評価・広報室ないしその教育評価部門が関わって行った KOAN 授業アンケートおよび卒業時・修了時アンケートについて報告する。

3-1. KOAN 授業アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014 年度より、学部生を対象とした授業アンケートを新たに実施することにした。アンケートは 7 項目からなり、語学科目などを除く登録学生 10 名以上の講義・演習科目を対象におこなった。2014 年度は、2015 年 1 月 13 日から 30 日に実施し、371 名から回答を得た（回答率 9.8%）。2015 年度は 2016 年 1 月 12 日から 29 日に実施し、272 名から回答を得た（回答率 6.8%）。いずれのアンケートについても、教授会懇談会において報告と討論を行った。初年度の回答率は、KOAN 上での授業アンケートとしては他学部の例に比べて高い数値であったが、2015 年

度の回答率は若干低下した。この点の改善は今後の課題となった。

3-2. 卒業時・修了時アンケート

評価・広報室の教育評価部門では、2014 年度より、卒業・修了生を対象として学習・研究環境全般に関するアンケートを新たに実施することにした。部門では自由記述を含む 8 項目の質問からなる用紙を作成し、2014 年度・2015 年度それぞれ卒修論の提出期間、論文提出場所に回収箱を設置するかたちでアンケートを実施した。2014 年度は、卒業時アンケート 153 枚 (91.6%)、修了時アンケート 79 枚 (87.8%) を回収した。2015 年度は、卒業時アンケート 168 枚 (98.2%)、修了時アンケートは 72 枚 (96%) を回収した。

アンケートの結果については教授会懇談会において報告し、討論をおこなった。卒業生・修了生に対しては研究科ホームページにおいて集計結果を報告するとともに、学部・研究科への要望に回答した。

(岡田 裕成)

4. 広報部門

少子化、大学の差別化、情報流通の拡大の進む現在、大学からの情報発信は重要な課題である。広報部門では、冊子メディア、電子メディア、文学部オープンキャンパス・文学部見学会などを通じて、受験生や社会に向けた情報発信に取り組んでいる。

4-1. 冊子メディア

大阪大学文学部を目指す、ないし、その可能性のある高校生、受験生を対象とした冊子『大阪大学文学部紹介』を毎年発行している。カラー刷り約 80 ページ、発行部数は 5,000 部程度である。全国各地の高校に送付するとともに、オープンキャンパス・文学部見学会などで配布している。

『大阪大学文学部紹介』は、大阪大学文学部の概要および各専修の教育・研究内容の紹介を中核とし、卒業後の進路に関する情報、在学生や卒業生の声、文学部全教員のメッセージなどを加え、必要な情報を伝えるとともに文学部を身近に感じてもらえる内容にしている。

文学研究科を目指す大学生、社会人に対する広報を目的とした印刷物としては、『文学研究科リーフレット』を発行し、大学院進学説明会その他で配布している。

また、外国での広報や外国からの訪問者などに対する広報のために、文学研究科、文学部の概要を英文で紹介した『英文リーフレット』を発行した。

なお、冊子ではないが、大学院入試の広報のために、メディアラボのデザインによるポスターの作成もおこなっている。2014 年度・2015 年度においては文学研究科の文化動態論専攻説明会のポスターを作成した。



文学部紹介 2015-2016



文学部紹介 2016-2017



文学研究科リーフレット



英文リーフレット



文化動態論専攻説明会
ポスター

4-2. 電子メディア

文学研究科・文学部の公式ホームページは 2013 年度に刷新されたところであるが、2014～2015 年度には各種情報の恒常的な更新、追加のほか、スマートフォンでのページ表示を改善するとともに、文学研究科の重要なトピックである国際的社会連携型人文学研究教育クラスター、アート・フェスティバル人材育成事業、重要文化財の指定を受けた野中古墳出

土品などを紹介するページを追加した。

4-3. オープンキャンパス・各種見学会

大阪大学の実施するオープンキャンパスの一環として「文学部オープンキャンパス」を毎年夏に開催している。2014年度は8月11日、2015年度は7月31日に開催した。参加者数は各年とも千人程度である。

「文学部オープンキャンパス」では、大阪大学会館での概要説明会、講義室での模擬授業の実施のほか、全専修の研究室を解放し、教員や学生と交流できるようにしている。また、事務職員や学生による進学、留学、学生生活などに関する各種の相談会も開いている。

オープンキャンパス以外の時期においても、随時高校生の団体による見学希望を受け付け、「文学部見学会」を実施している。「文学部見学会」では、文学部の概要説明のほか、模擬授業を提供している。2014年度には、石川県立野々市明倫高等学校、兵庫県立川西北陵高等学校、京都府立綾部高等学校、広島県立廿日市高等学校、島根県立出雲高等学校、大阪府立天王寺高等学校、京都府立網野高等学校、和歌山信愛高等学校、大阪府立大手前高等学校、2015年度には、兵庫県立川西北陵高等学校、須磨学園高等学校、近畿大学附属広島高等学校、島根県立出雲高等学校、清風南海高等学校、大阪府立天王寺高等学校、京都府立網野高等学校、大阪府立高津高等学校、和歌山信愛高等学校、大阪府立大手前高等学校の生徒を対象として見学会を実施した。また、大阪府立北野高等学校、長野県立長野高等学校、千葉県立船橋高等学校を始めとする高等学校11校その他に教員が出向いて講義等を行った。



オープンキャンパス（2015年度）



文学部・文学研究科公式 HP
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/>



文学部見学会（2015年度）

（田野村 忠温）

5. ネットワーク部門

5-1. 文学研究科ウェブサイト スマートフォン対応

2013年度にウェブサイトを根本的に刷新して以降、順調に運用されている。刷新時点以降、急速に普及したスマートフォンでの閲覧に対応すべく、2015年度にはサイトデザイン改変を行い、結果として、スマートフォンに限らず、デバイスを問わずより快適なブラウジングが可能になり、トップページに動画などのコンテンツを挙示できるようにすることで、視聴覚的な訴求力を高めることもできた。今後の課題として、英語版コンテンツの拡充があげられるが、2016年度にはバイリンガル化を目指して、作業を進めている。

（輪島 裕介）

5-2. 文学研究科サーバ管理

Webサーバには、文学研究科・文学部のホームページだけでなく、各講座・研究室・各教員のホームページ、教育支援室、研究推進室、国際連携室のホームページ、国際的社会連携型人文科学研究教育クラスター、アート・フェスティバル人材育成プログラム等のホームページなど、文学研究科・文学部の教育研究活動に関わる多くの情報が収められている。

学内のみならず、社会におけるITへの依存度が増せば増すほど、各種サーバの安定運用ということが求められている。Webサーバやメールサーバが停止することで、日々のさまざまな業務はたちまち大きな影響を受けることになる。加えて、外部からのクラッキング、ウィルスメール、無線LANの傍受など、インターネットに対する脅威は高まる状況のな

かで、セキュリティを保持する作業は、大変責任の重い業務となっている。ネットワーク部門では、Web サーバ、メールサーバ、ネームサーバを、サイバーメディアセンターによるホスティングサービスにて運営していたが、2013 年度にメールサーバを、本学情報推進部のサーバへと移行、2014 年度から Web サーバおよびネームサーバを本学情報推進部の管理下のサーバへと移行することで、これまで以上の安定性を保っており、2015 年度には、全学的におこなわれているセキュリティチェックを受け、一定のセキュリティが維持されていることがわかっている。

5-3. メールアカウント

上に述べたように、文学研究科では `who@let.osaka-u.ac.jp` のアカウントを発行している（サーバ管理自体はサイバーメディアセンターに委託、2013 年度より本学情報推進部に委託したが、メールアカウントの発行削除をはじめとする諸管理は、引き続いてネットワーク部門が行っている）。教員は全員、また文学研究科雇用の職員等もほぼ全員、このアカウントを利用している。なお、大学院生・研究生に対しては、教育システムによるメールが使えることから、研究科でのアカウント発行業務は停止することとなった。その結果、メールサーバのリソースを研究科スタッフに割り当てることで、メールサーバの安定した運営をおこなうことができるようになった。一方、メーリングリスト開設の希望は増加しており、室・委員会等の運営だけでなく、教育と学生の連絡手段、さらには学生主体の研究会運営においても、メーリングリストの利用はもはや不可欠のものとなっており、新サーバではいままで以上に簡便なインターフェイスをつかった管理が可能となっている。

これだけメールの利用が必要不可欠のものとなった以上、安全かつ安定した運用が求められている。ウィルスメール、スパムメール等を排除するようなセキュリティ管理と、サーバダウンの回避というまでもなくメンテナンス等でもメールの送受信に極力影響の出ないような安定した運用の維持を意味する。サーバの維持については、前節に述べたとおりで、情報推進部によるホスティングサービスを利用することによって、より安定した運用がなされることとなった。

ウィルスメール対策についても、ODINS が提供するウィルス監視システムおよび情報推進部のウィルス管理システムと 2 重の監視を介することによって、一定の安全性を維持できている。しかしながらこれも完全ではないため、引き続き、ユーザ端末におけるウィルスチェックなど、今後も油断なく続行していく必要がある。

5-4. ネットワークの維持

ネットワークの不具合や不調はなくなることはない。端末がネットワークに繋がらない、あるいは極端に繋がりにくいなどのトラブルの原因としては、端末の不具合、設定の誤り、通信機器やケーブルの不具合、ウィルスの感染等などがあり、その特定は容易ではない。不具合が発生した際に、ODINS 機器に不具合があれば、ODINS が保守対応をしてくれるものの、基本的にネットワークのトラブルが発生した際には、ネットワーク部門の教員が出向いて、原因の特定および問題解決にあたってきた。専門家ではない教員が、本来の教育・研究のための時間を割いて作業にあたることは、大変非効率的であった。こうした事態を改善するために、業者と契約し、ネットワーク不具合時には、問題の切り分けを依頼することができるようになっている。

耐震改修の完了している本館ならびに芸術研究棟では、ネットワーク配線が計画的に敷設されており、ネットワークトラブルが軽減している。その一方で、依然として旧式の機器が設置されている日本学棟では継続的にトラブルが発生している状況である。

（吉田 耕太郎）

教育支援室

組織・体制

教育支援室は、2014 年度・2015 年度も引き続き、(1)教務・学位関連部門・(2)入試関連部門・(3)学習・生活支援部門・(4)キャリア支援部門・(5)共通教育部門の 5 つの部門（部門チーフおよび室員）に分かれて業務をおこない、室長（1 名）および副室長（2 名）で全体を統轄した。

2015 年度には教育支援室内規を改正し、現行の業務内容に沿った形へと変更を加え、また従来の「就職支援部門」を「キャリア支援部門」へと名称を改めた。

教務・学位関連部門ならびに入試関連部門は、教務係と連絡をとりながら、所轄の学事業務を実施した。学習・生活支援部門、キャリア支援部門は、室窓口に配置された非常勤職員（2 名）とともに各種の学習支援サービス業務をおこなった。共通教育部門は、全学教育推進機構との連絡を担当した。

各部門では、教授会開催日に定例会議を開催するほか、博物館実習委員会、教務係、庶務係、会計係とも連携して、機動的に日常業務を遂行した。また、必要に応じて室長、副室長、各部門チーフで構成するチーフ会議を開催し、室全体の円滑な運営に努めた。

また、室内の学生用スペースでは、これまでと同様に、非常勤職員 2 名が窓口を担当して、常時学生からのリクエストや相談を受ける体制を維持するとともに、午後 5 時以後 7 時までは学生アルバイトを配置して、スペース利用の便を図った。同スペースにはコンピュータ端末 8 台を設置するほか、キャリア形成関連の新聞・書籍・雑誌などを常備し、また求人情報を掲示するなどして、学生のキャリア支援をおこなった。

さらに、非常勤職員により、室ホームページの維持・更新、ミーティングルームの管理、また授業用 AV 機器やノートテイク作業に必要なパソコンの貸し出しなどをおこなった。



教育支援室

活動状況

1. 教育支援室全般

教育支援室の活動はルーティン的な学事業務にかかわるものが中心となるが、2014・2015 年度はこれらに加えて、文部科学省のスーパーグローバル大学創成支援事業に大阪大学が採択されたことにともない、多くの検討事項への対応を求められることになった。同事業において大阪大学では、新学事暦の導入、後期日程入試の廃止と AO 入試の導入、ナンバリングの導入、学位プログラムを中心とした質保証体制の構築、シラバスの充実と英語化、GPA を通じた厳正な成績評価などを目標として掲げている。採択が決定した 2014 年秋以降、これらの目標達成に向けての動きが加速化した。

具体的には、カリキュラムマップの作成、ナンバリングの導入に向けての準備作業、3 学期制ないし 4 学期制への移行および現行 1 コマ 90 分の授業時間を 70 分あるいは 105 分へ変更することの検討、共通教育を含むカリキュラム改革等々であるが、2015 年度には新総長のもとでの見直し作業も始まり、現段階では結論の出ない問題も多い。

教育支援室においては、案件に応じて室長・副室長レベルで対応したものもあるが、教育担当の副研究科長を交えた WG や室長・副室長で素案を作成し、各部門において詳細な検討を加え、チーフ会議を経て総務委員会へ諮るという段取りを経た案件については、各部門の項に整理して掲げることにした。

（加藤 洋介）

2. 教務・学位関連部門

2014 年度・2015 年度において、教務・学位関連部門でおこなった特筆すべき取り組みは、以下の 4 点である。

①アカデミック・ライティング入門の設定

かねてより、学生提出のレポートに剽窃の疑いがあるとの指摘が教員からあった。1 年次生向けの必修科目である文学部共通概説において、室長より注意喚起を行ってきたが、2016 年度から文学部共通概説の 1 コマ分を使用してアカデミック・ライティング入門の時間を設定し、学生を指導する体制を整えた。また教員からの要望もあり、文学部共通概説にも TA を配置することにした。

②文学部教育体制の整備・改善

大学院と同様に、学部においても複数指導教員による指導体制・担任制を導入し、指導教員の変更についても制度を整えた。

③成績不振者への対応

「文学部・文学研究科における単位不足及び成績不振学生への個別指導体制について」とする申し合わせを策定し、対応にあたる体制を整備した。

④学生からの成績に関する申し立て制度の整備

成績確認申立書や成績訂正届の書式を制定し、学生からの申し立てに対応する制度を策定した。

(川合 康)

3. 入試関連部門

入試関連部門は、これまでどおり教務係と緊密に連携して、大学院入試および関連業務の計画、実施、改善などに取り組んだ。また、引き続き学部入試についても本部門で積極的に対応した。

2014 年度・2015 年度における重要な取り組みは、以下のとおりである。

①大学院入試における定員割り振りの見直し

博士前期課程の一般選抜募集人員は、秋期試験 55 人程度、春期試験 20 人程度の計 75 人、修士課程の一般選抜では、秋期試験 15 人程度、春期試験 4 人程度の計 19 人としていたが、現在の実態に合わせて、博士前期課程では秋期試験 45 人程度、春期試験 30 人程度、修士課程では秋期試験 11 人程度、春期試験 8 人程度とする見直しを行った。

②後期日程入試廃止に伴う AO 入試導入に関する制度設計

平成 29 年度入試より導入される AO 入試に関する制度設計を行った。実施日程、第一次選考書類審査の進め方、第二次選考面接の進め方、評価方法や評価項目などについて検討し、一定の成案を得た。

(村田 路人)

4. 学習・生活支援部門

学習・生活支援部門は、奨学金、TA、インターンシップ、学習・生活相談を主な業務とし、随時部門会議を開催するとともに、教務係・庶務係・会計係と連携して業務にあたった。

2014 年度・2015 年度の活動のうち、以下の 3 点を特記しておく。

①ガイダンスの拡充

例年通り大学院・学部の双方において新入生向けのガイダンスを実施し、単位履修方法や学生サポートの体制について説明したのに加えて、他大学出身の院生のみを対象とした「他大学から来た大学院新入生のためのガイダンス」を行い、図書館・生協・サイバーメディアセンター等、広く豊中キャンパス内の諸施設を紹介するとともに、文学研究科内の設備・サポート体制についてより詳細な情報提供を行った。

②新制度のもとでの TA 任用

2012 年度から導入された新たな TA 制度のもと、STA（シニア・ティ

困っていることないですか?

★★★★ YES ★★★★★ NO

大学生活で分からないこと、困っていることがある

小さなことを相談するのは恥ずかしいと思っている

友達、先生には相談しにくい悩みがある

相談にいらっしゃい

学生生活を楽しくしてください

学習・生活相談デスクは
あなたの問題解決をお手伝いします
どんな小さな相談も受け付け、プライバシーを厳密に守ります

パソコンから
文庫館のホームページ
http://www.wu.ac.jp/ta/ からアクセス、相談内容やメール、お申し込みフォームが送られてきます。

来室して
相談内容に記入し、係に連絡すれば
することもできます。

文 学 部 学 習・生活相談デスク

館内案内：文学部本館 1 階教育支援室
開館日時：月～金曜日 10:00～17:00

学習・生活相談ポスター

ーチング・アシスタント)とJTA(ジュニア・ティーチング・アシスタント)の二種に分けてTAの採用を行った。STAには授業の企画・立案にも関わるなど、より高度な補助業務を担当させることにより、キャリア形成教育の一環としての側面を強化した。

STAの採用によって業務内容の多様化と様々なトラブルが予想されたため、TA研修会において、STAを経験した学生・教員による講習の場を設け、新たに導入されたSTAに関してより理解が得られるよう図るとともに、新たにSTAに採用された学生については、全学で開催されるSTAのための講習会に全員出席させた。また、STAとそれを採用した教員を対象とするアンケートを行い、STA業務をより充実させるための一助とした。

さらに2014年度より、新たにTF(ティーチング・フェロー)の導入が検討され、2015年度からは試行的に採用が始まった。

③学習・生活相談等の学生支援

2015年度には「学習相談デスク」を「学習・生活相談デスク」と名称変更し、学生のメンタルヘルスや専修決定、履修方法、進路相談など、学習・生活上の悩みに対応する業務を行った。2014年度は延べ9件、2015年度は延べ5件の相談が寄せられた。

また、2014年度から聴覚障がいや有する学生(大学院・学部各1名、研究生1名)が新たに在籍することとなったため、当該専修・教育支援室・教務係およびキャンパスライフ支援センター障害学生支援ユニットの担当者が会合し、具体的な支援策について意見を交換した。また3名に対する学習補助として、延べ70名による2,132時間分のノートテイクを実施し、また1名に対してはのべ5名による15時間分の視聴覚教材文字起しを実施した。引き続き2015年度も聴覚障がいや有する学生(大学院2名・学部1名)が在籍し、延べ52名による2,067時間分のノートテイクを実施した。また毎年2回開催されるフロントスタッフ・ミーティングにおいて、他部局の学生支援担当者と情報交換し、複数部局の連携による支援のあり方を検討した。

2015年度に、保健センターの協力を得て、学生のメンタルヘルス・ケアをテーマにしたFD研修会「不適応学生への理解と対応」を開催した。

(高橋 照彦)

5. キャリア支援部門

①各種キャリア支援事業の実施

キャリア支援部門は2014年度・2015年度も、「就活サポート講座」(4回連続の就職セミナー)を軸に、各種のキャリア支援事業をおこなった。同講座は、昨今の就職状況全般の概観、就職活動スケジュール、自己分析・企業研究、エントリーシート対策、面接対策、公務員・教職志望者対策、合同企業説明会などである。

今期の特殊事情として、就職活動解禁の時期が繰り下げになったことに対応する必要性が生じたということがある。説明会解禁12月1日、選考開始4月1日だったものが、それぞれ3月1日・8月1日へと繰り下げられた。したがって年4回という回数を維持しつつ、実施時期については変更を加えた。

また2012年度・2013年度に引き続き、社会人学生教育支援基盤経費より資金を得て、正規の講座とは別に、文学研究科所属の現役の社会人学生および社会人学生修了者に、社会人学生としての経験談や就職上の問題点などについてディスカッションを行うなど各種情報交換を促す企画を実施した。なお、面接対策については、これまでと同じく人間科学部学生支援室と連携して、合同模擬面接やグループディスカッションを実施した。

文学部単体主催での合同企業説明会も2014年度は従来どおり行ったが、2015年度については見送った。大学本部および生協主催で実施される同種の企画が多く実施されるようになったという環境の変化に対応したもので、文学部と関係の深いあるいは学生の関心の高い業種については、単独で業界説明会を開催した。

②大学院進学&キャリアガイダンスの実施

引き続き、7月に大学院進学&キャリアガイダンスを実施した。これは、本研究科博士前期課程の修了者を講師に招き、それぞれの体験をふまえてそのキャリア形成の実際を語ってもらうことで、学部学生に大学院進学後の将来設計について検討を促すものである。参加者は40~60名で、大学院進学後のキャリアが多様化している現実を理解させるという点で、

たいへん有意義であった。



大学院 進学&キャリアガイダンスポスター



2012 就活サポート講座
「就活の春をひらく」(4月26日)

(片渕 悦久)

6. 共通教育部門

本部門は、文学研究科の全学教育推進機構兼任教員3名で構成されている。うち2名が実施調整部に、1名（教育支援室副室長）が企画運営部に属し、大学全体の教育の質的向上を図っている。教育支援室における本部門の役割は、文学部に関わる共通教育関係の問題について検討するとともに、教育活動が円滑に行われるように尽力することにある。

現在、文学部は基礎教養教育科目だけでなく、専門基礎教育科目、現代基礎教育科目、基礎セミナーに多くの開講科目を提供しているが、全学に提供する科目の多様性を損なわず、その質を落とすことのないように、非常勤講師ではなく、専任教員が授業を担当するよう求められている。退職した教員の担当していた授業の継続など、難題を調整しつつ維持を図っている。

基礎セミナーは、少人数による対話・報告を重視した参加型の授業である。全学教育推進機構も開講に向けて力を入れている授業形態であるが、本部門からの開講募集も、これ以外の科目募集とは別の機会を行うことによって開講を促進し、文系部局としては比較的多くの基礎セミナーを提供することに成功している。2014年度および2015年度は、文学部からは兼任教員担当も含め、総計16コマの基礎セミナーが提供された。専門教育との連携では、専門基礎教育科目も引き続き、両年度それぞれ30科目ほど各専修から提供されている。

(須藤 訓任)

7. 博物館実習委員会

博物館実習委員会では、毎年、博物館学（館園実習）と博物館学（学内実習）を実施しており、その他にも、学芸員資格取得に必要な科目を開講するために非常勤講師等の任用にかかわる交渉を行っている。館園実習は、2度の事前指導を行った後、2014年度・2015年度ともに大阪歴史博物館、大阪府立弥生文化博物館、大阪府立近つ飛鳥博物館、高島屋史料館などを受入機関として実施した。実習生数は、2014年度が31名、2015年度が35名であった。学内実習は、大阪大学総合学術博物館の協力を得て実施した。実習生数は、2012年度が46名、2013年度が33名であった。

(高橋 照彦)

国際連携室

組織・体制

室長 1 名、副室長 1 名、「連携推進部門」、「留学生受入部門」、「留学助成部門」、「エラスムス・ムンドゥス部門」の 4 部門の室員（各部門にチーフ 1 名を配置）、国際交流センター助教 1 名、同事務職員 1 名、および教務系の留学担当職員 1 名で室を構成し、活動を行っている。室員に関しては、グローバル化への対応に向けて業務が増加しているため、2015 年度に 1 名の増員を要求して認められ、室長、副室長を含め 17 名となった。

「連携推進部門」は部局間協定の締結・更新・終結のほか、外国の大学への教員の派遣、外国人招へい研究員の受入れ等を行い、海外の研究教育機関との交流をはかることを目的としている。ヘキサゴン（日独 6 大学学長会議）に関する連絡窓口および ISAP プログラムによる教員・学生の交換等の業務も行っている。「留学生受入部門」は留学生の受入れと学習・生活支援、タンデム学習プロジェクトの運営等を担当している。「留学助成部門」は、学生の海外派遣に関する業務を行っている。これには、1 年次学生への留学説明会の実施、派遣学生の選考、奨学金受給者の選考などが含まれる。グローニンゲン大学、マヒドン大学への夏期短期英語研修プログラムの運営に関する業務も担当している。文学研究科は、EU の教育プロジェクトである、エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム「ユーロカルチャー」のコンソーシアムに欧州域外フルパートナーとして参加している。「エラスムス・ムンドゥス部門」は、同プログラムに基づく学生・教員の受入れと派遣、英語コースの運営、事務局との折衝などを担当している。

さらに、国際連携室のもとに国際交流センター（室長および副室長がセンター長および副センター長を兼務）を設置し、学生の海外派遣と留学生の受入れに関わる相談業務、および情報提供、海外からの研究者の受け入れ、海外への研究者の派遣に関する相談業務および情報提供、タンデム学習プロジェクトやエラスムス・ムンドゥス・プログラムの運営補助、協定校との連絡・調整など、高度な実務を担当している。

活動状況

1. 国際連携室全般

大学のグローバル化に対応するため、2014 年度・2015 年度にはいくつか新しい試みを行った。まず、文学研究科における日本に関する研究の成果を海外に発信するため、海外の大学と連携して一連のシンポジウムを企画した。そのうち、2015 年 12 月にハイデルベルク大学で、文学、演劇学、歴史学等の研究者が参加する「江戸庶民文化の諸相」というシンポジウムを、2016 年 3 月には大阪大学で海外の協定校等および学内文系部局の協力を得て、人の移動をテーマとして学際的シンポジウム「開く日本・閉じる日本」を開催した。また、2016 年 12 月にフランス国立東洋言語文化研究所で開催予定のシンポジウム「モノと文献からわかる古代・わからない古代」、2017 年 12 月にトリニティ・カレッジ・ダブリンで、日愛国交樹立 60 周年記念プログラムの一つとして開催される予定のシンポジウム「グローバルなコンテキストにおける日本研究」の準備を行った。

さらに、研究交流、学生交換等のパートナーとして部局間協定校を戦略的に増やしていくことを目指し、海外の諸大学との交渉に入った。2015 年度には、このうちパリ・ディドロ大学との部局間協定を締結した。この他に 2016 年 3 月現在、8 大学と協定締結を前提とした協議に入っている。

正規留学生の獲得に関しては、JASSO 等が主催する留学生対象の進学説明会および日本留学フェア等に積極的に教職員を派遣し、文学部・文学研究科に関する広報を行った。また、留学生が文学部・文学研究科への留学体験を語るビデオを製作し、ホームページ上で公開する、DVD を来学者や訪問先大学に配布する等した。文学部・文学研究科を紹介する英文パンフレットを作成した。

この他に広報活動として、Facebook に国際連携室のページを立ち上げ、国際交流に関わるイベントの周知、国際連携室の活動の報告等を随時、行えるようにした。また、引き続き、研究科の国際交流活動全般を幅広く広報することを目的とした『国際交流 Newsletter』を年 1 回刊行するとともに、在学生に留学を促し、情報提供をするために Let's Study Abroad という小冊子を刊行し配布した。

この他、学外からの協定締結等に関する問い合わせ、来客への対応、本部からの来客への対応に関する協力要請に応じるなどした。

学部私費外国人留学生特別入試の志願者増に対応する措置を講じた。また、2015 年度入試より導入された海外在住私費外国人留学生特別入試に関して、先行方法に関する検討、実施体制の確立等の準備を行った。

留学生と日本人学生の交流の機会を作ること、留学生の日本語学習、日本人学生の外国語学習を支援することを目的として、引き続きタンデム学習プロジェクトの運営を行った。また、従来、年 1 回開いていた留学生との親睦パーティーを廃止し、各学期初めに、よりインフォーマルな形式のランチタイム交流会を開くことにした。これにより、新入留学生が早い時期に日本人学生や教職員と改まらない場で交流する機会を設けることができるようになった。

留学生に特化した支援としては、引き続き、論文添削アルバイト制度の運用、外国人留学生の研究発表・論文執筆等の情報発信をサポートする事業を行った。また、文学研究科ホームページのトップに「留学生の方へ」というメニュー項目を追加し、そこから留学生が必要とするであろう各種情報を掲載した、学内・学外のサイトにリンクをはった。これにより、留学生関連の情報検索のナビゲーションが大幅に改善された。さらに、ゆかた教室、着物教室をそれぞれ年 1 回実施し、日本文化に触れる機会も設けた。

さらに日本人学生の海外留学を促すために、JASSO の海外留学支援制度(協定派遣)に、部局間協定校に学生を派遣する「人文学をグローバルに学ぶ」というプログラムを申請し、2014 年度・2015 年度とも認められた。また、引き続き、部局独自の奨学金制度として、「教育ゆめ基金を利用した学部学生のための海外留学支援制度」を運用した。

国際交流関連の業務の増加と多様化に対応するため、内規を改定し留学生相談室を廃止し、業務を国際交流センターに一本化した。さらに、国際交流業務の経験があり高度な外国語運用能力をもったスタッフを確保するために国際交流センター付き助教の国際公募を行った。また、外国人招へい教員および研究員の教育・研究環境の整備のため、招へい研究員室に Wi-Fi ルータを新たに設置するなどの措置を講じた。

2. 連携推進部門

1. 2014 年度にロンドン大学ゴールドスミス校と（イギリス）、2015 年度にパリ・ディドロ大学（フランス）との部局間協定を締結した。この他、国立台湾師範大学の改組による同大学国僑院との部局間協定の新部局（国際与社会科学学院）への継承の手続き、ヤギェロン大学、ハイデルベルク大学（大学間協定と部局間協定の両方）、フランス極東学院との協定の更新の手続きを行った。

2. 外国人招へい研究員として、2014 年度 18 名、2015 年度 17 名の外国人研究者を海外から受け入れた。

3. ハイデルベルク大学日本学研究所が DAAD の資金によって実施している ISAP プログラムに協力して、2014 年度は教員 2 名を派遣し、2 名を受け入れ、2015 年度は教員 2 名を派遣し、1 名を受け入れた。派遣教員の確保と日程調整、受け入れた教員による講演会等の企画・運営を行った。また、2014 年度は学生 6 名（各 1 セメスター）を受け入れ、4 名（各 1 セメスター）を派遣した。2015 年度は学生 6 名（各 1 セメスター）を受け入れ、3 名（内 1 名は通年、2 名は 1 セメスター）を派遣した。派遣学生の決定に関して面接を行った。

4. 日独 6 大学学長会議（ヘキサゴン）の部局担当窓口として、2015 年 4 月に東北大学で行われたコンソーシアム会議における人文社会科学部会シンポジウムの発表者の選定、学生ワークショップの発表者の公募・選考等を行った。

3. 留学生受入部門

1. 従来どおり、正規外国人学部および大学院留学生（国費・私費）、外国人研究生、部局間協定と大学間協定による iExpo、OUSSEP、Maple 各プログラムへの特別聴講学生および特別研究学生の受け入れ関連業務を行った。2014 年度は 22 の国・地域からの 155 名、2015 年度は 25 の国・地域からの 161 名の留学生が在籍した。

2. 在学中の留学生を対象とした業務として、従来通り、短期留学生の受け入れ教員の選定、各種奨学金推薦者の選考、入学後 1 年以内の留学生を対象としたチューター制度の運用を行った。

3. 新たな試みとして、OUSSEP および Maple プログラムの参加学生に対して、国際連携室長および留学生受け入れ部門チーフへのメールでの連絡の経路を開き、危機管理体制の一部とした。

4. 引き続き、タンデム学習プロジェクトを運営した。タンデム学習は、互恵性と学習者オートノミーという原則に基づき運用されるものであり、異なる言語を母語とする2人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うという学習方法である。この制度の運用のため、リサーチ・アシスタント(RA)とアルバイトを雇用し、スチューデント・スタッフとして活用した。2014年度は、延べ43組、2015年度は延べ42組のペアリングを行った。学習希望言語に偏りがあることから、文学部・文学研究科内だけではなく、豊中地区の他部局や外国語学部でも広報活動を行い、申込者のニーズにできるだけ対応できるようにしている。学期末に行っているアンケート調査によると、回答者の満足度は総じて高い。

4. 留学助成部門

1. 引き続き、協定校への派遣学生の募集・選考に関わる業務を行った。
2. 例年どおり、留学プログラム一覧を掲載したパンフレット Let's Study Abroad を作成、配布した。また、新入大学院生を対象としたガイダンスと学部1年生を対象とした共通概説の授業において、留学に関する情報を提供するとともに、部局間協定派遣の説明会も別途、開催した。
3. 引き続き、リスク・マネジメントの一環として、海外に派遣した学生の緊急時に対応する緊急連絡網を維持・更新した。
4. 夏期短期英語研修の運営。文系海外短期研修委員会の構成員として、グローニンゲン大学・マヒドン大学での夏期短期英語研修プログラムの運営にあたった。また、最低催行人数を決めるなど、同委員会において制度の整備にイニシアティブをとった。
5. JASSO の海外留学支援制度(協定派遣)に、「人文学をグローバルに学ぶ」というプログラムで応募し、2014年度(2015年度派遣分)、2015年度(2016年度派遣分)とも採択された。その結果、部局間協定校に派遣する各年度5名の学生に奨学金給付が可能となった。
6. 上記 JASSO の奨学金および研究科独自の基金「教育ゆめ基金」によって運営する協定校への派遣学生に給付する奨学金の受給者の選考を行った。

5. エラスムス・ムンドゥス部門

1. ユーロカルチャー・マスター・プログラムの学生を2014年度は2名、2015年度は6名、受け入れた。
2. 5科目から成る英語授業「世界の中の現代日本」(3ヶ月)を計画・実施した。2015年度より5科目すべてを文学研究科の専任教員が担当することとし、教員間の連携がより緊密に行えるように配慮した。これにより、課題の負担が1時期に集中する等の問題を解決することができた。また、引き続き、円滑な指導が行えるように各授業にTAを配置した。
3. カリキュラム外の活動として、希望者には日本語学習のサポートを行った。
4. 生活・学習両方が問題なく進められるよう、ビザ申請等の各種手続き、宿舍の手配等、生活面に关わるサポートをおこなうとともに、来日直後にガイダンスを行った。
5. 大阪大学の学生のユーロカルチャー・マスター・プログラムへの派遣(推薦)について、学内で説明会を実施して、応募者の選考を行った。2014年度に1名を派遣した。
6. 2014年度に2名、2015年度は1名の教員を受け入れ、講演会を催した。2014年度に2名の教員をコンソーシアム内の大学に派遣した。
7. コンソーシアム校の担当者が集まって行われるマネージメント・ミーティングに2014年度1名、2015年度2名の教員を派遣し、運営上の問題や今後の方針に関する協議に参加した。

(青木 直子)

国際交流センター・留学生相談室

組織・体制

国際連携室のもとに国際交流センターおよび留学生相談室を設置している（2016年2月に内規改正のため、「留学生相談室」は「国際交流センター」へ統合）。

国際交流センターは、センター長1名（国際連携室長兼任）、副センター長1名（同副室長兼任）、助教1名（2017年3月現在 助教2名）、事務職員1名（2016年度より嘱託職員1名）で構成され、それに留学生専門教育講師1名が加わって、オリエンテーション、親睦パーティーといった各種行事の実施、エラスムス・ムンドゥス・プログラムやISAPプログラムの運営補助、教務係や庶務係と連携して留学生および招へい研究員の受入れサポートなど、国際交流に関する様々な業務を担当している。また、助教および事務職員は、留学生からの学習・研究、生活などについての様々な質問や相談の窓口となるほか、協定校をはじめとする海外の大学への留学についての情報を提供している。

留学生専門教育講師は、論文作成法と実践専門日本語の授業を開講するほか、必要に応じて個人指導も行っている。

活動状況

1. 留学生相談・留学相談

国際交流センターでは、①留学生の学習・研究や生活についての質問・相談、②留学に関する質問・相談などに対応している。相談・質問等での訪問回数は、延べ2014年度約600、2015年度約600。

①留学生の学習・研究に関する相談・質問は留学生の種別によって異なる。交換留学生では、授業登録や単位の取得、成績についての質問が多く、研究生や正規生では、大学院入試、奨学金の応募情報についての一般的なことから、研究の方法や学位論文について、研究室の同輩・先輩に尋ねるべき専門分野・コースに関するものまでより幅広い質問・相談が寄せられる。長期にわたって在籍する正規生に特徴的な、休学・退学・転学といった修学制度については、教務係と連携のうえ対応している。また、例年特定の時期に寄せられる生活上の問い合わせとしては、在留資格の延長・変更手続きといった手続きについて、あるいは、生活用品の入手・処分方法や引越しに関する問い合わせがある。ときおり寄せられるのが医療機関の受診についての問い合わせである。質問・相談内容によって即答・即決がむずかしい場合は、1. 必要な情報の収集と提供を行う、2. 状況に応じて指導教員や学内外の専門の相談窓口との連携を図りながら対処する、3. 「大阪大学留学生支援フロントスタッフネットワーク」（留学交流に携わる学内の教職員で組織、年4回定例ミーティングを開催）を活用して適切な対処の方法を探る、といった仕方に対応している。

②2014年から2015年にかけては部局間協定校の新規締結・更新が7件あった。協定校への留学に関する質問・相談も増加傾向にある。教務係を通じて本部事務局から提供される留学関係情報の周知を図り、それぞれの相談・質問内容に応じて本部事務局や協定校などと連絡を取りつつ対応している。質問・相談内容は、留学先の選び方、申請時期等のスケジュール、交換留学等で利用・申請可能な奨学金、留学先の大学に提出すべき書類（申請書や推薦書）、ビザ申請・取得手続などについてである。

2. その他の支援活動

1. 新規入学の留学生には在籍する研究室の学生がチューターとして配置されている。留学生が日本での、とりわけ、文学部・文学研究科での学生生活になじむためのサポートができるよう、チューターの新規採用者を対象に説明会を実施している。また、学位論文執筆者は、日本語の添削を目的とする「論文添削アルバイト」の制度を利用することが出来る。

2. 国際教育交流センターや本部事務局で企画・実施される日本語や英語でのプログラム、ホストファミリープログラム、地域の学校の国際理解プログラム、留学生を対象とした学内外のイベントや課外活動、奨学金、寮に関する情報を提供し、必要に応じて申込み手続等を補助した。

3. エラスムス・ムンドゥス・プログラム、ISAPプログラムといった研究科で運営するプログラムについて、関係部門や事務部と連携しつつ、プログラムの運営をサポートした。

4. 学生派遣については、交換留学や短期語学研修、学内で実施されているプログラムをはじめ、海外の研究・教育機関への留学を希望する学生に関連情報を提供した。海外留学オリエンテーションや各種プログラムへの参加者を募るとともに、必要に応じて応募書類の作成補助などを支援した。また、交換留学に参加する学部学生が対象の留学支援「ゆめ基金」において、学生への募集案内から留学助成金の支給までをサポートをした。

3. 年間行事

留学受入れに関連しては以下の行事を実施した。

- ・新入留学生向けのオリエンテーション（各年4月・10月）
- ・タンデム学習（各年前期・後期）
- ・チューター説明会（各年4月・10月）
- ・浴衣教室（各年7月）・着物体験教室（各年12月）

学生の留学支援については説明会を開催した。

- ・留学説明会（各年5月）
- ・Erasmus Mundus Euroculture 奨学生説明会（各年10月）
- ・留学助成金「ゆめ基金」募集案内（各年5月・1月）

留学生だけでなく、文学部・文学研究科の学生、教職員との交流の機会として以下の企画を実施した。

- ・ランチタイム交流会（2014年4月・11月、2015年4月・10月）



留学説明会 2014年5月



新入生オリエンテーション 2014年10月



着物体験教室 2015年12月



ランチタイム交流会 2015年10月



浴衣教室 2015年7月

4. 広報活動

文学部・文学研究科で実施する国際交流活動の記録・広報を目的に、『国際交流ニューズレター』を年1回刊行した（5号、6号）。また、文学部・文学研究科の学生が申請・利用できる留学・研修についての情報をまとめた冊子「Let's study abroad」を作成した。

（丁 愛美）

客員研究員の受入れと本研究科教員の海外における研究活動

1. 外国人招へい研究員

出身国	2014 年度		2015 年度	
	人数	受け入れ講座	人数	受け入れ講座
中国	7	国文学・東洋文学講座 4、芸術学講座、世界史講座、哲学講座	8	国文学・東洋文学講座 6、日本語学講座、日本学講座
韓国	2	日本学講座、日本語学講座	1	国文学・東洋文学講座
台湾	1	国文学・東洋文学講座		
インド	1	国文学・東洋文学講座	1	国文学・東洋文学講座
アメリカ	1	世界史講座		
ドイツ	2	哲学講座 2	2	芸術学講座、世界史講座
ハンガリー	1	哲学講座	1	哲学講座
ポーランド	1	芸術学講座		
イタリア	1	芸術史講座	1	世界史講座
スペイン			1	西洋文学・語学講座
ロシア	1	日本語学講座		
ベラルーシ			1	哲学講座
日本(海外在住者)			1	国際交流センター
合計	18		17	

2. 教員の海外研究活動

	外国出張		海外研修	
	2014 年度 27 ヶ国・地域 延べ 110 名 (128 件)	2015 年度 28 ヶ国・地域 延べ 114 名 (119 件)	2014 年度 7 ヶ国・地域 延べ 12 名 (15 件)	2015 年度 12 ヶ国・地域 延べ 17 名 (18 件)
中国・香港	25	25	3	1
韓国	13	9	4	3
台湾	10	4		
タイ	7	4		
シンガポール	1	4		1
マレーシア	2			
ベトナム	3	2		
ラオス		3		
ウズベキスタン	1			
インド	1	1		1
アメリカ	9	10		3
カナダ				1
ペルー		1		
イギリス	12	11	1	2
フランス	7	2	1	1
ドイツ	7	16	2	2
アイルランド	1			
スイス	1			
イタリア	5	4		1
スペイン		1		
ポルトガル	4	2		1

エストニア	1			
チェコ		3		
クロアチア	1	1		
スロバキア		1		
スロベニア	1			
ルーマニア		2		
オーストリア	1	1	1	
ポーランド	1			
スウェーデン	4	2		
フィンランド	1	2		
デンマーク		2		
ベルギー	1			
オランダ	3	2	3	1
トルコ		1		
ロシア		1		
オーストラリア	5	2		

留学状況および留学生の受入れ状況

1. 留学状況

学生派遣

2014 年度

留学等による派遣は 35 名。交流協定による派遣は 18 名（部局間 10 名、大学間 8 名）

休学中の留学、海外渡航、国外研修は 17 名。

	件数		博士後期課程						博士前期課程				修士課程				学部					
			3 年		2 年		1 年		2 年		1 年		2 年		1 年		4 年		3 年		2 年	
	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学	留 学	休 学
イギリス	7	3		1									1				3		2	2	1	
アメリカ	1	2		1		1			1													
ドイツ	5	2	1	1	1				1				1						2			
フランス	2	1		1													1		1			
ロシア		1						1														
チェコ		1								1												
スウェーデン	1								1													
フィンランド	1																1					
韓国		1								1												
中国		3		2													1					
ベトナム		1											1									
オーストラリア	1																		1			
カナダ		2																1		1		
合計	18	17	1	6	1	1	0	1	3	2	0	0	1	2	0	0	5	2	6	3	1	

2015 年度

留学等による派遣は 45 名。交流協定による派遣は 18 名（部局間 12 名、大学間 6 名）

休学中の留学、海外渡航、国外研修は 27 名。

	件数		博士後期課程						博士前期課程				修士課程				学部					
			3 年		2 年		1 年		2 年		1 年		2 年		1 年		4 年		3 年		2 年	
	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学	留学	休学
イギリス	5	2							1			1					3	1	1			
アメリカ	1	3		2		1											1					
ドイツ	5	2			1								1	1			1	1	1			1
フランス	1	5		3		2											1					
ハンガリー		1								1												
チェコ	1																					1
スペイン		2		2																		
オランダ	1								1													
スウェーデン	2																		2			
アイルランド		1																1				
韓国	1																		1			
中国	1	4		3						1	1											
タイ		1																		1		
ベトナム		1														1						
カナダ		5																				
合計	18	27	0	10	1	3	0	0	2	2	1	1	1	1	0	1	6	7	5	2	2	2

大学で実施されている語学研修等参加者

	エセックス		モナシュ		グローニンゲン		マヒドン		ボローニャ		その他		合計	
	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部	研究科	学部
2014 年	-	2	-	6	-	4	-	-	1	-	1	3	2	15
2015 年	1	5	-	3	-	1	-	-	-	2	2	3	3	14

2. 留学生の受入れ状況

留学生受入れ

研究科							
課程	博士後期課程			博士前期課程		修士課程	
学年	3 年	2 年	1 年	2 年	1 年	2 年	1 年
2014 年	19	5	10	14	12	4	1
2015 年	14	10	10	13	14	1	1
学部							
学年	4 年	3 年	2 年	1 年			
2014 年	2	2	4	7			
2015 年	4	4	7	4			
		研究科			学部		
		研究生	特別 研究学生	特別 聴講学生	研究生	特別 聴講学生	
2014 年	合計	7	6	17	26	17	
	部局間	-	1	3	-	1	
	大学間	-	4	14	-	16	
	協定外	-	1	-	-	-	
2015 年	合計	9	4	16	29	22	
	部局間	-	1	11	-	1	
	大学間	-	2	5	-	21	
	協定外	-	1	-	-	-	

OUSSEP, Maple 学生の受入れ

	プログラム	OUSSEP		Maple	
		研究科	学部	研究科	学部
2014 年	合計	3	11	5	13
	部局間	-	-	1	8
	大学間	3	11	4	5
2015 年	合計	5	15	2	15
	部局間	1	-	-	7
	大学間	4	15	2	8

留学生の出身国・地域

	2014 年度	2015 年度
	出身国・地域 22	出身国・地域 25
中国	69	61
韓国	35	45
台湾	17	14
タイ	1	1
インド	1	2
アメリカ	3	3
カナダ		1
メキシコ	1	1
ブラジル	2	1
アルゼンチン	1	1
イギリス	1	1
フランス	2	2
ドイツ	7	8
イタリア	1	1
スペイン	1	
スイス		1
ブルガリア	1	2
オランダ		1
ルーマニア	2	
スウェーデン	1	3
リトアニア		1
ボスニア・ヘルツェゴビナ		1
イラン	1	1
イスラエル	1	
ロシア	4	6
オーストラリア	1	1
ニュージーランド		1
日本	2	1
合計	155	161

留学生の博士学位取得

留学生（元留学生）の博士号取得

専門分野	2014 年度	2015 年度
臨床哲学	1	1
英米文学	1	-
日本語学	1	-
国語学	-	1
計	3	2

(丁 愛美)

ここ数年大幅に運営費交付金が減らされているため教育・研究活動における外部資金の役割はますます大きくなっている。外部資金は種々のかたち、様々な機関のものが導入されており、その全容の把握は難しい。研究代表者となっている場合だけでなく、研究分担者となっている場合でもかなりの件数と金額が導入されていると考えられる。逆に研究代表者となっている場合でも、金額のすべてが文学研究科で支出されているわけではなく、他大学・他機関の研究分担者への配分金の存在もある。したがって、ここでは件数や金額が把握しやすい、文学研究科の構成員が代表者となって取得している外部資金についての概要を紹介しておきたい。なお、文学研究科の教員だけでなく、大学院生が獲得している外部資金も考慮に入れることとする。

1. 科学研究費助成事業

科学研究費助成事業（以下「科研費」という。）の取得について件数、金額（直接経費のみ）の増減をまずみておくことにしたい。ここには、日本学術振興会の特別研究員奨励費も含まれる。

表 1-4-1 取得された科研費の件数と金額変化およびその科研費予算総額との比較

年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
件数	89	92	94	108	121	128	127	122
増減	1.29	1.03	1.02	1.15	1.12	1.06	0.99	0.96
金額(千円)	182,820	157,090	161,560	181,930	188,017	202,700	199,850	193,400
増減	1.32	0.85	1.03	1.13	1.03	1.08	0.99	0.97
科研費予算総額 (億円)	1,932	1,970	2,000	2,633	2,566	2,381	2,276	2,273
増減	1.00	1.01	1.02	1.32	0.97	0.93	0.96	1.00

本表には表示されていないが、科研費の取得件数は、2006 年度から上昇しているが 2013 年度をピークに減少傾向にある。また、2011 年度に科研費の一部が基金化されたため一時的に全体の予算総額が大幅に拡大するも翌年から微減している。

表 1-4-2 取得された科研費の内訳

年度	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
特定領域研究件数	3	3	1	0	0	0	0	0
同金額(千円)	18,200	16,900	7,300	0	0	0	0	0
基盤研究(A)	4	5	4	8	8	8	10	8
同金額(千円)	42,700	38,100	37,600	58,600	57,800	62,700	69,700	64,400
基盤研究(B)	18	14	14	14	16	15	13	13
同金額(千円)	63,500	44,400	50,400	44,400	49,200	42,700	37,650	37,100
基盤研究(C)	37	32	31	31	39	43	44	40
同金額(千円)	28,100	34,700	27,600	29,600	38,867	44,800	42,900	39,900

基盤研究(A) は、2010 年度までの取得数は 4、5 件ほどであったが、2011 年度から 8 件に倍増し現在においても高い水準を維持している。なお、特定領域研究は 2008 年度より新規募集を行ってない。また、基盤研究(B)は、2009 年度から件数・金額とも減少に転じ、2012 年度には一旦上昇したものの 2013 年度から減少し、ほぼ横ばい状態である。このほか、基盤研究 (C)については、2009 年度以降 2011 年度までは横ばいであったが 2012 年度から 2014 年度まで上昇した。

2. その他の外部資金

科研費以外の外部資金も極めて重要である。2013 年度から文化庁の文化芸術振興費補助金（大学を活用した文化芸術推進事業）を取得し、劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業を3年間行った。また、2015 年度には国立大学改革強化推進補助金（優れた若手研究者採用拡大支援）を受け、優れた若手研究者を特任講師として3名採用することができた。また、同年始めて民間等との共同研究が始まった。なお、大学院生が獲得した助成金については、会計担当部署が資金獲得者の自己申告により把握している数値に過ぎず、すべてを把握できているわけではない。

種類	件数と金額	2008 年度	2009 年度	2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
グローバル COE	件数	1	1	1	1	—	—	—	—
	金額 (千円)	4,300 ¹	2,400 ¹	3,400 ¹	1,050 ¹	—	—	—	—
組織的な若手 研究員等海外派遣プログラム(OVC)	件数	—	1	1	1	1	—	—	—
	金額 (千円)	—	936	28,697	30,558	25,109	—	—	—
優秀若手研究者海外派遣事業	件数	—	1	—	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	—	4,722	—	—	—	—	—	—
研究拠点形成費等補助金(海外先進研究実践支援) ²	件数	1	—	—	—	—	—	—	—
	金額 (千円)	2,620	—	—	—	—	—	—	—
頭脳循環を活性化する若手研究者海外派遣プログラム	件数	—	—	1	1	1	—	—	—
	金額 (千円)	—	—	11,574	23,797	20,347	—	—	—
国宝重要文化財等保存整備補助金	件数	—	—	—	1	1	1	—	—
	金額 (千円)	—	—	—	15,000	7,600	4,000	—	—
卓越した大学院拠点形成支援補助金(研究拠点形成費等補助金(若手研究者養成費))	件数	—	—	—	—	1	1	—	—
	金額 (千円)	—	—	—	—	10,640	7,650	—	—

国立大学改 革強化推進 補助金(優れ た若手研究 者採用拡大 支援)	件数	—	—	—	—	—	—	—	3
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	—	—	34,171
文化芸術振 興費補助金 (大学を活用 した文化芸術 推進事業)	件数	—	—	—	—	—	1	1	1
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	10,000	15,000	21,792
各種財団など からの研究助 成金	件数	7	8	6	5	3	4	5	8
	金額 (千円)	11,532	6,663	4,930	3,243	2,539	3,164	2,828	7,651
大学院生の 獲得している 研究助成金	件数	17	27	22	17	21	43	50	42
	金額	17,297 千円 13,000 US ドル 10,920 フラン 5,220 ユーロ	21,145 千円 300,000 台湾ドル 3,900 ユーロ	10,255 千円 2,000 豪ドル 8,100 ユーロ	7,572 千円	12,426 千円	13,512 千円	30,211 千円	26,522 千円 283,220 ハンガリー フォリント
預かり個人交 付補助金(国 文学研究資 料館共同研 究)	件数	—	—	—	—	—	—	1	1
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	—	1,400	1,800
受託研究	件数	2	1	1	1	0	2	1	2
	金額 (千円)	10,976	2,200	1,950	1,870	0	4,794	4,398	3,154
共同研究	件数	—	—	—	—	—	—	—	1
	金額 (千円)	—	—	—	—	—	—	—	1,000

1 文学研究科教員獲得分

2 大学教育の国際化推進プログラム

2008 年 4 月より、正式にエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム(「ユーロカルチャー」)の圏外協定校としての活動を始めたが、2011 年 10 月からはヨーロッパ圏外のフル・パートナーとして、他の 3 つの圏外校(メキシコ国立自治大学、インド・プーネ大学、米国・インディアナ=パーデュ大学インディアナポリス)とともにプログラムの運営により大きく関わることとなった。同プログラムは、欧州における高等教育機関同士の連携を強めるとともに相互間の流動性を高め、大学教育を国際化することを目的としており、英語を共通使用言語としている。ヨーロッパの大学のみならず、ヨーロッパ圏外の大学がパートナーとなって参加することによって、世界的な規模で展開する最先端教育プログラムである。本研究科は人文学分野における日本初めての同プログラム協定校となった。

国際連携室に設置されたエラスムス・ムンドゥス部門(EM 部門)は毎年 RA2 名を受け入れ、プログラム運営を担当している(派遣学生および教員の宿舍の手配、ビザ申請、各種書類作成、シラバス作成、リーディング・テキストの選定・購入、本学からの派遣留学生の募集説明会・面接選考、本学からの教員派遣等)。例年 10 月～12 月の 3 ヶ月間、同コンソーシアムの学生最大 5 名を「特別聴講学生」として受け入れ、「世界の中の現代日本」をテーマとした英語による授業 5 科目(2014 年度は「文化人類学」「現代日本思想論」「現代日本文化論」「比較芸術論」「日本現代史」)10 回にわたって開講し、25ECTS(10 単位相当)を認定している。授業にはコンソーシアム所属学生以外の留学生や日本人学生も参加し、双方向性を保証するとともに、各授業においてフィールドトリップを実施している。また、毎年ユーロカルチャー・コンソーシアム大学の教員 1～2 名を受け入れ、適宜助言を得て、改善に努めている。さらには日本語教育の専門家および大学院生の協力を得て、日本語学習の機会を提供することにより、短期間にもかかわらず高い教育効果をあげている。本研究科は、同プログラムの 4 校の圏外協定校の中でも常に高い評価を得ており、これまでのところ、欧州側での派遣留学先として希望する学生が最多である。

2014 年度は、コンソーシアム大学から 2 名の学生を受け入れた。また、本プログラムに基づき、例年本学から学生 1 名を奨学生としてコンソーシアム大学に派遣しているが、残念ながら、2015 年度～2017 年度の期間に限っては、応募者がいなかった。6 月には、ポーランドのクラカウで開催されたコンソーシアム全体会議に本研究科教員 1 名(宇野田准教授)が参加し、プログラム運営の改善策について集中的に審議した。そして、2 名の教員(ウディネ大学:ツァニーニ先生、ゲッティンゲン大学:タムケ先生)の受入れ(2 週間ずつ)を実施した。

2015 年度には、コンソーシアム大学から 6 名の学生(当初 5 名までの受入れを予定していたが、本部から 6 名の受入れというリクエストがあり、教務係等の許可を得た)、および 1 名の教員(デウスト大学:アルツナ先生)の受入れ、本学学生 1 名(松村ゆめみさん)の派遣(2016 年の秋～2018 年の春までの予定)、本研究科教員 3 名(入江教授)の派遣(2 週間ずつ)を実施した(他 2 名、橋本准教授と田中均准教授、が 2015 年度に採択されたが、2016 年度に派遣される予定)。本研究科で開講するエラスムス・ムンドゥス英語授業に関して、前年度と同様に「世界の中の現代日本」という総タイトルのもと、「現代日本社会」「比較言語論」「現代日本思想論」「現代日本文化論」「比較芸術論」「現代日本文化論」を開講した。本年度も、プログラム主催者および受講生の要望を踏まえ、ヨーロッパと日本の関係に力点を置くよう配慮した。また 6 月にはオロモウツ(チェコ)で開催されたユーロカルチャー・コンソーシアム全体会議に本研究科教員 2 名(青木教授、バーデルスキー)が参加し、同プログラム実施の課題について意見交換を行った。

(マシュー バーデルスキー)

目 的 と 概 要

本プログラムは、演劇、音楽、美術、アート、パフォーマンスなど多岐に亘っている現代芸術を広くカバーして、特定の芸術ジャンルに専門的になるのではなく、どのような芸術ジャンルにも対応できるような人材育成を行うことを狙いとして構想し、平成 25 年度文化庁「大学を活用する文化芸術推進事業」に申請し、採択された。その後 3 年間にわたって事業を実施し、2015 年度末で終了した。以下は、2014 年度及び 2015 年度の活動について簡単に報告するものである。

この事業は、大阪大学文学研究科芸術系ブロックが中心になり、大阪大学のコミュニケーションデザイン・センター、国際公共政策研究科、総合学術博物館と共同して、能勢浄るりシアター、吹田市文化会館メイシアター、尼崎青少年創造劇場、ザ・フェニックスホール、京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館といった芸術諸機関と連携して、芸術祭を企画運営する人材育成を実践的にこなうことを目的に、能勢浄るりシアター、吹田市文化会館メイシアター、尼崎青少年創造劇場、ザ・フェニックスホール、京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館等の芸術諸機関と連携して、演劇・音楽・ダンス・美術等の多ジャンル 8 科目の実践的授業を開講した。

これらの芸術諸機関のアドバイザーと事業担当者で「アート・フェスティバル人材育成推進協議会」を 4 回開き、具体的に専門的な助言をうけた。この助言も生かしながら、プログラムで実施した科目において、広く「ジェネラリストとしての専門家」の育成に努めることができた。また、大学が企画運営するフェスティバルであり、芸術祭を通して研究するという「リサーチとしての芸術祭」という新しい取組も本プログラムの狙いであった。この点でも他大学の芸術系研究者、美術館キュレーターなど高度専門職業人を多く招へいして、ワークショップやセミナーにおいて受講生と議論を重ねて人文学と芸術との相互作用を促進することができた。

研修の受講者は、芸術系諸機関で働く人々など社会人を中心に広く公募し、2 年間でのべ 59 名を受講生として受け入れた。受講生（フェスティバル・フェロー）は、各事業担当者と「フェスティバル企画運営委員会」を組織して、各種セミナーやワークショップを受講し、同時に各科目に実践的にかかわり、共同作業をしながら、フェスティバルを企画運営した。フェスティバル・フェローは、以下に記す研修科目を受講しつつ、各芸術事業に関わり、またフェスティバル全体の運営に携わった。

①「フェスティバルの企画運営と実際」（2014 年度・2015 年度）

各事業を統括するテーマの「オープニング・セミナー」、年度末に全体を総括する「クロージング・セミナー」を開催した。オープニング・セミナーは 2014 年 7 月 5 日～6 日に大阪大学で開催し、セゾン文化財団久野敦子さんをお迎えし、グローバル化社会におけるアート・フェスティバルのあり方について講演をいただいた。また各プロジェクトの担当講師がガイダンスを行った。また 2015 年 3 月 6 日には同じく大阪大学において、受講生自身によって企画されたクロージング・セミナー「芸術祭の未来」を開催し、1 年間の事業の総括と芸術祭の未来について議論した。2015 年度には 6 月 27 日～28 日、7 月 4 日～5 日、7 月 11 日～12 日にアート・フェスティバル基礎講座「アート・フェスティバルに学ぶ」を開催した。また平成 28 年 3 月 6 日は受講生が企画・調査し、NPO 法人グリーンバレー副理事長森昌槻氏（神山アーティスト・イン・レジデンス初代会長）を講演者として迎えたクロージング・シンポジウムを開催した。地域におけるアートのあり方について学ぶとともに、3 年間の事業の総括を行った。

②「市民参加型演劇とアウトリーチ」（2014 年度・2015 年度）

吹田市文化会館メイシアターという市民文化ホールと連携し、地域住民をオーディションし、実際に作品制作にかか

わることで、地域の記憶をテーマにした作品上演を行う「吹田メイシアター×大阪大学 オリジナル地域伝承劇の企画」を実施した。また3回のセミナーとワークショップを行い、劇場と大学と地域をつなぐマネジメント人材を育成する事業を行った。2015年度では、8月22日、23日に、また11月15日、平成28年1月9日に、それぞれアウトリーチに関する公演とワークショップを行った。

③「AIR アーティスト・イン・レジデンス」(2014年度・2015年度)

大阪府指定有形文化財でもある旧新田小学校でポルトガル人写真家ジョアン・ガルシアの展覧会を開催した。関連の事業として各種のワークショップを展開し、11月1日～3日に「みちくさ集団登校」と題したリサーチ・ウォーキングを、11月1日にはガルシアを囲んでトーク・セッションを、11月4日には朗読劇も同時に上演し、写真と地域を結ぶ方法や考え方を深めた。また11月14日～16日には英国の演出家クリッシー・テイラーを迎えて解体の決定した石橋宿舍をテーマにしてワークショップを行った。2015年度には受講生企画としてネパールからアーティストを招聘し、講演会とワークショップを多数開催し、大阪大学中之島センターおよび大阪市新美術館建設予定地において多数のイベントを開催した。

④「国際ワークショップ—芸術と公共性」(2014年度)、「国際イベントの運営—芸術と共生」(2015年度)

3月7日～8日の両日、ベルリン自由大学からパフォーマンス研究者カイ・ファン・アイケルスを招き、公共的な空間と人々の集団形成を行う際に芸術がどのような役割を担うのかについて協議し、ワークショップを行った。また2015年9月19日には実際に舞踊家レジヌ・ショピノを迎えて受講生が進行を務める公開セミナーを行い、9月22日、23日両日にはダンス公演を行った。

⑤「レクチャー・コンサートの企画運営」(2014年度)、「音／身体／メディアをめぐるワークショップ」(2015年度)

2014年10月1日にヨーロッパの第一線で活躍する多国籍アンサンブル「アンサンブル・ラロ」の演奏会を佐治敬三ホール(中之島センター)において開催し、メンバーの一人ヘーデンボルク・直樹氏(ウィーン・フィル)とのインタビューなどとともに、ドヴォルザーク:ピアノ四重奏曲第1番 ニ長調 op.23などが演奏された。それに先だって8月2日にワークショップを開催し、アンサンブル・ラロ・ジャパンの代表、井原麗奈氏を中心に、演奏会制作に向けたレクチャー、準備作業などを行った。また2015年度には12月12日に作曲家、三輪眞弘氏を招いて「みんなの好きな給食のおまんじゅう」という作品の上演会を開催した。これに先立ち、約2ヶ月間、上演のための練習、チラシ制作、公演準備などの作業を行った。また12月18日には、「おおがきビエンナーレ」前夜祭において、上記メンバーが作品を再演したことも特筆される。

⑥「美術と絵画資料の展覧会企画と運営」(2014年度)

江戸時代の絵画についての土居次義の詳細な資料と関連の絵画を使った「土居次義記憶と絵画」展を京都国立博物館、京都工芸繊維大学美術工芸資料館と連携して開催すべく、9月6日にワークショップを大阪大学において開催した。美術館学芸員、研究者などのセミナーを行い、受講生のアイデアを募りながら土居ノートの具体的な活用方法を考えた。2015年1月に京都工芸繊維大学において「土居次義 記憶と絵画」展を開催した。

⑦「サイトスペシフィック・アートと都市魅力創造」(2014年度・2015年度)

大阪という場所性をアートと芸術祭に具体化していくために、大阪という「場所」の持つ記憶、歴史性、特性をいかに生かしていくかを課題としてワークショップとイベントを展開した。7月26日、8月23日、8月30日、10月18日、10月25日、11月15日、11月16日にそれぞれワークショップを開催した。特に「NAMURA ART MEETING '04-'34」および「鉄道芸術祭 vol.4/音のステーション」には、受講生による企画も含んだ内容を開催した。中之島アートエリア B1 と北加賀屋での芸術祭に制作の一助を担いつつ事業を展開した。また2015年度には同じく8月1日、8月29日、9月5日、10月24日、12月26日にそれぞれワークショップを開催し、受講生は「鉄道芸術祭」におけるプレス

対応やオープニングとクロージングに携わった。

⑧「伝統芸術の現代化」(2014年度・2015年度)

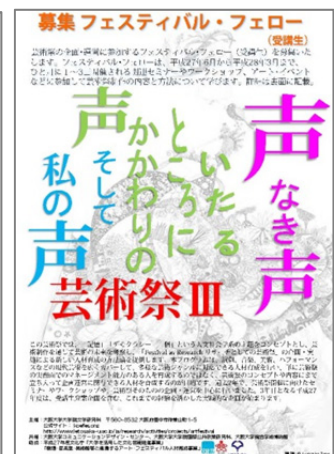
伝統芸術の現代化を巡って能勢人形浄瑠璃と台湾の林文中舞踊団の二つの課題を取り上げて、ワークショップ、制作、公演を行った。9月6日に事前のミーティングを行った後に、9月13日には能勢人形浄瑠璃の第四十三代竹本井筒太夫を招いてシンポジウムを開催後、同人形浄瑠璃鹿角座地黄城公演に参加した。また台湾のダンスカンパニー「林文中舞踊団」を招聘し、その南管及び梨園戯の現代化の作品『小南管Ⅱ』の制作を行い、11月30日に尼崎ピッコロ劇場で上演した。また2015年度には受講生企画として浪速神楽を取り上げ、歴史について講演会を開催し、ワークショップ、受講生が展覧者となった展覧会、そして2月5日～7日にかけては研究成果を『祭礼2016』として中崎町イロリムラにて上演した。

⑨「ドキュメンテーション／アーカイブ」(2015年度)

アート・イベントのアーカイブ化とドキュメンテーションの方法論について、記録の利用と制作の二つの側面から考える企画を、学内外の関係者を講師に招聘して実施した。7月20日、8月8日、9月27日には、公共空間におけるパフォーマンスのドキュメンタリー映画の上演を介して、パブリックな場について考えるワークショップを開催した。7月18日、19日、2月20日にはドキュメンテーションとアーカイブの専門家をまねいて、受講生が本芸術祭のアーカイブを作成するための勉強会を開催した。



ポスター2015年度



受講生募集チラシ

成果と将来

フェスティバル・フェローは、各事業担当者が推進する個別の事業に適宜参加するとともに、事業担当者が公開で行うイベントに出席し、プログラム履修を進め、年度末にレポートを提出した。事業への貢献度、出席率、レポートを総合的に判断し2年間でのべ27名のフェスティバル・フェローに修了証を授与した。

アートマネジメント人材育成の目標として、特定の専門分野ではなく、どのような芸術ジャンルにも対応できる人材育成を行うこととした。本プログラムでは、2年間で59名の受講生があり、うちのべ27名に修了証を授与することができた。この3年間の事業は、初年度は準備期間と位置付け、2年目、3年目にあたる2014年度～2015年度を芸術祭とした。事実大きなイベントもこの2年間に多かった。また育成事業として、受講生自らが企画から制作、実施まで運営する事業も二事業を数えることができ、育成事業として実りの多いものとなった。

次年度以降は、この3年間の経験を土台として文学研究科内でカリキュラム化された授業を開講する。これは中之島センターを中心に行う社会連携型の授業であり、主としては社会人に開くものであるが、学生の積極的な受講も望んでいる。社会人と学生とが共に学ぶ新しい形式を探求していく。もう一つは総合学術博物館を中心にして、同じ文化庁「大学を活用する文化芸術推進事業」に申請した新しいプログラムを実施する予定である。こちらも社会人を対象とした社会学連携的な講座として展開する予定であり、文学研究科との共催事業とする予定である。

(永田 靖)

大阪大学文学研究科では、世界に開かれた人文学研究を推進するために、従来の専門分野の枠にとらわれない研究組織として、2014年度より「国際的社會連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）」Global Linkage Clusters for Humanities (GLinCH)を創設しました。主要な目的は以下の通りです。(1) 国内外の大学、研究教育機関、学術芸術機関、自治体等と共同して、分野横断的な新しい人文学研究の拠点形成を行うこと。(2) 個別に行われてきた国際的な研究交流を文学研究科が支援するとともに、研究科内に組織化することによって可視化し、個の力を組織の力に高めること。(3) 大学内外の競争的資金を獲得するため、研究実績を積むことによって常に準備体制を整えておくこと。以上の目的のもとに、文学研究科内で募集し選考の結果、5件のクラスターを採択し、2014年度から国内外の大学・研究機関等とのより積極的な共同研究等の研究教育活動を推進しています。

グローバル日本研究クラスター

概要

グローバル日本研究クラスターは、講座などの既存の枠組を横断するかたちで教員を組織して日本研究に取り組むことにより、国際連携を拡大・深化するとともに国際発信力を強化することを目指している。もともとハイデルベルク大学東アジア研究センター日本学研究所との研究交流を深めていた教員グループの活動が前提となっているため、本クラスターは本研究科のドイツ研究者と日本研究者からなり、同研究所は主要な連携先の1つとなっている。

研究面では、2014年度・2015年度は、ヨーロッパ・アメリカ・アジアの日本研究者を招いて国際ワークショップ・国際シンポジウム等を開催し、日本研究の国際的な連携を拡大・深化することにつとめた。具体的には、ヨーロッパからはハンス・クレーマさん（ドイツ・ハイデルベルク大学）、ディック・ステゲウェルンズさん（ノルウェー・オスロ大学）など、アメリカからはアン・シェリフさん（アメリカ・オーバーリン大学）、ブレット・ド・バリーさん（アメリカ・コーネル大学）など、アジアからは孫歌さん（中国・中国社会科学院）、趙寛子さん（韓国・ソウル大学）、権赫泰さん（韓国・聖公会大学）、申寅燮さん（韓国・建国大学）、朴裕河さん（韓国・世宗大学）などにおいでいただいた（具体的な活動履歴の概略については下記の「活動状況」参照）。テーマは多岐にわたるが、近現代日本の思想史、東アジア地域・環太平洋地域での人の移動が、主要な研究課題として浮かび上がりつつある。

本クラスターの活動を展開するうえでは、本学の国際共同研究促進プログラムの支援を受けてきた。上記のうち、趙寛子さん、ディック・ステゲウェルンズさん、朴裕河さんには、このプログラムによる人件費の支援により、特任教員として1～2ヶ月本学にご滞在いただき、研究・教育に従事していただいた。同プログラムによる人件費支援に、この場を借りてお礼申し上げたい。

同プログラムによりご滞在いただいた上記のお三方には、集中講義をご担当いただいたり、院生の研究発表を中心とするワークショップに関わっていただいたり、授業でご講演いただいたり、さまざまなかたちで学生・院生の教育にも貢献していただいた。上記のプログラム以外でも、アン・シェリフさんには集中講義をご担当いただき、2016年2月の国際シンポジウムでは大学院生による研究報告のパートも設けた。このように、研究面のみならず、教育面でも、とりわけ大学院生に、国際的な研究交流の機会を提供することができた。

2014年度・2015年度は、国際連携の拡大・深化に力点を置いて、ヨーロッパ・アメリカ・アジアの日本研究者とのネットワークを築いてきた。この活動は、上記の通り、研究・教育上、大きな成果をあげている。今後は、これまでに築いてきたネットワークをさらに拡大しつつ、国際共同研究を組織し、研究成果の国際発信を強化していくことが課題となる。

組織・体制

2014年4月発足時のメンバーは、入江幸男、宇野田尚哉、合山林太郎、浜渦辰二、舟場保之、三谷研爾の6人。発足時の代表は入江で、2015年10月、宇野田に交代した。また、2015年度末の合山の転任により、メンバーは5人となった。2016年度以降、メンバーの拡充を行う予定である。

活動状況

2014年6月13日、ハンス・クレーマさん（ハイデルベルク大学東アジア研究センター教授）講演会、演題「20世紀前半アジア・ヨーロッパの反植民地運動における宗教の役割」

2014年12月20日、国際ワークショップ「グローバル冷戦と1950年代日本の文化/運動」、アン・シェリフさん（オーバーリン大学教授）ほか報告、辛島理人さん（関西学院大学先端社会研究所専任研究員）コメント

2015年2月10日、趙寛子さん（ソウル大学日本研究所助教授）講演会、演題「韓国における日本研究の動向」

2015年2月21日、国際ワークショップ「可能性としての東アジア思想史」、趙寛子さん（ソウル大学日本研究所助教授）・洪宗郁さん（同志社大学グローバル地域文化学部准教授）ほか報告

2015年10月6日、ティル・クナウトさん（ハイデルベルク大学東アジア研究センター助教授）講演会、演題「“For us it is now possible to overcome Marx!” The Precariat, Ainu-Liberation and Anti-Japanism after 1968」

2015年11月26日、荒木浩さん（国際日本文化研究センター教授）講演会、演題「スーパーグローバル時代の日本研究に求められるもの—学知・姿勢・ネットワークと戦略—」

2015年12月19日、国際ワークショップ「両大戦間期日本思想史再考」、ディック・ステゲウェルンズさん（オスロ大学准教授）・黒川伊織さん（神戸大学研究員）報告、福家崇洋さん（富山大学准教授）コメント

2016年1月10日、国際ワークショップ「ベトナム反戦体験から「戦後」日本を問う」、小山紳人さん（ジャーナリスト）・権赫泰さん（聖公会大学校教授）報告

2016年2月20日・21日、国際シンポジウム「移動という経験—東アジアから考える—」、伊豫谷登士翁さん（一橋大学名誉教授）・安岡健一さん（本研究科特任講師）・申寅燮さん（建国大学校アジア・ディアスポラ研究所所長）報告、美馬達哉さん（立命館大学教授）・西川祐子さん（元京都文教大学教授）・孫歌さん（中国社会科学院研究員）・ブレット・ド・パリーさん（コーネル大学教授）・朴裕河さん（世宗大学校教授）コメント

2016年2月24日、著者の朴裕河さん（世宗大学校教授）を迎えて、著書『帝国の慰安婦』の合評会を開催

（宇野田 尚哉）

グローバルヒストリー研究

概要

世界中の学界で注目されているグローバルヒストリー研究の国際的ネットワークを、世界主要地域の拠点大学と協力して構築し、大阪大学文学研究科をその中心に位置づけることで、日本からの研究面での情報発信と、若手研究者（院生・ポスドクを含む）の活躍の場を創出する。大阪大学における世界史研究に関係した研究者が部局横断的に結集し、研究セミナー・ワークショップや、外国人研究者を招聘した国際会議等を通じて、アジア太平洋地域における研究・教育のハブとして活動することを目標としている。

組織・体制

研究科内に2014年10月に設置された「グローバルヒストリー研究クラスター」（文化形態論5名、文化動態論1名、外国人研究協力者3名）を中心に、同じく2014年に開設された全学的研究組織・未来戦略機構第9部門「グローバルヒストリー研究」（17名で構成する各研究科横断の研究機構）のメンバーと協力して活動している。

文学研究科世界史講座では、従来から、グローバルヒストリーに関して具体的な研究課題を設定し、世界的に注目される業績を蓄積してきた。すなわち、①中央ユーラシア史研究：古代－中世のユーラシア遊牧民・商人の活動を、モンゴル

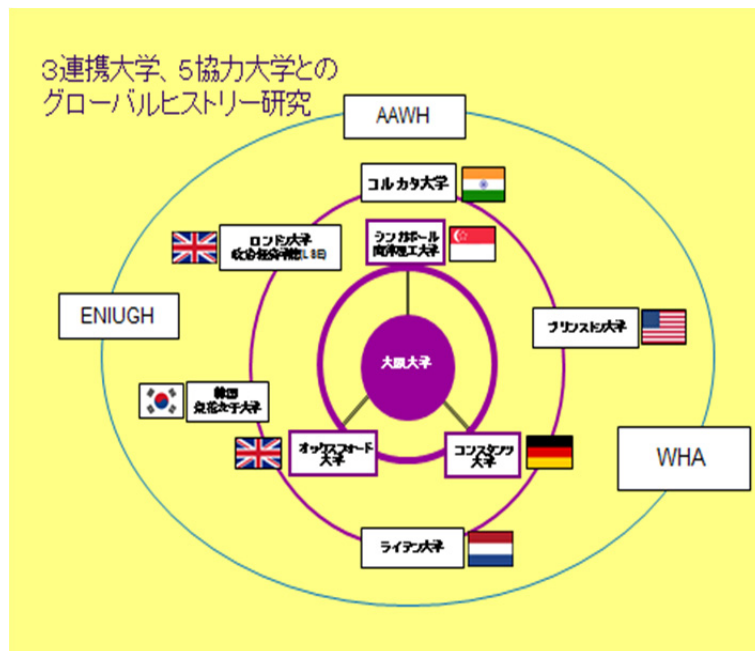
帝国に代表されるアジアの諸帝国の興亡と関連付けて考察する、②海域アジア史研究：中近世から近代初頭の、日本を含む国家間の交渉・相互認識と、商人・通商ネットワークの関係を考察する、③アジア国際経済秩序研究：近代以降のアジア独自の国際経済秩序の形成・発展を、世界システム論の見直しを通じて考察する、以上の三点である。大阪大学は、古代から現代まで一貫して、通時的な世界史研究を行っており、近世世界や近現代史の研究に特化した欧米の他の研究拠点とは異なる長期の時間軸を持ち、日本を含むアジアの観点から、第一次史料に基づいて実証的な研究を展開してきた点で、独自性を有している。我々は、この三群の研究成果をさらに緊密に結びつけて、アジアから見たトータルな独自の世界史像を構築することを目指しており、その際に、旧大阪外大が蓄積してきたアジア地域研究の成果も取りこんでいる。

同時に、「社学連携」による研究成果の広範な情報発信を通じて、大阪大学における文系部局の研究成果を広めることも重視している。具体的には、毎月一回開催している「大阪大学歴史教育研究会」を舞台に、全国の中等教育の歴史教員、マスコミや教科書会社の関係者等との討議・情報交換・共同企画を通じて、歴史認識・歴史教育に関する問題提起を行っている。

こうしたグローバルヒストリー研究は、歴史学だけでなく、「日本学」を含めたアジア地域研究、国際関係論、比較文明論、世界システム論、現代経済論など、多岐にわたる隣接諸領域の研究ともリンクしてくる。このような分野横断的で学際的な性格と、高度な国際的コミュニケーション能力が求められることから、既存の分野や領域を超えて国際的に活躍できる若手研究者の育成も可能になる。

活動状況

具体的には、イギリス・オクスフォード大学から参加を要請された、6大学の連携によるグローバルヒストリー国際共同研究（The Leverhulme Trust 後援、Oxford, Princeton, Leiden, Konstanz, Kolkata, 大阪）の東アジアにおける拠点校として、2015年4月から3年間で7回におよぶ国際ワークショップの開催（大阪は2016年3月に第2回ワークショップを実施）に積極的に協力している。同時に、アジア太平洋地域におけるグローバルヒストリー研究のハブとして、2009年に結成されたアジア世界史学会（The Asian Association of World Historians: AAWH、本部事務局は現在文学研究科・3年任期）と緊密に連携し、3年に一度の国際会議（2012年：韓国・梨花女子大学、2015年：シンガポール・南洋理工大学、2018年：中国・東北師範大学）を結節点として、アジアで世界史・グローバルヒストリーを研究する学者との連携・交流を強化するなかで、我々が目指す「アジア発の世界史研究」の充実を目指している。



定期的（平均すると1ヶ月半に一回）に、グローバルヒストリー・セミナー（研究会）を開催している。講師としては、世界の主要大学でグローバルヒストリー研究を展開する研究者を招聘して、英語で討議を行い、重要な成果については、Working & Discussion Papers として印刷・刊行している（現在、第21号まで刊行、同時に website にも掲載して公開）。

具体的な活動の履歴については、
<http://www.globalhistoryonline.com/>（日英二か国語で掲載）を参照していただきたい。

最近の国際ワークショップでは、2015年12月にミシガン大学のV.リーバーマン教授を招聘して開催した、“Creating Global History from Southeast Asian Perspectives”と、2016年3月の“Globalization from East Asian Perspectives”を

挙げておきたい。前者は、東南アジアを中心にして、中・近世ユーラシアにおけるグローバルな関係と比較について幅広く探る試みで、リーバーマン教授の壮大な比較史をたたき台に、その論敵である海域史・地域研究のA.リード教授など

も招いて実施した。中国史・日本史はもちろん中央ユーラシア、南アジアやヨーロッパ史の専門家も集めて東南アジア史専門家との間で本格的な討議を行い、現在、英文論集の刊行準備を進めている。

後者は、前述の6大学国際共同研究の第二回目の、三日間で報告者30余名の大規模ワークショップである。共同研究全体の共通テーマは、“Global Nodes, Global Orders”であるが、大阪会議では、東アジア世界から見た「グローバル化」の歴史的展開と、それをもたらした諸要因および影響を、古代から現代にいたる長期の時間軸と、一国史的な national history の枠組を超える広域(region)の空間軸という二つの座標軸を組み合わせ、グローバル化を歴史研究として実証的に議論した。三日間の討議を通じて、空間軸に関しては、古代シルクロードの時代から中世・モンゴル帝国およびその後継諸帝国(明朝・大清帝国)の興亡の舞台となった、東南アジアの海域世界を含めた「東ユーラシア」(the Eastern Eurasia)という新たな地域概念の有効性が問われた。欧米の研究者からは、欧米中心史観を相対化するため、ヨーロッパを「西ユーラシア」(the Western Eurasia)の一部と位置付ける見解が提示され、ユーラシア大陸スケールでの比較と関係性の考察が不可欠であることが強調された。他方、時間軸に関しては、欧米中心の近代世界像(長期の19世紀)を見直す必要性、19世紀後半におけるアジア諸地域での現地人商人や小農の主体性にもとづいた経済開発の展開など、現代のアジア太平洋地域の経済成長(東アジアの奇跡)を見据えた新たな時代区分の可能性が議論された。

今回の大阪会議は、3年間で6回開催される予定の第2回目の会議であり、オクスフォード中心のコンソーシアムに、大阪大学が独自に構築してきたアジア太平洋地域の国際ネットワークであるアジア世界史学会(AAWH)のネットワークを重ねあわせ、重層的な議論が可能になった点は特筆に値する。文学研究科を中心とするグローバルヒストリー研究クラスターは、今後とも、アジア太平洋地域における新たな世界史、グローバルヒストリー研究のハブとしての役割を果たしていきたい。

(秋田 茂)

日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター

概要

国文学研究資料館が、2014年度から10カ年計画で行う大型プロジェクト「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築」は、『国書総目録』所載の約50万点の日本語の歴史的典籍のうち、約30万点の画像データベースを作成し、その画像データベースにかかわる国際共同研究ネットワークを構築するものである。本プロジェクトを遂行するために、20の拠点大学が選ばれたが、大阪大学もそのひとつに入っている。拠点としての大阪大学が行う主な事業は、A画像データベースの構築と、B国際共同ネットワーク構築における拠点主導共同研究であるが、歴史的典籍が主要な研究対象となるため、Aは図書館が、Bは文学研究科が中心となって進めることとなった。これに関わって本クラスターは2014年度に発足した。当初本クラスターでは、国文研に提供する「懷徳堂文庫」「適塾記念センター所蔵の理医学書」の他、大阪大学附属図書館・武田科学振興財団杏雨書屋・大阪府立中之島図書館所蔵の理医学書も視野に入れた画像データベースに対応する目録作成と、新たな大阪学芸史の構築という、大きな構想を有していたが、国文研の予算縮小を受け、簡易目録作成をもって一応の区切りとし、同年度にクラスターのもう一つの柱となった国際シンポジウム「日本研究の新地平 歴史的典籍画像の30万点 Web公開と国際共同研究」を展開させる方向に舵を切った。2015年度は、歴史的典籍画像を内外の研究者が利用するための必須ツールとしての、くずし字学習支援アプリの開発と、世界のくずし字教育の情報交換のための国際シンポジウムを開催した。

本クラスター名は略称を「国際古典籍学クラスター」と称する。

組織・体制

飯倉洋一	文学研究科 (2014年度・2015年度)
合山林太郎	コミュニケーションデザイン・センター (2014年度・2015年度)
湯浅邦弘	文学研究科 (2014年度)
村田路人	文学研究科 (2014年度)

廣川和花	適塾記念センター（2014 年度）
福田一也	懷徳堂研究センター（2014 年度）
池田光子	懷徳堂記念会（2014 年度）
仲沙織	RA 文学研究科博士後期課程（2014 年度・2015 年度）
岡島昭浩	文学研究科（2015 年度）
矢田勉	文学研究科（2015 年度）
橋本雄太	特任研究員 京都大学文学研究科博士後期課程（2015 年度）
有澤知世	RA 日本学術振興会特別研究員（PD） 文学研究科博士後期課程（2015 年度）
久田行雄	RA 文学研究科博士後期課程（2015 年度）
ダニエル・小林ベター	RA 文学研究科博士後期課程（2015 年度）
河野光将	RA 文学研究科博士後期課程（2015 年度）

活動状況

2014 年度は、国文学研究資料館画像データベース作成に供する目録を作成することを目標の一つとした。すなわち懷徳堂文庫のうち、慶応四年以前成立の日本人著作、そして適塾記念会所蔵の慶応四年以前成立の日本人著作の目録作成を行った。また画像データベースを利用した懷徳堂・適塾研究の可能性の模索のためのシンポジウムを開催した。シンポジウムは国文学研究資料館古典籍共同事業センターとの共同主催で、2015 年 2 月 18 日、大阪大学豊中キャンパスにおいて、行われ、オークランド大学のエレン・ナカムラ氏（日本近世医学史）と、淡江大学の田世民氏（日本近世思想史）および国文学研究資料館古典籍共同事業センター副センター長山本和明氏に講演を依頼した。会場がほぼ満員となる盛況であり、意義深い議論が行われた。なお、3 月 23 日に日本漢文学プロジェクト（国文学研究資料館歴史的典籍 NW 事業公募研究）公開シンポジウム「日本漢文学総合討論」の開催を同プロジェクトチームとともに主催した。同じく 3 月には、適塾関係画像データベース化リスト、懷徳堂関係画像データベース化リストと国際シンポジウムの概要を掲載した報告書「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築クラスター成果報告書（2014 年度）」を刊行した。

2015 年度は、科研挑戦的萌芽研究「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」（代表者飯倉洋一）と連携して、クラスター事業を進めた。日本の歴史的典籍の画像データベースが飛躍的に整備されていく中で、海外の日本研究者や理系の研究者が、画像データベースを有効に活用するために、古典籍の解読に欠かせなくずし字学習を行うためのプログラムの開発を企図した。月 1 回の打ち合わせを行い、くずし字学習支援のための、適切な解説と、変体仮名・くずし字の収集、および学習プログラムさらには、くずし字学習コミュニティの創生のための「つながる機能」について検討を重ね、β 版によるテスターアンケートを経て、2016 年 2 月 18 日にスマホ用無料アプリ（愛称“KuLA”）として iOS 版とアンドロイド版をリリースした。3 月末までに、海外を含め、1 万人以上がダウンロードし、アプリ使用者の評価は非常に高い。

また日本の歴史的典籍を研究し、教育の素材として使っている研究者を、イギリス・ドイツ・フランス・アメリカ・韓国・タイ・ニュージーランドから招き、その教育実践について報告していただく国際シンポジウム「読みたい！日本の古典籍—歴史的典籍の画像データベース構築とくずし字教育の現状と展望」を、2016 年 2 月 17 日に国文学研究資料館・前出科研との共催にて大阪大学で開催し、125 名の参加を得た。シンポジウムの内容は、以下の通り。

- 1 山本和明（国文学研究資料館古典籍共同研究事業センター）／日本古典籍のデジタル化における国文学研究資料館の戦略の現在
- 2 中西一郎（京都大学）／古地震研究と古文書・古記録の解読
- 3 矢田勉（大阪大学）／変体仮名の文字コード標準化
- 4 橋本雄太（京都大学・院）／くずし字解読学習支援アプリの設計と実装
- 5 金時徳（ソウル大学）／くずし字・漢文草書の判読を兼ねるプログラムの必要性
- 6 ユーディット・アロカイ（ハイデルベルク大学）／ドイツにおける日本古典文学研究—新しい研究者の世代を育てるための前提条件—

- 7 ラウラ・モレッティ（ケンブリッジ大学）／ケンブリッジ大学に於ける総合的な和本リテラシー教育
- 8 トッド・グラボーン・パイアロック知子（UCLA 図書館）／デジタル・ヒューマニティーズと図書館の役割
- 9 総合討論

翌 18 日には発表者と、海外からのゲストを交えて、シンポジウムをふまえたワークショップを行い、活発な意見交換が出来た。

その他、日本漢文学プロジェクト（国文学研究資料館歴史的典籍 NW 事業公募研究）の国際ワークショップ「幕末漢詩文の”かたち”」（2015 年 4 月 20 日）、徳田武明治大学名誉教授特別講演会（2016 年 1 月 22 日）を同プロジェクトチームと共催した。

（飯倉 洋一）

比較デザイン学クラスター

比較デザイン学クラスターでは、デザインに関するさまざまな概念や歴史や実践について、国や文化を超えて比較研究を行っている。それまでの関連研究を踏まえ、比較デザイン学研究を、アジアを中心に世界に広げる機会にもなるようにと考え、関連学会や研究会の協力を得て、2015 年 10 月 3～4 日に、大阪大学会館で第 1 回アジア・デザイン史論国際会議を開催した。テーマは「Design Education before/after the Bauhaus」で、「バウハウス以前のデザイン教育」「バウハウス時代のデザイン教育」「バウハウス以後のデザイン教育」の 3 つのセッションに分けて開催した。

第 1 セッション「バウハウス以前のデザイン教育」では、「1900 年以前のオーストリア芸術産業美術館と工芸学校」「明治期の美術から工業図案に至る日本のデザイン教育の先駆者たち」「19 世紀イギリスの刺繍—家庭裁縫から近代刺繍まで」「19—20 世紀スウェーデンの建築教育」「フランク・ロイド・ライトの教育的影響」「バウハウス以前のヘルツェル・サークル—シュトゥットガルト美術アカデミーの状況とバウハウスにもたらされた概念」の研究発表が行われた。

第 2 セッション「バウハウス時代のデザイン教育」では、「こどもたちのデザイン教育：リチャードソンのパターン・メイキングの意味」「ハルネス・マイヤー時代のバウハウスの建築教育におけるラントシャフトの概念」「山崎覚太郎：その訪欧と東京美術学校での漆芸教育への影響」の研究発表が行われた。

第 3 セッション「バウハウス以後のデザイン教育」では、「構成と造形の教育：バウハウスと桑沢デザインスクールの形成」「日本におけるこどものデザイン教育の発展」の研究発表が行われた。

これらの研究発表の内容は *The First Asian Conference of Design History and Theory—Design Education before/after the Bauhaus* として刊行された。また、その電子版 (<http://www.acdht.com/journal.html>) もつくられ、今後の関連研究の世界的な発表の場となる。このアジア・デザイン史論国際会議は、2 年に 1 度、東西交代で毎年開催され、2017 年には関東（東京）で、2019 年度には再び関西で開催される。

（藤田 治彦）

アーツ&リサーチ

概要

クラスター「アーツ&リサーチ」は、文化庁による「大学を活用した文化芸術推進事業」補助金による「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭」と不可分な関係にあり、同芸術祭の諸事業を研究科内で補強、補完するものとして機能してきた。したがって、そ

の活動についても芸術祭の活動と切り離して記述することは困難であり、ここでは両者の成果をまとめて報告する。

上記芸術祭は、芸術系教員を中心とし、近隣地域の諸芸術機関との連携を基に、主として社会人を対象にしたアートマネジメント人材の育成を行うものである。文学研究科の教員の他に、コミュニケーションデザイン・センター、国際公共政策研究科、学術総合博物館などの教員、スタッフがこれに加わった。本事業は3年計画であったが、本報告書の対象である2014年度・2015年度はその2、3年目にあたる。初年度（2013年度）は準備期間と位置づけ、その後の2年間で本格的な芸術祭を展開し、その仕上げを行った。特に2015年度においては、本事業を学内的には大阪大学エクステンション講座として位置づけることになった。

組織・体制

事業は前記のとおり、受講生を中心として進められたが、下記の事業担当者が主体的に関わった。また、各連携機関からアドバイザーに参画していただき、年2回の協議会において意見を求め、その他にも適宜アドバイスをいただいた。

クラスター構成員名	所属・専門領域
事業担当者	
田中均	大阪大学大学院文学研究科／美学
富田大介	大阪大学大学院国際公共政策研究科／美学・舞踊論
蓮行	大阪大学大学院 CSCD／演劇
木ノ下智恵子	大阪大学大学院 CSCD／アート・プロデュース
橋爪節也	大阪大学総合学術博物館／日本美術史
伊東信宏	大阪大学大学院文学研究科／音楽学
永田靖	大阪大学大学院文学研究科／演劇学
渡辺浩司	大阪大学大学院文学研究科／文芸学
古後奈緒子	大阪大学大学院文学研究科／アートメディア
若月万平	シニアフェロー
高安美帆	シニアフェロー
山崎達哉	芸術祭事務局
連携機関アドバイザー	
松田正弘	能勢町立浄るりシアター
尾西教彰	兵庫県立青少年創造劇場尼崎ピッコロシアター
古矢直樹	吹田市文化振興事業団吹田メイシアター
菅谷富夫	大阪新美術館建設準備室
谷本裕	ザ・フェニックスホール
並木誠士	京都工芸繊維大学

活動内容

具体的には年度ごとに社会人や学生などから受講生を募り、その受講生と教員が一緒になって、芸術祭の企画運営を行い、そのような経験を通じて人材育成をはかる、ということになる。2014年度には38名、2015年度には21名の受講者があり、年度の終わりには、所定の条件を満たした受講者に修了証が手渡される（前述のとおり、2015年度は大阪大学エクステンション講座として有料で開講されたので両年度の受講者数は単純には比較できない）。芸術祭の内容は、下記のような事業に分かれて活動を行った。

2014 年度

- 1) フェスティバルの企画運営と実際
- 2) 市民参加型演劇とアウトリーチ
- 3) AIR アーティスト・イン・レジデンス
- 4) 国際ワークショップ—芸術と公共性
- 5) レクチャー・コンサートの企画運営
- 6) 美術と絵画資料の展覧会企画と運営
- 7) サイトスペシフィック・アートと都市魅力創造
- 8) 伝統芸術の現代化

2015 年度

- 1) フェスティバルの理念と実際
- 2) 市民参加型演劇とアウトリーチ
- 3) 国際イベントの運営：芸術と共生
- 4) AIR アーティスト・イン・レジデンス*
- 5) 音／身体／メディアをめぐるワークショップ
- 6) 都市魅力創造と芸術祭
- 7) 伝統芸術の現代化*
- 8) ドキュメンテーション／アーカイヴ

これらの事業は、芸術祭という理念に関わる基礎的なものととどまらず、演劇や音楽、伝統芸能、現代アート、美術史など多様なジャンルにまたがり、作業内容も企画だけにとどまらず、その実際の交渉や運営、記録など様々な内容を備えている。とりわけ、最終年度においてはそれまでに育成してきた人材にさらに高度かつ総合的な（ジェネラリストとして完成されるための）教育機会として、受講生企画の事業（上記事業のうち*のついたもの）を実施し、また2年間の実施の過程と成果をアーカイヴする「ドキュメンテーション/アーカイヴ」を実施することで、「ジェネラリストとしての専門家」を育成した。さらに大学主催の芸術祭である利点を生かし、芸術と大学における人文学的知との相互接触を通じて、「リサーチとしての芸術祭（Festival as Research）」という新しいタイプの芸術祭を創出することを目指した。

クラスター「アーツ&リサーチ」は、上記活動の様々な面を補完したが、とりわけ年度末の報告書作成に関して大きな役割を果たした。2013 年度・2014 年度の活動に関しては B5 版全 100 頁の冊子体報告書を、また 2015 年度に関しては A4 版 8 ページの見開きパンフレットを発行し、関係各機関に配布した。

なお、この事業は、2016 年度の大阪大学の社会連携的・高度専門人育成講座に引き継がれ、大阪大学学術博物館を主体としてさらに展開している。

（伊東 信宏）

「教育ゆめ基金」は、文学部創立 60 周年の 2008 年（平成 20 年）に文学部・文学研究科の教育活動の支援のために創設された。この基金は主に人文学教育の国際化、学生の海外留学支援、留学生の支援、優秀な学生への奨学金等、もっぱら優秀な人材を育成するための教育助成を目的としている。

本基金を設置した 2008 年は、ヨーロッパで大規模に展開されているエラスムス・ムンドゥス・マスタープログラム（「ユーロカルチャー」）に域外協定校として参加した最初の年でもあった。前年度からはグローバル COE プログラムが始まるなど、日本の大学にもグローバル化の波が打ち寄せてきた時期だった。エラスムス・ムンドゥス・マスタープログラムによって受け入れる留学生の授業料分の奨学金を賄う必要性が本基金創設の直接的なきっかけだった。

当初は文学部・文学研究科同窓会の協力を得て、同窓会ニューズレター送付の際に「教育ゆめ基金」の案内を同封して寄付を募ることとなり、初年度に 66 件のご寄付をいただいた。ほとんどすべてが同窓生や教職員個人の寄付であるが、気の向くときに繰り返し寄付していただきたいとの願いも徐々に定着してきた。2013 年（平成 25 年）からは全学の「未来基金」（2009 年創設）と窓口統合を実施し、卒業生・修了生のほとんど全員に案内を送付するに至り、寄付件数も飛躍的に増え、しかも年々増加している。

当初は国際的な教育プログラムを軌道に乗せるための使用が中心だったが、基金が安定したことに伴い、文学部学生の海外留学支援制度、大学院生の調査補助、障がいを持つ学生の支援など、学生たちの修学支援に幅広く活用できるようになり、教育の活性化に大いに寄与している。

年度	収入額	支出額	残額	備考
2008 年度	2,187,900 (66 件)	0	2,187,900	本部管理等経費 1% (平成 24 年度まで同じ)
2009 年度	297,000 (9 件)	288,000	2,196,900	支出：留学生奨学金 288,000
2010 年度	1,004,850 (46 件)	300,264	2,901,486	支出：留学生奨学金 144,000 留学生宿舍費補助 90,000 留学生用インターネット補助 66,264
2011 年度	514,800 (24 件)	351,180	3,065,106	支出：留学生奨学金 288,000 留学生用インターネット補助 63,180
2012 年度	834,570 (35 件)	64,842	3,834,834	支出：留学生用インターネット補助 64,842
2013 年度	1,829,700 (53 件)	480,000	4,281,084	本年度より大阪大学未来基金と窓口統合（本部管理等経費 5%，以下同じ） 支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000
2014 年度	1,377,975 (84 件)	560,000	6,002,509	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 360,000 調査研究助成 200,000
2015 年度	2,644,800 (111 件)	782,565	7,864,744	支出：文学部海外留学支援制度奨学金 480,000 大学院生海外調査等助成 278,565 障がいのある学生のための支援補助 24,000

(和田 章男)

1. 懷徳堂研究センターの目的と意義

2009年5月、旧「懷徳堂センター」が改組され、新たに「懷徳堂研究センター」が発足した。

その目的を、センター規定はこう明記する。「懷徳堂研究センターは、文学研究科の教育研究理念に沿って、懷徳堂に関わる調査・研究・広報の拠点としての役割を果たし、これを通じて本研究科の発展に寄与することを目的とする」と。

その目的を達成するために、以下のような業務を行うこととした。

- (1) 懷徳堂に関わる調査・研究、資料の収集・作成（デジタルコンテンツを含む）
- (2) 『懷徳堂研究』（年一回定期）、パンフレット、ニューズレター（不定期）等の広報媒体の編集・刊行
- (3) 懷徳堂研究の総合サイト「WEB 懷徳堂 (<http://kaitokudo.jp/>)」の管理運営
- (4) 学内外における懷徳堂資料の展示、講演会などの開催
- (5) 懷徳堂記念会の事業に関わる資料調査等の協力
- (6) 本学附属図書館および総合学術博物館の業務に関わる懷徳堂関係資料の調査等の協力

このうち、(1) の調査・研究およびデジタルコンテンツの制作は、本センターの基幹事業であり、当該期間中にも大きな活動成果を上げている（詳細は下記の2参照）。また(2)の『懷徳堂研究』は、旧来のセンターが刊行してきた『懷徳堂センター報』を継承しつつ、装いを新たに創刊することになったものである。『懷徳堂センター報』は、センターの活動報告と論考で構成されており、論考はいずれも学術的に高い価値を持つものであったが、「センター報」という名称が、広報誌や内部雑誌ではないのかという印象をも与えてきた。そこで、『懷徳堂研究』は「研究」を全面に押しだし、全国で唯一、懷徳堂の研究を専門に取り扱う学術雑誌として創刊されたのである。

2. デジタルコンテンツの制作

センターの活動の特徴づけるものの一つにデジタルコンテンツの制作がある。2014年度～2015年度にかけては、次のようなコンテンツを制作し、懷徳堂研究の総合サイト「WEB 懷徳堂(<http://kaitokudo.jp/>)」に公開した。

・2015年2月：デジタルコンテンツ「論語聞書」……懷徳堂初代学者の三宅石庵や、五井蘭洲の父の五井持軒の『論語』講義全六冊をデジタルブックとして公開するもの。江戸時代の学者たちがどのように講義をしていたのか、その雰囲気伝わってくるような資料である。なお、本コンテンツは、日本学術振興会科学研究費基盤研究B「懷徳堂の総合的研究」（代表者：島根大学竹田健二教授）による研究成果の一部でもある。

・2015年11月：デジタルコンテンツ「懷徳堂考」下巻……西村天因による懷徳堂研究の最も基礎的な文献『懷徳堂考』をデジタルブックとして公開するもの。2014年に公開した上巻とあわせ、これにより、『懷徳堂考』上下巻をすべて閲覧できるほか、目次からのジャンプ、誌面の拡大、任意の語句による検索も可能となった。

・2016年3月：デジタルコンテンツ「中井終子日記」……懷徳堂歴代学主の子孫にあたる中井終子の日記と写真。終子は兄の木菟麻呂とともに、梅花学園の教員として女子教育に尽力した。梅花女子大学の協力を得て、梅花学園資料室所蔵の日記と写真をデジタル化した。これらの資料は、明治・大正期の情景を呼び起こし、懷徳堂と梅花学園の歴史の一端を解明する。

・2016年3月：デジタルコンテンツ「懷徳堂文庫」……公益財団法人図書館振興財団の平成27年度振興助成事業により、懷徳堂文庫の一部資料のデジタル画像化を実施し、新しくデータベースとして公開したもの。検索できるのは、懷徳堂文庫の根幹を担う、江戸時代の懷徳堂を伝える講義録、教授陣の直筆資料、稿本、草稿類などを中心とした資料。検索

対象は 3,760 点 19,280 冊。うちデジタル画像公開は 123 点 423 冊。

3. 諸活動

(1) 刊行物の発刊

2014 年度：『懷徳堂研究』第 6 号の刊行。

2015 年度：『懷徳堂研究』第 7 号の刊行。

なお、『懷徳堂研究』とニューズレターのバックナンバー（刊行後 1 年を経過したもの）は、懷徳堂研究センターHP から PDF ファイルとしてダウンロードできるように設定している。

(2) ホームページの更新……旧「懷徳堂センター」時代から引き継がれていたホームページを一新した。センターの諸活動を分かりやすく紹介するほか、懷徳堂研究関係資料を公開し、またセンター刊行物のバックナンバーを PDF ファイルで提供するなど、大幅なりニューアルを完成し、逐次更新している (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/kaitoku-c/>)。

(3) 大阪大学中之島センターにおけるレプリカ展示……懷徳堂文庫の貴重資料である入徳門聯、天図などのレプリカを、中之島センター1 階ロビーにて常設展示している。

4. 運営上の課題

2009 年 5 月に懷徳堂研究センターが発足してから、センター実務は、センター長、研究員、職員が担当することとなったが、センター長・研究員は、いずれも文学研究科教員が兼務し、職員も非常勤であることから、上記のような膨大な業務を専任で担当する人員がいないという大きな問題を抱えている。

センターの活動は、2011 年度制作のデジタルコンテンツ『画本大阪新繁昌詩』が、2012 年 6 月 7 日付け読売新聞に取り上げられ、また、2013 年には「中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会」で、湯浅邦弘（センター長）「書簡と扇のデジタルアーカイブ」が優秀学術論文賞を受賞するなど、高い学外評価を受けている。また、2013 年 10 月には韓国釜山大学の金声振学長が懷徳堂研究センターを訪問、同年 11 月には、韓国江南高等学校より 10 名が、「商業」を考える一環として懷徳堂を見学するなど、近年、国内だけでなく、海外においても懷徳堂への関心が高まりをみせている。にもかかわらず、センター発足以来、予算は毎年減少しており、2014 年度以降は定期刊行物である「ニューズレター」の発刊を見送らざるをえないなど、諸活動の維持に課題を残している。

さらに、懷徳堂文庫資料は、現在、大阪大学附属図書館に収蔵されており、その調査・研究に文学研究科は多大な貢献をしてきている。ただ本来、図書館が担うべき懷徳堂文庫の資料整理、複写・転載願いに対する審査業務などが、ほとんど懷徳堂研究センターに委託されている。これは、図書館に、貴重資料を管理運営する組織やスタッフが存在しないことによるが、膨大な資料を抱えながら、学内に専任スタッフがいないことは、資料サービスという対外的観点からも大きな問題であり、改善の必要がある。

（湯浅 邦弘）

活動の概要とその特色

2014年度・2015年度の専任スタッフは中久保辰夫助教の1名である。2014年度・2015年度では、和田章男前文学研究科長、2016年度以降は金水敏文学研究科長が室長となり、兼任として文学研究科の福永伸哉教授、高橋照彦教授の2名が業務を担った。

大阪大学構内には多くの遺跡が存在している。豊中キャンパスはその全域が待兼山遺跡として国の遺跡台帳に登録されており、2009年度には吹田キャンパスにおいて遺物の出土があり、あらたに山田丘遺跡として遺跡台帳に登録されることになった。また、大阪大学中之島センターでは、江戸時代の久留米藩蔵屋敷の発掘調査を実施した。こうした遺跡や遺跡から出土した遺物は、1950年に施行された文化財保護法の規定により国民共有の財産・文化財として保護・活用をはかる対象とされている。大阪大学では、文化財保護法の規定に基づき、キャンパス内の遺跡の保全と建物計画などの調整を行うために、全学委員会として埋蔵文化財調査委員会を設置しており、その委員会の指導の下、埋蔵文化財調査室が構内遺跡の調査にあたっている。

2014年度・2015年度は、吹田・豊中キャンパスを中心に建物の改修および耐震補強、新設工事が著しく増加し、その対応として、発掘調査、工事着手前の試掘および立会調査は以下に報告した件数を実施している。また、調査で発見された出土品については、洗浄、接合、実測等の整理事業をすすめ、その成果の一部を発掘調査報告書である『待兼山遺跡』Ⅴとして刊行した。さらに大阪大学総合学術博物館修学館3階にて公開している出土品の解説、大阪大学21世紀懐徳堂が主催するアウトリーチ活動にも力を注ぎ、精力的な活動を実施している。

現在の組織

教授 3(兼任3) 助教 1

教授：金水 敏(兼任)、福永 伸哉(兼任)、高橋 照彦(兼任)

助教：中久保辰夫

組織の活動

1. 発掘調査

2014・2015年度は、以下の埋蔵文化財調査を実施した。

【2014年度】

・吹田地区

4月2日	情報系基礎研究・福利厚生複合棟新営にともなう立会調査
5月14・19・28日	(吹田) ライフライン再生(共同溝等)に係る立会調査(1)
6月2日	(吹田) オンコロジーセンター棟新営工事に係る立会調査
8月19日	(吹田) 接合科学研究所東駐車場防火水槽設置に係る立会調査
10月3日	(吹田) 吹田 U5・工学 A12 棟(1)等改修その他機械設備工事(1)
10月31日	(吹田) ライフライン再生(共同溝等)に係る立会調査(2)
11月5日	(吹田) 吹田 U5・工学 A12 棟(1)等改修その他機械設備工事(2)
12月15日	(吹田) 吹田 U5・工学 A12 棟(1)等改修その他機械設備工事(3)
12月2日	(吹田) S1 棟改修工事に係る立会調査
3月13日	(吹田) 接合科学研究所 排水設備改修に係る立会調査

・豊中地区

6月16・17日	(豊中) 太陽光発電設備工事に係る立会調査
8月5日	文学部資料収蔵庫改修に係る立会調査
8月18日	(豊中) ライフライン再生(共同溝)工事に係る立会調査(1)
8月23日	(豊中) 理学部E棟耐震改修関連電気工事に係る立会調査(1)
8月26日	健康体育研究棟シャワー室改修に係る立会調査
10月15日～11月7日	修学館東電気室等取り壊し工事に係る発掘調査
10月17日	(豊中) ライフライン再生(共同溝)工事に係る立会調査(2)
11月3日	(豊中) 刀根山寮改修に係る立会調査
1月30日	(豊中) 阪大宿舍解体工事に係る立会調査
2月18日	(豊中) 豊中浪高庭園外灯改修工事に係る立会調査
2月18日	修学館東電気室等取り壊し工事に係る立会調査
3月10日	(豊中) 理学部E棟耐震改修関連電気工事に係る立会調査(2)
3月19日	(豊中) 排水枡改修その他工事に係る立会調査
3月24日	(豊中) 柴原口外灯設置工事に係る立会調査

【2015年度】

・吹田地区

6月29日	(吹田) 核物理研RI棟周辺都市ガス管改修工事に係る立会調査
8月29日	(吹田) 歯病立体駐車場新築工事に係る立会調査
9月30日	(吹田) 世界適塾拠点施設周辺整備に係る立会調査
10月13日	(吹田) 保健学科寄附建物新築に係る立会調査
1月20日	(吹田) 工学ガスボンベ庫新営工事に係る立会調査
3月22日	(吹田) 福利会館改築に係る立会調査

・豊中地区

8月18日～29日	(豊中) 石橋宿舍跡地整備工事に係る試掘調査(1)
8月21日	(豊中) グラウンド南雨水排水管改修工事に係る立会調査
9月7日・25日	(豊中) 石橋宿舍跡地整備工事に係る試掘調査(2)
9月30日	(豊中) 法経本館北側埋設給水配管漏水補修工事に係る立会調査(1)
10月4日・11日	(豊中) 法経本館北側埋設給水配管漏水補修工事に係る立会調査(2)
10月26日	(豊中) 石橋宿舍跡地整備工事に係る試掘調査(3)
11月10日・11日	(豊中) 石橋宿舍跡地整備工事に係る試掘調査(4)
1月5日	(豊中) リノベーションセンター取り壊しに伴う支障移設工事に係る立会調査(1)
2月24日	(豊中) リノベーションセンター取り壊しに伴う支障移設工事に係る立会調査(2)
3月14日	RI総合センター分館RI排水管漏水補修工事に係る立会調査
3月22日	(豊中) 中和装置室系統給水管漏水補修工事に係る立会調査

・箕面地区その他

4月15日・23日	(豊中東) 職員宿舍屋外給水管改修工事に係る立会調査(1)
2月9日	(箕面) 箕面学生寮男子共用棟改修機械設備工事に係る立会調査
1月15日	(豊中東) 職員宿舍屋外給水管改修工事に係る立会調査(2)

2. 広報・埋蔵文化財の公開

【2014 年度】

国立民族学博物館 2014 年度博物館学集中コース研修の案内（中久保）

大阪大学 21 世紀懐徳堂 i-spot 講座 講師（中久保）

大阪大学総合学術博物館・豊中市教育委員会 夏の小学生科学体験教室 2014 講師（中久保）

埋蔵文化財調査室ニュースレター第 9 号の発行

『待兼山遺跡 待兼山西麓における墓域の調査』刊行

【2015 年度】

2015 年度 大阪・京都文化講座（前期） 講師（中久保）

国立民族学博物館 2015 年度博物館学集中コースの案内（中久保）

第 47 回大阪大学公開講座 講師（中久保）

今後の課題

大阪大学構内における開発と埋蔵文化財の保護の両立をめざし、施設部をはじめとする関係部局と密接に連絡をとり、円滑な運営を目指す。しかしながら、開発件数の増加により 2014 年度・2015 年度におこなわれた埋蔵文化財調査は 32 件を数え、そのすべての調査や事前の調整業務、調査後の遺物整理や報告書刊行を専任教員 1 名で対応することには困難が生じつつある。調査量の増大に効率良く対応できる体制をつくることが急務となっている。

待兼山遺跡は近年の調査成果により、これまで知られていた弥生時代から古墳時代のみならず、古代、中世、近世各時代の遺構・遺物の様相が判明した。こうした成果を受けて豊中市教育委員会と協議を行い、2015 年には遺跡台帳に登録されている待兼山遺跡の時代が、弥生・古墳・奈良・中世・近世へ拡大変更されたとの通知が、大阪府教育委員会よりあった。このように重要性が高まりつつある待兼山遺跡ではあるが、発見された膨大な出土品の歴史的意義については、いまだ不明な点が多い。今後の調査や整理事業では、これらを学術的に解明したうえで、地域の歴史を復元することに努めたい。

吹田キャンパスに所在する山田丘遺跡に関しては、継続的な調査の実施により、旧地形および地層の堆積状況、そして大規模造成の範囲を把握しつつある。今後も調査を継続することにより、キャンパス内における埋蔵文化財包蔵の有無を確認し、将来的には開発行為に対し、柔軟な対応がはかることができるよう努めたい。

この数年、大阪大学埋蔵文化財調査室への市民講座などの依頼が、増加している。多くの関心に十分に應えるためにも、大阪大学 21 世紀懐徳堂や総合学術博物館をはじめ、近畿地域を中心とした文化財関係機関と密接に連携し、学校教育、市民講座の場を活用してアウトリーチ活動をさらに進めていく予定である。

（中久保 辰夫）

組織・体制

前身の性差別問題委員会を改組・改称し、2010年11月に設置。2011年4月より、本格的に活動を開始。性差別問題委員会同様、研究科長直属の委員会として組織されている。委員は、委員長1名（主として、セクシュアル・ハラスメントを担当）、副委員長1名（主として、アカデミック・ハラスメントおよびパワー・ハラスメントを担当）を除く全員が相談員を兼ね、学生・教職員からのセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメント問題にかかわる相談に当たる。

2014年度：委員会メンバー14名(女性6名、男性8名)。

2015年度：委員会メンバー13名(女性6名、男性7名)。

活動状況**2014 年度実績**

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 新入生と在学生のためのハラスメント防止対策説明会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学セクシュアル・ハラスメント相談室 専門相談員） 演題：「ちょっと知ってほしい、ハラスメントのこと」(4月)
3. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
4. 工学研究科新任者研修会にて、前委員長が「ハラスメント問題の基礎知識」を講演。(5月)
5. ハラスメント相談員研修会（全学）へ参加。(7月)
6. TA 研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10月)
7. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会 講師：牟田和恵さん（大阪大学大学院人間科学研究科教授）演題：「先生、その言動はセクハラです！」(1月)
8. パンフレット「ハラスメントはやめよう！！ やめよう・とめようハラスメント」改訂版(大型化・レイアウトの刷新・学外情報の訂正)を作成。(3月)
9. 年間相談・対処件数は0件

(出原 隆俊)

2015 年度実績

1. 学部・大学院新入生オリエンテーションで委員会活動について説明。パンフレット「やめよう・とめよう ハラスメント」を新入生に配布。(4月)
2. 文学部新入生のためのハラスメント防止対策説明会を開催。委員長が「ハラスメントに出会ったら」と題して講演。(4月)
3. 文学研究科新入生のためのハラスメント防止対策説明会を開催。講師：濱田綾さん（大阪大学ハラスメント相談室・専門相談員） 演題：「大学で起こるハラスメントと相談窓口について」(4月)
4. 各専修・専門分野・コースでのガイダンス時に、ハラスメントの起きない環境作りのための文書の読み上げを依頼。パンフレットを学生に配布。(4月)
5. ハラスメント相談員研修会（全学）へ参加。(7月)
6. キャンパス・セクシュアル・ハラスメント全国ネットワーク第21回全国集会（名古屋で開催）に、委員1名が参加。

(8 月)

7. TA 研修会において、ハラスメント問題についてのガイダンスを実施。(10 月)
8. 文学研究科・文学部ハラスメント防止に関する教職員研修会 講師：上原秀子さん（大阪大学ハラスメント相談室特任講師）演題：「ハラスメントのない大学を目指して～相談案件に見る教職員、学生の苦悩～」(1 月)
9. パンフレット「やめよう・とめようハラスメント」を作成。(3 月)
10. 年間相談・対処件数は 2 件。

(浅見 洋二)

第 2 部

各専門分野・コースにおける

教育・研究活動の概要

【凡 例】

- I．現在の組織については、教員は2016年4月1日、在學生は2016年5月1日を基準とし、この時点での教員および在學生の現員を示す。また修了生・卒業生については、2014年度(2015年3月修了・卒業)および2015年度(2016年3月修了・卒業)について記す。
- II．大学院生の研究業績、受賞等は、2014年度～2015年度に在籍した者が、2014年度～2015年度中に発表あるいは授与されたものについて記す。また2014年度～2015年度におこなわれた学位授与について、課程博士と論文博士にわけて記載する。
- III．教員の研究活動については、原則として2016年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員のものを示す。研究業績については2014年度～2015年度に発表されたものを記載する。2014年度～2015年度中に、本研究科大学院生であったものが本研究科教員になった場合には、その大学院生時代に発表した研究業績をあわせて記入する(この場合には大学院生の研究業績の欄にも同じ業績が示される)。なお受賞については2014年度～2015年度にかぎらず記載する。
- IV．教員による競争的外部資金の獲得については、原則として2016年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が代表者になっているもので、2014年度～2015年度の間に配分を受けたものを記す。
- V．教員による学会役員等の引き受け状況については、2016年4月1日現在各専門分野・コースに属している現員が、2014年度～2016年度の間に引き受け、あるいは遂行した任務に関して記す。

2-1 哲学 哲学史

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 2 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：上野 修、入江 幸男

准教授：舟場 保之

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	7	15	1	1	3	0	0

* うち留学生 1 名、社会人学生 2 名

** 哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	9	3	1	1
2015	7	4	0	0
計	16	7	1	1

* 哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1 年生対象の基礎セミナーを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP にアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフィシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講し、授業外での指導も行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 10, 11 号を刊行し、Web 上に公開す

る。/現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフュシカ』第 45, 46 号を刊行し、Web 上に公開する。/現代思想文化学専門分野との共催で、研究会 handai metaphysica の研究例会および特別講演会を行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

現代思想文化学専門分野との共同で、開局された HP 上の<ビデオ・メタフュシカ>から、さまざまな情報を発信する。/現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で哲学教育と国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 4 回開催した。目標は達成されたと考える。

2. 研究

現代思想文化学専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 10, 11 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、現代思想文化学専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフュシカ』第 45, 46 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。海外の研究者を招いた handai metaphysica 特別講演会は 2 回、また handai metaphysica 研究例会を 2 回開催した。スタッフが国際共同研究会で発表し、欧文論文を発表した。目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ビデオ・メタフュシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。現代思想文化学専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際連携を図った。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、博士論文・修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

外国および国内での学会発表、および欧文誌と和文誌による研究成果の国内外への発信という目標はほぼ達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成された。

3. 社会連携

前記の活動を踏まえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	1	0	1
2015	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

嘉目道人 「超越論的語用論の再検討——現代のフィヒテ主義は可能か——」 2015/3

主査：入江幸男 副査：大橋容一郎、須藤訓任、舟場保之

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	4(2)	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	7(5)
2015	0(0)	1(1)	5(5)	0(0)	0(0)	6(6)
計	4(2)	1(1)	8(8)	0(0)	0(0)	13(11)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	1	11	2	0	0	14
2015	0	4	11	0	0	15
計	1	15	14	0	0	30

2-3. 発表年度において在籍した大学院生による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

仲宗根勝仁「二次元意味論にもとづくチャーマーズのフレーゲ的意味論について」、『哲学の探求』第 41 号, 哲学若手研究者フォーラム, pp. 137-150, 2014/4, 査読無

〔博士後期〕

阿部倫子「『モナドロジー』における実体と世界の統一性—『形而上学叙説』との比較」、『ライブニッツ研究』第 3 号, 日本ライブニッツ協会, pp.91-109, 2014/11, 査読有

阿部倫子「ライプニッツ『モナドロジー』の現実世界：可能世界と何が違うのか」、『メタフュシカ』No.45, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.53-65, 2014/12, 査読有

大塚高弘「スピノザにおける権利と正統性について」、『メタフュシカ』第 45 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 67-81, 2014/12, 査読有

小竹陽介「スピノザ『知性改善論』における観念の観念と確実性について」、『待兼山論叢』第 48 号, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 17-31, 2014/12, 査読有

原田淳平「真理はいかにして多元的でありうるのかー真理の多元主義自体の多元性の考察ー」、『哲学の探求』第 41 号, 哲学若手研究者フォーラム発行, pp. 49-67, 2014/4, 査読無

嘉目道人「What is the Unlimited Communication Community? Transcendental Pragmatics as Contemporary Fichteanism」, Tom Rockmore/Daniel Breazeale (eds.), 『Fichte and Transcendental Philosophy』, Hampshire/New York: Palgrave Macmillan, pp. 273-292, 2014/12, 査読有

【2015 年度】

〔博士後期〕

阿部倫子「可能的なモナドは存在しない?ーライプニッツにおける現実世界」、『待兼山論叢』第 49 号, 大阪大学文学会, pp.17-32, 2016/3, 査読有

天野恵美理「バルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について——二章のヴァリエーションとの比較を通じて——」、『メタフュシカ』第 46 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.19-30, 2015/ 12, 査読有

早瀬勝明「司法の言語行為ー問題提起」、『メタフュシカ』第 46 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.45-57, 2015/12, 査読有

米田恵「アーレントの「世界市民主義」の限界について」、『第 2 回大阪哲学ゼミナール』, 大阪哲学ゼミナール事務局, pp. 33-40, 2016/3, 査読有

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

久保啓文「倫理学は価値・規範の認知について語るべきかーハーバーマスのディスクール倫理学に対する認知主義的倫理学からの批判ー」,応用哲学会第 5 回年次大会, 関西大学, 2014/5

下山惣太郎「出来事の意味はいかにして可能となるか——ルーマンのシステム論を通じて」,応用哲学会第 5 回年次大会, 関西大学, 2014/5

立花達也「スピノザ『エチカ』における二つの合一」,哲学若手研究者フォーラム, 早稲田奉仕園, 2014/7

Tachibana Tatsuya, "The Part-Whole Relation in Spinoza's Concept of the Individual" Laboratory of Thinking, Osaka University, 2015/3

立花達也「スピノザ『エチカ』における変化の問題」,日仏哲学会, 大阪大学, 2015/3

仲宗根勝仁「チャーマーズの二次元意味論における認知的可能性について」,個人研究発表, 応用哲学会, 関西大学高槻ミューズキャンパス, 2014/5

仲宗根勝仁「アブリオリな真理についての一考察」,個人研究発表, 科学基礎論学会, 慶應義塾大学三田キャンパス, 2014/6

Nakasone, Katsuhito, "Two-Dimensional Semantics and Direct Reference", Graduate Workshop *Language and World*, the Phlox research group, at the University of Hamburg, 2015/2

〔博士後期〕

阿部倫子「ライプニッツ『モナドロジー』における現実世界：概念的規定とモナド」, 関西哲学会第 67 大会, 関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス F 号館 2 階 204 号室, 2014/10

阿部倫子「ライプニッツ『モナドロジー』の現実世界：可能世界と何が違うのか」, handai metaphysica 第 18 回研究例

会, 大阪大学文法経済学部本館 4F 講義室 461, 2015/3

小田裕二郎「欲望と言葉の構造——ラカンにおける欲望のグラフ——」, 応用哲学会第 5 回年次大会, 関西大学, 2014/5

朱喜哲「語彙と規範—R.ブランドムの推論主義におけるネオプラグマティズムの一系譜—」, 個人研究発表, 哲学若手研究者フォーラム, 早稲田大学奉仕園, 2014/7

藤野幸彦「スピノザ『エチカ』におけるコナトゥスの定位——活動としてのコナトゥスと精神の現実的本質——」, 2014 年度哲学若手研究者フォーラム, 早稲田大学奉仕園, 2014/6

嘉目道人「発話の行為知と間主観性 一超越論的語用論における共同行為の問題一」, 2014 年度哲学若手研究者フォーラム, 早稲田大学奉仕園, 2014/7

【2015 年度】

〔博士前期〕

岡田凜「カントの実践哲学における道徳と幸福」, 第 14 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/1

立花達也, 樋口朋子「スピノザ『エチカ』における想像知の実践的機能の検討」, 第 13 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2015/6

立花達也「スピノザにおける身体の維持と再生成について」, 北海道大学哲学会, 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 3F・W309 室, 2015/7

Tachibana Tatsusya, "Spinoza on Distinction and Composition," Laboratory of Thinking, Osaka University, 2016/3

立花達也, 樋口朋子「スピノザ『エチカ』における想像知の実践的機能の検討」, 第 13 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2015/6

〔博士後期〕

阿部倫子「ライプニッツ『モノドロジー』の現実世界: 偶然的真理と主体の選択」, 日本哲学会第 74 回大会, 上智大学四ツ谷キャンパス 3 号館 534, 2015/5

天野恵美理「『物質と記憶』における知覚と生」, 日仏哲学会 2015 年秋期研究大会, 立教大学池袋キャンパス, 2015/ 9

天野恵美理「バルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について——二章のヴァリエーションとの比較を通じて——」, 第 19 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/3

朱喜哲, 仲宗根勝仁「ローティのネオ・プラグマティズムと現代英米圏の哲学の論点—表象主義・自然主義の観点から—」, 第 14 回哲学ワークショップ, 大阪大学文学部本館 2F 大会議室, 2016/1

仲宗根勝仁「認識の二次元主義の哲学的コミットメントの明示化」, 日本科学哲学会, 首都大学東京南大沢キャンパス 6 号館 6-401 教室, 2015/11

仲宗根勝仁, 朱喜哲「ローティのネオ・プラグマティズムと現代英米圏の哲学の論点—表象主義・自然主義の観点から—」, 第 14 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/1

仲宗根勝仁<文献紹介>フランク・ジャクソン著『形而上学から倫理学へ 概念分析の擁護』, 第 19 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/3

早瀬勝明「司法の言語行為—問題提起」, 第 19 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/3

藤野幸彦「スピノザ『エチカ』における様態概念の定位—産出の因果性に関する研究として—」, 日本哲学会第 74 回大会(於: 上智大学), 2015/5

三輪泰之<文献紹介>マルクス・ヴィラシェク著『実践理性 カントにおける行為論および道徳の根拠づけ』, 第 19 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/3

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

【翻訳】

多田雅彦（ジャン＝クレ・マルタン著）「様態とは何か——ドゥルーズの仕事におけるスピノザの特異性」、『メタフシカ』第45号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 175-184, 2014/12, 査読有

【文献紹介】

天野恵美理「フィリップ・ガロワ、ジェラルド・フォルジー編『ベルクソンと神経科学』」、『メタフシカ』第45号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 163-168, 2014/12, 査読有

早瀬勝明「ジョン・R・サール『社会世界の形成』」、『メタフシカ』第45号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 147-153, 2014/12, 査読有

【2015年度】

〔博士後期〕

【文献紹介】

仲宗根勝仁「フランク・ジャクソン著『形而上学から倫理学へ 概念分析の擁護』」、『メタフシカ』第46号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 93-100, 2015/12, 査読有

三輪泰之「マルクス・ヴィラシェク著『実践理性 カントにおける行為論および道徳の根拠づけ』」、『メタフシカ』第46号、大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 101-107, 2015/12, 査読有

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD : 0名 DC2 : 1名 DC1 : 0名 (計1名)

2015年度 PD : 0名 DC2 : 0名 DC1 : 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部 : 0名 大学院 : 1名 (計1名)

2015年度 学部 : 0名 大学院 : 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

重田謙 博士後期課程修了、長岡技術科学大学、特任准教授、2014/12

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 15名

2014年度 : 7名 2015年度 : 8名

＜内訳＞ 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 14名

*学部卒業者については現代思想文化学との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2014 年度：1 名 2015 年度：0 名

9. 刊行物

2014 年度 『メタフュシカ』第 45 号、*Philosophia OSAKA*, No. 10

2015 年度 『メタフュシカ』第 46 号、*Philosophia OSAKA*, No. 11

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

ウリヤ・ベニス＝シナスール氏講演会「〈概念の哲学〉の源泉」2014 年 6 月 6 日

於：大阪大学待兼山会館 2F 会議室

共同研究会「第 1 回大阪哲学ゼミナール」2015 年 3 月 17 日～20 日, 23 日

於：大阪大学文法経済学部本館

国際会議 The Conference on Transcendental Philosophy and Metaphysics 2015 年 4 月 22 日～24 日

於：大阪大学文法経済学部本館中庭会議室

共同研究会「第 2 回大阪哲学ゼミナール」2015 年 12 月 12 日～14 日

於：大阪大学文法経済学部本館

日本フィヒテ協会事務局 2015 年 4 月～

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 18 回 *handai metaphysica* 研究例会（2015 年 3 月 10 日、文法経済学部本館 4F 講義室 461）。

大久保歩（現代思想文化学博士後期課程）：ニーチェの正義概念の研究動向：欧文文献を中心に

早瀬勝明（哲学哲学史博士後期課程）：ジョン・R・サール『社会世界の形成』

阿部倫子（哲学哲学史博士後期課程）：ライプニッツ『モノドロジー』の現実世界：可能世界と何が違うのか

大塚高弘（哲学哲学史博士後期課程）：スピノザにおける権利と正統性について

参加者 14 名。

第 18 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2014 年 12 月 13 日、文法経済学部本館中庭会議室）。

発表者：Dr. Pratoom Angurarohita（タイ王国チュラロンコン大学講師）

タイトル：Theism and Buddhism: A Pragmatic Approach (有神論と仏教：プラグマティックなアプローチによる比較)

参加者 16 名。

第 19 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2015 年 3 月 24 日、文法経済学部本館 4F 講義室 461）。

発表者：Andreas Niederberger (Duisburg-Essen Universität)

タイトル：Braucht die kantische Rechtsphilosophie die Menschenwürde?

参加者 10 名。

第 1 回大阪哲学ゼミナール(Osaka Seminar für Philosophie)（2015 年 3 月 17 日・20 日, 23 日、文法経済学部本館 4F 講義室 461）

3 月 17 日（火）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(1)」

18 日（水）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(2)」

14:00-17:00 「カント実践哲学のポテンシャルティ 倫理学の見地から」

問題提起：田原彰太郎（早稲田大学文化構想学部非常勤講師）

19 日（木）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(3)」

14:00-17:00 「カント実践哲学のポテンシャルティ 政治哲学の見地から」

問題提起：隠岐理貴（早稲田大学政治経済学学術院助手）

20 日（金）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(4)」

14:00-17:00 「カント実践哲学のポテンシャルティ 法論の見地から」

問題提起：石田京子（慶應義塾大学文学部助教）

＊「新たな社会哲学の可能性」は、ニーダーベルガー教授による集团的コミットメントを主題としたレクチャーを中心に、17 日は、ヘーゲルおよびマルクス、18 日は、マーガレット・ギルバート、19 日は、ジョン・サール、20 日は、議論の展望をテーマ化。3 月 23 日（月）は午後より、入江幸男（哲学哲学史教授）、嘉目道人（哲学哲学史博士後期課程）の発表および討論会。参加者は、のべ 50 名。

第 11 回哲学ワークショップ（2014 年 6 月 28 日 13:00-17:00、文法経済学部本館 大会議室）

個人研究発表

1. 題目：「F・ニーチェ『曙光』における二つの道徳批判 — 学び直す、感じ直すために —」

発表者：谷山弘太（大学院博士後期課程）

2. 題目：「マクダウェルの認知主義のメカニズム — 「直観」をめぐる諸問題 —」

発表者：久保啓文（大学院博士前期課程）

パネルディスカッション「誕生をたたえて — メルロ＝ポンティとドゥルーズ」

発表者：川崎唯史（大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員 DC）、小倉拓也（日本学術振興会特別研究員 PD・明治大学）

参加者 20 名。

第 12 回哲学ワークショップ（2015 年 1 月 17 日 13:00-17:00、文法経済学部本館中庭会議室）

個人研究発表

1. 題目：「アポロ的なものとディオニュソス的なもの — トーマス・マン『ブuddenブロック家の人々』研究より —」

発表者：別府陽子（文学研究科・ドイツ文学専攻 単位取得退学）

2. 題目：「崩落と反覆 ジャック・デリダにおける忘却の二つの位相」

発表者：小川歩人（人間科学研究科・基礎人間学専攻 博士前期課程）

パネルディスカッション『『私』とは何か — スピノザとライブニッツを通して考える —』

発表者：小田裕二朗（文学研究科・哲学哲学史 博士後期課程）

阿部倫子（文学研究科・哲学哲学史 博士後期課程）

参加者 20 名。

Rolf Elberfeld 氏（ドイツ・ヒルデスハイム大学教授）講演会（京都産業大学世界問題研究所・日独文化研究所・大阪大学文学部哲学・思想文化学共催）

"Polyphone Subjekte und Nietzsches Begriff der Kulturen".（多声的主観とニーチェの文化概念）

日時：2015 年 3 月 17 日（火）13 時 30 分～17 時

場所：大阪大学（豊中キャンパス）待兼山会館会議室

参加者 13 名。

第 19 回 *handai metaphysica* 研究例会（2016 年 3 月 3 日、文法経済学部本館大会議室）。

須藤訓任（現代思想文化学教授）：「共通性」について：ニーチェの遠近法主義のいま一つの可能性

仲宗根勝仁（哲学哲学史博士後期課程）：フランク・ジャクソン『形而上学から倫理学へ 概念分析の擁護』

三輪泰之（哲学哲学史博士後期課程）：マルクス・ヴィラシェク『実践理性 カントにおける行為論および道徳の根拠づけ』

天野恵美理（哲学哲学史博士後期課程）：ベルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について一
章のヴァリエーションとの比較を通じて一

戸谷洋志（現代思想文化学博士後期課程）：ヨーナスにおける個別的命令と存在論的命令の区別について

早瀬勝明（哲学哲学史博士後期課程）：司法の言語行為一問題提起

参加者 18 名。

第 13 回哲学ワークショップ（2015 年 6 月 27 日 13:00－17:00、文法経済学部本館大会議室）

個人研究発表

1. 題目：「哲学的に見たサルトルの自由」

発表者：得能想平（人間科学研究科・基礎人間科学専攻博士後期課程）

2. 「哲学者と原子力？ ハイデガー、アンダーズ、ヨーナスの技術論」

発表者：戸谷洋志（文学研究科・現代思想文化学博士後期課程）

パネルディスカッション

「スピノザ『エチカ』の想像知における実践的機能の検討」

発表者：立花達也（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

樋口朋子（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

参加者 18 名。

第 14 回哲学ワークショップ（2016 年 1 月 30 日（土） 13:00～16:50、文法経済学部本館大会議室）

個人研究発表

1. 「アウシュヴィッツ以降の神話 — ハンス・ヨーナスを中心に」

発表者：戸谷洋志（文学研究科・現代思想文化学博士後期課程）

2. 「カントの実践哲学における道徳と幸福」

発表者：岡田凜（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

パネルディスカッション

「ローティのネオ・プラグマティズムと現代英米圏の哲学の論点 — 表象主義・自然主義の観点から」

発表者：朱喜哲（文学研究科・哲学哲学史博士後期課程）

仲宗根勝仁（文学研究科・哲学哲学史博士後期課程）

参加者 18 名。

国際会議 The Conference on Transcendental Philosophy and Metaphysics（2015 年 4 月 22 日～24 日、文法経済学部本館中庭会議室）

参加者は、のべ 96 名。

2015「世界哲学の日」記念イベント「哲学カフェ 2015」（2015 年 11 月 21 日、文法経済学部本館中庭会議室）

参加者 20 名。

第 2 回大阪哲学ゼミナール(Osaka Seminar für Philosophie)（2015 年 12 月 12 日・14 日、文法経済学部本館 4F 講義室 465）

12 月 12 日（土）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(1) ヘーゲルの場合」

14:00-17:00 「カント倫理学の射程」

問題提起：田原彰太郎（早稲田大学文化構想学部非常勤講師）

13 日（日）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(2) アーレントの場合」

14:00-17:00 「カント法論の射程」

問題提起：石田京子（慶應義塾大学文学部助教）

14 日（月）10:30-12:30 「新たな社会哲学の可能性(3) アーレントの場合」

14:00-17:00 「カント政治哲学の射程」

問題提起：金慧（千葉大学教育学部助教）

参加者はのべ 29 名。

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 上野 修 教授

1951 年生。1984 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士（大阪大学）。大阪大学助手、山口大学助教授、同教授を経て、2004 年 4 月から現職。専攻：哲学哲学史。

1-1. 論文

上野修 “Are the Real Distinction and the Substantial Union of Mind and Body in Descartes in Contradiction?” *Philosophia OSAKA*, No. 11, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, OSAKA UNIVERSITY, pp. 55-62, 2016/3

上野修 「アンリとスピノザ、その近さと遠さ」『ミシェル・アンリ研究』No. 5, 日本ミシェル・アンリ哲学会, pp. 1-13, 2015/5

上野修 “Ordinary and Usual Things, or Common Belief in Spinoza’s *Tractatus Theologico-Politicus*” *Philosophia OSAKA*, No. 10, Philosophy and History of Philosophy / Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, OSAKA UNIVERSITY, pp. 27-37, 2015/3

上野修 「思想の言葉 スピノザの文体」『思想』No. 1080, 岩波書店, pp. 3-6, 2014/4

上野修, 松田毅, 合田正人他(共著)「座談会 虚軸としてのスピノザ(1)近世と現代」『思想』No. 1080, 岩波書店, pp. 7-44, 2014/4

上野修, 栗原隆, 須藤訓任他(共著)「座談会 虚軸としてのスピノザ(2)ドイツ観念論とその後」『思想』No. 1080, 岩波書店, pp. 45-79, 2014/4

上野修他「虚軸としてのスピノザ、あるいは石像の宴」『思想』No. 1080, 岩波書店, pp. 45-79, 2014/4

上野修 「まなざしなき無限、記憶なき永遠—スピノザの奇妙な形而上学」『哲学』No. 65, 日本哲学会, pp. 56-72, 2014/4

1-2. 著書

上野修 『スピノザ『神学政治論』を読む』筑摩書房, 320p., 2014/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

上野修(共訳)『ライブニッツ著作集 第Ⅱ期 第1巻 哲学書簡』酒井潔・佐々木能章監修, 工作舎, pp. 76-89, pp. 128-129, 2015/5

1-4. 口頭発表

上野修 「ドゥルーズとデリダ・ワークショップ 動物／精神」ドゥルーズとデリダ:脱構築研究会×ドゥルーズ科研共同ワークショップ, ドゥルーズ科研・脱構築研究会, グランフロント大阪, 2015/12

上野修 「スピノザ『政治論』翻訳をめぐる—“jus”をめぐる若干込み入った事情」第 64 回スピノザ研究会, スピノザ協会, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/10

上野修 「『エチカ』の存在論的実在論」東北大学哲学文学部文学研究科集中講義講演会, 東北大学哲学文学部文学研究科, 東北大学, 2015/7

上野修 「実在論の極北、スピノザ」学習院大学哲学会, 学習院大学文学部哲学科, 学習院大学, 2015/6

上野修 “The Infinite without View, Eternity without Memory : Spinoza contrasted with Leibniz” Meeting of the Spinoza Society at

Rijnsburg, De Vereniging het Spinozahuis, Spinoza Hall at 'the Burgt', 2014/11

上野修 (パネリスト)「まなざしなき無限、記憶なき永遠—スピノザの奇妙な形而上学」日本哲学会第73回大会学協会シンポジウム:スピノザとライブニッツ, 日本哲学会, 北海道大学 札幌キャンパス, 2014/6『哲学』No. 65, pp. 56-72, 2014/4

上野修 (パネリスト)「身体の真理としての魂—アンリとスピノザ」ミシェル・アンリ哲学学会シンポジウム 2014:アンリとスピノザ, ミシェル・アンリ哲学学会, 成城大学, 2014/6『ミシェル・アンリ研究』No. 5, pp. 1-14, 2015/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:上野修

課題番号:25284006

研究題目:フランス・エピステモロジーの伏流としてのスピノザ

研究経費:2014 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2015 年度 直接経費 1,700,000 円 間接経費 510,000 円

研究の目的:

フランス・エピステモロジー(科学認識論)と呼ばれる哲学的系譜にはスピノザ主義の伏流が存在すると見られる。これを洗い出すことによって、(1)エピステモロジーの系譜の複雑に入り組んだ多層性を整理し、エピステモロジーの意義を理解するための一つの文脈を与える。(2)と同時に、エピステモロジーの暗黙の参照項として伏在するスピノザ哲学そのものの持つ可能性を明確にする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日仏哲学会・理事, 2013 年 8 月～現在に至る

日本ライブニッツ協会・理事, 2012 年 6 月～現在に至る

日本哲学会・評議員, 2011 年 6 月～現在に至る

関西哲学会・委員, 2007 年 10 月～現在に至る

スピノザ協会・運営委員, 1989 年 3 月～現在に至る

2. 入江 幸男 教授

1953 年生。1983 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士(大阪大学)。大阪大学助手、大阪樟蔭女子大学講師、同助教授、大阪大学助教授を経て、2003 年 10 月から現職。専攻:哲学哲学史。

2-1. 論文

入江幸男「問いと推論」(共著)『待兼山論叢』48, 大阪大学文学研究科, pp. 1-16, 2014/12

入江幸男「フィヒテのスピノザ批判」(共著)『思想』1080, 岩波書店, pp. 200-218, 2014/4

2-2. 著書

長澤邦彦, 入江幸男, 岡田勝明他(共編著)『フィヒテ知識学の全容』晃洋書房, pp. 178-194(執筆箇所「第 10 章 「論理学」講義」と「意識の事実」講義」, 178-194「後書」1ページ), 2014/12

Halla Kim, Steven Hoelzel, Irie, Yukio et al.,(共著),*Kant, Fichte, and the Legacy of Transcendental Idealism*, Lexington Books, pp. 169-190(Fichte ans Semantic Holism), 2014/6

Claudia Rammelt, Lars Klein, Irie, Yukio et al.,(共編),*Begegnungen in ergangenheit und Gegenwart*, Lit Verlag, pp. 365-375 (Question and Inference), 2014/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Irie, Yukio, “Thing in Itself and Being”, IX. Kongress der International J. G. Fichte Gesellschaft, International J. G. Fichte Gesellschaft, Universidad Autonoma de Madrid, Eddificio Humanidades, 2015/9

Irie, Yukio, (基調講演) “An Alternitive Transcendental Argument”, The Conference on Transcendental Philosophy and Metaphysics, Graduate School of Letteres Osaka University, 2015/4

Irie, Yukio, (基調講演) “Indeterminacy and creation in cultural comparizon”, HeKKSaGOn Presidents Meeting in Tohoku University, HeKKSaGOn Universities Consotium, Tohoku University, 2015/3

入江幸男 (基調講演) 『『攻殻機動隊』の自我論』「世界哲学の日」記念ワークショップと講演会, 大阪大学哲学思想文化学専修主催, 大阪大学文学部中庭会議室, 2014/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

入江幸男 第1回フィヒテ協会賞(研究奨励賞), フィヒテ協会, 1995/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:入江幸男

課題番号:25370018

研究題目:分析哲学とドイツ観念論の連携およびそのグローバルな意義

研究経費:2014 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 480,000 円

2015 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

研究の目的:

近年、分析哲学からのドイツ観念論の再評価が注目を集めている。中でもピッツバーグ大学のブランドムとマクダウェルによるカントとヘーゲルの再評価は、現代哲学にとって重要な意味を持っており、彼らがドイツ観念論を援用しながら主張している新しいタイプの意味の全体論と価値実在論を検証することが第一の課題である。第二の課題は、意味の全体論や価値の実在論は、言語の理解や価値認識にとどまらず、文化の理解全体にもかかわる主張であるので、この成果をグローバル化の時代における文化の理論の基礎理論へと展開することである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本哲学会・評議員, 2011 年 5 月～2015 年 5 月

関西哲学会・委員, 2004 年 11 月～現在に至る

日本フィヒテ協会・常任委員, 1999 年 11 月～現在に至る

3. 舟場 保之 准教授

1962 年生。1992 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学）。立命館大学嘱託講師を経て、2004 年 4 月から現職。専攻：ドイツの近代・現代哲学。

3-1. 論文

Funaba, Yasuyuki, “Politik als ausübende Rechtslehre und Moral als theoretische Rechtslehre” *Philosophia Osaka*, 11, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of

Letters, Osaka University, pp. 63-71, 2016/3

Funaba, Yasuyuki, “Lassen sich Menschenrechte mit der moralischen Selbstverpflichtung begründen?” *Philosophia Osaka*, 10, Philosophy and History of Philosophy/Studies on Modern Thought and Culture, Division of Studies on Cultural Forms, Graduate School of Letters, Osaka University, pp. 49-58, 2015/3

舟場保之 「後期フヒテ『道徳論の体系』における明瞭な認識と行為の関係について」『日本フヒテ研究』(日本フヒテ協会), 22, 晃洋書房, pp. 81-95, 2014/11

3-2. 著書

加藤泰史, 舟場保之(共編著)『カントと現代哲学』現代カント研究 13, 晃洋書房, 180p., pp. 84-99, 2015/11

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

舟場保之(共同研究報告書) 大阪哲学ゼミナール事務局(代表:舟場保之)(編)『第2回大阪哲学ゼミナール』, pp.1-40, 2016/3

舟場保之(共同研究報告書) 大阪哲学ゼミナール事務局(代表:舟場保之)(編)『第1回大阪哲学ゼミナール』, pp.1-140, 2015/10

舟場保之(海外学会報告)「国際会議「実践哲学における超越論的論証」」日本カント協会(編)『日本カント研究』16, 知泉書館, pp. 201-202, 2015/7

舟場保之, 御子柴善之(監訳)(翻訳、ハウケ・ブルンクホルスト、ヴォルフガング・R・ケーラー、マティアス・ルッツ=パッハマン編)『人権への権利 人権、民主主義そして国際政治』大阪大学出版会, 2015/1

3-4. 口頭発表

Funaba, Yasuyuki, “Politik als ausübende Rechtslehre und Moral als theoretische Rechtslehre”, 9. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium:Verhältnis von Moral, Recht und Politik im Anschluss an Kant, Universität Duisburg-Essen, 2015/9

Funaba, Yasuyuki, “Karatani Kojin und die Potenzialität der Kritik an der Moderne”, 16. Deutschsprachiger Japanologentag:Panel: Theorie in Japan / Japan in der Theorie, Ludwig-Maximilians-Universität München, 2015/8

Funaba, Yasuyuki, “On the Cognitive Theory of Morality by Jürgen Habermas”, The Conference on transcendental philosophy and metaphysics, 大阪大学(豊中キャンパス), 2015/4

Funaba, Yasuyuki, “Lassen sich Menschenrechte mit der moralischen Selbstverpflichtung begründen?”, 8. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium:Die Frage nach den Menschenrechten -- Recht und Moral --, 早稲田大学(戸山キャンパス), 2014/9

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

舟場保之 大阪大学共通教育賞(2005 年度前期), 大阪大学共通教育推進機構, 2005/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:舟場保之

課題番号:26370016

研究題目:法と道徳の関係に関するカント派および現代の議論の研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2015 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

K.-O. アーペルと J. ハーバーマースは、現代ドイツを代表する哲学者であり、ともにカント主義を標榜するが、ふたりは法と道徳の関係に関してまったく異なった見解をもっており、それがアクチュアルな問題に対して積極的になされる発言にも影響を及ぼしている。法と道徳の関係に関してふたりの見解が異なるのは、それぞれのカント解釈に相違が見られるからだ、これはカント自身の考えが揺れているせいでもあり、カントと同時代のカント派と言われる人たちの間でも、カントについての解釈は一樣ではなかった。本研究では、カント派の代表的な解釈を比較・検討することを通じて、この件に関するカントの議論をもっとも整合的に読む仕方を提示するとともに、それに基づき、現代の論争状況にとって実りのある見解を提示したい。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フイテテ協会・委員, 2013 年 3 月～現在に至る

日本カント協会・編集委員, 2012 年 6 月～現在に至る

日本カント協会・常任委員, 2012 年 4 月～現在に至る

日本カント協会・委員, 2007 年 4 月～現在に至る

2-2 現代思想文化学

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 2(兼任 1) 准教授 1(兼任) 講師 0 助教 1

教授：須藤 訓任、望月 太郎（海外拠点本部所属・兼任）

准教授：中村 征樹（全学教育推進機構所属・兼任）

助教：藤田公二郎

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	6	8	0	0	0	0	1

*うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

** 哲学・思想文化学専修として

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	9	1	0	0
2015	7	1	0	1
計	16	2	0	1

* 哲学・思想文化学専修として

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部と大学院でそれぞれ以下の具体的な目標を掲げた。【学部】1 年生対象の基礎セミナーを行う。/哲学の基本文献読解のための演習を学部生向けに開講し、基礎学力を養成する。/卒業論文を提出する予定の学生に対しては、研究発表を行わせ、論文を仕上げられるように指導する。【大学院】修士・博士論文作成のための十分な個別指導を行う。/研究テーマに関連した論文紹介などを含む研究発表を行わせ、その記録を HP にアップする。/博士後期課程の学生には、『メタフィシカ』およびその他の学術誌への投稿に向けた指導を行う。/学生の外国語力向上のために、英語による授業を複数開講し、授業外での指導も行う。また、院生および学生の哲学に対する関心をいっそう深化させるためのワークショップを開催する。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で、欧文学術誌として *Philosophia OSAKA* 第 10, 11 号を刊行し、Web 上に公開する。
/哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で、論文集『メタフシカ』第 45, 46 号を刊行し、Web 上に公開する。
/哲学哲学史専門分野との共催で、研究会 handai metaphysica の研究例会および特別講演会を行う。/スタッフが海外で研究発表を行う。

3. 社会連携

哲学哲学史専門分野との共同で、開局された HP 上の<ビデオ・メタフシカ>から、さまざまな情報を発信する。
/哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日に記念イベントを実施する。/海外で哲学教育と国際連携に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

各種論文作成のためのさまざまな個別指導を行い、卒業論文および修士論文の題目のみならず大学院生の研究発表の記録も HP 上に公開した。/学部生と大学院生が学問的な交流をもてるように、共通の演習および講義を行うとともに、大学院生の論文作成演習への学部生の参加を促した。/基礎セミナーを開講した。/英語による授業を複数開講し、学生たちの英語によるディスカッション能力と作文能力の向上を図った。/院生および学生の哲学に対する関心を深化させるための哲学ワークショップを 4 回開催した。目標は達成されたと考える。

2. 研究

哲学哲学史専門分野との共同で欧文学術誌 *Philosophia OSAKA* 第 10, 11 号を刊行し、海外主要大学および国内主要大学に送付した。また、哲学哲学史専門分野および臨床哲学専門分野との共同で論文集『メタフシカ』第 45, 46 号を発刊し、国内主要大学に送付した。これらはどちらも、Web 上での公開も行っている。海外の研究者を招いた handai metaphysica 特別講演会は 2 回、また handai metaphysica 研究例会を 2 回開催した。それ以外にも、海外の研究者による講演を共催した。関係者による国外刊行媒体での論文発表も行われた。目標はおおむね達成されたと考える。

3. 社会連携

HP 上に開局された<ビデオ・メタフシカ>から、各スタッフの授業紹介等を発信した。哲学哲学史専門分野との共同で、世界哲学の日記念企画を実施した。各種プログラムによって研究交流及び教育活動を行い、国際連携を図った。目標は達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、修士論文・卒業論文いずれでも、比較的水準の高い成果がでた。これらの点から、所期の目標はほぼ達成できたと考えている。在学中の学生に関しても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

国内での学会発表や国外の国際コロキウムへの参加があり、また欧文誌と和文誌発行による研究成果の国内外への発信という点で目標はおおむね達成された。また研究会の積極的な開催に関しても、目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についてもほぼ達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

生島弘子 「哲学者は如何にして知を愛したか—後期ニーチェにおける道徳・身体・知恵—」 2016/3

主査：須藤訓任 副査：上野修、舟場保之、中村征樹

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	3(1)	1(1)	3(1)	0(0)	0(0)	7(3)
2015	3(3)	1(1)	4(3)	2(0)	0(0)	10(7)
計	6(4)	2(2)	7(4)	2(0)	0(0)	17(10)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	1	6	3	0	1	11
2015	0	5	8	0	5	18
計	1	11	11	0	6	29

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

井西弘樹「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における正義論」『アルケー』No.22, 関西哲学会, pp. 65-76, 2014/7, 査読有

大久保歩「代表制の危機と表象批判: The Crisis of Representation and the Critique of Representation」『総合研究』(高千穂大学総合研究所刊行), 28, pp.5-20, 2015/3, 査読無

武田宙也「『同時的なイメージ』とは何か——エリー・デューリング講演から」『REAR』第 33 号, リア制作室, pp.122-124, 2014/12, 査読無

武田宙也「真理のプロセスとしての芸術——アラン・バディウの芸術論」『メタフュシカ』第 45 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.39-51, 2014/12, 査読有

武田宙也「日本美学和艺术研究的现状——以 20 世纪 90 年代以后的变化为重点」『美与时代』2015 年第 1 期, 河南省美学

会和郑州大学美学研究所, pp.38-42, 2015/1, 査読無

谷山弘太「ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロンについて」『待兼山論叢』哲学編第 48 号, pp. 33-48, 2014/12, 査読有

戸谷洋志「『乳飲み子』を『見る目』——ハンス・ヨナスの責任倫理学における認識論について」『倫理学論究』第 1 巻 2 号, 関西大学倫理学研究会, pp. 57-70, 2014/4, 査読無

【2015 年度】

〔博士後期〕

井西弘樹「真理の「血肉化」としての笑い——ニーチェ『愉快な学』における実験思想——」『待兼山論叢』第 49 号, 大阪大学大学院文学研究科, pp.33-48, 2016/3, 査読有

武田宙也「非人間的なもの——フーコーによる狂気と美」『エステティーク』第 2 号, 日本美学研究所, pp. 94-99, 2015/5, 査読無

武田宙也「ライン・身ぶり・共同体——フェルナン・ドゥリニと地図作成の思考」『あいだ／生成』第 6 号, あいだ哲学会, pp. 57-75, 2016/3, 査読有

戸谷洋志「未来世代への責任と傷つきやすさ——ヨナスの自然哲学とその討議倫理的な再構成について」『Contemporary and Applied Philosophy』第 6 巻, 応用哲学会, pp. 37-52, 2015/4, 査読有

戸谷洋志「現代思想の中の原子力発電所」『科学』2015 年 5 月号, 岩波書店, pp. 439-446, 2015/5, 査読無

戸谷洋志「ヨナスにおける個別的命令と存在論的命令の区別について」『メタフュシカ』第 46 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.31-44, 2015/12, 査読有

戸谷洋志「人間像と責任——ハンス・ヨナスにおける人間学」, 『倫理学年報』第 65 集, 日本倫理学会, 2016/3, 査読有

戸谷洋志「不確実な未来への責任——ヨナスの「恐怖に基づく発見術」再考」『21 世紀倫理創成研究』第 8 号, 神戸大学大学院人文学研究科, 2016/ 3, 査読有

(2) 口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

入江祐加「歴史的自己省察と相対性——歴史的現実の内部で働く「運動」の概念——」, 日本ディルタイ協会 2014 年大会, 日本ディルタイ協会, 慶應大学三田キャンパス, 2014/12

〔博士後期〕

井西弘樹「認識と力——ニーチェ『曙光』における同情と「認識の情熱」の関係について——」, 日本ショーペンハウアー協会 第 21 回ニーチェ・セミナー, 龍谷大学セミナーハウスともいき荘, 2014/5

OKUBO, Ayumu (招待講演) “Deterritorialization in Archipelago: Deleuze and Becoming-Democratic”, The 2nd International Deleuze Studies in Asia Conference 2014 Osaka/ Japan, 大阪大学, 2014/6

大久保歩「代表制の危機と表象批判」高千穂大学総合研究所シンポジウム「21世紀における哲学的思考の射程: 政治・経済・文化を結んで」, 高千穂大学, 2014/11

武田宙也「真理のプロセスとしての芸術——アラン・バディウの芸術論」, 第 65 回美学会全国大会, 美学会, 九州大学箱崎キャンパス文系講義棟 302 教室, 2014/10

谷山弘太「悲劇的世界観と生きる意味」, 日本ショーペンハウアー協会, 第 21 回ニーチェ・セミナー, 龍谷大学セミナーハウスともいき荘, 2014/5

谷山弘太「F・ニーチェ『曙光』における二つの道徳批判: 学び直す、感じ直すために」, 第 11 回哲学ワークショップ, 大阪大学文学部哲学・思想文化学専修, 大阪大学豊中キャンパス, 2014/6

谷山弘太「ニーチェ『曙光』における道徳批判について」, 関西哲学会 第 67 回大会, 関西学院大学二宮上ヶ原キャンパス, 2014/10

谷山弘太「ニーチェ『悲劇の誕生』におけるアポロンについて」, 日本ショーペンハウアー協会 第 22 回ニーチェ・セミナー, 日本大学文理学部, 2014/11

戸谷洋志「福島第一原発事故における『カタストロフィ』解釈の諸相」, 国際カンファレンス「カタストロフィと正義」, 立命館大学先端総合学術研究科, 立命館大学衣笠館キャンパス創思館カンファレンスルーム, 2015/3

西村知紘「初期フライブルク期のハイデガーの歴史概念について」, 第 2 2 回関西ハイデガー研究会, 関西ハイデガー研究会, 京都大学人間・環境学研究科棟, 2015/2

【2015 年度】

〔博士前期〕

山本哲哉「共有空間の象徴概念としての〈修道院〉」, 第一回野良研「野良研—生活と〈学問の自治〉—」, 大阪中津商店街横「はいおく」 2 F 会議室, 2015/4

〔博士後期〕

井西弘樹「ニーチェ中期思想の二つの転回」, 第 23 回ニーチェ・セミナー, 大学セミナーハウス, 2015/5

武田宙也「真理の二重性について——フーコーの思考から」, ニーチェ研究者の集い, 大阪大学待兼山会館 2 F 会議室, 2015/8

武田宙也「フーコーにおける「告白」の問題——精神医学批判とのかかわりから」, 第 68 回関西哲学会大会, 京都大学大学院人間・環境学研究科総合館南棟共南 21, 2015/10

武田宙也「ライン・身ぶり・共同体——フェルナン・ドゥリニと地図作成の思考」, 表象文化論学会第 10 回研究発表集会, 東京大学駒場キャンパス 21KOMCEE, 2015/11

武田宙也「アートと社会」, 藝術学舎（京都造形芸術大学×東北芸術工科大学）公開講座, 京都造形芸術大学大阪サテライトキャンパス, 2015/12

武田宙也「ミシェル・フーコー——生政治から生存の美学へ」, 岡山大学異分野融合研究「グローバル化時代の主権と境界についての基礎研究」公開講演, 岡山大学文法経 1 号館 3 階 356 フィールドリサーチ・ラボ, 2016/1

武田宙也「『生存の美学』と〈生の形式〉——フーコーとアガンベンにおける他なる生の構想」, シンポジウム〈フランス思想におけるイタリア〉, 日仏哲学会, 京都大学吉田キャンパス文学部新館第 1・第 2 講義室, 2016/3

谷山弘太「ニーチェ『人間的、あまりに人間的』における歴史的哲学」, 第 23 回ニーチェセミナー, 大学セミナーハウス, 2015/5

谷山弘太「ニーチェ『曙光』における「習俗の倫理」の問題——ニーチェは何故道徳を批判するのか?—」, 日本倫理学会第 66 回大会, 熊本大学, 2015/10

戸谷洋志「原子力発電所と想像力——科学技術文明をめぐるアンダースとヨーナスの思想の比較」, 応用哲学会第七回年次研究大会, 応用哲学会, 東北大学, 2015/4

戸谷洋志「哲学者と原子力——ハイデガー、アンダース、ヨーナスの技術論」, 第 13 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2015/6

戸谷洋志「ヨーナスにおける責任原理の人間学的解釈の試み」, 日本倫理学会第 66 回全国大会, 日本倫理学会, 熊本大学, 2015/10

戸谷洋志「アウシュヴィッツ以降の神話——ハンス・ヨーナスを中心に」, 第 14 回哲学ワークショップ, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/1

戸谷洋志「ヨーナスにおける個別的命令と存在論的命令の区別について」, 第 19 回 handai metaphysica 研究例会, 大阪大学文法経済学部本館 2F 大会議室, 2016/3

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

【翻訳】

井西弘樹（谷山弘太共訳）（ロルフ・エルバーフェルト著）「多声的主観とニーチェの文化(Kulturen)概念」, ロルフ・エルバーフェルト氏（ドイツ・ヒルデスハイム大学教授）講演会, 日時：2015年3月17日（火）13時30分～17時, 場所：大阪大学（豊中キャンパス）待兼山会館会議室

武田宙也（エリー・デューリング著）「プロトタイプ——芸術作品の新たな身分」『現代思想』第43巻第1号, 青土社, pp. 177-199, 2014/12

谷山弘太（井西弘樹共訳）（ロルフ・エルバーフェルト著）「多声的主観とニーチェの文化(Kulturen)概念」, ロルフ・エルバーフェルト氏（ドイツ・ヒルデスハイム大学教授）講演会, 日時：2015年3月17日（火）13時30分～17時, 場所：大阪大学（豊中キャンパス）待兼山会館会議室

【文献紹介】

大久保歩「ニーチェの正義概念の研究動向：欧文学文献を中心に」『メタフュシカ』第45号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 139-145, 2014/12, 査読有

西村知紘「アントニオ・チミノ著『現象学と遂行 事実的生に関するハイデガーの遂行的哲学』」『メタフュシカ』第45号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.155-161, 2014/12, 査読有

【2015年度】

〔博士後期〕

【文献紹介】

入江祐加「ジョヴァンニ・マテウッチ著『ディルタイ 関係としての美』」『メタフュシカ』第46号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp.85-91, 2015/12, 査読有

【その他】

谷山弘太「やっぱり知りたい！ ニーチェ（全3回）」, GACCOH 哲学講座, 京都出町柳 GACCOH, 2015/8

谷山弘太「やっぱり知りたい！ ニーチェ（全3回）」, GACCOH 哲学講座, 京都出町柳 GACCOH, 2015/9

谷山弘太「やっぱり知りたい！ ニーチェ（全3回）」, GACCOH 哲学講座, 京都出町柳 GACCOH, 2015/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

戸谷洋志, 第11回涙骨賞（奨励賞）, 中外日報社, 2015/4

戸谷洋志, 第31回暁鳥敏賞第1部門入選, 白山市, 2015/11

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD：1名 DC2：1名 DC1：0名（計2名）

2015年度 PD：2名 DC2：1名 DC1：0名（計3名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

2015年度 学部：0名 大学院：1名（計1名）

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

（2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 13 名

2014 年度：7 名 2015 年度：6 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 13 名

* 学部卒業者は哲学哲学史との合計で記載。

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

9. 刊行物

2014 年度 『メタフュシカ』第 45 号、*Philosophia OSAKA*, No. 10

2015 年度 『メタフュシカ』第 46 号、*Philosophia OSAKA*, No. 11

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- ウリヤ・ベニス＝シナスール氏講演会「〈概念の哲学〉の源泉」 2014 年 6 月 6 日
於：大阪大学待兼山会館 2 F 会議室
- 第 11 回ニーチェ研究者の集い 2014 年 9 月 6 日
於：大阪大学待兼山会館 2 F 会議室
- 第 12 回ニーチェ研究者の集い 2015 年 8 月 22 日
於：大阪大学待兼山会館 2 F 会議室
- カセム・ペンピナント氏（チュラロンコーン大学）講演会「Amor Mundi: Arendt at Home in the World」
於：文法経済学部本館中庭会議室 2015 年 12 月 22 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 18 回 *handai metaphysica* 研究例会（2015 年 3 月 10 日、文法経済学部本館 4 F 講義室 461）。

大久保歩（現代思想文化学博士後期課程）：ニーチェの正義概念の研究動向：欧文文献を中心に

早瀬勝明（哲学哲学史博士後期課程）：ジョン・R・サール『社会世界の形成』

阿部倫子（哲学哲学史博士後期課程）：ライプニッツ『モノドロジー』の現実世界：可能世界と何が違うのか

大塚高弘（哲学哲学史博士後期課程）：スピノザにおける権利と正統性について

参加者 14 名。

第 18 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2014 年 12 月 13 日、文法経済学部本館中庭会議室）。

発表者：Dr. Pratoom Angurrohita（タイ王国チュラロンコン大学講師）

タイトル：Theism and Buddhism: A Pragmatic Approach（有神論と仏教：プラグマティックなアプローチによる比較）

参加者 16 名。

第 19 回 *handai metaphysica* 特別講演会（2015 年 3 月 24 日、文法経済学部本館 4 F 講義室 461）。

発表者：Andreas Niederberger (Duisburg-Essen Universität)

タイトル：Braucht die kantische Rechtsphilosophie die Menschenwürde?

参加者 10 名。

第 11 回哲学ワークショップ（2014 年 6 月 28 日 13:00－17:00、文法経済学部本館 大会議室）

個人研究発表

1. 題目：「F・ニーチェ『曙光』における二つの道徳批判 ― 学び直す、感じ直すために ―」

発表者：谷山弘太（大学院博士後期課程）

2. 題目：「マクダウェルの認知主義のメカニズム ― 「直観」をめぐる諸問題 ―」

発表者：久保啓文（大学院博士前期課程）

パネルディスカッション「誕生をたたえて ― メルロ＝ポンティとドゥルーズ」

発表者：川崎唯史（大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員DC）

小倉拓也（日本学術振興会特別研究員PD・明治大学）

参加者 20 名。

第 12 回哲学ワークショップ（2015 年 1 月 17 日 13:00－17:00、文法経済学部本館中庭会議室）

個人研究発表

1. 題目：「アポロ的なものとディオニュソス的なもの― トーマス・マン『ブッデンブルック家の人々』研究より ―」

発表者：別府陽子（文学研究科・ドイツ文学専攻 単位取得退学）

2. 題目：「崩落と反覆 ジャック・デリダにおける忘却の二つの位相」

発表者：小川歩人（人間科学研究科・基礎人間学専攻 博士前期課程）

パネルディスカッション『『私』とは何か ― スピノザとライブニッツを通して考える ―』

発表者：小田裕二郎（文学研究科・哲学哲学史 博士後期課程）

阿部倫子（文学研究科・哲学哲学史 博士後期課程）

参加者 20 名。

京都産業大学世界問題研究所・日独文化研究所・大阪大学文学部哲学・思想文化学共催

Rolf Elberfeld（ロルフ・エルバーフェルト）氏（ドイツ・ヒルデスハイム大学教授）講演会

"Polyphone Subjekte und Nietzsches Begriff der Kulturen"（多声的主観とニーチェの文化概念）

日時：2015年3月17日（火） 13時30分～17時

場所：大阪大学（豊中キャンパス）待兼山会館会議室。 参加者 13 名

19 回 *handai metaphysica* 研究例会（2016 年 3 月 3 日、文法経済学部本館大会議室）。

須藤訓任（現代思想文化学教授）：「共通性」について：ニーチェの遠近法主義のいま一つの可能性

仲宗根勝仁（哲学哲学史博士後期課程）：フランク・ジャクソン『形而上学から倫理学へ 概念分析の擁護』

三輪泰之（哲学哲学史博士後期課程）：マルクス・ヴィラシェク『実践理性 カントにおける行為論および道徳の根拠づけ』

天野恵美理（哲学哲学史博士後期課程）：ベルクソン『物質と記憶』における「私の知覚」の形成段階について―二章のヴァリエーションとの比較を通じて―

戸谷洋志（現代思想文化学博士後期課程）：ヨナスにおける個別的命令と存在論的命令の区別について

早瀬勝明（哲学哲学史博士後期課程）：司法の言語行為―問題提起

参加者 18 名。

第 13 回哲学ワークショップ（2015 年 6 月 27 日 13:00－17:00、文法経済学部本館大会議室）

個人研究発表

1. 題目：「哲学的に見たサルトルの自由」

発表者：得能想平（人間科学研究科・基礎人間科学専攻博士後期課程）

2. 「哲学者と原子力―ハイデガー、アンダーズ、ヨナスの技術論」

発表者：戸谷洋志（文学研究科・現代思想文化学博士後期課程）

パネルディスカッション

「スピノザ『エチカ』の想像知における実践的機能の検討」

発表者：立花達也（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

樋口朋子（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

参加者 18 名。

第 14 回哲学ワークショップ（2016 年 1 月 30 日（土） 13:00～16:50、文法経済学部本館大会議室）

個人研究発表

1. 「アウシュヴィッツ以降の神話 — ハンス・ヨーナスを中心に」

発表者：戸谷洋志（文学研究科・現代思想文化学博士後期課程）

2. 「カントの実践哲学における道徳と幸福」

発表者：岡田凜（文学研究科・哲学哲学史博士前期課程）

パネルディスカッション

「ローティのネオ・プラグマティズムと現代英米圏の哲学の論点 — 表象主義・自然主義の観点から」

発表者：朱喜哲（文学研究科・哲学哲学史博士後期課程）

仲宗根勝仁（文学研究科・哲学哲学史博士後期課程）

参加者 18 名。

2015 「世界哲学の日」記念イベント「哲学カフェ 2015」（2015 年 11 月 21 日、文法経済学部本館中庭会議室）

参加者 20 名。

カセム・ペンピナント氏（チュラロンコーン大学）講演会「Amor Mundi: Arendt at Home in the World」（2015 年 12 月 22 日、文法経済学部本館中庭会議室）、参加者 10 名。

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 須藤 訓任 教授

1955 年生。1983 年京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。文学博士（京都大学）。大谷大学助教授、同教授を経て、2004 年 10 月より現職。専攻：西洋近現代哲学。

1-1. 論文

須藤訓任 「「共通性」について：ニーチェの遠近法主義のいま一つの可能性」『メタフェシカ』46, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-18, 2015/12

須藤訓任他(共著) 「「ソクラテス以前」と「プラトン以前」——ニーチェとプラトン——」『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社, pp. 228-235, 2014/7

須藤訓任他(共著) 「プラトニズムの前夜に——デリダとプラトン——」『プラトンを学ぶ人のために』世界思想社, pp. 251-257, 2014/7

須藤訓任 「「運命」について」——スピノザ、ショーペンハウアー、ニーチェ——『思想』1080 号, 岩波書店, pp. 237-269, 2014/4

須藤訓任 「未来への態度」『哲學』(日本哲学会), 第 65 号, 日本哲学会, pp. 25-42, 2014/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

須藤訓任(書評:)「村井則夫著『ニーチェ 仮象の現象学』」『図書新聞』3167号, 図書新聞, p. 7, 2014/7

1-4. 口頭発表

須藤訓任「Indifferenz とは何か—『存在と時間』の「透視」のために」: 討論(継続), 第27回関西ハイデガー研究会, 京都大学大学院人間環境学研究科, 2015/7

須藤訓任「Indifferenz とは何か—『存在と時間』の「透視」のために」: 研究発表, 第26回関西ハイデガー研究会, 京都大学大学院人間環境学研究科, 2015/6

須藤訓任「『ショーペンハウアーとニーチェ』第3回「歴史について」」: 講座, 哲学講座 2014年度初春講座, 日独文化研究所, 2015/3

須藤訓任「ニーチェの遠近法主義: いま一つの可能性」: 講演, 日本学術振興会学術研究助成基金助成金(基盤研究(C)課題番号24520033)「普遍主義と多元主義の相互検討—ショーペンハウアーとニーチェを中心に」, 龍谷大学, 2015/3

須藤訓任「『ショーペンハウアーとニーチェ』第1回「美について」」: 講座, 哲学講座 2014年度初春講座, 日独文化研究所, 2015/2

須藤訓任「『ショーペンハウアーとニーチェ』第2回「同情について」」: 講座, 哲学講座 2014年度初春講座, 日独文化研究所, 2015/2

須藤訓任「未来という時間」: シンポジウム, 日本哲学会第73回大会, 北海道大学, 2014/6(『哲學』第66号, 2015/4)

須藤訓任他「虚軸としてのスピノザ(II)——ドイツ観念論とその後——」: 座談会, 『思想』1080号, 岩波書店, pp.45-79, 2014/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西哲学会・委員, 2007年11月～現在に至る

2. 望月 太郎 教授

1962年生。1991年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程哲学哲学史専攻中退。博士(文学)(大阪大学、1997年)。徳島大学、東海大学を経て、1998年4月、大阪大学大学院文学研究科助教授。2004年4月、大阪大学大学教育実践センター助教授。2006年11月、大阪大学大学教育実践センター教授、2012年4月、大阪大学大学院文学研究科教授。2014年4月、大阪大学海外拠点本部教授・ASEANセンター(バンコクオフィス)センター長(学内派遣)。専攻: フランス哲学、現代思想、社会思想、高等教育論。

2-1. 論文

Mochizuki, Taro, "A Philosopher's Defeat in World War II: Tanabe Hajime's Conversion to Shin Buddhism in Philosophy as Metanoetics" *Prajñā Vihārā Journal of Philosophy and religion*, 14-1-2号, Assumption University, Bangkok, Thailand, 2014/10

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

島本英樹, 早田幸政, 望月太郎他(共編)(調査報告)「ASEAN 地域連携による高等教育の質保証とタイ王国のアカレディテーション・システム」大阪大学全学教育推進機構 高等教育研究推進委員会『大阪大学高等教育研究』4, 大阪大学全学教育推進機構, pp. 25-34, 2016/3

望月太郎((書評))「フィリップ・G.アルトバック、ホルヘ・バラン編／米澤彰純監訳『新興国家の世界水準大学戦略』(東信堂 2013年)』『大学評価学会年報『現代社会と大学評価』』(大学評価学会), 第9-10合併号, 晃洋書房, 2014/8

2-4. 口頭発表

望月太郎「タイ人高校生にみる日本留学へのニーズとその背景:留学生政策への提言に向けて」日本教育行政学会第50回記念大会:日本教育行政学会第50回記念大会, 日本教育行政学会第50回記念大会, 名古屋大学, 2015/10

Mochizuki, Taro, “How do we Redeem the Lost Future after Fukushima? Sense of Guilt, Memory and Redemption”, Energy & Intergenerational Ethics Perspectives in and for the ASEAN Region International Conference: Energy & Intergenerational Ethics Perspectives in and for the ASEAN Region International Conference, Konrad-Adenauer-Stiftung e.V. & Assumption University of Thailand, Bangkok, Guna Chakra Research Center – Graduate School of Philosophy & Religion and the John Paul II Center for Catholic Social Thought, The Grand Fourwings Convention Hotel Bangkok, Thailand, 2015/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者:望月太郎

課題番号:

研究題目:平和構築のための哲学実践

研究経費:2014年度 直接経費 300,000円 間接経費 90,000円

研究の目的:

カンボジアにおける哲学実践、哲学実践を主体とした大学院教育カリキュラムの作成、提案を目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

Journal of Humanities Therapy, Humanities Institute, Kangwon National University, Korea・編集委員, 2014年4月～現在に至る
日本科学者会議・常任幹事・事務局次長・国際部長, 2011年5月～2014年4月

3. 中村 征樹 准教授

1974年生。2005年、東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(博士(学術))。東京大学大学院工学系研究科助手、文部科学省科学技術政策研究所研究官、大阪大学大学教育実践センター准教授を経て2012年4月より大阪大学全学教育推進機構准教授。2007年11月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、科学技術倫理、科学技術史。

3-1. 論文

Kristian H. Nielsen, Gert Balling, Nakamura, Masaki 他(共著), “Sipping Science: The Interpretative Flexibility of Science Café’s in Denmark and Japan”, *East Asian Science, Technology and Society: An International Journal*, 9, pp. 1-21, 2015/3

3-2. 著書

Japan Society for the Promotion of Science Editing Committee “For the Sound Development of Science”, Nakamura, Masaki 他(共編), *For the Sound Development of Science –The Attitude of a Conscientious Scientist–*, Maruzen Publishing, 2015/5
独立行政法人 日本学術振興会「科学の健全な発展のために」編集委員会, 中村征樹他(共編)『科学の健全な発展のためにー誠実な科学者の心得ー』丸善出版株式会社, 2015/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

中村征樹「学際教育の実践—大阪大学での実践事例」京都大学分野横断プラットフォーム構築企画:学際教育の原理—メタ科学の学際化に向けて, 京都大学, 2016/3
中村征樹「研究活動の不正行為への対応等に関するガイドライン(2014年8月26日文科科学大臣決定)について」BMB2015 研究倫理フォーラム:ライフサイエンスと社会との関係について考える, 日本分子生物学会, 神戸ポートピアホテル, 2015/12
中村征樹「科学の健全な発展と研究者倫理」平成27年度FDプログラム&博士交流セミナー, 北海道大学, 北海道大学工学院, 2015/12
中村征樹「研究公正における信頼の問題」信頼研究の学際化第1回ワークショップ, 安心信頼技術研究会, 大阪大学, 2015/12
中村征樹「研究不正への対応と責任ある研究活動の推進—評価の観点から」第16回全国大会:共通論セッション「研究倫理と評価」, 日本評価学会, JICA 沖縄国際センター, 2015/12
中村征樹「科学と社会」SSH 科学史ゼミ大阪研修, 清真学園高等学校, 大阪大学, 2015/12
中村征樹「科学とはなにか?—地動説の科学史から考える」阪神奈大学・研究機関生涯学習ネット「公開講座フェスタ 2015」, 大阪府新別館, 2015/11
中村征樹「責任ある研究活動の推進と人文社会科学系の研究倫理」第27回日本生命倫理学会年次大会:学会企画シンポジウム「人文社会科学系の研究倫理」, 日本生命倫理学会, 千葉大学, 2015/11
中村征樹「「経済・社会的な課題への対応」について」若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア, JST/CRDS, JST, 2015/9『ワークショップ報告書「若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア」』pp. 216-224, 2016/2
中村征樹「責任ある研究活動の推進と研究評価」第1回 SPARC Japan セミナー2015:学術情報のあり方—人社系の研究評価を中心に, 国立情報学研究所, 国立情報学研究所, 2015/9
中村征樹「大阪大学における探究学習の実践」高校教員向け 探究学習指導セミナー—入門編—, 大阪大学全学教育推進機構, 大阪大学, 2015/8
中村征樹「「ドーナツの穴からのぞく新しい“学び”のかたち」~楽しく 新しいものの見方の発見~」第10回研修会, NPO 法人 EDU・LABO 教育イノベーション開発研究所, EDU・LABO 教育イノベーション開発研究所, 2015/6
中村征樹「アジェンダ・セッティングを問う」若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア:第2回「“科学技術が解決すべき課題”を人文・社会科学の視点からみると」, JST/CRDS, JST, 2015/6『ワークショップ報告書「若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア」』pp. 139-144, 2016/2
中村征樹「研究不正への対応と研究倫理教育」トライボロジー会議 2015 春 姫路, 日本トライボロジー学会, 姫路商工会議所, 2015/5
中村征樹「科学者の社会的責任と科学者倫理」第62回年会:記念シンポジウム「科学者と経営の倫理と社会的責任」, 日本科学史学会, 大阪市立大学, 2015/5『日本科学史学会第62回年会・総会研究発表講演要旨集』pp. 11-11, 2015/5
中村征樹「組織をまたぐ「ゆるい」つながりと異分野連携」若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア:第1回「科学技術イノベーションの実現に“自然科学と人文・社会科学の連携”は本当に必要なのか」, JST/CRDS, JST, 2015/4『ワークショップ報告書「若手ワークショップ:21世紀の社会と科学のフロンティア」』pp. 26-30, 2016/2
中村征樹「研究不正防止の動向と新ガイドライン」研究倫理ワークショップ:科学の健全な発展のための責任体制の構築へ向けて, 東北大学, 東北大学, 2015/4

- 中村征樹「研究成果の発表と研究倫理:STAP 問題から考える」北大 ALP・JACST 合同シンポジウム:研究成果をなぜ発表しどのようにつたえるのか, 北大 ALP・JACST, 北海道大学, 2015/4『科学技術コミュニケーション』18, pp. 81-89, 2015/12)
- 中村征樹「科学技術と社会の視点から考える世界史教育」第85回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2015/3
- 中村征樹「大学教育と課題解決—『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』から見る課題解決」フォーラム:地域の課題解決は学生の課題解決能力の育成に繋がるか?—課題解決型アプローチとソーシャルアクションアプローチ, JSPS 科研費(挑戦的萌芽研究)26590205「ジェネリックススキル育成における汎用的学修評価プログラムの構築と実践的研究」, 京都光華女子大学短期大学部, 2015/2
- Nakamura, Masaki, “Communicating “Science in Action”: Lessons Learned from March 11 and the STAP Affair”, 第11回日独学術コロキウム:Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches, 日本学術振興会ボン研究連絡センター, ゲッティンゲン大学, 2015/1(*Knowledge Transfer across Borders: Integrative Approaches*, pp. 44-44, 2015/1)
- 中村征樹「探求の作法と研究倫理」E.FORUM 教育研究セミナーⅡ:高大におけるカリキュラム改革を考える—探究力育成の視点から—, 京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター, 京都大学, 2014/12
- 中村征樹「ビブリオバトルが拓く可能性」教職員研修, 京都芸術高校, 京都芸術高校, 2014/12
- 中村征樹「研究不正から視る現代の科学」第46回大阪大学公開講座, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2014/12
- 中村征樹「研究不正への対応を超えて:責任ある研究活動の確立」第10回公開シンポジウム:研究倫理への対処と倫理教育のあり方を考える, 日本工学会技術倫理協議会, 建築会館, 2014/11
- 中村征樹「大阪大学における「科学と社会」教育の現在:学部教育での実践事例」第13回年次研究大会:オーガナイズド・セッション「科学と社会」教育の現在, 科学技術社会論学会, 大阪大学, 2014/11『科学技術社会論学会第13回年次研究大会予稿集』pp. 48-49, 2014/11)
- 中村征樹「文部科学省策定(2014.8.26)「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」について」第37回年会研究倫理フォーラム, 日本分子生物学会, パシフィコ横浜, 2014/11
- 中村征樹「研究機関のガバナンス」研究成果発表のあり方と倫理に関するクローズド・ワークショップ, 科学技術広報研究会, 筑波大学, 2014/11
- 中村征樹「研究不正問題にどう取り組むか」サイエンスアゴラ 2014:第9回研究問題ワークショップ「本音で語る研究倫理問題リターンズ」, 科学技術振興機構, 産総研臨海センター, 2014/11
- 中村征樹「Trust 信頼に基づいた自律と協働—開かれた学問」サイエンストークス・オープンフォーラム 2014:日本の研究をもっと元気に、面白く。～みんなで作る、『第5期科学技術基本計画』への提言～, ScienceTalks, 東京大学, 2014/10
- 中村征樹「『ドーナツを穴だけ残して食べる方法』にいたるまで」第2回科学の周辺研究会, 科学の周辺研究会, 立教大学, 2014/10
- 中村征樹「研究不正の規制と科学者コミュニティ:歴史的視点から」公開シンポジウム:科学研究の規制と法, 公開シンポジウム「科学研究の規制と法」事務局, 東京大学, 2014/9
- 中村征樹「研究不正を防ぐために 科学者コミュニティとして なにができるのか」公開シンポジウム:社会に対する若手研究者の責任—科学者倫理と若手研究者—, 日本学術会議若手アカデミー委員会, 大阪大学中之島センター, 2014/7
- 中村征樹「ビブリオバトル—読書体験の広がりを求めて—」図書館教育夏季研修講座, 京都市教育委員会, 京都市総合教育センター, 2014/7
- 中村征樹「アクティブラーニングとしての 学生による本づくりの実践と展望 ～大阪大学ショセキカプロジェクトの挑戦～」大学教育学会第36回大会, 大学教育学会, 名古屋大学, 2014/6『大学教育学会第36回大会発表要旨集録』pp. 124-125, 2014/6)
- 中村征樹「池島研究の可能性」公開研究会:池島研究の可能性, JSPS 科研費(挑戦的萌芽研究)26560138「池島炭鉱の盛衰にみる戦後日本の経済発展と地域社会」, 大阪大学中之島センター, 2014/6
- 中村征樹「大阪大学における 教育プロジェクトと研究倫理教育」日本科学史学会第61回年会:シンポジウム「高等教育の新たな展開と 科学技術を対象とした 人文・社会科学の役割」, 日本科学史学会, 酪農学園大学, 2014/5『日本科学史学会第61回年会・総会研究発表講演要旨集』pp. 32-32, 2014/5)
- 中村征樹「STAP論文不正疑惑問題は なぜ起きたのか—研究不正行為と科学倫理」月例会, マスコミ倫理懇談会, 新聞協会,

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中村征樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2015/7

中村征樹 大阪大学総長顕彰(教育部門), 大阪大学, 2014/7

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2015 年度、挑戦的萌芽研究、代表者: 中村征樹

課題番号: 26560138

研究題目: 池島炭鉱の盛衰にみる戦後日本の経済発展と地域社会

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究では、日本社会の戦後の経済発展のありかたの一端について、戦後のわずか 50 年たらずのあいだに繁栄と衰退を体験した池島炭鉱に注目し、戦後日本社会の縮図としての池島という観点から検討を行う。具体的には、戦後の九州における炭鉱開発のあり方、石炭産業における技術革新や炭鉱労働の実態(塵肺問題を含む)、短期間で大きく揺れ動いた人々の生活や地域社会のあり方、さらにその背後にあるエネルギー問題や政治・経済のあり方を視野に入れつつ、炭鉱開発により地域社会がどのような変容を遂げたかを明らかにする。そのことを通して、戦後の経済発展をあらためて多面的にとらえかえることをめざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

3-7-1. 2014 年度～2015 年度、6: 研究助成、助成金獲得者: 中村征樹

助成金名: 人文・社会科学系「研究奨励」

研究題目: 炭鉱開発と地域社会の変容に関する調査研究—長崎県池島の事例

助成団体名: 公益財団法人 旭硝子財団

助成金額: 2014 年度 直接経費 520,000 円

2015 年度 直接経費 480,000 円

研究の目的:

資源の乏しい日本においてエネルギーの持続可能な供給は重要な課題である。日本では、埋蔵量にかぎりのある化石燃料を代替する持続可能なエネルギー源として、これまで原子力エネルギーが政策的に推進されてきたが、福島第一原発事故によってその前提が揺らぎ、最近では再生可能エネルギーに注目が集まっている。持続可能なエネルギーとはどのようなものかは、社会的にもきわめて重要な課題である。本研究では持続可能なエネルギーのあり方について、たんに資源としての側面からだけではなく、エネルギー産業を支える人々や地域にとって持続可能なものかどうかが重要であるという認識にたち、持続可能なエネルギー供給を可能とする持続可能な地域コミュニティのあり方について、日本の近代化を支えてきた石炭産業の現場である炭鉱地域に注目して明らかにするものである。

3-8. 外部役員等の引き受け状況

文部科学省 公正な研究活動の推進に関する有識者会議・委員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・若手アカデミー委員, 2015 年 1 月～現在に至る

文部科学省「研究不正に対する諸外国の体制等に関する調査研究」における検討会・委員, 2014 年 9 月～2014 年 10 月

大阪大学消費生活協同組合・理事, 2014 年 5 月～現在に至る

Science Talks・委員, 2014 年 4 月～現在に至る

研究不正防止のための改革委員会・委員, 2014 年 4 月～2015 年 3 月

日本学術振興会「科学者の行動規範」に基づく研修プログラム作成協力者会議・委員, 2014 年 2 月～2015 年 2 月

EY アドバイザリー株式会社「研究機関における研究倫理教育に関する事業委員会」・委員, 2014 年 2 月～2015 年 3 月

文部科学省「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の見直し・運用改善等に関する協力者会議・委員, 2013 年 11 月～2015 年 3 月

CINI Japan プロジェクト・外部協力教員, 2013 年 6 月～現在に至る

特定非営利活動法人 ratik・理事, 2013 年 5 月～現在に至る

日本サイエンスコミュニケーション協会・国際連携委員, 2012 年 5 月～現在に至る

日本学術会議・若手アカデミー委員会学術の未来検討分科会委員, 2012 年 3 月～2014 年 9 月

日本学術会議・若手アカデミー委員会委員, 2011 年 10 月～2014 年 9 月

科学技術社会論学会・理事, 2005 年 4 月～2015 年 3 月

大学評価学会・理事, 2004 年 4 月～2015 年 2 月

日仏教育学会・編集委員, 2003 年 9 月～現在に至る

4. 藤田 公二郎 助教

1980 年生。2015 年パリ東大学人文科学研究科哲学専攻博士課程修了。博士(哲学)。2016 年 4 月より現職。専攻: 西洋現代哲学。

4-1. 論文

藤田公二郎 「『権力の系譜学』のために」『哲学』(日本哲学会), 65, pp. 272-285, 2014/4

4-2. 著書

Fujita, Kojiro, *Pour une philosophie de la subjectivation. Etude sur Michel Foucault.*, Université Paris-Est, 422p., 2015/5

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2014 年度～2014 年度、6: 研究助成、助成金獲得者: 藤田公二郎

助成金名: 林基金若手研究者研究助成

研究題目: フーコーの倫理概念

助成団体名: 日本哲学会

助成金額: 2014 年度 直接経費 100,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、ミシェル・フーコーの倫理概念を明らかにすることである。フーコーは、知の問題系と権力の問題系を探究した後、晩年になってはじめて倫理の問題系に取り組んだ。しかしその最後の探究は、不慮の死のため、未完のままに終わってしまった。それゆえこれまでの先行研究は総じて、倫理の問題系の検討を、知や権力の問題系の検討に対して後回しにしてきたように思われる。しかし近年になって、この倫理の問題系に関する新資料が多数公刊されてきた。たとえば、晩年のコレージュ・ド・フランス講義録やルーヴアン大学講演録などである。これらの新資料を手掛かりにすることで、今やようやく、ありうべき倫理の問題系を再

構成することができるようになったと言えるだろう。本研究は、この問題系の中核として倫理概念を取り上げる。この概念は、キリスト教由来の伝統的な道徳概念に対して根本的な対立関係に置かれていることが理論的に明らかにされるだろう。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-3 臨床哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 1(兼任) 講師 0 助教 0

教授：浜渦 辰二、堀江 剛

准教授：本間 直樹(兼任)

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
25	14	13	0	0	1	0	0

*うち留学生 3名、社会人学生 8名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	5	4	1	2
2015	10	1	2	2
計	15	5	3	4

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

当分野は、現代社会における大小さまざまな問題（例えば、科学技術、医療、看護、介護、福祉、教育、アート、ジェンダー／セクシュアリティなど）について考えるために、(1)近代西洋／日本の倫理思想・道徳理論や現代の社会哲学・文化理論を学びながら、問題の定式化・分析を行うための方法論の探究、(2)当事者・関係者とともに、それぞれのおかれた具体的な文脈に即して問題を掘り起こし、考察するための哲学的対話法やコミュニケーション方法の調査・開発、また、(3)学内外のさまざまな研究者・実践家と連携しつつ、社会で現実に機能し得る研究活動プランの作成と遂行、および共同研究プロジェクトの推進、この3点を基本姿勢としている。

上記の基本姿勢に基づき、学部生には「倫理学基礎」等の授業により倫理学の基礎知識を吸収させるよう務め、院生には「臨床哲学講義」等の授業により過去の哲学思想を振り返りつつ、臨床哲学の理念を所属の全教員及び学生とともに明確にすることを目指した。また分科会形式をとる授業を設定することで、学生に部分的にイニシアティブを任せるなど、学生の自主性を促進することを目標とした。また、外国語（主として英語）の発信能力を組織的に養成することを、さらに、生命・医療の倫理学および人間学については、先端的テーマに関する教育を提供することを目標とした。

また、社会人院生が多いため、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、社会人学生教育の支援をするチューターを院

生のなかから雇うとともに、社会人学生の職場と研究室での教育をつなぐ支援コーディネータ（ゲストスピーカー）を招聘して、社会人学生のモチベーションを高めるとともにネットワークを作ることを目標とした。

2. 研究

教育と同様の基本姿勢に基づきつつ、研究に関しては、文献研究および哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行うことを目標とした。また、そのような研究活動に学生も積極的に参加させることでインターンシップにもつながる経験が積めることも目標とした。日本学術振興会の「課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業：実社会対応プログラム」による「ケアと支え合いの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み」（代表：浜渦）の活動を社会連携にも繋がる共同研究として進めてきた。さらに、その活動の一環として、他方では任意団体「café philo」と連携して、さまざまな地域で定期的に哲学カフェを開催し、CSCD と連携して中之島哲学コレージュを行うなど、哲学的対話の文化を社会に浸透させることを目標とした共同研究を行った。さらに、学内に結成されている医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進することを目標とした。

3. 社会連携

社会連携については、当分野の活動全般が現代社会での事象を対象とすることを基本姿勢としていることから、教育・研究両分野において社会との連携を充実化させることを目標とした。上記の「実社会対応プログラム」により、大学外の様々な職業や立場の市民との協力によって研究活動を実施すると同時に、そういった研究活動に学生を従事させ、かつ部分的にはあるがイニシアティブをとって学生に研究を遂行させることでその教育的な意義も視野に入れた形で、社会連携につながる活動を行った。また、そういった研究活動の成果を報告書や研究室紀要、HP など様々な媒体を用いて発信することを目標とした。さらに、京阪電鉄なにわ橋駅にある「アートエリア B1」など大学外の場所で、任意団体「café philo」と連携しながら、研究活動に関係する事柄について各種のイベントを実施することでじかに市民との交流を図ることを目標とした。また、大阪大学中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年 3～4 回の「超高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部生には「倫理学基礎」等の授業を通して倫理学の基礎知識を吸収させるとともに、院生には「臨床哲学講義」等の授業を通して、過去の哲学思想の振り返りに基づく臨床哲学の理念の明確化を実施した。分科会形式をとる授業では、学生が積極的にイニシアティブをとり、学生の自主性を促進することに成功している。それらの成果として、学生がグループを形成して学外におけるワークショップに積極的に取り組んだり、哲学カフェを企画運営したり、身近なところで「臨床哲学」的なテーマを開拓してそれを研究的なものに結びつけたりしている。外国語の発信能力の養成についても、英語のみで行う授業を開講し、他の教員も任意の参加者として効率的な学習をサポートしたり、授業外で希望の学生を募り英会話のトレーニングを行ったりして対応した。院生には、外国語で発表する機会を与えて、積極的に海外に向けて研究発表することを促した。社会人院生には、社会人学生教育支援基盤経費を活用して、院生チューターにより社会人学生教育の支援をするとともに、社会の現場と研究室での教育をつなぐ支援コーディネータ（ゲストスピーカー）を招聘して、社会人学生のモチベーションを高めるとともにネットワークを作ることを推進した。

2. 研究

文献研究を中心として哲学・倫理学の研究を推進する傍ら、大学の内外で様々な職業や立場の市民と協力しつつ、哲学的対話の実践に向けた多彩な研究活動を行った。これらは企業・自治体・NPO などからも注目を集めた。また、これらの研究・実践活動には学生も積極的に参加して、オン・ザ・ジョブ・トレーニング的な、またインターンシップにもつな

がる経験を積んだ。さらに、上記の「実社会対応プログラム」の一環として、また任意団体「café philo」と連携して、さまざまな地域で定期的に哲学カフェを開催し、哲学的対話の文化を社会に浸透させるよう努めている。またそのような活動の成果を用いつつ、京都の洛星高校でこれまで11年間にわたり、学生を巻き込んで、あるいは学生の企画運営を監督しつつ、哲学の授業を行った。共同研究については、フィンランド・ヘルシンキ大学の研究者（教授およびポストドク）を招聘し、講演会およびセミナーを開催するとともに、こちらからも教員・院生がヘルシンキ大学に出かけてワークショップを開催し、研究発表の場を作った。日独の4大学コンソーシアムによる海外派遣助成プログラムを通じて、バーデン＝ヴュルテムベルク財団から奨学金を得た院生が、ドイツ・ハイデルベルク大学に1年間の奨学金を得て留学し、研究指導や共同研究の機会を得ることができた。また、大阪大学医療人文学研究会と共催で研究会を開き、医療人類学・医療社会学・医療倫理学の諸分野と連携してとりわけ医療・看護・介護関係の共同研究を推進した。

3. 社会連携

上記「実社会対応プログラム」の活動として、実務者・研究者・市民を交えた共同研究として社会連携に携わった。ほかにも、CSCDと連携した「アートエリアB1」での中之島哲学コレージュの実施、洛星高校など学外での哲学の授業の実施、など大学の内外を越境する研究に従事し、かつそのような研究に学生もイニシアティブをとって従事するよう促し、かつそれに成功した。また、中之島センターでは、「ケアの臨床哲学」研究会の主催により、年3～4回の「超高齢社会を考える」シリーズのシンポジウムを行い、毎回100人程度の参加者があり、各分野の専門家と市民との意見交換の場を作ることに成功した。

IV. 自己点検・自己評価(2014年度～2015年度)

1. 教育

臨床哲学の理念の理解と同時にその明確化の過程に積極的に関与することを教育の目標としたのであるが、それについては大学内での授業および大学外と連携した活動への従事という点で、両者ともその目標は達成できたものと考えている。

2. 研究

学内外と連携した諸々の研究、およびその研究成果を広く社会に発信するという点など、いずれの目標も達成されたものと考えている。

3. 社会連携

上記の教育・研究に関する記述と同じく、社会との連携に関する目標も十分に達成されたものと考えている。また、社会からの認知および反響もえられた。

V. 基本情報(2014年度～2015年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	2	0	2
2015	2	0	2
計	4	0	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

徐静文 「日中における終末期ケアの比較研究—中国における終末期ケアの定着に向けて」 2015/2

主査：浜渦辰二 副査：入江幸男、中岡成文

前野竜太郎 「重症心身障がい児・者に寄り添いささえるケアとして理学療法を行う意味—わずかなあらわれに気遣いながら働きかける身体の語り」 2015/2

主査：浜渦辰二 副査：入江幸男、本間直樹、奈良勲

服部佐和子 「自己における関係の断絶とその再生」 2016/2

主査：浜渦辰二 副査：上野修、中岡成文

フランツィスカ・カッシュ “The Paradigm Shift in Obesity Research and Its Ethical and Cultural Implications” 2016/2

主査：浜渦辰二 副査：須藤訓任、中岡成文、霜田求

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	3(0)	2(1)	6(0)	0(0)	0(0)	11(1)
2015	1(1)	0(0)	5(2)	2(0)	0(0)	8(3)
計	4(1)	2(1)	11(2)	2(0)	0(0)	19(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	1	3	13	0	0	17
2015	5	6	9	0	8	28
計	6	9	22	0	8	45

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

高原耕平 「災害精神医学小史のこころみ：阪神・淡路大震災における〈心のケア〉を問い直すために」、『未来共生学』第 2 号, pp. 163-202, 2015/3

〔博士後期〕

川崎唯史 「社会的な生の悲劇—メルロ＝ポンティにおける社会性の問題」、『メルロ＝ポンティ研究』第 18 号, pp.40-52, 2014/9

高橋綾, 川崎唯史, 本間直樹 「ケアの「人間化」のために I : 淀川キリスト教病院における, 対話を取り入れた臨床倫理検討会についての考察」、『Communication-Design』第 11 号, pp.1-25, 2014/8

橋本剛幸, 田中俊弥, 永浜明子 「小学校, 中学校, 高等学校の教員から見た学校体育の現状と問題点—生涯スポーツにつながる授業を目指して—」『大阪教育大学紀要第 V 部門教科教育』62 巻 2 号, pp.33-43, 2014/2

- 徐静文「終末期ケアにおける理論的基礎—哲学の角度から」,『メタフュシカ』45, pp.83-96, 2014/12.
- 永浜明子「発達障がいのある青年との交換日記—感情表現と関係性構築の観点から—」,『メタフュシカ』45, pp.97-110, 2014/12
- 日高悠登「死の差別化から, 死の選択化へ」,『メタフュシカ』45, pp.111-124, 2014/12
- 村山晴香「不登校支援における一望監視施設の拡大と穏やかな取組み」,『メタフュシカ』45, pp.125-138, 2014/12
- 有馬斉・加藤穰・Franziska KASCH・峯村優一・幸重美津子・岩江莊介「ワークショップの概要。医療現場における異文化コミュニケーションの問題。Issues of Intercultural Communication in Medical Settings」, 日本医学哲学・倫理学会『医学哲学・医学倫理』第32号, pp.71-75, 2014
- KASCH, Franziska, “Ethical Aspects of the Japanese Programme to Prevent Lifestyle related Diseases” In *Formosan Journal of Medical Humanities* Vol. 14, 1-2, pp. 13-26, 2014/5
- HATTORI, Sawako: “Schuldgefühle und Selbst”, 『待兼山論叢哲学篇』第48号, pp.49-64, 2014/12
- 【2015年度】
- 〔博士前期〕
- 高原耕平「反復する竹灯籠と延焼 阪神・淡路大震災における〈復興／風化〉と追悼の関係」,『未来共生学』第3号, pp. 239-267, 2016/3
- 〔博士後期〕
- 川崎唯史「メルロ=ポンティにおける社会的な生の優位」,『メタフュシカ』46, pp. 59-71, 2015/12
- 川崎唯史「メルロ=ポンティと愛の現象学」,『現象学年報』31, pp. 125-134, 2015/11
- 服部佐和子, 會澤久仁子, 松井健二「自己生成のプロセスにおけるインフォームド・コンセント」,『臨床哲学』第17号, pp.37-52, 2016/3
- 鈴木徑一郎「労働における観想的契機について—初期ヴェイユの時代批判から」,『メタフュシカ』46, pp.73-84, 2015/12
- 正置友子「保育者が子どもたちと絵本を読むということ」,『保育のなかの絵本』, かもがわ出版, pp.5-68, 2015/6/
- 正置友子「連載・絵本を読む⑩『いないいないばあ』—誕生して初めて出会う芸術・文化であり, 「子ども時代」を形成する—」, 関西大学『書評』第144号, pp.264-274, 2015/10
- 山口弘多郎, 「フッサールとアヴェナリウス 生活世界の起源について」,『待兼山論叢・哲学篇』第49号, pp.49-62, 2016/3

(2) 口頭発表

- 【2014年度】
- 〔博士前期〕
- Katsura Yui “What is a mother?: A Phenomenological Exploration of Motherhood” , Open Seminar: Welcoming Prof. Sara Heinämaa: Multiple Faces of Phenomenology, 大阪大学, 2015/3/24
- 〔博士後期〕
- KAWASAKI Tadashi, “A Description of a Beard: Toward a Phenomenology of the Vegetative”, Open Seminar: Welcoming Prof. Sara Heinämaa: Multiple Faces of Phenomenology, 大阪大学, 2015/3/25
- 川崎唯史「「私は私自身に与えられている」—メルロ=ポンティにおける誕生の問題」, 日仏哲学会 2015 年春季大会, 大阪大学, 2015/3/21
- 川崎唯史「能力と体質」, 第35回臨床哲学研究会, 大阪大学中之島センター, 2014/9/5
- 川崎唯史「メルロ=ポンティにおける誕生の問題—自発性と受動性」, 第11回哲学ワークショップ, 大阪大学, 2014/6/28
- 川崎唯史「愛とケア—メルロ=ポンティを手がかりに」, 第Ⅱ期第7回「ケアの現象学」研究会, 大阪大学, 2014/4/19
- 川崎唯史「メルロ=ポンティと愛の現象学」, 日本現象学会第36回研究大会, 東洋大学, 2014/11/30
- 永山亜樹, 永浜明子, 永浜みち子「「数」と「感情」に関する「発達障がい」当事者研究」, 発達障害支援システム学会第13回研究セミナー／研究大会, 聖徳大学松戸キャンパス, 2014/12/7
- 日高悠登「あそかビハーラ病院見学報告—施設内容及びビハーラ僧へのインタビューより—」, 第32回大阪大学医療人

- 文学研究会, 大阪大学, 2014/12/4
- 日高悠登「医療と仏教の協働—長岡西病院ビハラー病棟を事例に一」, 2014 年度第 2 回「宗教と社会貢献」研究会, 関西学院大学梅田キャンパス, 2015/1/12
- 日高悠登「棄死社会における看取りの一步」, 臨床スピリチュアルケア協会(PASCH)第 61 回研究会, カトリック大阪大司教区サクラファミリア, 2015/3/17
- KASCH, Franziska, “Medical Development in 19th Century Germany. Medical Revolutions and Specialization”, 平成 26 年度第 2 回研究例会『『商都大阪』の都市遺産—住友文庫医学学位論文と芝居町道頓堀の景観復元をめぐる—」, 関西大学大阪都市遺産研究センター, 2014/8/2
- KASCH, Franziska, “Changing perception of privacy in medical settings in Japan”, at 2014 International Conference of the Japanese Association for Philosophical and Ethical Researches in Medicine: Philosophy and Ethics of Medicine in Multicultural Society, on November 23-24, 2014, at Toyo University, 2014/11/24
- 大北全俊, 遠矢和希, 加藤穰, KASCH, Franziska, 花井十伍, 横田恵子, 白阪琢磨, 「倫理/ethics に求められてきたもの—海外での HIV/AIDS に関する倫理的な議論の歴史的調査より」, 第 27 回日本エイズ学会学術集会・総会, 大阪, 2014/12/3-5
- 青木健太「能力の器—リビングウィルで考える能力」, 第 35 回臨床哲学研究会, 大阪大学中之島センター, 2014/9/5
- Aoki Kenta, “Talking about Death: a Heideggerian analysis of ‘living will’”, a Postgraduate Research seminar, at University of Hull, 2015/2/17
- 青木健太, 稲原美苗「哲学対話について」, 「歯科医療現場における障害のある子どもとその親への包括的支援プログラムの開発」講演会および研究活動報告会, 中之島センター, 2015/2/28
- Aoki Kenta, “Mood and Talking”, Open Seminar Welcoming Prof. Sara Heinämaa: Multiple Faces of Phenomenology, 大阪大学, 2015/3/2
- 【2015 年度】
- 〔博士後期〕
- 川崎唯史 “Phenomenology of Vegetal Corporeality: A Preliminary Sketch”, Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium: Phenomenology of Vulnerability and Limits, 大阪大学, 2016/3/3
- 川崎唯史「人間たちの平和—メルロ=ポンティの戦後」, 暴力からの人間存在の回復研究会「メルロ=ポンティとレヴィナス—愛, 平和, 正義」, 立命館大学, 2015/10/17
- 川崎唯史「英雄と逃走—メルロ=ポンティにおける二つの自由」, メルロ=ポンティ・サークル第 21 回大会, 駿河台大学, 2015/9/26
- 川崎唯史 “Dialogue and Menace: Merleau-Ponty on Intersubjectivity”, Dialogue and Intersubjectivity: An Interdisciplinary Workshop, ヘルシンキ大学, 2015/9/16
- 川崎唯史「楽しむ身体—中岡成文『養生訓問答』をめぐる」, 第 37 回臨床哲学研究会, 大阪大学, 2015/7/25
- 川崎唯史 “Immemorial Past and Unforgettable Tradition: Merleau-Ponty on Birth”, Phenomenology and Vulnerable Others: Clinical Philosophy Workshops with Irina Poleshchuk, 大阪大学, 2015/5/21
- 服部佐和子「ドイツ・バイエルンの森での内観体験報告」, 第 38 回日本内観学会大阪大会, 追手門学院大阪城スクエア, 2015/5/17
- 服部佐和子「自己生成のプロセスとしてのインフォームド・コンセントを考える」, 第 38 回臨床哲学研究会, 大阪大学, 2015/11/21
- 村山晴香「ヴィゴツキーの思想からみたアクティブラーニング」, 第 38 回臨床哲学研究会, 大阪大学, 2015/11/21
- 鈴木徑一郎「日々のメンテナンス—相続者として, ビギナーとして」, 第 37 回臨床哲学研究会, 大阪大学, 2015/7/25
- 日高悠登「再考する宗教者像」, 京都大学こころの先端研究ユニット若手研究者交流会, 京都大学, 2015/6/18 (※ポスター発表)
- 日高悠登「再考する宗教者像」, 日本宗教学会第 74 回学術大会, 創価大学, 2015/9/5

日高悠登「チャブレンへのインタビュー—きぼうのいえを例に—」, 心の先端研究ユニット年次総会・ポスター研究交流会 (こころのポスター研究交流会), 京都大学, 2016/2/14

MASAKI, Tomoko “Creating Childhood: A Phenomenological Study on Charles Keeping’s Through the Window”, The 22nd Biennial Congress of IRSC at the University of Worcester, UK, 2015/8/8-12

正置友子「モーリス・センダックの『ケニーのまど』を見る—人生における危機一髪するとき—」絵本学会第18回大会, 東京工芸大学 (中野キャンパス), 2015/5/30

正置友子「絵本2冊を考察する:『いないいないばあ』(松谷一瀬川)と『いないいないばあそび』(木村)—保育者として, あなたはどちらを読んでいますか—」, 日本乳幼児教育学会 第25回大会, 昭和女子大学, 2015/11/28

正置友子「幼い子どもたち(0歳~3歳)にとって, 絵本とはなにか—メルロ=ポンティとともに考える—」, 第38回臨床哲学研究会, 大阪大学, 2015/11/21

KASCH, Franziska “The paradigm shift in obesity research and its ethical implications”, Kushiro International Summer School & Roundtable in Bioethics, Kushiro Tourism and International Relations Center, 2015/8/28

山口弘多郎「フッサールの新資料を読む(4):『生活世界』」, フッサール研究会第4回特別企画, 同志社大学, 2015/11/06

山口弘多郎「誰が現象学をするのか—『危機』の再考—」, 日本現象学会第37回研究大会, 同志社大学, 2015/11/08

(3) その他(書評・翻訳など)

【2014年度】

〔博士前期〕

田中悠太「開かれた住まいの可能性と住まいの安全性—「中津の家(仮)」と「田田庵」を中心に, 安定性 / 不安定性を巡って」, 『臨床哲学』第16号, pp.135-146, 2015/3

竹中正太郎, 古荘匡義, 高原耕平「ダイアローグ(対話)としての哲学—大谷大学における哲学カフェ2013年度実践報告(研究ノート)」, 『哲学論集』, 大谷大学哲学会, 61号, pp.38-54, 2015/3

〔博士後期〕

青木健太(翻訳) リサ・フォークマーソン・シェル「単なる喪失ではない: 加齢に伴う認知症における自己のあり方」(浜渦辰二との共訳)『臨床哲学』第16号, pp.82-109, 2015/3

中川雅道(翻訳) トーマス・ジャクソン, アシュビー・リン・バトナー「スタートアップキット©初心者のための子どものテツガク授業集(第3版)」, 『臨床哲学』第16号, pp.110-134, 2015/3

前原なおみ(研究ノート)「対話を通して「まちづくり」の課題を問い直す」, 『臨床哲学』第16号, pp.147-157, 2015/3

浜渦辰二, 杉本光衣, 菊竹智之, 川崎唯史, 永浜明子, 稲原美苗(報告)「精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み—「べてるの家」訪問研修報告」, 『臨床哲学』第16号, pp.158-253, 2015/3

川崎唯史(文献紹介)「エティエンヌ・パンブネ『自然と人間性—メルロ=ポンティの著作における人間学的な問題』」, 『メタフュシカ』第45号, pp.169-174, 2014/12

アサダワタル(聞き手=川崎唯史・菊竹智之)「「居場所」という思考を即興で作る」, 『臨床哲学のメチエ』第21号, pp.15-25, 2014/5

川崎唯史「安心できる居場所のためのミニブックレビュー」, 『臨床哲学のメチエ』第21号, pp.40-43, 2014/5

【2015年度】

〔博士前期〕

高原耕平(翻訳) サラ・ヘイナマー「老いの変容: 自己性, 標準性, 時間」(浜渦辰二との共訳)『臨床哲学』第17号, pp.77-100, 2016/3

高原耕平「Trip to Toronto (特集 共生と多文化主義の比較研究に向けて)」, 『未来共生学』第3号, pp. 177-193, 2016/3

伊藤莉央, 岩根あずさ, 小泉朝未, 林貴哉, 陳文叡, 山田真知子「野田村班—震災から4年を経た野田村の今—6人の眼を通して見えたもの」, 『未来共生プログラム—コミュニティ・ラーニング—2015—東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書』, pp.67-106, 2016/1

小泉朝未「身体障害者の芸術表現を支える場に出会って」、『未来共生学』第3号, pp.453-455, 2016/3

[博士後期]

川崎唯史(書評)「河野哲也著『境界の現象学 始原の海から流体の存在論へ』」、『フランス哲学・思想研究』20, pp. 304-307, 2015/9

日高悠登(要旨)「再考する宗教者像」、『宗教研究』89巻別冊第74回学術大会紀要号, pp. 376-377, 2016/3

前原なおみ(研究ノート)「老衰死の看取り体験から老いの課題を考える: ボーヴォワールの『古い』を手掛かりとして」、『臨床哲学』第17号, pp.102-117, 2016/3

浜渦辰二, 永山亜樹, 永井佳子, 稲原美苗, 永浜明子(報告)「精神障害をもつ人たちを地域で支える取り組み—沖縄訪問研修報告—」、『臨床哲学』第17号, pp.153-187, 2016/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2015年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 2名 大学院: 1名 (計3名)

2015年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名

2014年度: 0名 2015年度: 1名

9. 刊行物

2014年度 『臨床哲学 vol.16』 『臨床哲学のメチエ vol.21』

2015年度 『臨床哲学 vol.17』

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

第 35 回臨床哲学研究会	2014 年 9 月 5 日
第 36 回臨床哲学研究会	2015 年 2 月 7 日
Open Seminar: Welcoming Prof. Sara Heinämaa: Multiple Faces of Phenomenology	2015 年 3 月 24・25 日
第 37 回臨床哲学研究会	2015 年 7 月 25 日
第 38 回臨床哲学研究会	2015 年 11 月 21 日
Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium "Phenomenology of Vulnerability and Limits	2016 年 3 月 1-3 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

大阪大学医療人文学研究会との共催で研究会を不定期で開いている。

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 浜渦 辰二 教授

1952 年生。1984 年、九州大学大学院文学研究科哲学専攻博士課程単位取得退学。文学博士（九州大学）。1989 年、九州大学文学部助手。1991 年、静岡大学人文学部助教授。1996 年、同教授。2008 年 4 月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

1-1. 論文

浜渦辰二「グリーフケアのために」, グリーフケア研究所編『グリーフケア』(グリーフケア研究所), 第4号, pp. 1-16, 2016/3

Hamauzu, Shinji, "Intersubjectivity of Ageing -- Reading Beauvoir's *The Coming of Age* --", 臨床哲学研究室編『臨床哲学』, 第 17 号, pp. 23-35, 2016/3

浜渦辰二他(共著)「精神障がいをもつ人たちを地域で支える取り組み(2)」, 臨床哲学研究室編『臨床哲学』, 第 17 号, pp. 153-187, 2016/3

Hamauzu, Shinji, "Dialogue in Husserl's phenomenology and psychiatry", 『定常型社会におけるケアとそのシステム』(科研報告書), pp. 61-70, 2016/3

Hamauzu, Shinji, "Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective", 『定常型社会におけるケアとそのシステム』(科研報告書), pp. 71-82, 2016/3

浜渦辰二「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実―自律と依存を両立させる試み―」, 静岡哲学会編『文化と哲学』, 第 32 号, pp. 1-17, 2015/8

浜渦辰二「生老病死と共に生きる―ケアの臨床哲学にむけて―」, 日本哲学会編『哲學』, No.66, 知泉書館, pp. 45-61, 2015/4

Hamauzu, Shinji, "Towards a Phenomenological Approach to the Problem of Organ Transplantation after Brain Death", Kwok-ying Lau / Chung-Chi Yu (Eds.) *BORDER-CROSSING - Phenomenology, Interculturality and Interdisciplinary*, Königshausen & Neumann, pp. 113-127, 2015/3

浜渦辰二「二つの「臨床哲学」が再会するとき」, 木村敏・野家啓一(監修)『臨床哲学とは何か 臨床哲学の諸相』河合文化教育研究所, pp. 262-279, 2015/1

浜渦辰二「尊厳死を法制化するとは、何をすることなのか? ―日本とヨーロッパ3 国の比較考察―」, 『メタフュシカ』編集委員会『メタフュシカ』第 45 号, 大阪大学大学院文学研究科哲学講座, pp. 1-14, 2014/12

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 浜渦辰二(共訳), (Sara Heinämaa, “Transformations of Old Age: Selfhood, Normativity, and Time”) サラ・ヘイナマー「老いの変容: 自己性, 標準性, 時間」, 臨床哲学研究室編『臨床哲学』, 第17号, pp. 76-99, 2016/3
- 浜渦辰二(監訳), (Edmund Husserl, *Phänomenologie der Intersubjektivität*, Martinus Nijhoff, 1973) エドムント・フッサール『間主観性の現象学Ⅲ その行方』, 筑摩書房, pp. 1-599, 2015/10
- 浜渦辰二(共訳), (Lisa Folkmarson Käll, “No Simple Loss: Selfhood in Age Related Dementias”) リサ・フォークマーソン・シェル「単なる喪失ではない: 加齢に伴う認知症における自己のあり方」, 臨床哲学研究室編『臨床哲学』, 第16号, pp.82-109, 2015/3

1-4. 口頭発表

- Hamauzu, Shinji, (パネリスト) “Introduction to Phenomenology of Vulnerability and Limits”, Phenomenology of Vulnerability and Limits: Finnish-Japanese Research Collaboration: International Symposium, 大阪大学待兼山会館, 2016/3
- 浜渦辰二 (招待講演) 「リビングウィルを法制化する必要があるのか?」, リビングウィルの法制化は必要?: 2015 年度第4回リビングウィル勉強会, 患者のウェル・リビングを考える会, あすてっぷ KOBE, 2016/2
- 浜渦辰二 (パネリスト) 「北欧ケアの思想的基盤を求めて」, 北欧ケアの思想的基盤を掘り起こす: 公開ラウンドテーブル, 科研「北欧在宅ケア」研究会, 大阪大学中之島センター, 2016/2
- 浜渦辰二 (招待講演) 「依存と自立の対立を越えて」, 第 179 回1月定例会: マイケアプラン研究会, ひと・まち交流館京都, 2016/1
- 浜渦辰二 (招待講演) 「いつかやって来る死のことを考えておきたい」, エンディングノートを書こう: 老い支度教室, 患者のウェル・リビングを考える会, 兵庫県立生活創造センター, 2015/10
- 浜渦辰二 (パネリスト) 「フッサール現象学と精神医学における対話」, 障害の哲学: 理論とその応用: 阪大・臨床哲学研究室& 東大・UTCP 上廣共生哲学寄付研究部門合同ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/10
- 浜渦辰二 (パネリスト) 「イントロ〜北海道から沖縄へ」, 精神障害を持つ人が地域で暮らすのを支える: OKINAWA / ITALIA: 合同研究会, 大阪大学中之島センター, 2015/10
- 浜渦辰二 (招待講演) 「地域で暮らし続けるとは/からほりモデルを考える」, ケアタウンからほりの街づくり: 第1回からほりケア CAFE, 医療介護連携研究所・ぼちぼちいこ会, 上町荘, 2015/9
- Hamauzu, Shinji, (基調講演) “Dialogue in Husserl’s phenomenology and psychiatry”, DIALOGUE AND INTERSUBJECTIVITY: interdisciplinary workshop, ヘルシンキ大学, 2015/9
- Hamauzu, Shinji, (招待講演) “Intersubjectivity of Ageing – Reading Beauvoir’s *The Coming of Age*”, seminar: philosophical seminar, ヘルシンキ大学, 2015/9
- Hamauzu, Shinji, (招待講演) “Dialogue in Psychiatry and Person-centered Care”, seminar, Psychiatric Team for the Elderly in Borås, Sweden, 2015/9
- Hamauzu, Shinji, (招待講演) “Intersubjectivity of Person-centred Care: a phenomenological perspective”, seminar, Centre for Person-Centred Care (GPCC), University of Göteborg, Sweden, 2015/9
- 浜渦辰二他 (パネリスト) 「さまざまなケア場面での「在宅・地域ケア」への動きから考え」, 大会テーマ「生活モデルへ転換」: 第41 回日本保健医療社会学会, 日本保健医療社会学会, 首都大学東京, 2015/7
- 浜渦辰二 (招待講演) 「リビングウィル(どう生きるか?)について」, あなたは最期をどのように暮らしたいですか? ―在宅ホームホスピスとは―: 講演会・シンポジウム, NPO 法人風の葉, 旭区民センター, 2015/7
- 浜渦辰二 (招待講演) 「生老病死について」, 腎不全になったら: 2015 年度 第 2 回 リビングウィル勉強会, 患者のウェル・リビングを考える会, 兵庫県立生活創造センター, 2015/6
- 浜渦辰二 (パネリスト) 「生老病死と共に生きる―ケアの臨床哲学にむけて―」, ケア― 共に生きる―: 日本哲学会第 74 回大会シンポジウム, 日本哲学会, 上智大学, 2015/5
- 浜渦辰二 (招待講演) 「尊厳死って何ですか?」, 2015 年度 第 1 回 リビングウィル勉強会, 患者のウェル・リビングを考える会, 神戸市勤労会館, 2015/4
- 浜渦辰二 (招待講演) 「意思決定支援のあり方」, 第 2 回高齢者障がい者なんでも相談会: なんでも相談会総括フォーラム, 岡山

高齢者・障がい者権利擁護ネットワーク懇談会，きらめきプラザ，岡山，2015/3

浜渦辰二（パネリスト）「ドイツにおける事前指示書の法制化の内実―自律と依存を両立させる試み」，第 37 回大会シンポジウム：欧州における看取りと自己決定，静岡大学哲学会，静岡大学，2014/12

浜渦辰二（招待講演）「医の倫理：言葉の不思議さ，重要性について」，第 47 回東洋鍼灸医学大講演会：はり・きゅうのことを知って心身を養生，東洋鍼灸医学会，京都大学芝蘭会館稲森ホール，2014/11

Hamauzu, Shinji, (招待講演) “From my experience of having lost two mothers- On dying after living with dementia from a second-person perspective of Japanese philosophical researcher -”, Open seminar, Centre for Gender Research, Uppsala University, Sweden, 2014/10

Hamauzu, Shinji, (招待講演) “Dementia as a sickness of interpersonal relationship”, International conference in Norrköping: Life with Dementia: Relations, Centre for Dementia Research, Linköping University, Sweden, 2014/10

浜渦辰二（招待講演）「保健医療の現場で当事者の価値に寄り添う倫理とは」，保健医療分野におけるソーシャルワーク専門研修第 10 期スクーリング，日本社会福祉会・日本医療社会福祉協会，エルイン京都，2014/8

浜渦辰二（招待講演）「ホスピスの臨床哲学 日本とヨーロッパの見聞録」，第 6 回ホスピス学校，日本ホスピス・在宅ケア研究会 山梨支部，山梨県文学館，2014/7（『ホスピス学校講演録』Vol.6, pp. 1-6, 2014/7）

Hamauzu, Shinji, (パネリスト) “尊厳死を法制化するとは？～ヨーロッパでは～”，科研「定常型社会におけるケアとそのシステム」研究会，兵庫医療大学，2014/6

浜渦辰二（パネリスト）「事前指示や意思決定支援 ～ヨーロッパでは～」，シンポジウム「事前指示」「リビングウィル」とは？ ― 人生の最終段階を考える―，〈ケア〉を考える会-岡山，川崎医療福祉大学，2014/6

Hamauzu, Shinji, (招待講演) “Caring and Phenomenology-From Husserl’s Phenomenology of Intersubjectivity”, International Conference of P.E.A.CE (Phenomenology for East-Asian Circle) cum 8th SPA (Symposia Phenomenologica Asistica): 公開国際シンポジウム，Yasumoto International Academic Park, The Chinese University of Hong Kong, 2014/5,

浜渦辰二（招待講演）「身近な人を葬送するために何が必要ですか？」，中之島哲学コレージュ，アートエリア B1，2014/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013 年度～2015 年度，基盤研究(B) 海外，代表者：浜渦辰二

課題番号:25300019

研究題目：北欧の在宅・地域ケアに繋がる生活世界アプローチの思想的基盤の解明

研究経費：2014 年度 直接経費 3,900,000 円 間接経費 1,170,000 円

2015 年度 直接経費 4,200,000 円 間接経費 1,260,000 円

研究の目的：

北欧諸国は福祉とケアの先進国として知られ、ノーマライゼーションの理念やスウェーデン・モデルの主導価値は紹介されているものの、ネオリベリズムの影響後も生き延びているその思想的・哲学的背景は十分明らかにされていない。これまでの我々の研究は、北欧諸国の福祉とケアの現場でそれがどう生かされているかを学術的に調査するなかで、一方で在宅・地域ケアの実践の浸透と、他方で生活世界アプローチという理論とに、共鳴関係を見いだしてきた。それを踏まえて、両者の関係が単なる偶然ではない繋がりを持っていることを学際的に調査・解明することが、新しい研究の課題となる。わが国でも超高齢社会に対応する「在宅医療・介護」が推し進められるなかで、その思想的基盤を固めるためにも、本研究は大いに貢献することが期待される。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2013 年度～2015 年度，3：受託研究，助成金獲得者：浜渦辰二

助成金名：課題設定による先導的人文・社会科学研究推進事業(実社会対応プログラム)

研究題目:ケアと支えあいの文化を地域コミュニティの内部から育てる臨床哲学の試み

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2014 年度 直接経費 3,968,000 円

2015 年度 直接経費 2,284,000 円

研究の目的:

少子・高齢化社会のなかでは、勝ち抜き競争型の文化ではなく、ケアと共助・互助という支え合いの文化が大切になってきた。そしてそれを育てることこそが、リスク社会に対処するための対策になることを、まずは阪神淡路大震災において、さらに東日本大震災の惨劇の経験から、私たちは学んできた。

そうした時代背景と社会的変遷のなかで、生と知を根本で結びあわせる哲学探究を通して、研究者が人文・社会諸科学の研究者とともに地域コミュニティに関与し、コミュニティ構成員とともに学問知を鍛え直し、ケアと支え合いの文化をコミュニティ自体のなかに育て、個人とコミュニティの双方をエンパワーする臨床型プログラムを移植する。社会の痛苦の現場と学術研究の叡智の現場とを恒常的に結ぶ、そんな臨床的学術研究のしくみが確実に本国に定着することを求め、この研究課題を提案したい。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学研究倫理委員会・委員, 2013 年 9 月～現在に至る

九州大学哲学会・委員, 2005 年 4 月～現在に至る

日本現象学会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

西日本哲学会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

静岡大学哲学会・幹事, 1991 年 4 月～現在に至る

2. 堀江 剛 教授

1961 年生。2001 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（臨床哲学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2003 年）。2004 年、広島大学総合科学部助教授。2007 年、同准教授。2011 年、同教授。2016 年 4 月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

堀江剛(書評)「河村厚『存在・感情・政治:スピノザへの政治心理学的接近』関西大学出版部 2013 年」,『倫理学研究』(関西倫理学会), 44, 関西倫理学会, pp. 183-185, 2014/6

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 本間 直樹 准教授

1970 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学。文学修士（大阪大学）。大阪大学大学院文学研究科哲学講座助手、同講師を経て、2005 年 4 月に大阪大学コミュニケーションデザイン・センター講師に就任し、文学研究科を兼任。2006 年 4 月より現職。専攻：哲学／倫理学／臨床哲学。

3-1. 論文

本間直樹, 久保田徹(共著)「サウンド・オブ・ミュージックという名前の授業について彼らはこう語った」, コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』14, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 43-66, 2016/3

本間直樹, 金和永, 高橋綾他(共著)「哲学相談のコミュニティ・アプローチとしてのフィロソファー・イン・レジデンス」, 本間直樹(編)『philosophers』1, pp. 6-32, 2016/1

本間直樹, 佐久間新, 菊竹智之(共著)「からだから遠く : からだトーク 2014」, コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』13, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 23-47, 2015/9

本間直樹「コミュニケーションデザインの意味するもの」, システム制御情報学会(編)『システム/制御/情報』(システム制御情報学会), 58-12, pp. 508-513, 2014/12

高橋綾, 川崎唯史, 本間直樹(共著)「ケアの「人間化」のために I : 淀川キリスト教病院における, 対話を取り入れた臨床倫理検討会についての考察」, コミュニケーションデザイン・センター(編)『Communication-Design』11, コミュニケーションデザイン・センター, pp. 1-25, 2014/9

3-2. 著書

本間直樹(共編)『Communication-Design 2005-2015』コミュニケーションデザイン・センター, 2016/3

本間直樹(監修)『生と死をつなぐケアとアート』生活書院, 2015/11

本間直樹, 松川絵里, 高橋綾他(共著)『哲学カフェのつくりかた』大阪大学出版会, pp. 215-250, 2014/6

本間直樹(監修)『病院のアート』生活書院, 2014/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

本間直樹 (基調講演)「臨床哲学と対話」, 日本ホスピス緩和ケア協会 2015 年次大会, 日本ホスピス緩和ケア協会, 東京国際展示場, 2015/7

本間直樹 (招待講演)「コミュニケーションデザインとしての対話」, 第 59 回システム制御情報学会:コミュニケーションデザインへのアプローチ, システム制御情報学会, 中央電気会館, 2015/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度, 基盤研究(C) 一般, 代表者:本間直樹

課題番号:25350931

研究題目:対話による〈探究のコミュニティ〉形成を通じた場のセーフティに関する研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

〈探究のコミュニティ〉は、子どもたちが身体と声による対話活動によって、互いの多様な感情的・知的表現を認め合い、セーフティをともに支えあうことによって、さまざまな創造的な関係や活動を生み出す実践である。この〈探究のコミュニティ〉の形成を通じた場のセーフティとはいかなるものか、それはコミュニティの参与者によってどのように感じとられ、どのような事象と具体的に結びついていのか、場のセーフティはどのような概念によって記述されるのか、についてアクションリサーチ、映像による質的研究、海外事例調査などを通して明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

アートミーツケア学会・理事, 2006 年 10 月～現在に至る

2-4 中国哲学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 1 准教授 0 講師 1 助教 0

教授：湯浅 邦弘

講師：辛 賢

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	1	2	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	1	1	0	0
2015	2	2	0	0
計	3	3	0	0

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部生については、①中国哲学の基礎知識と思想史全般の流れを理解するよう指導する。②文献資料を読むために必要な技術など、基礎的な調査能力について指導する。大学院生については、①各研究主題に関する専門知識及び資料分析の方法を習得できるよう指導する。②国内外の学会での積極的な研究発表（口頭発表・論文の投稿）を奨励する。学部生・大学院生共通の教育目標としては、①論文作成に備え、随時個別指導を行う。②修了（卒業）後の進路について随時相談を行い、それぞれの希望に応じた柔軟な対策・指導を行う。③研究室HPの更新に努めるなど、学生に対する教育・研究情報の公開を進める。

2. 研究

本研究室は、全国でも数少ない中国哲学研究の拠点として定評を得ている。特に、新出土文献の研究と懷徳堂の研究は、本研究室の研究活動の両輪となっている。そこで、①新出土文献の研究を推進し、海外学術調査を進め、その成果を国内外の学会で発表する。②大阪大学中国学会の事務局として、『中国研究集刊』を刊行する。③懷徳堂研究会の事務局として、懷徳堂文庫資料の調査研究を進め、その成果を報告書にまとめて刊行する、などを目標として掲げた。

3. 社会連携

社会連携の一環として、国際学術交流を推進し、また、財団法人懷徳堂記念会の事業に協力することを目標として掲げた。具体的には、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懷徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進めて公開する。②中国や台湾の大学と共催して国際学会を開催する。③懷徳堂アーカイブ講座（懷徳堂記念会）の開催準備を進め、運営に協力する、などである。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

大学院・学部ともにそれぞれの必要な知識や研究方法について習得するよう、指導を行った。大学院生に関しては、国内外の研究交流会および学会において、口頭発表や論文の投稿を行えるよう指導した。一方、学部指導においては、資料の解説に必要な基本知識・調査技術などについて指導を行った。進路についても、随時相談に乗り、その結果、それぞれの希望する道に進むことができた。なお、懷徳堂事業や中国出土文献に関する研究情報について、研究室 HP に公開し、随時更新を行った。

2. 研究

【2014 年度】

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会（旧戦国楚簡研究会）が、上海博物館、甘肅省博物館、甘肅省文物考古研究所、甘肅簡牘博物館などへ赴き、学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 58 号～第 59 号を刊行した。懷徳堂文庫の調査研究については、その成果の一部を『懷徳堂研究』第 6 号に掲載した。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。大学院生も、懷徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

【2015 年度】

新出土文献研究については、研究室に事務局を置く中国出土文献研究会（旧戦国楚簡研究会）が、中国国家図書館、北京大学博物館、同方知網（北京）技術有限公司、清華大学などへ赴き、学術調査を行った。研究室編集の学術誌『中国研究集刊』は期間中に第 60 号～第 61 号を刊行した。懷徳堂文庫の調査研究については、その成果の一部を『懷徳堂研究』第 7 号に掲載した。また、教員は、科研費補助による研究成果として口頭発表または学術論文として研究報告を行った。大学院生も、懷徳堂文庫資料の調査研究を精力的に進めた。

3. 社会連携

【2014 年度】

具体的な成果として、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懷徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進め、北京大学（儒蔵編纂委員会）に提供した。②懷徳堂デジタルアーカイブ「西村天囚書簡」および「懷徳堂考」の制作に協力した。また、湯浅教授は、NHKテレビ（Eテレ）の教養番組「100 分 de 名著」に出演し、『孫子』や『菜根譚』について解説した。

【2015 年度】

具体的な成果として、①北京大学が推進している「儒蔵」編纂事業に協力し、懷徳堂の中井履軒による四書注釈書の研究・翻刻を進め、北京大学（儒蔵編纂委員会）と刊行についての最終調整を行った。②懷徳堂デジタルアーカイブ「懷徳堂考」「論語聞書」「中井終子」日記・写真」「懷徳堂文庫」データベース」の制作に協力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

【2014 年度】

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、などである。また、名古屋大学の中国学関係研究室との定期的な研究交流はすでに 12 回を超えたが、これも、学生の学力向上に資するものとして評価できる。

【2015 年度】

目標に沿って着実な教育がなされていると自己評価できる。具体的には、(1)竹簡・帛書など新出土資料を精力的に取り上げたこと、(2)中国古代思想を中心に、近世および日本漢学に至る幅広い時代を対象としたこと、(3)「懷徳堂文庫」の整理・調査、およびそのデジタル・コンテンツ化と公開を行ったこと、(4)「大阪大学未来基金「学部学生による自主研究奨励事業」」のアドバイザー教員を引き受け、意欲的に研究を推進しようとする学生のサポートをしたこと（※採択についての参考 URL http://www.osaka-u.ac.jp/ja/oumode/education_env/ug_jishuken/selected_projects）、などである。また、名古屋大学の中国学関係研究室との定期的な研究交流はすでに 14 回を超えたが、これも、学生の学力向上に資するものとして評価できる。

2. 研究

設定した研究目標に従い、研究が円滑かつきわめて生産的に実施されていると自己評価できる。特に、新出土文献の研究と懷徳堂の調査・研究は、全国的に見ても本研究室の特色として認知されるに至っている。

3. 社会連携

国際学術交流は、儒蔵の編纂協力や国際学会の共催という形で十分に達成できたと自己評価できる。また、当研究室の伝統として、懷徳堂事業への積極的な関わりがあるが、この点も、教授・学生とも全面的な協力を努めており、研究室の組織的な社会貢献が充分になされていると自己評価できる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計

2014	1(1)	2(1)	0(0)	1(1)	1(1)	5(4)
2015	0(0)	2(1)	0(0)	1(1)	0(0)	3(2)
計	1(1)	4(2)	0(0)	2(2)	1(1)	8(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等講演会	その他	計
2014	2	1	3	0	0	6
2015	0	0	1	0	0	1
計	2	1	4	0	0	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

佐藤由隆「『鶴学問』三宅石庵の実像」、『2014 年国立高雄餐旅大学応用日語系「観光、言語、文学」国際学術研討会 論文集』（台湾・国立高雄餐旅大学）, pp.37-52, 2014/11

佐藤由隆「『鶴学問』三宅石庵と陸象山」、『懷徳』（懷徳堂記念会）, 第 83 号, pp.31-43, 2015/1

〔博士後期〕

梶島雅弘「銀雀山漢墓竹簡「奇正」篇の思想史的意義——兵家思想と道家思想」、『中国研究集刊』（大阪大学中国学会）, 第 59 号, pp.85-101, 2014/12

梶島雅弘「銀雀山漢墓竹簡「聴有五患」篇と古代中国の「聴」」、『待兼山論叢』（哲学篇）（大阪大学文学会）, 第 48 号, pp.1-15, 2014/12

梶島雅弘「『孫臏兵法』再考——「義兵」と「詭道」」、『関西大学中国文学会紀要』（関西大学中国文学会）, 第 36 号, pp.125-149, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

佐藤由隆「消された「格物致知」章——五井蘭洲『質疑篇』と中井履軒『質疑疑文』」、『待兼山論叢』（哲学篇）（大阪大学文学会）, 第 49 号, pp.19-34, 2015/12

〔博士後期〕

梶島雅弘「中井履軒『述龍篇』と八陣解釈」、『懷徳』（懷徳堂記念会）, 第 84 号, pp.55-63, 2016/1

梶島雅弘「『荀子』議兵篇に見える兵家批判と「謀」—— 儒家思想と兵家思想」、『関西大学中国文学会紀要』（関西大学中国文学会）, 第 37 号, 2016/3

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

佐藤由隆「『鶴学問』三宅石庵の実像」, 2014 年国立高雄餐旅大学応用日語系「観光、言語、文学」国際学術研討会, 台湾・国立高雄餐旅大学, 2014/5

佐藤由隆「『鶴学問』三宅石庵と陸象山」, 第 16 回懷徳堂研究会, 大阪大学（文学部中庭会議室）, 2014/6

野口眞戒「近世日本儒学における廃仏論について——『儒仏問答』『出家論』に関する一考察」, 第 13 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会, 2014/11

佐藤由隆「『蘭洲遺稿』における他氏批評から見る五井蘭洲の学問観」, 第 19 回懷徳堂研究会, 大阪大学 (文学部中庭会議室), 2015/3

〔博士後期〕

梶島雅弘「中井履軒『述龍篇』と八陣解釈」, 第 17 回懷徳堂研究会 (文学部中庭会議室), 大阪大学, 2014/12

梶島雅弘「『三略』の思想的特質——儒家思想と「謀」」, 「漢学」国際学術研討会, 致理技術学院 (台北縣板橋市), 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

佐藤由隆「消された格物致知論——自筆本『質疑篇』と『質疑疑文』」, 第 21 回懷徳堂研究会, 大阪大学 (文学部中庭会議室), 2015/8

(3) その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

梶島雅弘・野口眞戒・佐藤由隆「懷徳堂関係研究文献提要 (三十一)」 懷徳堂記念会『懷徳』第 83 号, pp.55-63, 2015/1

〔博士後期〕

梶島雅弘「清華簡『赤★(鳥+咎)之集湯之屋』釈読」 大阪大学中国学会『中国研究集刊』, 第 58 号, pp.122-137, 2014/6

梶島雅弘「新出土資料関連文献提要 (十二)」 大阪大学中国学会『中国研究集刊』, 第 58 号, pp.155-164, 2014/6

梶島雅弘「新出土資料関連文献提要 (十三)」 大阪大学中国学会『中国研究集刊』, 第 59 号, pp.159-165, 2014/12

梶島雅弘「懷徳堂関係研究論考目録 (二〇一〇～二〇一四年)」 懷徳堂記念会『懷徳』第 83 号, pp.64-70, 2015/1

梶島雅弘「中井履軒『述龍篇』翻刻」 懷徳堂研究センター『懷徳堂研究』第 6 号, pp.49-66, 2015/2

梶島雅弘・野口眞戒・佐藤由隆「懷徳堂関係研究文献提要 (三十一)」 懷徳堂記念会『懷徳』第 83 号, pp.55-63, 2015/1

【2015 年度】

〔博士前期〕

野口眞戒・佐藤由隆「懷徳堂関係研究文献提要 (三十二)」 懷徳堂記念会『懷徳』第 84 号, pp.44-53, 2016/1

〔博士後期〕

梶島雅弘「新出土資料関連文献提要 (十四)」 大阪大学中国学会『中国研究集刊』, 第 61 号, pp.155-164, 2015/12

梶島雅弘「成語」(『テーマで読み解く中国の文化』湯浅邦弘主編, ミネルヴァ書房, 2016/3)

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

〔学部〕 井戸本侑子, 文学部賞, 大阪大学, 2014 年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 4 名

2014 年度：2 名 2015 年度：2 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 3 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2014 年度：1 名 2015 年度：1 名（※2014 年度と同一人物）

9. 刊行物

2014 年度 『中国研究集刊』第 58 号、第 59 号 刊行

2015 年度 『中国研究集刊』第 60 号、第 61 号 刊行

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

懐徳堂研究会(研究会、研究会開催・事務局引受)

2000 年～現在に至る

中国出土文献研究会(2010 年 10 月、戦国楚簡研究会を改称。研究会、研究会開催・事務局引受)

1998 年～現在に至る

大阪大学中国学会(学会、事務局引受)

1984 年～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

第 16 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2014 年 6 月 29 日

第 55 回中国出土文献研究会(於 TKP 大手町ビジネスセンター)

2014 年 7 月 13 日

第 17 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2014 年 8 月 25 日

第 13 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会(大阪大学文法経講義棟 32 番教室)

2014 年 11 月 15 日

第 18 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2014 年 12 月 20 日

第 56 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2014 年 12 月 26・27 日

第 19 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2015 年 3 月 27 日

第 20 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2015 年 6 月 6 日

第 57 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2015 年 7 月 4・5 日

第 21 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2015 年 8 月 22 日

第 58 回中国出土文献研究会(於中国北京大学出土文献研究所)

2015 年 9 月 5 日

第 59 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2015 年 9 月 22 日

第 60 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2015 年 11 月 22 日

第 22 回懐徳堂研究会(於大阪大学文学部大会議室)

2015 年 12 月 6 日

第 61 回中国出土文献研究会・特別講演会(於大阪大学文学部中庭会議室)

2015 年 12 月 19 日

第 62 回中国出土文献研究会(於大阪大学中国哲学資料室)

2015 年 12 月 20 日

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 湯浅 邦弘 教授

1957 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士（大阪大学、1997 年）。北海道教育大学講師、島根大学助教授、大阪大学助教授を経て、2000 年 4 月現職。2011 年 7 月、大阪大学功績賞（社会・国際貢献部門）受賞。2013 年 7 月、中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」受賞。専攻：中国哲学／中国思想史／懷徳堂研究。

1-1. 論文

湯浅邦弘「懷徳堂学派の『論語』解釈—「異端」の説をめぐって—」大阪大学懷徳堂研究センター『懷徳堂研究』（懷徳堂研究センター）、第 7 号, pp. 3-17, 2016/2

湯浅邦弘「「主」と「客」—兵家と道家を中心として—」大阪大学文学会『待兼山論叢』（大阪大学文学会）、第 49 号哲学篇, pp. 1-17, 2015/12

湯浅邦弘「水戦の思想—銀雀山漢墓竹簡「十陣」—」大阪大学中国学会『中国研究集刊』（大阪大学中国学会）、第 60 号, pp. 73-91, 2015/6

湯浅邦弘「観光資源としての老荘故里」国立高雄餐旅大学応用日語系『「観光・言語・文学」国際学術研討会論文集』（2014 年国立高雄餐旅大学応用日語系『「観光・言語・文学」国際学術研討会）、pp. 1-6, 2014/11

湯浅邦弘「上博楚簡『舉治王天下』的堯舜禹伝説」武漢大学簡帛研究中心『簡帛』（武漢大学簡帛研究中心）、第 9 輯, 上海古籍出版社, pp. 113-127, 2014/10

1-2. 著書

湯浅邦弘他(編)『テーマで読み解く中国の文化』ニネルヴエ書房, 425p, pp. 3-27, pp. 84-87, pp. 385-386, 2016/3

湯浅邦弘『このせちがらい世の中で誰よりも自由に生きる—自己啓発の到達点「老子」「荘子」の考え』宝島社, 223p., 2015/10

湯浅邦弘『軍国日本と『孫子』』筑摩書房, 253p., 2015/6

湯浅邦弘(共著)『別冊 100 分 de 名著 老子×孫子 「水」のように生きる』NHK出版, 174p, pp. 2-3, pp. 31-52, pp. 74-92, pp. 114-134, pp. 152-172, 2015/2

湯浅邦弘他(共著)『『論語』入門—古いからこそ新しい思想—』河出書房新社, pp. 72-94, 2015/1

湯浅邦弘『菜根譚』NHK出版, 96p., 2014/11

湯浅邦弘『菜根譚』角川学芸出版, 237p., 2014/10

湯浅邦弘『入門 老荘思想』筑摩書房, 261p., 2014/7

湯浅邦弘『竹簡学—中国古代思想の探究—』大阪大学出版会, 348p., 2014/5

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

湯浅邦弘(解説)「懷徳堂から「大坂」を知る」大阪大学『阪大 NOW』（大阪大学）、2015 年 10 月号, 大阪大学, pp. 12-17, 2015/10

湯浅邦弘(解説)「人類の文化遺産「板木」—「国際木板保存研究協議会」参加記—」東方書店『東方』（東方書店）、412, 東方書店, pp. 9-14, 2015/6

湯浅邦弘(書評)「書評『宗教の世界史6 道教の歴史』（横手裕著）」中央公論新社『中央公論』（中央公論新社）、2015 年 6 月号, 中央公論新社, pp. 210-211, 2015/5

湯浅邦弘(書評)「出土資料研究待望の書—『地下からの贈り物』—」東方書店『東方』（東方書店）、405, 東方書店, pp. 32-35, 2014/10

1-4. 口頭発表

湯浅邦弘「「主」と「客」—以兵家と道家を中心—」「先秦經典字義源流」國際學術研討會：「先秦經典字義源流」國際學術研討會, 香港浸會大學, 香港浸會大學, 2015/10

湯浅邦弘「清華簡『殷高宗問於三壽』的思想特色」「先秦兩漢出土文獻與學術新視野」國際學術研討會：「先秦兩漢出土文獻與學術新視野」國際學術研討會, 台灣大学, 台灣大学, 2015/10

湯浅邦弘「銀雀山漢墓竹簡「十陣」について―「漢学」国際学術研討会:「漢学」国際学術研討会, 台湾東亜漢学研究者之会, 致理技術学院, 2015/3

湯浅邦弘「懷徳堂文庫について―印を手がかりに古文書の来歴を知る―」大阪大学職員研修:大阪大学職員研修, 大阪大学 附属図書館, 大阪大学附属図書館, 2014/12

湯浅邦弘「観光資源としての老荘故里」アジア文化研究国際学術研討会―観光・言語・文学・思想―:アジア文化研究国際学術 研討会―観光・言語・文学・思想―, (台湾)国立高雄餐旅大学応用日語系, (台湾)国立高雄餐旅大学, 2014/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

湯浅邦弘 大阪大学総長表彰, 大阪大学, 2013/10

湯浅邦弘 2013 年中文デジタルパブリッシング・デジタルアーカイブ国際学会「優秀学術論文賞」, 中文デジタルパブリッシング・ デジタルアーカイブ国際学会, 2013/7

湯浅邦弘 大阪大学功績賞(社会・国際貢献部門), 大阪大学, 2011/7

湯浅邦弘 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通機構, 2003/12

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:湯浅邦弘

課題番号:26284009

研究題目:中国新出土文献の思想史的研究―戦国簡・秦簡・漢簡―

研究経費:2014 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

2015 年度 直接経費 2,200,000 円 間接経費 420,000 円

研究の目的:

現在、中国思想史研究の分野で世界的に注目を集めている新出土文献の解読を進め、中国古代思想史、特に先秦から漢代思想の形成と展開を明らかにすることを目的とする。具体的には、現在順次刊行が進められている『上海博物館蔵戦国楚竹書』『清華大学蔵戦国竹簡』『岳麓書院蔵秦簡』『北京大学蔵西漢竹書』等に基づいて、それぞれの新出土文献を、思想史・文字学の専門家からなる共同研究によって解読し、最終的には、これらの新出土文献の研究を通じて得られた新知見をもとに、新たな中国古代思想史の記述を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本中国学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

中国出土文献研究会・会長, 2012 年 4 月～現在に至る

東方学会・学術委員(東方学査読委員), 2011 年 7 月～現在に至る

全国漢文教育学会・理事, 2005 年 4 月～現在に至る

日本道教学会・理事, 2004 年 4 月～現在に至る

懷徳堂研究会・代表, 2000 年 4 月～現在に至る

中国出土資料学会・理事, 1989 年 4 月～現在に至る

2. 辛 賢 講師

1967 年、韓国ソウル生。2002 年、筑波大学大学院哲学・思想研究科博士課程修了。博士(文学)。日本学術振興会外国人特別研究員(筑波大学)を経て、2004 年 4 月現職。専攻:中国哲学、漢代易学。

2-1. 論文

Shin, Hyeon, “Aspects of study of the Confucian Classics during the Han: The formation of cosmological “knowledge” ”『ACTA ASIATICA: Bulletin of the Institute of Eastern Culture』 No. 109, The Toho Gakkai (The Institute of Eastern Culture), pp. 17-47, 2015/8

2-2. 著書

辛賢他(共著)『(小南一郎編)学問のかたち—もう一つの中国思想史』汲古書院, pp. 33-67, 2014/8

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

辛賢(訳注)『朱子語類』卷第一百 邵子之書 訳注(その三)』大阪大学大学院文学研究科『大阪大学大学院文学研究科紀要』56, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-20, 2016/3

辛賢(訳注)『朱子語類』卷第一百 邵子之書 訳注(その二)』大阪大学大学院文学研究科『大阪大学大学院文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 19-41, 2015/3

辛賢(書評)「歴史的研究が織りなす「術」のパノラマ—『術の思想—医・長生・呪・交霊・風水』(三浦國雄編)」東方書店『東方』401, 東方書店, pp. 30-34, 2014/7

2-4. 口頭発表

辛賢「邵雍「先天易」の形成—『太玄』との関わりから—」:エコ・フィロソフィ 自然・環境・道教, 日本道教学会, 東洋大学 白山キャンパス, 2015/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

辛賢 日本中国学会賞, 日本中国学会, 2001/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本道教学会・理事, 2012 年 1 月～現在に至る

日本中国学会・広報委員会委員, 2007 年 4 月～現在に至る

三国志学会・評議員, 2006 年 7 月～現在に至る

2-5 インド学・仏教学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：榎本 文雄

准教授：堂山英次郎

助教：名和 隆乾

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
3	1	0	0	0	3	0	1

*うち留学生 0名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	0	0	2	0
2015	0	1	0	1
計	0	1	2	1

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部生と大学院生の学問的な相互交流を促進できるような授業形態をとること、またインド学・仏教学関係の学会・研究会等の情報を収集して学生に周知し、研究意欲の高揚をはかることに力点を置き、以下の更なる目標を設定した：学部では2年次生向けの専門語学と講義の授業を開講し、基礎的な知識や学力の充実を、また3年次以上の学生に向けては原典輪読の授業を開講し、研究資料の読解やその利用法のスキルアップを目標とした。4年次生には、卒業論文作成のための論文作成指導の授業を設定した。大学院では、修士論文及び博士論文の作成演習の授業を開講し、資料の解読と論文作成の指導に重点を置くとともに、学会での口頭発表や学術誌への投稿論文作成の奨励と指導を目標とした。また、各種研究助成に関する情報の入手につとめ、研究の経済的基盤を支援することも目標として掲げた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、学内・学外の研究会には積極的に参加すること、また国内外の研究機関及び研究者との交流・協力を教員が主導して促進することを目標とした。

3. 社会連携

教員は積極的に一般向けの講演や著作を行うこと、及び学会等において役員等の責務を果たすことを目標として掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

設定した目標に向けて講義・演習を行ない、学部生の二次文献も含めた読解力の向上のため、授業・授業外での指導に多くの時間をかけた。また学問的な相互交流を促進するために、論文作成演習の授業を有効に使い、教員、大学院生、学部生の垣根を超えた全員参加型の議論・情報交換の場を、より一層充実させた。2015 年度には、この授業の一環として、教員 1 名による周到な準備の下、総合図書館で開催された「雑誌論文入手に必要な基礎知識を得るための講習会」に参加し、大いに有益であった。また 2015 年度には、教員 1 名が外国語学部の兼任教員として授業（1 学期 2 学期 1 コマずつ）を担当し、その授業の TA を本専門分野の大学院生が務めたことで、その大学院生の指導にも役立った。その他、特筆すべきこととして以下のことが挙げられる。まず、2013 年度に続き、2014 年度にも博士後期課程の大学院生 1 名が日本学術振興会の特別研究員（DC）に採用された。2015 年度には、本専門分野の博士後期課程出身の日本学術振興会特別研究員（PD）が博士予備論文を提出し、審査の結果、合格の評価を受け、同じく本専門分野の博士後期課程出身の本学特任研究員が課程博士論文を提出し、審査の結果、博士（文学）の学位を取得した。

2. 研究

学内外の研究会・学会へは、教員及び学生の多くが積極的に参加し、また国内外の研究者・学術機関との交流も活発に行なった。教員も学生も、積極的に学会発表及び学術雑誌への投稿を行った。学生については、学会発表や論文投稿に際し、論文作成演習の授業（上記 1. 教育）の中で予備発表・予備議論を行なうことで、発表・論文の質を大きく高めることに成功した。その他特記すべき活動として以下のものがある。教員 1 名は、2013 年度に引き続き、インド仏教の基本的術語の基準訳語集構築を目指す科学研究費補助金基盤研究（S）の研究分担者を務め、その主導の許、本専門分野の特任研究員が中心となり、本専門分野出身の本学・他大学の非常勤講師、本専門分野の日本学術振興会特別研究員、大学院生、研究生も作業を分担して、2013 年度に冊子の形で出版した研究成果に基づくウェブディクショナリーを作成し、2015 年 11 月に同教員を代表者とする連名で公開した。同教員はまた、2015 年 9 月の印度学仏教学会でパネラーとして重要な問題提起の一角を担った。教員のもう 1 名は、2015 年度から 4 年間の予定で科学研究費補助金基盤研究（C）を獲得した。同教員はまた、2015 年 6～7 月にタイ王国のバンコクで行われた国際サンスクリット学会の言語学部会において研究発表を行った。

3. 社会連携

教授会メンバーの教員はいずれも「日本印度学仏教学会」等で、理事・評議員等の職務を遂行している。一般向けの著作に関しては、教員 1 名が、既刊の初期仏典の共訳書に多少の手を加えたものを文庫本の形で刊行したことが特筆される。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生の原典及び二次文献の読解力に向上が見られ、多彩かつ風通しのよい演習授業を行なった結果、幅広い視点や掘り下げた議論で構成される修士論文が提出された。また上にある通り、学部生から在籍した博士後期課程出身の本学特任研究員が 2015 年度に博士（文学）の学位を得たことは、当研究室が設定した教育目標が継続的に機能し実を結んだひとつの証拠であって、客観的に見て評価できることであろう。2015 年度における大学院生の学会発表

等の数は当研究室に在籍する学生の数に起因することであり、教育効果の問題ではない。今後、新たに進学してくる学生たちが同様の教育を受けることで、これまで在籍した学生以上の成果を彼らが発信していくことが大いに期待できよう。当分野における教育の中心はサンスクリットなどで書かれた各種古典文献群の読解が中心となるため、長期にわたる粘り強い訓練を必要とすると同時に、学生個々人のレベルアップやその速度にも当然ながら個人差がある。しかし、学生 1 人 1 人に合った指導が行き届くように目配りをした結果が、如上の結果につながったと考えられる。目標の達成とともに、上記の方針を継続すべきものとして確認できたことも評価できよう。

2. 研究

各教員がそれぞれ、国内外の学会への出席、研究者・学術機関との交流に努め、また学会発表や学術誌への投稿も積極的に行っており、全体として目標を達成したと考えられる。また外部資金（科学研究費補助金）の獲得や国際学会への参加に関しても、一定の成果があったと言える。一方、外国語による論文の執筆や海外ジャーナルへの投稿については、教員がより積極的に行ない、大学院生にもそれらを促していくことが、今後は更に必要であると考えられる。

3. 社会連携

一般向けの著作や、学会等における役員の責務遂行において、目標は達成されたと言える。一方、一般向けの講演会などへの参加という点では、更なる積極的な役割を担う余地を残している。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

名和隆乾、パーリ聖典における輪廻と *viññāṇa* の研究 — 輪廻主体の問題を中心に —、榎本文雄、堂山英次郎、湯浅邦弘

【論文博士】

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	1	0	0	0	1
2015	0	0	0	0	0	0
計	0	1	0	0	0	1

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

Mariko Tomita, “Issues on Nibbāna with Special Reference to Verse No. 1074 of the *Upasīvamāṇavapucchā* in the *Suttanipāta*”
Journal of Indian Philosophy (Published online: 27 November 2014), pp.1-15. 2014/10

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士後期〕

古川洋平 「信を伴う出家と世俗の価値観との相剋」 日本佛教学会 2014 年度学術大会, 於種智院大学, 2014/9/10

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014 年度 : 0 名 2015 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度 : 0 名 2015 年度 : 0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「第 2 回南アジア考古・文献研究会」を主催、2014 年 11 月 3 日

「第 4 回ヴェーダ文献研究会」を主催、2015 年 3 月 22 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

1998 年度より 4 ヶ月に 1 回「中央アジア学フォーラム」(東洋史学専門分野と共同で主催)

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 榎本 文雄 教授

1954 年生。京都大学文学部卒、京都大学大学院文学研究科博士後期課程指導認定退学。文学修士(京都大学)、博士(文学、京都大学)。京都大学助手、華頂短期大学専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、1999 年 8 月現職。2014 年度パーリ学仏教文化学会賞。専攻：インド仏教学。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

荒牧典俊, 本庄良文, 榎本文雄(共訳)『スッタニパータ [釈尊のことば] 全現代語訳』講談社, pp. 106-202, pp. 319-322, 2015/4

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

榎本文雄「初期仏教文献における prapañca (/ papañca)」日本印度学仏教学会第 66 回学術大会, 日本印度学仏教学会, 高野山大学, 2015/9

榎本文雄「初期仏典の形成と異宗教との共存」東洋大学国際哲学研究センター連続研究会: 文字化された宗教教典の形成とその意味—多文化共生を図るツールを考える—, 東洋大学国際哲学研究センター, 東洋大学, 2014/10

榎本文雄「初期のインド仏教文献の現代語訳をめぐる諸問題」第 59 回国際東方学会議, 東方学会, 日本教育会館, 2014/5 (*Transactions of the International Conference of Eastern Studies*, 59, pp. 76-78, 2014/12)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

榎本文雄 2014 年度パーリ学仏教文化学会賞, パーリ学仏教文化学会, 2014/5

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・監事, 2009 年 9 月～現在に至る

日本西藏学会・委員, 2005 年 10 月～現在に至る

仏教史学会・評議員, 2003 年 11 月～現在に至る

インド思想史学会・理事, 2003 年 4 月～現在に至る

パーリ学仏教文化学会・理事, 1999 年 4 月～現在に至る

日本仏教学会・理事, 1996 年 4 月～現在に至る

日本印度学仏教学会・理事, 1996 年 4 月～現在に至る

2. 堂山 英次郎 准教授

1972 年生。大阪外国語大学外国語学部卒、東北大学大学院文学研究科博士後期 3 年の課程単位取得退学。文学修士（東北大学）、博士（文学、東北大学）。京都大学人文科学研究所助手を経て、2004 年 4 月大阪大学大学院文学研究科講師、2014 年 9 月同研究科准教授。2007 年日本南アジア学会第 1 回学会賞受賞、2008 年第 50 回日本印度学仏教学会賞受賞。専攻：インド学（ヴェーダ文献研究）、インド・イラン学、歴史言語学。

2-1. 論文

堂山英次郎 「インドラへの懷疑と信 ——RV II 12,5——」『印度學仏教研究』64, 日本印度学仏教学会, pp. 1-8, 2016/3

堂山英次郎 「書評:Toshifumi Gotō (in co-operation with Jared S. Klein and Velizar Sadovski), *Old Indo-Aryan Morphology and Its Indo-Iranian Background*. Wien 2013: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften.」『歴史言語学』3, 日本歴史言語学会, pp. 73-84, 2014/11

堂山英次郎 「Av. *mazdā* 再考」『西南アジア研究』81, 西南アジア研究会, pp. 1-23, 2014/9

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

堂山英次郎 「インドラが歌う」第5回ヴェーダ文献研究会, ヴェーダ文献研究会, 国際仏教学大学院大学, 2015/10

堂山英次郎 「インドラへの懷疑と信心 ——RV II 12,5——」日本印度学仏教学会第66回学術大会, 日本印度学仏教学会, 高野山大学, 2015/9

Dōyama, Ei-jirō, “The Vedic adverb *śāsvat*”, 16th World Sanskrit Conference, International Association of Sanskrit Studies, Sanskrit

Studies Center, Silpakorn University, 2015/6 (16th World Sanskrit Conference; Book of Abstracts, pp. 106-106, 2015/6)

堂山英次郎「ヴェーダ文献が伝える金属、金属器、及びその利用法について」第2回南アジア考古・文献研究会、南アジア考古・文献研究会、大阪大学文学研究科、2014/11

堂山英次郎「ヴェーダ語における3人称複数接続法の語形について」日本歴史言語学会第4回大会、日本歴史言語学会、国立民族学博物館、2014/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堂山英次郎 平成20年度国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞、大阪大学、2009/2

堂山英次郎 第50回日本印度学仏教学会賞、日本印度学仏教学会、2008/9

堂山英次郎 日本南アジア学会第1回学会賞、日本南アジア学会、2007/10

堂山英次郎 印度学宗教学会第3回学会賞、印度学宗教学会、2006/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015年度～2018年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 堂山英次郎

課題番号: 15K02042

研究題目: 接続法を中心とするヴェーダ語叙法の研究——文法研究と思想研究の融合を目指して——

研究経費: 2015年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

研究の目的:

ヴェーダ語動詞の文法範疇「叙法」は、動詞の内容に対する話し手の態度を表示する。その正しい理解は、話し手の価値観や聞き手との関係性を知る有力な手がかりとなる。本研究は、叙法が最も豊富に用いられる『リグヴェーダ』を中心に、姉妹言語アヴェスタ語の資料をも参照しつつ、(1)積極的な態度表明を担う狭義の叙法(接続法・希求法・命令法)のうち接続法の機能を、他の二者との相関関係の中で明らかにし、(2)祭式・神話での祭官や神々の発言・会話に見る叙法の機能から、彼らの関係性や、その社会的・宗教的背景の解明を目指す。本来表裏一体の文法研究と思想研究とが、相互補完的にヴェーダ文化の理解に繋がる範例としたい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・理事、2016年1月～現在に至る

インド思想史学会・監事、2013年4月～現在に至る

日本印度学仏教学会・評議員、2004年7月～現在に至る

印度学宗教学会・評議員、2004年6月～現在に至る

3. 名和 隆乾 助教

1984年生。2013年、日本学術振興会特別研究員(DC2)。2014年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(インド学・仏教学専攻)単位取得退学。2015年、京都光華女子大学真宗文化研究所委嘱研究員。2015年、大阪大学文学研究科特任研究員。博士(文学)(大阪大学、2016年)。2016年4月より現職。専攻: インド学・仏教学

3-1. 論文

名和隆乾「パーリ聖典における四無量心の予備的研究 — 四無量心と涅槃の関係について —」『真宗文化』, 25, pp. 1-21, 2016/3

名和隆乾「Samyuttanikāya 12.64 に関する一考察 — patitthitam tattha viññāṇam の原意とその受容 —」『待兼山論叢(哲学

篇)』, 49, pp. 1-16, 2015/12

榎本文雄, 河崎豊, 名和隆乾他(共編)『パーリ文献の五位七十五法対応語』(ウェブディクショナリー), 2015/11

名和隆乾「阪大班ウェブディクショナリー作成までの作業報告」*Newsletter Baudhakośa*, 5, pp. 3-8, 2015/3

名和隆乾「パーリ聖典における輪廻と識についての一考察：識の *ava-kram* を中心に」『印度學佛教學研究』(日本印度学仏教学会), 63-2, pp. 895-891, 2015/3

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-6 日本学

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 3 准教授 2 講師 1 助教 0

教授：杉原 達、平田 由美、北原 恵

准教授：宇野田尚哉、北村 毅

講師：安岡 健一

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
47	10	13	0	3	0	1	0

*うち留学生 16 名、社会人学生 1 名

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	21	3	4	5
2015	17	4	6	8
計	38	7	10	13

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

教育について掲げた目標は、以下の 6 点である。①卒業論文・修士論文・博士論文作成について、日本学教員全員によって指導に取り組み、無理なく論文を完成させることができるようにシステムを充実させる(論文完成までのシステム充実)。②個別学術論文の作成について、テーマに応じて他大学の研究者も含めて議論する場を更に組織する(他大学との連携)。③大学関係者以外の場における議論の場を設け、異領域とのコミュニケーション能力の向上を図る(大学外との連携)。④海外の大学や機関と連携して発表・交流の機会を創出し研究室として支援する(海外の大学・機関との連携) ⑤学部生・院生による自発的な研究会活動を進めるための指導をおこなう(自主的活動の推進)。⑥自発的なパンフレットや情報発信を促進するための指導を更に強化する(メディアの創造)。総じて他機関との交流やコミュニケーションにかかわる環境の整備、ならびに能力の開発が目標となった。

2. 研究

研究について掲げた目標は、以下の 3 点である。①大小さまざまなシンポジウムや公開の研究会を組織し、その成果

を『日本学報』において発信する(『日本学報』の活用とその内容の充実)。②個々の論文作成に当たり、日本学の中で議論を共有すべく討議の機会を設ける(研究に関わる討議空間の創出)。③他大学、大学以外の研究機関、個人などとの研究上の連携を更に強化する(研究ネットワークの強化)。総じて、個々の研究テーマに即した形で柔軟に研究環境が構築できる体制を目指し、課題牽引型の研究形態とそのための環境整備を重点的に行った。

3. 社会連携

社会連携について掲げた目標は、以下の2点である。①研究会を非専門家や市民とともにおこなう。その際、共通の課題を設定する。②学生・大学院生の活動の評価において、社会における活動を重視する。社会連携については、恒常的な研究会、あるいはシンポジウム等のイベントの計画過程に市民の参加を求めた点にある。またその際、公立ミュージアムや、NPO、NGOをはじめとする学外組織や、在野の研究グループとの密接な連携がポイントになった。またこうした連携は上記の研究形態とも密接に関わる。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文・博士論文の作成についての指導において、より充実した開かれた環境が達成されつつある。具体的には複数の演習を通じて論文作成をバックアップする体制が強化された。また、領域横断的なカリキュラムである「日本学方法論の会」において、学外者とのコミュニケーションも深まった。特に注目すべきは、2012 年度から「日本学学生企画補助金」の制度を設けて学生主導のシンポジウムや講演会を経済的に支援し、それによって複数の学生による企画が実現したことである。2013 年度からは、院生と学部生が共催する研究会も始動し、ともに自発的な議論の場を持つようになった。また、院生の海外での国際発表の機会を増やすために、2011 年度からオーストラリア国立大学(ANU)主催のサマースクールでの院生の参加・発表を支援してきた。さらに 2015 年度には国際交流基金主催の夏季集中セミナーにも参加し研究発表する機会を設けている。マンガやアニメといったポピュラーカルチャーにかかわる学生や院生による研究の自主的な情報発信も、随時おこなわれている。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

2. 研究

上記の「日本学方法論の会」の成果を、『日本学報』において特集として発信した。京都大学や同志社大学、立命館大学、神戸大学といった関西圏の大学との連携も一層深まりつつある。また、京都国際マンガミュージアム、兵庫県立歴史博物館、北九州市漫画ミュージアム、南山宗教文化研究所などに就職している修了生たちとの情報交換も拡大し、見学会なども随時おこなっている。演習以外の研究会も多く開催され、他大学、他研究機関のハブとして日本学の間が機能しつつある。以上を鑑み、おおむね目標は達成されたと考える。

3. 社会連携

研究会やシンポジウムには、他大学の研究者以外にも市民が多く参加している。また大阪で活動する NPO や NGO のグループとの連携も深まり、恒常的な人的交流が行なわれている。さらに恒例となりつつある原田神社秋季例大祭への参加は、地域貢献として、地元でも評価されつつある。以上を鑑み、目標はおおむね達成されたと考える。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

教育に関わる上記の活動により、卒業論文・修士論文・博士論文において、高い水準の維持と創造的なテーマ設定の深化がすすんだ。また、海外との学術交流も活発に行い、国際日本学研究会の開催や、Australia-Japan Graduate Conference への学生の参加の支援、学生主催の研究会の実施は、特筆される教育活動の成果だと言える。また、学部生

も含めて、複数の自主的な研究会組織が生まれ、文字通り議論の場としての日本学が構築されてきている。個々の研究もこうした複数の研究組織により生み出され維持されている。こうしたなかで育まれた議論のスキルや問題設定能力は、研究関係職のみならず出版やマスコミをはじめ多様な職種においても評価されている。以上から、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

研究に関わる上記の活動により、博士論文の執筆ならびにその出版物としての刊行がすすんだ。また他の個人研究においても多くの研究成果が公表され高い評価を受けている。研究環境については、議論のハブとしての役割は定着し、学外、非専門家との恒常的なネットワークも拡大した。こうした研究環境が個々の研究に反映されていったものと考えられる。以上より、おおむね研究についても目標は達成されたと自己評価できる。

3. 社会連携

社会連携に関わる上記の活動により、市民の研究会やシンポジウムへの参加はもとより、大阪で活動する NPO や NGO ならびに在野の研究グループとの恒常的な連携がすすんだ。またこうした社会連携が、上記の教育活動や研究活動とも有機的に関連しはじめている。以上より、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	5	0	5
2015	8	0	8
計	13	0	13

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

パイエ由美子「植芝盛平論 ―合気道思想の形成と展開―」2014/9

主査：川村邦光 副査：杉原達、宇野田尚哉

MIZIRAKLI, HALIT「枝雀落語の研究」2014/9

主査：川村邦光 副査：杉原達、宇野田尚哉

上地美和「在阪沖縄人の戦後経験―鉄くずと大正区を中心に―」2015/3

主査：杉原達 副査：川村邦光、富山一郎

染川清美「台湾日本語俳句に関する文化史的考察―「台北俳句会」を中心として―」2015/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、宇野田尚哉

栗山新也「芸能実践の豊かさを生きる―沖縄移民の芸能から広がる人やモノのつながりの研究―」2015/3

主査：杉原達 副査：川村邦光、富山一郎

張 懷文「台湾文化としての歌仔戲をめぐる研究―見せる/見られる女性の身体と演技を中心として―」2015/9

主査：川村邦光 副査：杉原達、北村毅

林曉淳「台湾における家族写真の文化史」2016/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、北村毅

川口葉子「日本基督教団の戦前・戦後史—教団合同・戦争責任・万博問題を中心に—」2016/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、北村毅

中山良子「戦後日本における青少年のセクシュアリティをめぐる言説と管理—性典映画・太陽族映画と映画規制の動向、および警察の非行対策に着目して—」2016/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、宇野田尚哉

竹原明理「生人形の系譜—近現代に生きる等身大人形をめぐる文化史的研究—」2016/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、北村毅

鎌倉祥太郎「読みと歴史認識の方法をめぐって—津村喬の思想史的研究—」2016/3

主査：杉原達 副査：川村邦光、宇野田尚哉

荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事福男選びの人類学的研究」2016/3

主査：川村邦光 副査：杉原達、宇野田尚哉

富永悠介「宮城菊の歴史経験と基隆「水産」地域—経験のゆくえ・東アジア・生存のかたち—」2016/3

主査：杉原達 副査：川村邦光、宇野田尚哉

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	3(3)	6(3)	0(0)	0(0)	1(0)	10(6)
2015	2(2)	8(6)	0(0)	0(0)	2(0)	12(8)
計	5(5)	14(9)	0(0)	0(0)	3(0)	22(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	3	6	5	0	0	14
2015	3	6	4	1	3	17
計	6	12	9	1	3	31

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1) 論文・単行本

【2014年度】

〔博士前期〕

飯守桂一「1950～60年代の障害者コロニーにおける「ものづくり」と空間の構築—「あざみ織」の事例を中心に—」『日本学報』34, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.61-80, 2015/3/20

猪岡叶英「大阪市大正区のウチナアンチュにおける長寿祝い—その儀礼形態と意味づけに関する一考察—」『京都民俗』32, 京都民俗学会, pp. 77-93, 2014/11

猪岡叶英「近代沖縄における長寿者の位相—明治30年代の「養老式」と風俗改良運動をめぐって—」『Cultures/Critiques』6, 国際日本学研究会, pp. 81-105, 2014/12/24

鳥居大嗣「作られる『ゴジラ』の物語」—1970年代～80年代の怪獣ファンダムの勃興と挫折を中心に—」『Cultures/Critiques』6, 国際日本学研究会, pp. 106-121, 2014/12/24

〔博士後期〕

荒川裕紀「西宮神社十日戎開門神事における参加者について（Ⅰ）—2001年から4年間の質問紙調査と参与観察から—」
『北九州工業専門学校研究報告』第48号, pp.109-118, 2015/1/31

鹿野由行「ゲイバーは不要なのか？—「若専」ゲイバーにおける新たな戦略—」『日本学報』34, 大阪大学大学院日本
学研究室, pp.81-96, 2015/3/20

鹿野由行「コメント2：空間理論をめぐる一考察—公共空間におけるジェントリフィケーションから—」『日本学報』34,
大阪大学大学院日本学研究室, pp.39-43, 2015/3/20

湯天軼「地平／生活／アポリアー中国における日本サブカルチャー翻訳をめぐる」『日本学報』34, 大阪大学大学院日
本学研究室, pp.97-107, 2015/3/20

中山良子「雑誌『平凡』に描かれた純潔『セクシュアリティの戦後史』京都大学学術出版会, pp.79-100, 2014/7/28

ソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグスト「コメント1：半田知雄の移民絵画—記録と郷愁の狭間—」『日本学報』34,
大阪大学大学院文学研究科日本学研究室, pp.28-38, 2015/3/20

【2015年度】

〔博士前期〕

稲田光太郎「帝国日本の従軍僧研究に向けて—日露戦争第9師団従軍布教使佐藤巖英の生涯と著作—」『日本学報』35, 大
阪大学大学院日本学研究室, pp.189-199, 2016/3/20

古山皓広「死と再認識の「装置」—明治から現代の喪服を対象として—」『Cultures/Critiques』7, 国際日本学研究会,
pp.102-119, 2016/3/1

仲村紗希「「笑い」と反骨—『大阪球陽新報』にみる石川正通の「沖縄コンプレックス」—」『日本学報』35, 大阪大学大
学院日本学研究室, pp.201-210, 2016/3/20

仲村紗希「『無言』と『沈黙』の凱旋表象—『大阪球陽新報』にみる『英雄』観—」『北華大学東亜歴史文化研究センター
大阪大学国際日本学研究会国際共同学術フォーラム「東アジアにおける戦争の記憶と歴史認識」』, pp.135-145, 2016/3

仲村紗希「在阪沖縄県人」の「同化」/「抵抗」—『大阪球陽新報』に反響するノイズ』『Cultures/Critiques』臨時増刊
号, 国際日本学研究会, pp.335-431, 2016/2/29

仲村紗希「『大阪球陽新報』にみる「日本人」の指標—移民教育に関する言説の分析を通して—」『移民研究』沖縄移民研
究センター, pp.153-162, 2016/3

〔博士後期〕

猪岡叶英「第五回国内勸業博覧会・人類館における『琉球』展示をめぐる」『イシバシ評論』川村邦光退職記念論集,
国際日本学研究会, pp.268-274, 2016/3/5

猪岡叶英「在阪沖縄出身者をめぐる長寿祝いのエスノグラフィー」『Cultures/Critiques』臨時増刊号, 国際日本学研究会,
pp.265-334, 2016/2/29

猪岡叶英「儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のころみ—大正沖縄県人会の「敬老会」を事例に—」『日本
学報』35, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.177-188, 2016/3/20

宇都宮めぐみ「日本人女性の朝鮮引揚と「内鮮結婚」」『日本学報』35, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.111-127, 2016/3/20

鹿野由行「男娼のセクシュアリティの再考察—近代大阪における男娼像の形成とコミュニティの変遷—」『待兼山論叢』
日本学篇 49号, 大阪大学文学会, pp.37-54, 2016/12/25

ファクンド・ガラシーノ「ラテンアメリカから帝国を宣伝する—ひとりのアルゼンチン日本移民が語る西洋・オリエン
ト・新世界」『日本学報』35, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.129-152, 2016/3/20

西井麻里奈「遺骨から見る原爆死没者慰霊碑—濱井信三における「復興」と「平和」の狭間—」『待兼山論叢』日本学篇
49号, 大阪大学文学会, pp.75-94, 2016/12/25

(2)口頭発表

【2014年度】

〔博士前期〕

猪岡叶英「『養老式』と風俗改良運動にみる近代沖縄の長寿者像」国際日本学研究会，南山大学名古屋キャンパス・南山宗教文化研究所，2014/8/27

鳥居大嗣「新しい『ゴジラ』論のために—魔術から生じる創造性について」国際日本学研究会，南山大学名古屋キャンパス・南山宗教文化研究所，2014/8/27

〔博士後期〕

荒川裕紀「十日戎開門「神事」の創造—西宮神社における近現代の変遷より」日本文化人類学会，幕張メッセ，2014/5/17

荒川裕紀「ブータンの教育戦略—GNHと国際理解—」日本国際理解教育学会，奈良教育大学，2014/6/14

荒川裕紀「十日戎開門神事の近現代における変遷」近畿民俗学会，大阪歴史博物館，2014/11/16

荒川裕紀「International Understanding from Educational Environment in Bhutan -Possibility of coexisting education for global human resources and GNH-（ブータンの教育事情から探る国際理解—グローバル人材教育とGNH 併存の可能性—）」韓国国際理解教育学会，大韓民国ソウル特別市ユネスコアジア太平洋国際理解教育院，2014/11/22

飯守桂一「1950-60年代の障害者コロニーにおける「ものづくり」と空間の構築」大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター主催講演会&大学院生研究発表会，大阪大学豊中キャンパス，2015/2/20

キム・ジュナ「高度経済成長期における韓国人研修・労働者の初期導入と実態—日本本土と沖縄との比較の観点から」朝鮮史研究会関西支部，中津センタービル，2014/11/22

キム・ジュナ「日韓協定以降のメディアから見る「韓国人出稼ぎ者」像」大阪大学大学院文学研究科グローバル日本研究クラスター主催講演会&大学院生研究発表会，大阪大学豊中キャンパス，2015/2/20

徐潤雅「富山妙子の作品に見る「韓国」—1980～80年代を中心に」ジェンダー史学会大会，横浜国立大学，2014/12/14

湯天軼「中国における日本サブカルチャー受容の現象学的研究序説」カルチュラル・スタディーズ学会，兵庫県中央労働センター，2015/3/20

中山良子「『読売新聞』にみる太陽族と補導 青少年の管理とセクシュアリティ」日本社会学会，神戸大学，2014/11/23
ソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグスト「少年時代の思い出を書き続けること—半田知雄の少年時代の記述を中心に」新大陸の日系移民の歴史と文化（研究会），国際日本文化研究センター，2014/7/20

ソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグスト「半田知雄の移民絵画：移民の姿を描きとめて—記録と郷愁の狭間」日本学方法論の会，大阪大学，2014/11/27

【2015年度】

〔博士前期〕

稲田光太郎「戦地に赴く仏教者—従軍僧佐藤巖英と「念仏師団」の兵士たち—」国際シンポジウム「移動という経験—東アジアから考える—」，大阪大学大学院日本学研究室，大阪大学中之島センター，2016/2/21

仲村紗希「『大阪球陽新報』にみる「偶発性」と「ノイズ」—構造を問い直す装置としてのメディア—」沖縄文化協会 2015年度公開発表会，沖縄国際大学，2015/6/27

仲村紗希「無言と「沈黙」の凱旋表象—『大阪球陽新報』にみる「英雄」観—」北華大学東亜歴史文化研究センター大阪大学国際日本学研究会国際共同学術フォーラム「東アジアにおける戦争の記憶と歴史認識」，北華大学（中国・吉林省），2015/8/22

〔博士後期〕

飯守桂一「障害と「モノ」をめぐる新たな移動論に向けて」障害学会，関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス，2015/11/7-8

猪岡叶英「儀礼的空間における沖縄アイデンティティ継承のこころみ—大正沖縄県人会の「敬老会」を事例として」第880回日本民俗学会談話会（2014年度修士論文発表会），日本民俗学会，神奈川大学，2015/5/10

猪岡叶英「在阪沖縄出身者における祖先供養の諸相—沖縄からの位牌・仏壇の移動と地域宗教者の関与をめぐる—」日本宗教民俗学会，大谷大学，2015/6/13

猪岡叶英「オキナワを大阪で祀る―沖縄県糸満市字座波・下田門の場合―」北華大学東亜歴史文化研究センター大阪大学国際日本学研究会国際共同学術フォーラム「東アジアにおける戦争の記憶と歴史認識」, 北華大学 (中国・吉林省), 2015/8/22

猪岡叶英「「位牌」「香炉」の継承にみる本土沖縄出身者の戦後生活史―在阪沖縄第2・3世代による祖先祭祀の実践を中心に―」日本民俗学会, 関西学院大学, 2015/10/11

猪岡叶英「シマを出る位牌―沖縄の祖先祭祀の継承にみる戦争の影響―」国際シンポジウム「移動という経験―東アジアから考える―」, 大阪大学大学院日本学研究室, 大阪大学中之島センター, 2016/2/21

猪岡叶英「平成27年度ちゃんちゃん祭り調査報告(長柄町)」平成27年度ちゃんちゃん祭り調査報告会, 天理市市役所, 2015/8/22

ファクンド・ガラシーノ「スペイン語圏から日露戦争後の日本を書く―E.G.カリージョの紀行文を中心に―」国際シンポジウム「移動という経験―東アジアから考える―」, 大阪大学大学院日本学研究室, 大阪大学中之島センター, 2016/2/21

謝花直美「沖縄戦による避難・疎開・離散―那覇軍港となった垣花」日本平和学会秋期研究集会, 琉球大学, 2016/2/22

中西美穂「フィリピンのアートに出会う」大阪市立大学都市研究プラザ先端的都市研究拠点・第2回URP特別研究員(若手・先端都市)研究発表会(合評会)兼大阪マニラ都市研究フォーラム, 大阪市立大学学術情報センター, 2016/3/9

中山良子「非行対策の強化における「若者」のセクシュアリティとマスメディア」関西社会学会, 立命館大学, 2015/5/22

中山良子「Postwar Japan's juvenile delinquency Policy and "Taiyouzoku"」, Australia Japan Graduate Conference 2015, オーストラリア国立大学, 2015/8/3

西井麻里奈「東アジアの歴史認識と「ヒロシマ」」北華大学東亜歴史文化研究センター大阪大学国際日本学研究会国際共同学術フォーラム「東アジアにおける戦争の記憶と歴史認識」, 北華大学 (中国・吉林省), 2015/8/21

西井麻里奈「平和記念都市における「公安」―復興期広島市の公共空間をめぐる考察―」同時代史学会大会, 大妻女子大学, 2015/12/5

西井麻里奈「歴史のなかの〈原爆スラム〉―「平和都市」の来歴と未来〈原爆スラム〉と基町研究に関する報告と徹底討論そして今後展望の会, 広島市, 2015/12/19

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014年度】

〔博士後期〕

中山良子「【コラム】顔をあわせて」『現代風俗研究会年報 現代風俗 かお』34号, 現代風俗研究会, pp. 114-115, 2014/12/31

鹿野由行、中西美穂、中山良子「討論を終えて」『日本学報』34, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.57-60, 2015/3/20

【2015年度】

〔博士後期〕

鹿野由行、中山良子「Australia Japan Graduate Conference 2015に参加して」『日本学報』35, 大阪大学大学院日本学研究室, pp.287-290, 2016/3/20

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

中山良子, スミセイ女性研究者奨励賞受賞, 2015年2月

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計2名)

2015年度 PD: 0名 DC2: 2名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部：0 名 大学院：0 名（計 0 名）

2015 年度 学部：0 名 大学院：0 名（計 0 名）

6. 専門分野出身の研究者

大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について

鄭祐宗 博士後期課程修了，大谷大学文学部，講師，2015/4

中村平 博士後期課程修了，広島大学大学院文学研究科，准教授，2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

（2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 2 名

2014 年度：2 名 2015 年度：0 名

＜内訳＞ 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 2 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 3 名

2014 年度：1 名 2015 年度：2 名

9. 刊行物

2014 年度 『日本学報』34，『Cultures/Critiques』6，臨時増刊号

2015 年度 『日本学報』35，『Cultures/Critiques』7，臨時増刊号，『イシバシ評論』川村邦光退職記念論集

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日本学研究会・事務局

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2014 年度】

1、国際日本学研究会第 8 回学術大会（担当 川村邦光）

日付・場所 2014 年 8 月 27 日 南山宗教文化研究所（南山大学・名古屋キャンパス）

発表者：猪岡叶英（大阪大学大学院生）、竹原明里（大阪大学大学院生）、イリーナ・オリーガ（大阪大学大学院生）、鳥居大嗣（大阪大学大学院生）、番匠健一（大阪大学大学院生）、林葉子（大阪大学）、村山由美（南山宗教文化研究所）、宋秀環（龍華科技大学）

2、イシバシ評論研究会・秋の研究集会（担当 川村邦光）

日付・場所 2014 年 9 月 20 日 大阪大学豊中キャンパス

発表者：永岡崇（南山宗教文化研究所）、荒川裕紀（北九州工業高専／大阪大学大学院生）、荒川理沙（同志社大学大学院）、堀江有里（世界人権問題研究センター）

3、日本学方法論の会（担当 北原恵）

日付・場所 2014 年 11 月 27 日 待兼山会館会議室

テーマ 視覚表象と〈日本〉

報告者：高嶺格（秋田公立美術大学）、佐藤守弘（京都精華大学）

コメンテーター：ソアレス・モッタ・フェリッペ・アウグスト（大阪大学大学院生）、鹿野由行（大阪大学大学院生）

4、日本学学生企画セミナー（担当 北原恵）

日付・場所 2015 年 1 月 21 日 待兼山会館会議室

テーマ 戦後日本と韓国における労働の記憶、闘争の記録

報告者：朴貞淑、金美禮

企画者：金ジュナ（大阪大学大学院生）、徐潤雅（大阪大学大学院生）、中村友樹（大阪大学大学院生）、洪ジョンウン（大阪大学大学院生）

【2015 年度】

1、国際日本学研究会第 9 回学術大会（担当 川村邦光）

日付・場所 2015 年 8 月 22 日 北華大学（中国・吉林省）

テーマ 「東アジアにおける戦争の記憶と歴史認識」

2、日本学方法論の会（担当 川村邦光）

日付・場所 2015 年 10 月 28 日 大阪大学豊中キャンパス芸術研究棟・日本 B 教室

テーマ 吊いの形をめぐって「鎮魂の花火の民俗学」

報告者：丸山泰明（国立公文書館アジア歴史資料センター調査員）

3、日本学学生企画セミナー（担当 北村毅）

日付・場所 2016 年 2 月 12 日 大阪大学豊中キャンパス・スチューデントコモンズ

テーマ 「被爆を語る」

トーク：おしどり ワークショップ：西井麻里奈（大阪大学大学院生）、京都市民放射能測定所、ほか

企画者：中山良子（大阪大学大学院生）、西井麻里奈（大阪大学大学院生）、富永悠介（大阪大学大学院生）

4、国際シンポジウム「移動という経験—東アジアから考える—」（担当 宇野田尚哉）

日付・場所 2016 年 2 月 20 日、21 日 大阪大学中之島センター

報告者：伊豫谷登士翁（一橋大学名誉教授）、安岡健一（大阪大学日本学研究室）、申寅燮（韓国：建国大学アジア・ディアスポラ研究所）、北村毅（大阪大学日本学研究室）、ファクンド・ガラシーノ（大阪大学大学院生）、稲田光太郎（大阪大学大学院生）、猪岡叶英（大阪大学大学院生）

ディスカッサント：美馬達哉（立命館大学）、西川祐子、孫歌（中国：中国社会科学院）、ブレット・ド・バリー（米国：コーネル大学）、朴裕河（韓国：世宗大学）

主催：大阪大学大学院日本学研究室、文化環境論コース、グローバル日本研究クラスター

5、日本学学生企画セミナー（担当 北村毅）

日付・場所 2016 年 3 月 14 日 朝日楼（池田市石橋）

ブルースシンガー・小林万里子さんの語りと歌の会「わたしはひとりで＜黒人＞をやっていた」

企画者：戸田弘子（大阪大学大学院生）

6、書評会「吊い、そして死者との共闘：川村邦光と『吊いの文化史』を読む」

日時 2016 年 3 月 5 日（土）13：30～17：00（開場 13：00）

場所 大阪大学 豊中キャンパス 豊中総合学館 402 号室

書評 黛友明（大阪大学大学院生）、畑中小百合（大阪大学非常勤講師）、田中雅一（京都大学人文科学研究所）

応答 川村邦光（大阪大学）

司会 永岡崇（日本学術振興会）

主催：大阪大学大学院日本学研究室・国際日本学研究会・イシバシ評論研究会

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 杉原 達 教授

1953 年生。1975 年京都大学経済学部卒業。1977 年大阪市立大学大学院経済学研究科前期博士課程修了。博士(経済学)。
1977-91 年、関西大学経済学部助手、専任講師、助教授、教授を経て、1992 年大阪大学文学部助教授、1997 年同教授、
1998 年大阪大学大学院教授。専攻：日本学／文化交流史。

1-1. 論文

杉原達「中国人強制連行・西松安野和解事業とその意義——『和解報告書』の刊行によせて——」『歴史学研究』(歴史学研究
会), 931, 青木書店, pp. 35-40, 2015/5

1-2. 著書

藤原書店編集部, 杉原達他(共著)『「アジア」を考える 2000～2015』藤原書店, pp. 204-205, 2015/6

曲啓傑, 張振倫, 杉原達他(共編著)『西松安野友好基金和解事業報告書』西松安野友好基金運営委員会, p. 246, 2014/10

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

杉原達「中国人強制連行」, 広島市立大学広島平和研究所編『平和と安全保障を考える事典』法律文化社, pp. 414-415,
2016/3

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 平田 由美 教授

1956 年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士(文学)(京都大学)。京都大学人文科学研究
所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本文学
・文化研究／ジェンダー研究。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

テッサ・モーリス＝スズキ, 平田由美他(共著)『ひとびとの精神史:朝鮮の戦争 1950 年代』岩波書店, pp. 77-102, 2015/8

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Hirata, Yumi, (パネリスト)“Sounds, Memory and History: Spaces of Korean War in Short Stories by Kim Dal-Su”, Exploring Space in Japanese Literature: Exploring Space in Japanese Literature, ベルリン自由大学歴史文化学部, ベルリン自由大学, 2015/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第15回女性史青山賞を賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 平田由美

課題番号: 25370414

研究題目: 移動する作家たちの東アジア: 交渉の場としての文学運動

研究経費: 2014年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2015年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

20世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集团的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 北原 恵 教授

1956年生。大阪大学経済学部卒業。同志社大学大学院文学研究科(美学及び芸術学)修了、東京大学大学院総合文化研究科博士課程(表象文化論)満期退学、学術博士(東京大学)。2001年甲南大学文学部助教授、2004年同教授、2008年大阪大学大学院文学研究科准教授、2012年より現職。専攻: 表象文化論/ジェンダー研究。

3-1. 論文

北原恵 「占領下古都の「女性」とメディア」『京都日日新聞』元社員・N 子さんへの聞き取り『イシバシ評論』国際日本学研究会 pp. 297-306, 2016/3

北原恵 「“モダン” と “伝統” を生きた日本画家・谷口富美枝(1910-2001年)」『待兼山論叢』48, 大阪大学文学研究科, pp. 1-25, 2015/3

北原恵 「天皇の「原爆患者」慰問はいかに語られてきたか? ——一九四七年全国巡幸」『インパクション』196, インパクト出版会, pp. 140-149, 2014/8

北原恵 「「官展にみる近代美術」展 主担当・ラワンチャイケン寿子さんに聞く」『インパクション』195, インパクト出版会, pp. 110-124, 2014/6

北原恵 「「森美術館問題」を考える—会田誠の性表現と「反米」の身振り」『インパクション』194, インパクト出版会, pp. 137-141, 2014/4

3-2. 著書

Kitahara, Megumi, “전쟁화를 그린 여성화가” 『싸우는 미술: 아시아·태평양전쟁과 일본미술』, 아연 출판부, pp. 84-109, 2015/12

北原恵 「ジェンダーとアート」『女性学・男性学(改訂版)』大阪大学出版会, 262p., 2015/3

北原恵 『阪大の女子大生』大阪大学文学研究科・日本学講座・北原ゼミ, 76p., 2015/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北原恵 「《書評》アライ=ヒロユキ『天皇アート論—その美、“天”に通ず』』『あいだ』あいだ編集部, 2014/11

3-4. 口頭発表

Kitahara, Megumi, “「女性従軍画家、長谷川春子—ジェンダーの視点から再考する戦争の記憶、忘却と再構築」”, 第 450 回 国学研究発表会, 延世大学国学研究院, 延世大学国学研究院, 2016/2

北原恵 「天皇の広島・被爆者慰問はいかに語られてきたか? : 1947 年全国巡幸」被爆 70 年 ジェンダーフォーラム in 広島, 被爆 70 年 ジェンダーフォーラム in 広島実行委員会, 広島市留学生会館, 2015/12

Kitahara, Megumi, “Women War Painters in Japan: Hasegawa Haruko’s Wartime Activity and Postwar Oblivion. ”, Wounds, Scars, and Healing: Civil Society and Postwar Pacific Basin Reconciliation, Postwar Pacific Basin Reconciliation Conference, シドニー大学, 2015/9

北原恵 「“モダン”と“伝統”を生きた日本画家・谷口富美枝」イメージ&ジェンダー研究会例会, イメージ&ジェンダー研究会, 上智大学, 2015/8

北原恵 「戦争画とは何か—アジア太平洋戦争期「御前会議」の表象をめぐって」ビジュアルの中のアジア太平洋戦争, 高麗大学日本研究センター, 韓国・高麗大学日本研究センター, 2015/6

北原恵 「“モダン”と“伝統”を生きた日本画家・谷口富美枝(1910—2001 年)」第一回谷口富美枝(仙花)研究会: 谷口富美枝(仙花)研究, 呉市立美術館・科研「軍事主義と女性美術家」共催, 呉市立美術館, 2015/2

Kitahara, Megumi, “What did Japanese Women Painters Represent During the War?: HASEGAWA Haruko’s Wartime Activity and Postwar Oblivion”, “Fighting Women” during and after the Second World War in Asia and Europe, NIOD(Institute for War, Holocaust and Genocide Studies), オランダ, 2014/6

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 北原恵

課題番号: 26360046

研究題目: 軍事主義から見る女性美術家と視覚表象

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2015 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

本プロジェクトの目的は、1930 年代から 50 年代にかけての日本及び東アジア圏の女性アーティストと戦争との関わりについて、ジェンダーと軍事主義、移動の視点からとらえ直すことである。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

イメージ&ジェンダー研究会・事務局, 2008 年 4 月～現在に至る

韓国、高麗大学グローバル日本研究院、学術誌『日本研究』 海外編集委員, 2016 年 1 月～現在に至る

4. 宇野田 尚哉 准教授

1967 年生。1993 年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、1996 年同後期課程単位修得退学。博士（文学）。2000 年神戸大学国際文化学部講師、2001 年同助教授、2007 年同大学大学院国際文化学研究科准教授。2010 年より現職。専攻：日本思想史。

4-1. 論文

宇野田尚哉「被爆体験・生活記録・山代巴」原爆文学研究会『原爆文学研究』(原爆文学研究会), 13, 原爆文学研究会, pp. 34-37, 2014/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

社会思想史学会・企画委員, 2015 年 11 月～現在に至る

日本思想史学会・編集委員長, 2014 年 10 月～2016 年 9 月

日本思想史学会・編集委員, 2012 年 10 月～2014 年 9 月

松江市史専門部会近世史部会・専門委員, 2010 年 6 月～現在に至る

5. 北村 毅 准教授

1973 年生。2006 年早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。2007 年早稲田大学高等研究所助教、2009 年同准教授。2010 年早稲田大学琉球・沖縄研究所客員准教授。2015 年より現職。専攻：文化人類学・民俗学。

5-1. 論文

北村毅「「だまされた」という言葉の系譜：「神話」の国の精神構造」イシバシ評論編集部『イシバシ評論』Cultures/Critiques 別冊,

国際日本学研究会, pp. 275-289, 2016/3

北村毅 「「日本兵」とは誰だったのか? : 沖縄戦の戦場に対する想像力」渡邊直樹『宗教と現代がわかる本』2016, 平凡社, pp. 82-87, 2016/3

Kitamura, Tsuyoshi, “アジア太平洋戦争と戦後処理の脱領域(ハングル)”『4・3と歴史』(済州4・3研究所), 第 12・13 号, 済州4・3 研究所, pp. 317-342, 2015/2

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北村毅 「書評『軍隊の文化人類学』」『Contact Zone』8, 京都大学大学院人間・環境学研究科文化人類学研究室, 2016/3

北村毅 「書評『若者から若者への手紙 1945←2015』」『共同通信配信』(共同通信配信), 2015/8

北村毅(特別講演記録(別冊)) 「「戦争体験」のアクチュアリティ: 記憶の〈いれもの〉としての社会」『日本集団精神療学会第 31 回大会特別講演録』(日本集団精神療学会), 日本集団精神療学会, pp. 1-41, 2014/12

北村毅(監修)(大会企画ワークショップ報告) 「「戦争体験」のシェアリングに向けたひとつの試み—沖縄戦を事例として」『集団精神療法』(日本集団精神療学会), 30-2, 日本集団精神療学会, pp. 152-157, 2014/12

北村毅 「ニュースの本棚: 沖縄戦の記憶」『朝日新聞』2014/6/22

5-4. 口頭発表

北村毅 (招待講演) 「沖縄戦の語られ方の 10 年」早稲田大学琉球・沖縄研究所クロージング・イベント: 「制度」の 10 年、「場」の 10 年, 早稲田大学琉球・沖縄研究所, 早稲田大学, 2016/3

北村毅 (招待講演) 「戦争の記憶と人の移動」移動という経験—東アジアから考える: 移動から問う戦争, 大阪大学大学院文学研究科日本学研究室他, 大阪大学中之島センター, 2016/2

北村毅 (招待講演) 「戦争体験世代とその家族の戦後」戦争体験と子ども虐待〜トラウマの世代間連鎖から考える: 大会企画シンポジウム 3, 日本子ども虐待防止学会, 新潟市朱鷺メッセ, 2015/11

北村毅 (招待講演) 「来るべき沖縄戦後 80 年にむけて」沖縄戦後 70 年の住民平和宣言: 第 524 回沖縄大学土曜教養講座, 沖縄大学地域研究所, 沖縄大学, 2015/6

北村毅 (招待講演) 「名前は何を語るのか—沖縄・平和の礎から見えてきたこと」浅草 de トーク vol.4 沖縄と東京の対話: 浅草 de トーク vol.4 沖縄と東京の対話, 東京大空襲犠牲者追悼・記念資料展実行委員会, 浅草公会堂, 2015/3

北村毅 (招待講演) 「「戦友」とは誰か—ある沖縄戦帰還兵と家族の戦後」日本学研究会: 日本学研究会, 日本学研究室, 大阪大学, 2014/10

北村毅 (招待講演) 「「勝った戦争」と「負けた戦争」の記憶—日露戦争と沖縄戦の「戦後」をめぐって」第 97 回アジアセミナー: 第 97 回アジアセミナー, 早稲田大学アジア研究機構, 早稲田大学, 2014/10

北村毅 (招待講演) 「沖縄における軍事環境問題と心的後遺症」軍事環境問題の現在—基地・戦争・核実験: 軍事環境問題の現在—基地・戦争・核実験, 人文研アカデミー, 京都大学人文科学研究所, 2014/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

北村毅 第 38 回澁澤賞, 澁澤民俗学振興基金, 2011/12

北村毅 第 33 回沖縄文化協会賞(比嘉春潮賞), 沖縄文化協会, 2011/11

北村毅 第 30 回沖縄タイムス出版文化賞正賞, 沖縄タイムス社, 2009/12

北村毅 第 5 回櫻井徳太郎賞大賞, 東京都板橋区, 2007/1

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:北村毅

課題番号:26370962

研究題目:アジア太平洋戦争の精神的後遺症に関する研究—「戦後補償」関連公文書を主資料として

研究経費:2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2015 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

研究の目的:

本研究は、主に「戦後補償」関連の公文書を基本資料として、アジア太平洋戦争の精神的後遺症について医療人類学的に検証し、戦争体験の長期的な影響を社会や制度との関わりのもとで明らかにすることを目的としている。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 安岡 健一 特任講師 (常勤)

1979 年生。2009 年京都大学大学院農学研究科博士課程卒業、2011 年農学博士（京都大学）取得。日本学術振興会特別研究員、飯田市歴史研究所研究員を経て、2015 年 10 月から現職。専攻：近現代農業史、移民史。

6-1. 論文

安岡健一「高度成長期地域社会における高齢者の研究—課題の提示と老人クラブ形成期の事例」『農業史研究』(日本農業史学会), 50, pp. 26-37, 2016/3

安岡健一「飯田市歴史研究所におけるオーラルヒストリー」『飯田市歴史研究所年報』13, 飯田市歴史研究所, pp. 45-53, 2015/8

安岡健一「引揚者と戦後日本社会」『社会科学』44-3, 同志社大学人文科学研究所, pp. 3-16, 2014/11

安岡健一「「分村」の戦後史」『信濃』(信濃史学会), 66-10, pp. 731-750, 2014/10

安岡健一「高度成長期地域社会における高齢化と家族の変容」『飯田市歴史研究所年報』12, 飯田市歴史研究所, pp. 129-144, 2014/8

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

安岡健一(研究動向)「近代日本農業・農村に関する歴史研究の動向」『歴史評論』(歴史科学協議会), 787, 歴史科学協議会, pp. 38-49, 2015/11

安岡健一(書評)「安田常雄ほか編著『戦後日本社会の歴史 4 社会の境界を生きる人びと』」『歴史学研究』(歴史学研究会), 928, pp. 49-52, 2015/2

安岡健一(書評)「永江雅和『食糧供出制度の研究』」『日本史研究』(日本史研究会), 623, pp. 66-73, 2014/7

安岡健一(報告)「審査基準の現状・共通課題と展望」『アーカイブズ』53, 国立公文書館, pp. 18-21, 2014/6

6-4. 口頭発表

安岡健一「土地所有と民族問題—農地改革を事例に—」立命館大学国際言語文化研究所連続講座:70 年目の戦後史再考, 立命館大学国際言語文化研究所, 立命館大学, 2015/10

安岡健一「高度成長期地域社会における高齢者の研究」日本農業史学会報告会:農家・農村の戦後と高度成長を穿つ—移動と

女性と高齢者―，日本農業史学会，東京農工大学，2015/3

安岡健一「飯田市歴史研究所におけるオーラルヒストリー」第 12 回飯田市地域史研究集会：記憶と経験を語り継ぐこと，飯田市，飯田市公民館，2014/8

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

安岡健一 日本村落研究学会研究奨励賞，日本村落研究学会，2015/11

安岡健一 日本農業史学会賞(学会賞)，日本農業史学会賞，2015/3

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2015 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者：安岡健一

課題番号：15K16839

研究題目：高度成長期における地域社会高齢化過程の研究

研究経費：2015 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的：

現在深刻な社会的課題となっている高齢化について、その発端となった高度成長期に着目し、高齢者たちがどのように社会的な結合を作り上げていったのかを老人クラブ等に即して検討する。「老い」という現象に、どのように人びとが主体的に向き合っていたのかを当事者により残された資料を発掘しながら解明してゆく。

7-6-2. 2014 年度～2014 年度、研究成果公開促進費、代表者：安岡健一

課題番号：255255

研究題目：『「他者」たちの農業史』

研究経費：2014 年度 直接経費 1,500,000 円 間接経費 0 円

研究の目的：

20 世紀における人の移動と農村の関係を検討した著書『「他者」たちの農業史』を刊行すること。本書により 2015 年度の日本農業史学会賞(学会賞)および日本村落研究学会奨励賞を受賞した。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

飯田市歴史研究所・調査研究員，2015 年 10 月～現在に至る

2-7 日本史学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：村田 路人、飯塚 一幸、川合 康

准教授：市 大樹、野村 玄

助教：北泊謙太郎

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
60	13	14	0	0	3	1	0

*うち留学生 4名、社会人学生 2名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	18	7	2	3
2015	12	8	3	3
計	30	15	5	6

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習に加え、学会報告や投稿論文作成のための個別指導をすること、②講義・演習によって史料の分析能力を養うとともに、史料調査等を積極的に実施することによって、史料の調査・収集・整理・分析能力を育成すること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、④個別指導をおこなって留学生の研究能力の養成につとめること、などを目標とした。学部においては、①講義・演習を通して、論文・史料の読解能力の養成をはかるとともに、課題追究能力を涵養すること、②卒業論文では、史料および先行研究等の情報収集とその整理、的確な課題設定と論理の展開能力を実践的に鍛えること、③フィールドワーク・研究室旅行の実施、自治体史編纂事業への協力を通じて、実践的な史料調査能力の養成を期すこと、などを目標とした。

2. 研究

①上記の教育活動と連動させながら、個々人の研究能力を高めることに加えて、②学会活動にも積極的に参加すること、

③国内外の共同研究を推進すること、などを目標とした。

3. 社会連携

①歴史学が抱える諸問題、歴史学に期待される諸課題（文化遺産保存問題、教科書・教育問題など）に的確に応じる努力をすること、②自治体史や教科書の編纂等に協力すること、などを目標に掲げた。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

- (1) 各時代（古代・中世・近世・近代）で開講されている講義によって、日本史研究の基礎的知識の伝授に努めた。また卒論演習・大学院演習・修士論文作成演習・博士論文作成演習などの場におけるきめ細かな指導により、論文作成能力の向上を図った。7月に院生報告会、10月に卒論・修論発表会を開催し、4年生・院生が日本史研究室構成員全員の前で研究発表をする機会を設けた。また、歴史学方法論講義において、日本史・西洋史・東洋史などの枠を超えて最新の歴史学の方法論に触れる機会を設け、歴史教育論演習では高校の現職教員とともに歴史教育のあり方を探求した。さらに、米田雄介氏・馬田綾子氏という学界の第一人者に、その研究成果を学生・院生に講演していただく場を設けた。
- (2) 各時代で開講されている史料講読演習によって、史料解釈能力や古文書解読能力の育成に努めた。また多数開講した演習を通じて、先行研究への批判的態度や史資料を徹底して収集する姿勢を培うとともに、プレゼンテーション能力を養った。
- (3) 春の新入生歓迎小旅行、秋の研究室旅行、近世古文書演習における古文書調査合宿を通じて、フィールドワークの方法や、実践的な古文書の整理作業能力を修得させた。また自治体史編纂事業への協力を通じて、現地調査・史料整理の実践的能力を養成した。
- (4) 増加しつつある留学生の研究能力のレベルアップに努めた。

2. 研究

- (1) 日本史学専門分野の構成員は、それぞれの分野で各自の研究を進めるかわら、『岩波講座 日本歴史』（岩波書店）をはじめとする講座・通史の編集・執筆や、『大系真宗史料』（法蔵館）、『寺院法』（集英社）、『吉田清成関係文書』（思文閣出版）、『会沢正志斎書簡集』（思文閣出版）、『緒方洪庵全集』といった史料集の編纂など、学界の共有財産の蓄積や基礎的研究の充実のための諸活動に、積極的に参画した。また、多くが高校日本史の教科書を執筆し、歴史教育にも寄与した。さらに、本専門分野が所蔵または借用している旧摂津国住吉郡平野郷町含翠堂（土橋家）文書、旧摂津国嶋下郡沢良宜浜村高島家文書、旧摂津国住吉郡北田辺村三杓家文書、旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書の整理・研究をおこなった。具体的には、古文書演習や講義と有機的に関連させつつ、これら古文書の目録作成や内容分析を進めるとともに、両年ともその成果の一端を、大学行事である「いちよう祭」において披露した。同じく本専門分野が所蔵している会沢正志斎書簡について校正作業を行い、2016年3月に思文閣出版から刊行した。
- (2) 学会活動については、日本史研究会、大阪歴史学会、大阪歴史科学協議会、史学研究会、史学会、仏教史学会、続日本紀研究会、メトロポリタン史学会、条里制・古代都市研究会などの学会・研究会の委員等を担うなど、学会運営に積極的に関わり、日本史学界の研究の推進に大きく寄与している。上記のうち、大阪歴史科学協議会の編集事務局（2008年6月～2014年6月）、同会事務局（2014年6月～現在）を本専門分野で引き受けた。
- (3) つぎに国内での学際的な共同研究は、以下のとおりである。平雅行教授は「根来寺史の総合的研究に基づく中世後期寺院社会像の再構築」（代表山岸常人）に参加して、科研の中間報告シンポジウム「根来寺史をめぐる新たな視角」で「大伝法院座主職と高野紛争」と題して報告した。また、龍谷大学アジア仏教文化研究センターが主催するシンポジウム「近代日本仏教と親鸞」でコメンテーターをつとめた。このほか、1987年以来、28年間の共同研究の成果を『訳注日本史料 寺院法』として刊行した。村田路人教授は、「幕末期における大坂・大坂城の軍事的役割と畿内・

近国藩」（科研、京都大学、代表岩城卓二）、「播磨国小藩領における地域社会構造の歴史的研究」（科研、神戸女子大学、代表今井修平）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）に参加した。また、大阪大学適塾記念センターとともに緒方洪庵書状の調査を進め、『緒方洪庵全集 第四巻 日記、書状（その1）』（大阪大学出版会）を刊行した。飯塚一幸教授は、大阪大学歴史教育研究会（代表桃木至朗）、軍港都市史研究会（代表上山和雄）、吉田清成関係文書研究会（代表山本四郎）、「小西家資料の総合的研究」（科研、大阪大学、代表飯塚一幸）、「帝国日本の移動と動員」（科研、大阪大学、代表今西一）に参加した。川合康教授は、「『文化現象としての源平盛衰記』研究一文芸・絵画・言語・歴史を統合して一」（科研、國學院大學、代表松尾葦江）、中世戦記研究会（代表兵藤裕己）に参加した。市大樹准教授は「古代における文字文化の形成過程の基礎的研究」（国立歴史民俗博物館、代表平川南）、「文字文化からみた東アジア社会の比較研究」（科研、奈良大学、代表谷角常子）、「古代中世東アジアの関所と交通政策」（科研、立命館大学、代表鷹取佑司）、「東アジアにおける日本墨書土器データベースの構築」（科研、明治大学、代表吉村武彦）、「古代寺院の儀礼・経営に関する分野横断的比較研究」（科研、京都府立大学、代表菱田哲朗）、「5～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」（科研、大阪大学、代表藤岡穰）、「日本古代宮都周辺地域における分野横断的比較研究」（科研、大阪大学、代表高橋照彦）などに参加した。

3. 社会連携

- (1) 文化遺産保存問題や博物館問題など、歴史学が直面する諸問題に、誠実に取り組んだ。また、講演活動を通じて、研究成果を社会に還元する活動に精力的に取り組んだ。このほか、町おこしグループと連携して、堺市中区兒山家文書などの歴史資料を調査・整理する一方で、『日本書紀』を読む会のボランティア講師、河内長野市文化財保護審議会委員などを務めた。
- (2) 『三重県史』『大阪狭山市史』『摂津市史』『茨木市史』『枚方市史』『八尾市史』『福岡市史』などの自治体史編纂事業に協力し、地域社会に新しい歴史像を提示しつつある。
- (3) 日本史研究室では、数年間にわたって旧摂津国住吉郡北田辺村三杵家文書の整理を進めてきたが、2015年度に古文書全点の整理を終え、目録を作成した。この事業と並行して、北田辺地域において「古文書を読む会」を毎月開くなど、その成果を地域住民と共有する取り組みを行った。また、引き続き、旧摂津国住吉郡猿山新田奥田家文書の整理・研究を行った。

IV. 自己点検・自己評価(2014年度～2015年度)

1. 教育

日本史学専門分野のスタッフは、古代から近代まで日本史の全時代をカバーしており、学生・院生に対して、行き届いた教育をおこなうことができた。従来確保されていた非常勤講師の割り当てがなくなってしまうが、講座運営費で2セメスター分を確保することによって、これまでの体制を維持した。また西洋史・東洋史の教員や高等学校の現職教員と連携して、幅広く歴史教育のあり方を考える機会を設けた。こうした正規の授業以外にも、院生報告会、卒論・修論発表会を実施したほか、第一線の研究者をお招きして最新の研究成果に触れる機会を設けた。これらの教育活動に力を入れた結果、卒業論文・修士論文いずれにおいても、個人差はあるものの比較的水準の高い成果をあげることができ、また課程博士取得者を送り出すことができた。このほか、現地調査や古文書の整理・調査などにも力を入れ、実践的な能力を育成することができた。本研究室の卒業生・修了生は、博物館・資料館の学芸員、自治体史の調査員などの仕事に従事する者が少なくなく、即戦力として通用する能力は各方面から高く評価されている。以上の点を総合的に判断して、所期の目標は達成できたと考える。

2. 研究

科学研究費などの外部資金を獲得して個人研究を進めるかたわら、学会共有財産の蓄積に関わる仕事や、国内外の学際的な共同研究に積極的に参画することによって、それぞれの分野で着実な成果をあげることができた。また上記の教育活

動と連動させながら、日本史学専門分野が保管している古文書の研究を進め、基礎的な研究成果をあげることができた。また本専門分野の構成員は、教員はもちろんのこと、院生も学会の委員として積極的に参加することによって、日本における学術・研究活動の推進に大きく寄与することができた。日本学術振興会研究員の採択率を上げることなどの課題は残ったものの、以上の点を総合的に判断して、全体的な目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

上記のような学会活動などに参加することによって、歴史学が直面する諸問題に誠実に取り組み、日本史研究者としての責務を果たすことができた。また研究成果を学会内部に留めるのではなく、講演や執筆活動を通じて市民に広く発信することができた。さらに歴史資料の調査・整理をおこなうにあたり、町おこしグループと連携することによって、研究成果を共有することに一定の成果をあげることができた。また教員や多くの院生が自治体史の編纂事業に協力し、新たな地域社会像の構築に向けて努力した。これらの活動を総合的に判断して、社会連携の目標についても十分に達成されたと考える。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	3	1	4
2015	3	0	3
計	6	1	7

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

柳沢 菜々「日本古代の天皇と家産所領」2014/9

主査：市 大樹 副査：平 雅行、川合 康

加藤 伸行「近代日本養蚕業の発展過程—発展する新興地域とその基盤—」2015/3

主査：飯塚一幸 副査：村田路人、川合 康

前田 英之「平家政権と荘園制」2015/3

主査：川合 康 副査：平 雅行、市 大樹

島津 毅「日本古代中世の葬送と社会」2016/3

主査：川合 康 副査：村田 路人、市 大樹、平 雅行（京都学園大学）

長谷川裕峰「中世延暦寺の本末関係に関する基礎的研究」2016/3

主査：川合 康 副査：村田 路人、市 大樹、平 雅行（京都学園大学）

森脇 崇文「豊臣期大名権力宇喜多氏の研究」2016/3

主査：川合 康 副査：村田 路人、飯塚一幸

【論文博士】

細川 涼一「日本中世の社会と寺社」2014/6

主査：平 雄行 副査：川合 康、村田路人

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	7(7)	5(2)	0(0)	4(0)	2(0)	18(9)
2015	9(9)	1(0)	0(0)	0(0)	4(0)	14(9)
計	16(16)	6(2)	0(0)	4(0)	6(0)	32(18)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	35	26	16	0	77
2015	2	31	17	2	1	53
計	2	66	43	18	1	130

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

大上幹広「2014 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (1)「16～17 世紀の東アジア世界と軍事商業政権—織豊政権を中心に—」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 11』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.5-20, 2015/3

※郢宇浩氏・下岸廉氏・檜垣翔氏・山崎達哉氏との共著

釜谷周子, 濱田恭幸「2014 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (2)「第一次世界大戦と日本の植民地 — 帝国日本 総力戦体制への道のり —」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 11』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.5-20, 2015/3 ※小林基氏・中井勇人氏・柳侑子氏との共著

田邊 旬「北条義時」, 平雅行編『中世の人物 京・鎌倉の時代編 第3巻 公武権力の変容と仏教界』, 清文堂出版, pp.143-156, 2014/7

田邊 旬「中世の戦争と鎮魂」, 高橋典幸編『生活と文化の歴史学 5 戦争と平和』, 竹林舎, pp.447-471, 2014/10

〔博士後期〕

内田敦士「南京三会の成立に関する再検討」『日本歴史』※795, 日本歴史学会, pp.1-16, 2014/8

尾崎真理「近世後期における幕府備荒貯蓄政策の特質—畿内幕領村を対象に—」『ヒストリア』※244, 大阪歴史学会, pp.1-33, 2014/6

尾崎真理「畿内相給村落における土地取引慣行の特質—摂津国川辺郡御願塚村を事例に—」『地域研究いたみ』44, 伊丹市立博物館, pp.74-109, 2015/3

片山早紀「近世における堤外地利用の変遷—摂津国神崎川堤外地を対象に—」『待兼山論叢<史学篇>』※48, 大阪大学文学部, pp.1-28, 2014/12

片山早紀「享保改革期以降の堤外地開発—摂津国神崎川堤外地の所有と開発をめぐって—」『新修摂津市史 史料と研究』1, 摂津市, pp.189-212, 2015/3

島津 毅「中世における葬送の僧俗分業構造とその変化—「一向僧沙汰」の検討を通して—」『史林』※97-6, 史学研究会, pp.37-72, 2014/11

高木純一「『政基公旅引付』に見える守護の質取」『日本歴史』※791, 日本歴史学会, pp.20-36, 2014/4

- 東野将伸「史料読解と地域・民衆—安村・沢山・若尾各氏の論考を通じて—」『岡山地方史研究』134, 岡山地方史研究会, pp.7-13, 2014/12
- 久野 洋「明治中期における進歩党系勢力の地域的基盤—犬養毅の選挙地盤を中心に—」『日本史研究』※621, 日本史研究会, pp.25-52, 2014/5
- 久野 洋「在郷町伊丹の近代化過程—鉄道敷設過程をとおして—」『ヒストリア』※246, 大阪歴史学会, pp.46-71, 2014/10
- 久野 洋「明治末における犬養毅の選挙地盤—第一—回総選挙をとおして—」『倉敷の歴史』※25, 倉敷市, pp.35-48, 2015/3
- 中村博司「安土築城以前の瓦」, 萩原三雄・中井均編『中世城館の考古学』, 高志書院, pp.227-240, 2014/5
- 中村博司「徹底検証 豊臣大坂城の秘密を探る」, 金子堅太郎編『大坂の陣と真田戦記 (洋泉社 MOOK 歴史 REAL) 』, 洋泉社, pp.97-109, 2014/4
- 前田英之「治承・寿永内乱期の戦時体制と平宗盛」『年報中世史研究』※39, 中世史研究会, pp.1-24, 2014/6

【2015 年度】

〔博士前期〕

- 竹中詩穂「2015 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (1)「ローマの平和 (パクス=ロマーナ)」とユーラシア大陸」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 12』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.1-19, 2016/3
- ※今泉奏氏・方 園氏・森下瑤子氏との共著
- 平田良行「2015 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (2)「流転する《ルネサンス》—その背後にあるものは?」」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 12』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.20-39, 2016/3
- ※明山曜子氏・高垣里衣氏・松本智憲氏との共著
- 安東 峻, 田村 亨「2015 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (3)「フランス革命をどう記述していくか—人権宣言とラテンアメリカ—」」『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 12』, 大阪大学歴史教育研究会, pp.40-59, 2016/3 ※浮田玲奈氏・道越奈苗氏との共著

〔博士後期〕

- OZAKI Mari “Local Officials of the Edo Shogunate during the Late Early-Modern Period”, “Global History Working and Discussion Paper Series” 21, pp.65-71, 2016/3
- 中村博司「本願寺の貝塚・天満移座と羽柴秀吉の紀州攻めについて」『ヒストリア』※250, 大阪歴史学会, pp.1-27, 2015/6
- 島津 毅「奈良・平安時代の葬送と仏教—皇族・貴族の葬送を中心として—」『日本史研究』※637, 日本史研究会, pp.16-45, 2015/9
- 島津 毅「中世後期の葬送と清水坂非人・三昧聖」『部落問題研究』※215, 部落問題研究所, pp.67-87, 2016/3
- 高岡 萌「「私立」伊丹小学校の創立と「公立」への転換」『地域研究いたみ』45, 伊丹市立博物館, pp.1-25, 2016/3
- 高木純一「戦国期畿内村落における被官化状況と領主支配—東寺領山城国上久世荘を中心に—」『ヒストリア』※253, pp.73-97, 2015/12
- 東野将伸「近世後期の頼母子運営と豪農—備中国南西部を題材に—」『地方史研究』※374, 地方史研究協議会, pp.5-23, 2015/4
- 東野将伸「豪農経営と親族ネットワーク—備中国後月郡築瀬村本山成家を題材に—」『ヒストリア』※249, 大阪歴史学会, pp.67-99, 2015/4
- 東野将伸「宝暦～文政期の豪農金融と地域社会—摂津国島下郡高島家を事例に—」『歴史科学』※220・221 合併号, 大阪歴史科学協議会, pp.51-67, 2015/5
- 東野将伸「備中—橋領における年貢収納と石代納—安石代と間銀の問題を中心に—」『日本歴史』※813, 日本歴史学会, pp.40-57, 2016/2
- 久野 洋「日露戦前における水道敷設と地方都市政治—岡山市上水道敷設問題をとおして—」『日本歴史』※810, 日本歴史学会, pp.49-66, 2015/11

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔学部生〕

各務 諒「近世大嘗祭と村落社会—斎田拔穂の儀の再検討を通じて—」, 大阪歴史学会近世史部会卒論報告会, 大阪歴史学会, 大阪市立旭区民センター／大阪府大阪市, 2014/4/27

辻坂啓子「近世後期における河内国の豪農塩野家の読書や医者との交流」第 10 回地域史卒論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 六甲道勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2015/3/21

八木貴裕「近世中後期における水車業の展開と地域社会—摂津国八部郡の事例より—」第 10 回地域史卒論報告会, 歴史資料ネットワーク・神戸史学会, 六甲道勤労市民センター／兵庫県神戸市, 2015/3/21

〔博士前期〕

伊藤大貴「戦国期山名氏をめぐる政治情勢—室町幕府との関係を中心に—」, 大阪歴史学会・日本史研究会中世史部会合同卒業論文報告会, 大阪歴史学会・日本史研究会, 機関紙会館 5F 大会議室／京都府京都市, 2014/4/19

伊藤大貴「戦国期山名氏をめぐる政治情勢—室町幕府との関係を中心に—」, 大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2014/7/12

今井貴之「喪葬令三位以上条の成立過程と淳和の散骨葬」, 続日本紀研究会 11 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2014/11/21

大上幹広「鎌倉後期の東寺供僧領弓削島荘と開田准后法助」, 大阪歴史学会・日本史研究会中世史部会合同卒業論文報告会, 大阪歴史学会・日本史研究会, 機関紙会館 5F 大会議室／京都府京都市, 2014/4/19

大上幹広「南北朝期の高野山領名手荘と頼意—紀伊国丹生屋村と名手荘との用水争論を題材に—」, 大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2014/7/12

大上幹広「16～17 世紀の東アジア世界と軍事商業政権—織豊政権を中心に—」, 大阪大学歴史教育研究会第 83 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2014/12/20

※郇宇浩氏・下岸廉氏・檜垣翔氏・山崎達哉氏とのグループ報告

大上幹広「論評: 木村茂光「中世農民像の転換」」, 第 31 回大阪歴史学入門講座第 1 回勉強会, 第 31 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/2/1

蒲谷和敏「第一次世界大戦期の水道問題」, 大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会・大阪歴史学会近代史部会合同修士論文報告会, 大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会, 福島区民センター／大阪府大阪市, 2015/3/23

釜谷周子「律令国家における都城の展開と京職—職掌の変遷に注目して—」, 続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会, 続日本紀研究会・日本史研究会, ウィングス京都／京都府京都市, 2014/5/31

釜谷周子「律令国家における都城の展開と京職—職掌の変遷に注目して—」, 大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2014/7/12

釜谷周子「第一次世界大戦と日本の植民地—帝国日本 総力戦体制への道のり—」, 大阪大学歴史教育研究会第 83 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2014/12/20

※小林基氏・中井勇人氏・濱田恭幸氏・柳侑子氏とのグループ報告

釜谷周子「9 世紀平安京における京内支配—貞観期・貨幣の動向に注目して—」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/1/12

釜谷周子「論評: 木村茂光「現場に立って考える」①～⑥、同「現場に立って考える」補遺」, 第 31 回大阪歴史学入門講座第 3 回勉強会, 第 31 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/3/15

杉山侑暉「平安時代の不参と代官」, 続日本紀研究会・日本史研究会古代史部会合同卒業論文大報告会, 続日本紀研究会・日本史研究会, ウィングス京都／京都府京都市, 2014/5/31

杉山侑暉「10 世紀・11 世紀の文献史料—日記と先例—」, 考古学・古代史合同研究会（歴史媒体の差異をめぐる史論会）,

考古学・古代史合同研究会（歴史媒体の差異をめぐる史論会），大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2014/6/18

杉山侑暉『『続日本紀』弘仁四年正月甲子条～弘仁四年二月壬子条（輪読）』，続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2014/9/19

杉山侑暉「平安時代の不参と代官」，大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪中央／大阪府大阪市，2014/10/4

杉山侑暉「平安時代における小野宮家の日記の伝来」，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2015/1/12

杉山侑暉「書評：木村茂光『ハタケと日本人 もう一つの農耕文化』」，第31回大阪歴史学入門講座勉強会，第31回歴史学入門講座実行委員会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2015/3/1

高岡 萌「大正期における学制改革と高等学校誘致運動—佐賀県を事例に—」，大阪歴史学会近代史部会，大阪歴史学会，大淀コミュニティセンター／大阪府大阪市，2014/11/8

高岡 萌「佐賀県下における旧藩主家の育英事業」，明治維新史学会例会，明治維新史学会，明治大学駿河台キャンパス／東京都千代田区，2015/3/14

田邊 旬『『二位殿御時』考』，中世政治史研究会，中世政治史研究会，東京大学史料編纂所／東京都文京区，2014/11/2

田邊 旬「江間小四郎再考—北条義時の出身をめぐる—」，日本史研究会中世史部会，日本史研究会，日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2014/12/16

田邊 旬「中世武士の先祖観」，中世文化史研究会，中世文化史研究会，奈良女子大学／奈良県奈良市，2015/3/8

濱田恭幸「地方における立憲改進黨の活動—富山県を事例として—」，大阪歴史科学協議会帝国主義研究部会・大阪歴史学会近代史部会・日本史研究会近現代史部会合同卒業論文報告会，大阪歴史科学協議会・大阪歴史学会・日本史研究会，西区民センター／大阪府大阪市，2014/5/31

濱田恭幸「地方における立憲改進黨の活動—富山県を事例に—」，大阪歴史科学協議会新委員問題関心報告，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪中央／大阪府大阪市，2014/10/4

濱田恭幸「第一次世界大戦と日本の植民地—帝国日本 総力戦体制への道のり—」，大阪大学歴史教育研究会第83回例会，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2014/12/20

※釜谷周子氏・中井勇人氏・濱田恭幸氏・柳侑子氏とのグループ報告
〔博士後期〕

内田敦士『『日本後紀』弘仁三年（八一二）十二月丙戌条～弘仁四年正月辛酉条』，続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2014/5/9

内田敦士「尾張の古代寺院と氏族」，古代寺院史研究会，古代寺院史研究会，妙興寺／愛知県一宮市，2014/11/16

内田敦士「平安前中期における仁王会の展開」，続日本紀研究会，続日本紀研究会，アウィーナ大阪／大阪府大阪市，2015/3/13

内田敦士「平安前中期における仁王会の展開」，仙台古代史懇話会，仙台古代史懇話会，青葉区中央市民センター／宮城県仙台市，2015/3/28

尾崎真理「近世後期、畿内・近国幕領における郡中備銀の成立と展開」，畿内近国史研究会7月例会，畿内近国史研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2014/7/6

尾崎真理「近世後期、畿内・近国幕領における郡中備銀の成立と展開」，第53回近世史サマーセミナー分科会，近世史サマーセミナー，丸徳旅館／茨城県ひたちなか市，2014/7/19

尾崎真理「畿内・近国幕領における地域的入用・村入用—摂津国住吉郡中喜連村を事例に—」，大阪歴史科学協議会前近代史9月部会，大阪歴史科学協議会，クレオ大阪西／大阪府大阪市，2014/9/18

尾崎真理「日本近世史におけるリテラシー研究の現在—大戸安弘・八鍬友広編『識字と学びの社会史』を読んで—」，大阪歴史科学協議会前近代史部会1月部会，大阪歴史科学協議会，大阪市立都島区民センター／大阪府大阪市，2015/1/22

島津 毅「平安時代の葬送と仏教儀礼 ―「一向僧沙汰」の歴史的前提―」, 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2014/6/9

高木純一「東寺領山城国上久世荘における「荘家の一揆」」, 大阪歴史学会中世史部会, 大阪歴史学会, クレオ大阪中央／大阪府大阪市, 2014/9/26

高木純一「東寺領山城国上久世荘における「荘家の一揆」について」, 史学会第 112 回大会日本史・中世史部会, 史学会, 東京大学本郷キャンパス／東京都文京区, 2014/11/9

高木純一「中近世移行期における地下の侍身分―東寺領山城国上久世荘を中心に―」, 大阪歴史学会中世史部会第 1 回大会準備報告, 大阪歴史学会, クレオ大阪北／大阪府大阪市, 2015/2/10

増成一倫「官稲からみた日本律令財政の特質」, 洛北史学会第 16 回定例大会, 洛北史学会, 京都府立大学大学会館／京都府京都市, 2014/12/6

中村博司「大阪城の魅力とミステリー」, REC コミュニティカレッジ特別講演会, REC コミュニティカレッジ, 龍谷大学アバンティ響都ホール／京都府京都市, 2014/4/12

中村博司「姉川合戦図屏風と秀吉の出世」, REC 講座『戦国合戦図屏風からたどる豊臣秀吉の生涯』第 1 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/4/16

中村博司「山崎合戦図屏風と天下人への道」, REC 講座『戦国合戦図屏風からたどる豊臣秀吉の生涯』第 2 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/5/14

中村博司「地下に眠る秀吉の夢―大坂城の魅力とミステリー―」 26 年度大阪市いちょう大学同窓会, 大阪市いちょう大学同窓会, あべのベルタ／大阪府大阪市, 2014/5/29

中村博司「賤ヶ岳合戦図と大坂築城」, REC 講座『戦国合戦図屏風からたどる豊臣秀吉の生涯』第 3 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/6/18

中村博司「天正記を読む会」例会発表, 天正記を読む会例会, 天正記を読む会, 龍谷大学大宮学舎付属図書館／京都府京都市, 2014/6/25

中村博司「肥前名護屋城図屏風と朝鮮出兵」, REC 講座『戦国合戦図屏風からたどる豊臣秀吉の生涯』第 4 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/7/16

中村博司「黒田官兵衛」, よみうり伊丹文化センター市民講座, よみうり伊丹文化センター市民講座, よみうり伊丹文化センター／兵庫県伊丹市, 2014/9/28

中村博司「長篠合戦図屏風と秀吉の地位」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 1 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/10/16

中村博司「豊臣期大坂城本丸石垣と「穴太」衆」, 豊臣石垣公開プロジェクト歴史講座「地下に眠る豊臣大坂城の石垣を探る」, 豊臣石垣公開プロジェクト歴史講座, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2014/10/31

中村博司「長久手合戦図屏風と秀吉を取り巻く勢力」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 2 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/11/20

中村博司「天正記を読む会」例会発表, 天正記を読む会例会, 天正記を読む会, 龍谷大学大宮学舎付属図書館, 2014/12/17,

中村博司「関ヶ原合戦図屏風と家康・三成」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 3 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2014/12/18

中村博司「天正記を読む会」例会発表, 天正記を読む会例会, 天正記を読む会, 龍谷大学大宮学舎付属図書館, 2014/11/26

中村博司「豊国祭礼図屏風と秀頼の立場」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 4 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2015/1/15

中村博司「大坂冬の陣図屏風と大坂の陣勃発」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 5 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2015/2/5

中村博司「大坂夏の陣図屏風と大坂落城・豊臣滅亡」, REC 講座『戦国合戦図屏風から見た秀吉・秀頼の生涯』後期第 6 回, REC 講座, 龍谷大学瀬田学舎／滋賀県大津市, 2015/2/26

長谷川裕峰「山門寺院における本末関係―法儀の伝承と法流の相承を手掛かりに―」，大阪歴史学会中世史部会，大阪歴史学会，クレオ大阪東／大阪府大阪市，2014/12/5

長谷川裕峰「中世延暦寺における本末関係―法儀の伝承と法流―」，大阪歴史学会中世史部会大会（個人報告）準備報告，大阪歴史学会，クレオ大阪北／大阪府大阪市，2015/3/20

久野 洋「在郷町伊丹の「近代化」過程―鉄道敷設過程を中心に―」，大阪歴史学会現地見学検討会「在郷町伊丹の歴史と発展―国指定文化財旧岡田家酒蔵築 340 周年記念―」，大阪歴史学会・伊丹市，伊丹商工プラザ／兵庫県伊丹市，2014/4/26

久野 洋「伊丹地域からみた近代日本」，平成 26 年度伊丹市立博物館友の会養成講座，伊丹市立博物館友の会，伊丹市総合教育センター／兵庫県伊丹市，2014/6/7

久野 洋「書評：伊藤之雄編著『原敬と政党政治の確立』」，大阪大学政治史研究会，大阪大学政治史研究会，大阪大学大学院法学研究科／大阪府豊中市，2014/10/4

久野 洋「在郷町伊丹の近代化過程」，大阪大学政治史研究会，大阪大学政治史研究会，大阪大学大学院法学研究科／大阪府豊中市，2014/12/26

久野 洋「近代日本の地方政治と民力休養論」，近代日本地方政治研究会，近代日本地方政治研究会，神戸大学／兵庫県神戸市，2015/3/1

久野 洋「地方における立憲国民党の成立―犬養毅と坂本金弥を中心に―」，日本史研究会近現代史部会，日本史研究会，日本史研究会事務所会議室／京都府京都市，2015/3/19

東野将伸「18 世紀後期の豪農金融と地域社会―摂津国島下郡高島家を題材に―」，大阪歴史科学協議会前近代史部会・帝国主義研究部会合同部会（第 1 回大会準備報告），大阪歴史科学協議会，クレオ大阪西／大阪府大阪市，2014/4/10

東野将伸「18 世紀後期の豪農金融と地域社会―摂津国島下郡高島家を題材に―」，畿内近国史研究会 6 月例会，畿内近国研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2014/6/1

東野将伸「18 世紀後期の豪農金融と地域社会―摂津国島下郡高島家を題材に―」，大阪歴史科学協議会第 50 回大会，大阪歴史科学協議会，関西大学／大阪府吹田市，2014/6/15

東野将伸「論評：「史料の力，歴史家をかこむ磁場」―日本近世史研究の視点から―」，岡山地方史研究会 7 月例会，岡谷町法史研究会，岡山大学／岡山県岡山市，2014/7/5

東野将伸「19 世紀の豪農金融と領主・村―摂津国東部の事例を題材に―」，大坂諸藩研究会 8 月例会，大坂諸藩研究会，関西大学大阪都市遺産研究センター／大阪府吹田市，2014/8/30

東野将伸「書評：板垣貴志『牛と農村の近代史―家畜預託慣行の研究』」，近現代史サマーセミナー，近現代史サマーセミナー実行委員会，広島市国際青年会館／広島県広島市，2014/9/7

東野将伸・吉原大志「あなたにも救える！水損資料保全ワークショップ―写真と紙資料―」，歴史資料ネットワーク・兵庫県立美術館コラボ企画，歴史資料ネットワーク・兵庫県立美術館，兵庫県立美術館／兵庫県神戸市，2015/1/24

東野将伸「近世史サマーセミナー報告構想」，畿内近国史研究会 2 月例会，畿内近国研究会，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2015/2/1

前田英之「鎌倉前・中期における一国平均役徴収方式」，中世史研究会 2 月例会，中世史研究会，ウイंकあいち／愛知県名古屋市，2015/2/20

【2015 年度】

〔学部生〕

星 和音「大阪府における戦時食糧配給」第 11 回地域史卒論報告会，歴史資料ネットワーク・神戸史学会，六甲道勤労市民センター／兵庫県神戸市，2016/3/13

〔博士前期〕

安東 峻「古代における蝦夷「公民」化政策の展開―「夷狄」観変遷の考察に向けて―」，日本史研究会古代史部会・続日本紀研究会合同 2015 年度卒業論文大報告会，日本史研究会・続日本紀研究会，大阪歴史博物館／大阪府大阪市，

2015/5/31

安東 峻「律令国家と「夷狄」—古代における蝦夷政策を中心に—」, 大阪歴史科学協議会若手委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2015/9/12

安東 峻『『日本後紀』輪読 『日本後紀』弘仁 5 年 7 月丙午朔～辛未条』, 続日本紀研究会 10 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2015/10/9

安東 峻「フランス革命をどう記述していくか」, 大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/12/19 ※浮田玲奈氏・田村亨氏・道越奈苗氏とのグループ報告

安東 峻「蝦夷の公民化政策の展開—「蝦夷—公民」関係の再検討に向けて—」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2016/1/11

安東 峻「育鵬社版中学校社会教科書の検討～原始・古代史分野をめぐって～」, 大阪歴史科学協議会 1 月例会, 大阪歴史科学協議会, クレオ大阪西／大阪府大阪市, 2016/1/30 ※原始・古代ワーキンググループとして報告。他のメンバーは、伊藤あすか・亀井駿輔・田中佑佳・道上祥武・守口喜美佳・山上憲太郎の各氏。

安東 峻「論評: 福井憲彦「テキストとプラティークのあいだ—あるいは史料・現実・想像力—」」, 第 32 回大阪歴史学入門講座第 3 回勉強会, 第 32 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2016/3/20

釜谷周子「9 世紀平安京における都市政策についての一考察—平安諸銭貨への政策の視点から—」, 続日本紀研究会 11 月例会, 続日本紀研究会, アウィーナ大阪／大阪府大阪市, 2015/11/20

竹中詩穂「「ローマの平和 (パクス＝ロマーナ)」とユーラシア大陸」, 大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/12/19

※今泉奏氏・方 園氏・森下瑤子氏とのグループ報告

竹中詩穂「論評: 福井憲彦「書き手と読み手をつなぐもの—シャルチェ、ダーントンの研究によせて—」」, 第 32 回大阪歴史学入門講座第 2 回勉強会, 第 32 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2016/2/28

田邊 旬『『二位殿御時』考』中世政治史研究会, 中世政治史研究会, 東京大学史料編纂所／東京都文京区, 2015/9/20

田村 亨「鎌倉期佐々木氏と公武権力」日本史研究会・大阪歴史学会中世史部会合同第 1 回卒論報告会, 日本史研究会・大阪歴史学会, 機関紙会館 5F 大会議室／京都府京都市, 2015/6/14

田村 亨「鎌倉中後期の公武権力」, 大阪歴史科学協議会若手委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2015/7/25

田村 亨「フランス革命をどう記述していくか」, 大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/12/19 ※安東峻氏・浮田玲奈氏・道越奈苗氏とのグループ報告

田村 亨「論評: 福井憲彦「社会史の視野」」, 第 32 回大阪歴史学入門講座第 2 回勉強会, 第 32 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2016/2/28

永山 愛「百瀬今朝雄「段銭考」を読む」, 第 2 回段銭研究会, 段銭研究会, 立命館大学衣笠キャンパス／京都府京都市, 2015/8/31

永山 愛「建武政権末期における「将軍家」の移動と諸軍勢—新見貞直への新見荘地頭職返給の位置—」, 岡山地方史研究会 9 月例会, 岡山地方史研究会, 岡山大学津島キャンパス／岡山県岡山市, 2015/9/26

永山 愛「室町幕府成立期における軍事編成」, 大阪歴史学会中世史部会 11 月部会, 大阪歴史学会, 西宮市大学交流センター／兵庫県西宮市, 2015/11/6

濱田恭幸「明治前期における分県問題の展開—石川県・富山県の事例を中心に—」, 北陸史学会第 57 回大会, 北陸史学会, 金沢サテライト・プラザ／石川県金沢市, 2015/11/29

濱田恭幸「鈴木良の歴史教育論の再検討—遠山茂樹・上原専祿の歴史教育論を通して—」, 大阪歴史科学協議会前近代史研究部会・帝国主義研究部会合同部会, 大阪歴史科学協議会, 浪速区民センター／大阪府大阪市, 2016/2/24

濱田恭幸「書評: 山田央子『明治政党論史』」, 第 3 回日本近現代史の再検討研究会, 日本近現代史の再検討研究会, 佛教

大学／京都府京都市, 2016/3/26

平田良行「近世中後期村方騒動論の再検討—南河内の事例を中心に—」, 大阪歴史科学協議会若手委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2015/9/12

平田良行「流転する《ルネサンス》—その背後にあるものは?—」, 大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2015/12/19

※明山曜子氏・高垣里衣氏・松本智憲氏とのグループ報告

平田良行「論評: 福井憲彦「ヨーロッパの世紀」」, 第 32 回大阪歴史学入門講座第 1 回勉強会, 第 32 回歴史学入門講座実行委員会, 大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市, 2016/2/7

八木貴裕「近世中後期における水車業の展開と地域社会—摂津国八部郡の事例より—」, 大阪歴史科学協議会若手委員問題関心報告, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館／大阪府大阪市, 2015/7/25

[博士後期]

内田敦士「季御読経成立史の研究」, 日本史研究会古代史部会, 日本史研究会, 機関誌会館事務所会議室／京都府京都市, 2015/11/23

尾崎真理「第二次長州出兵時における畿内幕領の代官手代と人足徴発」, 第 54 回近世史サマーセミナー準備報告会, 近世史サマーセミナー実行委員会, 神戸大学／兵庫県神戸市, 2015/4/5

OZAKI Mari "Local Officials of the Edo Shogunate during the Late Early-Modern Period", The third congress of the AAWH, AAWH, Nanyang Technological University／Singapore, 2015/5/29

尾崎真理「伊丹の村の江戸時代～御願塚村における村政の民主化～」, 伊丹市立博物館友の会養成講座「学ぼう! 伊丹の歴史」, 伊丹市立博物館, 伊丹市立総合教育センター／兵庫県伊丹市, 2015/6/6

尾崎真理「第二次長州出兵時における畿内幕領の代官手代と人足徴発」, 第 54 回近世史サマーセミナー全体会報告, 近世史サマーセミナー実行委員会, 勝尾寺応頂閣／大阪府箕面市, 2015/7/18

尾崎真理「幕末期畿内幕領における夫役人足の動向と代官所機能—長州出兵時の代官手代に着目して—」, 大阪歴史学会近世史部会 9 月部会, 大阪歴史学会, 2015/9/11

尾崎真理「畿内・近国支配研究の動向と課題—近世中後期を中心に—」, 日本史研究会近世史部会 3 月部会, 日本史研究会, 機関紙会館 5 階大会議室／京都府京都市, 2016/3/5

島津 毅「中世京都における葬送と非人」日本史研究会中世史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2015/5/12

高岡 萌「中元崇智氏の業績検討 (2015 年度大会報告者業績検討会)」日本史研究会近現代史部会, 日本史研究会, 日本史研究会事務所会議室／京都府京都市, 2015/4/25

高木純一「中世後期畿内村落における中間層と領主支配—東寺領山城国上久世荘を中心に—」, 大阪歴史学会中世史部会第 2 回大会準備報告, 大阪歴史学会, 大阪市立淀川区民センター／大阪府大阪市, 2015/4/10

高木純一「戦国期畿内における村落構造と領主支配—東寺領山城国上久世荘を中心に—」, 大阪歴史学会中世史部会第 3 回大会準備報告, 大阪歴史学会, クレオ大阪東／大阪府大阪市, 2015/5/22

高木純一「戦国期畿内における村落構造と領主支配—東寺領山城国上久世荘を中心に—」, 大阪歴史学会 2015 年度大会中世史部会報告, 大阪歴史学会, 関西学院大学上ヶ原キャンパス／兵庫県西宮市, 2015/6/28

東野将伸「幕末維新期の一橋領における租税・金融政策—西国所領を題材に—」, 第 54 回近世史サマーセミナー準備報告会, 近世史サマーセミナー実行委員会, 神戸大学大学院人文学研究科／兵庫県神戸市, 2015/4/5

東野将伸「幕末維新期の一橋領における租税・金融政策—西国所領を題材に—」, 第 54 回近世史サマーセミナー, 近世史サマーセミナー実行委員会, 勝尾寺応頂閣／大阪府箕面市, 2015/7/18

東野将伸「江戸時代の茨木における租税・金融」茨木市郷土史教室, 茨木市郷土史教室, 茨木市立文化財資料館／大阪府茨木市, 2015/10/17

東野将伸「弘化～元治期の質地売買と村・同族—備中国南西部の事例から—」, 史学会第 113 回大会, 史学会, 東京大学／東京都文京区, 2015/11/15

東野将伸・前田結城「〔水損史料ワークショップ〕」，歴史資料ネットワーク水損史料ワークショップ，歴史資料ネットワーク，滋賀大学／滋賀県彦根市，2016/1/12

東野将伸「近世後期の一橋徳川家における財政運営―所領・幕府との関係を中心に―」，大阪歴史学会近世史部会第1回大会準備報告，大阪歴史学会，大阪市立中央会館／大阪府大阪市，2016/2/12

東野将伸「大國家の経営と頼母子―近世後期～明治初期の若干の事例から―」，大國家文書研究会，大國家文書研究会，岡山大学／岡山県岡山市，2016/3/13

東野将伸「19世紀後期日本の農村部における生業と人口移動 The Pattern of Occupation and Population Movement in Rural Japan During the Latter Half of the 19th Century」，グローバル日本研究国際シンポジウム「開く日本・閉じる日本―「人間移動学」事始め―」，グローバル日本研究国際シンポジウム「開く日本・閉じる日本―「人間移動学」事始め―」，大阪大学大学院文学研究科／大阪府豊中市，2016/3/24

久野 洋「近代日本の地方政治と民力休養論」，大阪大学日本政治史セミナー，大阪大学日本政治史セミナー，大阪大学大学院法学研究科／大阪府豊中市，2015/11/14

久野 洋「有馬学『「国際化」の中の帝国日本』を読む」，日本近現代史の再検討研究会，日本近現代史の再検討研究会，佛教大学／京都府京都市，2015/12/13

久野 洋「鈴木良氏の地域社会構造論の批判的継承のために」，大阪歴史科学協議会前近代史・帝国主義研究部会合同部会，大阪歴史科学協議会，浪速区民センター／大阪府大阪市，2015/12/16

久野 洋「コメント：柳鏞泰「自国史の帝国性を問う―韓中日三国の東アジア地域史比較―」をめぐって」，大阪大学政治史研究会，大阪大学政治史研究会，大阪大学大学院法学研究科／大阪府豊中市，2016/1/30

古林小百合「家の由緒と養子についての一考察 ―備中国川上 郡平川村平川家を事例として―」，第54回近世史サマーセミナー，近世史サマーセミナー実行委員会，勝尾寺応頂閣／大阪府箕面市，2015/7/18

増成一倫「官稲からみた律令地方財政の展開～官稲混合以降を中心に～」，続日本紀研究会7月例会（古代史サマーセミナー準備報告），続日本紀研究会，アウイーナ大阪／大阪府大阪市，2015/7/24

増成一倫「8世紀から9世紀の地方財政の問題について」，第43回古代史サマーセミナー分科会報告，第43回古代史サマーセミナー実行委員会，高崎市中央公民館／群馬県高崎市，2015/8/22

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014年度】

〔学部生〕

緒方美咲「地域史卒論報告会参加記」，『史料ネット News Letter』77，歴史資料ネットワーク，p.15，2014/12

〔博士前期〕

伊藤大貴「部会ニュース(中世史部会)：2014年4月中世史部会報告要旨」，『日本史研究』627，日本史研究会，pp.71-72，2014/11

伊藤大貴「部会ニュース(中世史部会)：2014年4月中世史部会川口成人報告討論要旨」，『日本史研究』628，日本史研究会，pp.83-84，2014/12

大上幹広「部会ニュース(中世史部会)：2014年4月中世史部会報告要旨」，『日本史研究』627，日本史研究会，pp.68-69，2014/11

釜谷周子「質疑・討論（2014年度大阪歴史学会大会古代史部会大友裕二「八世紀における行幸と留守」報告討論要旨）」，『ヒストリア』247，大阪歴史学会，pp.99-100，2014/12

釜谷周子「部会ニュース(古代史部会)：2013年5月古代史部会宮川麻紀報告討論要旨」，『日本史研究』631，日本史研究会，pp.163-164，2015/3

川口敬義「部会ニュース(中世史部会)：2013年7月中世史部会報告要旨」，『日本史研究』624，日本史研究会，p.79，2014/8

蒲谷和敏「「第48回『建国記念の日』不承認2・11大阪府民のつどい」の記録」，『歴史科学』219，大阪歴史科学協議会，pp.13-17，2015/2

- 蒲谷和敏「部会ニュース(近現代史部会):2013年5月近現代史部会報告要旨」,『日本史研究』627,日本史研究会,pp.74-75, 2014/11
- 蒲谷和敏「部会ニュース(近現代史部会):2013年5月近現代史部会高岡萌報告討論要旨」,『日本史研究』627,日本史研究会,pp.77-78, 2014/11
- 蒲谷和敏「質疑・討論(2014年度大阪歴史学会大会近代史部会川内淳史「戦後「国民皆保険」の形成と地方自治—三重県伊賀地域を事例に一」報告討論要旨)」,『ヒストリア』247,大阪歴史学会,pp.250-251, 2014/12
- 杉山侑暉「質疑・討論(2014年度大阪歴史学会大会古代史部会芳之内圭「日中行事「殿上台盤事」について」報告討論要旨)」,『ヒストリア』247,大阪歴史学会,pp.79-81, 2014/12
- 杉山侑暉「大阪歴史科学協議会委員会記録(2014年度7月・9月)」,『歴史科学』219,大阪歴史科学協議会,pp.68-69, 2015/2 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告(2013年度第5・6回)」,『ヒストリア』243,大阪歴史学会,pp.103-104, 2014/4
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告(2013年度第7・8回)」,『ヒストリア』244,大阪歴史学会,pp.111-112, 2014/6
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告(2013年度第9・10回)」,『ヒストリア』245,大阪歴史学会,pp.126-127, 2014/8
※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌『池田市史 史料編⑩ 近代史料』,池田市, 2014/9 ※池田市史編纂委員会編、史料編の執筆協力
- 高岡 萌「大阪歴史学会委員会報告(2013年度第11回・臨時委員会)」,『ヒストリア』246,大阪歴史学会,pp.92-93, 2014/10 ※飯塚一幸氏との共同執筆
- 高岡 萌「部会ニュース(近現代史部会):2013年5月近現代史部会報告要旨」,『日本史研究』627,日本史研究会,pp.75-76, 2014/11
- 高岡 萌「部会ニュース(近現代史部会):2013年5月近現代史部会出口雄大報告討論要旨」,『日本史研究』627,日本史研究会, p.78, 2014/11
- 高岡 萌「2013年5月例会彙報」『歴史科学』219,大阪歴史科学協議会,pp.66-67, 2015/2
- 高岡 萌『佐賀近代史年表 大正編 大正3年1月～大正3年12月』,佐賀大学地域学歴史文化研究センター,pp.84-90, 2015/3 ※佐賀近代史研究会編として刊行、年表の一部を執筆
- 田邊 旬「三浦義明・義澄は、頼朝挙兵でどのような役割を果たしたのか?」「源頼朝は、なぜ鶴岡八幡宮を整備したのか?」,小市和雄編著『人物でめぐる神奈川県謎解き散歩』,株式会社 KADOKAWA, pp.12-15, 2014/4
- 田邊 旬「源頼朝は、なぜ鎌倉に幕府を開いたのか?」,小市和雄編著『人物でめぐる神奈川県謎解き散歩』,株式会社 KADOKAWA, pp.147-153, 2014/4
- 田邊 旬「將軍源実朝の実像とは?」「北条泰時は、鎌倉をどのように整備したのか?」,小市和雄編著『人物でめぐる神奈川県謎解き散歩』,株式会社 KADOKAWA, pp.167-173, 2014/4
- 田邊 旬『義経記』と中世の江戸」,樋口州男・村岡薫・戸川点・野口華世・田中暁龍編著『歴史と文学』,小径社,pp.158-164, 2014/5
- 永山 愛「第29回歴史学入門講座参加記」,『歴史科学』217,大阪歴史科学協議会,pp.57-59, 2014/6
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会):2014年2月中世史部会高木純一報告討論要旨」,『日本史研究』626,日本史研究会, pp. 81-82, 2014/10
- 福島彰人「部会ニュース(近現代史部会):2012年8月近現代史部会報告要旨」,『日本史研究』623,日本史研究会, p.87, 2014/7
- 福島彰人「2013年度「第29回歴史学入門講座」の記録」,『ヒストリア』245,大阪歴史学会,pp.89-91, 2014/8
〔博士後期〕
- 内田敦士「わたしたちの文化財:薬師寺最勝会」『ヒストリア』246,大阪歴史学会,pp.72-75, 2014/10
- 内田敦士「報告:「2・11集会プレ勉強会」参加記」『ヒストリア』247,大阪歴史学会,pp.272-273, 2014/12

- 高木純一「部会ニュース(中世史部会)：2014 年 2 月中世史部会報告要旨」『日本史研究』626, 日本史研究会, pp.80-81, 2014/10
- 高木純一「東寺領山城国上久世荘における「荘家の一揆」について(研究発表, 中世史部会, 日本史部会, 第 112 回史学会大会報告)」『史学雑誌』124-1, p.123, 2015/1
- 島津 毅「部会ニュース(中世史部会)：2012 年 11 月中世史部会報告要旨」『日本史研究』623, 日本史研究会, pp.77-78, 2014/7
- 中村 翼「例会ニュース：2011 年 10 月例会報告趣旨・討論」, 『日本史研究』624, 日本史研究会, pp.71-74, 2014/8
- 中村 翼「例会ニュース：2012 年 6 月例会報告趣旨・討論」, 『日本史研究』626, 日本史研究会, pp.73-75, 2014/10
- 中村博司「研究ノート：古活字版『天正記』第六の改訂文と註解」, 『龍谷大学日本史研究』38, 龍谷大学日本史学研究会, pp.102-144, 2015/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は「はじめに」の執筆と本文のとりまとめ。
- 中村博司「史料紹介：国立公文書館所蔵 古活字版『天正記』第七」一部執筆（頁を数えるのは不可）と監修。『龍谷大学日本史研究』38, 龍谷大学日本史学研究会, pp.145-158, 2015/3 ※著者は「天正記」を読む会。中村氏は「はじめに」の執筆と本文のとりまとめ。
- 久野 洋「「史料の力、歴史家をかこむ磁場」をめぐる」『歴史学研究月報』659, 歴史学研究会, pp.2-4, 2014/11
- 久野 洋「特集趣旨」（「「史料の力、歴史家をかこむ磁場—史料読解の認識構造—」合評会」）『岡山地方史研究』134, 岡山地方史研究会, pp.1-2, 2014/12
- 久野 洋「2013 年 7 月例会彙報」『歴史科学』219, 大阪歴史科学協議会, p.67, 2015/2
- 東野将伸「巻頭言：資料リスト作成作業への所感」『史料ネット News Letter』76, 歴史資料ネットワーク, p.2, 2014/6
- 東野将伸「書評：塚田孝『大坂の非人一乞食・四天王寺・転びキリシタン—』」『歴史科学』218, 大阪歴史科学協議会, pp.52-59, 2014/11
- 東野将伸「幕末維新期の資金循環構造と掛屋—備中一橋領を題材に—」『歴史学研究月報』657, 歴史学研究会, pp.4-5, 2014/9
- 東野将伸「例会ニュース：2014 年 1 月例会「被災歴史資料保全活動と災害史研究」討論要旨」『日本史研究』629, 日本史研究会, pp.89-90, 2015/1
- 増成一倫「部会ニュース(古代史部会)：2014 年 12 月古代史部会熊谷公男報告討論要旨」『日本史研究』622, 日本史研究会, p.87, 2014/6
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2012 年 8 月近現代史部会晒谷亮太郎報告要旨」『日本史研究』623, 日本史研究会, pp.87-88, 2014/7
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2012 年 8 月近現代史部会福島彰人報告討論要旨」『日本史研究』623, 日本史研究会, pp.88-89, 2014/7
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2012 年 8 月近現代史部会晒谷亮太郎報告討論要旨」『日本史研究』623, 日本史研究会, pp.89-90, 2014/7
- 本井優太郎「例会ニュース：2011 年 12 月例会報告要旨と討論」『日本史研究』624, 日本史研究会, p.74, 2014/8
- 本井優太郎「部会ニュース(近現代史部会)：2013 年 4 月近現代史部会報告要旨」, 『日本史研究』626, 日本史研究会, pp.87-88, 2014/10
- 柳沢菜々「書評：服部一隆著『班田収授法の復元的研究』」, 『日本史研究』623, 日本史研究会, pp.57-62, 2014/7

【2015 年度】

〔学部生〕

- 辻阪啓子「地域史卒論報告会に参加して」『史料ネット News Letter』81, 歴史資料ネットワーク, pp.11-12, 2016/2
- 八木貴裕「地域史卒論報告会に参加して」『史料ネット News Letter』81, 歴史資料ネットワーク, pp.10-11, 2016/2

〔博士前期〕

- 安東 峻「部会ニュース(古代史部会): 2015 年 3 月古代史部会稲田奈津子報告討論要旨」,『日本史研究』641, 日本史研究会, pp.90-91, 2016/1
- 安東 峻「部会ニュース(古代史部会): 2015 年 5 月古代史部会報告要旨」,『日本史研究』643, 日本史研究会, pp.104-105, 2016/3
- 今井貴之「部会ニュース(古代史部会): 2013 年 6 月古代史部会報告要旨」,『日本史研究』635, 日本史研究会, pp.74-75, 2015/7
- 釜谷周子「2015 年度「第 31 回歴史学入門講座」の記録」『ヒストリア』252, 大阪歴史学会, pp.72-74, 2015/10
- 釜谷周子「部会ニュース(古代史部会): 2014 年 5 月古代史部会報告要旨」,『日本史研究』639, 日本史研究会, pp.96-97, 2015/11
- 杉山侑暉「部会ニュース(古代史部会): 2014 年 5 月古代史部会報告要旨」,『日本史研究』639, 日本史研究会, pp.97-98, 2015/11
- 杉山侑暉「大阪歴史科学協議会委員会記録(2014 年度 10 月・11 月・12 月・1 月・2 月・3 月)」,『歴史科学』222, 大阪歴史科学協議会, pp.60-62, 2015/11 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 杉山侑暉「大阪歴史科学協議会委員会記録(2014 年度 4 月・5 月・6 月臨時、2015 年度 6 月)」,『歴史科学』223, 大阪歴史科学協議会, pp.72-73, 2016/2 ※北泊謙太郎氏との共同執筆
- 田邊 旬「部会ニュース(中世史部会): 2014 年 12 月中世史部会報告要旨」,『日本史研究』632, 日本史研究会, p.80, 2015/4
- 田村 亨「部会ニュース(中世史部会): 2015 年 6 月中世史部会報告要旨」,『日本史研究』639, 日本史研究会, pp.103-104, 2015/11
- 田村 亨「質疑・討論(2015 年度大阪歴史学会大会中世史部会・高木純一「戦国期畿内村落における被官化状況と領主支配一東寺領山城国上久世荘を中心に」報告討論要旨)」,『ヒストリア』, 253, 大阪歴史学会, pp.97-99, 2015/12
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会): 2014 年 12 月中世史部会田辺旬報告討論要旨」,『日本史研究』632, 日本史研究会, p. 81, 2015/4
- 永山 愛「部会ニュース(中世史部会): 2015 年 5 月中世史部会島津毅報告討論要旨」,『日本史研究』638, 日本史研究会, pp.85-86, 2015/10
- 濱田恭幸「部会ニュース(近現代史部会): 2015 年 5 月近現代史部会報告要旨」,『日本史研究』633, 日本史研究会, pp.77-78, 2015/5
- 濱田恭幸「部会ニュース(近現代史部会): 2015 年 5 月近現代史部会長澤伸一報告討論要旨」,『日本史研究』633, 日本史研究会, pp.80-81, 2015/5
- 濱田恭幸「質疑・討論(2015 年度大阪歴史学会大会近代史部会・兒玉州平「複層化する日本帝国と「柔軟な」産業政策: 1930 年代を中心として」報告討論要旨)」,『ヒストリア』, 254, 大阪歴史学会, pp.152-154, 2016/2
- 平田良行「第 30 回歴史学入門講座参加記」,『歴史科学』222, 大阪歴史科学協議会, pp.42-45, 2015/11
- 平田良行「第 54 回近世史サマーセミナーの記録: サマーセミナー参加記」『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, p.222, 2015/12
- 八木貴裕「第 54 回近世史サマーセミナーの記録: 三角菜緒「播州加古川における河川交通の形成についてー播州滝野村阿江家史料を素材としてー(分科会 F 報告討論要旨)」『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, pp.219-220, 2015/12
- 〔博士後期〕
- 内田敦士「報告: 2・11 集会の記録」『ヒストリア』249, 大阪歴史学会, pp.123-125, 2015/4
- 内田敦士「書評: 大舩啓著『奈良時代の官人社会と仏教』」『ヒストリア』250, 大阪歴史学会, pp.63-69, 2015/6
- OZAKI Mari (Osaka University) The local officials of Edo-bakufu's government during the late early-modern period: The case of the second conquest of Choshu clan, "the 3rd Congress of AAWH Program: Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports" The Third Congress of the Asian Association of World Historians, p.29, 2015/5
- 尾崎真理「2014 年度大会(2 日目)討論要旨」『歴史科学』220・221 合併号, 大阪歴史科学協議会, pp.103-107, 2015/5
- ※吉元加奈美氏との共同執筆
- 尾崎真理「第 54 回近世史サマーセミナーの記録: 第二次長州出兵時における畿内幕領の代官手代と人足管理(全体会報

- 告要旨)』『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, p.212, 2015/12
- 尾崎真理「近世後期、畿内幕領村における広域行政の展開—郡中備銀制度の成立・展開をめぐって—(平成26年度懷徳堂研究出版助成報告)』『懷徳』84, 懷徳堂記念会, pp.65-66, 2016/1
- 島津 毅「書評: 片岡耕平著『日本中世の穢と秩序意識』』『歴史評論』781, 歴史科学協議会, pp.87-91, 2015/5
- 島津 毅「部会ニュース(中世史部会): 2015年5月中世史部会報告要旨」, 『日本史研究』638, 日本史研究会, pp.84-85, 2015/10
- 島津 毅「部会ニュース(古代史部会): 2014年6月古代史部会報告要旨」, 『日本史研究』639, 日本史研究会, pp.98-99, 2015/11
- 高木純一「書評: 呉座勇一著『日本中世の領主一揆』』『ヒストリア』249, 大阪歴史学会, pp.114-121, 2015/4
- 高木純一「戦国期畿内における村落構造と領主支配—東寺領山城国上久世荘を中心に—(2015年度大会中世史部会報告要旨)』『ヒストリア』250, 大阪歴史学会, pp.108-109, 2015/6
- 久野 洋「2014年度大会(1日目)討論要旨」『歴史科学』220・221 合併号, 大阪歴史科学協議会, pp.32-33, 2015/5
- 久野 洋「討論と反省(2015年度日本史研究会近現代史部会共同研究報告)」, 『日本史研究』642, 日本史研究会, pp.176-181, 2016/2
- 久野 洋「小西新右衛門宛武術家書簡について」『地域研究いたみ』45, 伊丹市立博物館, pp.64-85, 2016/3
- 東野将伸「2013年11月例会「被災地における地域歴史資料の保存—茨城史料ネットのとりくみから—」彙報」『歴史科学』222, 大阪歴史科学協議会, pp.52-53, 2015/11
- 東野将伸「2014年4月例会「旗本知行所からみた畿内・近国社会—熊谷光子著『畿内・近国の旗本知行と在地代官』をめぐって—」彙報」『歴史科学』222, 大阪歴史科学協議会, pp.55-57, 2015/11
- 東野将伸「〔研究発表要旨〕弘化〜元治期の質地売買と村・同族—備中国南西部の事例から—」『2015史学会113回大会プログラム』, 公益財団法人史学会, pp.24-25, 2015/11
- 東野将伸「第54回近世史サマーセミナーの記録」『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, pp.210-223, 2015/12
- ※第54回近世史サマーセミナー実行委員会の名義で記載。記録全体の文責。
- 東野将伸「第54回近世史サマーセミナーの記録: 幕末維新期の一橋領における租税・金融政策—西国所領・御用達町人との関係を中心に—(全体会報告要旨)』『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, p.214, 2015/12
- 東野将伸「【史料紹介】: 幕領代官役所の職務・先例と村方—備中国後月郡の村方文書を通じて—」『岡山地方史研究』137, 岡山地方史研究会, pp.18-23, 2015/12
- 東野将伸「〔報告要旨〕19世紀後期日本の農村部における生業と人口移動 The Pattern of Occupation and Population Movement in Rural Japan During the Latter Half of the 19th Century」, 大阪大学大学院文学研究科編『グローバル日本研究国際シンポジウム開く日本・閉じる日本—「人間移動学」事始め—』大阪大学大学院文学研究科, pp.22-23, 2016/3
- 東野将伸編『大和国宇陀郡松山町「森野家文書」—成巻文書』, 菊田印刷株式会社, 2016/3
- ※村田路人・高橋京子監修, 松永和浩・清水香穂・高浦(島田)佳代子氏と共編
- 古林小百合「水損史料の応急処置のワークショップに参加して」『史料ネット News Letter』79, 歴史資料ネットワーク, p.10, 2015/6
- 増成一倫「質疑・討論(2015年度大阪歴史学会大会古代史部会・中本和「平安時代における儀式と身分秩序—大臣大饗を中心に—」報告討論要旨)」, 『ヒストリア』253, 大阪歴史学会, pp.71-72, 2015/12
- 増成一倫「新刊紹介: 鈴木靖民・川尻秋生・鐘江宏之編『日本古代の運河と水上交通』』『ヒストリア』254, 大阪歴史学会, pp.182-183, 2016/2
- 柳沢菜々「部会ニュース(古代史部会): 2013年11月古代史部会報告要旨」, 『日本史研究』637, 日本史研究会, pp.89-90, 2015/9

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

東野将伸「近世中後期における地域金融構造の研究」, 第13回徳川奨励賞, 公益財団法人徳川記念財団, 奨励金: 50万円, 対象年度: 2016年4月-2017年3月, 受賞年月: 2015/12/10

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 2名 DC2: 3名 DC1: 1名 (計6名)

※PD: 芳澤 元・久保田裕次、DC2: 東野将伸・久野 洋・内田敦士、DC1: 高木純一

2015年度 PD: 2名 DC2: 4名 DC1: 0名 (計6名)

※PD: 芳澤 元・久保田裕次、DC2: 東野将伸・久野 洋・内田敦士・尾崎真理

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2015年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

佐伯 徳哉 博士後期課程、新居浜工業高等専門学校、准教授、2015/4

馬部 隆弘 博士後期課程、大阪大谷大学、専任講師、2015/4

廣川 和花 博士後期課程、専修大学、准教授、2015/4

松永 和浩 博士後期課程、大阪大学適塾記念センター、准教授、2015/4

牧野 雅司 博士後期課程、舞鶴工業高等専門学校、専任講師、2015/4

前田 英之 博士後期課程、梅花女子大学、講師、2015/4

野村 玄 博士後期課程、大阪大学大学院文学研究科、准教授、2016/4

柳沢 菜々 博士後期課程、京都精華大学、特任講師、2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 10名

2014年度: 5名 2015年度: 5名

<内訳>

2014年度 中・高等学校の教員 3名 (大阪成蹊女子高等学校、帝塚山学院泉ヶ丘中学校・高等学校、富山市立大沢野中学校)

技術職 2名 (情報処理・通信技術者: 関電システムソリューションズ、シティ・コム)

2015年度 博物館等の学芸員 2名 (島根県立古代出雲歴史博物館、今治市立村上水軍博物館)

中・高等学校の教員 3名 (智辯学園中学校・高等学校、大阪府立高等学校、就実中学校・高等学校)

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

9. 刊行物

2014年度 『史友会会報』第29号 (待兼山史友会編、同、2014年12月)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「大阪歴史科学協議会」（学会、編集事務局引き受け）	2008 年 6 月～2014 年 6 月
「大阪歴史科学協議会」（学会、事務局引き受け）	2014 年 6 月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

研究室例会（1998 年度～2015 年度）

- ・「戦後歴史学界をかいま見て」 2015 年 1 月 21 日
発表者：米田雄介先生（神戸女子大学名誉教授）
- ・「東京帝国大学における政治思想と社会運動」 2015 年 10 月 8 日
発表者：ティル・クナウト先生（ハイデルベルク大学日本学研究所）
- ・「赤松氏の播磨支配一守護と国衙をめぐる議論について」 2016 年 1 月 27 日
発表者：馬田綾子先生（梅花女子大学名誉教授）

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 村田 路人 教授

1955 年生。1977 年大阪大学文学部史学科卒業。1981 年大阪大学大学院文学研究科史学専攻博士後期課程中途退学。文学博士（大阪大学、1994 年）。大阪大学文学部助手、京都橘女子大学文学部専任講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2002 年 4 月より現職。専攻：日本近世史。

1-1. 論文

村田路人「自治体史の叙述方法をめぐって」和泉市史編さん委員会『和泉市史紀要』23, 和泉市教育委員会, pp. 23-32, 2016/3

村田路人「近世畿内近国地域の支配の特質と触留帳・触写帳・万留帳」摂津市教育委員会市史編さん室『新修摂津市史 史料と研究』2, 摂津市, pp. 167-184, 2016/3

村田路人「箕作秋坪宛緒方洪庵書状をめぐって」適塾記念会緒方洪庵全集編集委員会『緒方洪庵全集 第四巻 日記 書状（その一）』大阪大学出版会, pp. 275-288, 2016/3

村田路人「幕末期大坂地域と洪庵・適塾一種痘事業を中心に」適塾記念会『適塾』48, 適塾記念会, pp. 116-127, 2015/12

村田路人「「非領国」と広域支配」愛知県総務部法務文書課県史編さん室(編)『愛知県史のしおり』資料編 22, 愛知県総務部法務文書課県史編さん室, pp. 4-7, 2015/3

村田路人「吉宗の政治」大津透他(編)『岩波講座日本歴史』12, 岩波書店, pp. 1-34, 2014/11

1-2. 著書

村田路人, 橋本孝成(共著)『緒方洪庵全集 第四巻 日記 書状(その一)』大阪大学出版会, pp. 191-273, 2016/3

村田路人, 高橋京子, 松永和浩他(監修)『大和国宇陀郡松山町森野家文書一 成巻文書一森野吉野葛本舗・森野旧薬園伝来史料一』大阪大学適塾記念センター, 368p., 2016/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

村田路人「触留帳・触写帳と万留帳」摂津市教育委員会市史編さん室『新修摂津市史 史料と研究』2, 摂津市, pp. 1-166, 2016/3

村田路人「書評 熊谷光子著『畿内・近国の旗本知行と在地代官』」大阪歴史科学協議会『歴史科学』222, 大阪歴史科学協議会, pp. 24-32, 2015/11

村田路人「大阪歴史科学協議会創立五〇周年にあたって」大阪歴史科学協議会『歴史科学』220・221 合併号 創立 50 周年記念
特集号, 大阪歴史科学協議会, pp. ii - iii, 2015/5

1-4. 口頭発表

村田路人 (招待講演)「自治体史の叙述方法をめぐって」第4回地域史惣寄合 in 和泉:地域史の全体史と現代,地域史惣寄合、
和泉市教育委員会,桃山学院大学, 2015/7

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:村田路人

課題番号:24520747

研究題目:享保改革期幕府開発・治水政策の研究

研究経費:2014 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

本研究は、享保改革期において、幕府がどのような開発政策および治水政策をとったのか、両者の関係はどのようなものであったのかについて、堤外地(堤防と堤防とに挟まれた地)政策という新たな観点を取り入れ、享保改革期の幕府政治史との関わりにおいて検討しようとするものである。あわせて、この作業を通じ、長らく停滞の感がある享保改革研究を、方法論的提起も含め、新たな段階に引き上げることをも目的としている。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

豊中市歴史的文化的文書審議会・委員, 2014 年 11 月～現在に至る

豊中市文化財保護審議会・委員, 2014 年 4 月～現在に至る

文化庁文化審議会・専門委員, 2014 年 3 月～現在に至る

歴史科学協議会・理事, 2013 年 11 月～2016 年 11 月

摂津市文化財保護審議会・委員, 2013 年 7 月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・委員長, 2012 年 6 月～2016 年 6 月

吹田市立博物館協議会・委員, 2011 年 11 月～現在に至る

島本町文化財保護審議会・委員, 2008 年 10 月～現在に至る

吹田市文化財保護審議会・委員, 2003 年 11 月～現在に至る

2. 飯塚 一幸 教授

1958 年生。1988 年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了。文学修士(京都大学、1985 年)。舞鶴工業高等専門学校専任講師、佐賀大学助教授、大阪大学准教授を経て、2010 年 1 月より現職。専攻:日本近代史。

2-1. 論文

飯塚一幸「地域社会の変容と地方名望家」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 219, 大阪歴史科学協議会, pp. 18-31, 2015/2

2-2. 著書

飯塚一幸, 村田路人, 宇野田尚哉他(共編著)『会沢正志斎書簡集』思文閣出版, pp. 1-327, 2016/3

山本長次, 藤井鹿男, 飯塚一幸他(共編)『佐賀近代史年表大正編大正 4 年 1 月～大正 4 年 12 月』佐賀大学地域学歴史文化研究センター, pp. 1-135, 2016/3

山本四郎, 伊藤之雄, 飯塚一幸他(共編)『吉田清成関係文書』六, 思文閣出版, pp. 1-648, 2016/1

桃木至朗, 秋田茂, 飯塚一幸他(共著)『教育が開く新しい歴史学』山川出版社, pp. 10-35, 2015/11

原田敬一, 飯塚一幸, 小林啓治他(共著)『地域のなかの軍隊4 古都・商都の軍隊』吉川弘文館, pp. 113-140, 2015/4

山本長次, 生馬寛信, 飯塚一幸他(共編)『佐賀近代史年表大正編大正 3 年 1 月～大正 3 年 12 月』佐賀大学地域学歴史文化研究センター, pp. 1-109, 2015/3

飯塚一幸, 伊藤之雄, 小林道彦他(共著)『原敬と政党政治の確立』千倉書房, pp. 95-149, 2014/7

木戸衛一, 飯塚一幸, 二宮厚美他(共著)『平和研究入門』大阪大学出版会, pp. 27-37, 2014/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

飯塚一幸, 堤一昭「日清戦争・日露戦争研究の現在」大阪歴史教育研究会第 93 回例会, 大阪歴史教育研究会, 大阪大学, 2016/1

飯塚一幸, 鈴木栄樹, 小林啓治他「「裏日本」化のなかの宮津」近代化と地域社会の変容ー京都地域と丹後地域を事例にー, 京都 4 大学連携研究支援費による共同研究会, 京都薬科大学, 2015/11

飯塚一幸, 桃木至朗, 秋田茂他「阪大史学系の新しい教育」高大連携による大学歴史系専門教育・教員養成教育の刷新, 大阪大学歴史教育研究会, 史学会, 大阪大学, 2014/9『史学雑誌』124-1, pp. 94-95, 2015/1)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:飯塚一幸

課題番号:26284096

研究題目:小西家資料の総合的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 2,400,000 円 間接経費 720,000 円

2015 年度 直接経費 2,100,000 円 間接経費 630,000 円

研究の目的:

伊丹市の小西家は近世から現代に至る日本を代表する酒造家である。本研究は、伊丹市立博物館に寄託されている小西家資料と小西酒造萬歳蔵から発見された新出資料を対象として、(1)近世史・近代史・思想史・経済史・文学にまたがる学際的研究を行う、(2)(1)の研究を踏まえ『小西家資料の総合的研究』(仮)を刊行する、(3)(1)(2)の前提として、小西酒造萬歳蔵に所蔵されている新出資料の目録化を行い、CD-R による配布といった方法で公開することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

史学研究会・評議員, 2013 年 6 月～現在に至る

大阪歴史学会・事務局長, 2012 年 6 月～2014 年 6 月

3. 川合 康 教授

1958 年生。1987 年、神戸大学大学院文化科学研究科博士課程単位修得退学。文学博士（神戸大学、1994 年）。樟蔭女子短期大学助教授、東京都立大学准教授、日本大学教授を経て、2012 年 4 月より現職。専攻 日本中世史。

3-1. 論文

川合康「治承・寿永内乱期における和平の動向と『平家物語』」『文化現象としての源平盛衰記』笠間書院, pp. 542-559, 2015/5

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

川合康「治承・寿永内乱期の和平の動向」第 27 回中世政治史研究会, 東京大学史料編纂所, 2014/7

川合康「中世一山寺院と地域社会—金剛寺を中心に—」河内長野市教育委員会歴史文化基本構想普及啓発シンポジウム, キックス(市民交流センター), 2015/12

川合康「『建礼門院右京大夫集』と治承・寿永の内乱」第 33 回中世政治史研究会, 東京大学史料編纂所, 2016/1

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 川合康

課題番号: 23520833

研究題目: 『平家物語』成立圏の歴史学的研究

研究経費: 2014 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究は、従来、国文学研究で膨大な研究成果が積み重ねられてきた『平家物語』の成立に関して、治承・寿永内乱史研究の成果に基づいて新たな視点から検討を行うものである。具体的には、『平家物語』の「原構想」の中核にある「鹿ヶ谷事件」譚の展開を、鎌倉時代の文献・諸史料のなかを探るとともに、『平家物語』との相互交渉のなかで成立したと推定される同時代の文学作品などを収集・検討することによって、『平家物語』の原型が成立した時期やその「成立圏」を、歴史学的に解明することが目的である。

3-6-2. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 川合康

課題番号: 15K02831

研究題目: 京都大番役の成立・展開に関する実態的研究

研究経費: 2015 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、鎌倉幕府のもとで制度的に確立した京都大番役について、Ⅰ平安末期、Ⅱ治承・寿永内乱期(文治年間以前)、Ⅲ鎌倉前期(建久年間から承久の乱以前)、Ⅳ鎌倉中後期の4段階に区分して、その成立・展開の段階的特徴を実態的に明らかにすることである。その際、(a)里内裏警固、(b)大内守護(警固)、(c)院御所警固という3種類の御所の警固役を明確に区別したうえで、Ⅰ～Ⅳの段階においてそれぞれの警固役がどのように成立・展開し、鎌倉幕府のもとで京都大番役として統合・整備されて

いくのかを検討する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本史研究会・編集委員, 2013 年 10 月～2015 年 10 月

河内長野市文化財保護審議会・委員, 2012 年 11 月～現在に至る

メトロポリタン史学会・委員, 2005 年 4 月～2015 年 4 月

4. 市 大 樹 准教授

1971 年生まれ。2000 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学博士（大阪大学、2001 年）。奈良文化財研究所研究員、同主任研究員を経て、2009 年 4 月より現職。日本学術振興会賞（2012 年）、日本学士院学術奨励賞（2012 年）、濱田青陵賞（2013 年）、古代歴史文化賞大賞（2014 年）。専攻：日本古代史。

4-1. 論文

市大樹「隠岐国海部郡の荷札木簡とミヤケ」『隠岐の文化財』33, 「隠岐の文化財」編集委員会, pp. 1-20, 2016/3

市大樹「日本古代の関制の特質と展開」『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 222, 大阪歴史科学協議会, pp. 11-23, 2015/11

市大樹「黎明期の日本古代木簡」『国立歴史民俗博物館研究報告』194, 国立歴史民俗博物館, pp. 65-100, 2015/3

市大樹「日本古代駅伝制度の特質と展開—日唐比較と山陽道—」『播磨考古学研究集会の記録』15, 播磨考古学研究集会実行委員会, pp. 34-88, 2015/2

市大樹「出土文字資料からみた古代の駅家」『考古学ジャーナル』ニューサイエンス社, pp. 24-28, 2015/1

4-2. 著書

市大樹他(共著)『グローバルヒストリーと戦争』大阪大学出版, pp. 319-345, 2016/3

市大樹他(共著)『三重県史通史編 原始・古代』三重県, pp. 394-454, 2016/3

市大樹他(共著)『日本古代の交通・交流・情報1 制度と実態』吉川弘文館, pp. 2-30, 2016/2

市大樹他(共著)『日本「文」学史1—「文」の環境—』勉誠出版, pp. 143-146, 2015/9

市大樹他(共著)『日本古代のみやこを探る』勉誠出版, pp. 391-412, 2015/6

市大樹他(共著)『続日本紀と古代社会』塙書房, pp. 3-24, 2014/12

市大樹他(共著)『日本古代の国家と王権・社会』塙書房, pp. 223-243, 2014/5

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

市大樹(書評)「橋本繁著『韓国古代木簡の研究』日本歴史学会『日本歴史』(日本歴史学会), 日本歴史学会, pp. 92-93, 2015/11

市大樹「解説」国立歴史民俗博物館(共著)『文字がつなぐ』国立歴史民俗博物館, pp. 36-43, 2014/10

4-4. 口頭発表

市大樹(招待講演)「飛鳥・藤原京跡出土木簡から見た日本古代国家の形成」日本考古学協会, 奈良大学, 2015/10

市大樹(応募発表)「紙木併用時代の日本古代木簡」歴史と文化：晋洲史中的日本古代国際検討会, 清華大学, 2015/9

市大樹(招待講演)「木簡からみる文化交流—国の成り立ち、文字の成り立ち—」「古代歴史文化賞」記念シンポジウム「国家、誕生の謎」, 島根県, くにびきメッセ, 2015/2

市大樹(招待講演)「木簡からみる文化交流—国の成り立ち、文字の成り立ち—」「古代歴史文化賞」記念シンポジウム「いま、古

代のころが輝くとき」, 奈良県, 一ツ橋ホール, 2015/1

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

市大樹 古代歴史文化賞大賞, 島根県, 2014/10

市大樹 濱田青陵賞, 岸和田市・朝日新聞社, 2013/9

市大樹 大阪大学総長奨励賞(研究部門), 大阪大学, 2012/7

市大樹 日本学士院学術奨励賞, 日本学士院, 2012/2

市大樹 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:市大樹

課題番号:25370771

研究題目:東アジアにおける日本古代文書論の再構築

研究経費:2014 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究では、奈良時代から平安時代にいたる行政文書に焦点を定めて、木簡、古文書、編纂史料、古記録の相互比較をおこなう。〈文書の機能〉、〈紙と木の使い分け〉、〈文書伝達と口頭伝達との関係〉に注意しながら、日本古代の行政システムの構造とその変質過程を具体的に再現し、従来の文書様式論に変わる新たな枠組みの構築を模索する。以上の考察にあたっては、その模範となった中国・韓国など古代東アジアの行政文書にも広く目配りし、次なる目標とする「東アジア古代文書論」を構築するための布石とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

古代文化刊行委員会・編集参与, 2010 年 4 月～現在に至る

大阪歴史学会・編集委員, 2009 年 6 月～2014 年 6 月

続日本紀研究会・編集委員, 2006 年 6 月～現在に至る

条里制・古代都市研究会・集会委員, 2006 年 4 月～現在に至る

5. 野村 玄 准教授

1976 年生まれ。2004 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学)。大阪青山短期大学専任講師、防衛大学校講師、同准教授を経て、2016 年 4 月より現職。専攻:日本近世史。

5-1. 論文

野村玄 「「知行割」書出と徳川綱吉」『防衛大学校紀要(人文科学分冊)』110, pp. 1-56, 2015/3

野村玄 「徳川慶喜への叙勲一等授旭日大綬章と無親署勲記」『二十世紀研究編集委員会』『二十世紀研究』15, pp. 69-90, 2014/12

5-2. 著書

野村玄 『天下人の神格化と天皇』思文閣出版, 384p., 2015/2

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

野村玄(解説)「近代15宮家とはなにか」『歴史読本』2014年8月号, 株式会社KADOKAWA, pp. 50-55, 2014/6

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

野村玄 研究奨励賞, 財団法人防衛大学校学術・教育振興会, 2009/3

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 北泊 謙太郎 助教

1971年生。1995年、大阪大学文学部史学科国史学専攻卒業、1997年、大阪大学大学院文学研究科博士前期課程(史学専攻、日本史学専門分野)修了、2001年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(文化形態論専攻、日本史学専門分野)単位修得退学。修士(文学、大阪大学)。大阪大学大学院文学研究科ティーチング・アシスタント(1997年6月～1998年2月)。2001年より現職。専攻: 日本史学／日本近現代史。

6-1. 論文

北泊謙太郎「二・一一集会の史学史的検討に向けての覚書―「科学運動」としての「建国記念の日」反対運動―」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 224, 大阪歴史科学協議会, pp. 45-60, 2016/3

北泊謙太郎「近代日本における「兵士」の誕生―兵営内教育と戦場での兵士―」木戸衛一(編)『平和研究入門』大阪大学出版会, pp. 13-26, 2014/4

6-2. 著書

木戸衛一, 長野八久, 北泊謙太郎他(共著)『平和研究入門』大阪大学出版会, pp. 13-26, 2014/4

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

北泊謙太郎「大阪歴史科学協議会 2015 年度総会記事」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 223, 大阪歴史科学協議会, p. 53, 2016/2

北泊謙太郎「委員会記録(2015年4月～6月分)」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 223, 大阪歴史科学協議会, pp. 72-73, 2016/2 ※杉山侑暉氏と共著

北泊謙太郎「委員会記録(2014年10月～2015年3月分)」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 222, 大阪歴史科学協議会, pp. 60-62, 2015/11 ※杉山侑暉氏と共著

北泊謙太郎「委員会記録(2014年7月～9月分)」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 219, 大阪歴史科学協議会, pp. 68-69, 2015/2 ※杉山侑暉氏と共著

北泊謙太郎「大阪歴史科学協議会 2014 年度総会記事」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 219, 大

阪歴史科学協議会, p. 50, 2015/2

北泊謙太郎 「二・一一集会—各地の記録(大阪)」歴史科学協議会(編)『歴史評論』(歴史科学協議会), 772, 歴史科学協議会, pp. 108-109, 2014/8

北泊謙太郎 「近代大阪都市史研究の課題と方法—大都市行政と地域社会構造—」趣旨説明大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 217, 大阪歴史科学協議会, pp. 1-3, 2014/6 ※「大阪歴史科学協議会 WG」の名義で記述。

北泊謙太郎 「第47回「建国記念の日」不承認 2.11 大阪府民のつどい」の記録」大阪歴史科学協議会(編)『歴史科学』(大阪歴史科学協議会), 216, 大阪歴史科学協議会, pp. 13-16, 2014/6

北泊謙太郎 「第47回大会 参加記」歴史科学協議会(編)『歴史評論』(歴史科学協議会), 770, 歴史科学協議会, pp. 109-110, 2014/6

6-4. 口頭発表

北泊謙太郎 「論評:鈴木良「近代日本における地域支配について」、「地域支配の構造—いわゆる水国争闘事件の分析を通して—」」大阪歴史科学協議会前近代史・帝国主義合同部会:鈴木良氏例会企画第3回準備会, 大阪歴史科学協議会, 大阪市立浪速区民センター, 2015/12

北泊謙太郎 (基調講演)「〈戦後70年〉と歴史認識問題 —「戦争の語り」をめぐる抗争—」日本平和学会関西地区研究会シンポジウム:シンポジウム:〈戦後70年〉を考える, 日本平和学会関西地区研究会, 大阪大学大学院国際公共政策研究科, 2015/11

北泊謙太郎 「歴史認識問題の諸相—田中仁報告に寄せて—」大阪歴史科学協議会9月例会:戦後70年と21世紀の東アジア, 大阪歴史科学協議会, 大阪歴史博物館, 2015/9

北泊謙太郎 「近代日本の戦争と「自衛権」—戦争を受容する国民の論理と社会基盤—」日本科学者会議大阪支部哲学研究会9月例会, 日本科学者会議大阪支部, 日本科学者会議大阪支部事務所, 2015/9

北泊謙太郎 (招待講演)「歴史の中の「安保」法案」トークセッション「知ったかぶりに疲れました ～安保法案? 戦争法案?～」:トークセッション「知ったかぶりに疲れました ～安保法案? 戦争法案?～」, 板谷めぐみ写真展実行委員会, 日本極東貿易, 2015/7

北泊謙太郎 (招待講演)「「戦争立法」と歴史認識問題 —政治に利用される歴史=戦争認識—」SADLトークイベント UNITE ALL SMALL AXES vol.5:トークイベント「止めんとヤバイ! 戦争立法」, SADL, ロフトプラスワン WEST, 2015/6

北泊謙太郎 「ピースおおさか展示リニューアル問題について」第49回建国記念の日不承認 2.11 大阪府民のつどい, 「建国記念の日」反対大阪連絡会議, 大阪府教育会館, 2015/2(内田敦士「2・11 集会の記録」『ヒストリア』, 249, pp. 123-125, 2015/4)

北泊謙太郎 (基調講演)「2.11 集会の史学史的検討に向けての覚書—「科学運動」としての「建国記念の日」反対運動—」建国記念の日不承認 2.11 大阪府民のつどい プレ勉強会:「建国記念の日」反対運動の歩み, 「建国記念の日」反対大阪連絡会議, 大阪府教育会館, 2014/10(内田敦士「二・一一集会プレ勉強会」参加記『ヒストリア』, 247, pp. 272-273, 2014/12)

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪歴史科学協議会・庶務委員長, 2014年6月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・編集委員長, 2012年6月～2014年6月

歴史科学協議会・全国委員, 2012年6月～現在に至る

2-8 東洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 3 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：片山 剛、荒川 正晴、桃木 至朗

准教授：松井 太、田口宏二郎

助教：岡田 雅志

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
22	9	8	0	0	2	0	1

*うち留学生 4名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業者	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	8	3	2	1
2015	8	4	0	0
計	16	7	2	1

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

大学院の教育においては、以下の6項目を目標とする。①修士・博士論文作成演習を行い、教員および院生同士の批評を糧にして水準向上をめざす。2014年度は博士論文2本、修士論文2本を、2015年度は博士論文1本、修士論文4本を提出させる。②東洋史学研究分野独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、博士後期課程の院生には学部生向けに数種類の東洋史入門講義を数年サイクルで交互に担当させ、教育者として独立する際の訓練を行う。③本研究分野の教員が主催する国内学会の企画・実施、また中心メンバーとして開催している研究会の運営、あるいは雑誌の編集に院生を積極的に関わらせることによって、研究者として就職する際の有利な条件作りをする。④教員が科研費などによって実施する海外現地調査ないし文書調査に、できるだけ多くの博士後期課程の院生を帯同して訓練する。⑤学内外で開催される各種関連学会や研究会のいずれかにおいて、毎年1回は発表するようにする。⑥専門教育と連動するかたちで、阪大が進めている新しい世界史教育の試みに参加させ、深い専門性と広い視野の両方を備えられるようにする。

また学部の教育においては、以下の4項目を目標とする。①2年次生向けの漢文演習を2種類開講し、卒業論文執筆の

ための基礎となる漢文史料読解能力の充実をはかる。3 年次生、4 年次生についてもしかるべき漢文の授業を開講する。②中央アジア史・中国史・東南アジア史の 3 分野別に学部生向けの英語論文を読む演習を開講し、外国語を含む先行研究論文の批判的かつ精密な読み方の訓練を行うと共に、卒業論文作成に向けての能力を涵養する。③東洋史専修独特の伝統として、全教員・院生・学部生が参加する合同演習と通称する演習の場において、学部生に積極的に質問させるようなシステムの構築を行い、それを実行する。さらにこの合同演習を通じて、他大学には見られない学部生と大学院生との学問的連携体制を構築する。④学内外で開催される関連学会や研究会に積極的に参加する習慣をつけさせる。

2. 研究

教員では毎年 1 人平均で単著論文ないしそれに匹敵する内容のもの 1 本を発表することを目標とする。ただし東洋史学分野では印刷・編集などの関係で毎年確実に 1 本という目標はそもそも無理なので、実際には 3 年に 3 本を目標とする。本分野の単著論文とは、理科系の共同論文の少なくとも 5 本程度、一般的には 10 本程度、さらに場合によっては 20 本以上に相当する時間と労力を要するものである。博士後期課程の院生では 2 年に 1 本の単著論文ないし研究動向・書評の投稿を目標とする。また教員全員が新規ないし継続中の科学研究費に関わる海外現地調査ないし文書調査、ならびにそれと連動する研究を行う。研究代表者になっていない教員の場合は、新たに科学研究費・財団研究助成を申請する。このほか国際学会・国内学会のオルガナイザーないし発表者として活動するとともに、専門雑誌の編纂に携わり、関係分野の日本優位に尽力することも目標とする。

3. 社会連携

全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、世界史教育のさらなる改善をはかるとともに、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることを目標とする。また自らの研究成果を社会に還元できる機会である、社会人向けの講演・講義を積極的に引き受けることも目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

合同演習および中央アジア史・中国史・東南アジア史の各種ゼミにおいて、学部生・院生の教育が当初の予定に沿って着実に進められた。こうした学内での順調な教育を反映して、2014 年度においては卒業論文 8 本、修士論文 3 本、博士論文 1 本を提出させることができた。加えて、院生の論文発表は全 6 件にのぼり、学会・研究会（野尻湖クリルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪大学歴史教育研究会など）における発表は、全 20 回にもおよんでいる。また片山は、科研費による台北の国史館での資料調査に大学院学生 1 名を帯同し、資料調査の方法と地図類を解像度の高い画像で撮影する技法を習得させた。さらに荒川は夏季に新疆の草原調査と河西のオアシス調査を行った際に、それらに院生・学生計 4 名を参加させ、現地調査の経験を積ませた。桃木は、冬のベトナム山岳部の交通ルート調査に院生 2 名を参加させ、ベトナムでの歴史調査の基礎訓練をおこなった。留学状況としては、中国史の院生 2 名が中国政府奨学金留学生として新たに渡航した。東南アジア史では院生 1 名がベトナムから、学部生 1 名がフィリピンから帰国した。また専門教育と並んで桃木を中心にした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。関連して、桃木・荒川が他の 3 名の共著者らとともに、新しい大学教養課程用世界史教科書を刊行し、讀賣・朝日・日経など大手新聞でも紹介された。

2015 年度には、卒業論文 8 本、修士論文 4 本を提出させることができたが、博士論文については、執筆予定者の勤務の都合により完成に至らなかった。加えて、院生の論文発表は全 7 件にのぼり、学会・研究会（アジア世界史学会、未来戦略機構第 9 部門主催ワークショップなどの国際会議および野尻湖クリルタイ・中央アジア学フォーラム・大阪大学歴史教育研究会など）における発表は、全 25 回にもおよんでいる。さらに桃木は、夏季のベトナム・ラオス交通ルート調査に院生 2 名を参加させ、聞き取りを含む歴史調査の基礎訓練をおこなった。留学状況としては、中国史の院生 2 名

(博士前期課程 1 名、博士後期課程 1 名) が新たに中国の大学に渡航した。一方、東南アジア史の院生 1 名がベトナムに 1 年弱滞在して年度末に帰国した。また専門教育と並んで桃木を中心にした世界史教育の取り組みも順調に進み、学部生・院生に幅広い視野をもたせることに寄与した。関連して、桃木が責任編集をつとめた高大連携歴史教育に関する論集の中で、大阪大学史学系の取り組みが詳しく紹介されている。

2. 研究

研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。

2014 年度には、片山は 11 月に科研費による国際ワークショップを主催し、それら成果を含むニューズレター第 6 号を編集・分担執筆したほか、4 本の口頭発表(9 月台北と 11 月上海を含む)を行った。また、海外の研究者(廈門大学・南京大学)を招いた研究討論会と講演会を主宰した。荒川は、出土史料に関する専門論文を 2 本と概説文 1 本を執筆し、寧夏回族自治区の銀川で開催される国際会議に参加し、そこで研究報告を行った。桃木は英語 1 点、日本語 2 点の論文を公刊したほか、海域アジア史に関する台湾での会議を含め、計 4 件の研究発表をおこなった。田口は 1. 日本語論考を 3 編、英語書評を 1 篇を発表した。また Blue & Brook (eds.), *China and Historical Capitalism* の翻訳に従事、ブルック・イブリー・ウォン執筆の計 3 章分を担当した。2. 夏季に科研費(分担者)で台湾国史館での調査に従事した。3. 12 月には科研(片山代表)のワークショップで報告を行った。また 3 月には東京大学経済学研究科で開催された公共財に関する国際ワークショップでディスカッサント(英語)を務めた。4. 出土文書研究会の開催に協力、本学の院生・学生も交え、一次史料の利用状況を異分野間で共有するというプロジェクトを進めている(この作業の一端は『歴史評論』783、2015)で紹介されている。岡田は日本語ブックレット 1 冊を公刊した。また海外調査では、片山は、科研の代表者として台北(2 回)・広東での資料調査および農村実地調査を組織して実施した。荒川は 8 月に天山ユルドゥス草原の景観調査をし、引き続き 9 月にはトゥルファンおよび河西において文書と遺跡の実地調査を行った。桃木は冬季にベトナム山地から広西に抜ける交通ルートの調査を科研で実施、また歴史教育について、9 月に史学会と共催したシンポジウム(史学会 125 周年リレーシンポ 2014 の第一弾)のコーディネーターをつとめた。岡田は個人科研により夏季にタイ、ベトナムで、タイ族のアイデンティティ再編に関する実地及び文献調査を実施した。ほかに 2014 年度には、桃木が新規の科研研究プロジェクトの代表者として、学内外の分担者・協力者を率いて歴史学入門のモデル構築に向けた研究を開始した。

2015 年度には、研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。片山は、2015 年度文学研究科共同研究(課題名「地理空間情報を利用した近現代中国都市・農村社会研究の試み」)の代表として研究を組織し、当該課題ならびに前年度までの科研の成果に関する編集と分担執筆を行い、『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』第 7 号を刊行したほか、3 本の口頭発表(海外 1 本、国際ワークショップ 1 本)を行った。荒川は、中国語による専門論文 1 本と日本語による交通制度関係の概説文 1 本を執筆した。桃木は日本語 2 点、中国語 1 点の論文を公刊したほか、国際ワークショップを主催して基調講演をおこない(12 月大阪)、さらに国際会議で計 3 件(ピッツバーグ、シンガポール 2 件、)、国内では日本学術会議シンポ(8 月)および東方学会(11 月)での報告・招待講演をおこなった。2015 年度に着任した松井は英文・中文論文各 1 編を公刊、3 つの国際学会(敦煌、揚州、サンクトペテルブルク)で研究報告を行ない、英文・和文論文各 1 編を査読誌に投稿した。また中国新疆・敦煌・内蒙古での史跡調査を実施し、敦煌研究院・内蒙古大学での招待講演を行なった。その他、既公刊の論文 4 篇が中国・トルコで翻訳された。田口は国際学会提出論文 2 報(英語)・京都大学人文科学研究所の論集に日本語論文 1 篇を寄稿した。8 月には国際経済史学会にてパネリストとして報告、また明清史研究合宿ではディスカッサントを務めた。9 月には中国にて基調報告を、12 月には国際学会にてパネリストとして報告を行なった。岡田は学界動向 1 報(『史学雑誌』回顧と展望)を公刊したほか、2 つの国際会議(シンガポール、デリー)で研究報告を行った。また海外調査では、桃木・岡田は夏季にベトナム・ラオス間の山岳地帯の交通ルートの調査を科研で実施した。ほかに歴史教育に関連して、桃木が代表をつとめる科研研究プロジェクトで、学内外の分担者・協力者を率いて歴史学入門のモデル構築に向けた研究を進めた。

以上のほか、両年度を通じて、中央アジア学フォーラム、海域アジア史研究会などが予定通り開かれるとともに、その運営を主導することによって、自己の研究のみならず、我が国の学界全体の研究水準向上に貢献した。また荒川は『内陸アジア言語の研究』を編纂し、この分野の日本優位に尽力した。

3. 社会連携

2014 年度には、片山は史学会の評議員として、2012 年度にその創設を提唱した史学会賞の第 1 回授賞を実現させた。また、上海交通大学歴史学系の国際評価委員として、当該学系所属教員の研究活動に対する国際評価、当該学系の教育研究活動を国際的基準から正当に評価するための提言、ならびに当該学系の教育研究水準をさらに高めるための提言を、同大学学長に対して答申した。桃木は全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、荒川・岡田がこれを補佐した。具体的には、歴史教育研究会の月例会のほかに、神奈川・北海道・京都などの高校歴史教員の研究活動、堺市「日本と世界が会えるまち 2014」プロジェクトなどに協力し、世界史教育に関わる高大連携・社会連携を積極的に推進した。さらに桃木は、神戸女子大など 3 件の講演をおこなったほか、日本学術会議連携会員として、同史学委員会での高校新科目「歴史基礎」の検討に参加した。岡田は NPO 法人大阪府高齢者大学校が開講する「世界史からグローバル社会を見つめ直す科」のコーディネーターとして個人史と世界史をつなげる授業を企画・実施した。

2015 年度には、片山は、公益財団法人 大学基準協会の大学評価委員として、また同委員会の分科会主査として、国内の大学を対象とする認証評価ならびに質的向上の活動に尽力した。また香港中文大学から、歴史系の課程博士論文の学外審査員の依頼を受け、9 月の口頭試問にも出席して、審査報告書を提出した。史学会評議員および京都大学人文科学研究所の共同利用・共同研究拠点共同研究委員の業務にも例年どおり従事した。桃木は全国の高校歴史教員と協力して運営している大阪大学歴史教育研究会の活動をさらに発展させ、荒川・岡田がこれを補佐した。具体的には、歴史教育研究会の月例会のほかに、神奈川・北海道・京都などの高校歴史教員の研究活動、堺市「日本と世界が会えるまち 2015」プロジェクトなどに協力し、歴史教育に関わる高大連携・社会連携を積極的に推進した。さらに桃木は、教員免許更新講習（8 月）のコーディネーターをつとめ、福井県などで 4 件の出前講義・講演をおこなったほか、日本学術会議連携会員として、同史学委員会での高校新科目「歴史総合」の検討に参加し、7 月に設立された全国組織「高大連携歴史教育研究会」でも運営委員長に選出され活動を始めた。岡田は前年度に引き続き NPO 法人大阪府高齢者大学校が開講する「世界史からグローバル社会を見つめ直す科」のコーディネーターとして個人史と世界史をつなげる授業を企画・実施し、大学授業との連携などの新たな取り組みも始めた。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

教育目標として掲げた諸項目は、何れについてもおおむね順調に行われた。とくに教育の中心となる合同演習による学部生・院生の教育は当初の予定に沿って着実に進められ、中央アジア史・中国史・東南アジア史の 3 分野に分かれての各種ゼミでも目標通りの進歩が見られた。こうした学内での順調な教育を反映して、卒業論文 16 本、修士論文 7 本、博士論文 1 本を提出させることができたが、提出予定であった博士論文 1 本については、執筆予定者の勤務の都合などもあって完成に至らなかった。提出論文は何れも高いレベルで作成されている。また院生の査読付き全国学会誌を中心とする論文発表および、国際学会を含む学会・研究会における口頭報告も、教員の指導のもとに十分な成果をあげた。これらの点から判断して、所期の目標は達成できたと評価したい。

2. 研究

教員・大学院生の研究論文の執筆および学会発表に関しては、概ね当初の目標を達成している。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	1	0	1
2015	0	0	0
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

新見まどか「唐代藩鎮と東部ユーラシアの歴史的展開」2015/2

主査：荒川正晴 副査：片山剛、桃木至朗、田口宏二郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	0(0)	3(1)	0(0)	1(0)	6(3)
2015	0(0)	2(1)	4(0)	1(0)	0(0)	7(1)
計	2(2)	2(1)	7(1)	1(0)	1(0)	13(4)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	1	2	17	0	0	20
2015	8	6	11	0	0	25
計	9	8	28	0	0	45

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

大上幹広・鄧宇浩・下岸廉・檜垣翔・山崎達哉「軍事商業政権としての織豊政権」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』11, pp. 1-20, 2015/3（査読無し）

釜谷周子・小林基・中井勇人・濱田恭幸・柳侑子「第一次世界大戦と日本の植民地経営―帝国日本 総力戦体制への道のり―」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』11, pp. 21-42, 2015/3（査読無し）

〔博士後期〕

富田暁「アラジン 海のシルクロードとアラビアンナイト」『アニメで読む世界史2』, 山川出版社, pp. 33-52, 2015/1 (査読無し)

西田祐子「武則天期「鉄勒四部の南徙」再考—『新唐書』の基礎的分析を通じて—」『内陸アジア史研究』29, pp. 1-16, 2014/3 (査読有り)

旗手瞳「大英図書館蔵 IOL Tib J 1253 文書訳注考—吐蕃支配下の吐谷渾人千戸長任命について—」『内陸アジア言語の研究』29, pp. 157-199, 2014/8 (査読有り)

吉川和希「ベトナム黎朝前期「黎希葛碑文」訳注」『広島東洋史学報』19, 2014/12, pp. 24-38 (査読有り)

【2015 年度】

〔博士前期〕

明山曜子・高垣里衣・松本智慧・平田良行「流転する《ルネサンス》—その背後にあるものは?—」『大阪歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』12, pp. 20-39, 2016/3 (査読無し)

安東峻・浮田怜奈・田村亨・道越奈苗「フランス革命をどう記述していくか—人権宣言とラテンアメリカ—」『大阪歴史教育研究会成果報告書シリーズ』12, pp. 40-59, 2016/3 (査読無し)

今泉奏・竹中詩穂・方園・森下瑠子「「ローマの平和 (パクス=ロマーナ)」とユーラシア大陸」『大阪歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』12, pp. 1-19, 2016/3 (査読無し)

〔博士後期〕

猪原達生「宦官」『アジア遊学』191, pp.224-235, 2015/11 (査読なし)

多賀良寛「19 世紀ベトナムの銭貨流通における非制銭の位置付け—「古号銭」の問題を中心に—」『待兼山論叢』49 号 史学篇, pp. 27-56, 2015/12 (査読なし)

YOSHIKAWA Kazuki, “The Presence of Chinese Merchants in the Lạng Sơn Region of Vietnam during the Seventeenth Century,” in *Global History Working and Discussion Paper Series* 21, Osaka University, pp. 57-63, 2016/3 (査読無し)

吉川和希「十五世紀後半の中越間における使節往還—一四七五年ベトナム使節の雲南到来とその背景—」『東洋学報』第 97 巻第 4 号, pp. 59-93, 2016/3 (査読有り)

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

遠藤総史「南宋期, 外国賓礼の復興と再編—紹興 25 年 (1155 年) の占城使節への外交儀礼を中心に—」海域アジア史研究会 (大阪府・大阪大学), 2015/2/28

岡田陽平「広南阮氏政権における交易管理者と地方統治者に関する一考察」海域アジア史研究会 (大阪府・大阪大学), 2015/2/28

岡野翔太「戦後日本における華僑社会の二極化」神阪京華僑口述記録研究会 2014 年 12 月例会 (兵庫県・神戸華僑歴史博物館), 2014/12/6

岡野翔太「戦後日本における華僑社会の二極化—国共対峙と冷戦の狭間にゆらぐ「僑社三宝」—」神戸華僑華人研究会第 154 回研究例会 (兵庫県・神戸中華総商会ビル), 2014/12/13

大上幹広・鄧宇浩・下岸廉・檜垣翔・山崎達哉「16~17 世紀の東アジア世界と軍事商業政権—織豊政権を中心に—」大阪大学歴史教育研究会第 83 回例会 (大阪府・大阪大学), 2014/12/20

下岸廉「近年の軍礼研究紹介—丸橋充拓氏の諸論考を中心に—」第 53 回中央アジア学フォーラム (大阪府・大阪大学), 2015/3/28

中井勇人「15 世紀前半における女真人の朝鮮通交」海域アジア史研究会 (大阪府・大阪大学豊中キャンパス), 2014/7/26

釜谷周子・小林基・中井勇人・濱田恭幸・柳侑子「第一次世界大戦と日本の植民地—帝国日本 総力戦体制への道のり—」大阪大学歴史教育研究会第 83 回例会 (大阪府・大阪大学), 2014/12/20

- 中井勇人「入朝する『野人』たち—15 世紀における女真人と朝鮮王朝—」近世史フォーラム（大阪府・大阪市立難波市民学習センター），2015/1/31
〔博士後期〕
- 猪原達生「唐後期における宦官の政治参画と枢密使—敦煌書儀 P.3723『記室備要』を手がかりに—」第 51 回中央アジア学フォーラム（大阪府・大阪大学），2014/7/26
- 猪原達生「『甘露の変』再考—宦官内部の権力闘争からみた新たな意義づけ—」第 112 回史学会大会東洋史部会（東京都・東京大学），2014/11/9
- 猪原達生「宦官研究の現在・過去・未来—中国の事例を中心に—」大阪大学歴史教育研究会第 84 回例会（大阪府・大阪大学），2015/1/17
- TAGA Yoshihiro, “The development of silver economy in 19th century Vietnam,” 科学研究費補助金基盤研究 B「19 世紀前半「世界不況」下の貿易・貨幣・農業—ユーラシア東南部における比較と関連」2014 年度第 1 回国際ワークショップ（愛媛県・愛媛大学），2014/9/6
- TAGA Yoshihiro, “Vài nét về lưu thông tiền tệ ở Việt Nam nửa đầu thế kỷ 19,” Hội nghị thông báo Hán-Nôm học năm 2014 (Hanoi, Vietnam, Institute of Hán-Nôm Studies), 2014/12/30 【ベトナム語発表】
- 富田暁「西カリマンタン州における日本占領期の記憶・トラウマ・語り—日本・オランダ・インドネシアの交錯—」多文化間精神医学会第 21 回学術総会シンポジウム 10 戦争／トラウマ／和解の可能性（長崎県・長崎大学），2014/5/25
- 富田暁「日本占領期の記憶とトラウマ—インドネシア西カリマンタン州における「ポンティアナック事件」—」トラウマ経験の組織化をめぐる領域横断的研究研究会（京都府・京都大学），2015/3/27
- 新見まどか「唐代藩鎮における泰山信仰—『太平広記』所収、平盧節度使関連記事を中心に—」第 4 回若手アジア史論壇，（東京都・早稲田大学），2015/3/7
- 西田祐子「書評：Jonathan Karam Skaff（著）*Sui-Tang China and Its Turko-Mongol Neighbors: Culture, Power, and Connections, 580-800* (Oxford University Press, 2012)」第 51 回中央アジア学フォーラム（大阪府・大阪大学），2014/7/26
- 吉川和希「金石史料からみた 17 世紀後半のベトナム・ランソン地域と中国商人」蘭癖の会（大阪府・大阪歴史博物館），2015/2/16
- 吉川和希「17 世紀における北部ベトナムへの中国商人の進出—諒山地域を中心に—」海域アジア史研究会（大阪府・大阪大学），2015/3/28
- 【2015 年度】
〔博士前期〕
- 明山曜子・高垣里衣・平田良行・松本智恵「流転する〈ルネサンス〉—背後にあるものは？—」大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会（大阪府・大阪大学），2015/12/19
- 明山曜子「甘肅東部の地域社会—乾隆 46 年の「回変」をめぐる考察を中心に—」中国ムスリム研究会第 30 回定例会（東京都・東京大学），2015/12/20
- 安東峻・浮田怜奈・田村亨・道越奈苗「フランス革命をどう記述していくか」大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会（大阪府・大阪大学），2015/12/19
- 遠藤総史「大越の天下観とジェンダー」第 33 回百越の会（大阪府・国立民族学博物館），2015/4/11
- 遠藤総史「対外関係から見た宋朝の天下理念—冊封における爵位と使職に注目して—」第 180 回宋代史談話会（大阪府・大阪市立大学），2015/10/24
- 中井勇人「十五世紀前半における建州ジュシェンの対朝鮮関係—李満住による通交統制に着目して—」第 52 回野尻湖クリルタイ（日本アルタイ学会）（長野県・藤屋旅館），2015/7/19
- 中井勇人「書評：荷見守義『明代遼東と朝鮮』 汲古書院，2014 年」第 54 回中央ユーラシア学フォーラム（大阪府・大阪大学），2015/7/25
- 中井勇人「15 世紀半ばにおける朝鮮内附女真人軍官とその活動」第 3 回若手アジア史論壇関西西部会（大阪府・大阪大学），

2015/8/8

今泉奏・竹中詩穂・方園・森下瑤子「「ローマの平和（パクス＝ロマーナ）」とユーラシア大陸」大阪大学歴史教育研究会
第 92 回例会（大阪府・大阪大学），2015/12/19

〔博士後期〕

猪原達生「唐後期における枢密使の発展と宦官の権力」第 54 回東洋史学研究会（福岡県・福岡大学），2015/6/2

INOHARA Tatsuo, “Eunuchs, as Supporters of the Emperor: A Study of the Relationship between Eunuchs and
Emperors in the Late Tang Empire”, The 3rd Congress of Asian Association of World Historians (Singapore,
Nanyang Technological University), 2015/5/30

多賀良寛「19 世紀ベトナムにおける鑄銭体制の分析—阮朝による鑄銭管理と造幣権をめぐる思想—」貨幣史研究会第 51
回例会（吹田・関西大学），2015/9/27

多賀良寛「19 世紀ベトナムにおける鑄銭資源の調達—予備的考察—」京都大学東南アジア研究所共同利用・共同研究「19
世紀アジア経済史プロジェクト」第 3 回研究会（京都・京都大学東南アジア研究所東南亭），2015/11/29

TAGA Yoshihiro, “Food Supply in Hue under the Rule of Nguyen Dynasty,” The 7th “Engaging with Vietnam - An
Interdisciplinary Dialogue” Conference (Vietnam, Bac Ninh, Tu Son Campus of Hanoi University of Business and
Technology), 2015/7/8.

TAGA Yoshihiro, “The development of silver economy in nineteenth century Vietnam,” The 17th World Economic
History Congress (Kyoto, Kyoto International Conference Center), 2015/8/4.

TAGA Yoshihiro, “The Circulation of Small Denomination Currency in Early Modern Vietnam: An Analysis from a
Comparative Perspective,” Global History Workshop “Globalization from East Asian Perspectives” (Osaka, Osaka
University Nakanoshima Center), 2016/3/16

NISHIDA Yuko, “The Expansion of the Tang Empire and Turkic Nomads”, The 3rd Congress of Asian Association of
World Historians (Singapore, Nanyang Technological University), 2015/5/30

旗手瞳《Chad ka 词一考—中国国家图书馆藏敦煌藏文文献 BD09638 和 BD09641 の紹介と研究》鎖陽城遺址与丝绸之路历史文化学术研讨会（中国・甘肅省），2015/8/10-12

藤澤聖哉「南京国民政府期、上海の田賦徴収機構—地保と「棚」をめぐる—」第 113 回史学会大会東洋史部会（東京都・
東京大学），2015/11/15

吉川和希「十五世紀後半の中越間における使節往還と広西—土官によるベトナム使節への妨害事件を中心に—」東洋史学
研究会（福岡県・福岡大学），2015/7/18

吉川和希「17 世紀後半における北部ベトナムへの中国商人の進出—諒山地域を中心に—」第 113 回史学会大会東洋史部
会（東京都・東京大学），2015/11/15

YOSHIKAWA Kazuki, “The Presence of Chinese Merchants in the Lạng Sơn Region of Vietnam during the
Seventeenth Century,” The 3rd Congress of Asian Association of World Historians (Singapore, Nanyang
Technological University), 2015/05/29

YOSHIKAWA Kazuki, “Embassies between Đại Việt and China during the Late Fifteenth century,” The 7th
Engaging with Vietnam Conference (Vietnam, Bac Ninh, Tu Son Campus of Hanoi University of Business and
Technology), 2015/7/8

YOSHIKAWA Kazuki, “Sự hình thành phố ở Lạng Sơn từ nửa sau thế kỷ XVII đến thế kỷ XVIII,” Hội thảo quốc tế
“Tiếp cận liên ngành trong nghiên cứu lịch sử đô thị Việt Nam” (Vietnam, Hanoi, Trường Đại học Khoa học Xã hội
và Nhân văn), 2015/09/29

YOSHIKAWA Kazuki, “Hai quả chuông đúc tại Phật Sơn (Quảng Đông) được lưu giữ ở Lạng Sơn và Cao Bằng,”
Thông báo Hán Nôm học năm 2015 (Vietnam, Hanoi, Viện Nghiên cứu Hán Nôm), 2015/12/30

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

岡野翔太（訳）「国立台湾歴史博物館が所蔵する日本統治時代における台湾史関連文物及び史料」（謝仕淵），「台湾大学図書館日本語資料の保存と利用」（洪淑芬），「質疑応答」『第 2 回・第 3 回在台湾日本関係資料ワークショップ 報告書（未定稿）』（人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクト，研究カテゴリーB 植民地期台湾・「南洋」における日本人社会に関する資料の調査・研究，研究代表者 籠谷直人），pp. 39-43, 86-90, 114-118, 2015/3（原文中国語）

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 1 名 DC2 : 0 名 DC1 : 3 名（計 4 名）

2015 年度 PD : 1 名 DC2 : 0 名 DC1 : 2 名（計 3 名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 2 名（計 2 名）

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 4 名（計 4 名）

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

赤木崇敏 招へい研究員 四国学院大学文学部 准教授 2015/4

7. 専門分野出身の高度職業人

（2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 2 名

2014 年度 : 1 名 2015 年度 : 1 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2014 年度 : 1 名 2015 年度 : 0 名

9. 刊行物

【2014 年度】

- ・『内陸アジア言語の研究』29 号，2014 年，199p. + 2 pls.（中央ユーラシア学研究会：荒川研究室に事務局）
- ・片山剛・山本一（編）『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第 6 号（2014 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書），大阪大学文学研究科，2015 年 3 月，144p.
- ・桃木至朗（編）『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 11』（2014 年度～2017 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書），大阪：大阪大学文学研究科，2015 年 3 月，50p.

- ・大阪大学歴史教育研究会（編）（荒川正晴・桃木至朗ほか共著）『市民のための世界史』大阪大学出版会，2014 年 4 月，315p.

【2015 年度】

- ・『内陸アジア言語の研究』30 号，2015 年 7 月，284p. + 10 pls.（中央ユーラシア学研究会：荒川研究室に事務局）
- ・片山剛・山本一（編）『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』第 7 号，大阪大学文学研究科，2016 年 3 月，110p.
- ・桃木至朗（編）『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 12』（2014 年度・2017 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書），大阪：大阪大学文学研究科，2016 年 3 月，iii+62p.
- ・桃木至朗（編）『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ 13』（2014 年度・2017 年度科学研究費補助金 基盤研究(A) 研究成果報告書），大阪：大阪大学文学研究科，2016 年 3 月，104p.
- ・Momoki Shiro (ed.), *The End of the Charter Era in Eastern Eurasia: Social and Economic Changes in Japan, Korea and Dai Viet during the 14th to 15th Centuries, Working Paper No. 2*, JSPS Grant-in Aid for Scientific Research (A), Graduate School of Letters, Osaka University, March 2016, 53p.
- ・大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会（編）（責任編者桃木至朗）『史学会 125 周年リレーシンポジウム 2014 1 教育が開く新しい歴史学』，東京：山川出版社，2015 年 11 月，237p.

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

- ・中央ユーラシア学研究会「中央アジア学フォーラム」（荒川研究室に事務局）
参加人数は毎回 35 名～45 名，参加者の所属機関は延べ約 30
2014 年度 2014 年 7 月 26 日(第 51 回)、2014 年 12 月 13 日(第 52 回)、2015 年 3 月 28 日(第 53 回)
2015 年度 2015 年 7 月 25 日(第 54 回)、2015 年 12 月 12 日(第 55 回)
- ・海域アジア史研究会(桃木研究室に事務局；会場は主に大阪大学文学研究科)
参加人数は毎回 10 名～30 名、参加者の所属機関は延べ約 20
2014 年度 2014 年 5 月 24 日、2014 年 6 月 28 日（日本史研究会中世史部会との共催）、2014 年 7 月 26 日、2014 年 10 月 25 日（「歴史学フォーラム 2014」と共催）、2015 年 2 月 28 日、2015 年 3 月 28 日、2015 年 3 月 29 日（特別例会、第 3 回アジア世界史学会（AAWH）プレシンポジウム）
2015 年度 2015 年 7 月 25 日、2015 年 10 月 24 日（「歴史学フォーラム 2015」との共催）、2015 年 10 月 31 日（特別例会、文学研究科グローバルヒストリー研究クラスター、リーバermanワークショップ準備会との共催）、2015 年 11 月 23 日
- ・大阪大学歴史教育研究会(会の運営に参加；会場は大阪大学文学研究科)
参加人数は毎回 30 名～40 名，参加者の所属機関は延べ約 120
2014 年度 2014 年 4 月 19 日、2014 年 5 月 17 日、2014 年 6 月 21 日、2014 年 7 月 19 日、2014 年 10 月 18 日、2014 年 11 月 15 日、2014 年 12 月 20 日、2015 年 1 月 17 日、2015 年 3 月 14 日
*大阪大学歴史教育研究会（編）『市民のための世界史』（吹田：大阪大学出版会）の刊行 2014 年 4 月 25 日
*シンポジウム「高大連携による大学歴史系専門教育・教員養成教育の刷新」 2014 年 9 月 14 日（大阪大学中之島センターで公益財団法人史学会と共催、参加約 180 人）
2015 年度 2015 年 4 月 18 日、2015 年 5 月 16 日、2015 年 6 月 20 日、2015 年 7 月 18 日、2015 年 10 月 17 日、2015 年 11 月 21 日、2015 年 12 月 19 日、2016 年 1 月 16 日、2016 年 3 月 19 日
- ・国際ワークショップ Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In Honor of Professor Victor Lieberman's 70th Birthday, 2015 年 12 月 15-16 日、大阪大学豊中キャンパス、参加者 54 人（6 か国）
- ・グローバルヒストリー講演会（オーストラリア国立大学 Geoff Wade 博士、ミシガン大学 Victor Lieberman 教授）、2015 年 12 月 18 日、大阪大学文学研究科、参加者約 30 人
- ・南京大学武黎嵩講師講演会「中国譜牒文献の研究と利用」，2015 年 1 月 28 日，大阪大学豊中キャンパス，参加者 20 名

- ・第5回国際ワークショップ「近代東アジア土地調査事業研究」2014年11月22～23日、大阪大学豊中キャンパス、参加者22名
- ・厦門大学鄭振滿教授を囲む研究討論会「明清福建的〈社区〉和〈境〉、里社、神廟」, 2014年10月8日、大阪大学豊中キャンパス、参加者25名

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2014年度～2015年度の過去2年間)

1. 片山 剛 教授

1952年生。1981年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程中退。文学修士（東京大学）。1981年高知大学人文学部講師、1984年同助教授、1989年大阪大学文学部助教授、1996年同教授を経て、1998年4月より大学院文学研究科教授。専攻：中国近世／近代史。

1-1. 論文

片山剛「20世紀前半、南京市の土地測量・登記に関する備忘録」片山剛・山本一(共編著)『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』7, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 9-26, 2016/3

片山剛「分段図・所有権状の発給と登記文書の保管：契拠類の行方と証明責任の所在」片山剛・山本一(共編著)『近代東アジア土地調査事業研究 ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科片山剛研究室, pp. 86-98, 2015/3

1-2. 著書

片山剛, 山本一(共編著)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』7, 大阪大学文学研究科, 110p., 2016/3

片山剛, 山本一(共編著)『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科, 144p., 2015/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Katayama, Tsuyoshi, "Land System and Rural Society in Late Imperial South China: A Comparison with Japan and so on", Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspective, Institute for Academic Initiatives; Osaka University and University of Oxford Center for Global History, Osaka University Nakanoshima Center, 2016/3

片山剛「農民對“田”(單宗耕地)的所有／村莊對“lang”(小地名)的管轄：以土改前夕廣東省高要縣金東圍爲主」UGC AoE Scheme: The Historical Anthropology of Chinese Society: Seminar, Centre for Historical Anthropology, The Chinese University of Hong Kong and South China Research Center, The Hong Kong University of Science & Technology, 香港中文大學, 2015/9

片山剛「農民による〈一筆耕地〉の所有、村落による〈小字〉の管轄」明清史夏合宿 2015: 明清史研究, 明清史夏合宿の会, 筑波大学(筑波江戸屋), 2015/8

片山剛「土改前夕村庄の土地“管理”和村民的土地“所有”：以広東省高要県為例」第17回上海交通大学・大阪大学学術交流セミナー, 上海交通大学・大阪大学, 上海交通大学, 2014/11(*The 17th Academic Exchange Seminar between Shanghai Jiao Tong University and Osaka University*, 2014, p. 44, 2014/11)

片山剛「分段図・所有権状の発給と登記文書の保管」第5回国際ワークショップ「近代東アジア土地調査事業研究」: 近代東アジア土地調査事業研究, 大阪大学文学研究科, 2014/11(『近代東アジア土地調査事業研究ニューズレター』6, pp. 86-98, 2015/3)

片山剛「コメント:長江(揚子江)経済圏の過去・現在・未来」シンポジウム「長江(揚子江)経済圏の過去・現在・未来」:長江(揚子江)経済圏の過去・現在・未来, 渋沢栄一記念財団, 渋沢栄一記念財団(東京都北区), 2014/10

片山剛(招待講演)「關於二十世紀三十年代南京市土地登記工作及文件」台湾社会経済史討論会:台湾社会経済史討論会, 国立陽明大学, 国立陽明大学(台湾台北), 2014/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(A) 一般、代表者:片山剛

課題番号:23242043

研究題目:中国における土地領有の慣習的構造と土地制度近代化の試み

研究経費:2014年度 直接経費 5,300,000円 間接経費 1,590,000円

研究の目的:

第一に、近代中国における土地の調査・整理事業と土地制度近代化の試みについて、主に1930年代中葉～40年代後半の南京市の土地調査・整理事業を対象に考察する。これを通じて、20世紀前半の中国大陆における土地制度のあり方を、古代から現在に至る中国史上のなかに定位するとともに、近代東アジア諸地域と対比した位置づけも行う。第二に、伝統中国における「土地の近代的所有」の範疇に収まらない事象に関する知見を、土地調査事業時に報告された事例の解析と、当該事例に即して実施する農村古老への採訪調査とによって実証的かつ具体的に提示する

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

一般財団法人東方学会・学術委員, 2015年7月～現在に至る

一般財団法人東方学会・地区委員, 2011年7月～現在に至る

公益財団法人史学会・評議員, 2001年10月～現在に至る

2. 荒川 正晴 教授

1955年生。1986年、早稲田大学大学院文学研究科博士課程中退。文学博士(大阪大学)。早稲田大学非常勤講師、大阪大学文学部助教授を経て、2001年4月より現職。(財)東洋文庫研究員。専攻:中央アジア古代史。

2-1. 論文

荒川正晴(共著)「中国律令制下の交通制度と道路」館野和己、出田和久『日本古代の交通・交流・情報』吉川弘文館, pp. 264-287, 2016/2

荒川正晴「大英図書館所蔵コータン出土木簡の再検討ー木簡内容とその性格をめぐるー」『待兼山論叢』48, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-23, 2014/12

荒川正晴「西域長史文書としての「李柏文書」」『大谷光瑞とスヴェン・ヘディン』勉誠出版, pp. 213-234, 2014/9

荒川正晴「トゥルフアンにおけるソグド人」『アジア遊学』175, 勉誠出版, pp. 101-118, 2014/8

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Arakawa, Masaharu, “Revisiting Silk Road Trade Activities in Eastern Eurasia: Considering Tang China’s View of the World”, Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspective, Institute for Academic Initiatives; Osaka University and University of Oxford Center for Global History, Osaka University Nakanoshima Center, 2016/3

荒川正晴「中央アジアの大型墳丘墓」第1回「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究集会, 大阪大学文学研究科, 2015/12

荒川正晴 (招待講演)「西突厥汗国的 Tarqan 達官与粟特人」第二屆絲綢之路國際學術研討会: 粟特人在中国: 考古發現与出土文献的新印証, 寧夏文物考古研究所・北京大学中国古代史研究中心, 銀川, 2014/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

荒川正晴 大阪大学共通教育賞, 大阪大学共通教育機構, 2010/11

荒川正晴 流沙海西奨学会賞, 流沙海西奨学会, 1986/12

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

内陸アジア史学会・副会長・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

東方学会・学術委員, 2011 年 9 月～2014 年 9 月

3. 桃木 至朗 教授

1955 年生。京都大学文学部卒、同大学院文学研究科単位取得退学。論文博士（文学、広島大学）。大阪外国語大学専任講師（ベトナム語）、大阪大学教養部助教授、同文学部助教授（いずれも東洋史学）などを経て 2001 年から現職（2010～12 年度はコミュニケーションデザイン・センターと兼任）。現在、日本学術会議史学委員会連携会員。専攻：東南アジア史／アジア海域史／歴史教育。

3-1. 論文

桃木至朗, 堤一昭, 秋田茂他(共著)「阪大史学系の歴史教育改革」大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会(共編)『史学会 125 周年リレーシンポジウム 2014 1 教育が開く新しい歴史学』山川出版社, pp. 10-35, 2015/11

桃木至朗「亞洲東部海域的「貿易時代」與「小農社會」: 以越南北部實例為中心」国立清華大学人文社会研究中心『季風亞洲研究』1 卷-1 期, pp. 1-31, (紀婉淳責任校対), 2015/10

桃木至朗, 大阪大学歴史教育研究会(共著)「高大連携で取り組む歴史教育の総合的改善」歴史科学協議会(編)『歴史評論』(歴史科学協議会), 760 号, 校倉書房, pp. 25-34, 2015/5

桃木至朗「大学における専門教育・教員養成教育の刷新－歴史教育における高大連携の新しいかたち」九州歴史科学協議会『九州歴史科学』42, 九州歴史科学協議会, pp. 88-97, 2014/12

Momoki, Shiro, “The Vietnamese Empire and Its Expansion c. 980-1840” Geoff Wade(編) *Asian Expansions: Historical Processes of Polity Expansion in Asia*, London: Routledge, pp. 144-166, 2014/10

桃木至朗「戦争のための歴史、平和のための歴史——東アジア諸国民の相互理解を阻むものは何か？——」木戸衛一(編)『平和研究入門』大阪大学出版会, pp. 220-232, 2014/4

3-2. 著書

桃木至朗, 堤一昭, 秋田茂他(共編著)『史学会 125 周年リレーシンポジウム 2014 1 教育が開く新しい歴史学』山川出版社, 237p, pp. 3-8, pp. 10-35(大阪大学歴史教育研究会・公益財団法人史学会編、責任編者桃木至朗), 2015/11

桃木至朗, 秋田茂, 荒川正晴他(共編著)『市民のための世界史』大阪大学出版会, 315p, pp. 1-22, pp. 72-74, pp. 85-88, pp. 91-100, pp. 116-140, pp. 182-186, pp. 208-214, pp. 221-223, pp. 227-232, pp. 244-288, 2014/4

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Momoki, Shiro, (招待講演)“Revisiting the Fourteenth-Century Crisis of Đại Việt against the Background of the Yuan-Ming Transition in Eastern Eurasia”, Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspective, Institute for Academic Initiatives; Osaka University and University of Oxford Center for Global History, Osaka University Nakanoshima Center, 2016/3

Momoki, Shiro, (基調講演)“Why Osaka Historians Were Excited with Strange Parallels? An Introduction to Osaka Global History and Area Studies”, International Workshop: Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In Honor of Professor Victor Lieberman’s 70th Birthday, 大阪大学文学研究科グローバルヒストリー研究クラスター, 大阪大学会館, 2015/12

桃木至朗 (招待講演)「金石文から見た中世ベトナムの国家・社会」平成 27 年度秋季学術大会, 一般財団法人東方学会, 日本教育会館, 2015/11(『東方学』131, pp. 165-165, 2016/1)

桃木至朗 (パネリスト)「制度の壁か思考の壁か?——「思考力」を評価できる問いを求めて」公開シンポジウム「歴史教育の明日を探る—「授業・教科書・入試」改革に向けて—」, 日本学術会議, 日本学術会議, 2015/8

Momoki, Shiro, (招待講演)“In Search of Integrated Education of World and Japanese Histories in Japanese High Schools and Universities”, Researching World History in the Schools; Nationwide and Worldwide, Alliance for Learning in World History, University of Pittsburg, 2015/5

Momoki, Shiro, (パネリスト)“How to Teach World History in Japan, in Which Asia Is Well Positioned and Japan Is Fully Incorporated”, 3rd AAWH Congress: Migration in Global History: People, Plants, Plagues and Ports: panel 3-4: Teaching Asian History to Students and Teachers within New Frameworks of Subjects and Curriculums, AAWH (Asian Association of World Historians), Nanyang Technology University, Singapore, 2015/5

Momoki, Shiro, (パネリスト)“What Epigraphic Sources Tell about Social Change in Đại Việt during the 14th-15th Centuries”, 3rd AAWH Congress: Migration in Global History: People, Plants, Plagues and Ports: panel 4.4: The End of the Charter Era in Eastern Eurasia: Social and Economic Changes in Japan, Korea and Đại Việt during the 14th to 15th Centuries, AAWH (Asian Association of World Historians), Nanyang Technology University, Singapore, 2015/5

桃木至朗 (招待講演)「新しい世界史叙述と歴史学入門を目指して～阪大史学系の取り組みから～」シンポジウム「高校世界史教科書記述・再考 研究者の視点から」, 立教大学文学部史学科, 立教大学池袋キャンパス, 2015/3

桃木至朗 (基調講演)「現代日本における大学教養教育とそこでの世界史の位置」シンポジウム「歴史的教養とは何か—大学における歴史教育の新たな展開をめざして」, 科研「市民的教養のための歴史学—国際比較研究—」, 東京大学駒場キャンパス, 2015/2

桃木至朗, 堤一昭, 秋田茂他 (招待講演)「報告A: 阪大史学系の新しい教育」シンポジウム「高大連携による大学歴史系専門教育・教員養成教育の刷新」, 大阪大学歴史教育研究会・史学会, 大阪大学中之島センター, (史学会 125 周年事業・リレーシンポジウム 2014 の第 1 回), 2014/9

桃木至朗 (招待講演)「海域アジア東部における「交易の時代」と「小農社会」:北部ベトナムの例を中心として」(亞洲東部海域的「貿易時代」與「小農社會」:以越南北部實例為中心)」國際研討會「大航海時代台灣與東亞」, 台灣清華大學歷史所, 台灣中央研究院, 2014/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桃木至朗 ハノイ国家大学発足 20 周年にあたり同大学の事業に貢献した外国人として記念章授与, 2013/12

桃木至朗 大阪大学総長顕彰 2015・研究部門の顕彰を受ける, 2015/7

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:桃木至朗

課題番号:26244034

研究題目:研究者・教員・市民のための新しい歴史学入門

研究経費: 2014 年度 直接経費 6,700,000 円 間接経費 2,010,000 円

2015 年度 直接経費 7,400,000 円 間接経費 2,220,000 円

研究の目的:

大阪大学における高大連携を通じた歴史教育刷新の取り組みの一環として、専門研究の基礎となるだけでなく、初中等教育の教員をみざす学生、広く歴史学に関心を持つ市民・知識人にも理解できるような、新しい歴史学入門のモデル構築と入門書の作成をみざす。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

高大連携歴史教育研究会運営委員長, 2015 年 7 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2011 年 10 月～現在に至る

東方学会・評議員, 2011 年 9 月～現在に至る

文化遺産国際協力コンソーシアム・東南アジア専門委員会委員, 2006 年 12 月～現在に至る

アジア太平洋フォーラム・淡路会議事務局・アジア太平洋研究賞審査委員, 2004 年 4 月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2000 年 4 月～現在に至る

4. 松井 太 准教授

1969 年生。1999 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2001 年弘前大学人文学部講師、2004 年同助教授、2007 年同准教授、2010 年同教授。2015 年 4 月より現職。(財)東洋文庫客員研究員、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員。専攻: 中央アジア史・モンゴル帝国史。

4-1. 論文

松井太「敦煌莫高窟・安西榆林窟の回鶻語題記」阿不都熱西提=亞庫甫(編)『西域—中亞語文研究:2012 年中央民族大學主辦西域—中亞語文國際學術研討會論文集』上海古籍出版社, pp. 210-225, 2015/12

Matsui, Dai, “Ürümchi we Qedimki “Yürünčin” sözi toghrisida”, 『語言與翻譯(Til we terjime)』2015-4, 新疆維吾爾自治區語言與翻譯雜誌社, pp. 11-15, (翻訳:Aysima Mirsultan), 2015/12

Matsui, Dai, “Old Uigur Toponyms of the Turfan Oases”, Elisabetta Ragagnin, Jens Wilkens, Gökhan Şilfeler (eds.), *Kutadgu Nom Bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag*, Harrassowitz, pp. 275-304, 2015/8

Matsui, Dai, “Uygur ve Moğol Vesikalarında Görülen Moğol İmparatorluğu Ağırlık ve Ölçü Birleşimi”, *Türk Kültürü Araştırmaları*

- Dergisi*, 2015-1, Türk Kültürü Araştırma Enstitüsü, pp. 113-126, (翻訳: Ayşe Kılıç), 2015/8
- 松井太「回鶻文・蒙古文文獻中所見蒙古帝國時期對度量衡的統一」俄軍・楊富學(共編)『回鶻學譯文集新編』甘肅教育出版社, pp. 345-359, (翻訳: 楊富學・陳光文), 2015/5
- 松井太「東西察合臺系諸王家與回鶻藏傳佛教徒」俄軍・楊富學(共編)『回鶻學譯文集新編』甘肅教育出版社, pp. 93-116, (翻訳: 楊富學・劉宏梅), 2015/5
- 松井太「敦煌出土西夏語佛典夾雜之回鶻文雜記」俄軍・楊富學(共編)『回鶻學譯文集新編』甘肅教育出版社, pp. 136-141, (翻訳: 陳愛峰・周欣), 2015/5
- Matsui, Dai, “Six Seals on the Verso of Čoban’s Decree of 726 AH/1326 CE”, *Orient*, 50, The Society for Near Eastern Studies in Japan, pp. 35-39, 2015/3
- Matsui, Dai, Ryoko Watabe, “A Persian-Turkic Land Sale Contract of 660 AH/1261-62 CE”, *Orient*, 50, The Society for Near Eastern Studies in Japan, pp. 41-51, 2015/3
- Matsui, Dai, Ryoko Watabe, Hiroshi Ono, “A Turkic-Persian Decree of Timurid Mirān Šāh of 800 AH/1398 CE”, *Orient*, 50, The Society for Near Eastern Studies in Japan, pp. 53-75, 2015/3
- 松井太「古ウイグル語行政命令文書に「みえない」ヤルリグ」『人文社会論叢』33, 弘前大学人文学部, pp. 55-81, 2015/2
- Matsui, Dai, “Eski Uyğur hukuk belgelerinde geçen borun ve borunluq üzerine”, Aysima Mirsultan, Mihrban Tursun-Aydın, Erhan Aydın (eds.), *Eski Türkçeden Çağdaş Uyğurcaya: Mirsultan Osman’ın Doğumunun 85. Yılına Armağan*, Kömen, pp. 89-106, 2015/2
- Matsui, Dai, “Dating of the Old Uigur Administrative Orders from Turfan”, Mustafa Özkan, Enfel Doğan (eds.), *VIII. Milletlerarası Türkoloji Kongresi (30 Eylül - 04 Ekim 2013 - İstanbul) Bildiri Kitabı*, 4, İstanbul Üniversitesi, pp. 611-633, 2014/10
- 松井太「ソグドからウイグルへ」森部豊(編)『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』(アジア遊学 175), 勉誠出版, pp. 261-275, 2014/8
- 松井太「敦煌諸石窟のウイグル語題記銘文に関する筭記(二)」『人文社会論叢』32, 弘前大学人文学部, pp. 27-44, 2014/8

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

- Matsui, Dai, “Network under the Mongol Empire as Seen in the Turco-Mongolian Documents Discovered in Central Asia”, Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspective, Institute for Academic Initiatives; Osaka University and University of Oxford Center for Global History, Osaka University Nakanoshima Center, 2016/3
- 松井太(招待講演)「黒城出土蒙古文文書和回鶻文文書」内蒙古大學蒙古學學院學術講座, 內蒙古大學蒙古學學院, 2015/12
- 松井太(招待講演)「回鶻佛教徒在敦煌: 敦煌諸石窟回鶻語銘文調查簡報」莫高窟敦煌研究院學術講座, 莫高窟敦煌研究院, 2015/12
- Matsui, Dai, “Uigur-Turkic Influence on the Qara-Qota Mongolian Documents”, International Scientific Conference “Languages and Literatures of the Turkic Peoples”, St. Petersburg State University, Oktiabrskaya Hotel, 2015/10
- Matsui, Dai, “Network of the Uigur Buddhists and Christians in the Mongol-Yuan period”, International Conference “Marco Polo and the Silk Road”, 中國揚州市人民政府・揚州大學・揚州市文物局・揚州博物館・北京大學, 揚州會議中心, 2015/9
- Matsui, Dai, “Uigur Buddhist Pilgrims as Seen in the Wall Inscriptions in the Dunhuang Caves”, 2015 敦煌論壇: 敦煌與中外關係國際學術研討會: 敦煌文獻與史地研究, 敦煌研究院・中國敦煌吐魯番學會, 莫高窟敦煌研究院, 2015/8
- 松井太「アルダビール新發現トルコ語・モンゴル語文書」第53回 中央アジア学フォーラム, 中央ユーラシア学研究会, 大阪大学,

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

松井太 第23回東方学会賞, 東方学会, 2004/11

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(B) 海外、代表者:松井太

課題番号:26300023

研究題目:多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合

研究経費: 2014年度 直接経費 4,600,000 円 間接経費 1,380,000 円

2015年度 直接経費 4,400,000 円 間接経費 1,320,000 円

研究の目的:

敦煌(中国甘粛省)・トゥルファン(中国新疆ウイグル自治区)および周辺地域から出土した文献資料および当該地域の諸石窟遺跡に残る銘文資料を解読研究し、その校訂テキストを歴史的に利用して当該地域の歴史展開の諸相(特に諸文化の接触・摩擦・融合)を、総合的な視点から解明することを目的とする。

4-6-2. 2014年度～2015年度、挑戦的萌芽研究、代表者:松井太

課題番号:26580131

研究題目:モンゴル時代の漢文資料における非漢語人名表記体系の解明

研究経費: 2014年度 直接経費 1,500,000 円 間接経費 450,000 円

2015年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

西暦13～14世紀のモンゴル帝国支配下の中国地域で編纂された漢文資料中にみえる非漢語人名について、その原語(モンゴル語、トルコ語、ペルシア語、アラビア語、チベット語など)表記を同時代の諸言語資料の用例に基づきつつ再構成することを目的とする。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

4-7-1. 2015年度～2015年度、6: 研究助成、助成金獲得者:松井太

助成金名:アジア歴史研究助成

研究題目:10～14世紀東方ユーラシアにおける古代ウイグル族ネットワークの解明

助成団体名:JFE21世紀財団

助成金額:2015年度 直接経費 1,500,000 円

研究の目的:

近年の日本の歴史研究においては、西暦13～14世紀のモンゴル帝国のもとで展開したユーラシア交流を、世界史上最初の「グローバル化」と位置づける視点が有力である。本研究は、ウイグル族が東方ユーラシア各地に遺した古ウイグル語文献資料を用いて、このモンゴル帝国による「グローバル化」とその前段階の歴史相を解明するものである。

4-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員, 2015年7月～現在に至る

5. 田口 宏二郎 准教授

1971年生。1999年、大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)(大阪大学)。2003年大阪大学文学研究科助手、2004年追手門学院大学文学部講師、2008年追手門学院大学国際教養学部准教授を経て、2012年4月より大阪大

学大学院文学研究科准教授。専攻：中国近世・近代史。

5-1. 論文

田口宏二郎 「大気汚染と「中国社会」論」『東アジア“生命健康圏”構築に向けて』大阪大学中国文化フォーラム, pp. 79-82, 2015/3

田口宏二郎 「空間の切り取られかた」片山剛『近代東アジア土地調査事業ニューズレター』6, 大阪大学文学研究科, pp. 67-70, 2015/3

田口宏二郎 「「経済成長」の中国史」『大阪大学中国文化フォーラム・ディスカッションペーパー』No.2014-4, 大阪大学中国文化フォーラム, pp. 1-29, 2014/10

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Taguchi, Kojiro((Book Review)), “B. So ed., Economic History of Lower Yangzi Delta in Late Imperial China”, , *International Journal of Asian Studies*, Cambridge University Press, pp. 222-224, 2014/7

田口宏二郎((書籍紹介)) 『『揚子江は今も流れている』』『東方』400, 東方書店, p. 26, 2014/6

5-4. 口頭発表

Taguchi, Kojiro, (パネリスト) “Daily lives and the making of early-modern empires: introductory remarks”, Global History Workshop: Globalization from East Asian Perspective, Institute for Academic Initiatives; Osaka University and University of Oxford Center for Global History, Osaka University Nakanoshima Center, 2016/3

田口宏二郎 (パネリスト) 「経済成長と中国史」大阪大学歴史教育研究会第 94 回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学, 2016/3

Taguchi, Kojiro, (パネリスト) “The “Sinic worlds” modernization or early-modernization”, Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In honor of Professor Victor Lieberman’s 70th birthday, Osaka University, Osaka University, 2015/12

田口宏二郎 (招待講演) 「畿輔・漕運・南北中国」運河学研究学術論壇, 聊城大学・香港中文大学, 聊城大学運河学研究院, 2015/9

Taguchi, Kojiro, (パネリスト) “Economic development of the early modern China: a revisiting”, The 17th World Economic History Congress: Intensive economic growth in premodern East Asia, 1000-1800, International Economic History Association, Kyoto, 2015/8

Taguchi, Kojiro, (パネリスト) “Civil engineering and public goods”, Workshop: Public Goods Provision in the Early Modern Economy: Public Goods Provision in the Early Modern Economy:, University of Tokyo, 2015/3

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田口宏二郎

課題番号: 24520817

研究題目: 明清代河北の地域構造に関する歴史社会学的研究

研究経費: 2014 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

2015 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

14 世紀以降、中国の首都として長期的に政治的・軍事的中心となった北京の周辺地域を、特にその経済的側面から分析することを目的とする。とりわけ、南方地域より年間数十万トンにもものぼる穀物を北京へ輸送しつづけたことが、周辺地域の要素賦存や流通構造にいかなる規定性を与え、さらには北京を理想的中心とする世界像とどのような相関性を示したか、明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 岡田 雅志 助教

1977 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。博士(文学)。大阪大学大学院文学研究科特任研究員、帝塚山大学非常勤講師を経て、2014 年より現職。専攻:近世東南アジア史。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

岡田雅志『越境するアイデンティティ: 黒タイの移住の記憶をめぐって』風響社, 54p., 2014/10

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田雅志((学界動向))「2014 年の歴史学界—回顧と展望—、東南アジア」『史学雑誌』(史学会), 124-5, pp. 267-273, 2015/5

6-4. 口頭発表

Okada, Masashi, “Hinterland of the Maritime/Inland Ports: Socio-economic Dynamics in the Mountainous Region of Northern Indochina Peninsula during the Period between 1880s and 1910s”, The 8th Indo-Japanese Workshop: Reconsideration of the 19th century from Asian Perspectives, Jawaharlal Nehru University, New Delhi, 2016/1

岡田雅志「ベトナム北部山地の首長権力と鉱産資源: 18-19 世紀のトゥロン銅山の生産と流通を中心に」東南アジア学会関西例会 11 月例会:「東南アジアにおける宗教と少数民族」特集, 東南アジア学会関西例会, 京都大学, 2015/11

Okada, Masashi, “Socio-economic Dynamics in the Mountainous Region of Northern Indochina Peninsula during the period between 1880s and 1910s”, The Third Congress of the Asian Association of World Historians: Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports, The Asian Association of World Historians, Nanyang Technological University, Singapore, 2015/5

Okada, Masashi, “Official buying and selling of local products : Fiscal practices of the Hue Government between global and local markets in the first half of the nineteenth century”, 2014 年度第 1 回国際ワークショップ, 科学研究費補助金基盤研究(B)平成 24-26 年度「19 世紀前半「世界不況」下の貿易・貨幣・農業: ユーラシア東南部における比較と関連」, 愛媛大学, 2014/9

岡田雅志「ベトナム肉桂の生産・流通の社会史: グローバル商品化と生産地社会」東南アジアの自然と農業研究会第 165 回例会, 東南アジアの自然と農業研究会, 京都大学, 2014/4

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2014 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者:岡田雅志

課題番号:26770243

研究題目:近世～現代のタイ族移民ネットワークとアイデンティティ

研究経費:2014 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究は、文献調査と臨地調査の双方に軸足をおくことにより、世界各地に離散するタイ族の移住史の再構築を行い、タイ族のネットワーク化の動きとそれに伴うアイデンティティの変容を明らかにすることを目的とするものである。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-9 西洋史学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 4 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：竹中 亨、秋田 茂、藤川 隆男、中野耕太郎

准教授：栗原 麻子

助教：森本 慶太

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
51	10	2	0	0	3	0	1

*うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業者*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	12	5	0	0
2015	7	1	0	0
計	19	6	0	0

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

今日の西洋史学では、「世界史」を視野に入れた西洋文明のインパクトとレスポンスを相互的過程として考察することが求められている。そのためには、特定の地域や時代を超えた多様な世界の歴史を知り、また他の人文・社会諸科学の成果を活用できなくてはならない。学部と大学院の教育では、そうした広範な研究領域の中に、個々の学習と研究を適切に位置づけられるように講義・演習を構成する。また同時に、卒業・修了後、専門職業人として活躍できる基礎的な実務能力を身に付けられるように、特に、高度の論理力・分析力と、高い外国語能力の養成を重視する。具体的には、学部においては、①ディベート演習、リサーチ演習によって、英語の活用能力や口頭発表・論文執筆能力を向上させること、②パワーポイントを使ったプレゼンテーションを实践させること、大学院においては、①論文作成に向けてのモデル・タイムスケジュールを提案する等、修士、博士論文の効率的な作成指導を徹底すること、②文学研究科内外の他専修との共同授業、「歴史学のフロンティア」を実施し、学際的かつ領域横断的な思考を涵養すること、③研究ジャーナルの刊行を通して、出版事業の編集・渉外等の実務を習得させることを目標とした。

2. 研究

西洋史学研究室は、学会の運営や定期刊行物の発行、さらには各種共同研究の結節点となって、日本の西洋史研究の中核を担うことを目指している。教員は個人として積極的に単著論文を刊行するだけでなく、世界史・各国史、歴史事典類の編集、執筆など、学界の共有財産の形成や基礎的研究の充実のために尽し、あわせて研究室の主催・協賛による国際研究集会の企画・運営をととした研究の国際化に寄与することを目標とした。また、大学院生には外部の研究資金への応募や海外での研究機会の活用を勧奨するとともに、査読つき学術雑誌への投稿、学会での口頭報告を数多く行えるように支援することとした。

3. 社会連携

西洋史学研究室は、研究成果を社会一般、とりわけ高等学校での世界史教育に広く還元することをめざしている。具体的には、①高校世界史教科書の執筆、②高等学校への出張授業、③大阪大学歴史教育研究会の共催（東洋史学専修との共催）、④世界史副読本の編集、⑤海外での講義の実施、⑥個人および研究室のホームページの充実を目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

演習をディベート、リサーチ等に分化することによって、大学院、学部における論文作成指導などのシステムを効率的に整備した。また、パワーポイントを用いたプレゼンテーションや英語での演習を積極的に実施した。また、大学院では、他学部、他専修との共同授業「歴史学のフロンティア」の充実をはかり、加えて、研究ジャーナル『パブリック・ヒストリー』の刊行を通じた出版実務の習得、雑誌編集業務の実習も順調に進めた。

2. 研究

西洋史学研究室は、雑誌『西洋史学』、『パブリック・ヒストリー』の編集やワークショップ西洋史・大阪を恒常的に主催するだけでなく、学会や研究会などの事務局や代表者を提供することで、西洋史学や他分野との共同研究の発展に貢献してきた。そのうえ、グローバルヒストリー・セミナーなど、海外からの招聘研究者との学術集会を恒常的に開催し、研究の国際化にも尽力した。教員個人も、総計 11 篇の学術論文を刊行するとともに、専門学術書を出版した。さらに、日本学術振興会科学研究費補助金をはじめとする競争的外部資金の代表者として、外部資金の獲得も順調であった。大学院生等は、計 8 篇の学術論文（2014 年度 5 篇、2015 年度 3 篇）、15 本の学会報告（2014 年度 7 回、2015 年度 8 回）を公表した。

3. 社会連携

高等学校での世界史教育との連携に関しては、高校世界史の執筆に関わるとともに、高等学校への出張講義を実施した。また、東洋史学専修、文化動態論の共生文明論講座と協力して、高校の世界史教員をまじえた大阪大学歴史教育研究会を 2 年間で 18 回共催した。さらに、海外での講義や新しいデータベースの稼働など、海外への発信や社会一般への貢献も行った。それに加えて、地方公共団体主催の講演会などにも協力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

上記の活動をとおして、論文作成指導の体制が大きく改善された。卒業論文、修士論文ともに質が向上した。また、論文博士が 3 名生まれた。さらに教職を中心に計 2 名の高度職業人を輩出しており、これらの点から目標はおおむね達成されたと言える。

2. 研究

研究の項に掲げられた目標は達成された。教員、院生による学術論文の刊行、学会発表はいずれも十分な成果をあげることができた。また、グローバルヒストリー・セミナーなど国際学術会議の継続的な開催は、日本での西洋史研究の国際化に一定の貢献をなすものであった。加えて、西洋史学研究室が、枢要な学会、研究会の事務局を運営し、共同研究機関のような機能を果たしたことは、外部の研究者からの高い評価に裏打ちされたものとする。

3. 社会連携

上記の活動をとおり、社会連携の項に掲げた目標は、十分に達成されたと自己評価できる。とりわけ高校世界史教育との連携には、東洋史学専修・日本史学専修との協力体制を構築した上で、充実した成果が得られたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	1	1
2015	0	2	2
計	0	3	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

中谷功治『テマ反乱とビザンツ帝国』2015/3

主査：江川温 副査：藤川隆男、栗原麻子、井上浩一

坂本優一郎『投資社会の勃興——財政金融革命の波及とイギリス——』2015/9

主査：秋田茂 副査：藤川隆男、中野耕太郎、山本千映

南直人『＜食＞から読み解くドイツ近代史』2016/3

主査：竹中亨 副査：藤川隆男、中野耕太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	3(3)	1(0)	0(0)	0(0)	1(1)	5(4)
2015	3(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	3(3)
計	6(6)	1(0)	0(0)	0(0)	1(1)	8(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計

2014	1	6	3	4	1	15
2015	1	7	8	6	1	23
計	2	13	11	10	2	38

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

大西悠「環境制約と産業革命——木材資源とイギリス海軍戦列艦」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）12, pp. 78-88, 2015/2

大上幹広・郇宇浩・下岸廉・檜垣翔・山崎達哉「2014 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)－ 軍事商業政権としての織豊政権」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ』（大阪大学歴史教育研究会），11, pp. 1-20, 2015/3
〔博士後期〕

石田真衣「プトレマイオス朝期テーベ地方における紛争処理と社会変容——嘆願と和解を中心に——」『西洋史学』（日本西洋史学会），256, pp. 22-41, 2015/3

〔その他〕

藤田智子「20 世紀半ばのオーストラリアにおける不妊治療の発展と不妊の医療化」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），12, pp. 46-61, 2015/2

森本慶太「スイス・アルプスへの旅—アルピニズム・鉄道・観光業—」踊共二編『アルプス文化史—越境・交流・生成—』（昭和堂），pp. 71-89, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

高垣里衣「ブルボン改革期におけるバスクの政治的・経済的自立性——カラカス会社とギブスコア＝カラカス貿易を中心に——」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），13, pp. 146-163, 2016/2

森下瑤子「18 世紀前半イギリス大西洋帝国の形成と海賊鎮圧——ウッズ・ロジャーズによるバハマの海賊掃討作戦を中心に——」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会）13, pp. 130-145, 2016/2

〔その他〕

森新太「顕示行為としての『商売の手引』編纂——ペゴロッティの『手引』を一例に——」『パブリック・ヒストリー』（大阪大学西洋史学会），13, pp. 79-92, 2016/2

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔学部生〕

井野瀬久美恵・図師宣忠・田中聡・吉川弘晃・森下瑤子「書評：金澤周作編『海のイギリス史——闘争と共生の世界史』」，2014 年度西洋史読書会例会，京都大学／京都市，2014/7/19

〔博士前期〕

伊藤崇博「古代ローマにおける治安維持活動」，大阪大学西洋史学会第 32 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2014/11/17

大西悠「イギリスにおける化石燃料社会の成立条件に関する考察：1700-1860」，大阪大学西洋史学会第 33 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2015/2/2

大上幹広・郇宇浩・下岸廉・檜垣翔・山崎達哉「2014 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告(1)－ 軍事商業政権としての織豊政権」，大阪大学歴史教育研究会，大阪大学／豊中市，2014/12/20

檜垣翔「19 世紀末における情報ネットワークとイギリス帝国」，大阪大学西洋史学会第 32 回若手セミナー，大阪大学／豊中市，2014/11/17

〔博士後期〕

石田真衣「前 2 世紀メンフィスにおける嘆願と紛争処理」第 13 回歴史家協会大会，関西学院大学／西宮市，2014/6/14

Ishida, Mai, “Hellenistic and Indigenous Legal Procedures in Ptolemaic Egypt: An Analysis of Greek and Demotic Documents”, 第 2 回古代史研究会春季研究集会，京都大学／京都市，2015/3/21

堤亮介「元首政期ローマにおける「都市の健全性」」，第 64 回日本西洋史学会大会，立教大学／豊島区，2014/6/1

Tsutsumi, Ryosuke, “*Salubritas urbis*: Urban environment and administration in early Principate Rome”, The Processes of Dying in the Ancient Greek World, 関西セミナーハウス／京都市，2014/9/2

〔その他〕

森新太〈講演〉「ヨーロッパ覇権への道—ヨーロッパ近世前半を中心に—」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2014 年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第 23 回），大阪市教育会館／大阪市，2014/10/23

森新太〈講演〉「ヨーロッパ商業の発展」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2014 年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第 20 回），大阪市教育会館／大阪市，2014/10/2

森新太〈ゲスト講義〉「都市国家から地域国家への発展—イタリアの事例—」西洋史特殊講義第 8 回（山田雅彦教授），京都女子大学／京都市，2014/6/17

森新太〈講演〉「地中海文明とローマ帝国の興亡」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2014 年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第 9 回），大阪市教育会館／大阪市，2014/6/12

森本慶太「第二次大戦期スイスにおける観光研究の展開と戦後構想」，西洋近現代史研究会第 34 回サマーセミナー，草津温泉ペンションらんぶる／吾妻郡草津町，2014/9/7

森本慶太〈講演〉「現代世界の源流① 二つの大戦と国民国家の時代」NPO 法人大阪府高齢者大学校，2014 年度「世界史から学ぶ科」リレー講座（第 37 回），大阪市教育会館／大阪市，2015/2/26

【2015 年度】

〔博士前期〕

高垣里衣「ブルボン改革期スペインにおけるビルバオの実態——北大西洋・北海商業ネットワークの結節点としての視点から」，大阪大学西洋史学会若手セミナー第 38 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/10

明山曜子・高垣里衣・平田良行・松本智憲「流転する〈ルネサンス〉—背後にあるものは？—」，大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/19

Higaki, Sho, “Reconsideration of A. G. Frank's Works in Global History”, The 3rd Conference of the Asian Association of World Historians (AAWH), Nanyang Technological University/Singapore, 2015/5/30

松本智憲「アメリカ「南部」の解体と再構築：1877-1924—ルイジアナ州ニューオーリンズとテキサス州ヒューストンの人種階層—」，大阪大学西洋史学会若手セミナー第 35 回例会，大阪大学／豊中市，2015/7/24

松本智憲「20 世紀初頭アメリカ南部人種秩序とカラーライン—テキサス州における社会主義運動を中心に—」，大阪大学西洋史学会若手セミナー第 38 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/10

道越奈苗「ヴェンド十字軍が初期デンマーク王権の構築・安定に果たした役割—ヴァルデマー1 世による対外政策と国内秩序の形成—」，大阪大学西洋史学会若手セミナー第 38 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/10

安東峻，浮田怜奈，田村亨，道越奈苗「フランス革命をどう記述していくか」，大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/19

村上広太「バーデン自由主義とドイツ・ナショナリズム—二つを結びつける歴史的要因の考察—」，西洋近現代史研究会第 35 回サマーセミナー，強羅静雲荘／足柄下郡箱根町，2015/8/14

今泉奏・竹中詩穂・方園・森下瑤子「「ローマの平和（パックス・ロマーナ）」とユーラシア大陸」，大阪大学歴史教育研究会第 92 回例会，大阪大学／豊中市，2015/12/19

〔博士後期〕

Ishida Mai, “The Dispute Settlement in Soknopaiou Nesos: Operating Demotic and Greek Petitions”, Text and Society in Egypt in the Late and Ptolemaic Period (名古屋大学大学院文学研究科「人類文化遺産テキスト学研究セン

- ター」国際ワークショップ), 名古屋大学/名古屋市, 2015/11/25
- 堤亮介「フロンティヌス『ローマの水について』における「都市の健全性」, 第14回古代史研究会大会, 京都大学/京都市, 2015/12/20
- 〔その他〕
- 篠原道法「古代アテナイにおける古典スタイル墓碑の展開—外国人の関与の実態に注目して—」, 属州研究会(12月例会), 同志社大学/京都市, 2015/12/19
- 森新太〈講演〉「地中海文明とローマ帝国の興亡」NPO法人大阪府高齢者大学校, 2015年度「世界史から学ぶ科」リレー講座(第6回), 大阪市教育会館/大阪市, 2015/6/4
- 森新太〈講演〉「ヨーロッパ商業の発展」NPO法人大阪府高齢者大学校, 2015年度「世界史から学ぶ科」リレー講座(第15回), 大阪市教育会館/大阪市, 2015/9/24
- 森新太〈講演〉「ヨーロッパ覇権への道—ヨーロッパ近世前半を中心に—」NPO法人大阪府高齢者大学校, 2015年度「世界史から学ぶ科」リレー講座(第18回), 大阪市教育会館/大阪市, 2015/10/2
- 森新太(ゲスト講義)「12-14世紀イタリアの市場——国際商業の担い手・情報・ギルド組織——」, 西洋史特殊講義5 中世盛期・後期ヨーロッパ市場史研究第12回(山田雅彦教授), 京都女子大学/京都市, 2015/6/30
- 森本慶太「1940年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景—」大阪大学西洋史学会第34回若手セミナー, 大阪大学/豊中市, 2015/6/26
- 森本慶太「1940年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景—」, 観光学術学会第4回大会, 阪南大学/松原市, 2015/7/5
- 森本慶太「書評: 南直人著『〈食〉から読み解くドイツ近代史』」, ドイツ現代史研究会1月例会, キャンパスプラザ京都/京都市, 2016/1/23
- Morimoto, Keita, “Swiss tourism industry during World War II: New liberalism and the post-war initiatives”, Project “Great Confrontations” Kick-off Meeting, 大阪大学/豊中市, 2016/2/9
- 森本慶太〈講演〉「現代世界の源流① 二つの大戦と国民国家の時代」NPO法人大阪府高齢者大学校, 2015年度「世界史から学ぶ科」リレー講座(第37回), 大阪市教育会館/大阪市, 2016/2/25
- 山田篤美〈講演〉「真珠は歴史の中心にあった」(主催: (株) 真珠科学研究所) 富士ソフトアキバプラザ, 東京/千代田区, 2015/10/24
- 山田篤美〈講演〉「真珠とダイヤモンドの意外な関係」(講演主催: 日本真珠輸出加工協同組合), 第27回国際宝飾展, 東京国際展示場, 東京/江東区, 2016/1/22

(3)その他(書評・翻訳など)

- 【2014年度】
- 〔博士前期〕
- 伊藤崇博〈新刊紹介〉「飯坂晃治著『ローマ帝国の統治構造—皇帝権力とイタリア都市』(北海道大学出版会、2014年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 102-104, 2015/2
- 檜垣翔〈書評〉「Andre Gunder Frank, Edited and Introduced by Robert A. Denemark, *Reorienting the 19th Century: Global Economy in the Continuing Asian Age*, (Paradigm Publishers, 2013), xiii+352 pp.」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 89-93, 2015/2
- 〔その他〕
- 森本慶太「サマーセミナー参加記」『西洋近現代史研究会会報』(西洋近現代史研究会), 28, pp. 41-42, 2014/7
- 森本慶太〈都市紹介〉「ザンクト・ガレン—国際学芸都市の今昔—」『関西大学西洋史論叢』(関西大学西洋史論叢編集部), 17, pp. 63-67, 2014/9
- 森本慶太「紅の豚—「戦間期」の英雄—」藤川隆男編『アニメで読む世界史2』(山川出版社), pp. 193-212, 2015/1
- 森本慶太〈コラム〉「ホテル経営者ザイラーとツェルマットの観光開発」踊共二編『アルプス文化史—越境・交流・生成

- 一』(昭和堂), pp. 114-117, 2015/3
- 矢野涼子(新刊紹介)「柄木田康之・須藤健一編『オセアニアと公共圏——フィールドワークからみた重層性』(昭和堂, 2012年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 107-110, 2015/2
- 安井倫子(新刊紹介)「北原靖明著『東西回廊の旅』(叢文社, 2014年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 110-111, 2015/2
- 【2015年度】
- 〔博士前期〕
- 玉村紳(書評)「藤田拓之著『居留民の上海—共同租界行政をめぐる日英の協力』(日本経済評論社, 2015年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 231-235, 2016/2
- Higaki, Sho, “Book Review: Andre Gunder Frank, Edited and Introduced by Robert A. Denemark, *Reorienting the 19th Century: Global Economy in the Continuing Asian Age*, (Paradigm Publishers, 2013), xiii+352 pp.”, *The Korean Journal of British Studies*, vol. 33, 2015/6
- Higaki, Sho, “A Consideration to Frank’s ReOrienting the 19th Century”, *Global History Working and Discussion Paper Series*, vol. 21, pp. 77-80, 2016/3
- 松本智憲(書評)「Khyati Y. Joshi and Jinga Desai(eds.) *Asian Americans in Dixie: Race and Migration in the South*, (Urbana: University of Illinois Press, 2013), x+299p.」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 227-231, 2016/2
- 道越奈苗(書評)「斯波照雄, 玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』(悠書館, 2015年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 209-214, 2016/2
- 森下瑤子(紹介)「マーカス・レディカー著、和田光弘・小島崇・森丈夫・笠井俊和訳『海賊たちの黄金時代——アトラティック・ヒストリーの世界——』(ミネルヴァ書房, 2014年)」『西洋史学』(日本西洋史学会), 257, pp. 86-87, 2015/6
- 森下瑤子(書評)「藤川隆男・後藤敦史編『アニメで読む世界史2』(山川出版社, 2015年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 241-245, 2016/2
- 〔博士後期〕
- 石田真衣(書評)「波部雄一郎著『プトレマイオス王国と東地中海世界——ヘレニズム王権とディオニュシズム』(関西学院大学出版会, 2014年)」『古代文化』(古代学協会), 67-1, pp. 157-159, 2015/6
- 石田真衣(書評)「周藤芳幸著『ナイル世界のヘレニズム——エジプトとギリシアの遭遇』(名古屋大学出版会, 2014年)」『西洋史学』(日本西洋史学会), 258, pp. 64-66, 2015/9
- 堤亮介(書評)「ロバート・クナッパ著、西村昌洋監訳『古代ローマの庶民たち——歴史からこぼれ落ちた人々の生活』(白水社, 2015年)」『西洋史学』(日本西洋史学会), 258, pp. 66-68, 2015/9
- 〔その他〕
- 篠原道法(研究レポート)「ある外国人家族の肖像」『古代世界研究会 かいほう』(古代世界研究会), 127, pp. 5-7, 2016/2
- 森本慶太(報告要旨)「第二次大戦期スイスにおける観光研究の展開と戦後構想」『西洋近現代史研究会会報』(西洋近現代史研究会), 29, pp. 32-34, 2015/7
- 森本慶太(報告要旨)「1940年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景」『観光学術学会第4回大会報告要旨集』(観光学術学会), pp. 102-103, 2015/7
- 森本慶太(書評)「南直人著『〈食〉から読み解くドイツ近代史』(ミネルヴァ書房, 2015年)」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 217-222, 2016/2
- 山田篤美(コラム)「黄金——人類を突き動かした輝く富」『東京新聞 日曜版大図解シリーズ 1221号——黄金の世界史』(中日新聞東京本社) 日曜版 8面, 2015/10/18
- 山田篤美「パール・アディクト二千年——真珠をめぐるヨーロッパの狂騒と養殖真珠の衝撃」『Brand Jewelry』(インク・インコーポレーション) 2015年特別編集号, pp. 108-111, 2015/6
- 山田篤美「宝石の順位を決めた古代ローマのプリニウス」『Brand Jewelry』(インク・インコーポレーション) 2015年

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 1名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計1名)

2015年度 PD: 2名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計2名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2015年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

水田大紀 助教, 佛教大学・歴史学部, 准教授, 2015/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2014年度: 2名 2015年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2名

2014年度: 0名 2015年度: 2名

9. 刊行物

2014年度 『西洋史学』252-254号 学術誌 (日本西洋史学会)

『パブリック・ヒストリー』第12号 学術誌 (大阪大学西洋史学会)

2015年度 『西洋史学』255-257号 学術誌 (日本西洋史学会)

『パブリック・ヒストリー』第13号 (大阪大学西洋史学会)

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

グローバルヒストリー・セミナー

2008年度～現在に至る

日本西洋史学会『西洋史学』編集部

2008年度～現在に至る

大阪大学西洋史学会

2008年度～現在に至る

関西アメリカ史研究会

2008年度～現在に至る

東アジアブリテン史学会 (E A A B H) 事務局

2011年3月～現在に至る

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

【2014 年度】

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第 32 回 伊藤崇博「古代ローマにおける治安維持活動」(2014/11/17)

檜垣翔「19 世紀末における情報ネットワークとイギリス帝国」(2014/11/17)

第 33 回 大西悠「イギリスにおける化石燃料社会の成立条件に関する考察：1700-1860」(2015/2/2)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

第 42 回 講師：Aditya Mukherjee (ジャワハルラル・ネルー大学・教授)

“Revisiting the 19th Century: A perspective from the South” (2014/10/1)

講師：Mridula Mukherjee (ジャワハルラル・ネルー大学・教授)

“The Questioning of Colonial Modernity in 19th century India” (2014/10/1)

第 43 回 講師：Hyun Hur (梨花女子大学校・教授)

“Writing World/Global History in Korea” (2014/10/11)

講師：Seo Hyung Kim (梨花女子大学校・教授)

“Big History and Big History Education in Korea” (2014/10/11)

第 44 回 講師：James Belich (オックスフォード大学・教授)

“The Black Death and European Expansion” (2014/11/6)

講師：竹田美文 (公益財団法人野口英世記念会・副理事長、元国立感染症研究所・所長)

“Plague-Past and Present” (2014/11/6)

コメント：古谷大輔 (大阪大学・准教授)

第 45 回 講師：Jan Lucassen (国際社会史研究所)、Leo Lucassen (ライデン大学・国際社会史研究所)

“Connecting the World: Migration and globalization in the second millennium” (2015/3/5)

第 46 回 講師：Sun Laichen (カリフォルニア州立大学フラトン校・教授)

“The Age of War-talking: Compilation and Transmission of Military Treatises during the ‘Century of Warfare’” (2015/3/31)

【2015 年度】

大阪大学西洋史学会若手セミナー 学内

第 34 回 森本慶太「1940 年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景—」(2015/6/26)

第 35 回 松本智憲「アメリカ「南部」の解体と再構築：1877-1924—ルイジアナ州ニューオーリンズとテキサス州ヒューストンの人種階層—」(2015/7/24)

第 36 回 矢野涼子「歴史は「大国」のものか？」(2015/10/30)

第 37 回 紫垣聡「「統治の学」の形成—カメラリスムスの史的考察序説—」

第 38 回 高垣里衣「ブルボン改革期スペインにおけるビルバオの実態—北大西洋・北海商業ネットワークの結節点としての視点から—」(2015/12/10)

松本智憲「20 世紀初頭アメリカ南部人種秩序とカラーライン—テキサス州における社会主義運動を中心に—」(2015/12/10)

道越奈苗「ヴェンド十字軍が初期デンマーク王権の構築・安定に果たした役割—ヴァルデマー1 世による対外政策と国内秩序の形成—」(2015/12/10)

大阪大学グローバルヒストリー・セミナー 学内

第 47 回 講師：Gerold Krozewski (南アフリカ・フリーステイト大学・特任研究員)

“The ‘overseas’ world and European nation-state, 1860s-1960s: research perspectives” (2015/5/14)

- 第 48 回 講師：Mark Metzler (テキサス大学オースティン校・教授)
 “The Great Depression of 1873-1896: A Global History” (2015/7/22)
- 第 49 回 講師：Om Prakash (デリー大学・名誉教授)
 “The Dutch East India Company and Indian Ocean during the early modern period” (2015/7/24)
- 第 50 回 講師：George Bryan Souza (テキサス大学サンアントニオ校・客員准教授)
 “Opium and the Company: Maritime Trade and Imperial Finances on Java, 1684-1796” (2015/8/13)
- 第 51 回 講師：赤見友子 (オーストラリア国立大学・准教授)
 “The Nation-State/Empire as a Unit of Analysis in the History of International Relations: A Case Study in Northeast Asia, 1868-1933” (2015/11/30)
- 第 52 回 講師：Victor Lieberman (ミシガン大学・教授) and Geoff Wade (オーストラリア国立大学・特任研究員) 東洋史学専修と共催 (2015/12/18)
1. Geoff Wade, “China and Southeast Asia: Interactions through Time”
 2. Victor Lieberman, “Why Were Nationalism and Democracy European? Political Community in Asia and Europe 1400-1850”

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 竹中 亨 教授

1955 年生。1983 年、京都大学大学院文学研究科博士課程退学。博士（文学）（京都大学、1994 年）。東海大学講師、同助教授、大阪大学教養部助教授を経て、1995 年より現職。専攻：西洋史学。

1-1. 論文

- Takenaka, Toru, “The Myth of “Familiar Germany”: German-Japanese Relationships in the Meiji Period Reexamined” Joanne Miyang Cho/Lee M. Roberts/Christian W. Spang(eds.) *Transnational Encounters between Germany and Japan: Perceptions of Partnership in the Nineteenth and Twentieth Centuries*, Palgrave Macmillan, pp. 19-34, 2016/1
- Takenaka, Toru, “The Japanese Image of Germany Over the Past 150 Years” Claudia Rammelt/Cornelia Schlarb/Egbert Schlarb(eds.) *Begegnungen in Vergangenheit und Gegenwart: Beiträge dialogischer Existenz*, LIT, pp. 257-266, 2015/6
- Takenaka, Toru, “Zur Reichweite des Kulturtransfer-Begriffes am Beispiel der japanisch-deutschen Beziehungen” Lars Klein/Martin Tamcke(eds.) *Imagining Europe: Memory, Vision and Counter-Narratives*, Universitätsverlag Göttingen, pp. 53-67, 2015/6
- 竹中 亨 『『近代化の模範』から『生活大国』へ——近現代日本におけるドイツ像の展開』『パブリック・ヒストリー』12, 大阪大学西洋史学研究室, pp. 1-14, 2015/2
- Takenaka, Toru, “Musik hören mit dem Kopf: Soziokultureller Mechanismus der Rezeption westlicher Musik im modernen Japan” S.O. Müller/J. Osterhammel/M. Rempe(eds.) *Kommunikation im Musikleben: Harmonien und Dissonanzen im 20. Jahrhundert*, Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 201-213, 2015/1

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Takenaka, Toru, “Bankokushi: A Worldview Between “Bunmei” and “Civilization””, Cluster of Excellence: Asia and Europe in a Global Context 国際会議:Global History and the Meiji Restoration, Cluster of Excellence, University of Heidelberg, University of Heidelberg, 2015/7

Takenaka, Toru, “2. Suzuki spielt Cello: Wie hat westliche Musik den Habitus der Japaner beeinflusst?”, Öffentliche Ringvorlesung, Georg-August-Universität Göttingen:Ostasien und die Macht heiliger Klänge, University of Göttingen, University of Göttingen, 2015/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:竹中亨

課題番号:25370749

研究題目:音楽移転論による明治期の洋楽受容の研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

明治期における西洋音楽の受容を、文化移転の一形態としての音楽移転という理論的観点から把握する。これを通じて、日本での西洋音楽の受容のあり方を幅広い観点から把握するとともに、文化移転のメカニズムについて理論的貢献を行う。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2014 年度～2014 年度、2: その他共同研究、助成金獲得者:竹中亨

助成金名:Erasmus Mundus Scholarship

研究題目:Euroculture

助成団体名:Euroeapn Union

助成金額:2014 年度 直接経費 970,000 円

研究の目的:

Europe in Wider World をテーマに、欧州域外地域と欧州との間の文化的相互関係について研究を行った。研究のために、グローニンゲン大学に滞在した。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 秋田 茂 教授

1958 年生。1985 年、広島大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学）（大阪大学）2003 年。大阪外国語大学外国語学部助手、同講師、同助教授を経て、2003 年 10 月より現職。専攻：イギリス帝国史・グローバルヒストリー。

2-1. 論文

秋田茂 「1960 年代の米印経済関係―PL480と食糧援助問題」『社会経済史学』(社会経済史学会), 81-3, 社会経済史学会, pp. 25-42, 2015/11

Akita, Shigeru, “The Aid-India Consortium, the World Bank, and the International Order of Asia, 1958-1968” *Asian Review of World Histories*, (Asian Association of World Historians), 2-2, pp. 217-248, 2014/7

2-2. 著書

- 秋田茂, 宇山智彦他(共著)『ユーラシア近代帝国と現代世界』シリーズ・ユーラシア地域大国論-4, ミネルヴァ書房, pp. 169-189, 2016/2
- 秋田茂, 南塚信吾, 高澤紀恵他(共編著)『新しく学ぶ 西洋の歴史—アジアから考える』ミネルヴァ書房, pp. 169-170, pp. 177-178, pp. 229-230, pp. 286-287, 2016/2
- Akita, Shigeru, Antoinette Burton, Dane Kennedy et al.,(共著),*How Empire Shaped Us*, Bloomsbury Academic, pp. 117-128, 2016/1
- Akita, Shigeru, Gerold Krozewski, Shoichi Watanabe et al.,(共著),*The Transformation of the International Order of Asia: Decolonization, the Cold War, and the Colombo Plan*, Routledge, pp. 1-12, pp. 111-130, 2014/10
- 荒川正晴, 秋田茂, 桃木至朗他(共著)『市民のための世界史』大阪大学出版会, pp. 107-116, pp. 123-124, pp. 141-174, pp. 177-182, pp. 186-220, pp. 223-227, pp. 233-244, 2014/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 秋田茂(K.ポメラツ著、川北稔監訳『大分岐』名古屋大学出版会、2015年)「書評」『日本経済新聞』(2015年7月19日、朝刊、読書欄), 2015/7
- 秋田茂(パンカジ・ミシュラ著、園部哲訳『アジア再興』白水社、2014年)「書評」『日本経済新聞』(2015年1月11日、朝刊、読書欄), 2015/1

2-4. 口頭発表

- Akita, Shigeru, (パネリスト)“Indian industrialization and East Asia at the turn of the 19th-20th centuries—N.Y.K. Bombay Line, J.M.G. Tata and economic nationalism”, The 8th Indo-Japanese Workshop:Reconsideration of the 19th century from Asian Perspectives, Center for Historical Studies and Jawaharlal Nehru Institute of Advanced Studies, Jawaharlal Nehru University, 2016/1
- 秋田茂 (招待講演)「1960年代の米印経済関係—PL480と食糧援助問題」2015年度東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所公開講演会:アジア国際秩序と経済援助, 東北学院大学ヨーロッパ文化総合研究所, 2015/12
- 秋田茂 (基調講演)「日本における世界史・グローバルヒストリー研究のパイオニア・角山榮先生」「角山文庫」開設記念講演会:世界史・グローバルヒストリー, 堺市立中央図書館, 2015/12
- 秋田茂 (招待講演)「社会経済史学の新たな展開—グローバル経済史の登場」大阪大学歴史教育研究会第91回例会, 大阪大学文学研究科, 2015/11
- 秋田茂 (基調講演)「グローバルヒストリーの視点で見るアジア国際秩序と経済援助—1950-60年代」関学西洋史研究会第18回年次大会, 関西学院大学文学研究科, 2015/11
- Akita, Shigeru, (パネリスト)“PL480, Food Aids to India and the United States in the 1960s”, The XVIIth World Economic History Conference of 2015:Economic Aid, developmentalism and the transformation of the international order of Asia, 1960s-1970s, International Economic History Association, Kyoto International Conference Center, 2015/8
- Akita, Shigeru, (パネリスト)“Comment on Session 2: Russia’s Globalizing Economy”, Summer Symposium:Russia and Global History, Slavic-Eurasian Research Center, Hokkaido University, 2015/7
- Akita, Shigeru, (招待講演)“Creating Global History from Asian Perspectives—from the ‘Long Eighteenth Century’ to the ‘Resurgence of East Asia’”, : Inaugural Conference of the ‘Global Nodes, Global Orders’ LeverhulmeInternational Network, Oxford Center for Global History, University of Oxford, 2015/6
- 秋田茂 (パネリスト)「世界史教育の刷新をめぐる高大連携の試み—阪大の挑戦」第65回日本西洋史学会大会・小シンポジウム:世界史教育における大学と高等学校間の壁をどう乗り越えるか, 日本西洋史学会, 富山大学, 2015/5
- Akita, Shigeru, “PL480, Food Aids to India and the United States in the 1960s”, International Workshop :Economic aid, Developmentalism and the Transformation of the International Order of Asia, 1960s-1970s, 東北学院大学ヨーロッパ研究所,

明治大学, 2015/3

秋田茂 「「コメント」21 世紀課題群と中国」大阪大学未来研究イニシアティブ/ワークショップ「東アジア共同研究と歴史認識」: 東アジア共同研究と歴史認識, 大阪大学現代中国フォーラム, 大阪大学法学研究科, 2015/1

Akita, Shigeru, (招待講演) “The Aid-India Consortium, the World Bank and the International Order of Asia, 1958-1968”, Indian History Congress Platinum Jubilee Session: Economy, Polity and Society in the Nehruvian Era: Its Contemporary Relevance, Jawaharlal Nehru University, 2014/12

秋田茂 (基調講演) 「1930 年代のアジア国際秩序—大阪から考える世界史」2014 年度福井県高等学校社会科研究会・全体講演会, 福井市市民会館, 2014/11 (『福井県高社研紀要』第 48 号, pp. 80-83, 2015/3)

Akita, Shigeru, (招待講演) “Creating Global History from Asian Perspectives”, Workshop on ‘Global history from Asia and Pacific’, ‘Global history from Asia and Pacific, Department of History, Australia National University (ANU), 2014/10

Akita, Shigeru, (パネリスト) “Economic Sovereignty”, Symposium on ‘Landscapes of Sovereignty Conference in Asia and the Pacific’, ‘Landscapes of Sovereignty Conference in Asia and the Pacific’, Research School of Asia & the Pacific, Australia National University (ANU), 2014/10

秋田茂 (招待講演) 「現代の南アジア世界」神奈川県高等学校教科研究会・社会科部会歴史分科会・2014 年度研究会: 世界史教育, 鎌倉・建長寺, 2014/8

秋田茂 (招待講演) 「アジアに利用されたイギリス帝国—グローバルヒストリーの視点から」北海道高等学校世界史研究会・第 45 回研究大会: 世界史教育, 札幌市教育文化会館, 2014/8

秋田茂 (基調講演) 「1930 年代のアジア国際秩序—大阪から考える世界史」全国歴史教育研究協議会・第 55 回研究大会・記念講演: 世界史教育, 大阪国際交流センター, 2014/7 (『全歴研研究紀要』第 51 集, pp. 2-18, 2015/3)

秋田茂 (招待講演) 「アジアから見たグローバルヒストリーの構築」中国・清華大学談話会: 世界史, 清華大学人文学院史学科, 2014/6

秋田茂 (基調講演) 「アジアから見たグローバルヒストリーの構築—戦後世界史研究の歩みと展望」中国四国歴史学地理学協会・2014 年度大会・記念講演, 広島大学, 2014/6 (『中国四国歴史学地理学協会年報』第 11 号, pp. 2-7, 2015/3)

秋田茂 (パネリスト) 「1960 年代の米印経済関係—PL480 と食糧援助問題」社会経済史学会 2014 年度大会・小パネル「1960 年代のアジア国際秩序と経済援助」, 同志社大学経済学部, 2014/5

秋田茂 「管英輝報告「アメリカの冷戦政策と 1950 年代アジアにおける地域協力の模索」へのコメント」日本国際政治学会関西支部 2014 年 4 月例会: 冷戦とコロボ・プラン, 関西大学法学部, 2014/4

秋田茂 (パネリスト) 「冷戦・開発主義とシンガポールの工業化」グローバル・ガバナンス学会第 4 回研究大会・部会 III: グローバル・ガバナンスとしての冷戦とその変容, 同志社大学グローバル地域研究学部, 2014/4

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

秋田茂 大阪大学総長顕彰・研究部門, 大阪大学, 2014/7

秋田茂 第 14 回読書・吉野作造賞, 読書新聞社、中央公論新社, 2013/7

秋田茂 第 20 回大平正芳記念賞, 大平正芳記念財団, 2004/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 秋田茂

課題番号: 25245048

研究題目: 19 世紀アジア世界における開発と経済発展—グローバルヒストリーの観点から

研究経費: 2014 年度 直接経費 9,500,000 円 間接経費 2,850,000 円

2015 年度 直接経費 9,600,000 円 間接経費 2,880,000 円

研究の目的:

従来の経済史研究が広めてきた欧米中心の「19 世紀論」を全面的に批判し、グローバルヒストリーの観点から、アジアでの農業開

発や工業化が、アジア人自身の自立的でしたたかな動きの現われであり、それが 20 世紀後半からの「東アジアの経済的再興」の伏線（歴史的起源）であったことを、東アジア・東南アジア・南アジアでの現地の小農・商業資本を主体とした農業開発の展開、19 世紀後半の南アジアや東アジアにおける消費財部門での近代的工業化の始動に着目して明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

北海道大学スラブ研究センター・共同研究員, 2011 年 4 月～現在に至る

東北学院大学ヨーロッパ文化研究所・共同研究員, 2011 年 4 月～現在に至る

社会経済史学会・理事, 2008 年 4 月～2014 年 5 月

日本南アジア学会・理事, 2006 年 10 月～2014 年 10 月

日本学術会議・連携会員(史学), 2006 年 10 月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・研究委員, 2006 年 6 月～2015 年 6 月

The Royal Historical Society (United Kingdom)・Fellow, 2002 年 10 月～現在に至る

3. 藤川 隆男 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士（大阪大学）、MA（ANU）。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

3-1. 論文

Fujikawa, Takao, “A new Imperial History is intriguing, but can we celebrate it?”『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 200-206, 2016/2

藤川隆男「オーストラリアにおける地方の歴史博物館の変遷」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 49, pp. 1-25, 2015/12

藤川隆男「オーストラリア多文化主義の現在」『学会会報』(学会), 915, 学会, pp. 63-67, 2015/11

藤川隆男「オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的カリキュラムの導入」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 15-28, 2015/2

3-2. 著書

藤川隆男, 後藤敦史, 森本慶太他(共編著)『アニメで読む世界史2』山川出版社, pp. 113-132, pp. 232-234, 2015/1

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男「論説」『南の虹のルーシー』から移民博物館へ: 2 世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷『立命館言語文化研究』(立命館大学国際言語文化研究所), 27-2・3, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 259-260, 2016/2

藤川隆男「書評」山本正・細川道久編著『コモンウェルスとは何かーポスト帝国時代のソフトパワー』『経済史研究』(大阪経済大学日本経済史研究所), 19, 大阪経済大学日本経済史研究所, pp. 119-129, 2016/1

藤川隆男「新聞記事」歴史認識の根っこー白人の国からの転換『朝日新聞』(朝日新聞社), 朝日新聞社, p. 6, 2014/10

藤川隆男「書評」細川道久著『カナダの自立と北大西洋世界 英米関係と民族問題』『西洋史学』(日本西洋史学会), 253, 日本西洋史学会, pp. 78-80, 2014/6

3-4. 口頭発表

藤川隆男 (招待講演)「怪物パニヤップの神話の誕生」平成 27 年関西日豪協会秋の定期例会: 平成 27 年関西日豪協会秋の定

期例会, 関西日豪協会, アゴラシオン, 2015/12

藤川隆男 (招待講演)「妖獣パニヤップの歴史—比較史的・比較民俗学的考察」第 20 回ワークショップ西洋史・大阪: 第 20 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2015/5

藤川隆男 (招待講演)「オーストラリアの歴史って! おもしろいかも——先住民から多文化主義まで」京都橘大学歴史系講演会: 京都橘大学歴史系講演会, 京都橘大学歴史学会, 京都橘大学, 2015/1

Fujikawa, Takao, (招待講演)“A new Imperial History is intriguing, but can we celebrate it?”, Migration, Colonization, and Histories of the Nineteenth-Century World symposium: Migration, Colonization, and Histories of the Nineteenth-Century World, the Japanese Association for the Study of British Imperial and Commonwealth History, Seminar Room 4, UNITY, Academic Community Hall, Kobe, 2014/12

藤川隆男 (招待講演)「いま、なぜコモンウェルスか」イギリス帝国史研究会: 『コモンウェルスとは何か——ポスト帝国時代のソフトパワー』書評会, イギリス帝国史研究会, 神戸大学人文学研究科 A 棟一階学生ホール, 2014/12

藤川隆男 (招待講演)『南の虹のルーシー』から移民博物館へ—2 世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷「日本人の国際移動研究会」シンポジウム: イギリス帝国と移民 太平洋を中心に, 日本人の国際移動研究会, キャンパスプラザ京都, 2014/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 藤川隆男

課題番号: 26360010

研究題目: オーストラリアにおける歴史博物館の発達—20 世紀最大の草の根運動

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

オーストラリアでは、1950 年代末から 1970 年代半ばまでに 1000 館以上の歴史博物館が新設された。これらの博物館は、政府からの援助を受けずに、草の根の運動によって開設されたものである。現在では、その数が 2000 に達するほどであり、この歴史博物館の誕生と発展を検討するのが、この研究の課題である。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史学協会・委員, 2015 年 9 月～現在に至る

日本西洋史学会・理事, 2015 年 5 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・編集委員, 2003 年 6 月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2003 年 6 月～現在に至る

西洋史学・編集委員, 1996 年 4 月～現在に至る

4. 中野 耕太郎 教授

1967 年生。1994 年、京都大学文学研究科博士後期課程（西洋史学専攻現代史学）中退。博士(文学)（京都大学）。日本学術振興会特別研究員、大阪市立大学助手、同講師、同助教授、大阪大学准教授を経て、2016 年 4 月より現職。専攻：アメリカ現代史。

4-1. 論文

中野耕太郎「アメリカ「現代史」の起点を求めて——アメリカ・ナショナリズム再考」『歴史評論』780, 歴史科学協議会, pp. 40-50, 2015/4

4-2. 著書

中野耕太郎, 南塚信吾, 秋田茂他(共著)『新しく学ぶ 西洋の歴史—アジアから考える』ミネルヴァ書房, pp. 237-238, 2016/2

中野耕太郎『20 世紀アメリカ国民秩序の形成』名古屋大学出版会, 408p., 2015/2

中野耕太郎, 山室信一, 小関隆他(共著)『現代の起点—第一次世界大戦 4巻 遺産』岩波書店, pp. 219-246, 2014/7

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中野耕太郎(新聞コラム)「第一次大戦から 100 年—アメリカ第 14 面」『京都新聞』京都新聞社, pp. 14-14, 2015/8/15 朝刊

中野耕太郎(新聞コラム)「総力戦の中の反戦—アメリカの第一次世界大戦」『図書新聞』3168, (株)図書新聞, pp. 8-8, 2014/7/26

中野耕太郎(新聞コラム)「第一次大戦100年(中)— 米国流『正しい戦争』の始まり」『毎日新聞』毎日新聞社, pp. 2-2, 2014/5/22 夕刊

4-4. 口頭発表

中野耕太郎「コメント:アメリカ現代史研究の観点から」ドイツ現代史研究会例会:W. シヴェルブシュ著、小野清美、原田一美訳『三つの新体制—ファシズム、ナチズム、ニューディール』合評会, ドイツ現代史研究会, キャンパスプラザ京都, 2015/12

中野耕太郎「20世紀アメリカ国民秩序と教育問題」比較社会教育史研究会 2015 年度秋季例会, 比較社会教育史研究会, 青山学院大学, 2015/10

中野耕太郎「第一次大戦と人種エスニック・マイノリティ——総力戦と市民社会の再編」第 40 回日本アメリカ史学会大会:シンポジウム A:戦時下アメリカのマイノリティ, 日本アメリカ史学会, 北海道大学, 2015/9

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

中野耕太郎 第 2 回齋藤眞賞, アメリカ学会, 2012/6

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:中野耕太郎

課題番号:24520830

研究題目:アメリカ現代史における国民形成と貧困問題—人種境界との関係を中心に

研究経費:2014 年度 直接経費 1,385,732 円 間接経費 390,000 円

2015 年度 直接経費 410,751 円 間接経費 0 円

研究の目的:

20 世紀初頭に社会問題としての貧困が「発見」されて以来、貧困対策は今日に至るまでアメリカ政治の最重要課題である。注目すべき点は、貧困問題の両義性である。社会保障制度などの貧困抑止策を梃子に、幅広く労働者層を含めて国民的包摂がなされる一方で、貧困を撲滅すべき社会病理とする思考は「貧しい人々」に社会スティグマを押し、それが同時代の人種主義と結びつく中で特定のエスニック集団の他者化現象を生んだ。本研究は 1910 年代から 20 年代のアメリカを主たる対象として、貧困問題と国民形成の相互関係を検証するものである。

5-6-2. 2014 年度～2014 年度、研究成果公開促進費、代表者:中野耕太郎

課題番号:265099

研究題目:刊行物名称:20 世紀アメリカ国民秩序の形成

研究経費:2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本書のプロジェクトは、「貧困」などの「社会問題の発見」という社会現象に注目し、この知的潮流とナショナリズムの結びつきから 20 世紀前半という時代を再検討する。分析対象は、各種のリソース配分をつかさどる統治権力の動向から、非政府組織による社会事業、またこれらを支えた同時代の学知や人種・エスニックにまつわる民間暴力、さらには、国民化(排斥)の対象である移民や黒人の側からの働きかけ等にも及ぶ。このように多角的な視点から捉えなおすことで「20 世紀アメリカ国民秩序」は、他の時代のアメリカ・ナショナリズムと比較可能な史実として客観化でき、それが持った歴史的な意義を明らかにすることができる。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

史学研究会・評議員, 2014 年 6 月～現在に至る

アメリカ学会・常務理事, 2012 年 6 月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員, 2008 年 6 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・理事, 2008 年 6 月～現在に至る

二十世紀研究・編集委員, 2008 年 4 月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員, 2003 年 4 月～現在に至る

アメリカ史評論・編集委員, 1995 年 11 月～現在に至る

5. 栗原 麻子 准教授

1968 年生。1995 年、京都大学大学院文学研究科博士課程（西洋史学専攻）指導認定のうえ退学。博士（文学）（京都大学、1998 年）。日本学術振興会特別研究員、奈良大学講師を経て、2004 年 10 月より現職。専攻：古代ギリシア史。

5-1. 論文

栗原麻子「家族の肖像 前4世紀アテナイにおける法制上のオイコスと世帯」『史林』(史学研究会), 99-1, pp. 3-33, 2016/1

栗原麻子「Graphai Idiai: Sense of Community in Demosthenes 21 (Against Meidias)」*KODAI: Journal of Ancient History*, 16, pp. 57-68, 2015/11

栗原麻子「民主制下アテナイにおける「おんな男(ホ・ギュンニス)」と「男のなかの男たる女(ヘ・アンドレイオタテ)」『西洋古代史研究』14, 京都大学西洋史研究室, pp. 1-24, 2014/12

栗原麻子「アッティカ民衆法廷における報復のレトリック：リュクルゴス『レオクラテス弾劾』を中心にして」『西洋史研究』(西洋史研究会), 43, pp. 1-27, 2014/11

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

林智良, 栗原麻子, 鷺田睦朗(共訳)(翻訳、リナ・ルビンスタイン(栗原麻子訳)・ジョナサン・パウエル)「古代ギリシア世界における集団弁論と弁護」『阪大法学』(大阪大学法学会), 64-5, pp. 1465-1485, 2015/3

栗原麻子「ポリス公共圏と市民女性——ネアイラの娘ファノをめぐる——」『地中海学会月報』(地中海学会), 369, pp. 3-3, 2014/4

5-4. 口頭発表

栗原麻子「前4世紀アテナイにおける家の継承と家族の肖像」史学研究会例会：家族，史学研究会，京都大学，2015/4

栗原麻子「コメント 西洋古代史を起点として」公開シンポジウム(刊行記念公開シンポジウム)～合評会を兼ねて～『歴史を読み替える ジェンダーから見た世界史』，大月書店，2014/7

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:栗原麻子

課題番号:24520831

研究題目:アテナイ民主制と互酬性 リュクルゴス時代の再検討

研究経費:2014 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

「互酬性」はギリシア史とくにアテナイ史に根強い発展論的歴史理解においては、アテナイの制度的発展によって克服されるべき要素として捉えられてきた。しかしながら、アテナイ社会の特質は一見「近代的」ともみられる緻密な国制が、互酬的社会構成原理に支えられていたところにある。そこで公共奉仕、国家への寄付、法的秩序の互酬的要素、国家による顕彰行為がそれぞれ、市民共同体の紐帯形成において担った機能について、その歴史の変遷に留意しながら総合的にとらえていく。本研究では、とりわけヘレニズムへの移行期とされるリュクルゴス時代に着目する。研究代表者は、リュクルゴスの法廷戦略が、むしろ市民共同体の互酬的な協調原理にに基づいていたことを明らかにした。これは、リュクルゴスによるそのほかの政策とも符合しているようにおもわれる。本研究では碑文史料にも対象を広げ、リュクルゴス時代の互酬性の総合的理解を目指す。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・委員(編集委員、書評委員)，2013 年 6 月～現在に至る

日本西洋史学会・編集幹事，2012 年 4 月～2014 年 4 月

古代文化協会・編集参与，2011 年 4 月～現在に至る

古代学協会・編集参与，2009 年 4 月～現在に至る

日本西洋史学会・編集委員，2004 年 10 月～現在に至る

6. 森本 慶太 助教

1981 年生。2013 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(西洋史学専門分野)修了。博士(文学)。大阪大学大学院文学研究科特任研究員、大阪大学・京都橘大学・佛教大学非常勤講師を経て 2016 年 4 月より現職。専攻：西洋史学／スイス近現代史／観光史。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

踊共二，森田安一，森本慶太他(共著)『アルプス文化史―越境・交流・生成―』昭和堂，pp. 71-89，pp. 114-117，2015/3

藤川隆男，後藤敦史，森本慶太他(共著)『アニメで読む世界史 2』山川出版社，pp. 193-212，2015/1

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

森本慶太(書評)「南直人著『〈食〉から読み解くドイツ近代史』」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 217-222, 2016/2

森本慶太(編集協力) 朝治啓三編『大阪都市遺産研究叢書 別集 4-4 住友文庫ドイツ医学学位論文目録 第四巻』(関西大学大阪都市遺産研究センター), 403p., 2015/1

森本慶太(編集協力) 池田市史編纂委員会編『池田市史 史料編⑩近代史資料』(池田市), 539p., 2014/9

森本慶太(都市紹介)「ザンクト・ガレンー国際学芸都市の今昔一」『関西大学西洋史論叢』(関西大学西洋史論叢編集部), 17, pp. 63-67, 2014/9

森本慶太(参加記)「サマーセミナー参加記」『西洋近現代史研究会会報』(西洋近現代史研究会), 28, pp. 41-42, 2014/7

森本慶太(編集協力) 朝治啓三編『大阪都市遺産研究叢書 別集 4-3 住友文庫ドイツ医学学位論文目録 第三巻』(関西大学大阪都市遺産研究センター), 479p., 2014/7

6-4. 口頭発表

Morimoto, Keita, “Swiss tourism industry during World War II: New liberalism and the post-war initiatives”, Project “Great Confrontations” Kick-off Meeting, Project “Great Confrontations”, 大阪大学, 2016/2

森本慶太(招待講演)「現代世界の源流① 二つの大戦と国民国家の時代」世界史から学ぶ科(第37回), NPO 法人大阪府高齢者大学校, 大阪市教育会館, 2016/2

森本慶太「書評:南直人著『〈食〉から読み解くドイツ近代史』」ドイツ現代史研究会 1 月例会, ドイツ現代史研究会, キャンパスプラザ京都, 2016/1

森本慶太「1940 年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景—」観光学術学会第 4 回大会, 観光学術学会, 阪南大学, 2015/7『観光学術学会第 4 回大会報告要旨集』pp. 102-103, 2015/7

森本慶太(招待講演)「1940 年代スイスにおける「観光学」の形成—戦後構想の史的背景—」大阪大学西洋史学会第 34 回若手セミナー, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2015/6『パブリック・ヒストリー』13, p. 251, 2016/2

森本慶太(招待講演)「現代世界の源流① 二つの大戦と国民国家の時代」世界史から学ぶ科(第37回), NPO 法人大阪府高齢者大学校, 大阪市教育会館, 2015/2

森本慶太「第二次大戦期スイスにおける観光研究の展開と戦後構想」西洋近現代史研究会第 34 回サマーセミナー, 西洋近現代史研究会, 草津温泉ペンションらんぶる, 2014/9『西洋近現代史研究会会報』29, pp. 32-34, 2015/7

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

7-6-1. 2013 年度～2014 年度、研究活動スタート支援、代表者:森本慶太

課題番号:25883004

研究題目:1930～50 年代アルプス地域におけるツーリズム振興体制の研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

アルプス地域を主要観光地に擁するスイスをはじめとするドイツ語圏諸国は、1930 年代から 50 年代にかけて、世界恐慌や大戦の影響により、ツーリズム振興の方向性を見直すことを余儀なくされた。本研究では、そこで新たに構想された観光政策の歴史的意義について、観光学の形成とマス・ツーリズムへの対応、という二つの視点から解明することを目的とする。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学西洋史学会・会計事務, 2015 年 5 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・『パブリック・ヒストリー』編集委員, 2015 年 5 月～現在に至る

日本西洋史学会・『西洋史学』編集委員, 2015 年 4 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・『パブリック・ヒストリー』編集委員, 2013 年 5 月～2014 年 5 月

大阪大学歴史教育研究会・事務局, 2013 年 4 月～2015 年 3 月

2-10 考古学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 1(兼任)

教授：福永 伸哉、高橋 照彦

助教：中久保辰夫(兼任)

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
18	3	3	0	1	2	0	0

*うち留学生 3名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	1	6	1	0
2015	4	1	0	1
計	5	7	1	1

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、考古学研究に必要な発掘調査や出土資料分析などにかかわる方法論や技術といった基礎力について、確実に習得することを重視している。そのために1988年の講座開設以来、毎年欠かさずフィールド調査を行い、成果を学術報告書にまとめる取り組みの継続を第一の目標にしている。そして、フィールド調査をカリキュラムに取り入れた実践的かつ課題追求型の教育を行うとともに、遺跡や博物館を訪ねる臨地研修を実施し、授業の不足を補うようにつとめることも、全般的な教育目標としている。

また、大学院においては、①授業としての修士・博士論文作成演習にくわえ、投稿論文作成のための個別指導を強化すること、②研究室のプロジェクトにかかわる共同研究への参加を通じて、資料分析の方法を実践的に習得させること、③専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を支援すること、などを目標とした。学部においては、①学部生向けの講義を継続して開講し、専門基礎学力の充実をはかること、②出土資料の整理分析作業を通じて、考古資料の特性や扱い方を実践的に習得させること、③考古学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知して学習意欲を向上させること、などを目標とした。

2. 研究

研究面では、世界の考古学の研究動向に目を配りながら比較研究を積極的に進め、広い視野で日本考古学の研究に取り組むことを目指している。そして、一人平均で教員が 2 本、博士後期課程在籍生が 1 本以上の論文または研究ノート等を公表または投稿すること、さらに博士前期課程在籍生全員が発掘調査報告書などの分担執筆あるいは編集に携わること、に具体的な数値目標を置いている。また、①これまでに調査を行った遺跡の出土遺物を整理して、発掘調査報告書の刊行に向けた準備をすること、②継続のフィールド活動として、発掘調査や測量調査を行うこと、③科学研究費補助金などの外部資金を導入して研究活動を推進すること、なども目標とした。

3. 社会連携

社会連携としては、教育・研究活動を通じた社会との積極的なかかわりを重視しており、地域社会に入って地域の学校・生涯教育活動などにもかかわり、学問と社会とのあるべき関係の追求を目指している。特に、①フィールド調査の成果に関して、現地説明会の開催や HP での情報発信などを通じて社会への還元を行うこと、②大阪大学埋蔵文化財調査室が行う大学構内の発掘調査および文化財活用業務に協力すること、③考古学研究室所蔵あるいは保管の資料の社会的活用をはかるために、各地の博物館などからの貸出や写真提供、資料熟覧といった依頼に積極的に応じること、④教育委員会などの発掘調査や遺跡整備などで指導ならびに協力を行うこと、⑤地方自治体の出土品整理あるいは自治体史編纂への学術協力を通じて地域の文化行政を支援すること、などを目標にした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

まず、フィールド調査やその際に出土した資料の整理作業をカリキュラムに取り入れた演習などを継続的に実施した。また、学内での授業を補うために、兵庫県淡路島や徳島県、岐阜県、長崎県、山形県などへの臨地研修も実施した。大学院生については、授業以外にも個別の論文指導を行っており、そのほかにもプロジェクトにかかわる共同研究の中で実践的な専門技術の教育なども行うことができた。学部生向けには、基礎的な講義を開講しており、授業などを通して、適宜展覧会などの情報提供も行った。就職支援については、随時指導を行いつつ、大学院修了生がいずれも文化財行政などにかかわる正規職員などとして就職することができた。

2. 研究

研究では、海外での調査・研究を行いつつも、広い視野で日本考古学の研究を行ってきており、教員・大学院生ともに、論文や報告書の執筆に取り組んだ。院生の投稿論文については、博士後期課程の在籍者が少なかったため、以前に比べて総数はやや減少したものの、博士前期課程の在籍者でも 1 人 1 回程度の学会発表や論文発表などを行っており、概ね成果を挙げることができた。また、2014 年度には京都府亀岡市の篠窯跡群の発掘調査を夏と冬に実施することができ、2015 年度には冬に兵庫県宝塚市の万籟山古墳・八州嶺古墳の測量調査などを行い、いずれも新たな調査成果を得た。成果の国際発信という点では、2015 年 11 月にドイツ・テュービンゲン大学において、本研究室・テュービンゲン大学・セインズベリー日本藝術研究所(英)の共催で、"Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives" というテーマで 3 日間にわたる国際シンポジウムを実施したことが特筆される。この他にも、これまでからの継続として大阪府藤井寺市の野中古墳出土品の整理検討などを行っている。さらに、教員は科学研究費補助金の助成を受けて、種々の研究を推進した。

3. 社会連携

京都府亀岡市の篠窯跡群の発掘調査において、亀岡市教育委員会と連携しつつ、事業を推進した。また、その発掘調査成果の情報は、例年通り HP を利用する形で速やかに一般に向けて発信した。このほか、阪大埋蔵文化財調査室の発掘調査や整理の業務にも引き続きの協力を行った。その一方で、野中古墳出土品は国の重要文化財指定を受けることができ、

東京国立博物館にて文化庁主催の展示に出品し、また阪大総合学術博物館でも指定記念の展示を行った。このほか所蔵保管資料については、島根県立出雲歴史博物館をはじめとする展示への出品協力など、各機関あるいは研究者からの閲覧や写真提供にも積極的に応じており、地方自治体に対する学術協力も行っている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動などの結果、学部生・大学院生とも実践的な技術の習得に効果をあげている。また、大学院修了生では、専門機関での採用において、正規職員を含む就職の実績を残している。また、学部生に対しても、考古学の基礎知識の充実に向けた講義などにより、一定の成果を得た。このように、所期の目標は十分に達成することができた。

2. 研究

教員・大学院生ともに、論文などの執筆において数値目標を達成できた。また、フィールド調査の実施、既往発掘調査の出土遺物の整理なども、予定通りに行うことができた。とりわけ海外との共同研究の促進としては大きな成果を収めている。当該年度の目標は十二分に達成できたものと評価できる。

3. 社会連携

前記のような諸活動を行っており、とりわけ大阪府教育委員会と連携を取りながら野中古墳出土品の国の重要文化財指定を達成するなど、社会連携の面において非常に充実した成果を出すことができた。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

大庭重信「弥生・古墳時代農耕社会と集団関係の考古学的研究」2016/3

主査：福永伸哉 副査：高橋照彦、市大樹

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(1)	0(0)	3(0)	1(0)	2(0)	8(1)
2015	3(2)	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	5(2)

計	5(3)	0(0)	3(0)	1(0)	4(0)	13(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	1	3	1	0	5
2015	1	3	3	0	0	7
計	1	4	6	1	0	12

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

竹内裕貴「古墳時代成立期における太平洋ルートの検討—西日本を中心に—」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』, 明治大学文学研究科, pp.9-14, 2015/3

ライアン・ジョセフ「古墳出現過程における長剣の流通と画期」『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』, 明治大学文学研究科, pp.15-20, 2015/3

Ryan, Joseph and Gina Barnes. Armor in Japan and Korea, *Encyclopaedia of the History of Science, Technology, and Medicine in Non-Western cultures*, Springer Netherlands, pp. 1-16, 2015

Ryan, Joseph. 「Warfare and state formation in ancient Japan」『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 福永伸哉・中久保辰夫編, 大阪大学大学院文学研究科, pp.101-108, 2015/3

桐井理揮「摂津出土土馬の検討」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp.63-72, 2015/3

三好裕太郎「北後田 1 号地下式横穴墓出土鉄器の製作技術と年代」『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館, pp.28-30, 2014/8

〔博士後期〕

大庭重信「河内平野南部の弥生時代集落景観と土地利用」『日本考古学』第 38 号, 日本考古学協会, pp.47-65, 2014/10

大庭重信「大阪・難波宮跡」「大阪・大坂城跡」『木簡研究』第 36 号, 木簡学会, pp.24-27, 2014/11

【2015 年度】

〔博士前期〕

岩越陽平「桜井谷窯跡群出土資料からみる古墳時代後期の須恵器生産」, 『明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム』, 明治大学文学研究科, pp.37-42, 2016/3

〔博士後期〕

上田直弥「粘土槨の展開とその背景」『ヒストリア』第 253 号, 大阪歴史学会, pp.1-28, 2015/12

上田直弥「粘土槨の展開過程とその画期—畿内の事例を中心に—」『考古学研究』第 62 巻第 3 号, 考古学研究会, pp.85-105, 2015/12

上田直弥「腕輪形滑石製品の成立とその背景—常陸鏡塚古墳例を中心に—」『大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム 成果報告書』2015 年度大学院学内 GP<他大学大学院との研究交流プログラム>, 明治大学大学院文学研究科, pp.37-42, 2016/3

Ryan, Joseph. "The Archaeology of Weapons Burials in Ancient Japan." 『待兼山論叢』第 49 号 史学編, 大阪大学文学研究科, pp. 57-80, 2015/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

上田直弥「粘土槨の展開過程とその画期」, 大阪歴史学会, 阿倍野市民学習センター, 2014/10/31

上田直弥・桐井理揮「篠・西山 1 号窯第 2 次調査の成果」, 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第 9 回), 大阪大学文学研究科, 2014/8/18

竹内裕貴「古墳時代成立期における太平洋ルートの検討—西日本を中心に—」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2015/1/11

竹内裕貴「古墳時代成立期における太平洋沿岸ルートの検討—西日本を中心に—」, 若き考古学徒論壇デビュー, 大阪府立弥生文化博物館, 2015/2/21

佐伯郁乃「尾張から駿河における小型精製器種の波及と受容」三河考古 西三河例会, 安城市公民館, 2014/11/20

Ryan, Joseph. 「古墳出現過程における長剣の流通と画期」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2015/1/11

【2015 年度】

〔博士前期〕

岩越陽平「西山 1 号窯発掘調査の成果」, 「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第 13 回), 大阪大学文学研究科, 2015/9/5

岩越陽平「桜井谷窯跡群出土資料からみる古墳時代後期の須恵器生産」, 大阪大学・関西大学・京都府立大学・明治大学 4 大学合同考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2016/1/11

内藤元太「埴輪製作工人の移動-遺跡間で見られる同工の埴輪について-」, 若き考古学徒論壇デビュー, 大阪府立弥生文化博物館, 2016/3/19

〔博士後期〕

上田直弥「粘土槨の全国的展開とその背景」, 大阪歴史学会考古部会 5 月例会, 阿倍野市民学習センター, 2015/5/15

上田直弥「粘土槨の展開とその背景」, 大阪歴史学会 2015 年度大会, 関西学院大学, 2015/6/28

上田直弥「腕輪形滑石製品の成立とその背景—常陸鏡塚古墳例を中心に—」, 明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム, 大阪大学文学研究科, 2016/1/11

Ryan, Joseph. "The Role of Iron Weaponry and Martial Ideology in the Political Consolidation of Early Japan", Society for American Archaeology 80th Annual Meeting, San Francisco, California, USA, 2015/4/16

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

上田直弥『『新資料で問う古墳時代成立過程とその意義』参加記』『考古学研究』第 61 巻第 1 号, 考古学研究会, pp.6-8, 2014/6

上田直弥「銅製品」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 中久保辰夫編, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, p.46, 2015/3

中久保辰夫・竹内裕貴・桐井理揮「出土遺物」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp.25-30, 2015/3

桐井理揮「土師器」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp.37-39, 2015/3

桐井理揮「出土遺物」『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 福永伸哉・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科, pp.175-176, 2015/3

肥田翔子・桐井理揮「陶磁器・土製品」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 大阪大学埋蔵文化財調査

委員会, pp.39-42, 2015/3

桐井理揮・竹内裕貴・木村理「銭」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp.43-46, 2015/3

三好裕太郎「北後田 1 号地下式横穴墓出土の遺物」『九州南部における古墳時代鉄器の基礎的研究』鹿児島大学総合研究博物館, pp.20-27, 2014/8

三好裕太郎「鉄製品 釘」『待兼山遺跡Ⅴ—待兼山西麓における墓域の調査—』大阪大学埋蔵文化財調査委員会 pp.42-44, 2015/3

竹内裕貴「待兼山古墳群発掘調査報告 調査成果」『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 福永伸哉・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科, pp.175-176, 2015/3

ライアン, ジョセフ (翻訳)『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 福永伸哉・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科, pp.7-55, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

岩越陽平「既往の調査と本調査の経過 (1)西山 1 号窯周辺の地形」『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査』, 高橋照彦・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.4-6, 2015/10

盧柔君・岩越陽平・平井洸史・肥田翔子「発掘調査」『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査』, 高橋照彦・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.7-11, 2015/10

岩越陽平「西山 1—1 号窯・1—2 号窯の発掘調査 3 西山 1—1 号窯の発掘調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.36-47, 2016/3

木村理・内藤元太「出土遺物」『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査』, 高橋照彦・中久保辰夫編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.12-14, 2015/10

盧柔君・木村理「出土遺物」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.59-68, 2016/3

中久保辰夫・木村理・内藤元太編『播磨の埴輪 第 17 回播磨考古学研究集会資料集』, 第 17 回播磨考古学研究集会実行委員会, 総頁数 294, 2016/2

内藤元太「遺跡の位置と環境」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.9-20, 2016/3

〔博士後期〕

上田直弥「篠窯跡群の概要」『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査—』, 高橋照彦・中久保辰夫編, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p.1, 2015/10

Naoya UEDA, “Excavation of Yukinoyama Kofun”, Poster Presentation, the Eberhard Karls University Tübingen, Tübingen, Germany, November 4-6, 2015/11

上田直弥「渋谷向山古墳の発掘調査見学」『ヒストリア』第 254 号, 大阪歴史学会, pp.192-199, 2016/2

高橋照彦・上田直弥編「篠窯跡群西山 1 号窯の考古学的調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.6-80, 2016/3

ライアン・ジョセフ「Summery」『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査—』, 高橋照彦・中久保辰夫編, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, p.17, 2015/10

Joseph, RYAN, “An Introduction to Nonaka Kofun”, Poster Presentation, the Eberhard Karls University Tübingen, Tübingen, Germany, November 4-6, 2015/11

ジョセフ・ライアン「西山 1—1 号窯・1—2 号窯の発掘調査 4 西山 1—2 号窯の発掘調査」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.47-57, 2016/3

盧柔君・木村理「出土遺物」『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 大阪大学文学研究科考古学研究室, pp.59-68, 2016/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

ライアン・ジョセフ, 第6回日本学術振興会育志賞

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

2015年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2015年度 学部: 1名 大学院: 0名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

橘 泉 博士課程前期, 堺市博物館, 学芸員, 2015/4

桐井 理揮 博士課程前期, 京都府埋蔵文化財調査研究センター, 専門職員, 2015/4

佐伯 郁乃 博士課程前期, 刈谷市教育委員会, 学芸員, 2015/4

竹内 裕貴 博士課程前期, 香川県埋蔵文化財センター, 文化財専門員, 2015/4

三好裕太郎 博士課程前期, 高槻市教育委員会, 学芸員, 2015/4

岩越 陽平 博士課程前期, 奈良県立橿原考古学研究所, 技師, 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

9. 刊行物

【2014年度】

大阪大学文学研究科『21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 福永伸哉・中久保辰夫編, 2015/3

【2015年度】

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『西山1号窯―篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査―』高橋照彦・中久保辰夫編, 2015/10

大阪大学大学院文学研究科考古学研究室『野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム「百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流」資料集』, 2015/11

大阪大学文学研究科『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』, 高橋照彦編, 2016/3

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」の実施, 2015・2016
考古学研究会関西例会事務局, 2014/4～

“Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives”の実施, University of Tübingen (テュービンゲン大学), Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures (セインズベリー日本藝術研究所), German Research Foundation (DFG)との共催, 2015/11・4～6日, テュービンゲン大学 (ドイツ)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会、2014/6/14・15

「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究会、2014/6/25

「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第9回)、2014/8/18

「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第10回)、2014/12/22

「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第11回)、2014/12/23

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学との考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2015/1/11・12

「考古学・古代史合同研究会」第20回、2014/5/14

「考古学・古代史合同研究会」第21回、2014/6/18

「考古学・古代史合同研究会」第22回、2014/7/16

「考古学・古代史合同研究会」第23回、2014/11/12

「考古学・古代史合同研究会」第24回、2014/12/10

「考古学・古代史合同研究会」第25回、2015/1/21

「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究集会 (第1回)、2015/7/19

「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究集会 (第2回)、2015/12/22・23

「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究会 サイモン・ケイナー博士講演会、
2015/5/20

「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究会 禹在柄博士講演会、2016/02/23

「野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム「百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流」」、2015/11/14

「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第12回)、2015/8/7

「日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究」研究会 (第13回)、2015/9/5

「明治大学と大阪大学・京都府立大学・関西大学の考古学・古代史大学院生研究交流プログラム」、2016/1/10・11

12. 教員の研究活動(2014年度～2015年度の過去2年間)

1. 福永 伸哉 教授

1959年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学博士 (大阪大学、2005年)。大阪大学埋蔵文化財調査室助手、大阪大学文学部助教授、大阪大学大学院文学研究科助教授をへて、2005年より現職。専攻：日本考古学。

1-1. 論文

福永伸哉「考古学と古代史研究の架け橋ー吉田晶氏の古代国家形成論をめぐってー」『歴史科学』220・221 合併号, 大阪歴史科学協議会, pp. 108-119, 2015/5

福永伸哉「古墳時代と国家形成」『古墳時代の考古学』9巻, 同成社, pp. 7-20, 2014/6

福永伸哉「21世紀の古墳時代像」『古墳時代の考古学』9巻, 同成社, pp. 1-6, 2014/6

1-2. 著書

福永伸哉 高橋照彦, 中久保辰夫他(共編著),『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-13, pp. 69-73, pp. 83-87, pp. 109-114, (執筆言語は日本語及び英語), 2015/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

福永伸哉 「文化財保護行政を次世代につなぐために」『考古学研究』62-4, 考古学研究会, pp. 1-2, 2016/3

福永伸哉 「考古学から見た継体大王の外交戦略」『つどい』327, 豊中歴史同好会, pp. 1-7, 2015/4

福永伸哉 「シンポジウム「震災復興と埋蔵文化財」参加記」『考古学研究』61-4, 考古学研究会, pp. 5-6, 2015/3

福永伸哉 「弥生社会の変化と松帆銅鐸」『松帆銅鐸の大発見と謎』南あわじ市教育委員会, pp. 45-49, 2015/2

福永伸哉 「三角縁神獣鏡と邪馬台国所在地論争」『U7(学会会報)』57, 学会, pp. 30-41, 2014/9

福永伸哉 「国家の起源」考古学研究会『考古学研究 60 の論点』考古学研究会, pp. 51-52, 2014/4

1-4. 口頭発表

福永伸哉 「考古学、時空をこえたネットワークをめぐって」名古屋大学文学研究科公開シンポジウム: 人文学がつなぐ社会, 名古屋大学文学研究科・大阪大学文学研究科, 名古屋大学, 2016/3

Fukunaga, Shinya, “Mounded Tombs of the Kofun Period: Monuments of an Administration and Expression of Power Relationships”, International Workshop at the Eberhard Karls University Tübingen: Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives, Osaka University, University of Tübingen, Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures, University of Tübingen, 2015/11 (*Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives*, pp. 77-85, 2015/11)

福永伸哉 「百舌鳥・古市古墳群の築造背景と東アジア情勢」野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム: 百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流, 大阪大学文学研究科, 大阪大学会館, 2015/11『百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流資料集』pp. 33-40, 2015/11)

福永伸哉 「世界の墳丘墓と日本の古墳」昼飯大塚古墳国指定 15 周年記念事業 古墳サミット大垣: 古代からのメッセージ、そして未来へ, 大垣市, 大垣市総合福祉会館, 2015/11

福永伸哉 「卑弥呼時代の大阪」大阪・京都文化講座: 大阪・京都の遺跡を読み解くー考古学研究最前線ー, 立命館大学文学部・大阪大学文学研究科, 立命館大阪梅田キャンパス, 2015/6

福永伸哉 「前方後円墳と日本の国家形成ー墳丘墓を統治手段として利用した社会ー」日仏会館創立 90 周年記念シンポジウム: 考古学・文化財・アイデンティティ, 日仏会館, 日仏会館ホール, 2014/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

福永伸哉 第 19 回濱田青陵賞, 岸和田市、朝日新聞社, 2006/9

福永伸哉 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/12

福永伸哉 第6回雄山閣考古学特別賞(編著書に対して), 雄山閣出版, 1997/9

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 福永伸哉

課題番号: 23242048

研究題目: 21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信

研究経費: 2014 年度 直接経費 4,500,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

研究対象の細分化が著しい古墳時代研究において、その最先端の個別成果をいま一度統合し、明確な研究戦略のもとに企画す

るフィールド調査を加えながら、21 世紀初頭における到達点として向後数十年の検討・吟味に足るだけの総括的な古墳時代歴史像を提示するとともに、わが国の古墳時代研究の成果としては初めての体系的な海外発信を行うことによって、古墳時代研究の国際的認知と国際比較研究テーマへの発展をはかり、次世代の古墳時代研究の新たな道筋を切り開く。

1-6-2. 2014 年度～2016 年度、挑戦的萌芽研究、代表者：福永伸哉

課題番号：26560145

研究題目：超高精細表面性状分析による弥生・古墳時代青銅鏡の摩滅痕生成過程の解明

研究経費：2014 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2015 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的：

走査型電子顕微鏡(SEM)、原子間力顕微鏡(AFM)、接触式表面粗さ計測器などを用いた表面性状のかつてない超高精細分析と、実物試料の摩滅実験を組み合わせるという独創的な方法により、日本の弥生・古墳時代の遺跡から出土する青銅鏡に見られる「摩滅痕」が生じた過程を復元的に解明し、それに基づいてヤマト政権成立に関わる大論争でありながら半世紀以上にわたって膠着状態となっている「伝世鏡論争」を根本的な解決に導くことを目的としている。考古学分野、金属材料分野の専門研究者からなる文理学院の共同研究。

1-6-3. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者：福永伸哉

課題番号：15H01900

研究題目：日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開

研究経費：2015 年度 直接経費 11,900,000 円 間接経費 3,570,000 円

研究の目的：

日本発の「世界墳丘墓考古学」を世界考古学の主要テーマとして確立し、古墳時代研究の新たな地平を開拓するという構想の下に、①人類史における墳丘墓築造の多様な歴史的意義の解明、②世界初の墳丘墓三次元データベースを開発、③日本考古学の独創的方法である「首長古墳系譜分析」の良好なフィールド調査、④世界の墳丘墓遺跡を人類の文化遺産活用に供するための確かな理念と方策の探求・提言、の4点を柱として実施する国際共同研究。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

文化庁文化審議会世界文化遺産・無形文化遺産部会・委員, 2016 年 3 月～現在に至る

史跡古市古墳群整備検討委員会準備会・委員, 2015 年 11 月～現在に至る

日本学術振興会科学研究費委員会・専門委員, 2015 年 11 月～現在に至る

竜王町国史跡雪野山古墳保存管理計画策定検討委員会・委員, 2015 年 4 月～現在に至る

別府市実相寺古墳群調査検討委員会・委員, 2015 年 3 月～現在に至る

文化庁文化審議会文化財分科会第1専門調査会・委員, 2015 年 3 月～現在に至る

文化庁文化審議会文化財分科会第3専門調査会・委員, 2015 年 3 月～現在に至る

日本学術会議・会員, 2014 年 10 月～現在に至る

川西市史跡加茂遺跡保存活用計画策定委員会・専門委員, 2014 年 6 月～現在に至る

高槻市史跡整備検討会・委員, 2014 年 4 月～現在に至る

特定非営利活動法人 WAC Japan－世界考古学会議日本－・監事, 2014 年 4 月～現在に至る

百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推薦書作成検討委員会・委員, 2014 年 1 月～現在に至る

大垣市昼飯大塚古墳保存活用委員会・委員, 2013 年 10 月～現在に至る

大阪大学接合科学研究所・共同研究員, 2013 年 7 月～現在に至る
兵庫県立考古博物館運営委員会・委員, 2013 年 3 月～現在に至る
桜井市纏向学研究センター・共同研究員, 2012 年 11 月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録有識者会議・委員, 2012 年 7 月～現在に至る
国立歴史民俗博物館外部評価委員会・委員, 2012 年 7 月～現在に至る
百舌鳥・古市古墳群世界文化遺産登録推進本部会議・委員, 2012 年 7 月～現在に至る
考古学研究会・代表委員, 2012 年 4 月～現在に至る
桜井市纏向遺跡調査委員会・委員, 2011 年 10 月～現在に至る
公益財団法人大阪市博物館協会・理事, 2011 年 4 月～現在に至る
公益財団法人大阪府文化財センター・理事, 2011 年 4 月～現在に至る
豊中市文化財審議委員会・委員, 2010 年 4 月～現在に至る
鹿児島県唐仁古墳群発掘調査指導委員会・委員, 2009 年 1 月～現在に至る
杵築市市内遺跡にかかる調査指導委員会・委員, 2008 年 5 月～現在に至る
考古調査士資格認定機構・資格審査専門委員, 2007 年 12 月～現在に至る
京丹後市網野銚子山古墳発掘調査委員会・委員, 2007 年 10 月～現在に至る
川西市文化財審議委員会・委員, 2006 年 6 月～現在に至る
大阪府立近つ飛鳥博物館運営協議会・委員, 2006 年 6 月～現在に至る
鹿児島県塚崎古墳群発掘調査指導委員会・委員, 2006 年 1 月～現在に至る
京丹後市史編纂委員会・委員, 2005 年 6 月～現在に至る
考古学研究会関西例会・世話人, 1980 年 4 月～現在に至る

2. 高橋 照彦 教授

1966 年生。1992 年、京都大学大学院文学研究科博士後期課程中退。博士（文学）（京都大学、2014 年）。国立歴史民俗博物館考古研究部助手、奈良国立博物館学芸課研究員を経て、2002 年大阪大学大学院文学研究科助教授、2007 年同准教授、2015 年より現職。専攻：日本考古学、東アジア考古学。

2-1. 論文

高橋照彦「正倉院伝来の鼓をめぐる基礎的検討」『東大寺の新研究1 東大寺の美術と考古』, 柴原永遠男・佐藤信・吉川真司編, 法蔵館, pp. 525-564, 2016/3

高橋照彦「都と地方の土器」『古代官衙・集落研究会報告書 官衙・集落と土器1—官都・官衙と土器—』(奈良文化財研究所), pp. 11-26, 2015/12

高橋照彦「都市とは何か、それはいつ誕生したか」『考古学研究会60周年記念誌 考古学研究60の論点』(考古学研究会), pp. 61-62, 2014/4

2-2. 著書

高橋照彦(共編著)『古代日本とその周辺地域における手工業生産の基礎研究』大阪大学大学院文学研究科, 285p. , pp. 1-6, pp. 69-80, pp. 83-98, pp. 125-148, 2016/3

高橋照彦, 中久保辰夫(共編著)『西山1号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査—』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, 16p. , pp. 15-16, 2015/10

黄曉芬, 高橋照彦他(共著)『交趾郡治・ルイロウ遺跡 I』東亜大学, 172p. , pp. 94-96, 2015/3

福永伸哉, 中久保辰夫, 高橋照彦他(共著), 『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』大阪大学大学院文学研究科考古学研究室, 198p. , pp. 33-44, 2015/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高橋照彦「欽明天皇の奥津城は何处か」『つどい』(豊中歴史同好会), 336, pp. 2-17, 2016/1

高橋照彦(書評)「松本太郎著『東国の土器と官衙遺跡』」『日本考古学』(日本考古学協会), 39, pp. 139-144, 2015/5

2-4. 口頭発表

高橋照彦「記紀と考古学の接点からみた河内政権論」第6回百舌鳥古墳群講演会『検証！河内政権論 ―なぜ百舌鳥に大王陵が築かれたのか―』, 堺市産業振興センターイベントホール, 2016/3

高橋照彦「六朝墓にみえる阮咸の琵琶と正倉院宝物」日中六朝文化学術研究会, 南京大学, 2016/3

高橋照彦「神雄寺跡出土の三彩製品をめぐって」木津川市ふれあい文化講座, 木津川市・興福寺・木津の文化財と緑を守る会, 木津川市中央交流会館いずみホール, 2016/1

高橋照彦「日本の大型墳丘墓終焉の事情」「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」第2回全体研究集会, 大阪大学大学院文学研究科, 2015/12

高橋照彦「古代の焼物の一大生産地、篠窯跡群 ―近年の発掘調査成果から―」亀岡市文化資料館文化財講座, 亀岡市文化資料館, 2015/11

高橋照彦「考古学への招待: 古墳時代の終焉を読み解く」JASS 企画講座, JASS, 明治安田生命ビル JASS 十三会場, 2015/10

高橋照彦「土器からみた平安京」『大阪・京都の遺跡を読み解く―考古学研究最前線―』, 立命館大阪梅田キャンパス, 2015/6

高橋照彦「亀岡市篠窯跡群・西山1号窯発掘調査成果の概要」日本と韓国の実験考古学と伝統工芸2, 窯跡研究会, 立命館大学, 2015/3

高橋照彦「都と地方の土器」古代官衙・集落研究会, 古代官衙・集落研究会, 奈良文化財研究所, 2014/12

高橋照彦「正倉院三彩をめぐる諸問題」第11回東大寺要録研究会, 東大寺要録研究会, 東大寺総合文化センター, 2014/12

高橋照彦「古墳築造の終焉と背景」「21世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信」研究集会, 大阪大学文学研究科考古学研究室, 大阪大学文学研究科, 2014/6

高橋照彦「馬場南遺跡出土の三彩山水文埴と陶製品」第28回古代寺院史研究会, 古代寺院史研究会, 木津川市中央交流会館, 2014/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012年度～2015年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 高橋照彦

課題番号: 24320156

研究題目: 日本古代宮都周辺域における手工業生産の分野横断的比較研究

研究経費: 2014年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 960,000 円

2015年度 直接経費 2,900,000 円 間接経費 870,000 円

研究の目的:

本研究では、日本古代の手工業生産について、3つの分野横断的な比較を試みる。すなわち、①窯業製品、金属製品や織物など手工業部門を越えて検討すること、②日本の宮都周辺域を核に朝鮮半島や中国などとの比較を進めること、③考古学に文献史学や分析化学などの成果や手法を取り入れて協業をすること、である。このために、各種分野を専門とする研究者により大局を議論する研究会と、特定フィールドの重点的調査の2つを支柱として、研究現状を総括し、展望を示したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

東洋陶磁学会・常任委員, 2009 年 5 月～現在に至る

史学研究会・評議員, 2005 年 11 月～現在に至る

3. 中久保 辰夫 助教

1983 年 3 月 12 日生。2011 年 3 月大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(2011 年、大阪大学)。2009 年 4 月～2011 年 3 月: 日本学術振興会特別研究員。2011 年 4 月より現職。専攻: 日本考古学。

3-1. 論文

中久保辰夫『『播磨国風土記』と考古資料が描く明石郡・美嚢郡の地域社会』『第 16 回播磨考古学研究集会の記録 考古学からみた播磨国風土記』(第 16 回播磨考古学研究集会実行委員会), 第 16 回播磨考古学研究集会実行委員会, pp. 15-49, 2016/2

中久保辰夫「須恵器・二重口縁壺の製作背景」『韓式系土器研究』(韓式系土器研究会), XIV, 韓式系土器研究会, pp. 237-254, 2015/10

中久保辰夫「古墳時代原初的官僚層形成に関するノート」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 第 48 巻, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 25-50, 2014/12

3-2. 著書

中久保辰夫他(編)『播磨の埴輪』第 17 回播磨考古学研究集会実行委員会, pp.65-71, pp.263-294, 2016/2

福永伸哉, 中久保辰夫, 高橋照彦他(共著)(共編著)『21 世紀初頭における古墳時代歴史像の総括的提示とその国際発信』大阪大学大学院文学研究科, pp. 23-32, pp. 151-165, p.177, pp. 183-190, p.197, 2015/3

中久保辰夫他(編)『待兼山遺跡』V, 大阪大学埋蔵文化財調査委員会, pp. 1-37, pp. 46-47, pp. 49-62, (pp.25-30 の範囲は竹内祐貴・桐井理揮と共著), 2015/3

高橋照彦, 中久保辰夫他(共編著)『西山 1 号窯—篠窯跡群における瓦陶兼業窯の調査—』, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 2-3, p. 4, 2015/10

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中久保辰夫「『陵墓』問題とは何か」『考古学研究会 60 周年記念誌 考古学研究 60 の論点』, 考古学研究会, pp.241-242, 2014/4

中久保辰夫「遺跡フォーカス 大阪府藤井寺市野中古墳」『考古学研究』, 考古学研究会, 第 61 巻第 1 号, pp.96-98, 2014/6

中久保辰夫「二 考古部分の特徴と問題点 『新修摂津市史』の編纂に向けて—『摂津市史』(一九七七年刊)の検討を手がかりに—」『新修摂津市史 史料と研究』第 1 号, 摂津市, pp.9-11, 2015/3

中久保辰夫・河内一浩「能褒野古墳群および淡輪ニサンザイ古墳(宇度墓)の限定公開参加記」『考古学研究』, 第 62 巻第 1 号, 考古学研究会, pp.21-25, 2015/6

3-4. 口頭発表

中久保辰夫「土器・集落からみた 5・6 世紀の栄山江流域と倭の相互交渉」歴博国際シンポジウム「古代日韓相互交渉の実態」, 国立歴史民俗博物館, 国立歴史民俗博物館, 2016/3(『歴博国際シンポジウム「古代日韓相互交渉の実態」予稿集』pp. 105-119, 2016/3)

中久保辰夫「野中古墳の発掘調査と出土品の意義」野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム「百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流」, 大阪大学大学院文学研究科考古学研究室・科学研究費補助金(基盤 A)「日本古墳研究リソースを活かした墳丘墓築造と社会関係の国際研究展開」研究グループ, 大阪大学会館, 2015/11(『野中古墳出土品重要文化財指定記念国際シンポジウム「百舌鳥・古市古墳群と古代日韓交流」資料集』pp. 5-10, 2015/11)

Nakakubo, Tatsuo, “Excavating Mounded Tombs of the Kofun period in Japan: History of Research and Methods”, Burial Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives, Universität Tübingen, Universität Tübingen, 2015/11(*Burial*

Mounds in Europe and Japan: Comparative and Contextual Perspectives, pp. 24-29, 2015/11)

中久保辰夫「5・6世紀の播磨と於奚・袁奚伝承」豊中歴史同好会, 豊中歴史同好会, 豊中市蜚池公民館, 2015/9(『つどい』第337号, pp. 1-6, 2016/2)

中久保辰夫「考古学が掘り起こす地域社会と文化ー野中古墳、待兼山遺跡を中心にー」第47回大阪大学公開講座, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2015/9

中久保辰夫「野中古墳と河内政権」2015年度大阪・京都文化講座(前期), 立命館大阪梅田キャンパス, 立命館大阪梅田キャンパス, 2015/6

中久保辰夫「美嚢郡、明石郡」考古学からみた播磨国風土記ー考古学が検証する、風土記に伝記された播磨の古墳時代一, 第16回播磨考古学研究集会, 姫路市教育会館, 2015/2(『考古学からみた播磨国風土記ー考古学が検証する、風土記に伝記された播磨の古墳時代一』pp. 19-29, 2015/2)

中久保辰夫「倭系遺物の年代論」大韓文化財研究所 2014下半年国際学術大会, 大韓文化財研究所, 国立羅州博物館, 2014/11(『栄山江流域古墳土木技術の旅程と時間を求めて』pp. 217-233, 2014/11)

中久保辰夫「初期須恵器出土古墳の史的意義」平成26年度秋季特別展記念シンポジウム 須恵器誕生, 和歌山県立紀伊風土記の丘, 和歌山県立紀伊風土記の丘, 2014/11(『平成26年度秋季特別展記念シンポジウム 須恵器誕生 予稿集』pp. 19-28, 2014/11)

中久保辰夫「古市古墳群造営勢力と渡来人」NPO法人フィールドミュージアムトーク史遊会例会, NPO法人フィールドミュージアムトーク史遊会, 羽曳野市民会館, 2014/10

中久保辰夫「めざせ! 考古学者夏休み考古学教室」夏の小学生科学体験教室 2014, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学総合学術博物館, 2014/8

中久保辰夫「激動の5世紀と橿原の遺跡ー渡来文化の導入ー」平成26年度夏期特別展『新沢千塚』講演会, 橿原市教育委員会, クリーンセンターかしはら, 2014/8

中久保辰夫「かたちかわる、じだいかわる」大阪大学21世紀懐徳堂i-spot講座, 大阪大学21世紀懐徳堂, 大阪市まちづくり情報発信施設「アイ・スポット」, 2014/7

中久保辰夫「野中古墳の発掘から半世紀ー豊富な埋納遺物の調査と研究ー」百舌鳥・古市古墳群をより深く知るための世界遺産講座IV, 羽曳野市, LICはびきの, 2014/6

Nakakubo, Tatsuo, "Change in Patterns of Cultural Interaction in the Early State Formation in Japan", The 79th Annual Meeting of the Society for American Archaeology: SYMPOSIUM STATE FORMATION IN EARLY JAPAN, Society for American Archaeology, Austin Convention Center (Texas, USA), 2014/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013年度~2015年度、若手研究(B)、代表者: 中久保辰夫

課題番号: 25770276

研究題目: 韓半島系土器の受容実態からみた古墳時代対外交流の時期的地域的展開

研究経費: 2014年度 直接経費 600,000円 間接経費 180,000円

2015年度 直接経費 500,000円 間接経費 150,000円

研究の目的:

本研究の目的は、土器使用痕跡の観察といった新しい観察視点により土器資料を分析することによって、日本列島から出土した韓半島系土器の器種構成の変遷およびその受容・浸透過程が、時期によって変化することを実証し、その背後にある日韓交流の質的变化を明らかにすることにある。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

考古学研究会・常任委員, 2009 年 4 月～現在に至る

摂津市史執筆委員, 2014 年 2 月～現在に至る

2-11 人文地理学

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 2(兼任 1) 准教授 0 講師 0 助教 1

教授：堤 研二（兼任）、佐藤 廉也
助 教：波江 彰彦

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
26	3	4	0	0	0	0	0

* うち留学生 3 名、社会人学生 0 名

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	6	1	0	0
2015	8	2	0	0
計	14	3	0	0

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、広い視野の中に自己の学習や研究を位置付けられるよう、講義・演習を構成することとし、卒業・修了時までに実社会で要請される基礎的スキルを習得できるよう講義・演習・論文発表などを配置することを目指した。大学院においては、①能率的な研究の進行にむけて、研究計画の立案から指導すること、②GIS などデジタル処理手法の習得につとめさせ、その応用を推進すること、③TA・RA などの機会を積極的に利用し、コミュニケーションや指導の能力を養成することなどを目標とした。学部においては、①人文地理学の基礎を、その応用を意識させつつ身につけさせること、②地図学、統計解析などの実習を通じて基礎的手法を習得させること、③卒業論文作成を機会に、企画からプレゼンテーションまで、総合的な能力の養成をはかる、ということなどを目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の学会発表等をおこなうとともに、国内・国外の審査つき学術誌・学術書等への投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとし、教員全員が代表者として科学研究費補助金の申請をおこな

うだけでなく、他の競争的外部資金の獲得にも努めるようにすることを目標とした。大学院生には、日本学術振興会の特別研究員への応募をすすめるほか、機会があれば、他の研究資金の獲得にも努めさせることとした。また、不断に研究室の設備・備品を点検し、研究環境の維持・改善に努力し、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室ならびに個人の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会の研究グループ・研究ワークショップでの活動や博物館などの展示企画には積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力することとした。さらに、研究成果を社会に還元する書物の刊行を、出版助成金などを得ながら積極的に推進することも目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

講義・演習では、基礎から先端、応用までの手法・スキルの習得を意識した教育をおこなった。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。また、地域調査のスキルについては実地での経験を重視する教育をおこなった。

2. 研究

教員は、科学研究費での助成研究を続けつつ、研究を継続して実施し、国際学会・国際研究集会での発表をおこない、国内外での地域調査を実施した。また、院生は学会等における 9 本の口頭発表を実現した。教員による外部資金による獲得研究費の有効活用のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募も積極的におこなっている。このほか、研究室の設備・備品は定期的に点検し、メンテナンスを実施するとともに、旧式化したものは更新している。学内外の共同研究にも積極的に参加してきている。目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

教室ならびに個人の HP でその公開に努めている。さらに日本地理学会、人文地理学会の代議員など学外の職務にも積極的に応じた。大阪大学サステイナビリティ研究機構について、教員 1 名が兼任教員となって環境史関係の研究・教育をすすめた。また、人文地理学会を大阪大学で開催し、教員は実行委員として準備・開催等に従事した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。卒業学生のうち 2 名が学外の団体による研究関係の賞を受賞した。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、種々の地理学的スキルや思考の基礎に関する授業その他の教育実践が可能であった。掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が学会発表をおこなうという目標はほぼ達成された。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2015	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	1	2	1	0	0	4
2015	1	4	0	0	0	5
計	2	6	1	0	0	9

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2015 年度】

〔博士後期〕

Fujimori, Kinuko, "The Management of a Condominium and Life Cycles of a New Town," Kobayashi, K., Wetlund, H., Matsushima, K. and Ohno, S. (eds.) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas* Vol.11 (Chapter 17), MARG (Marginal Areas Research Group, Graduate School of Urban Management, Kyoto Univ., Kyoto, Japan), pp.257-269, 2016/3

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

小林基「大阪府泉州地域における伝統野菜水ナスの産業化」人文地理学会大会, 広島大学東広島キャンパス(東広島市), 2014/11/9

釜谷周子・小林基・中井勇人・濱田恭幸・柳侑子「第一次世界大戦と日本の植民地—帝国日本 総力戦体制への道のり—」大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス(豊中市), 2014/12/20

〔博士後期〕

Fujimori, Kinuko, 'A study of elderly residents in a small New Town: an example of Tsurukabuto, Kobe City.', The Eleventh Workshop on "Social Capital and Development Trends in the Swedish and Japanese Countryside: Social Entrepreneurship for Development of Non-metropolitan and Rural Areas", Mid Sweden University, Östersund, Sweden, 2014/8/21

藤森衣子「集合住宅の管理からみたニュータウンのライフサイクル」日本地理学会春季学術大会, 日本大学文理学部キャンパス(東京都世田谷区), 2015/3/28

【2015 年度】

〔博士前期〕

浅野修「スペイン縁辺地域における移牧活動と家畜管理」日本地理学会春季学術大会, 早稲田大学(東京都新宿区), 2016/3/22

小林基「兵庫県篠山市における丹波黒の商品化」日本地理学会春季学術大会, 早稲田大学(東京都新宿区), 2016/3/21

佐々木敏光「和歌山県椿山ダム建設に伴う水没移転者の属性と生活の変容—美山村を事例として—」人文地理学会大会, 大阪大学豊中キャンパス(豊中市), 2015/11/15

Fujimori, Kinuko. 'The management of a housing complex and life cycles of a New Town', The Twelveth Workshop on "Social Capital and Development Trends in the Swedish and Japanese Countryside: Social Entrepreneurship for Development of Non-metropolitan and Rural Areas", Hida Earth Wisdom Center, Takayama city, Japan, 2015/5/24

藤山友治「日本の国際空港における中継機能—成田・関西の役割分化に着目して—」人文地理学会大会, 大阪大学豊中キャンパス(豊中市), 2015/11/15

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

小林茂・渡辺理絵・山近久美子・鳴海邦匡・藤山友治・小林基「アメリカ議会図書館蔵『清國二十萬分一圖』の解説と目録」『外邦図ニューズレター』11, pp.66-78, 2014/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

上野裕也: 平成 27 年度隠岐世界ジオパーク学術研究論文「隠岐世界ジオパーク賞」

下田幸嗣: 平成 27 年度隠岐世界ジオパーク学術研究論文「隠岐世界ジオパーク賞」

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD: 0 名 DC2: 0 名 DC1: 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部：1 名 大学院：0 名（計 1 名）

2015 年度 学部：1 名 大学院：0 名（計 1 名）

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

（2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 2 名

2014 年度：1 名 2015 年度：1 名

<内訳> 技術職 2 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2015 年人文地理学会大会

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 堤 研二 教授

1960 年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009 年 11 月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学 教育・研究功績賞（2006）、大阪大学 総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学。

1-1. 論文

Tsutsumi, Kenji, “Trial for Sustaining Regional Life in a Peripheral Island Town: A Case of Okinoshima” Kobayashi, K., Wetlund, H., Matsushima, K. and Ohno(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 11, Marginal Areas Research Group, pp. 223-236, 2016/3

堤研二 「計量的地域分析の体系とその教育上の課題」大阪大学文学研究科『待兼山論叢(日本学篇)』(大阪大学文学研究科), 49, 大阪大学文学研究科, pp. 1-16, 2015/12

堤研二 「社会的な不平等」上野和彦・椿真智子・中村康子(共編著)『地理学概論 第2版』朝倉書店, pp. 108-112, 2015/10

Tsutsumi, Kenji, “Marginality and Sustainability of Mountainous Village and Forestry” Matsushima, K., Westlund, H. and Kobayashi, K.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas* , (Marginal Areas Research Group), 9, Marginal Areas Research Group, pp. 39-48, 2014/7

1-2. 著書

堤研二 『人口減少・高齢化と生活環境: 山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会, 295p. , 2015/9

堤研二, 豊中市スポーツ少年団 『豊中市スポーツ少年団 50 年の歩み: 1963 ~ 2013』豊中市スポーツ少年団本部, 125p. , 2015/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, “Population Outflow and Regional Attributes of Peripheral Regions in Japan: Two Cases of Mountain Village and Ex-coalmining Region”, “Open Japan, Closed Japan: Towards Interdisciplinary Studies in Human Mobility (International Symposium on Japanese Studies in Global Contexts), Graduate School of Letters, Osaka University, Sigma Hall, Osaka University, Toyonaka, Japan, 2016/3

Tsutsumi, Kenji, “A Compact Town Model in Peripheral Regions in Japan: Some Cases and Trials”, The 4thd Global Conference on Economic Geography, Organising Committee of the 4th Global Conference of Economic Geograpohy, Oxford University, Oxford, England, 2015/8

Tsutsumi, Kenji, “Trial for Sustaining Regional Life in a Peripheral Island Town - A Case of Okinoshima ”, The 12th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Hida Earth Wisdom Center, Takayama, Japan, 2015/5

Tsutsumi, Kenji, (招待講演) “Regional Social Capital in Rural Regions: Some Cases in Depopulated Areas in Japan and the Other Countries”, The 28th Taoyaka Program Seminar , TAOYAKA PROGRAM for creating a flexible, enduring, peaceful society: Organization of the Leading Graduate Education Program, Graduate School of Letters, Hiroshima University, 2014/12

Tsutsumi, Kenji, “Junior Sports Club and Regional Social Capital in Japan”, The 11th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Mid-Sweden University, Östersund, Sweden, 2014/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 大阪府スポーツ少年団優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 堤研二
課題番号: 26244051

研究題目: 中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費: 2014 年度 直接経費 5,200,000 円 間接経費 1,560,000 円

2015 年度 直接経費 6,000,000 円 間接経費 1,800,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル (FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1) 林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2) 森林環境保全のための管理モデル、(3) 中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4) それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2014 年 10 月～現在に至る

静岡県・人口減少問題に関する有識者会議委員, 2014 年 6 月～2015 年 3 月

人文地理学会・学会賞候補者選考委員会委員 (一般図書部門), 2013 年 12 月～2014 年

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012 年 4 月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012 年 4 月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010 年 4 月～現在に至る

2. 佐藤 廉也 教授

1967 年東京都生まれ。京都大学大学院文学研究科博士後期課程 (地理学専修) 中退。博士 (文学) (京都大学、1999 年)。京都大学総合博物館助手、九州大学大学院比較社会文化研究院助教授 (准教授) を経て、2015 年 4 月より現職。専攻: 人文地理学。

2-1. 論文

佐藤廉也「エチオピア南西部の森林農耕民マジヤングルの植物利用と認知」『地球社会統合科学』1-1, 九州大学大学院地球社会統合科学府, pp. 1-28, 2014/12

2-2. 著書

砂漠化防止グループ編著, 佐藤廉也他(共著)『東アジアの砂漠化進行地域における持続可能な環境保全』花書房, pp. 137-172, 2015/3

池口明子, 佐藤廉也(共編著)『ネイチャー・アンド・ソサエティ研究 第3巻 身体と生存の文化生態』海青社, pp. 2-6, pp. 13-58, pp. 201-224, pp. 364-372, 2014/5

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

佐藤廉也「書架 おすすめの3冊」『地理』61-4, 古今書院, pp.112-113, 2016/3

佐藤廉也「学界展望 村落」『人文地理』66-3, 人文地理学会, pp. 272-274, 2014/6

佐藤廉也「総説 人文地理学」日本アフリカ学会編『アフリカ学事典』昭和堂, pp. 588-589, 2014/6

2-4. 口頭発表

松永光平, 佐藤廉也, 村松弘一他「中国の乾燥域における生業転換と環境変化」共同研究発表会, 鳥取大学乾燥地研究センター, 鳥取大学乾燥地研究センター, 2015/12

佐藤廉也「地理資料・GIS を用いてみる森と焼畑の動態」人文地理学会第 140 回歴史地理研究部会: 空中写真からみたアジア・アフリカ農村の変動, 人文地理学会, 甲南大学, 2015/9

Sato, Renya, Kunitada NARUMI, Shigeru KOBAYASHI, “Aerial Photographs of mainland China taken by U-2 planes: Its characteristics and interpretation”, IGU Regional Conference 2015, IGU (International Geographical Union), Moscow State University, 2015/8

佐藤廉也, 鳴海邦匡, 小林茂「U-2 機撮影の中国大陸空中写真 ―カメラ・写真の特性と判読事例―」2014 年日本地理学会秋季学術大会, 2014 年日本地理学会, 富山大学, 2014/9

Sato, Renya, “Process and effects of sedentarization among nomadic shifting cultivators: case from the Majangir, lowland Ethiopia”, IUAES 2014 (The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), IUAES (The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences), Chiba, 2014/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

佐藤廉也 日本ナイル・エチオピア学会高島賞, 日本ナイル・エチオピア学会, 2000/4

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(B) 海外、代表者: 佐藤廉也

課題番号: 23401004

研究題目: 退耕還林による中国・黄土高原の造林効果と農村経済開発効果の検証

研究経費: 2014 年度 直接経費 2,000,000 円 間接経費 600,000 円

研究の目的:

中国の退耕還林政策は、黄河や長江の上流域を主な対象として、急傾斜地の耕地や放牧地を林地に転換し、2000 年以降のおよそ 10 年間で 3200 万ヘクタールもの新規造林をめざす未曾有のプロジェクトである。本研究は、退耕還林政策実施の中心となった黄土高原地域の農村を対象として、広域調査によって農村の類型化をした後に、3～5 村を事例として選定し、退耕還林実施前後の(1)土地被覆変化(2)新規造林地における樹木の活着率(3)生業変化(4)耕地減少の代替として各村でおこなわれた農村経済振興策の成否、を現地調査によって明らかにし、退耕還林政策を「環境保全効果」と「農村振興策の成否」の両面から総合的に評価することによって、中国の環境問題・貧困問題をめぐる諸分野の研究に学際的に貢献しようとするものである。

2-6-2. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 佐藤廉也

課題番号: 23520956

研究題目: ライフヒストリー分析によるアフリカ焼畑社会の出生力変異の解明

研究経費: 直接経費 5,200,000 円 間接経費 1,200,000 円 基金分(経費は4年分の合計額)

研究の目的:

本研究は、伝統的に低出生力であったアフリカ焼畑社会を主な対象として、個人の生活史(ライフヒストリー)に着目することによって、ライフイベントの個人差・世代差と出生力の変異との相互関係を明らかにし、文化地理学・歴史人口学・人類生態学において議論されてきた「生業と人口の関係」という問題を解明することを目的とする。とりわけ、「青少年期の技術習得」「結婚と出産・子育て」「子どもの成人後の壮年期・老年期」などの生涯の主要なステージに着目し、個人間・世代間・男女間の違いが出生力の変異にどのように影響しているのかを、収集したライフヒストリーデータの定量的・定性的分析によって明らかにする。

2-6-3. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(B) 海外、代表者: 佐藤廉也

課題番号: A15H051310

研究題目: 中国・黄土高原における 1940 年代以降の土地被覆・土地利用・地形改変の復原研究

研究経費:2015 年度 直接経費 3,700,000 円 間接経費 1,110,000 円

研究の目的:

中国・黄土高原は、20世紀以降、森林伐採・農地開発・放牧、さらには21世紀以降の造林プロジェクトによって大規模な土地改変を受けてきたことが知られているが、これらのプロセスの定量的な復元は、中国における過去の地理情報(地形図、空中写真、統計情報)の活用が大きく制限されるなかで、不明なままであった。本研究は、黄土高原の村落調査によって土地改変の歴史と要因を具体的に明らかにするとともに、近年公開されたアメリカ合衆国の公文書館が所蔵する 1940 年代～60 年代の高解像度空中写真を用いて微地形レベルの地形復元、土地被覆・土地利用復元をおこない、これに 80 年代以降の衛星データ解析をあわせ、1940 年代から現在までの環境改変の歴史を定量的に明らかにしようとするものである。

2-6-4. 2015 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:佐藤廉也

課題番号:T15K030130

研究題目:未利用の地理資料を用いたエチオピア南部の森林・サバンナ動態の検証

研究経費:2015 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

研究の目的:

本研究は、アメリカ議会図書館および国立公文書館に所蔵される未利用の旧版地形図および空中写真を用いて、大規模な森林減少・サバンナ化が指摘されてきたエチオピア南部における 1940 年代から現在までの土地被覆・土地利用変化を復元し、具体的な検証が乏しいまま環境劣化が強調されてきたアフリカの環境問題に地理学・環境史の分野からの貢献をしようとするものである。本研究では、上記の地理資料を用いて土地被覆・土地利用変化を GIS で定量的に分析するとともに、エチオピア南部の広域の現地調査と文献調査をあわせておこなうことによって、民族集団の生業動態・文化規範や国家政策との関連で変化のメカニズムを説明することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本ナイル・エチオピア学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

人文地理学会・大会準備委員, 2015 年 3 月～2016 年 3 月

日本地理学会・E-JournalGEO 編集委員, 2013 年 4 月～2016 年 3 月

3. 波江 彰彦 助教

1979 年生。2009 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(人文地理学専門分野)修了。博士(文学)(大阪大学)。大阪大学文学研究科助教・特任研究員、大阪大学・甲南大学・佛教大学などでの非常勤講師を経て、2016 年 4 月より現職。専攻:人文地理学。

3-1. 論文

Namie, Akihiko, "The changes in community-based activities of collecting recyclable waste and its future prospects in Japan: A case study of Kansai Region" Kobayashi, K., Westlund, H., Matsushima, K. and Ohno, S.(eds.) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas Volume 11*, MARG (Marginal Areas Research Group), pp. 245-256, 2016/3

波江彰彦「PLS 回帰を用いた集団回収への影響要因の検討—大阪府を事例に—」『待兼山論叢 日本学篇』48, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 27-46, 2014/12

小林茂, 森野友介, 波江彰彦他(共著)「台湾桃園台地における灌漑水利の展開と土地利用の変動—GIS を援用した分析—」『E-journal GEO』9-2, 日本地理学会, pp. 172-193, 2014/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

波江彰彦「ごみ問題の『空間』と『地域性』:近代以降の大阪市を事例に」大阪大学 21 世紀懐徳堂 i-spot 講座:2015 年度後期「都市大阪、今昔」シリーズ, 大阪大学 21 世紀懐徳堂, アイ・スポット, 2016/2

波江彰彦「ごみ減少期に入った 2000 年代における日本のごみ排出・管理の傾向」人文地理学会大会, 人文地理学会, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/11(『人文地理学会大会研究発表要旨』pp. 170-171, 2015/11)

Namie, Akihiko, “The changes in community-based activities of collecting recyclable waste and its future prospects in Japan: A case study of Kansai region”, The 12th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Swedish and Japanese Countryside, MARG (Marginal Areas Research Group), Hida Earth Wisdom Center, Takayama, Japan, 2015/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013 年度～2015 年度、若手研究(B)、代表者:波江彰彦

課題番号:25770297

研究題目:廃棄物リサイクルのグローバル化とそのインパクトに関する研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、日本と台湾を主な研究対象として、廃棄物リサイクルのグローバル化とそのインパクトについて追究することである。①国際資源循環や廃棄物リサイクルにかかわるアクターに関する研究、②国際資源循環のアクターネットワークに関する研究、③台湾を軸とした国際資源循環に関する研究、④台湾における廃棄物リサイクルの進展に関する研究、という 4 つの研究課題の遂行を通じて、1990 年代後半から現在にかけて大きく進展・変動してきた廃棄物リサイクルのグローバル化について検証し、これまでの経過や課題について明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

一般社団法人人文地理学会・2015 年大会準備委員会委員, 2014 年 12 月～2015 年 11 月

一般社団法人人文地理学会・広報委員会常任委員, 2014 年 10 月～2016 年 11 月

2-12 日本文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 2 助教 1

教授：出原 隆俊、飯倉 洋一、加藤 洋介

准教授：斎藤 理生

講師：山本 嘉孝、勢田 道生

助教：新井 由美

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65	20	17	0	3	0	2	3

*うち留学生 18名、社会人学生 4名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	13	7	1	2
2015	9	5	0	0
計	22	12	1	2

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、学問的な連携体制を形成するために、学部・大学院共通の講義を設定し、また学部演習への大学院生の参加を促している。日本文学には留学生も多数在籍しており、TA・RAの機会を与えることで、コミュニケーションや教育指導の能力を高めることにも努めている。大学院においては、①修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行い、院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する、②専門機関の採用情報等の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する、また日本学術振興会特別研究員

(PD/DC2/DC1)に関する学生への情報提供とともに、積極的な応募を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。学部においては、①卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く、②日本文学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知するとともに参加を促す、③『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』など、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促す。また研究分野に関連する学会での口頭発表や学会誌への投稿を促す、などを目標とした。

2. 研究

教員は科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努め、継続中の科学研究費および諸プロジェクトに関わる研究を行う。また学生・卒業生・修了生とともに研究活動を促進するために、「大阪大学国語国文学会」を開催し、学会機関誌『語文』を刊行する。教員および大学院生を中心とした研究会活動として、「大阪大学古代中世文学研究会」「大阪大学近代文学研究会」「上方読本の会」ほかの研究会活動を行い、合わせて研究誌『詞林』『阪大近代文学研究』を刊行し、国内外の関係者・機関に送付することなどを目標とした。

3. 社会連携

所蔵保管資料の社会的活用を図るため、各方面からの閲覧複写依頼に応じ、資料の一部を年 1 回解題を付して展示公開し、またウェブ上で画像データベースとして公開することを目標とした。そのほかにも、懷徳堂記念会による「懷徳堂古典講座」など、一般の方を対象とする講座から派遣依頼のあった場合、あるいは高校教員の国語研究会や高校生を対象とする講座からの講師派遣依頼などにも積極的に対応する、などを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

【2014 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 10 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 30 本を数えるという状況にある。

【2015 年度】

授業形態においては、学部・大学院共通の講義を設定し、学部演習への大学院生の参加を促した。論文作成のための演習授業に加え、7 月、11 月に院生発表会を、10 月に修士論文・卒業論文中間発表会を行い、卒業・修士・博士論文執筆に向けての指導を行った。また学会発表・投稿論文作成のための個別指導も発表会とは別に行った。

『待兼山論叢』『語文』『詞林』『阪大近代文学研究』『上方文藝研究』などの、学内・研究室で刊行している雑誌への投稿を促した結果、学会誌等も含めて 13 本の論文が掲載され、学会・研究会での研究発表も 31 本を数えるという状況にある。

2. 研究

【2014 年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究」(2011～)、「明清詩論の受容に関する考察を中心とした、近世・近代日本漢文学史の再検討」(2013～)、「本地物語の研究—菩薩行と誓願を視座として—」(在籍 2013～)、「終戦直後の新聞小説の研究—織田作之助を中心に」(2014～)等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研究資料館による公募型共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」(2014～)を行った。また、大阪大学大学院文学研究科による「日本語の歴史的典籍の国際共同ネットワーク構築クラスター」(2014～)を行い『日本語の歴史的典籍の国際共同ネットワーク構築クラスター成果報告書』(2015 年 3 月)を刊行した。

2014 年 1 月および 2015 年 1 月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』102(14 年 6 月)、103(14 年 12 月)を刊行した。また詳細は 10 の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、それぞれの研究誌である『詞林』55 号(14 年 4 月)・56 号(14 年 10 月)、『阪大近代文学研究』第 13 号(15 年 3 月)を刊行した。

【2015 年度】

科研費による研究プロジェクトとしては「定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究」(2011～)、「明清詩論の受容に関する考察を中心とした、近世・近代日本漢文学史の再検討」(2013～)、「終戦直後の新聞小説の研究—織田作之助を中心に」(2014～)、「日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発」(2015～)、「文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—」(2015～)等を行った。科研費以外の研究プロジェクトとしては、人間文化研究機構国文学研究資料館による公募型共同研究「日本漢詩文における古典形成の研究ならびに研究環境のグローバル化に対応した日本漢文学の通史の検討」(2014～)を行った。また、やはり国文学研究資料館の「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」のうち「拠点連携研究」「日本の歴史的典籍の画像データベースを利用した国際的教育プログラムの開発」も行った。

2016 年 1 月に「大阪大学国語国文学会」を開催し、機関誌『語文』104(15 年 6 月)、105(15 年 12 月)を刊行した。また詳細は 10 の研究会開催の状況を参照していただきたいが、各研究会も活発に開催され、研究誌である『詞林』57 号(15 年 4 月)・58 号(15 年 10 月)を刊行した。

3. 社会連携

【2014 年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。いちよう祭展示会(5 月: 飯倉・合山)、大阪・京都文化講座(7 月: 出原)、古地震研究会(9 月: 飯倉)、おおがき芭蕉大学(12 月: 飯倉)、放送大学大阪学習センター(12 月: 飯倉)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

【2015 年度】

各方面からの閲覧複写依頼に応じるとともに、データベースを公開中。町人文化を味わう(4 月: 飯倉)、懷徳堂古典講座(4～12 月: 斎藤)、いちよう祭展示会(5 月: 飯倉・合山)、大阪大学 21 世紀懷徳堂 i-spot 講座(9 月: 合山)、大阪・京都文化講座(11 月: 飯倉／斎藤)、聖光文庫文化講座(12 月: 飯倉)、河野鉄兜没後 150 年の集い(3 月: 合山)、オダサク倶楽部(3 月: 斎藤)に講師として参加するなど、積極的な対応に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

活動の概要の項、前掲の「修了生・卒業生」の実績および後掲の「大学院生等による論文発表等」の項にまとめたところからすれば、当初の目標を概ね達成できていると思われる。

2. 研究

科研費を中心とした各種の研究プロジェクトは順調に遂行され、また教員および大学院生による研究成果も着実に積み上げられており、目標は充分達成できていると判断してよいと思われる。

3. 社会連携

活動の概要の項にその実績をまとめたが、社会連携の目標についても充分に達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	3	0	3
2015	0	1	1
計	3	1	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

森本 穰「魔界の住人 川端康成 その生涯と文学」

主査：出原隆俊 副査：加藤洋介・斎藤理生

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	2(0)	5(5)	0(0)	1(1)	10(8)
2015	4(4)	0(0)	8(8)	0(0)	1(1)	13(13)
計	6(6)	2(0)	13(13)	0(0)	2(2)	23(21)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	2	6	23	0	5	36
2015	0	8	19	0	4	31
計	2	14	42	0	9	67

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

松本大『『河海抄』の注記形成と二条良基—『年中行事歌合』との接点から—』『國語と國文学』（東京大学国語国文学会）, 91-8, pp.51-65, 2014/8

松本大「伝昌叱筆源氏物語古注切と『山下水』『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 56, pp.12-25, 2014/10

松本大『『河海抄』巻十論—後人増補混入の可能性を中心に—』『語文』（大阪大学国語国文学会）103, pp.14-26, 2014/12

有澤知世「富川吟雪『晴宗有明琵琶』と上方読本『垣根草』（附）『晴宗有明琵琶』翻刻』『上方文藝研究』（上方文藝研究の会）, 11, pp.55-70, 2014/6

有澤知世「合巻制作の一樣相—京伝と三馬における相互利用—」『語文』（大阪大学国語国文学会）, 103, pp. 27-42, 2014/12

仲沙織「狐の「芸尽し」考—西鶴『懷硯』巻二の五をめぐって—」『日本研究論集』（チューラーロンコーン大学・大阪大学）, 10, pp.25-39, 2014/10

川那邊依奈「太宰治『葉桜と魔笛』論—反転する〈美談〉／姉妹のエクリチュール—」『待兼山論叢 文学篇』（大阪大学大学院文学研究科）, 48, pp.19-37, 2014/12

池田弘明『『斜陽』における叔父の機能』『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会）, 13, pp.9-20, 2015/3

松田正貴「残像—高橋新吉禅詩集(Afterimages: Zen Poems Shinkichi Takahashi)』における翻訳の問題について」『阪大近代文学研究』（大阪大学近代文学研究会）, 13, pp.21-37, 2015/3

李慧珏「芥川龍之介の晩年の文学観—大正末期における「小説の筋論争」』『待兼山論叢 文学篇』（大阪大学文学研究科）, 48, pp.95-110, 2014/12

【2015 年度】

〔博士後期〕

宮川真弥「北村季吟の源氏学（一）—附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 上』翻刻—」, 『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 57, pp.36-91, 2015/4

宮川真弥「伝北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾』『語文』（大阪大学国語国文学会）, 104, pp.31-44, 2015/6,

宮川真弥「北村季吟の源氏学（二）—附・日本大学総合学術情報センター蔵『源氏物語微意 中』翻刻—」, 『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）, 58, pp.37-84, 2015/10

瓦井裕子「歌合における『源氏物語』摂取歌—源頼実と師房歌合をめぐって—」, 『中古文学』（中古文学会）, 第 96 号, pp.109-121, 2015/12

瓦井裕子「菊と紅葉の表現史—一条朝前後の好尚とその背景—」, 『語文』（大阪大学国語国文学会）, 第 105 輯, pp.28-39, 2015/12

瓦井裕子「幻巻と月次屏風の世界—その絵画性と歌ことばの視点から—」, 『詞林』（大阪大学古代中世文学研究会）,

- 58号, pp24-36, 2015/10,
- アナンド・サンチット『『わたしが・棄てた・女』論—「ぼく」の〈平凡さ〉に着目して—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 第104輯, pp45-61, 2015/6
- 松田正貴「戦時下における「皿」—創生期『歷程』と高橋新吉『大和島根』について—』『語文』(大阪大学国語国文学会), 第105輯, pp40-58, 2015/12
- 有澤知世「京伝黄表紙と「夢窓の鯉魚」』『上方文藝研究』(上方文藝研究会) 12号, pp.14-23, 2015/6
- 有澤知世「山東京伝と森島中良—京伝作品における異国意匠をてがかりに—」, 『絵入本ワークショップⅧ 資料集』(絵入本学会), pp.38-41, 2015/12
- 平井華恵「明治20年代前半における美術関連の定期刊行物に用いられた印刷技術への同時代人の評価—『国華』『美術世界』の多色摺木版への言及を中心に—」『日本研究論集』, チュラーロンコーン大学・大阪大学, 第12号, pp37-60, 2015/10
- 川那邊依奈「〈対話劇〉としての太宰治『新ハムレット』—第1節、第2節を中心に—」『日本研究論集』, チュラーロンコーン大学・大阪大学, 第12号, pp80-98, 2015/10
- 寺田伝「伝藤原為家筆野路切『古今和歌集』考」『国文学』関西大学国語国文学会, 100, 2016/3

(2)口頭発表

【2014年度】

〔博士前期〕

- 黒田翔子「平安散文における省筆の役割」大阪大学古代中世文学研究会第258回例会, 2014/6/29
- 黒田翔子『『栄花物語』の省筆について』平成26年度大阪大学古代中世文学研究会夏季セミナー, 2014/8/21
- 黒田翔子『『我身にたどる姫君』試論—閨中表現を中心に—』大阪大学古代中世文学研究会第261回例会, 2014/11/24
- ナカマエ・オリビア ユミ「バレット写本における仏教用語—『天草版平家物語』との関係をめぐって—」大阪大学古代中世文学研究会第264回例会, 2015/2/28
- ナカマエ・オリビア ユミ『『天草版平家物語』と日本語学習—本文における書入れの再検討を中心に—』大阪大学古代中世文学研究会第260回例会, 2014/9/27
- ナカマエ・オリビア ユミ「十六世紀イエズス会宣教師における日本文学享受の研究—『天草版平家物語』を巡って—」23rd Annual Conference – Association for Japanese Literary Studies (AJLS)- Religion and Spirituality in Japanese Literature, The Center for East Asian Studies at Western Washington University. USA, Bellingham (Washington State), 2014/10/11
- ナカマエ・オリビア ユミ「Amakusaban Heike Monogatari: recepção da literatura japonesa para o ensino de História pelos jesuítas」XXIII Encontro Nacional de Professores Universitários de Língua, Literatura e Cultura Japonesa / X Congresso Internacional de Estudos Japoneses no Brasil, Universidade Federal do Rio de Janeiro (Rio de Janeiro, Brazil), 2014/09/12
- ナカマエ・オリビア ユミ「和歌における技法の翻訳方法—英語訳を中心に—」2014年タイ国日本研究国際シンポジウム, チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座, チュラーロンコーン大学(タイ王国, バンコク), 2014/08/26
- 森由衣子「章段区分から見る『枕草子』—三卷本系統第一類本を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第258回例会, 2014/6/29
- 森由衣子「書記法からみる『枕草子』章段区分—五八段再考—」大阪大学古代中世文学研究会第261回例会, 2014/11/24

- 竹端紀子『『更級日記』試論―「源氏物語」受容の再検討―』大阪大学古代中世文学研究会第 257 回例会, 2014/5/10
- 福田涼「三島由紀夫「源氏供養」論」近代文学研究会, 2014/5/3
- 廖婧「川端康成「金糸雀」について」近代文学研究会, 2014/9/27
- 鈴木飛鳥「宮沢賢治「よだかの星」論―種という切り口から―」近代文学研究会, 2014/12/20
- 〔博士後期〕
- 松本大『『河海抄』巻十をめぐる諸問題』大阪大学古代中世文学研究会第 258 回例会, 2014/6/29
- 松本大「富小路俊通『三源一覽』の源氏学をめぐる」日本文学協会第 34 回研究発表大会, いわき明星大学, 2014/7/12
- 松本大「室町期源氏学における典拠指摘の再検討」平成 26 年度大阪大学古代中世文学研究会夏季セミナー, 2014/8/21
- 松本大「中世源氏学における典拠指摘の再検討」平成 26 年度中古文学会秋季大会・シンポジウム「源氏物語 典拠と准拠の再検討」パネリスト発表, 京都女子大学, 2014/10/11
- 宮川真弥「板本における匡郭高の比較による版の同定について―画像測定による版種弁別のために―」第 88 回「書物・出版と社会変容」研究会, 一橋大学佐野書院, 2014/4/12
- 宮川真弥「北村季吟の古典学における天理図書館蔵『源氏物語打聞』の位置付けについて」大阪大学古代中世文学研究会第 259 回例会, 2014/7/26
- 宮川真弥「北村季吟筆『源語秘訣』と箕形如庵宗乾」平成 27 年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, 2015/1/10
- 宮川真弥「北村季吟『源氏物語微意』の基礎的研究」大阪大学古代中世文学研究会第 263 回例会, 2015/1/24
- 宮川真弥「板本における版種弁別のための画像測定について―匡郭高の比較を中心に―」第 4 回知識・芸術・文化情報学研究会, 立命館大阪梅田キャンパス, 2015/2/7
- 瓦井裕子「初期の源氏摂取歌―和歌六人党を中心に―」, 第 256 回大阪大学古代中世文学研究会, 2014/4/20
- 瓦井裕子「和歌六人党周辺歌人と『源氏物語』」平成 26 年度大阪大学古代中世文学研究会夏季セミナー, 2014/8/22
- 瓦井裕子『『源氏物語』の風景描写と同時代的好尚』, 2014 年タイ国日本研究国際シンポジウム, チュラーロンコーン大学 (タイ王国, バンコク), 2014/8/26
- 瓦井裕子「和歌六人党の『源氏物語』摂取」, 平成 26 年度中古文学会秋季大会, 京都女子大学, 2014/10/12
- 瓦井裕子「後期撰関時代の歌合における『源氏物語』摂取」, 第 264 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学文学部大会議室, 2015/2/28
- 瓦井裕子「The Picturesque Character of and Poetic Language from “Maboroshi” in “The Tale of Genji”: referred to in Byōbu-uta」, International Workshop <Strategies of Textual and Visual Narration in Classical and Early Modern Japanese Literature>, ハイデルベルク大学日本学研究所 (ドイツ共和国, ハイデルベルク), 2015/3/20
- 仲沙織『『新可笑記』巻一の四「生肝は妙薬のよし」考』第 40 回西鶴研究会, 青山学院大学, 2015/3/26
- 有澤知世「式亭小三馬編『式亭狂文集』―三馬の広告活動を中心に―」日本文学協会第 34 回研究発表会, いわき明星大学, 2014/7
- 有澤知世「山東京伝『籠釣瓶丹前八橋』における〈絵馬の怪異〉」絵入本学会, 絵入本ワークショップVI, 同朋大学, 2014/7
- 有澤知世「近松『津国女夫池』三段目典拠考」平成 26 年度大阪大学古代中世文学研究会夏季セミナー, 2014/8/21
- 有澤知世「京伝合巻の戦略―石燕妖怪画本の利用を中心に―」高麗大学訪問研究ワークショップ, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/1/27
- 有澤知世「山東京伝における妖怪―鳥山石燕作妖怪絵本の受容を中心に―」(Yōkai in Santō Kyōden's works: with a focus on the Reception of Toriyama Sekien's Yōkai picture book), 国際ワークショップ<日本古典文学における語りの戦略―テキストと絵画の交響―> (International Workshop <Strategies of Textual and Visual Narration in Classical

and Early Modern Japanese Literature>), ドイツ連邦共和国 ハイデルベルク, ハイデルベルク大学日本学研究所,
2015/3/20

村岡聖「明治期姦通小説と〈社会の声〉～島崎藤村『旧主人』における語りについて～」平成 27 年度大阪大学国語国文学会総会, 大阪大学, 2015/1/10

【2015 年度】

〔博士前期〕

竹端紀子「『後撰和歌集』作者名表記をめぐる諸問題」大阪大学古代中世文学研究会第 268 回例会, 大阪大学文学部大会議室, 2015/6/28

竹端紀子「定家本『後撰和歌集』に関する考察—和歌の本文異同をめぐる—」大阪大学古代中世文学研究会第 271 回例会, 大阪大学文学部中庭会議室, 2015/11/28

森岡綾子「『源氏物語』女房の笑い考」大阪大学古代中世文学研究会第 267 回例会, 大阪大学文学部中庭会議室, 2015/5/23

前田恵里「秋好中宮出家願望の特殊性—死者救済のあり方を手がかりに—」大阪大学古代中世文学研究会第 266 回例会, 大阪大学文学部大会議室, 2015/4/25

宋詞「物語における密通について—「罪の子」たちの姿を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第 266 回例会, 大阪大学文学部大会議室, 2015/4/25

岡部祐佳「『万の文反古』巻五の二「二膳居る旅の面影」試論」京都近世小説研究会 9 月例会, 同志社女子大学, 2015/9/19

ティモシー・ジェイコブ「パロディ的な形式という方法——太宰治の『思ひ出』論——」近代文学研究会, 京都市伏見いきいき市民活動センター, 2015/10/10

大坂一裕「現在の日常を支えるもの——庄野潤三『夕べの雲』論」近代文学研究会, 京都市伏見いきいき市民活動センター, 2015/12/12

〔博士後期〕

宮川真弥「天理図書館蔵『源氏物語打聞』の再検討—北村季吟とその後裔の古典学をめぐる—」日本近世文学会平成 27 年度春季大会, 東京藝術大学音楽学部 5 号館 5-109 教室, 2015/5/30

宮川真弥「『湖月抄』における「一説」について—北村季吟『源氏物語微意』を手掛かりに—」大阪大学古代中世文学研究会第 270 回例会, 大阪大学文学部大会議室, 2015/10/31

宮川真弥「北村季吟の源氏学—『源氏物語微意』と『湖月抄』の対照を中心に—」大阪大学古代中世文学研究会第 273 回例会, 大阪大学文学部中庭会議室, 2016/2/20

瓦井裕子「重代の歌人と歌ことば——康資王母の表現踏襲を中心に——」, 第 270 回大阪大学古代中世文学研究会, 於：大阪大学, 2015/10/31

瓦井裕子「祢子内親王歌合と『源氏物語』摂取」, 日本文学協会第 35 回研究発表大会, 於：奈良女子大学, 2015/7/5

瓦井裕子「バイエルン州立図書館蔵『源氏物語』表紙絵の特徴」, 第 6 回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 於：大阪大学, 2015/6/27

瓦井裕子「九月十三夜詠の誕生——端緒としての源氏物語摂取——」, 中古文学会関西支部第 40 回例会, 於：関西大学, 2015/6/20

有澤知世「式亭三馬の広告文—戯作者という〈ブランド〉—」, 第 6 回大阪大学・チューラーロンコーン大学・日本文学国際研究交流集会, 2015/6/27

有澤知世「京伝合巻と図会もの」, 日本文学協会第 35 回研究発表大会, 日本文学協会, 2015/7/5

有澤知世「山東京伝と森島中良—京伝作品における異国意匠をてがかりに—」, 京都近世小説研究会 9 月例会, 2015/9/19

- 有澤知世「山東京伝と森島中良—京伝作品における異国意匠をてがかりに—」, 絵入本ワークショップⅧ, 2015/12/13
- 有澤知世「京伝戯作と交遊関係—異国意匠をてがかりに—」, 平成 28 年度大阪大学国語国文学会, 2016/1/9
- 川那邊依奈「〈レーゼドラマ〉としての太宰治『新ハムレット』」大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究
交流集会, 第 6 回, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/6/27
- 川那邊依奈「太宰治『正義と微笑』論—〈言葉〉を書く「僕」に着目して—」大阪大学近代文学研究会, 京都市伏見いき
いき市民活動センター, 2015/7/4
- 川那邊依奈「太宰治『新ハムレット』論—〈対話劇〉という形式に着目して—」大阪大学国語国文学会, 大阪大学豊中キ
ャンパス, 2016/1/9
- 金香花「芥川龍之介『影』論—中国人の「映画」と「私」—」大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流
集会, 第 6 回, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/6/27
- 平井華恵「春陽堂「新作十二番」の装本—意匠とその様式をめぐって」近代文学研究会, 京都市伏見いきいき市民活動
センター, 2015/5/7
- 平井華恵「明治 20 年代における木版多色摺について—春陽堂の出版物を中心に—」大阪大学・チューラーロンコーン大学
日本文学国際研究交流集会, 第 6 回, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/6/27
- 平井華恵「日本近代出版史における雑誌『美術世界』の意義—明治二〇年代における考証の一端をめぐって」日本比較文
学会関西支部関西大会, 第 51 回, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/11/28
- 寺田伝「初期定家本『古今和歌集』の位置づけをめぐって」大阪大学古代中世文学研究会第 267 回例会, 大阪大学文学部
中庭会議室, 2015/5/23
- 寺田伝「初期定家本『古今和歌集』の展開」第 118 回和歌文学会関西 7 月例会, 奈良女子大学文学系 N 棟 202 講義室,
2015/7/11
- 寺田伝「冷泉家時雨亭文庫所蔵の零本『古今和歌集』について」大阪大学古代中世文学研究会第 272 回例会, 大阪大学文
法経済学部本館講義室 464, 2015/12/19
- 李慧珏「雑誌『文芸戦線』から見える芥川龍之介—『文芸戦線』の置かれた時代状況と合わせて—」近代文学研究会, 2016/3/19

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

- 瓦井裕子「紹介 片岡利博著『異文の愉悅 狭衣物語本文研究』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 102, pp.35-36, 2014/6
- 松本大「紹介 伊藤鉄也編『もっと知りたい 池田亀鑑と「源氏物語」〜第 2 集〜』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 102,
pp.39, 2014/6
- 池田弘明「紹介 島津忠夫著『若山牧水とところどころ—近代短歌史の視点から—』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 102,
pp.40, 2014/6
- 宮川真弥「紹介 加藤昌義著『源氏物語』前後左右』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 103, pp.64, 2014/12
- 瓦井裕子「紹介 荒木浩著『かくして「源氏物語」が誕生する 物語が流動する場はどう立ち会うか』, 『語文』(大阪
大学国語国文学会), 103, pp.59-60, 2014/12
- 仲沙織「紹介 熊倉功夫・筒井紘一・名和修監修 川崎佐知子校訂『御茶之湯記 予楽院近衛家熙の茶会記』(茶湯古典叢書
六)」, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 103, pp.64, 2014/12
- 金 香花「翻訳中国語(簡体字)」大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室多言語翻訳チーム『多言語翻訳 葉
山嘉樹『セメント樽の中の手紙』(大阪大学大学院文学研究科 日本文学・国語学研究室日本文学多言語翻訳プロジェ

クト), pp8-10, 2015/3

アナンド・サンチット「翻訳中国語（ヒンディー語）」同上『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』』, pp22-24, 2015/3

程瑜莉「翻訳中国語（韓国語）」同上『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』』, pp28-31, 2015/3

ナカエマ・オリビア・ユミ「翻訳中国語（ポルトガル語）」同上『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』』, pp32-34, 2015/3

モハンマド・モインウッディン「翻訳中国語（ウルドゥー語）」同上『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』』, pp41-45, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

竹端紀子「紹介 山本一著『藤原俊成 思案する歌びと』」, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 104, pp.70-71, 2015/6

〔博士後期〕

平井華恵「紹介 石原深予著『尾崎翠の詩と病理』」, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第 105 輯 pp76-77, 2015/12

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

松本大, 第 7 回中古文学会賞, 中古文学会, 2014/10/11

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 3 名 DC1 : 0 名 (計 3 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

勢田 道生 博士後期課程, 大阪大学, 講師, 2016/1

箕浦 尚美 博士後期課程, 同朋大学, 講師, 2016/4

丹下 暖子 博士後期課程, 甲子園大学, 講師, 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2014 年度 : 1 名 2015 年度 : 2 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 3 名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 9 名

2014 年度：5 名 2015 年度：4 名

9. 刊行物

2015 年度 『語文』(大阪大学国語国文学会)第 103 輯・第 104 輯
『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)第 57 号・第 58 号
『上方文藝研究』(上方文藝研究の会)第 12 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【2014 年度】

[国内学会の開催]

和漢比較文学会例会 (西部)	2014 年 11 月 29 日
大阪大学国語国文学会総会	2015 年 1 月 10 日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2014 年度：第 256 回 4 月 20 日	第 257 回 5 月 10 日	第 258 回 6 月 29 日
第 259 回 7 月 26 日	第 260 回 9 月 27 日	第 261 回 11 月 24 日
第 262 回 12 月 23 日	第 263 回 1 月 24 日	第 264 回 2 月 28 日
第 265 回 3 月 28 日		

上方読本を読む会

2014 年度：4 月 12 日 6 月 28 日 9 月 28 日 12 月 6 日 2 月 14 日

近代文学研究会

2014 年度：5 月 31 日 7 月 19 日 9 月 27 日 12 月 20 日 3 月 14 日

「異言語環境において日本近代小説を読む―葉山嘉樹『セメント樽の中野手紙』を例に―」

ワークショップ 2015 年 3 月 12 日

「第 1 回日本漢文学総合討論」シンポジウム

2015 年 3 月 23 日

【2015 年度】

[国内学会の開催]

日本近代文学会関西支部秋季大会	2015 年 11 月 7 日
大阪大学国語国文学会総会	2016 年 1 月 9 日

[研究会の開催]

大阪大学古代中世文学研究会

2015 年度：第 266 回 4 月 25 日	第 267 回 5 月 23 日	第 268 回 6 月 28 日

第 269 回 7 月 25 日

第 270 回 10 月 31 日

第 271 回 11 月 28 日

第 272 回 12 月 19 日

第 273 回 2 月 20 日

第 274 回 3 月 26 日

上方読本を読む会

2015 年度：4 月 18 日 6 月 13 日 7 月 18 日 9 月 26 日 12 月 19 日 2 月 13 日

近代文学研究会

2015 年度：5 月 9 日 7 月 4 日 10 月 10 日 12 月 12 日 3 月 19 日

「幕末漢詩文の“かたち”」国際ワークショップ

2015 年 4 月 10 日

「日本漢文学研究史の“水面下”をひろう—先学へのインタビューを通して—」研究会

2016 年 1 月 9 日

「読みたい！日本の古典籍—歴史的典籍の画像データベース構築とくずし字教育の現状と展望—」

国際シンポジウム 2016 年 2 月 17 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

＊(国語学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1 月 1 日間)

研究誌「語文」を年 2 回編集・発行

＊(国語学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10 月 2014 年度 4 日間)

大学院研究発表会 (7 月・11 月 各年度各 2 日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10. に詳述した。

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 出原 隆俊 教授

1951 年生。京都大学大学院博士後期課程中退。文学修士。県立広島女子大学講師・助教授・京都教育大学助教授・大阪大学助教授を経て現職。専攻：日本近代文学。

1-1. 論文

出原隆俊, 池田弘明, 松田正貴 「「廓内よりの帰り」は朝帰りか?—「たけくらべ」注釈をめぐって—」『阪大近代文学研究』13, 大阪大学近代文学研究会, pp. 1-8, 2015/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会・評議員, 1994 年 4 月～現在に至る

2. 飯倉 洋一 教授

1956 年生。1985 年九州大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学）（九州大学、1998 年）。九州大学助手・山口大学専任講師・同助教授・同教授・大阪大学助教授を経て、2004 年 4 月より現職。専攻：日本近世文学。

2-1. 論文

飯倉洋一「秋成の和文」上田秋成研究会『上田秋成研究事典』笠間書院, pp. 181-192, 2016/1

飯倉洋一「王昭君詩と大石良雄—『新斎夜語』第一話の「名利」説をめぐって—」『語文』(大阪大学国語国文学会), 105, 大阪大学国語国文学会, pp. 1-11, 2015/12

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

飯倉洋一(書評)「高橋明彦『樸図かずお論』」『西日本新聞』西日本新聞社, 2015/10

飯倉洋一(書評)「高田衛著『秋成 小説史の研究』」『日本文学』(日本文学協会), 64-5, 日本文学協会, pp. 78-79, 2015/5

2-4. 口頭発表

飯倉洋一「木越治氏の批判に答える—「菊花の約」の尼子経久は論ずるに足らぬ人物か—」京都近世小説研究会:京都近世小説研究会, 京都近世小説研究会, キャンパスプラザ京都, 2016/3

飯倉洋一 (招待講演)「小沢蘆庵・大田垣蓮月・富岡鉄斎」第4回聖光文庫文化講座:第4回聖光文庫文化講座, 鉄斎美術館・宝塚市立中央図書館, 宝塚市立中央図書館, 2015/12

飯倉洋一 (パネリスト)「寺子屋と往来物—『春興手習出精双六』を手がかりに—」ハイデルベルク大学・大阪大学ジョイントシンポジウム:人文学における日本研究 江戸庶民文化の諸相, ハイデルベルク大学日本学研究所・大阪大学文学研究科, ハイデルベルク大学国際科学フォーラム, 2015/12

飯倉洋一（招待講演）「大坂の遊里案内『みをつくし』を読む」2015 年度後期 大阪・京都文化講座：京都・大阪『悪所』の研究。
—遊廓と芝居町の他所性・両義性をめぐって—，大阪大学文学研究科・大阪大学 21 世紀懷徳堂・立命館大学文学部，立命館
大阪梅田キャンパス，2015/11

飯倉洋一（パネリスト）「デジタル資料を活用したくずし字読解の教育方法の開発」シンポジウム：日本の歴史的典籍とそのデジタ
ル化—研究及び教育に与える影響—，ハイデルベルク大学日本学研究所，ハイデルベルク大学マルシリウス講堂，2015/11

飯倉洋一「『新斎夜語』第一話について—大石良雄説話の創造—」京都近世小説研究会：京都近世小説研究会，京都近世小
説研究会，同志社女子大学，2015/8

飯倉洋一（招待講演）「読本コレクションと談義本研究」シンポジウム：江戸文化辻談義—中野コレクションから見えるもの，九州大
学中央図書館，九州大学中央図書館，2015/5

飯倉洋一（招待講演）「懷徳堂と町人文化」町人文化を味わう：町人文化を味わう，関西・大阪 21 世紀協会上方文化芸能運営委
員会，大阪大学中之島センター，2015/4

飯倉洋一「前期読本作者が作中に取り入れた学説をめぐって—18 世紀の仮名読物の一面—」京都近世小説研究会：京都近世
小説研究会，京都近世小説研究会，同志社女子大学，2015/4

飯倉洋一「読本の中の古典注釈」大阪大学古代中世文学研究会：大阪大学古代中世文学研究会，大阪大学古代中世文学研
究会，大阪大学豊中キャンパス，2015/3

飯倉洋一（招待講演）「上田秋成と芭蕉—秋成は芭蕉のどこが気に入らなかったのか—」おおがき芭蕉大学：おおがき芭蕉大学，
奥の細道むずびの地記念館，奥の細道むずびの地記念館，2014/12

飯倉洋一（招待講演）「写本と板本」古地震研究会：古地震研究会，古地震研究会，京都大学大学院理学研究科，2014/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

飯倉洋一，大谷俊太，加藤弓枝他 第 6 回ゲスナー賞 目録・索引部門 銀賞，雄松堂書店，2010/10

飯倉洋一 柿衛賞（第 3 回），財団法人柿衛文庫，1993/6

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2016 年度、挑戦的萌芽研究、代表者：飯倉洋一

課題番号：15K12850

研究題目：日本の歴史的典籍に関する国際的教育プログラムの開発

研究経費：2015 年度 直接経費 2,600,000 円 間接経費 780,000 円

研究の目的：

前近代日本の典籍および歴史資料は、現在急速に画像データベースとして WEB 公開が進みつつあるが、特に国文学研究資料
館が平成 26 年度から開始した「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」においては、今後 10 年間に、30 万
点の歴史的典籍の画像が公開される予定である。日本文学以外の異分野領域の研究者や、海外の日本研究者も、簡単に前近代
の資料にアクセスできるようになりつつある一方で、それを活用するためのノウハウについては整備されていない。本研究は、日本文
学以外の領域の研究者や海外の日本研究者が、これらの画像データベースを利用するための支援システムとして、くずし字解読
をはじめとする歴史的典籍取り扱いのための学習支援プログラムを開発・試作し、それを用いたワークショップ開催を目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2015 年度～2015 年度、2：その他共同研究、助成金獲得者：飯倉洋一

助成金名: 日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画、拠点主導共同研究

研究題目: 日本の歴史的典籍の画像データベースを利用した国際的教育プログラムの開発

助成団体名: 人間文化研究機構国文学研究資料館

助成金額: 2015 年度 直接経費 1,000,000 円

研究の目的:

国文学研究資料館の画像データベースが国際的に活用されるためには、海外の日本研究者が、くずし字の解読能力を身につける必要がある。このことに関心のある海外の研究者・図書館関係者らの、画像データベース活用やくずし字教育に関する現在の取り組みについての情報を収集する。その情報を基に、具体的にくずし字解読学習支援ソフトの開発試作を進める。また国際・学際シンポジウムなどで、画像データベース活用のための議論を重ねる

2-8. 外部役員等の引き受け状況

一般財団法人懷徳堂記念会・理事, 2014 年 4 月～現在に至る

国文学研究資料館古典籍データベース研究事業センター拠点連携委員会委員・委員, 2013 年 4 月～現在に至る

人間文化研究機構国文学研究資料館・調査収集委員会委員, 2012 年 4 月～2016 年 3 月

公益財団法人柿衛文庫・理事, 2012 年 3 月～現在に至る

日本近世文学会・広報企画委員会委員, 2011 年 8 月～現在に至る

園田学園女子大学近松研究所・評議員, 2009 年 4 月～現在に至る

公益財団法人柿衛文庫・柿衛賞選考委員, 2007 年 6 月～2015 年 3 月

財団法人関西・大阪21世紀協会上方文化芸能運営委員会・運営委員, 2007 年 4 月～現在に至る

日本近世文学会・常任委員, 2002 年 6 月～現在に至る

日本近世文学会・委員, 2000 年 6 月～現在に至る

柳川市・柳川市史専門研究員, 1995 年 4 月～現在に至る

人間文化研究機構国文学研究資料館・文献資料調査員, 1993 年 4 月～現在に至る

3. 加藤 洋介 教授

1962 年生。1989 年名古屋大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。国文学研究資料館助手、愛知県立女子短期大学・愛知県立大学講師、同助教授、同教授、大阪大学准教授を経て、2010 年 10 月より現職。専攻：日本平安文学。

3-1. 論文

加藤洋介「本文研究の可能性-定家本源氏物語の場合-」『国語と国文学』(東京大学国語国文学会), 91-11, pp. 139-149, 2014/11

3-2. 著書

加藤洋介, 丹下暖子, 藤原美佳(共著)『伊勢物語校異集成』和泉書院, 494p., 2016/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

加藤洋介 (パネリスト)「河内本・別本から見た定家本源氏物語」中古文学会関西西部会 第三十九回例会:源氏物語 本文研究の可能性, 中古文学会関西西部会, 佛教大学, 2014/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011 年度～2015 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤洋介

課題番号:23320052

研究題目:定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開に関する総合的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 2,000,000 円 間接経費 600,000 円

2015 年度 直接経費 2,000,000 円 間接経費 600,000 円

研究の目的:

本研究は、定家本伊勢物語と源氏物語の展開の様相を横断的に検証することによって、唯一の定家自筆本を復原するのではない、新たな定家本伊勢物語・源氏物語の本文形成史を構築しようとするものである。既刊の校本である池田亀鑑『源氏物語大成校異篇』、および池田亀鑑『伊勢物語に就きての研究 校本篇』・大津有一『伊勢物語に就きての研究 補遺篇』・山田清市『伊勢物語校本と研究』のデータを修正し、これまで等閑視されてきた室町期写本のデータを新たに加え、「表記・改行・音便」といった新たな視点を導入することによって、定家本伊勢物語・源氏物語の形成と展開の実相に迫ることを目的としている。

3-6-2. 2015 年度～2015 年度、研究成果公開促進費、代表者:加藤洋介

課題番号:15HP5042

研究題目:伊勢物語校異集成

研究経費:2015 年度 直接経費 1,600,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

『伊勢物語校異集成』の刊行

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

中古文学会・常任委員、編集委員, 2011 年 5 月～現在に至る

和歌文学会・委員, 2007 年 4 月～現在に至る

4. 齋藤 理生 准教授

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)(大阪大学、2004 年)。群馬大学教育学部講師、同准教授を経て、2014 年 4 月より現職。専攻:日本近現代文学。

4-1. 論文

斎藤理生 「織田作之助『夜光虫』論—「大阪日日新聞」を手がかりに」『國語國文』84-12, 臨川書店, pp. 1-18, 2015/12

斎藤理生 「織田作之助『十五夜物語』論」『語文』(大阪大学国語国文学会), 104, pp. 1-13, 2015/6

斎藤理生 「評釈「二十世紀旗手」(三)」『太宰治研究』23, 和泉書院, pp. 256-279, 2015/6

斎藤理生 「文学作品の輪郭—『大造爺さんと雁』『走れメロス』『パンドラの匣』『語学と文学』(群馬大学語文学会), 51, pp. 1-12, 2015/3

斎藤理生 「太宰治の「東京」の使い方—織田作之助の「大阪」を補助線に—」『文学・語学』(全国大学国語国文学会), 211, pp. 85-95, 2014/12

斎藤理生 「評釈「二十世紀旗手」(二)」山内祥史『太宰治研究』22, 和泉書院, pp. 308-330, 2014/6

斎藤理生 「「河北新報」のなかの『パンドラの匣』『太宰治スタディーズ』5, 太宰治スタディーズの会, pp. 152-165, 2014/6

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

斎藤理生 「【資料紹介】織田作之助新資料『俄法師』とその周辺」『昭和文学研究』(昭和文学会), 72, 笠間書院, pp. 153-159, 2016/3

斎藤理生 「小林秀雄「政治家」解説」『新潮』112-9, 新潮社, pp. 144-147, 2015/9

斎藤理生 「書評 木村小夜著『太宰治の虚構』」『日本文学』(日本文学協会), 64, ひつじ書房, pp. 88-89, 2015/9

斎藤理生 「【資料紹介】「読書ノート」大宰治」山内祥史『太宰治研究』23, 和泉書院, pp. 249-252, 2015/6

4-4. 口頭発表

斎藤理生 「太宰治『惜別』論—鲁迅と〈留学〉—」グローバル日本研究国際シンポジウム: 開く日本・閉じる日本—「人間移動学」事始め—, 大阪大学文学研究科, 大阪大学, 2016/3

斎藤理生 「織田作之助の新聞小説—『十五夜物語』『夜光虫』を中心に」大阪大学国語国文学会総会 講演, 大阪大学国語国文学会, 大阪大学, 2015/1

斎藤理生 「太宰治の小説の輪郭—教科書・新聞・文庫」2014年度 群馬大学語文学会夏期大会 講演, 群馬大学語文学会, 群馬大学, 2014/8

斎藤理生 「三鷹・東京・津軽—太宰治の地名の使用」第 105 回大会 研究フォーラム 太宰治の作品と文体, 日本文体論学会, 杏林大学, 2014/6

斎藤理生 「「東京」の使い方—織田作之助の「大阪」を補助線に—夏季大会シンポジウム 太宰治—作品の舞台と風土— パネルディスカッション, 全国大学国語国文学会, フェリス女学院大学, 2014/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

斎藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 24 年度), 群馬大学, 2013/5

斎藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞 優秀賞(平成 22 年度), 群馬大学, 2011/5

斎藤理生 群馬大学ベストティーチャー賞(平成 19 年度), 群馬大学, 2008/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者:斎藤理生

課題番号:26770078

研究題目:終戦直後の新聞小説の研究—織田作之助を中心に—

研究経費:2014 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2015 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究では、終戦直後の新聞小説を、創作欄以外の紙面との関わりを視野に入れて分析する。分析を通じて、この時期の新聞小説の特徴と、その社会的役割を明らかにすることが目的である。主な対象とするのは、1945 年 9 月から 1946 年 12 月にかけて、地方紙に 3 篇、全国紙に 1 篇の小説を連載した、織田作之助の作品である。織田作品の分析を軸に、太宰治・石坂洋次郎・吉川英治らが同時期に書いた新聞小説との比較を行う。このような研究は、近代小説とメディアと読者との関係を再検討する歴史的な視座を得ることにもつながるはずである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本近代文学会関西支部・運営委員, 2015 年 3 月～現在に至る

昭和文学会・編集委員, 2012 年 8 月～2014 年 8 月

5. 山本 嘉孝 講師

1985 年、兵庫県生まれ。2008 年、米国ハーバード大学学士号 (Literature 専攻)。2012 年、東京大学大学院総合文化研究科超域文化科学専攻比較文学比較文化分野修士号。2012～2015 年、日本学術振興会特別研究員 (DC1)。2016 年、東京大学大学院 (同上) 博士課程単位取得退学。専攻: 日本漢文学／日本近世文学。

5-1. 論文

山本嘉孝「中村蘭林の文章学 — 十八世紀日本における朱子学の展開」『日本思想史学』(日本思想史学会), 47, pp. 126-143, 2015/9

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

Yamamoto, Yoshitaka(訳)(石井寿美世「Japanese Management の歴史的展開過程—第二次世界大戦前を対象に一」の英訳), “The Historical Development of Japanese Corporate Management: 1603-1945”, Parissa Haghirian, *Routledge Handbook of Japanese Business and Management*, Routledge, pp. 9-20, 2016/2

山本嘉孝(訳)(Bettina Gramlich-Oka “Kirishitan kô by Tadano Makuzu: A Late Tokugawa Woman’s Warnings” の和訳)「只野真葛『キリシタン考』— 近世後期女性の対外意識」『国際日本学』13, 法政大学国際日本学研究所, pp. 181-205, 2015/12

5-4. 口頭発表

山本嘉孝 「「大名庭園と漢詩文 ― 秋田藩衆楽園を中心に」」第九回学際日本駒場フォーラム, 東京大学 教養学部教養学科
超域文化科学分科 学際日本文化論コース, 東京大学, 2016/1

山本嘉孝 「「施本における刑罰の絵 ― 山本北山『むかしありしこと』について」」絵入本ワークショップⅧ, 絵入本ワークショップ,
実践女子大学, 2015/12

山本嘉孝 「「近世中期儒学における和歌受容 ― 中村蘭林『寓意録』を中心に」」「近世における天皇歌壇とその周辺」研究会,
大手前大学, 2015/2

山本嘉孝 「「中村蘭林の修正朱子学と作文論 ― 近世中期におけるもう一つの〈古文辞〉」」第 8 回幕末明治研究会, 幕末明治
研究会, 明星大学, 2014/12

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山本嘉孝 第10回日本近世文学会賞, 日本近世文学会, 2014/5

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2012 年度～2014 年度、特別研究員奨励費、代表者: 山本嘉孝

課題番号: 12J07547

研究題目: 異学の禁と漢詩 ― 天明・寛政期の日本における漢詩の位置づけ

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

武家の子弟を対象として学問(儒学)の奨励が幕府や各藩で盛んに行われるようになった天明・寛政期(18 世紀末)前後、漢詩文の制作が、特に初学者の間で、いかなる目的と方法のもとで学ばれていたかを明らかにする。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 勢田 道生 特任講師(常勤)

1980 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。博士(文学)(大阪大学、2011 年)。大阪大学大学院文学研究科助教、日本学術振興会特別研究員(PD)を経て、2016 年 1 月より現職。専攻: 日本中近世文学。

6-1. 論文

勢田道生 「安積澹泊『大日本史賛藪』―歴史人物のキャラクター辞典―」井上泰至・田中康二(共編著)『江戸文学を選び直す
現代語訳付き名文案内』笠間書院, pp. 100-113, 2014/6

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

勢田道生 「南朝史受容と神皇正統記」平成 27 年度藝林会学術研究大会:『神皇正統記』をめぐる諸問題, 藝林会, 常磐大学, 2015/10

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

勢田道生 第十回日本近世文学会賞, 日本近世文学会, 2014/5

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2013 年度～2015 年度、代表者:勢田道生

課題番号:13J02490

研究題目:近世における南朝史享受をめぐる歴史資源の流通と人的交流についての研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

近世における南朝史享受の問題は、思想・文学・地域文化など、さまざまな文化に大きな影響を与えてきたが、このような知的営為の基盤にある史書や軍書については、十分な検討がなされてこなかった。本研究は、近世に成立した南朝に関する史書を中心的素材として、その成立・流通に関する歴史資源の流通と人的交流の実態を明らかにすることを目的とするものである。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 新井 由美 助教

1964 年生。2001 年、大阪大学大学印文学研究科博士後期課程（日本文学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学、2004 年）。1997 年より京都女子大学非常勤講師。2015 年より現職。専攻：日本近代文学。

7-1. 論文

新井由美 「泉鏡花「高野聖」論―典拠としての『鳥留好語』―」『女子大國文』155, 京都女子大学国文学会, pp. 31-50, 2014/9

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

7-4. 口頭発表

新井由美 「邦枝完二「おせん」—小村雪岱の挿絵を読む」, 文学と美術研究会, コラボ産学官, 2016/3

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015 年度～2016 年度、研究活動スタート支援、代表者:新井由美

課題番号:15H06350

研究題目:文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—

研究経費:2014 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

小村雪岱の挿絵に関するこれまでの研究は、多くが美術の分野からの言及に偏っている。雪岱は文学に造型の深い画家であるにも拘わらず、その挿絵は小説との双方向の関わりという観点からは殆ど論じられてこなかった。挿絵は文学の従属物ではなく、小説の新しい読みの地平を切り拓くための有効な手段である。本研究は雪岱の挿絵をモデルケースとして、小説本文と挿絵の相乗的な関わり方について分析し、ひいては文学と美術という異分野交流のあり方を明らかにすることを目的とするものである。

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-13 比較文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 1 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：清水 康次

准教授：橋本 順光

助教：小橋 玲治

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
17	5	3	0	0	0	1	0

*うち留学生 4名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	5	1	3	0
2015	7	1	0	2
計	12	2	3	2

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部・大学院の教育においては、講義・演習で、比較文学の基礎的概念および文学批評の主要な分析方法が吸収できることを目標とする。その際に、とりわけ英語文献を中心にして、文学史・歴史の流れを押さえたうえで、小説を精読し、関連の外国語文献を参照しながら、レポート、レビュー、論文が執筆できるよう心がける。関連して、学術的な口頭発表と質疑応答の習得も視野に入れ、論文執筆に必要な先行研究の整理、問題の発見、調査、執筆にかかわる総合的な能力を涵養する。

大学院においては、上記に加えて、研究計画の立案と実行をできるかぎり院生同士で議論しながら確認を行い、TA・RAなどの機会も積極的に利用することで、コミュニケーションや指導にかかわる総合的な能力の養成を目標とする。研

研究室においては、比較文学の入門や教育に資する文献を広く収集・紹介し、講読を奨励する。

2. 研究

教員は毎年最低 1 本の論文を執筆、大学院生は毎年最低 1 回の学会発表をおこなうとともに、教員・大学院生は、国内・国外での研究発表および論文投稿に努力し、あわせて紀要・報告書の執筆も推進することとを目標とする。大学院生には、機会に応じて学内・学外の研究資金や渡航奨励プログラムへの応募を奨励するとともに、教員も適宜、共同プロジェクトの企画応募を努力するよう心がける。また、研究室の設備と備品の点検に留意するとともに、とりわけ図書について研究に支障のないよう収集に心がけ、研究環境の維持・改善に努力し、研究の視野と可能性を拡大することとを目標とする。

3. 社会連携

研究成果や資料を広く一般に公開するよう努力し、研究成果を社会に還元する書物の刊行も積極的に推進するよう心がける。学会や各種団体の委員などの依頼や、学会・研究会などの開催校としての受け入れ依頼にも、できるかぎり応じ、研究成果の普及を図るよう、一般向けの公開講座や研究会などにおいても積極的に発表に努力することとを目標とする。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

講義・演習では、主として英語圏と明治大正期の資料を使用し、適宜、現代の大衆文化の事例に言及しながら、比較文学の基礎から応用までの教育を行った。その際には、文学批評の基本概念と応用の習得を徹底した。学部生向けの授業でも英書を中心に外書講読の演習を必ず受講するよう奨励した。学部・大学院ともに口頭発表と論文をできるかぎり各受講生同士で論評するよう徹底させ、質疑応答の練習を行った。また博士論文作成演習の一部を延長して、その後半部分で卒業論文作成演習を合同で行い、基礎的な技術や知識の共有とともに、院生の指導能力の涵養に努めた。

2. 研究

院生は、ほぼ全員が 1 本以上の論文を執筆し、学会発表や研究会での発表を行い、積極的に学会に参加した。この 2 年で教員は、目標以上の多数の論文を執筆した。科学研究費助成を継続して研究を行い、共同研究を組織したほか、研究分担者として複数の共同研究に参加した。教員による共同研究申請のほか、大学院生の日本学術振興会の研究員、学内外の助成やプログラムなどにも毎年申請した。その結果、院生の多くが海外で調査および研究発表を行った。研究室の設備・備品は定期的に点検した。メーリングリストや授業などで、比較文学に関係する内外の書籍を幅広く推薦・紹介しあい、収集と講読とともに、最新の研究動向をふまえるよう心がけた。

3. 社会連携

外部から講師を招き、共同研究の成果発表として一般に開かれた複数のワークショップやシンポジウムを行った。その際には院生、学部生、教員が積極的に協力し、発表を行った。この 2 年間で教員は、非会員にも開かれた学会や一般向けの会合で多数発表し、一般向けの論考を寄稿したほか、積極的に研究成果の還元を図った。さらに日本比較文学会、国際比較文学会 (ICLA)、ジャポニズム学会、日本ヴィクトリア朝文化研究学会、日本英文学会の編集委員や理事など学外の職務に従事し、運営と社会還元に努力した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、所期の目標は十分に達成できたと考えられる。

2. 研究

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前述の活動の結果、初期の目標は十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	2	0	2
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

ガルワース・リンダ「セクシュアリティのハイブリディティーオリエンタリズム、ポストモダニズム、ポストフォーデイズムのロシア文学における〈日本〉一」

主査：橋本順光准教授 副査：清水康次教授・北村卓教授（言語文化研究科）・溝渕園子准教授（広島大学）

小橋 玲治「日本近代における女性教師表象の変容と展開」

主査：橋本順光准教授 副査：清水康次教授・北村卓教授（言語文化研究科）・中直一教授（言語文化研究科）・平石典子准教授（筑波大学）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	3(3)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

計	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)	3(3)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	2	3	0	0	5
2015	2	1	3	0	0	6
計	2	3	6	0	0	11

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

サワシユ晃子「20 世紀初頭の英国における日本製輸出用キモノの流通と日英業者の相互交渉について」、『デザイン理論』第 65 号, 意匠学会, pp.15-29, 2015/3 (査読有)

内藤貴夫「明治下層記録文学における貧民への視線—桜田文吾と松原岩五郎の対比を中心に—」、『日本研究論集』第 10 号, チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座・大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室, pp.58-74, 2014/10 (査読有)

内藤貴夫「松原岩五郎『最暗黒の東京』における材源研究 : Henry Morton Stanley, *In Darkest Africa* の影響を中心に」, 『比較文化研究』No.115, 日本比較文化学会, 2015/2 (査読有)

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士後期〕

サワシユ晃子「20 世紀初頭の英国大衆小説におけるキモノとキモノ姿の女性表象の変化—キモノブームという視点から」, 日本比較文学会第 76 回全国大会, 成城大学, 2014/6

サワシユ晃子「20 世紀初頭の英国における輸出用キモノの流通と日英業者の相互交渉について」, 意匠学会第 219 回研究例会, 大阪工業大学うめきたナレッジセンター, 2014/9

サワシユ晃子「英国内に現存する日本製輸出用キモノ—20 世紀初頭のキモノブームと高島屋」, 「立命館大学アート・リサーチセンターシンポジウム「つたえる力—京都の伝統工芸—」, 立命館大学, 2014/10

サワシユ晃子“Japan-British Relations in Fashion: Kimonos for the British Market at the Beginning of the 20th Century,” International Joint Seminar: Bridging Britain and the far East (JSPS Transboundary Fashion Seminar and AHRC Fashion and Translation: Britain, Japan, China, Korea), 文化学園大学, 2015/2

内藤貴夫「日英下層記録文学の比較研究—桜田文吾・松原岩五郎における英国の貧困表象受容—」, 阪大比較文学会シンポジウム「環流の比較文学のために—日英の還流から多国間の環流へ—」, 大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室, 2014/9

【2015 年度】

〔博士前期〕

関屋弥生“Relationship between Russian Drama and Japanese Drama,” Financial University under the Government of the Russian Federation, Russia, 2016/2

朴秀浄「三島由紀夫によるアンダーグラウンド文化の受容と変容—地下出版雑誌との関わりを中心に—」, 阪大比較文学会シンポジウム「＜表象＞と＜文化＞で見る比較文学」, 大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室, 2015/8

三好晃俊「江戸川乱歩の美容整形観—『幽霊塔』を中心に—」, 阪大比較文学会シンポジウム「＜表象＞と＜文化＞で見る比較文学」, 大阪大学大学院文学研究科比較文学研究室, 2015/8

〔博士後期〕

陳潮涯「国木田独步訳の『聊齋志異』」, 日本比較文学会関西支部第 51 回関西大会, 大阪大学, 2015/11

林姿瑩「大岡昇平の戦記物における「幸福」について—同時代作品との比較を視野に—」, 日本近代文学会（第 2 回）国際研究集会「日本近代文学のインターセクション」, 早稲田大学, 2015/11

林姿瑩「大岡昇平の初期創作活動における戦記物の意味—『サンホセの聖母』を中心に—」, 2015 年度台湾日本語文学国際学術研討会「日本語文学研究における「S 字カーブ」への挑戦」, 輔仁大学（台湾）, 2015/12

(3) その他(書評・翻訳など)

【2015 年度】

〔博士後期〕

陳潮涯「芥川龍之介と分身之病」(書評), 「語文教学与研究」pp.18-20, 2015/8

陳潮涯「吟詠富士山の詩總是能被一眼認出」(コラム), 「東方早報・上海書評」, 2015/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 1 名 (計 1 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

小橋 玲治 : 大阪大学大学院文学研究科比較文学・国語学・中国文学研究室助教

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2014 年度：0 名 2015 年度：1 名

＜内訳＞ 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2014 年度：1 名 2015 年度：1 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

2014 年 9 月 26 日 阪大比較文学会シンポジウム「環流の比較文学のために―日英の還流から多国間の環流へ―」

2015 年 8 月 7 日 阪大比較文学会シンポジウム「＜表象＞と＜文化＞で見る比較文学」

2015 年 11 月 28 日 日本比較文学会関西支部第 51 回関西大会

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 清水 康次 教授

1954 年生まれ。京都大学文学部（国語学国文学専攻）卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程（国語学国文学専攻）修了。博士（文学）（京都大学、1995）。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009 年 10 月より現職。
専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「武者小路実篤「それから」に就て」論—実篤の問題意識と漱石作品との隔たり— 京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』83-11, 臨川書店, pp. 1-16, 2014/11

清水康次 「「玄鶴山房」―「暗澹」たる日常の形象化」宮坂覺(編)『芥川龍之介と切支丹物―多声・交差・越境』翰林書房, pp. 102-114, 2014/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:清水康次

課題番号:24520212

研究題目:雑誌『白樺』における文学の営為についての総体的な研究

研究経費:2014 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

明治 40 年代から大正期にかけて刊行された同人雑誌『白樺』についての研究は、これまで文学史的記述や画壇への影響の指摘に限定されたものであった。この研究では、『白樺』の活動についての、より領域横断的な、総体的な把握をめざす。『白樺』における文学と美術との共存、文壇及び画壇への提起や提言、同人たちの意識など、さまざまな情報の受信と発信をメディアとしての側面にも注目しながら捉え、広く当時の時代状況の中での位置づけをはかるものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 橋本 順光 准教授

1970 年生。大阪大学文学部英文学専攻卒業(1994)、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究修士課程修了(1997)、ランカスター大学大学院歴史研究科博士課程修了 Ph.D., (2008)。2001 年 4 月より横浜国立大学教育人間科学部講師、2009 年 4 月より現職。専攻:比較文学・英国地域研究。

2-1. 論文

橋本順光「山田長政の秘宝譚—『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説まで—」『日本研究論集』, 11, チュラーロンコーン大学文学部日本語講座, pp. 99-131, 2015/10

橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン(4)我楽多宗への参加と蓮花文様の転用」『民藝』, 750, 日本民藝協会, pp. 52-57, 2015/6

橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン(3)神智学との出会い」『民藝』, 749, 日本民藝協会, pp. 54-59, 2015/5

橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン(2)柳宗悦との出会いと朝鮮半島への旅」『民藝』, 748, 日本民藝協会, pp. 56-60, 2015/4

橋本順光「ポカホンタス伝説としての山田長政物語—明治の小説から大映の映画まで—」『タイ国日本研究国際シンポジウム 2014 論文報告書』, チュラーロンコーン大学文学部日本語講座, pp. 157-175, 2015/3

- Hashimoto, Yorimitsu, “Transnational Legacy of the Arts and Crafts Movement: George Birdwood, Soetsu Yanagi and Gurcharan Singh”『アーツ・アンド・クラフツと民藝ーウィリアム・モリスと柳宗悦を中心とした比較研究ー』, 科研基盤研究(A)最終報告書(研究代表者・藤田治彦), pp. 89-98, 2015/3
- Hashimoto, Yorimitsu, “ホイッスラーが切り結んだ日本ー橋・花火・禅ー”『ジャポニスム研究別冊』, 34, ジャポニスム学会, pp. 29-38, 2015/3
- 橋本順光 「インドの陶芸家グルチャラン・シン(1) 柳宗悦との出会いと朝鮮半島への旅」『民藝』, 747, 日本民藝協会, pp. 52-56, 2015/3
- 橋本順光 「ディキンソンの『中国人からの手紙』(1901)とアジアでのその受容」『待兼山論叢 文学篇』, 48, 大阪大学文学研究科, pp. 1-17, 2014/12
- 橋本順光 「手塚治虫に見る映画『王様と私』の流用ー「孔雀貝」と「火の鳥」ー」『日本研究論集』, 10, チュラーロンコーン大学文学部日本語講座, pp. 92-116, 2014/12

2-2. 著書

- 橋本順光(共著)「小説」『日本文化事典』丸善, 2p., 2015/12
- Hashimoto, Yorimitsu(編), *Caricatures and Cartoons, 1890-1905: A History of the World, 3 volumes*, Editon Synapse, 英文・邦文序論, 25p., 2015/9
- 橋本順光(字幕監修)『アンドリュース・マーのヒストリー・オブ・ザ・ワールド DVD 全8巻』丸善, 2014/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 小さな天使と悪魔」『産経新聞関西版朝刊』産経新聞社, pp. 17-17, 2016/2/1
- 橋本順光 「ロータリー奨学生として英国で学んだこと ウサギの駆除と『宇宙戦争』」『岡山ロータリークラブ月報』(岡山ロータリークラブ), 384, pp. 17-18, 2015/12
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 ミイラ男と輪廻転生」『産経新聞関西版朝刊』産経新聞社, pp. 12-12, 2015/12/7
- 橋本順光, 石上亜紀, 矢野明子 他(共著)「「春画の学際性をめぐって」」『ヴィクトリア朝文化研究』, 13 号, 日本ヴィクトリア朝文化研究学会, pp. 225-233, 2015/11
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 18 人形と心中」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2015/10/1
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 17 不純な動機と教養小説」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2015/8/6
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 16 『となりのトトロ』と梨取り兄弟」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2015/6/4
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 15 さよならは少し死ぬこと」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2015/4/2
- 橋本順光 (書評)「松村敏彦『ジョウゼフ・コンラッド 比較文学的研究と作品研究』(大阪教育図書 2012)『比較文学』, 58 巻, 日本比較文学会, pp. 94-96, 2015/3
- 橋本順光 (メールインタビュー)「教員インタビュー」『阪大生活』(2014), pp. 26-26, 2015/3
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 14 食は人なり」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2015/2/26
- 橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 13 前世からの恋人と生まれ変わり」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp.

4-4, 2015/1/29

橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 12 愛すべきタコのお話」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/12/25

橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 11 国際結婚のお話と山田長政」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/11/27

橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 10 フランケンシュタインとアンパンマン」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/10/30

橋本順光 (書評) 「*China and the Victorian Imagination: Empires Entwined* (2013); *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art* (2013)」『ヴィクトリア朝文化研究』12, ヴィクトリア朝文化研究学会, pp. 167-174, 2014/10

橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 9 入れ子の世界」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/9/25

橋本順光 「8/28 繰り返されるパターン 物語の系譜学 8 タイムトラベルの児童文学」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/8/28

橋本順光 「7/31 繰り返されるパターン 物語の系譜学 7 禁断の恋と毒娘」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/7/31

橋本順光 「6/26 繰り返されるパターン 物語の系譜学 6 無人島に流されて」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/6/26

橋本順光 「5/29 繰り返されるパターン 物語の系譜学 5 クラーケンの襲撃とダイオウイカ」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/5/29

橋本順光 「繰り返されるパターン 物語の系譜学 4 ボランティアとドラえもん」『産経新聞関西版夕刊』産経新聞社, pp. 4-4, 2014/4/24

2-4. 口頭発表

橋本順光 (招待講演)「一輪の花の博物誌ーブレイクの詩からスキマの植物まで」阪大比較文学会 2015 年度卒論発表会, 阪大比較文学会, 大阪大学文学研究科, 2016/2/8

橋本順光 (招待講演)「タコのお話の変身ーピティポー・ウォーターティヤーポー」『タコの変身』(2013)から映画『ペンギンズ FROM マダガスカル』(2014)までを例にしたマンガ研究の試みー」シーナカリンウィロート大学人文学部日本語講座特別講演会, タイ国シーナカリンウィロート大学, 2015/12/14

橋本順光 (招待講演)「素材としての文楽ー映画『サヨナラ』から小説『仏果を得ず』まで」日本比較文学会第 51 回関西大会シンポジウム「関西・浄瑠璃・文学」, 日本比較文学会関西支部, 大阪大学, 2015/11/28

橋本順光 (招待講演)「ロータリー奨学生として英国で学んだこと ウサギの駆除と『宇宙戦争』」岡山ロータリークラブ例会, 岡山ロータリークラブ, ホテルグランヴィア岡山, 2015/11/11

Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)「An Irish Theosophist's Pan-Asianism? James Cousins, Gurcharan Singh and British Secret Agents」, Theosophy Across Boundaries: Theosophy Across Boundaries, Heidelberg University, Heidelberg Center for American Studies, 2015/9/25

橋本順光 (招待講演)「大鳥圭介の『暹羅紀行』と 1875 年」国際シンポジウム「日タイ交流史研究の新地平ー大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)から広がる 140 年ー」国際シンポジウム「日タイ交流史研究の新地平ー大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)から広がる 140 年ー」タイ国チュラーロンコーン大学, 2015/9/4

橋本順光 「比較文学・大鳥圭介国際シンポジウム・万国風刺漫画大全」『まちのラジオ』大阪大学社会学連携事業番組, 箕面 FM,

2015/8/13

橋本順光 (招待講演)「インディアン・ロープ・マジックの死と再生 聊斎志異からジョン・コリアまで」阪大比較文学会シンポジウム「表象と文化で見る比較文学」, 阪大比較文学会, 大阪大学文学研究科, 2015/8/7

橋本順光 (招待講演)「蛸をめぐる図像の越境と海賊行為ー『山海名産図会』から『喜能会之故真通』を中心にー」国際日本文化研究センター共同研究会: 視覚文化における越境と海賊行為: 文化研究の軌道修正にむけて, 国際日本文化研究センター, 2015/7/30

Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“Profile of Sea Raider: Octopus, Caricature and the Yellow Peril”, Fear in/of Literature, Research Centre for Communication and Culture Universidade Católica Portuguesa, Universidade Católica Portuguesa, Lisbon, 2015/7/2

橋本順光 (招待講演)「山田長政の秘宝譚ー『日東の冒険王』からオーストラリアの伝説までー」第6回大阪大学・チューラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学, 2015/6/27

橋本順光 (招待講演)「台所から世界を変える/食べる/考える 大英帝国ブディングとローストビーフ」大阪大学×大阪ガス「アカデミクッキング」vol.57, 大阪大学 21 世紀懐徳堂×大阪ガス, 大阪ガスクッキングスクール千里, 2015/3/25

橋本順光 (招待講演)「英国外交文書にみるジェイムズ・カズンズ」特別講演会「秘教的コネクションと近代世界」: 秘教的コネクションと近代世界, 京都大学人文科学研究所・神智学研究会, 京都大学人文科学研究所, 2015/2/27

橋本順光 (招待講演)「Every Time We Say Goodbye, I Die a Little'ー『長いお別れ』と『草の花』ー」阪大比較文学会 2014 年度卒論発表会, 阪大比較文学会, 大阪大学文学研究科, 2015/2/12

Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“Tentacles Strike Back: From Multi-Armed Monster to Model Minority?”, Utsuwa et utsushi - Berceau du temps, Passage des ames: Utsuwa et utsushi - Berceau du temps, Passage des ames, Maison de la culture du Japon a Paris (パリ日本文化会館), 2015/1/23

Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“From Grasping Monster to Gifted Immigrant? The Changing Cultural Representation of the Octopus”, Shanghai Normal University 2014 International Conference of Intercultural Communication : Conflict Management and Intercultural Harmony, Shanghai Normal University (上海師範大学), 2014/12/29

橋本順光 「ロバートソン・スコットと民藝運動」アーツ・アンド・クラフツと民藝: 科研基盤研究 (A)「アーツ・アンド・クラフツと民藝」(藤田治彦代表) 成果発表シンポジウム, 大阪大学美学研究室, 大阪大学文学研究科, 2014/12/21

橋本順光 (招待講演)「ホイッスラーが切り結んだ日本ー橋・花火・禅ー」ジャポニズム学会公開シンポジウム「ジャポニズムの全貌ーホイッスラーから何が始まったのか?」, ジャポニズム学会, 京都国立近代美術館, 2014/10/4

橋本順光 (招待講演)「英国外交官の黄禍論小説 ジョン・パリスの『キモノ』(1921)とそのモデル稲・プリנקリー」文学研究科共同研究成果発表シンポジウム「環流の比較文学のためにー日英の環流から多国間の環流へー」, 阪大比較文学会, 大阪大学文学研究科, 2014/9/26

Hashimoto, Yorimitsu, (招待講演)“Chinese Characters for 'a Higher Phase of Civilisation': G. L. Dickinson's Idealistic View of China and Its Appropriation in Asia”, The 4th World Conference on Sinology, Renmin University of China (中国人民大学), Beijing, 2014/9/6

橋本順光 (招待講演)「手塚治虫における四谷怪談の変容ー傷の復讐から蛇女房の物語へー」第 8 回怪異怪談研究会, 怪異怪談研究会, 駒澤大学, 2014/8/31

橋本順光 (招待講演)「ボカホンタス伝説としての山田長政物語ー明治の小説から大映の映画までー」タイ国日本研究国際シンポジウム, タイ国チューラーロンコーン大学, 2014/8/26

橋本順光 (招待講演)「触手の移りと写し? タコとイカの表象をめぐる引用と流用」21 世紀 10 年代日本の軌道修正第 4 回国際日

本文化研究センター共同研究会、国際日本文化研究センター、2014/7/20

橋本順光（招待講演）「宝探しの比較文学」夢ナビライブ（東京会場）、フロムエー、東京ビッグサイト、2014/7/12

橋本順光「文明の冷却をめぐる想像力の系譜—氣象兵器としてのメキシコ湾流から原子爆弾まで—」日本比較文学会第76回全国大会シンポジウム「未来の記憶—比較文学と核時代」、日本比較文学会、成城大学、2014/6/15

橋本順光（招待講演）「欧州航路と国際理解—大英帝国と和辻の『風土』—」阪神シニアカレッジ、2014/6/6

橋本順光（招待講演）「ジャポニズムと黄禍論」阪神シニアカレッジ、2014/6/6

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013年度～2015年度、基盤研究(C) 一般、代表者：橋本順光

課題番号:25370413

研究題目：世紀転換期の英国における黄禍論とその図像に関する比較文学的研究

研究経費:2014年度	直接経費	1,200,000円	間接経費	360,000円
2015年度	直接経費	1,100,000円	間接経費	330,000円

研究の目的：

本研究は、世紀転換期の英国における黄禍論について従来の研究を総合し、以下の3つの作業を通じて、論説、小説、図像の相互交渉を解明する。(1)黄禍論をめぐる日英の外交文書の発掘と照合を行う。これにより、過大にあるいは過小に評価されてきた日本の対外宣伝の成果について実態を明らかにし、英国の検閲や政策との関連を探る。(2)大アジア主義と黄禍論(小説)の相関を指摘する。日本とインドの接近にともなうアジア主義を極度に警戒した英国では、詳細な外務省報告と関連報道があり、それらと黄禍論小説との共通点を探る。(3)黄禍の寓意図をめぐる受容と転用を発掘する。幾度となく書き換えられたクナックフスによる「黄禍」の寓意画は、宣伝が政府の意図に反して逆用される最初期の例であり、日英における受容史を発掘すると同時に、黄禍論をめぐる日英の工作と錯綜との連続性を指摘する。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2014年度～2016年度、6：研究助成、助成金獲得者：橋本順光

助成金名：未来知創造プログラム

研究題目：日タイ文化交流史の研究—山田長政から柳澤健まで—

助成団体名：大阪大学

助成金額:2014年度	直接経費	846,000円
2015年度	直接経費	1,034,000円

研究の目的：

山田長政は、日タイ交流史で必ず言及される象徴的存在だが、これほど偶像化した経緯は十分に研究されていない。そこで、これまで見落とされてきた以下の4つの観点から、山田長政像の変遷と柳澤健を中心とする文化外交との関連を解き明かし、それにより日タイ文化交流史を、広義の文化交流のモデルとして抽出したい。第1に、大鳥圭介を好例とするように、江戸から明治における漢文資料を中心にして、長政像の連続性ないし断続性を発掘する。第2に、長政の偶像化の理由を安易に戦時体制に求めず、松岡洋右から外務省を追放された元外交官・柳澤健の文化外交から、その重層性こそ解き明かす。第3に、長政についての英語

資料から、長政を主人公にした小説が日本のポカホンタス伝説として機能した可能性へ注目する。第4に、タイにおける資料や長政像と、現代日本におけるタイ・イメージの双方の比較を行う。

2-7-2. 2014 年度～2014 年度、6：研究助成、助成金獲得者：橋本順光

助成金名：文学研究科共同研究

研究題目：近代日本における対外観とその環流をめぐる総合的研究

助成団体名：大阪大学文学研究科

助成金額：2014 年度 直接経費 545,000 円

研究の目的：

近代日本における対外観はすでに多くの研究が積み重ねられてきており、第一の目的として、それらをふまえて対象地域との往「還」だけではなく、他の地域や時代との複雑な交渉と転移を繰り返しながら、循環する現象として明らかにすることを試みる。たとえば明治以降の日本では、タイはインドとならぶ仏教国としてみなされたが、そのアジア主義的関心は、タイが英領インドの隣国であったことと決して無関係ではない。そんな日本のアジア主義がインドの反英運動と不即不離の関係にあるとは周知のことだが、アジア主義との関連で、いち早く反英闘争を開始していたアイルランドがインドおよび日本で大きな関心を持たれたこと、またインドでは従来と異なり、ギリシアからの影響やその近接性ではなく、東アジアとの紐帯を強調するようになったことは、タイ・イメージの変化と複合的に研究されることはなかった。そこで第二の目的として、日タイにおける還流の事例を主軸に、イギリス帝国やアイルランド、それにギリシアの事例研究を積み重ね、多国間の環流を指摘したい。そうすることでひいては「日本」という境界の多層性を明らかにでき、複数の共同研究へと発展することも予想されよう。

2-7-3. 2015 年度、5：その他補助金、助成金獲得者：橋本順光

助成金名：平成 27 年度国際合同会議助成(前期)

研究題目：国際シンポジウム「日タイ交流史研究の新地平―大鳥圭介の『暹羅紀行』(1875)から広がる 140 年―」タイ国チュラーロンコーン大学

助成団体名：大阪大学

助成金額：2015 年度 直接経費 800,000 円

研究の目的：

大鳥圭介は、適塾で学んだ後、1875 年、日本の公使節として初めてタイを訪れた。明治日本初のタイ研究といえる大鳥の報告書『暹羅紀行』(1875)が刊行されて、2015 年は、140 周年となる。タイ国チュラーロンコーン大学にて大阪大学 ASEAN センターと共催で国際シンポジウム(9/4・金)とスタディツアー(9/5・土)を開催し、これまで十分に認知されてこなかった大鳥の『暹羅紀行』の重要性を指摘するとともに、大鳥の足跡とそこから始まった日タイ交流史の諸相を発掘する。未来知創造プログラムの成果発表に加えて、内外の専門家に、『暹羅紀行』の文脈、大鳥の見た当時のタイ、日タイにおける山田長政の再評価とその変遷、日泰文化会館の成立、日本文学におけるタイ表象、などについて発表を御願いし、意見交換と成果報告を図る。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

International Comparative Literature Association(国際比較文学会)・理事, 2013 年 7 月～現在に至る

日本比較文学会・関西支部庶務委員, 2013 年 6 月～現在に至る

日本比較文学会・理事, 2013 年 6 月～現在に至る

日本比較文学会・国際活動委員, 2013 年 6 月～現在に至る

日本英文学会・編集委員, 2013 年 4 月～2015 年 3 月

日本比較文学会・編集委員, 2011 年 4 月～2015 年 3 月

ジャポニスム学会・理事, 2011 年 4 月～2015 年 3 月

日本ヴィクトリア朝文化研究学会・編集委員, 2009 年 4 月～2016 年 3 月

日本比較文学会・関西支部幹事, 2009 年 4 月～現在に至る

3. 小橋 玲治 助教

1981 年生。2013 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程(比較文学)単位取得退学。博士(文学)(大阪大学、2016 年)。
2015 年 4 月より現職。専攻:比較文学／日本近代文学。

3-1. 論文

小橋玲治「明治期における女性教師の「連帯」と「孤独」—小笠原白也『女教師』(1909 年)を中心に—」アッタヤ・スワンラダー(編集長)『日本研究論集』12, チュラーロンコーン大学・大阪大学, pp. 17-36, 2015/10

小橋玲治「「祭祀」としての女性教師殉職—二人の女性教師の死の意味」『比較文化研究』(日本比較文化学会), 117, pp. 27-40, 2015/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

小橋玲治「南方派遣日本語教員としての女性教師表象—織田作之助を中心に—」2015 年度比較文学研究室内卒業論文発表会, 大阪大学比較文学研究室, 大阪大学文学部, 2016/2

小橋玲治「Mrs. Henry Wood, East Lynne の翻案における改変—伊原青々園「恋の闇」(1905 年)、「子煩悩」(1906 年)を中心に—」阪大比較文学会シンポジウム「〈表象〉と〈文化〉で見る比較文学」, 大阪大学比較文学研究室, 大阪大学文学部, 2015/8

小橋玲治「女性教師たちの「連帯」／「孤立」—明治期の小説を中心に—」第 6 回 大阪大学・チュラーロンコーン大学日本文学国際研究交流集会, 大阪大学日本文学研究室・チュラーロンコーン大学文学部東洋言語学科日本語講座, 大阪大学会館 アセンブリー・ホール, 2015/6

小橋玲治「有島武郎「一房の葡萄」の言説空間—大正十一年という磁場—」2014 年度日本近代文学会関西支部秋季大会, 日本近代文学会関西支部, 京都教育大学, 2014/11『日本近代文学会関西支部会報』21, pp. 6-7, 2015/5)

小橋玲治「石川啄木の女性教師表象の「新しさ」—「雲は天才である」(1906 年)を中心に—」日本比較文学会第 50 回関西大会, 日本比較文学会関西支部, 広島大学, 2014/11

小橋玲治「ブラジルにおける日本語文化—松井太郎「うつろ舟」を中心に—」言語圏の文学」第 10 回研究会, 「言語圏の文学」研究会, 関西学院大学梅田キャンパス, 2014/11

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-14 中国文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：高橋 文治、浅見 洋二

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
8	1	1	1	1	1	1	0

*うち留学生 5名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	0	1	0	0
2015	3	1	1	0
計	3	2	1	0

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

本専門分野は、主に清朝時代以前の漢語文献について、文言体と白話体の別なく、文献学的手法を用いて正確な訓詁を与える点に教育の主眼が置かれている。また、研究室内の教育・研究活動をより活性化するために、カリキュラムとは別に、教員スタッフを中心に研究会も組織されている。

こうした体制の成果として、近年、大学院生の学力はかなり向上し、学外からも一定の評価を受けるに至っている。たとえば、大学院生の論文は学会誌にも掲載されるようになっている。

だが、一方で、学部・MC・DCの学力に合わせた、段階的なカリキュラム編成は必ずしも十分には整備されていない。これは主にスタッフの不足による。

今後は、大学院生、学部生ともに学生数を増やし、学年別に近いカリキュラム編成を取れるよう、努力したい。

2. 研究

教室構成員はそれぞれの分野で研究をすすめ、大学院生の論文の学会誌への掲載も見られる。ただし、大学院生に関しては在籍者の減少により、論文掲載の数は減少している。

海外、学外の研究者との連携も維持しており、教員の海外出張も行われている。

また、科学研究費の取得にもつとめ、教員スタッフは「基盤研究 (B)」、「基盤研究(C)」等を取得している。

研究活動という面においては、本教室の教員は十分活性化されていると言えよう。今後もこの方向を維持できるよう努力し、学生獲得にも努力したい。

3. 社会連携

研究成果に関する報道機関の取材、執筆依頼等には積極的に協力することとし、研究室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とした。また、研究室編著の学術的一般書等を刊行し、教員等が公開講座や講演会等に積極的に対応することによって、研究成果や専門知識の社会への還元を図りたい。その他、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼にも、積極的に対応したい。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

演習においては、基礎的な語学力の習得を意識した教育をおこない、講義においては、専門的知識の習得とその応用に主眼を置いた教育を行った。大学院生の研究計画・研究報告については、通常の授業時間ではスケジュールや研究テーマの絞り込みをはじめ、研究テーマに即した事項を中心にディスカッションを行い、年度の初めと終わりに演習で発表させ、指導するほか、学会発表や論文の執筆に際しても綿密な指導をおこなってきた。

2. 研究

教員は科学研究費を取得して国内外の学会で研究発表を行ったほか、国内外の学術誌に論文を発表した。また、教員は日本中国学会や東方学会で専門委員等をつとめるなど、各学会において主導的活動を行った。

3. 社会連携

教員が年間で 10 回程度の公開講座・講演会を実現した。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標はおおむね達成できたと考えている。卒業学生・修了大学院生以外の学生たちに関しても、中国学にかかわる基礎的知識、思考法について、教育実践によって一定の成果を獲得していると判断し得る。掲げた目標はおおむね達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・博士後期課程の大学院生については、目標はほぼ達成された。特に教員の研究活動については、この十年、一貫して高い水準を保っている。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2015	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
計	2(2)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	2(2)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	1	0	0	0	1
2015	1	0	0	0	0	1
計	1	1	0	0	0	2

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

趙蕊蕊「蘇軾の樂園と『自娛』『待兼山論叢』文学篇 48, 大阪大学文学会, pp. 1-16, 2014/12

【2015 年度】

〔博士後期〕

趙蕊蕊「『千年調』考—陳師道を中心として—」『待兼山論叢』文学篇 49, 大阪大学文学会, pp. 1-16, 2015/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

黄鶴「仁宗認母の物語—包拯譚の一系譜—」第 13 回名古屋大学・大阪大学中国学研究交流会, 大阪大学文学部, 2014/11/15

【2015 年度】

〔博士後期〕

趙蕊蕊「宋代“以食喻詩”現象及原因探求」中国宋代文学学会第 9 届年会及宋代文学国際検討会, 中国宋代文学学会, 杭州師範大学人文学院, 2015/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 1 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 1 名 大学院 : 0 名 (計 1 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2014 年度：1 名 2015 年度：0 名

＜内訳＞ 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 8 名

2014 年度：2 名 2015 年度：6 名

9. 刊行物

なし

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

大阪大学国際共同研究促進プログラム学術講演会 2015 年 8 月 1 日 大阪大学大学院文学研究科会議室

伍曉蔓（四川大学副教授・大阪大学特任准教授）「『超然台賦詠—基於宋代詩学流變的觀察—」

侯体健（復旦大学副教授・大阪大学特任准教授）「筆記与詩文評—『愛日齋叢抄』文学史価値発覆—」

甲斐雄一（日本学術振興会特別研究員 P D）「陸游「書触目」詩について」

李由（南京大学博士課程・九州大学特別研究生）「元祐科場与黄庭堅的文章学」

大阪大学国際共同研究促進プログラム学術講演会 2016 年 1 月 28 日 大阪大学大学院文学研究科会議室

李貴（上海財經大学教授・大阪大学特任准教授）「靈壁——宋朝の小縣邑與大時代——」

沈凡凡（吉林大學教授・関西学院大學客員研究員）「《全唐诗》與《全宋词》創作接受史研究漫談」

楊理論（西南大學教授・大阪大學外国人招聘研究員）「《江村秋曉圖》題跋研究」

駱曉倩（西南大學教授・大阪大學外国人招聘研究員）「試論兩宋宗室的書畫傳統」

黄小珠（大阪大學外国人招聘研究員）「論蘇軾的“詩人之窮”觀」

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

元典章文書の語学史的研究

唐宋詩学研究会

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 高橋 文治 教授

1953 年生。1982 年、京都大学大学院文学研究科博士課程指導認定退学。文学修士（京都大学、1979 年）。追手門学院大学講師、同助教授、同教授を経て、2000 年 10 月現職。専攻：白話文学史。

1-1. 論文

なし

1-2. 著書

荒木浩, 松菌斎, 高橋文治, 他(共著)『夢見る日本文化のパラダイム』法蔵館, pp. 367-395, 2015/5

浅見洋二, 高橋文治, 谷口高志(共著)『皇帝のいる文学史—中国文学概説—』大阪大学出版会, pp. 213-328, 2015/4

荒木浩, 高橋文治, 鈴木貞美, 他(共著)『中世の随筆—成立・展開と文体—』竹林舎, pp. 33-53, 2014/8

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

高橋文治 (招待講演)「枕の上の金詞をめぐって」枕の上の金詞をめぐって, 京都大学中国文学会, 京都大学, 2015/7

高橋文治 (招待講演)「山西省における女神廟の形成と展開」山西省における女神廟の形成と展開, 東方学会, 京都国際会館, 2014/5『国際当方学会議紀要』59, pp. 149-150, 2014/12)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

高橋文治 第八回東方学会賞, 一般財団法人東方學會, 1989/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋文治

課題番号:24520396

研究題目:宋金元期の墳墓と戯曲文学

研究経費:2014 年度	直接経費	1,900,848 円	間接経費	24,000 円
2015 年度	直接経費	344,781 円	間接経費	0 円

研究の目的:

結婚や葬送、出産や相続、親族殺人といった家族に関わる諸問題が元朝期の戯曲文学にどのように描かれており、それが当時の墓制や法制度とどのように関連しているのかを分析することによって、元朝期の戯曲文学が「宗族」をめぐるいかなる社会通念を背景に生み出され、その上演が血族集団や共同体においてどのような機能を果たしたかを考察する。

1-6-2. 2015 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:高橋文治

課題番号:15K02436

研究題目:神廟祭祀と唐代文学

研究経費:2015 年度	直接経費	1,600,000 円	間接経費	480,000 円

研究の目的:

唐代の神廟祭祀が歴史的にはどのように変遷し、その変遷が唐代文学の潮流とどのように関連したかを明らかにすることによって、本研究課題は、共同体の紐帯たる祭祀観念、ならびにそこから派生するさまざまな価値や制度が唐代に大きく変化し、その変化が文学作品においては、神々の悲哀や孤独、放浪や不在として描かれるようになることを検証する。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

東方学会・学術委員, 2009 年 10 月～現在に至る

日本道教学会・評議委員, 1995 年 10 月～現在に至る

2. 浅見 洋二 教授

1960 年生。東北大学大学院文学研究科博士課程中途退学。文学博士（京都大学、2009 年）。東北大学助手、山口大学講師、同助教授、大阪大学助教授、同准教授を経て、2009 年 4 月、現職。専攻：中国古典詩学。

2-1. 論文

浅見洋二「楊万里と「詩債」」『日本宋代文学学会報』(日本宋代文学学会), 1, 日本宋代文学学会, pp. 94-115, 2015/5

2-2. 著書

浅見洋二, 高橋文治, 谷口高志他(共著)『皇帝のいる文学史—中国文学概説—』大阪大学出版会, pp. 1-209, 2015/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

浅見洋二「蘇軾及楊万里詩中の擬人化」「人文山水」跨領域対談学術研習營: 人文山水, 中華民国科技部人文司中文学門, 東海大学中文系, 2015/12

浅見洋二「言論統制下の文学文本—以蘇軾詩歌為中心—」文本形態与文学阐释工作坊: 文本形態与文学阐释, 復旦大学中華文明國際研究中心, 復旦大学中国語言文学系, 2015/12

浅見洋二「「避言」と「瘦詞」—從『論語』憲問与蘇軾詩禍論中国言論与権力—」中国宋代文学学会第 9 届年会及宋代文学國際學術研討会, 中国宋代文学学会, 杭州師範大学人文学院, 2015/9

浅見洋二「「避言」と「瘦詞」—從『論語』憲問与蘇軾詩禍論中国言論与権力—」第 1 届「從誤讀、流變、對話到創意」國際學術研討会, 国立成功大学文学院中国文学系, 国立成功大学文学院中国文学系, 2015/6

浅見洋二「中国詩歌中の兒童与童年—從陶淵明到陸游、楊万里—」中国詩学研究前沿國際論壇, 香港浸会大学中国語言文学系, 香港浸会大学中国語言文学系, 2014/12

浅見洋二他（パネリスト）「中国とはなにか」日本中国学会第 66 回大会シンポジウム: 中国とはなにか, 日本中国学会第 66 回大会シンポジウム, 大谷大学, 2014/10

浅見洋二「宋編宋人文集と墨蹟・碑刻—南宋における蘇軾・黄庭堅詩注の編纂を中心に—」第 1 回日本宋代文学学会大会: 近世出版文化の幕開け—宋代の文集編纂と流伝をめぐって—, 日本宋代文学学会, 京都大学, 2014/5

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:浅見洋二

課題番号:15K02437

研究題目:南宋文学における故郷・田園に関する研究—陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心に—

研究経費:2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

中国南宋の陸游・楊万里・劉克莊の詩を中心にあげて、そこに表現された故郷・田園の表象について考察する。南宋文学史の特質を明らかにするとともに、士大夫の地方化が進んだとされる南宋期における文学と地域社会との関連性について新たな視点・方法を確立することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本宋代文学学会・会長, 2013 年 6 月～現在に至る

日本中国学会・理事, 2013 年 4 月～2015 年 3 月

日本中国学会・評議員, 2011 年 4 月～現在に至る

中国社会文化学会・評議員, 2006 年 4 月～現在に至る

2-15 国語学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：金水 敏、岡島 昭浩

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
65	6	9	1	0	0	3	2

*うち留学生 10名、社会人学生 0名

**日本文学・国語学専修として

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	13	3	1	2
2015	9	2	1	1
計	22	5	2	3

*日本文学・国語学専修として

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

修士・博士論文作成演習の授業に連動して、学会発表、投稿論文作成等のための個別指導を行う。また院生が研究進捗状況を報告・発表しあう研究発表会を開催する。卒業論文作成演習の授業に連動して、個別指導を行うほか、卒業論文中間発表会を開き、学生の卒業論文完成に導く。専門機関の採用情報の入手につとめ、専門職への就職を積極的に支援する。国語学関係の展示会・学外研究会等の情報入手につとめ、学生に広く周知する。学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、授業形態等に工夫を行う。『待兼山論叢』『語文』等の学内雑誌及び学会誌への投稿を促す。

2. 研究

継続中の科学研究費に関わる研究を行うとともに、新たに科学研究費を申請する。研究を促進するために「大阪大学国

語国文学会」を開催し、学会機関誌「語文」を刊行する。研究を促進し、近隣大学の研究者と連携を深めるために、「国語語彙史研究会」「国語文字史研究会」「土曜ことばの会」を開催する。

3. 社会連携

「Handai-Asahi 中之島塾」その他の社会連携講座に講師として参加する。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

【2014 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2014 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 12 名(うち国語学 3 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2014 年 7 月および 11 月に実施した。3 名が博士前期課程修了、2 名が博士学位申請論文を提出し、その 2 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 8 本掲載され、研究発表が 8 本行われた、という状況である。

【2015 年度】

■学部：卒業論文発表会を 2015 年 10 月に実施した。日本文学・国語学専修で 9 名(うち国語学 1 名)の学生が卒論を提出、卒業した。ポスター掲示、メーリングリストその他の手段を通じて、展示会・学外研究会等の情報を広く周知した。

■大学院・共通：研究発表会を 2015 年 7 月および 11 月に実施した。2 名が博士前期課程修了、1 名が博士学位申請論文を提出し、その 1 名に博士の学位を授与した。学部・大学院合同の講義を半期 4 コマ実施した。大学院生の論文が、学会誌等へのべ 5 本掲載され、研究発表が 11 本行われた、という状況である。

2. 研究

【2014 年度】

科学研究費に関わる研究では、引き続き「役割語の総合的研究」および「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」が行われ、新たに「出土資料・実用資料・美的資料を包括した平仮名史記述の総合的再構築」が開始された。また、「大阪大学国語国文学会」を 2014 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 102 輯(6 月)・103 輯(12 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。

【2015 年度】

科学研究費に関わる研究では、引き続き「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」および「出土資料・実用資料・美的資料を包括した平仮名史記述の総合的再構築」が行われた。『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』を編集・刊行した。また、「大阪大学国語国文学会」を 2016 年 1 月に実施、学会機関誌『語文』の第 104 輯(6 月)・105 輯(12 月)を刊行した。「国語語彙史研究会」を 3 回、「土曜ことばの会」を 4 回開催した。

3. 社会連携

【2014 年度】

金水教授が、「大阪弁のリアルとヴァーチャル」(愛媛クラブ講演会)、「落語の詞・仕草をカイボウする」(天神寄席 8

月席、高島幸次・桂春之輔と鼎談)、「大阪弁から見た大阪人～実像とイメージ～」に出講した。

【2015 年度】

金水教授が、『〈役割語〉小辞典』ができるまで(ダイヤモンド経営者倶楽部 関西分科会)、「役割語と大阪弁・関西弁」(リーガロイヤルホテル創業 80 周年記念「日本文化を学ぶ～ぶんか再考」)、「フィクションの日本語と リアルな日本語」(朝日カルチャーセンター・新宿教室)、「フィクションの日本語と リアルな日本語」(Handai-Asahi 中之島塾)、「役割語研究の現在」(三重県高等学校国語教育研究会 YWCA 教師会)に出講した。また、ラジオ番組「久米宏 ラジオなんですけど」(TBS ラジオ)に電話出演した。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学生は、多くの口頭発表を行い、多くの論文を学術誌に載せ、目標通りの達成と言える。

2. 研究

科学研究費で、「イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究」および「出土資料・実用資料・美的資料を包括した平仮名史記述の総合的再構築」を行った。それを含めて、目標通りの達成と言える。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	2	1	3
2015	1	0	1
計	3	1	4

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

巴雅尔都楞「日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究」

主査：金水敏 副査：岡島昭浩 矢田勉

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	4(0)	2(2)	0(0)	0(0)	8(4)
2015	2(2)	1(0)	1(1)	0(0)	1(0)	5(3)
計	4(4)	5(0)	3(3)	0(0)	1(0)	13(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	4	3	0	1	8
2015	0	5	3	0	3	11
計	0	9	6	0	4	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

山田昇平『『以敬斎聞書』における四つ仮名識別法の再検討―「つめて少し鼻へかけて濁る」をめぐって―』『上方文藝研究』(上方文藝研究会), 11, pp.16-26, 2014/6

山田昇平「ロドリゲス『日本大文典』における“sonsonete”―濁音前鼻音記述をめぐって―』『四天王寺大学紀要』(四天王寺大学), 58, pp.335-352, 2014/9

山田昇平「「言便」名義考」『日本語の研究』(日本語学会), 10-4, pp.33-46, 2014/10

山田昇平「七字切りの〈いろは〉」『詞林』(大阪大学古代中世文学研究会)56号, 2014/10, pp.26-37

金水敏・山田昇平・中野直樹「日本語史資料として見た岩屋寺蔵『高僧伝』について」国際シンポジウム「東アジア仏教写本研究」報告書, pp.143-155, 2015/3

山田昇平「D. コリヤード著『さんげろく』にみられる“〜”の分布」『四天王寺大学紀要』(四天王寺大学), 59号, pp. 531-543, 2015/3

金旻貞「流音の特徴から見た役割語としての韓中ピジン―日中ピジン資料を参照しつつ―」『語文』(大阪大学国語国文学会), 103, pp.66-80, 2014/12

巴雅爾都楞(ハヤトル)「直示用法における日本語とモンゴル語の指示詞の対照研究―視点の融合と視点の対立を手掛かりに―」『待兼山論叢 文学篇』, 48, pp.71-86, 2014/12

ダニエル・小林ベター「明治前期の出版物における平仮名字体の使用傾向について」『国文論叢』(神戸大学文学部国語国文学会), 48, pp.25-42, 2014/3

【2015 年度】

〔博士後期〕

河野光将「『紐鏡』『玉緒』再考」『鈴屋学会報』32, pp.1-13, 2015/12/19

河野光将「近世後期係り結び研究史―『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の受容と展開―」『待兼山論叢』49, pp.35-49, 2016/3

Masayoshi Shibatani, Sung Yeo Chung and Bayaerduleng (2015) : “Genitive Modifiers: Ga/no Conversion Revisited”
Japanese/Korean Linguistics 22 p.355-394, Edited by Mikio Giriko, Kyoko Kanzaki, Naonori Nagaya and Akiko
Takemura. CSLI Publications.

久田行雄「洒落本における振り仮名付記率の推移とその意味」『国語文字史の研究』,15, 2016/03

百瀬みのり「「サテ」の直前文を跳び越す用法について」『語文』(大阪大学国語国文学会), 第 105 輯, pp.59-75, 2015/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

久田行雄「洒落本における振り仮名付記率の差異—寛政期を境として—」土曜ことばの会, 大阪大学, 2014/7/19

〔博士後期〕

山田昇平「漢語の連声濁について—歴史的視点に基づく分析—」第 165 回国語語彙史研究会, 関西大学, 2014/4/25

山田昇平「漢語形態素「—山(サン)」の連濁—中近世を中心として—」第 317 回日本近代語研究会, 北海道大学, 2014/10/17

金水敏・山田昇平・中野直樹「日本語資料として見た岩屋寺蔵『高僧傳』について」国際シンポジウム「東アジア仏教写
本研究」, 国際仏教学大学院大学日本古写経研究所, 2014/7/27

山田昇平「日本語のチ・ヂ、ツ・ヅの破擦音化と、サ・ザ行の摩擦音化について」平成 27 年度大阪大学国語国文学会総
会, 大阪大学, 2015/1/10

中野直樹「岩屋寺蔵『高僧傳』の字音注について」土曜ことばの会, 大阪大学, 2014/7/19

中野直樹「京都大学文学研究科図書館蔵『字鏡抄無名字書』の反切と漢文注について」第 111 回訓点語学会研究発表会,
東京大学, 2014/11/2

伊藤由貴「近代における乗り物を数える助数詞」土曜ことばの会, 大阪大学, 2014/10/25

【2015 年度】

〔博士後期〕

河野光将「『紐鏡』『玉緒』再考」第 32 回鈴屋学会, 2015/04/19

河野光将「近世後期係り結び研究史—『てにをは紐鏡』『詞玉緒』の受容と展開—」大阪大学国語国文学会, 2016/01/09

後藤睦「古代語における動詞「問ふ」の格標示の交替について——「少女を道問へば」から「かの使の大徳に問へば」へ——」土曜ことばの会, 大阪大学, 2015/4/18

後藤睦「古代語動詞述語文における格標示方法について—動詞「問ふ」の格体制を中心として—」研究発表会「日本語の
ヴォイス・アスペクト・格」, 国立国語研究所, 2015/8/22

ダニエル・小林ベター「明治時代における仮名遣い規範について」日本近代語研究会 第 323 回 2015 年度春期大会, 甲
南大学, 2015/05/22

巴雅尔都楞「モンゴル語の指示詞について —操作可能性と境界性という観点—」大阪大学平成 27 年度国際共同研究促進
プログラム, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/7

久田行雄「近世文学板本における使用仮名字体の通時的変化」日本語学会 2015 年度春季大会, 関西学院大学, 2015/5/23

久田行雄「くずし字学習アプリのための文字・用例収集」海外における日本研究の現状とくずし字教育の新たな試み, 大
阪大学, 2015/10/23

百瀬みのり「中世物語作品におけるカ系接続形式の用法について—「かかるほどに」「かかれば」「かくて」を中心に—」
第 272 回大阪大学古代中世文学研究会, 大阪大学, 2015/12/19

百瀬みのり「中古物語作品における『カクテ』『カカレバ』『カカルホドニ』について」土曜ことばの会, 大阪大学, 2016/1/23
百瀬みのり「中古和文物語作品におけるカ・サ系接続形式について」第37回表現学会近畿例会, 同志社大学, 2016/2/27

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

伊藤由貴「紹介 蜂矢真郷著『古代語形容詞の研究』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 103, pp.55-56, 2014/12

ダニエル・小林ベター「翻訳中国語(英語)」大阪大学大学院文学研究科日本文学・国語学研究室多言語翻訳チーム『多言語翻訳 葉山嘉樹『セメント樽の中の手紙』(大阪大学大学院文学研究科 日本文学・国語学研究室日本文学多言語翻訳プロジェクト), pp14-17, 2015/3

【2015 年度】

〔博士後期〕

百瀬みのり「紹介 金水敏・高田博行・椎名美智編『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』, 『語文』(大阪大学国語国文学会), 第104輯, p.73, 2015/6/30

ダニエル・小林ベター「紹介 野田尚史・高山善行・小林隆編『日本語の配慮表現の多様性—歴史的变化と地理的・社会的変社会的変異—』『語文』(大阪大学国語国文学会)第104輯, 2015/06/30

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 1 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

黒木邦彦(2009年3月博士)神戸松蔭女子学院大学

大田垣仁(2012年3月博士)近畿大学文芸学部

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 1 名

2014 年度 : 1 名 2015 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2014 年度：0 名 2015 年度：1 名

9. 刊行物

2014 年度 『語文』（大阪大学国語国文学会）第 104 輯・第 105 輯

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

事務局	国語語彙史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	国語文字史研究会	2002 年度以前から現在に至る
	土曜ことばの会	2002 年度以前から現在に至る
研究会	土曜ことばの会	4 月 18 日 7 月 11 日 10 月 10 日 1 月 23 日
	第 109 回国語語彙史研究会開催	4 月 25 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

＊(日本文学専門分野とともに)

大阪大学国語国文学会 (1 月 1 日間)

研究誌「語文」を年 2 回編集・発行

＊(日本文学, 比較文学専門分野とともに)

卒業論文・修士論文中間発表会 (10 月 2014 年度 4 日間)

大学院研究発表会 (7 月・11 月 各年度各 2 日間)

専門分野主催の研究会等の活動については、10.に詳述した。

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 金水 敏 教授

1956 年生。1982 年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程退学。博士（文学）（大阪大学、2006 年）。東京大学助手、神戸大学教養部講師、大阪女子大学助教授、神戸大学文学部助教授を経て、2000 年 4 月現職。専攻：国語学／言語学。

1-1. 論文

金水敏「役割語とキャラクター言語」金水 敏(編)『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』(役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ), 金水 敏(私家版), pp. 5-13, 2016/2

Kinsui, Satoshi, Hiroko Yamakido(共著), "Role Language and Character Language" *Acta Linguistica Asiatica*, (Ljubljana University, Faculty of Arts), 5-2, Ljubljana University Press, pp. 29-41, 2015/12

金水敏「「変項名詞句」の意味解釈について」日中言語研究と日本語教育研究会(編)『日中言語研究と日本語教育』(日中言語

研究と日本語教育研究会), 8, 好文出版, pp. 1-11, 2015/10

金水敏 「役割語」齋藤純男・田口喜久・西村義樹(編)『明解言語学辞典』三省堂, p. 224, 2015/8

金水敏 「役割語とその翻訳について」定延利之(編)『私たちの日本語研究:問題のありかと研究のあり方』朝倉書店, pp. 128-132, 2015/5

金水敏 「文献と言語変種-文献に残されたことばの多様性が意味するところ-」高田博行・渋谷勝己・家入葉子(共編)『歴史社会言語学入門』((なし)), (なし), 大修館書店, pp. 43-52, 2015/3

金水敏 「古代日本語の主格・対格の語順について」江頭浩樹・北原久嗣・中沢和夫・野村忠央・大石正幸・西前明・鈴木泉子(共編)『より良き代案を絶えず求めて』((なし)), (なし), 開拓社, pp. 37-45, 2015/3

金水敏, 山田昇平他(共著)「日本語史資料として見た岩屋寺蔵『高僧伝』について」『国際シンポジウム報告書 2014 東アジア仏教写本研究』((なし)), (なし), 国際仏教学大学院大学 日本古写経研究所 文科省戦略プロジェクト実行委員会, pp. 128-132, 2015/3

金水敏 「日本語の疑問文の歴史素描」『国語研プロジェクトレビュー』((なし)), 5 巻-3 号, 国立国語研究所, pp. 108-121, 2015/2

金水敏 「講演要旨 日本語疑問文の問題点」『歴史言語研究』(日本歴史言語学会), 3 号, 日本歴史言語学会, pp. 97-104, 2014/11

金水敏 「フィクションの話し言葉について-役割語を中心に-」石黒圭・橋本行洋(共編)『話し言葉と書き言葉の接点』((なし)), (なし), ひつじ書房, pp. 3-11, 2014/9

1-2. 著書

金水敏(編)『役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ 2015 報告論集』金水 敏(私家版), 222p., 2016/2

金水敏(編)『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究 研究報告書 (3)』国立国語研究所, 235p., 2016/2

金水敏 『コレモ日本語アルカ?——異人のことばが生まれるとき(そうだったんだ!日本語) 一』岩波書店, 240p., 2014/9

金水敏 『〈役割語〉小辞典』研究社, 270p., 2014/9

金水敏, 田中ゆかり他(共編著)『ドラマと方言の新しい関係:『カーネーション』から『八重の桜』、そして『あまちゃん』へ』笠間書院, pp. 11-21, 2014/8

金水敏, 高田博行他(共編)『歴史語用論の世界—文法化・待遇表現・発話行為』ひつじ書房, 320p., 2014/6

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

金水敏 「上代・中古の「や」について」国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究会, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2015/12

金水敏 「「役割語」からみた日本語とキャラ」日本語文法学会第 16 回大会パネルセッション:日本語とキャラ, 日本語文法学会, 学習院女子大学, 2015/11

金水敏 「直示とは何か 日本語を例に、その体系と歴史について」第 34 回応用言語学講座公開講演会, 名古屋大学国際言語文化研究科応用言語学講座, 名古屋大学東山キャンパス, 2015/11

金水敏 「On Kakari-musubi and Focus in Interrogative Sentences in Old Japanese」International Workshop:Kakarimusubi from a Comparative Perspective, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2015/9

- Kinsui, Satoshi, “マンガと役割語研究”, 第 7 回国際学術会議: コミコロジー: 理論と実践を絡み合わせる新《研究》, 京都精華大学国際マンガ研究センター, 京都国際マンガミュージアム, 2015/9
- Kinsui, Satoshi, “役割語にも文法化は存在するか Is there any grammaticalization in role language?”, 国立国語研究所 国際シンポジウム : 文法化: 日本語研究と類型論的研究, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2015/7
- 金水敏 「指示詞の記述に関する一試案」関西言語学会 第 40 回大会, 関西言語学会, 神戸大学国際文化研究科, 2015/6
- 金水敏 「役割語と大阪弁・関西弁」リーガロイヤルホテル創業 80 周年記念講演会: 日本文化を学ぶ～ぶんか再考, リーガロイヤルホテル, リーガロイヤルホテル, 2015/6
- 金水敏 「戦前の政治・外交用語「膺懲」についての小報告」第 109 回国語語彙史研究会, 国語語彙史研究会, 大阪大学大学院文学研究科, 2015/4
- 志波彩子, 金水敏 「古典語・現代語資料の場合—コーパスからデータへ—」JLVC2015 (国立国語研究所 時空間変異研究系合同研究発表会): データの整備と活用, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2015/3
- 金水敏 「歴史から見た現代共通語の疑問標識分布」国立国語研究所プロジェクト「日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究」研究会, 国立国語研究所, 国立国語研究所, 2015/3
- 金水敏 (招待講演)「知っているようで知らない「指示詞」」大阪 YWCA 日本語教師養成講座 45 周年・日本語教師会 25 周年記念事業, 大阪 YWCA 日本語教師会, 大阪 YWCA, 2015/3
- 菅さやか, 金水敏他 「音声の抑揚が役割語理解に及ぼす影響の発達の比較」日本発達心理学会 第 26 回大会, 日本発達心理学会, 東京大学本郷キャンパス, 2015/3
- 金水敏 「役割語研究の新展開」KICA セミナー, 京都国際文化協会, 京都市国際交流会館, 2015/3
- 金水敏 (招待講演)「役割語研究とは何であったか」同志社ことばの会 2014 年度年次大会, 同志社ことばの会, 同志社大学今出川キャンパス, 2015/2
- 金水敏 (基調講演)「キャラクター言語から役割語へ」役割語・キャラクター言語研究国際ワークショップ, 主催: 科学研究費「役割語の総合的研究」, 大阪大学会館講堂, 2015/2
- 金水敏 「日本語疑問文の歴史素描」国立国語研究所 研究成果発表会 2015, 国立国語研究所, 一橋大学 一橋講堂, 2015/1
- 金水敏 (招待講演)「役割語研究の現在」講演会, 中南民族大学(中国), 中南民族大学(中国), 2014/12
- 金水敏 (招待講演)「大阪弁のリアルとヴァーチャル」愛媛クラブ講演会, 愛媛クラブ, リーガロイヤルホテル大阪, 2014/9
- 金水敏, 山田昇平他 「日本語史資料として見た岩屋寺蔵『高僧伝』について」東アジア仏教写本研究: 東アジア仏教写本研究, 国際仏教学大学院大学 文部科学省私立大学戦略的基盤形成支援事業「東アジア仏教写本研究拠点の形成」研究代表者: 落合俊典 事業番号 S1091029 共催: 東アジア仏教研究会, 国際仏教学大学院大学 春日講堂, 2014/7(『国際シンポジウム報告書 2014 東アジア仏教写本研究』pp. 143-156, 2015/3)
- 金水敏 (招待講演)「大阪弁から見た大阪人～実像とイメージ～」東納税協会青年部会総会講演, 東納税協会青年部会, KKR ホテル大阪, 2014/6

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

- 金水敏 第25回新村出賞, 新村出版記念財団, 2006/11
- 原口裕, 南出康世, 金水敏他 豊田賞, 日本英学史学会, 1992/10
- 金水敏, 田窪行則 日本認知科学会論文賞, 日本認知科学会, 1991/7

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:金水敏

課題番号:23320087

研究題目:役割語の総合的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 960,000 円

研究の目的:

「役割語」とは、特定の人物像(キャラクタ)と心理的に結びついた話し方(スピーチスタイル)である。本研究では、日本語を中心に役割語の研究を1)理論、2)起源・歴史、3)対照、4)応用、5)獲得・発達の4つの観点に分け、それぞれについて相互連携的に研究を推進しようとするものである。2)では個別の役割語構成要素についてその起源と発達過程を明らかにし、また 3)では欧米語および東アジア諸言語を中心に、文化差についても勘案しながら、類型論的に考察する。また 4)では日本語教育、人文学入門の分野における教育プログラム等の開発について検討する。また 5)では4歳児～成人まで、成長の各段階での役割語知識の獲得過程について実証的に研究する。これらを総合し、1)として役割語の総合的な理論の構築を目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

訓点語学会・委員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・編集委員長, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014 年 10 月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2014 年 4 月～現在に至る

関西言語学会・委員, 1996 年 4 月～現在に至る

2. 岡島 昭浩 教授

1961 年生。1987 年、九州大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士（九州大学、1986 年）。九州大学文学部助手、京都府立大学女子短期大学部講師・助教授、福井大学教育学部（教育地域科学部）助教授、本研究科助教授・准教授を経て 2010 年現職。専攻：国語史・日本語学史。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡島昭浩「韓国国立中央図書館所蔵の日本古典籍—善本解題【国語学】」大高洋司・陳捷『日韓の書誌学と古典籍』勉誠出版, pp. 122-126, 2015/5

2-4. 口頭発表

岡島昭浩「イロハ韻の展開」日本語学会 2014 年秋季大会, 日本語学会, 北海道大学, 2014/10(『日本語の研究』11-2, pp. 195-195, 2015/4)

岡島昭浩「近世中期以降の聚分韻略改変について」第 107 回国語語彙史研究会, 国語語彙史研究会, 大阪市立大学, 2014/9

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡島昭浩

課題番号:25370517

研究題目:イロハ韻等の作詩用韻書を辞書史的に記述するための基礎研究

研究経費:2014 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、イロハ韻等の作詩用韻書を国語学的に研究するための、また辞書史に位置付けるための基礎的な研究にある。どのような異本があり、それらの関係はどのようなものか、また、イロハ韻本体以外の部分として、どのような性格のものが増補されたのか(どのような資料から引用されたのか)、などについて調査研究を行い、イロハ韻の諸本の姿を示すとともに、イロハ韻の全体像と他の類似書との違い・共通性を確認するために行うものである。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・広報委員, 2014 年 5 月～2016 年 5 月

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～2015 年 12 月

日本語学会・評議員, 2009 年 6 月～現在に至る

国語文字史研究会・委員, 2008 年 4 月～現在に至る

国語語彙史研究会・委員, 2003 年 4 月～現在に至る

2-16 英米文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 2 外国人教師 1 助教 1

教授：服部 典之、片渕 悦久

准教授：石割 隆喜、山田 雄三

外国人教師：ポール・ハーヴィ

助教：好井 千代

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
52	4	4	0	0	3	0	0

*うち留学生 1名、社会人学生 0名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2012年度～2013年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	13	6	0	1
2015	17	0	2	1
計	30	6	2	2

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

大学院・学部の教育においては、広い視野で学生が自己の学習や研究を位置づけられるよう、講義・演習を構成し、卒業・修了時まで社会で要請される基礎的能力を習得できるよう講義・演習・論文指導などを配置することを目標とした。

大学院生については、①修士論文作成演習、博士論文作成演習の授業をより活性化し、論文執筆能力をつけさせる。②文学テキストを読解し、分析する力の増進をはかり、プレゼンテーション能力の涵養をはかる。③各種学会での口頭発表の申し込み、各種学術誌への投稿を積極的に勧めることを目標とした。また学部学生については、①英米文学全般について

の幅広い知識と教養を身につけさせる。②卒業論文の作成に向けて積極的な指導を行う。③英語の総合的力をつけ自己表現技術を身につけさせることを目標とした。さらに、大学院生と学部生の交流を図り、教育の面で相互に協力し刺激しあう態勢をつくることも、大学院・学部双方にわたる目標とした。

2. 研究

教員・大学院生は毎年最低 1 回の研究成果を、各種学会で口頭および論文の形で行うよう積極的に研究活動を継続する。また、教員全員が代表者として科学研究費補助金を中心とした競争的外部資金の獲得に努めるようにすることを目標とした。教員は大学院生、学部学生の研究意欲を高めるために学外研究者と協力して、院生執筆者を含む共同の研究書・書物の刊行を心がける。また、同窓の研究者と連携して、阪大英文学会、阪大英文学会刊行物のいっそうの充実をめざすことも目標とした。

3. 社会連携

卒業生との連携を密にして、その多彩な才能を多方面に活用するためのシステムの立ち上げを考える。また、出版社と共同企画をし、英米文学を専攻する大学院生および学部学生のための教科書やガイドブック等の編集・刊行を実現する。さらに、大学院生に国際的感覚を付けさせるために英米の大学に派遣するプログラムを継続的に実施することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

講義・演習では基礎から応用までのスキルの習得がなされ、ほぼ当初の計画どおりの成果があがっている。大学院・学部ともにテキストの読解力は向上してきている。また、論文作成に関する指導が細やかに行われた結果、研究発表も活発で、大学院生の学会での口頭発表や学会誌への論文発表などが活発に行われていることがそのことを実証している。研究室の物理的整備などを工夫したこともあり、院生・学部生間の交流も進み、研究室の雰囲気はきわめて良好な状態を保っていると言える。

2. 研究

【2014 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍が続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 7 巻まで出版を終えているが、2014 年度には第 8 巻の刊行に向け、企画立案および執筆者募集が行われる予定である。この時期の課程博士号提出者は 1 名となっている。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたと言える。

【2015 年度】

当該年度中は教員のほぼ全員が科学研究費補助金を獲得し、著書・論文を刊行するなど目覚ましい活躍が続けている。また執筆者に大学院生を含む阪大英文学会叢書はすでに第 8 巻まで出版を終えているが、2015 年度には新たな企画に向け、企画立案が行われる予定である。この時期の課程博士号提出者は 1 名となっている。院生の研究発表については 1. においてもふれたように、口頭・論文ともに堅調を維持しており、目標は十分に達成されたと言える。

3. 社会連携

【2014 年度】

2014 年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣計画については、今後も長期的展開が望めるように新たなプロジェクトを模索中である。

【2015 年度】

2015 年度には卒業生を研究会等に継続的に招聘し、大きな教育的成果を挙げた。大学院生を活用した教科書・ガイドブックはすでに刊行され好評を得ているが、さらなる出版計画を考慮中である。また海外派遣については、今後も長期継続が望めるように現行のプログラム（ペンシルベニア大学派遣）を整備中である。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部学生については日頃のクラス内での取組や卒業論文の出来から判断して比較的水準の高い成果が出ている。また、このところ学部学生から多くの海外留学生が出ているのは教育指導面での成果の表れであると自負している。大学院生については、すでに述べた学会活動などで外部から高い評価を得ており、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員・大学院生の全員が口頭・論文・著書等で成果を世に問うという目標は達成できた。その他の活動も含め、外部から高い評価を得ている点を考慮しても目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

同窓生との連携、海外との連携などに代表されるように、この面でも社会連携の責任はほぼ達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	1	0	1
2015	1	0	1
計	2	0	2

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

水田博子 “Nomadic Imagination: Literary Form and the Politics of “Displacement” in D. H. Lawrence’s Later

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	0(0)	2(2)	0(0)	0(0)	4(4)
2015	1(1)	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	4(4)
計	3(3)	0(0)	5(5)	0(0)	0(0)	8(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	3	4	0	0	0	7
2015	0	7	0	0	0	7
計	3	11	0	0	0	14

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

ガーリントン、イアン (Garlington, Ian) “An Anatomy of Cosmic Conspiracy: The Function of Fragmentation in the *Illuminatus!* Trilogy.” 『関西アメリカ文学』第 46 号, pp. 5-21, 2014/10

ガーリントン、イアン (Garlington, Ian) “Tripping Over the Defining Line: an Analysis of Form in Psychedelic Underground Comix.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 48 号, pp. 19-36, 2014/12

ガーリントン、イアン (Garlington, Ian) “The Potential Role of a Welsh Multilingual Comic Book.” *Raymond Williams Kenkyu (Raymond Williams Studies)* Special Issue, pp. 147-150, 2014/12

水田博子 (Mizuta, Hiroko) “D. H. Lawrence and the Politics of the Symbol.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 48 号, pp. 37-52, 2014/12

【2015 年度】

〔博士前期〕

宮原駿「*Finnegans Wake* における錬金術師 Shem の糞便学的創作行為」*Osaka Literary Review* 第 54 号, pp. 19-34, 2016/01

〔博士後期〕

中嶋彩佳 (Nakajima, Ayaka) ““That Little World Has Passed Away”: ‘Japanized’ Japan as a Metaphorical Place in Kazuo Ishiguro’s *An Artist of the Floating World*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 49 号, pp. 51-70, 2015/12

- 林日佳理 (Hayashi, Hikari) “The Writings of/on Mirror-Imaged Others in Paul Auster’s *The New York Trilogy*.” 『待兼山論叢』(文学篇) 第 49 号, pp. 71-87, 2015/12
- 水田博子 (Mizuta, Hiroko) “Foreign Bodies: The Problem of the Other in *The Plumed Serpent*.” *D. H. Lawrence Studies* (The D. H. Lawrence Society of Korea) Vol. 23 No. 2, pp. 71-99, 2015/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士後期〕

- 上里友子「*Oliver Twist*におけるユーモアのレトリック—「愉快的」老人 Fagin の隠し持つ執着」日本英文学会第 86 回大会, 北海道大学, 2014/05/25
- 米田亮一「*A Room with a View*における E. M. Forster の「同志」観」日本英文学会関西支部第 9 回大会, 立命館大学, 2014/12/21
- 中嶋彩佳「模倣する探偵—*When We Were Orphans*における現実と虚構」日本英文学会第 86 回大会, 北海道大学, 2014/05/25
- 中嶋彩佳 “Translating Japan: Kazuo Ishiguro’s *A Pale View of Hills*.” International Conference: *Kazuo Ishiguro: New Perspectives*, 東京大学, 2014/11/15
- 中嶋彩佳 “Kazuo Ishiguro’s Pseudotranslation: The Japanese Translation and Reception of *An Artist of the Floating World*.” International Symposium: *Itinerant Tongues: The Glorious Noise of Literature in Transition*, 大阪大学, 2015/01/10
- 水田博子「ロレンスにおける民主主義批判」(シンポジウム「ロレンスと共同体」におけるパネル発表) 日本ロレンス協会第 45 回大会, 相模女子大学, 2014/06/07
- 水田博子 “Foreign Bodies in *The Plumed Serpent*.” 13th International D. H. Lawrence Conference, Gargnano, Italy, 2014/06/26

【2015 年度】

〔博士後期〕

- 米田亮一「「他者」なきポリフォニー—E. M. Forster, *A Passage to India* 再考」阪大英文学会第 48 回大会, 大阪大学, 2015/10/24
- 中嶋彩佳「Kazuo Ishiguro の翻訳可能性と不可能性—*An Artist of the Floating World* の消滅した聞き手と虚構の「日本」」日本英文学会全国第 87 回大会, 立正大学, 2015/05/24
- 林智之「*Humphry Clinker*におけるメタモルフォーゼ—言葉の変化と創造の旅」日本ジョンソン協会第 48 回大会, 同志社大学, 2015/07/04
- 林日佳理「手の届かないところにいる「あなた」に向けて書く—Paul Auster における作者性と他者への志向」日本英文学会全国第 87 回大会, 立正大学, 2015/05/23
- 林日佳理「Richard Powers の *Prisoner’s Dilemma* における兄弟姉妹の関係と「書く」こと」東北大学・東北学院大学・大阪大学合同研究会, 大阪大学, 2015/08/09
- 林日佳理「他者への共感の可能性—Richard Powers 作品における兄弟姉妹の関係と「書く」こと」日本英文学会関西支部第 10 回大会, 武庫川女子大学, 2015/12/20
- 水田博子「方法としての狂気—D. H. Lawrence, “The Woman Who Rode Away” における「思考の冒険」」東北大学・

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2015年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

2015年度 学部: 2名 大学院: 3名 (計5名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

ガーリントン, イアン 関西外国語大学

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2014年度: 1名 2015年度: 1名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

9. 刊行物

2015年度 *Osaka Literary Review* (OLR) No. 54, 2016/1

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

なし

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会第 48 回大会 2015/10/24

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 服部 典之 教授

1958 年生。1981 年、大阪大学文学部（英文学専攻）卒業。1983 年、大阪大学大学院文学研究科修士課程修了。同博士課程中途退学。文学博士（大阪大学、2003 年）。和歌山大学教育学部助手、大阪大学言語文化部講師、同助教授を経て、2000 年 10 月文学研究科助教授、2008 年 4 月現職。専攻：英文学。

1-1. 論文

服部典之, フィールディングの「この世」への旅立ち―『リスボン渡航記』の憂鬱と満足』*Osaka Literary Review*, 54, OLR 同人会, pp. 1-17, 2016/1

服部典之, 岡田禎之, 片渕悦久他(共著)「ジャマイカと女たち―サリー、コン、バーサ」岡田禎之(共著)『言葉の真相・真相』大庭幸夫教授退職記念論文集刊行会, pp. 107-122, 2015/3

1-2. 著書

服部典之, 福士航, 岩田美喜他(共編著)『フィクションのポリティクス』英宝社, pp. 45-66, 2015/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Hattori, Noriyuki, James Watt, Madalina Veres 他, (パネリスト)“Trafficking Spices, Silver, and Japan: Representations of the Amboina Massacre”, 47th Annual Meeting: The American Society for Eighteenth-Century Studies, ASECS, Pittsburg, PA, Omni William Penn Hotel, 2016/3

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

服部典之 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2004/1

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号:24520283

研究題目:スキャンダラス・メモアリスト女性作家と異国トポス

研究経費:2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

研究の目的:

18 世紀英国で、自らの性生活をも含めた赤裸々な自伝を出版して世間を騒がせた女性作家 T.C.Phillips や Laetitia Pilkington ら

は、近年〈スキャンダラス・メモアリスト〉と呼ばれ注目を集め始めている。男性中心的「小説の勃興」の潮流に棹さしたことで、扇情的な自己表現のあまり respectable な読者の生理的反感をかっただけで二百年以上閑居されていた〈スキャンダラス・メモアリスト〉たちを、本研究は自伝文学の先駆けとして再評価する。さらに、彼女たちの「自伝」が「小説」ジャンルとの往還によって、18 世紀英国文化活性に大きく寄与したことを、活発な海外旅行者でもあった彼女たちの「異国トポス」表象に着目することで、初めて解明する。

1-6-2. 2015 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:服部典之

課題番号:15K02299

研究題目:イギリス小説と地理学的想像力

研究経費:2015 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

研究の目的:

イギリス小説の中には、豊かな地理学的想像力なしには成立しえなかった、ある大きな系譜がある。『ロビンソン・クルーソー』のカリブ海、『パミラ』や『ジェイン・エア』のジャマイカ、スモレットのスコットランド、『ラセラス』のエチオピアなどである。従来の研究では地域・国単位、もしくは環太平洋などの限られた視野で解釈されていたイギリス小説を、本研究ではイギリスを中心とした〈東〉＝太平洋・アジアなど、〈西〉＝カリブ海・アメリカなど、〈南〉＝アフリカなど、〈北〉＝スコットランドなどへと、東西南北に広がる豊穡なる地理学的想像力を中心に据えることで包括的に捉え直す。英文学史的に歴史＝時間を軸にするものではなく、地誌学的に空間をイギリスから見た放射状に網羅する画期的研究である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会・『英文学研究』編集委員会委員長, 2015 年 5 月～現在に至る

日本英文学会・『英文学研究』編集委員会副委員長, 2014 年 5 月～2015 年 5 月

日本英文学会機関誌『英文学研究』編集委員会・委員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英文学会関西支部・副支部長, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英文学会・『英文学研究』編集委員会委員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英文学会関西支部理事会・理事, 2011 年 4 月～現在に至る

文部科学省大学設置分科会 文学専門委員会委員会・委員, 2011 年 4 月～2015 年 9 月

2. 片渕 悦久 教授

1965 年生。1995 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。文学修士（大阪大学、1991 年）。博士（文学）（大阪大学、2007 年）。北陸大学講師、同志社女子大学講師、助教授を経て、2003 年 4 月文学研究科助教授、2013 年 4 月現職。専攻：アメリカ文学。

2-1. 論文

片渕悦久「アダプテーション、リメイク、リニューアルー物語更新理論の構築に向けて―」『言葉のしんそう(深層・真相)』英宝社, pp. 123-135, 2015/3

2-2. 著書

片渕悦久『物語更新論入門』ブックウェイ, 71p., 2016/3

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

片渕悦久（招待講演）「物語更新とは何か？—メンタル・イメージの物語論—」公開特別講演会：静岡文化芸術大学公開特別講演会，静岡文化芸術大学，静岡文化芸術大学，2016/2

片渕悦久，鴨川啓信，武田雅史（パネリスト）「アダプテーション理論の現在と物語更新論の可能性」シンポジウム：阪大英文学会第47回大会，阪大英文学会，大阪大学，2014/10

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者：片渕悦久

課題番号：26370426

研究題目：メディア横断的物語更新理論を応用した現代表象文化の受容形態の解明

研究経費：2014年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2015年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的：

多用なメディアやジャンルの枠を越え、同一のストーリーをもつ作品が何度も再生産されるという、現代表象文化においていっそう顕著な特質を文化現象として解明するために、本研究課題では、物語の更新という観点からアプローチする理論（メディア横断的物語更新理論）を提案し、その理論的発展性を検討する。この物語更新理論を通じて、メディアの変換を経て物語が再創造される原理やその形態を解明すること、また更新された物語に関する受容のあり方などを考察することに焦点を絞ったうえで方法論として体系化し、新たな物語論を確立することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員，2013年4月～2015年3月

日本ソール・ベロー協会・理事，2009年4月～現在に至る

関西英語英米文学会・理事，2008年4月～現在に至る

3. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部（英語学科）卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程（英文学専攻）修了。

博士（文学）（大阪大学、1999）。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第 22 回新人賞(1999)。専攻：アメリカ文学。

3-1. 論文

石割隆喜「小説の非人間化——ポストモダニズムとポストヒューマン」大庭幸男教授退職記念論文集刊行会(編)『言葉のしんそう (深層・真相)——大庭幸男教授退職記念論文集』大庭幸男教授退職記念論文集刊行会, pp. 137-147, 2015/3

3-2. 著書

麻生享志, 木原善彦, 石割隆喜他(共著)『現代作家ガイド7 トマス・ピンチョン』彩流社, pp. 148-167, pp. 219-220, pp. 226-228, pp. 239-41, pp. 242-244, 2014/6

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011 年 4 月～現在に至る

4. 山田 雄三 准教授

1968 年生。1990 年大阪大学文学部卒業。1995 年大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。1995-2013 年、大阪大学言語文化部、同大学院言語文化研究科講師、助教授、准教授を経て、2013 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：英文学／文化理論研究。

4-1. 論文

山田雄三「ミドルブラウとニューレフトとの距離を測る—1950 年代イギリスの大衆読物と政治」『待兼山論叢』編集委員会(編)『待兼山論叢』(待兼山論叢), 49, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 1-13, 2015/12

山田雄三「遺産としてのモダニズム／運動としてのモダニズム」『ヴァージニア・ウルフ研究』編集委員会(編)『ヴァージニア・ウルフ

研究』(日本ヴァージニア・ウルフ協会), 32, 日本ヴァージニア・ウルフ協会, pp. 95-106, 2015/10

4-2. 著書

山田雄三他(共著)『阪大英文学会叢書8 英語のデザインを読む』, 英宝社, pp. 78-89, 2015/10

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

川端康雄, 山田雄三他(共訳)「The Tense of Imagination and other essays」レイモンド・ウィリアムズ著、川端康雄監訳『想像力の時制 文化研究Ⅱ』みすず書房, 2016/2

4-4. 口頭発表

山田雄三 (招待講演)「貧者たちと観客との距離を測る—Doctor Faustus における貧者表象を中心に—」16 世紀イングランド文学における貧者表象」研究会:16 世紀イングランド文学における貧者表象研究, 学習院大学, 学習院大学, 2015/9

山田雄三 「書評 Christopher Marlowe at 450」関西シェイクスピア研究会9月例会, 関西シェイクスピア研究会, 龍谷大学梅田キャンパス, 2015/9

山田雄三 (招待講演)「翻案の諸相—シェイクスピア、昭和の邦画、カズオ・イシグロを例として」武庫川女子大学英語文化学科院生会特別講義, 武庫川女子大学, 武庫川女子大学, 2015/7

山田雄三 (招待講演)「翻案の諸相—シェイクスピア、昭和の邦画、カズオ・イシグロを例として—」岐阜市立女子短期大学特別講義, 岐阜市立女子短期大学, 岐阜市立女子短期大学, 2015/5

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山田雄三, 森祐司, 小口一郎 大阪大学共通教育賞(2011 年度後期), 大阪大学共通教育機構, 2012/5

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:山田雄三

課題番号:26370316

研究題目:環境汚染問題への英語圏モダニズムの文化的介入を分析する

研究経費:2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

本研究は英語圏モダニズムの文学と政治とを接合する試みである。これまでモダニズムという思潮は 1920 年代をピークとする芸術新潮として受けとめられ、個別の作品を分析するにあたって、20 世紀初めの国際情勢や社会の変動を映す、いわゆる反映論が主流だった。本研究では、このようなモダニズム観を批判的にとらえ、産業社会の負の部分に照射する政治学としてモダニズムを定義しなおしたい。たとえば、1958 年に英国でモダニストを中心にカルチュラル・スタディーズ(以下 CS)の試みが始められたとき、それはオルダーマストンの反核運動と連動していたからである。環境問題に介入することで、社会の諸関係を変えようとしたモダニズム政治の成功と挫折の道程を明らかにしたい。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. ポール・ハーヴィ 外国人教師

1961年生。1980年9月、Oriel College, Oxford University 入学。1986年6月 Oriel College, Oxford University 卒業退学 (MA, MPhil 取得)。1986年10月、京都大学教養部招聘研究員 (1年間)。1988年4月、大阪大学言語文化部講師。1990年4月、カナダ商工会議所専務理事(1年間)。1991年4月、大阪大学言語文化部講師。1999年10月、大阪大学文学部・大阪大学大学院文学研究科外国人教師に着任し現在に至る。専攻：シェイクスピア／イギリスルネッサンス／英文学。

5-1. 論文

なし

5-2. 著書

HARVEY, A. S. Paul, *Heiankyo 1*, Yamaguchi Shoten, 118p. , 2015/12

HARVEY, A. S. Paul, *Monday Songs 7*, pdf, 83p. , 2015/9

HARVEY, A. S. Paul, *Lectures on the Psalms 1-60*, pdf, 400p. , 2015/8

Mary Paola, ポール・ハーヴィ 『Saint John 190』Yamaguchi Shoten, 69p. , 2015/7

HARVEY, A. S. Paul, *Hagios Paulos Book 3*, Yamaguchi Shoten, 211p. , 2015/3

HARVEY, A. S. Paul, *Bird*, Yamaguchi Shoten, 166p. , 2015/3

Mary Paola, ポール・ハーヴィ 『Saint John 391』Yamaguchi Shoten, 135p. , 2015/3

HARVEY, A. S. Paul, *Saint Mary 365 Book 4*, Yamaguchi Shoten, 157p. , 2014/11

HARVEY, A. S. Paul, *Monday Songs 6*, pdf, 99p. , 2014/8

HARVEY, A. S. Paul, *Great China 4*, Yamaguchi Shoten, 184p. , 2014/8

Mary Paola, ポール・ハーヴィ 『Saint Matthew 331』Yamaguchi Shoten, 348p. , 2014/5

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

なし

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

ポール・ハーヴィ 大阪大学共通教育賞(2008年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 好井 千代 助教

1959 年生。1987 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学。文学修士(大阪大学)。1987 年大阪大学文学部助手。専攻:アメリカ文学。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

好井千代他 第1回福原賞, 福原記念英米文学助成基金, 1993/2

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-17 ドイツ文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 1 准教授 1 特任講師 1 助教 0

教授：三谷 研爾

准教授：吉田耕太郎

特任講師：クラウス・テルゲ

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
13	3	2	0	0	0	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	2	2	0	0
2015	2	1	0	1
計	4	3	0	1

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

本専門分野は、テキストの精密な読解という文学研究の基本姿勢を堅持しつつ、国内外の新しい研究状況をにらんで、中東欧を対象とした文化史的なアプローチによる教育プログラムを提供する。また、卒業論文・修士論文・博士論文の作成プロセスを重視し、課題発見から論文執筆までの工程をできるかぎり丁寧にフォローする、所属の学生全員参加の演習 *Forschungskolloquium* を開講するとともに、オフィスアワーを利用した個別指導を充実させる。

ドイツ語の実践的運用能力の涵養にあたっては、ネイティブ・スピーカー教員による授業を提供するとともに、現教員では十分にカバーできない研究テーマや研究方法に関して、学外非常勤講師の来講を得て、学生の知的関心の拡大に努め

る。

2. 研究

教員は、個人研究の維持発展に努めるとともに、プロジェクト研究や共同研究に積極的に参加して、コンスタントに成果発表をおこない、またレベルの高い学術専門誌などに論文を公刊する。同じく大学院学生も、プロジェクト研究や共同研究に参加して研究交流と成果発表に努めるとともに、積極的に留学や海外調査をおこなう。これらの活動により、従来の研究の枠組に拘束されない、新たなテーマ設定やアプローチの開拓に取り組む。

3. 社会連携

教員は、本専門分野修了者を主体として組織された大阪大学ドイツ文学会をはじめ、関係する学会・研究会などにおいて各自の研究活動の公開に努めるとともにその運営に積極的に参画し、また本専門分野にかかわる公共団体あるいは NGO などにたいして、積極的な専門知識の提供をおこなう。また、一般読者をも想定した著書・翻訳書の刊行に努め、研究成果の社会還元を図る。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部においては、大半の学生にとってドイツ語が初修外国語であることを考慮し、グレードの異なる演習を開講、また講義においては本分野にかかわる基礎的な知識および研究方法論を習得させるとともに、新しい研究動向の紹介にも努めた。テレーザ・シュペヒト特任講師(2014 年度まで)、クラウス・テルゲ特任講師(2015 年度より)は、実践的なドイツ語運用力の向上につとめた。赤尾光春助教は、ユダヤ文化史に関連する授業を担当している。大学院では、より高度な内容の文献演習を開講するとともに、個別的な論文指導をおこなった。また、研究室所属の学生全員が参加する演習 *Forschungskolloquium* を開講し、プレゼンテーションとディスカッションを重ねることで知識と問題意識の共有化を図った。学外からは、小松紀子(2014 年度)、阪井葉子(2014、2015 年度)、阿部賢一(2015 年度)を講師として招き、多彩かつ充実した授業を提供した。

2. 研究

三谷教授は科研費基盤研究(C)「ボヘミア文学史・民俗記述におけるローカリズムの位相」(2014 年度まで)、「〈ブラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究」(2015 年度より)の交付を受けて研究活動を展開し、その成果を著書ならびに論文として発表した。吉田准教授は、科研費基盤研究(C)「18 世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立」の交付を新たに受けて、研究活動をおこなった。シュペヒト特任講師は、科研費基盤研究(C)「ドイツ語圏におけるクルド移民文学の現状」(2014 年度まで)の交付を受けて研究活動、とりわけ大阪大学にてドイツとトルコからゲストを招きワークショップを実施した。赤尾助教は、科研費基盤研究(B)『ユダヤ自治』再考——アシュケナージ文化圏の自律的特性に関する学際的研究』の交付をうけ、大阪ならびに東京にて、国際シンポジウムを企画実施した。大学院博士後期課程学生は、それぞれ博士論文の完成を目指して、口頭発表と論文発表を重ねた。

3. 社会連携

三谷教授、吉田准教授、赤尾助教は、日本独文学会、日本 18 世紀学会、日本ゲーテ協会、阪神ドイツ文学会、大阪大学ドイツ文学会などの学術団体、神戸ユダヤ文化研究会、また関西チェコ/スロバキア協会などの国際文化交流 NGO の

運営に役員として積極的に参画し、研究成果の社会への発信および還元を図った。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

授業をととしてできるだけバラエティに富んだ、幅広いトピックについて知見を提供したことで、新しい意欲的なテーマに取り組む卒業論文や修士論文が作成されるなど、所期の教育目標はおおむね達成された。Forschungskolloquium の開講は、学生のあいだで問題意識や研究方法の共有だけでなく、プレゼンテーション技術の向上という点で、効果を挙げている。論文作成の工程管理についても、全ての学生に共通の問題として指導をおこなった。

大学院博士後期課程修了者の研究者としての就職状況の悪化を背景に、同前期課程学生の進路は多様化しつつあり、それに対応して教育プログラムを漸進的に改編するという状況が続いている。結果として、前期課程では恒常的に入学者を確保できているが、後期課程への進学者の確保とそのキャリア形成について、今後さらなる工夫と努力が欠かせないと考ええる。

2. 研究

三谷教授、吉田准教授、シュペヒト特任講師(2014 年度まで)、テルゲ特任講師 (2015 年度より)。赤尾助教は、それぞれ研究代表者として科研費を獲得するとともに、学内外のプロジェクト研究や共同研究にも参画し、積極的な研究活動を展開して論文を発表した。シュペヒト特任講師は、ドイツとトルコからゲストを招き、国際ワークショップならびに討論会を主催、赤尾助教も科研のプロジェクトをベースとした大きなシンポジウムを定期的を開催することで、国際的な視野で研究活動をすすめている。大学院学生は、学会発表や論文投稿・公刊を着実に重ねるとともに、学内外の各種の資金援助制度・交換留学制度を活用して、海外での研究活動を展開、今後とも、国内外のさらにレベルの高い学術誌への投稿・執筆が望まれる。

3. 社会連携

阪神地区を代表するドイツ語・ドイツ文学研究の拠点として、本専門分野に期待されている学会や研究会等の運営支援はけっして小さなものではなく、そうした責務に関して従来と変わらない水準を維持することができた。また、研究成果の社会への還元については、著書・翻訳書の出版のみならず、市民向けの講座・講演などをととして、目標レベルが達成されたといえる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

小松紀子「フランツ・カフカの動物物語における音のモチーフ ―音楽・騒音・雑音と共同体―」

三谷研爾、片渕悦久、吉田耕太郎

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	2	1	0	0	3
2015	0	1	1	0	0	2
計	0	3	2	0	0	5

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

島田淳子「チェコにおけるカフカ受容の始まり―パヴェル・アイスネルの『城』翻訳をめぐって」『独文学報』大阪大学ドイツ文学会, 30号, pp25-50, 2014/11（査読有）

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

島田淳子「ドイツ語作家リブシェ・モニーコヴァーの誕生―三つの境界を越えて―」, 世界文学・語圏横断ネットワーク, 立命館大学, 2014/9.

〔博士後期〕

奥山裕介「レンズの向こうの実存 ― セーアン・キェルケゴールの「水平化」批判と19世紀デンマークにおける視覚文化の関係」, キェルケゴール協会, 東洋大学, 2014/7/6

奥山裕介「『呪いの島』への帰還へアマン・バング『祖国なき彼ら』における〈他者の場所〉の風景」, 大阪大学ドイツ文学会, 大阪大学, 2014/11/22

【2015 年度】

〔博士前期〕

島田淳子「カフカからモニーコヴァーへ」，日本独文学会，シンポジウム「文学はどこに向かうのかードイツ語圏越境文学の諸相と可能性」，武蔵大学，2015/5/31

島田淳子「翻案から創作へーリブシェ・モニーコヴァーの『亡き王女のためのパヴァーヌ』におけるカフカの『城』の書き換えを手掛かりにー」，日本スラブ学研究会，立教大学，2016/3/18

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD：0 名 DC2：0 名 DC1：0 名（計 0 名）

2015 年度 PD：0 名 DC2：0 名 DC1：0 名（計 0 名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部：2 名 大学院：2 名（計 4 名）

2015 年度 学部：1 名 大学院：0 名（計 1 名）

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

9. 刊行物

2015 年度 『独文学報』31 号

2014 年度 『独文学報』30 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

朗読劇『ディブブック——二つの世界のはざままで』	2016年2月
大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2015年11月
「ふたつの世界のはざままで」『ディブブック／イヴォナ』刊行記念企画	2015年10月
阪神ドイツ文学会総会・研究発表会	2015年4月
大阪大学ドイツ文学会総会・研究発表会	2014年11月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

院生研究発表会	2015年6月、7月、10月
院生研究発表会	2014年6月、7月、10月
ハリル・グルベヤズ氏の作品上映会ならびに討論会	2014年5月

12. 教員の研究活動(2014年度～2015年度の過去2年間)

1. 三谷 研爾 教授

1961年生。1987年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて2008年4月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

1-1. 論文

三谷研爾, 中村真(共著)「19世紀ボヘミアにおける民俗学的思考の変容 — ホスチンスキーの言説を手がかりに」『大阪大学文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 43-59, 2015/3

Mitani, Kenji, “Literaturforschung als moderne Wissenschaft. Japanische Philologie bei Haga Yaichi und Anglistik bei Natsume Soseki”『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 30, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 5-23, 2014/11

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

三谷研爾「近世と初期近代のあいだ」江戸庶民文化の諸相：人文学における日本研究，大阪大学文学研究科、ハイデルベルク大学日本学科，ハイデルベルク大学, 2015/12

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011年度～2014年度、基盤研究(C) 一般、代表者：三谷研爾

課題番号：23520379

研究題目：ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究経費:2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 36,000 円

研究の目的:

本研究課題は、中欧の典型的な多言語・多文化地域だったボヘミアを対象とし、ナショナリズム対立がきわめて深刻化した1890年代～両大戦間期に、ドイツ系知識人によって蓄積された、この地域の文学史・民俗誌的な学術情報のディスコース分析をおこなう。それによって、彼らがボヘミア周縁地域の文化伝統をいかに理解・表象していたかを検証するとともに、ナショナリズムに並行・拮抗するローカリズムの思考特性を明らかにし、ナショナルなものとローカルなものが相関する知の位相に光を当てる。

3-6-2. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:三谷研爾

課題番号:15K02414

研究題目:〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費:2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 24,000 円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960 年代から 2000 年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテキストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本独文学会・学会賞審査委員, 2013 年 6 月～2015 年 5 月

関西チェコ／スロバキア協会・会長, 2009 年 4 月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008 年 1 月～現在に至る

2. 吉田 耕太郎 准教授

1970 年生まれ。東京外国語大学外国語学部（ドイツ語学科）卒。2007 年、東京外国語大学地域文化研究科博士後期課程単位取得退学。学術修士（東京外国語大学）。京都外国語大学、立命館大学、京都大学人文科学研究所等での非常勤講師を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：ドイツ文化史・思想史。

2-1. 論文

吉田耕太郎「心に向けられたまなざし『経験心理の学』(一七八三～九三年)に残された心の病をめぐる言説の検討」大阪大学文学研究科『文学研究科紀要』56, 大阪大学文学研究科, pp. 1-30, 2016/3

吉田耕太郎「育児書を読む家庭—18世紀ドイツの育児書の特徴の検討から—」大阪大学文学研究科『文学研究科紀要』55, 大阪大学文学研究科, pp. 61-79, 2015/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Yoshida, Kotaro, “Die Anfänge der japanischen Museen in der Meiji-Zeit”, Vortrag des Instituts Japanologie der Universität Heidelberg, Institut für Japanologie, Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2015/12

Yoshida, Kotaro, “Das Phänomen der kulturellen Übersetzung in der Welt der japanischen Jugendzeitschriften der Meiji- und Taishō-Zeit”, Vortrag des Instituts für Übersetzen und Dolmetschen der Universität Heidelberg, Institut für Übersetzen und Dolmetschen, Universität Heidelberg, Universität Heidelberg, 2015/12

吉田耕太郎 「「薪のある暮らし」事例報告」薪のある暮らし設立講演会, 薪のある暮らし推進協議会, 京都府立大学, 2015/9

吉田耕太郎 「〈ピーターと狼〉と子どもたち」さくらジュニアオーケストラアカデミー セミナー, さくらジュニアオーケストラアカデミー, 栗東芸術文化会館 SAKIRA, 2015/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 吉田耕太郎

課題番号: 24520352

研究題目: 18世紀ドイツの印刷メディアとしての児童文学の成立—『子どもの友』を例に

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究は、児童文学という書籍ジャンルの成立過程を解明するものである。その際手がかりとなるのは、18 世紀のドイツ各地では、『子どもの友』と題された雑誌が同時期に複数出版されていたという書誌データである。『子どもの友』と題された一群の雑誌は、編集者、出版年、出版地が異なるのはもちろん、その構成や内容も、雑誌によって様々であった。しかしこの雑誌の題名が示しているように、子どもを読者として想定していた点は共通していた。本研究は、各種の『子どもの友』のなかに書き込まれた、子どもと印刷メディアとの関係を読み解き、子どもという読者に関する歴史的な言説を総合的に検討するものである。これらの作業を通じて、ジャンルとしての児童文学が誕生してきたことを、文化史的な視点から跡付けを試みる。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

阪神ドイツ文学会・庶務幹事, 2014 年 4 月～現在に至る

日本独文学会・企画委員, 2011 年 6 月～2015 年 6 月

ゲーテ協会・関西支部理事, 2011 年 6 月～現在に至る

3. クラウス・テルゲ 特任講師

Geboren 1979 in Wolfsburg. 2008–2015 Doktors-/PhD-Studium im internationalen Promotionsstudiengang Transcultural German Studies / Deutsch als Fremdsprache an der Universität Leipzig und der University of Arizona, USA, 2015

(Dr.phil./Ph.D.)Doppelpromotion an der Universität Leipzig und der University of Arizona ,2015-Specially Appointed Associate Professor für Neuere Deutsche Literatur und Literaturtheorie am Institut für Germanistik der Universität Osaka, Japan. 専攻:ドイツ近現代文学。

3-1. 論文

なし

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

TELGE, Claus, “Der Erzähler als Ornithologe. Lesenotizen zum Birdwatching in Christoph Ransmayrs Atlas eines ängstlichen Mannes”, Gastvortrag im Rahmen des Seminars zur österreichischen Gegenwartsliteratur mit Christoph Ransmayr: Gastvortrag im Rahmen des Seminars zur österreichischen Gegenwartsliteratur mit Christoph Ransmayr, Seminars zur österreichischen Gegenwartsliteratur, Nozawa Onsen, 2015/11

TELGE, Claus, “Poetologische Clownerie. Ann Cotten aka STABIGABI als Element einer Theorie des schlechtesten Werkzeugs”, Vortrag auf dem XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG): Vortrag auf dem XIII. Kongress der Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG), Internationalen Vereinigung für Germanistik (IVG), Tongji-Universität Shanghai, 2015/8

TELGE, Claus, “in sich verschlungen sind wir manchmal redundant’: Ann Cottens Spiel mit der Sprach-DNA”, Internationale Tagung Lyrik transkulturell: Internationale Tagung Lyrik transkulturell, Lyrik transkulturell, Universität Innsbruck, 2015/1

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-18 フランス文学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 0 特任准教授 1 助教 0

教授：和田 章男、山上 浩嗣

特任准教授：エリック・アヴォカ

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
10	5	5	0	1	2	0	0

*うち留学生 1名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	3	2	0	0
2015	2	0	1	0
計	5	2	1	0

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

(大学院)

- ・フランス文学作品の高度な読解力および分析力を養うとともに、フランス語による論文作成力を身につける。
- ・修士論文・博士論文作成演習を開講し、学生による研究発表をもとに論文作成の指導を行う。
- ・学会、研究会での口頭発表、論文投稿を支援し、特に研究成果を海外に発信すべく、フランス語による執筆を指導する。

(学部)

- ・講義・演習を通じてフランス文学の基礎知識やフランス語読解の基礎的方法を習得させるとともに、フランス語作文および会話の基礎的能力を養う。

- ・卒業論文作成に向けて、研究発表、個人面談など段階的に指導を行う。
- ・交換留学生制度を積極的に活用するよう支援し、国際的感覚を学ばせる。

(共通)

- ・フランスより学者、作家、詩人等を招聘し、日仏学術交流を通して、国際的視野を獲得するとともに、実作者との直接的交流により文学研究へのさらなる興味を持たせる。
- ・研究会、卒論中間発表などには大学院生、学部生ともに参加し、質疑応答、討論を通して、研究のテーマ設定、分析法を学べるようにする。

2. 研究

- ・教員、大学院生ともに研究会、学会等で積極的に口頭発表、論文執筆に努める。またフランス語による執筆を奨励・支援する。
- ・学術誌『ガリア』を刊行する。これまで同様、フランス語による執筆を推進し、国内のみでなく、国外へも発送し、研究成果をより広く知らせよう努力する。
- ・大阪大学フランス語フランス文学会研究会を年 2 回開催し、研究成果の発表の場とするとともに、討論を通して研究を促進する。
- ・日仏の学術交流を積極的に推進し、国際的レベルの研究を促進する。
- ・フランス文学研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」を充実させ、研究成果をより広く公開する。

3. 社会連携

- ・朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、一般市民を対象としてフランスの文学、芸術、文化を紹介する。
- ・放送大学テレビ番組「フランス語入門 1」担当の主任講師を務め、フランス語・フランス文化の一般への普及に貢献する。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

- ・講義・演習では、中世から現代にかけての幅広い文学テキストを教材としながら、基礎知識および作品分析方法の習得をめざした教育を行った。
- ・卒業論文作成のために、卒論ガイダンス、個人面談、中間発表と段階を追った指導を行った。2014 年度と 2015 年度、各 2 本のきわめて優れた卒業論文が提出された。
- ・大学院生の研究指導においては、各セメスターに 1 回の研究成果の発表を行い、修士論文・博士論文および学会発表を目標とした教育を実施した。2014 年度の博士前期課程修了者は 2 名であった。うち 1 名は博士後期課程に進学し、研究を継続している。もう 1 名は博士後期課程には進学せず、大阪大学大学院文学研究科職員に採用された。2015 年度の博士前期課程修了者は 0 名であった。
- ・2014 年度には学部生 3 名が、2015 年度には学部生 4 名が、それぞれ大阪日仏センター＝アリアンス・フランセーズの暗唱大会に参加。フランス語実践能力研鑽の良い機会となった。
- ・2014 年度には、安富歩氏の講演会「誰が『星の王子さま』を殺したのか？—ハラズメントの棘」(4 月 18 日)、詩人ジ

ヤック・ルーボー氏とマリ＝ルイーゼ・シャペル氏の講演会「二人の詩人、二つの世代」(フランス語)(6月2日)、ドイツ文学研究室との大学院生共同研究発表会(11月10日)、ジャンニ・パガニーニ氏の講演会「モンテニユと近代懐疑主義」(フランス語)(3月13日)を開催した。2015年度には、関口涼子氏の講演会「味覚の言葉、言葉の味」(フランス語)(10月26日)、ならびに、ベネディクト・ゴリヨ氏の講演会「現代フランス文学におけるギリシア＝ラテン文学の遺産」(フランス語)(12月14日)を開催した。なお、すべてのフランス語の講演において、山上浩嗣教授が通訳を務めた。

- ・2014年度には、学部生1名が交換留学制度を利用しフランスに留学した。

2. 研究

- ・2013年度よりフランスの大学に留学していた博士後期課程学生の1名が、2015年3月に帰国した。
- ・2014年度、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に博士後期課程学生2名の論考が掲載された。2015年度も同様に、日本フランス語フランス文学会の関西支部会誌に博士後期課程学生2名の論考が掲載された。
- ・2014年度、日本フランス語フランス文学会の全国大会にて、博士後期課程学生の1名が発表した。2015年度も同様に、日本フランス語フランス文学会の全国大会にて、博士後期課程学生の1名が発表した。
- ・2014年度より、博士後期課程学生の1名が、学術振興会特別研究員に採用された。2015年度より、博士後期課程学生の1名が、学術振興会特別研究員に採用された。
- ・2014年度は、大阪大学フランス語フランス文学会として9月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』54号を「赤木昭三名誉教授追悼号」として刊行、9本の学術論文(うち3本はフランス語で)および、赤木昭三先生を偲ぶエッセー19本を収めた。2015年度も同様に、大阪大学フランス語フランス文学会として9月と3月に研究会を開催した。会誌『ガリア』55号を「アニエス・ディソン先生退職記念号」として刊行、11本の学術論文(うち2本はフランス語で)、アニエス・ディソン先生の思い出に関するフランス語のエッセー37本、加えて、赤木昭三先生追悼シンポジウム「パスカルと後世」の小特集記事(シンポジウム概要、エッセー2本、論文1本)を収めた。
- ・毎年恒例の第4回「関西学生フランス文学研究会」を開催し(8月29日)、大阪大学の大学院生3名、京都大学の大学院生4名、神戸大学の大学院生1名が発表した。3大学のフランス文学を専門とする学生間のきわめて有益な交流の機会となった。今後参加大学を増やしていきたいと考えている。
- ・『ガリア』所収論文は発刊の1年後に「ウェブ・ガリア」に掲載されるが、サイトへのアクセス数も順調に伸びている。

3. 社会連携

- ・教員1名が朝日カルチャーセンター大阪教室で講座「パリ 歴史風景を探る」を担当し、2週間に1回約20名の市民受講生を対象にして、フランス文学、芸術、文化を紹介した。
- ・教員1名が放送大学客員准教授(2015年度から客員教授)としてテレビ講座「フランス語入門I」を担当した。

IV. 自己点検・自己評価(2014年度～2015年度)

1. 教育

卒業論文・修士論文はいずれも優秀な論文であり、段階を踏まえた教育・指導の成果であると思われる。2014年度の博士前期課程修了生1名が文学研究科賞を受賞したことは特筆に値する。

この2年間に学外の学者、詩人、小説家の講演会を4回開催し、研究交流を推進した。とりわけフランス語による講演

会で、いつも学生たちから活発な質問が出されることは、フランス語による発言能力の向上として高く評価できる。

2. 研究

教員・大学院生はともに活発に学会発表を行った。研究成果を積極的に公表するという点で目標は達成できたと思われる。

博士後期課程の学生 2 名が日本学術振興会特別研究員に採用された（DC1、DC2 各 1 名）。

3. 社会連携

教員の 1 名が朝日カルチャーセンターおよびその他の市民向けの講座で、フランス文学、芸術、文化を紹介し、別の 1 名が放送大学客員教授（2015 年度から客員教授）として 2012 年開講のテレビ講座「フランス語入門 I」を担当（2017 年度まで継続予定）することにより、社会連携の目標も達成している。また研究室のホームページおよび「ウェブ・ガリア」のアクセス数は着実に伸びており、研究成果の公開という面においても成果を挙げている。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	0	0	0
計	0	0	0

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

なし

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	7(6)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	7(6)
2015	4(3)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	4(3)
計	11(9)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	11(9)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	3	5	0	0	8
2015	0	3	8	0	0	11
計	0	6	13	0	0	19

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

青木佑介「*Hiroshima mon amour*における水と忘却」, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 54, pp.113-122, 2015/3

青木佑介 « Marguerite Duras et la littérature de l'oubli : au travers de la mémoire dans *Hiroshima mon amour* », *EBOK*, 27, 神戸大学仏語仏文学研究会, pp.109-130, 2015/3

太田晋介「深淵の構築：フランシス・ポンジュとアトリエにおける記憶という問題系」, *GALLIA* (大阪大学フランス語フランス文学会), 54, pp.83-92, 2015/3

川上紘史「パスカルにおける《盲目》について」, 『関西フランス語フランス文学』(日本フランス語フランス文学会関西支部), 21, pp.51-62, 2015/3

松川みゆう「ルソーの戦争理論」, 『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 48, pp.87-102, 2014/12

松川みゆう「ルソーとサン＝ピエール『永久平和論』」, 『関西フランス語フランス文学』日本フランス語フランス文学会関西支部, 21, pp.123-134, 2015/3

山本健二 « La poétique de l'*Album zutique* et Verlaine zutiste –Autour du “Propos du Cercle” et du “Pantoum négligé”– », *GALLIA*, 54, pp.63-72, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

森康晃「『失われた時を求めて』における「七重奏曲」の機能—なぜ les cuivres でなければならないのか」, *GALLIA*, 55, pp.85-94, 2016/3

〔博士後期〕

安達孝信「ユイスマンスと散文詩集『パリ・スケッチ』の二人のエッチング画家」, 『待兼山論叢 文学篇』(大阪大学文学会), 49, pp. 111-128, 2015/12

安達孝信「ユイスマンスの散文詩集『葉味箱』における絵画的描写」, *GALLIA*, 55, pp.65-74, 2016/3

川上紘史「パスカルとアルノーの幼児洗礼観—習慣と教育を中心に」, *GALLIA*, 55, pp.15-24, 2016/3

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

宮田駿介「『スワン家の方へ』におけるバルベックの言説」, 第3回関西学生フランス文学研究会, 神戸大学, 2014/9

〔博士後期〕

青木佑介「*Hiroshima mon amour*における水と忘却」, 第3回関西学生フランス文学研究会, 神戸大学, 2014/9

太田晋介「フランシス・ポンジュとまどろみの詩学、夢のフィギュール—1941年のテキスト生成を中心に」、日本フランス語フランス文学会全国秋季大会、広島大学, 2014/10

太田晋介「絵画が／を語る技法：ポンジュ芸術論の方法と特色」関西マラルメ研究会 第20回研究発表会、神戸大学梅田インテリジェントラボラトリ(梅田ゲートタワー), 2015/3

川上紘史「パスカル『パンセ』における盲目表現の意味」、パスカル研究会、お茶の水女子大学, 2014/5

川上紘史「パスカルにおける《盲目》について」、日本フランス語フランス文学会関西支部、京都大学, 2014/11

松川みゆう「ルソーとサン＝ピエール『永久平和論』」、日本フランス語フランス文学会関西支部、京都大学, 2014/11

山本健二「ヴェルレーヌは「ボードレールの息子」なのか」、第33回ボードレール研究会、大阪大学, 2014/12

【2015年度】

〔博士前期〕

植村実江「スタール夫人の『コリンヌあるいはイタリア』における文学論」、第4回関西学生フランス文学研究会、大阪大学, 2015/8

竹鼻智子「ヴィヨンとゴーチエ」、第4回関西学生フランス文学研究会、大阪大学, 2015/8

森康晃「マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』における「七重奏曲」研究—フィクションによる音楽表象」、大阪大学文学研究科三谷研爾教授授業「コンフリクトの人文学」、大阪大学, 2015/5

森康晃「『失われた時を求めて』における「七重奏曲」の機能—なぜ les cuivres でなければならないのか」、関西ブルースト研究会、京都大学, 2015/9

森康晃「マルセル・ブルースト『失われた時を求めて』における音楽と啓示—ヴァントゥイユの「七重奏曲」研究」、第77回大阪大学フランス語フランス文学研究会、大阪大学, 2015/10

〔博士後期〕

安達孝信「ユイスマンスの散文詩集『薬味箱』における絵画的描写」、第77回大阪大学フランス語フランス文学会研究会、大阪大学, 2015/10

安達孝信「ユイスマンスの自然主義小説における理想的画家像の変遷—『ヴァタール姉妹』から『世帯』へ」、日本フランス語フランス文学会関西支部大会、大手前大学, 2015/12

川上紘史「パスカルとアルノーの幼児洗礼観—習慣と教育を中心に」、第4回関西学生フランス文学研究会、大阪大学, 2015/8

松川みゆう「『社会契約論』における人体の比喩」、日本フランス語フランス文学会関西支部大会、大手前大学, 2015/12

山本健二「初期ヴェルレーヌにおける『悪の華』の受容と実践」、日本フランス語フランス文学会全国大会春季大会、明治学院大学, 2015/5

YAMAMOTO Kenji, Verlaine comme poète républicain — autour des poèmes écrits sous le Second Empire, 第78回大阪大学フランス語フランス文学研究会、大阪大学, 2016/3

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD:0名 DC2:0名 DC1:1名 (計1名)

2015年度 PD:1名 DC2:1名 DC1:0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部:1名 大学院:0名 (計1名)

2015年度 学部:0名 大学院:0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

なし

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0名

2014年度:0名 2015年度:0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名

その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2014年度:0名 2015年度:0名

9. 刊行物

2014年度 *GALLIA*(機関誌:大阪大学フランス語フランス文学会) n°54

2015年度 *GALLIA*(機関誌:大阪大学フランス語フランス文学会) n°55

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

安富歩講演会「誰が『星の王子さま』を殺したのか?—ハラスメントの棘」	2014年4月18日
ジャック・ルーボー、マリ＝ルイーゼ・シャペル講演会「二人の詩人、二つの世代」	2014年6月2日
大阪大学フランス語フランス文学会(第75回)(国内学会)	2014年9月27日
大阪大学ドイツ文学研究室・フランス文学研究室大学院生合同研究発表会	2014年11月10日
大阪大学フランス語フランス文学会(第76回)(国内学会)	2015年3月7日
ジャンニ・パガニーニ講演会「モンテニユと近代懷疑主義」	2015年3月13日
関西フランス語フランス文学研究会(第4回)	2015年8月29日
大阪大学フランス語フランス文学会(第77回)(国内学会)	2015年10月3日

関口涼子講演会「味覚の言葉、言葉の味」

2015 年 10 月 26 日

ベネディクト・ゴリヨ講演会「現代フランス文学におけるギリシア＝ラテン文学の遺産」

2015 年 12 月 14 日

大阪大学フランス語フランス文学会(第 78 回)(国内学会)

2016 年 3 月 5 日

関西マラルメ研究会(第 22 回)

2016 年 3 月 18 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 和田 章男 教授

1954 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了。パリ第四大学第三課程博士（文学）。大阪大学文学部助手、言語文化部講師、助教授を経て、1993 年大阪大学文学部助教授、1999 年文学研究科助教授、2004 年より現職。専攻：フランス文学。

1-1. 論文

和田章男「プルーストにおける写真と記憶—コンブレの生成過程におけるイリエー」『ガリア』(大阪大学フランス語フランス文学会), 55, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 95-103, 2016/3

和田章男(共著)「様々な「百周年」」『記念会便り』98, 懐徳堂記念会, pp. 1-2, 2015/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

和田章男「フランス現代のモニュメント—歴史との和解・世界との和解—」日仏文化講座, CAF, 神戸国際会館, 2015/3

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

大阪大学フランス語フランス文学会・会長, 2008 年 4 月～現在に至る

日本ブルースト研究会・幹事, 2006 年 4 月～現在に至る

関西ブルースト研究会・世話役, 2005 年 9 月～現在に至る

2. 山上 浩嗣 教授

1966 年生。京都大学文学部卒業。東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学。パリ・ソルボンヌ大学にて文学博士号取得（2010 年）。東京大学大学院総合文化研究科助手、関西学院大学社会学部専任講師、同准教授、同教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2015 年より現職。放送大学客員教授も務める（2015 年～）。専攻：フランス文学・思想。

2-1. 論文

山上浩嗣「ヴォルテールのパスカル批判」『ガリア』55, 大阪大学フランス語フランス文学会, pp. 25-34, 2016/3

山上浩嗣「書評「嶋中博章『太陽王時代のメモワール作者たち—政治・文学・歴史記述』(吉田書店、2014 年2月刊)」」『西洋史学』257, 日本西洋史学会, pp. 74-76, 2016/1

Yamajo, Hirotsugu, “Le bien et le mal dans la pensée politique de Pascal”, *Revue d’Études Francophones*, 24, Centre de Recherches sur la Francophonie, Université Nationale de Séoul, pp. 347-372, 2014/12

2-2. 著書

山上浩嗣『パスカルと身体の生』大阪大学出版会, 326p., 2014/9

クリス・ベルアド, 濱田明, 山上浩嗣他(共著)『フランスところ、どころ(Aux quatre coins de France)』弘学社, pp. 30-37, pp. 54-61, 2014/4

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

山上浩嗣(訳)(Diderot, Salons)「ディドロ『サロン』抄訳(1)」『大阪大学文学研究科紀要』大阪大学文学研究科, pp. 61-98, 2016/3

山上浩嗣(訳)「ジャンニ・パガニーニ「モンテーニュと近代懐疑主義」」『思想』1098, 岩波書店, pp. 7-24, 2015/10

武田裕紀, 香川知晶, 山上浩嗣(共訳)(Descartes, Correspondance)「デカルト全書簡集 第3巻」知泉書館, pp. 5-8, pp. 29-32, pp. 147-148, pp. 174-175, pp. 219-222, pp. 225-228, pp. 249-252, pp. 272-275, pp. 278-280, pp. 285-296, pp. 315-317, pp. 321-329, 2015/2

山上浩嗣, 宮下志朗(共訳)(Antoine Compagnon, Un été avec Montaigne)「アントワヌ・コンパニオン著『寝るまえ5分のモンテーニュ「エッセー」入門』白水社, (全194頁のうちモンテーニュ『エッセー』からの引用の訳は宮下が担当、それ以外のすべて(注、あとがきも含む)は山上が担当), 2014/11

2-4. 口頭発表

山上浩嗣「モンテーニュ、デカルトの動物論とパスカル」京都大学人文科学研究所「環世界の人文科学—生きもの・なりわい・わざ」研究班(大浦康介班長)例会, 京都大学人文科学研究所, 京都大学人文科学研究所, 2015/10

山上浩嗣「パスカルと動物の魂—動物機械論と『パンセ』」「＜表象＞のパスカル—パスカル学への新たな寄与の試み」第1回研

研究会：＜表象＞のパスカル——パスカル学への新たな寄与の試み，文芸事象の歴史研究会，大阪大学豊中キャンパス，2015/7

山上浩嗣「ヴォルテールのパスカル批判」第 76 回大阪大学フランス語フランス文学会研究会：赤木昭三先生追悼シンポジウム「パスカルと後世」，大阪大学フランス語フランス文学会，大阪大学豊中キャンパス，2015/3

Yamajo, Hirotsugu, “La dignité de l’homme selon Pascal : du divertissement au pari”, Séminaire de Professeur Young-Mock LEE, Section de Littérature française, Université Nationale de Séoul, Université Nationale de Séoul, 2014/12

Yamajo, Hirotsugu, “Le bien et le mal dans la pensée politique de Pascal”, Colloque annuel d’hiver 2014 : 《 Le mal dans la Littérature française 》, Société Coréenne de Langue et Littérature Françaises, Université Ajou, 2014/12(*Revue d’Études Francophones*, 24, pp. 347-372, 2014/12)

山上浩嗣「ラ・ボエシ『自発的隷従論』における「友愛」の諸相」第 75 回大阪大学フランス語フランス文学会研究会，大阪大学フランス語フランス文学会，大阪大学豊中キャンパス，2014/9

山上浩嗣「現代フランスの文化と社会」平成 26 年度三丘(さんきゅう)セミナー，大阪府立三国丘高等学校，大阪府立三国丘高等学校，2014/7

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

山上浩嗣 平成 25 年度「科研費」審査委員表彰者，日本学術振興会，2013/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者：山上浩嗣

課題番号：26370356

研究題目：パスカルとモンテーニュの人間学および『ポール＝ロワイヤル論理学』の研究

研究経費：2014 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的：

本研究課題「パスカルとモンテーニュの人間学および『ポール＝ロワイヤル論理学』の研究」は、1) パスカルの人間学を、草稿資料をも用いて、彼自身のテキストに即して総合的に観察すること、2) パスカル思想に対するモンテーニュの影響について、二人の作品の比較を通じて実証的に考察すること、3) 『ポール＝ロワイヤル論理学』に対するパスカルの影響について検討するために、最新の批評校訂版に基づいて本著の翻訳・注解を行うこと、を主たる目的とする。以上、文献学的方法を通じて、フランス 16・17 世紀の思想潮流の変遷の一端を明らかにする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本フランス語フランス文学会・関西支部代表幹事，2015 年 6 月～現在に至る

フランス語教育振興協会(APEF)・専門委員，2014 年 1 月～現在に至る

3. AVOCAT ERIC MARC 特任准教授（常勤）

1972 年生まれ。高等師範学校卒業。ギリシア・ラテン古典文学大学教授資格取得。フランス文学博士。イエール大学

(1995-1996 年)、京都大学 (2005-2015 年) で教員を務める。フランスのリセでの教員経験もある。専攻：フランス文学。

3-1. 論文

Avocat Eric Marc, “Le théâtre de la Révolution française : entre esthétique et politique, une dramaturgie au coeur de l’événement, compte-rendu du workshop sur le théâtre révolutionnaire organisé par Eric Avocat pour le Congrès de la Société Japonaise de langue et littérature françaises (SJLLF), avec Tomoko Takase, Tomoko Nakayama, Eric Avocat, 京都大学, 1er novembre 2015” *Cahier*, (日本フランス語フランス文学会), 17, 日本フランス語フランス文学会, pp. 2-5, 2016/3

Avocat Eric Marc, “Du théâtre à la théâtralité : la scène parlementaire et la pluralité des mondes dramaturgiques” Xavier Bonnier et Ariane Ferry(共編) *Dramaturgies du conseil et de la délibération, Actes du colloque organisé à l’Université de Rouen en mars 2015*, Publications numériques du CÉRÉdI, 2016/3

Avocat Eric Marc, “Neuf acteurs en quête d’histoire : les jeux du théâtre et de la Révolution dans *Notre terreur*” Noriko Taguchi(共著) *Comment la fiction fait histoire. Emprunts, échanges, croisements, Actes du colloque franco-japonais organisé par le Département de langue et littérature françaises de l’Université de Kyoto*, Honoré Champion, pp. 311-326, 2015/10

Avocat Eric Marc, “Ecritures de l’histoire, pouvoirs de la fiction” Noriko Taguchi(共著) *Comment la fiction fait histoire. Emprunts, échanges, croisements, Actes du colloque franco-japonais organisé par le Département de langue et littérature françaises de l’Université de Kyoto*, Honoré Champion, pp. 327-342, 2015/10

Avocat Eric Marc, “ “Le discours le plus tragique et le plus pur” : une ébauche de l’hamartia révolutionnaire” *Orages. Littérature et culture*, 14, Association Orages, pp. 59-71, 2015/3

Avocat Eric Marc, “Orateurs et héros ? Un rôle de théâtre problématique sous la Révolution” Ariane Ferry(共著) *Le personnage historique de théâtre de 1789 à nos jours*, Classiques Garnier, pp. 185-200, 2014/11

3-2. 著書

Avocat Eric Marc, *Le Japon vu par Hokusai, album de l’exposition Hokusai (octobre 2014-janvier 2015)*, Editions RMN-GP, 48p. , 2014/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

Avocat Eric Marc, “Les mazarinades, une préface à la Révolution ?”, Colloque international Mazarinades : nouvelles approches, Equipe internationale sur les mazarinades, dans le cadre du Projet Mazarinades (JSPS Kakenhi 2014-2017, C-26370364), Paris, Bibliothèque mazarine et Bibliothèque nationale de France, 2015/6

Avocat Eric Marc, “A Tale of Two Cities : la politique révolutionnaire au prisme de la scène parlementaire anglaise chez Lebrun-Tossa”, Journée d’études Tradition et nouveauté dans le théâtre sous la Révolution et l’Empire, CELLF 16e-18e, Université Paris-Sorbonne, Université Paris-Sorbonne, 2015/5

Avocat Eric Marc, “La démocratie poétique de Christian Prigent : tumultes et mouvements divers à l’assemblée des mots”, Colloque international Christian Prigent : trou(v)er sa langue : Christian Prigent : trou(v)er sa langue, Bénédicte Gorrillot, Centre

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:エリック・アヴォカ

課題番号:26370355

研究題目:The political scene and the dramatic stage at the time of the French Revolution

研究経費:2014 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

I made 3 research trips to France, devoted to Library investigations as well as to attendance and participation to academic symposiums :

-June 27-July 5, 2014 : International symposium, "Christian Prigent, trou(v)er sa langue", at the Centre Culturel International de Cerisy. My paper, "La democratie poetique de Christian Prigent. Tumultes et mouvements divers a l'assemblee des mots", will be published in 2016.

-August 4-August 28, 2014 : this stay was devoted to intensive research sessions at the Bibliotheque Nationale de France (Paris).

-March 4-March 25, 2015 : International symposium, "Dramaturgie du conseil et de la deliberation", held at the Universite de Rouen. I conducted a round table with Mr Marcel Lemonde, former examining magistrate at the Khmers Rouges Tribunal (2006-2010). I also gave a lecture, "Eloquence et dramaturgie : l'histoire des assemblees revolutionnaires d'apres Francois-Alphonse Aulard". The transactions of the symposium are to be published in the coming years.

Those stays in France allowed me to keep in touch, and to make new contacts, with many scholars involved in similar research fields, and to discuss with them about future projects in common. Therefore, I also made to Tokyo, in order to attend to the meeting of the Japanese Society for the Study of French Language and Literature (May 24-25, 2014, Ochanomizu University). I had a paper published, last month, in the French academic journal, Orages. Litterature et culture (n° 14, mars 2015) : "Le discours le plus tragique et plus pur. Une ebauche de l'hamartia revolutionnaire"

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-19 英語学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：岡田 禎之、加藤 正治、神山 孝夫

准教授：田中 英理

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部**	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
52	2	5	0	0	1	0	0

*うち留学生 0名、社会人学生 0名

**英米文学・英語学専修として

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生*	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	13	2	0	0
2015	17	0	0	1
計	30	2	0	1

*英米文学・英語学専修として

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

大学院に関する目標は、(1) (形式)意味論、機能文法、語用論、認知言語学、言語変化論、生成文法、比較言語学などに関わる研究論文を読み、内容理解と高度な分析方法を教育・指導すること、(2) 修士論文作成演習と博士論文作成演習の授業を開講し、年数回の研究発表と本の書評を課し、これらの論文が書けるよう教育・指導すること、(3) 国内学会あるいは国際学会での口頭発表と論文投稿のための教育・指導を行うことである。学部に関しては、(1) (形式)意味論、機能文法、語用論、認知言語学、音声学、言語変化論、生成文法、比較言語学などの領域において、基本的な知識が習得できるよう教育・指導すること、(2) 卒業論文作成演習の授業を開講し、年間予定をたてそれに沿って卒業論文が書ける

ように教育・指導すること、(3) 中学校、高等学校の英語教員や英語に関わる職業に携わる学部生もいるので、英語の基礎学力を高めるよう教育・指導をすることである。また学部生と大学院生の学問的な連携体制を形成するために、研究室や授業形態等に工夫を行うことや、研究室の活動報告書を兼ねている HLC News を編纂してホームページに掲載することで、卒業論文と修士論文の題目と要旨、授業計画、院生の研究活動、就職状況等の情報を学部卒業生、大学院修了生に連絡することも目標としている。

2. 研究

教員は、各自の予定・計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究を年次計画に沿って行い、研究成果をあげるよう努める。大学院生には、国内学会あるいは国際学会においてできるだけ多くの口頭発表と論文発表等ができるように指導する。学術雑誌 *Osaka University Papers in English Linguistics* を刊行し、国内外の関係者・大学等に合わせて約 400 部を送付する。大学院生の研究を促進するために、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」を開催する。

3. 社会連携

研究成果に関する執筆依頼等には積極的に協力することとし、教室の HP を充実し、研究成果や資料の公開に努めることを目標とする。また、学会や各種団体の委員・研究員就任の依頼には、積極的に対応し、研究成果と専門知識の活用を図ることとし、学会活動などにも積極的に参加し、研究成果の普及を図るよう努力する。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学部では、学校文法、機能文法、(形式)意味論、語用論、音声学、生成文法、歴史言語学関係の講義と演習のほか卒業論文作成演習を行い、一定の成果がえられた。大学院では、理論言語学、機能文法理論、(形式)意味論、語用論関係の講義と演習、論文書評の演習、博士論文作成演習、修士論文作成演習などを行なった。また、HLC News を編纂し、英語学研究室や院生の研究活動、就職状況等を同窓生の方々に報告した。

2. 研究

教員は各自の計画に合わせて論文を発表し、科学研究費の研究も各自の年次計画に沿って実行している。大学院学生の研究活動は、論文が 12 本(2014 年度に 4 本、2015 年度に 8 本)、口頭発表が 16 本(2014 年度に 8 本、2015 年度に 8 本)と活発に行われた。*OUPEL* についても予定通り 17 号を刊行し、国内外の研究者、大学図書館などに送付した。また、「待兼山ことばの会」と「阪大英文学会」も当初の予定通りに開催した。

3. 社会連携

教室の HP は逐次更新し、常に最新の情報が提供できるように努めている。また教員は、日本英語学会、日本英文学会(関西支部)などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、事務局長等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、卒業論文・修士論文いずれでも、個人差はあるものの比較的水準の高い成果がでている。これらの点から、所期の目標は達成できたと考えている。

2. 研究

教員・大学院生の研究活動は活発に行われ、研究会や学会の開催も予定通り行われた。前記の活動を総括すれば、全体的な目標はほぼ達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の通り、教員は、日本英語学会、日本英文学会などの各種学会の理事、評議員、編集委員、運営委員、事務局長等の職務を遂行しており、学会活動にも積極的に対応している。また、教室のHPでは、教員・大学院生の研究活動や講演会開催等の最新情報を逐次更新しており、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	0	0	0
2015	1	0	1
計	1	0	1

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

田中秀治 “Resistance to Structure Building” 2016/3

主査：岡田禎之 副査：加藤正治、神山孝夫、田中英理、大庭幸男

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	1(1)	2(2)	0(0)	1(0)	4(3)
2015	3(2)	1(1)	4(0)	0(0)	0(0)	8(3)
計	3(2)	2(2)	6(2)	0(0)	1(0)	12(6)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	2	4	2	0	0	8
2015	5	3	0	0	0	8
計	7	7	2	0	0	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

Kikuchi, Yuki “Metonymical Expansion of Affected NPs in Resultative Constructions,” *Osaka Literary Review* 53, Osaka University Graduate School of Letters English Literature and Linguistics, pp. 1-17, 2015/1/31.

〔博士後期〕

Tanaka, Hideharu “No Syntactic Association with Focus: A View from the Japanese Additive Particle *Mo*,” 『待兼山論叢 - 文学篇 - 』 48 号, 大阪大学文学会, pp. 53-69, 2014/12/25.

Tanaka, Hideharu “A Note on the Escape Hatch: Toward an Ordering Theory of Transfer,” 『言葉のしんそう（深層・真相）- 大庭幸男教授退職記念論文集 - 』, 大庭幸男教授退職記念論文集刊行会, pp. 335-347, 2015/3/30.

Yamaguchi, Masashi “Syntax of Resultatives in Japanese: From A View Point of Reverse Agree,” *Osaka Literary Review* 53, Osaka University Graduate School of Letters English Literature and Linguistics, pp. 19-32, 2015/1/31.

【2015 年度】

〔博士前期〕

Hirayama, Yuto “How to Update Information States: Review of McCready (2015),” *OUPEL* 17, English Linguistics of Osaka University Graduate School of Letters, pp. 69-84, 2015/12.

〔博士後期〕

Kikuchi, Yuki “The Cognitive Process of English Resultative Constructions: From the Perspective of Focus Chain,” *OUPEL* 17, English Linguistics of Osaka University Graduate School of Letters, pp. 23-36, 2015/12.

Yamaguchi, Maiko “A Case of Embedded Main Clause Properties in Japanese,” *KLS* 35, Kansai Linguistics Society, pp. 265-276, 2015/06.

Yamaguchi, Maiko “Some Consequence from the Double Accusative Constraint in Raising to Object Construction in Japanese,” Proceedings of the 17th Seoul International Conference on Generative Grammar (SICOGG17), pp. 547-561, 2015/08.

Yamaguchi, Maiko “A Syntactic OCP Approach and Its Consequences in Japanese and Korean,” *OUPEL* 17, English Linguistics of Osaka University Graduate School of Letters, pp. 37-54, 2015/12.

Yamaguchi, Masashi “On Depictives: Where They Adjoin,” *KLS* 35, Kansai Linguistics Society, pp. 277-288, 2015/6/14.

Yamaguchi, Masashi “A Syntactic Approach to the Resultatives in Japanese Revisited.” *OUPEL* 17, English

Linguistics of Osaka University Graduate School of Letters, pp. 55-67, 2015/12.

Yamaguchi, Masashi “On the Unified Approach of Syntax to the Resultatives,” *Machikaneyama Ronso* 49, The Literary Society of Osaka University, pp. 89-109, 2015/12/25.

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

菊池由記「英語の結果構文における被動名詞句のメトニミー拡張について」 蛭池認知言語学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2014/8/30.

水谷謙太「量化の副詞と Alternative Situation」 関西言語学会第 39 回大会, 大阪大学, 2014/6/14.

Mizutani, Kenta “Adverbial Quantifiers, Individual-level Predicates, and Their Interaction with Focus Sensitive Expressions,” Semantic Workshop in Tokai (東海意味論研究会), Nagoya Gakuin University, 2014/12/21.

〔博士後期〕

Tanaka, Hideharu “Focus Particle Phrases in Japanese: Against the Modifier Hypothesis,” *GLOW in Asia X*, Poster Session, National Tsing Hua University, Taiwan, 2014/5/25.

Tanaka, Hideharu “The Distribution of Adjuncts in Japanese: Toward a Probe-goal Theory of Scrambling,” *Formal Approaches to Japanese Linguistics* 7, Poster Session, National Institute for Japanese Language and Linguistics, Japan, 2014/6/27.

山口麻衣子 “A Case of Embedded Main Clause Properties in Japanese,” 関西言語学会第 39 回大会, 大阪大学, 2014/6/15.

山口真史「アスペクトを用いた日本語における結果構文に対する統語的研究」日本言語学会第 146 回大会, 法政大学, 2014/6/7.

山口真史 “On Depictives: Where They Adjoin,” 関西言語学会第 39 回大会, 大阪大学, 2014/6/14.

【2015 年度】

〔博士前期〕

Hirayama, Yuto “The Reportative Evidential and Multiple Information States,” Formal Approaches to Japanese Linguistics 8th, Mie University, Feb. 19, 2016.

〔博士後期〕

菊池由記「英語の結果構文の認知プロセス —焦点連鎖の観点から—」 日本言語学会第 150 回大会, 大東文化大学, 2015/06/20.

Tanaka, Hideharu “Japanese EPP Revisited: Negative Polarity and Degree Anaphora,” English Linguistics Society of Japan 8th International Spring Forum 2015, Seikei University, Tokyo, April 19th 2015.

Tanaka, Hideharu “Pseudo-gapping: Evidence for Overt Quantifier Raising,” A poster presentation at The 40th Annual Penn Linguistics Conference, University of Pennsylvania, Philadelphia, March 19th 2016.

Yamaguchi, Maiko “Is Factivity a Real Culprit in Disallowing the Root Transformations in Japanese?” Poster presented at WAFL 11, University of York, UK, June 6, 2015.

Yamaguchi, Maiko “Some Consequence from the Double Accusative Constraint in Raising to Object Construction in Japanese,” Poster presented at SICOOG17, Kyung Hee University, Korea, August 6, 2015.

Yamaguchi, Maiko "A New Approach to the Mystery of the Factivity in Root Transformations," The English Linguistics Society of Japan 33rd Annual Conference, Kansai Gaidai University, Japan, November 22, 2015.

Yamaguchi, Masashi "On Nominal Depictive Predicates: A View From Agreement," 日本英語学会第33回大会, 関西外国語大学, 2015/11/22

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 1名 (計1名)

2015年度 PD: 0名 DC2: 0名 DC1: 0名 (計0名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

2015年度 学部: 0名 大学院: 0名 (計0名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

田中秀治 博士後期課程 三重大学 講師 2016/4

本田隆裕 博士後期課程 神戸女子大学 助教 2015/4

嶋村貢志 博士後期課程 三重大学 講師 2015/4

今西祐介 博士後期課程 関西学院大学 助教 2014/4 (『年報2014』で掲載していないため、今号にて報告)

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 2名

2014年度: 1名 2015年度: 1名

＜内訳＞ 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 2名
その他 0名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

9. 刊行物

- 2014 年度 *OLR (Osaka Literary Review)* No. 53 2014/12
- 2015 年度 *OUPEL (Osaka University Papers in English Linguistics)* Vol. 17 2015/12
- OLR (Osaka Literary Review)* No. 54 2015/12

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

岡田禎之 日本英語学会 事務局長 2013 年 9 月～2015 年 4 月

シンポジウム開催 2015 年 8 月 8 日 “Nominalization Festival”

講演者：柴谷方良(ライス大学)、野間純平(関西大学非常勤講師)、西岡美樹(大阪大学)、

Akua Campbell (ライス大学)、Haowen Jiang (ライス大学)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大英文学会 47 回大会	2014 年 10 月 18 日
阪大英文学会 48 回大会	2015 年 10 月 24 日
第 92 回待兼山ことばの会	2014 年 7 月 5 日
第 93 回待兼山ことばの会	2014 年 12 月 19 日
第 94 回待兼山ことばの会	2015 年 8 月 8 日
第 95 回待兼山ことばの会	2015 年 12 月 18 日

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 岡田 禎之 教授

1965 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士(大阪大学、2001 年)。第 37 回市河賞(2003 年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010 年 4 月より現職。専攻：英語学。

1-1. 論文

岡田禎之 「日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』56, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 21-60, 2016/3

岡田禎之 「名詞の語彙概念拡張と歴史的変遷に関する初期的調査」大庭教授退職記念論文集刊行会(共編著)『言葉のしんそう(深層・真相)』英宝社, pp. 597-608, 2015/3

1-2. 著書

Okada, Sadayuki, Tanaka, Eri, (eds.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 17, 大阪大学大学院文学研究科 英語学研究室, pp. 1-90, 2015/12

岡田禎之, 大庭幸男教授退職記念論文集刊行会他(共編著)『言葉のしんそう(深層・真相)』英宝社, 681p. , pp. 597-608, 2015/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田禎之「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」(日本英文学会北海道支部 59 回大会 Proceedings)『日本英文学会 2014 年度支部大会 Proceedings』pp.109-110. 2015/9

1-4. 口頭発表

Okada, Sadayuki, “Asymmetrical Distributions in Nominal Conceptual Expansion”, International Cognitive Linguistics Conference 13, International Cognitive Linguistics Society, Northumbria University, Newcastle, 2015/7

岡田禎之 (招待講演)「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」日本英文学会北海道支部 59 回大会, 日本英文学会北海道支部, 北海道武蔵女子短期大学, 2014/10

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2013 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:25370551

研究題目:語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費:2014 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

2015 年度 直接経費 700,000 円 間接経費 210,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に関して、項位置と付加詞位置における概念拡張可能性には非対称的な関係があることを、英語や日本語を中心としてコーパスからデータを集積し、証明するとともに、意味変化の方向性として、項位置において発現した新しい意味解釈が慣習化することによって、付加詞位置にも浸透していくという意味変化の方向性を仮定し、これを検証していく。このためには、現代語のコーパスだけではなく歴史的なコーパスデータの集積、検証も必要であり、またある程度広範な名詞表現についての検証を行わなければならないため、多くの時間と労力が必要となる。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・事務局長, 2013 年 9 月～2015 年 4 月

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

阪大英文学会・幹事, 2010 年 4 月～現在に至る

2. 加藤 正治 教授

1955 年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了（英語学講座）。文学修士（名古屋大学、1979 年）。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。
専攻：英語学。

2-1. 論文

加藤正治 「If = though である可能性」『待兼山論叢』49, 大阪大学文学会, pp. 1-8, 2016/3

加藤正治 「Beowulf にみられる否定辞 ne について」『言葉のしんそう(深層・真相) 一大庭幸男教授退職記念論文集一』英宝社, pp. 193-202, 2015/3

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員, 2013 年 4 月～2015 年 3 月

3. 神山 孝夫 教授

1958 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士（文学）（東北大学）。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史。

3-1. 論文

神山孝夫 「OE byrðen “burden” vs. fæder “father” —英語史に散発的に見られる [d] と [ð] の交替について—」『言葉のしんそう(深層・真相) 一大庭幸男教授退職記念論文集一』英宝社, pp. 155-166, 2015/3

神山孝夫 「ヨーロッパ諸語における様々な r 音について —起源と印欧語学への示唆—」『待兼山論叢 文化動態論篇』48,

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫（招待講演）「Vinaver の秘められた経歴」. シンポジウム「Bédier, Vinaver そして Field へ —Malory 学への最新情報—」, 国際アーサー王学会日本支部 2015 年度年次大会, 立教大学, 2015/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・会長, 2016 年 1 月～現在に至る

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～現在に至る

大阪言語研究会・世話人, 2007 年 1 月～現在に至る

4. 田中 英理 准教授

1975 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。2007 年博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)、愛媛大学教育学生支援機構英語教育センター講師、大阪医科大学総合教育講座講師を経て 2015 年 10 月より現職。専攻：英語学。

4-1. 論文

Suzuki Kohei, Naoki Sakata, Tanaka, Eri 他, “Gaps and Similarities between Medical Teachers’ Expectations and Students’ Self-Assessed Needs for English” *JACET Kansai Journal*, (JACET 関西支部), 17, pp. 21-40, 2015/10

田中英理 「Can-Do Statements を利用した医学英語教育ニーズの分析—医学部教員へのアンケート結果について」 *Journal of Medical English Education*, (日本医学英語教育学会), pp. 15-24, 2015/2

田中英理 「Measure Phrases の意味論分析: 程度分析とベクトル意味論の比較」『人文研究』(大阪医科大学), 大阪医科大学, pp.

75-95, 2014/4

田中英理 「動詞句における度量句の分布とスケール構造」『言葉のしんそう(深層・真相)』英宝社, pp. 361-372, 2014/4

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

田中英理 「The semantics of measure phrases across categories」阪大英文学会, 大阪大学, 2015/10

Tanaka, Eri, "The semantics of measure phrases in the verbal domain", Poznan Linguistic Meeting: 45 th Poznan Linguistic Meeting, Adam Mickiewicz University, 2015/9

田中英理 「動詞のスケール構造と二種類の Measure Phrases の分布について」日本言語学会: 第 149 回日本言語学会, 愛媛大学, 2014/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2011 年度～2015 年度、若手研究(B)、代表者: 田中英理

課題番号: 23720220

研究題目: スケール構造の普遍性— 英語の数量表現を通じて —

研究経費: 2014 年度 直接経費 101,000 円 間接経費 0 円

2015 年度 直接経費 660,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

スケールに関わると考えられる言語表現のうち、形容詞、動詞、前置詞などを取り上げ、それぞれの統語カテゴリにおいてスケール構造が普遍的かどうかを検証することを目的とする。また、日本語と英語の違いを観察することによって、通言語的な普遍性があるかどうかを検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・編集委員, 2012 年 10 月～現在に至る

2-20 日 本 語 学

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 5 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：青木 直子、石井 正彦、田野村忠温、渋谷 勝己、マシュー・バーデルスキー

准教授：高木 千恵、三宅 知宏

助教：東条 佳奈

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
38	16	19	0	12	2	7	0

*うち留学生 44 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	16	3	3	2
2015	16	8	0	3
計	32	11	3	5

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習を開講するとともに、専門分野全体の中間発表会を開いて、分野内での議論の活性化をはかる。
2. 大学院については、各種学会で口頭発表を行ったり学術雑誌に論文を投稿したりするための個別指導を充実させる。
3. 学部については、日本語学や日本語教育学をめぐる基本的な知識や技能を幅広く習得できるよう、授業を組織する。
あわせて、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、的確に把握しつつ、初歩的な分析を行える能力を養成する。

4. また、大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行う。
5. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、両者の学問的連携体制を維持する。

2. 研究

1. 1人平均で、教員は2本の研究論文を執筆し、博士後期学生は1本の研究論文の執筆と1件の口頭発表を行う。教員はまた、個人で行う研究のほか、外部の研究者や学生との、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事する。
2. 博士前期学生は、今後、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことを視野に入れた研究を推進する。
3. 研究室全体で研究雑誌『阪大日本語研究』を刊行し、日本語研究界に専門分野の研究成果を発信する。

3. 社会連携

1. フィールド調査、言語分析、教育実践研究等の結果を速やかにまとめ、資料を現地等に還元する。また印刷物やHPによって、一般に公開する。
2. 高校生等の自主研究や公開講演会に積極的に協力することなどを通して、研究成果を社会に還元することにつとめる。
3. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力する。

Ⅲ. 活動の概要(2014年度～2015年度)

1. 教育

設定した目標を達成するべく、活動を行った。具体的には、

1. 大学院、学部ともに、論文作成演習や専門分野全体の論文中間発表会をととして、専門分野内での議論を活性化した。
2. 引き続き、学部開講科目について、配当年次を明示した資料をガイダンス時に配布する等により、科目間の有機的なつながりが学生の目に明らかになるように配慮した。
3. 大学院については、各種学会の口頭発表や査読雑誌への論文投稿にあたって、個別指導を行った。
4. 学部については、日本語学の基本的な知識や技能を幅広く習得できる講義を開講した。また、演習において、日本語や日本語教育をめぐるさまざまな言語的・社会的問題を自発的に発見し、初歩的な調査と分析を行ったり、参加型の授業で協働的学習を行ったりする機会を提供した。
5. 大学院、学部ともに、フィールド調査やコーパスの作成、言語データの分析、日本語教育実習等を取り入れた実践的な課題追求型の演習科目を開講し、指導を行った。
6. 大学院生と学部生との共通演習を開講し、研究室内において調査・研究の手法等の教育が効果的に行われるようにした。

2. 研究

1. 教員、大学院生ともに、目標とした数の研究論文をほぼ執筆した。各教員はまた、科学研究費その他による共同研究プロジェクトに従事した。大学院博士後期課程学生の中には、研究協力者として他大学や研究機関における研究プロジェクトに従事した者もいる。
2. 博士前期学生は、演習で研究成果の発表を行いつつ、学会での口頭発表・研究論文の執筆を行うことのトレーニングを重ねた。
3. 『阪大日本語研究』を刊行し、研究成果を学界に発信した。

3. 社会連携

1. フィールド調査の報告論文を発表するなど、研究成果を社会に広めることにつとめた。
2. 地域の外国人の日本語学習支援活動、各種日本語教育機関の企画などに、積極的に協力した。具体的には、文化庁「生活者としての外国人のための日本語教育事業」への協力、中間支援団体「兵庫日本語ボランティアネットワーク」の相談役、NPO 法人「神戸定住外国人支援センター」主催の日本語ボランティア研修会の講師などをつとめた。
3. その他、学会の事務局や委員を積極的に引き受けた。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

個人差はあるものの、演習等での活発な議論をとおして、比較的水準の高い博士論文、修士論文、卒業論文が提出されている。

また講義や低学年配当の演習をとおして、学生の基礎体力を築くことができている。

以上、所期の目標はおおむね達成できたと思われる。

2. 研究

目標はおおむね達成できたと思われる。

3. 社会連携

社会連携の目標についてもほぼ達成されたと思われる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	2	0	2
2015	3	0	3
計	5	0	5

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

全 紫蓮「現代日本語における副詞の意味と機能—〈感動詞的用法〉の派生を中心に—」 2015/3

主査：工藤真由美 副査：渋谷勝己、田野村忠温

野間純平「方言におけるノダ相当形式の発展—大阪方言と石川方言を中心に—」 2015/3

主査：渋谷勝己 副査：高木千恵、田野村忠温

酒井雅史「滋賀県長浜市方言の素材待遇形式に関する記述的研究」2015/9

主査：高木千恵 副査：渋谷勝己、マシュー・バーデルスキー、西尾純二（大阪府立大学教授）

原田走一郎「南琉球八重山黒島方言の文法」2016/3

主査：渋谷勝己 副査：高木千恵、田野村忠温

東条佳奈「現代語における『名詞型助数詞』の記述的研究」2016/3

主査：石井正彦 副査：渋谷勝己、青木直子

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	2(2)	0(0)	7(6)	0(0)	0(0)	9(8)
2015	4(4)	2(1)	8(5)	0(0)	0(0)	14(10)
計	6(6)	2(1)	15(11)	0(0)	0(0)	23(18)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	2	2	1	0	0	5
2015	0	1	0	0	1	2
計	2	3	1	0	1	7

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士後期〕

大河内瞳「Professional learning community における教師の学び—タイの大学で教える日本語教師のケース・スタディ—」『阪大日本語研究』27, pp.195-221, 2015/3

小田佐智子「タイ人配偶者の否定表現に関する事例研究—自然習得と教室学習を比較して—」『阪大日本語研究』27, pp.137-161, 2015/3

酒井雅史「滋賀県長浜市における素材待遇形式の運用—流動的運用とその要因—」『阪大日本語研究』27, pp.163-194, 2015/3

酒井雅史「宮津方言における素材待遇形式ナル」『阪大社会言語学研究ノート』13, pp.16-27, 2015/3

李吉鎔・全紫蓮「ブラジル日系社会における言語使用の動的諸相」『日本学研究』43, pp.311-336, 2014/9

全紫蓮「『ちょっと』の意味と機能—＜副詞的用法＞と＜感動詞的用法＞の連続性を中心に—」『日語日文学研究（日本語学・日本語教育篇）』88(1), pp.97-120, 2014/11

東条佳奈「名詞型助数詞の類型—助数詞・準助数詞・擬似助数詞—」『日本語の研究』第10巻4号, pp.16-31, 2014/10

- 東条佳奈「名詞型助数詞の構文と傾向」『待兼山論叢 日本学編』48, pp.83-100, 2014/12
- 東条佳奈「名詞型助数詞の用法：準助数詞「セット」と「組」を中心に」『阪大日本語研究』27, pp. 109-136, 2015/3
- 韓娥凜「政治談話における他称のレトリックストラテジー—日韓の街頭演説にみられる使用を中心に—」『待兼山論叢 日本学編』48, pp.101-119, 2014/12
- 森田耕平「動詞の第二中止形が表す意味—アスペクトと動詞のタイプに注目して—」『阪大日本語研究』27, pp. 83-108, 2015/3
- 【2015 年度】
- 〔博士後期〕
- 栄苗苗「日本語が上達した中国人研修生の日本語学習アプローチ」『阪大日本語研究』28, pp. 143-164, 2016/2
- 欧麗賢「日本語学習者がインターネット上のリソースを教室外の学習に利用し始めるメカニズム：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) による理論構築」『阪大日本語研究』28, pp. 77-108, 2016/2
- 小田佐智子「自然習得者における中間言語的特徴の定着化—自然談話データにみる連体修飾表現を中心に—」『阪大日本語研究』28, pp. 53-76, 2016/2
- 小田佐智子「宮津市方言における連母音融合の特徴」『阪大社会言語学研究ノート』14, pp. 1-11, 2016/3
- 小田佐智子「岐阜方言の原因・理由に表れるモンデ」『阪大社会言語学研究ノート』14, pp. 67-75, 2016/3
- 郭菲「中国人留学生の日本の大学院の学術的コミュニティへの参加—文系大学院生のケース・スタディー—」『阪大日本語研究』28, pp. 109-142, 2016/2
- 張允娥「同性間・異性間の会話における〈理解〉と〈同意・共感〉—ポライトネスの観点からみる日韓差と男女差—」『日本語学研究』45, pp. 65-83, 2015/9
- 張允娥「日韓自由会話の枠組設定の試み—話題と参加形式の観点から—」『待兼山論叢 日本学編』49, pp.57-72, 2015/12
- 張允娥「宮津市方言における待遇表現の使い分け—属性と地域差に注目して—」『阪大社会言語学研究ノート』14, pp. 36-52, 2016/3
- 瀬尾匡輝・瀬尾悠希子・米本和弘「日本語教師はどのように教育の商品化を経験しているのか」『言語文化教育研究』13, pp. 83-96, 2015/12
- 森田耕平「動詞中止形の継続相の意味・機能—シテイテとシテオリとの比較による分析—」『日本語の研究』12(1), pp. 18-33, 2016/1
- 森田耕平「動詞の第二中止形の意味と機能—姿勢変化動詞の分析—」『阪大日本語研究』28, pp. 23-52, 2016/2
- 〔科目等履修生〕
- 大河内瞳「初任日本語教師の傷つきやすさ—タイの大学で教えるひろみさんのストーリー—」『JALT 日本語教育論集』13, pp. 19-35, 2015/5
- 大河内瞳「ツアー実習を担当した日本語教師の学び—タイの A 大学で教える上山さんのケース・スタディー—」『日本語教育紀要』12, pp. 97-107, 2015/9

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

なし

〔博士後期〕

栄苗苗「日本語が上達した研修生の日本語学習アプローチ」第10回国際日本語教育日本研究シンポジウム—変化する国際社会における課題と可能性—, 2014/11

小田佐智子「自然習得者の連体修飾構造における中間言語体系」第二言語習得研究会, 2014/12

郭菲「中国人留学生の日本の大学院という実践共同体への参加」第10回国際日本語教育日本研究シンポジウム—変化する国際社会における課題と可能性—, 2014/11

井上文子・松田美香・酒井雅史・白坂千里「ロールプレイ会話にみる敬語運用の世代差・性差・地域差—丁寧語使用を中心に—」社会言語科学会第34回大会, 立命館アジア太平洋大学, 2014/9

井上文子・松田美香・酒井雅史・白坂千里「ロールプレイ会話にみる敬語運用の世代差・性差・地域差—丁寧語使用を中心に—」社会言語科学会第34回大会, 立命館アジア太平洋大学, 2014/9

野間純平「石川県若年層方言におけるノダ相当形式—バリエーションとその成立過程に注目して—」阪大日本語学研究会, 大阪大学, 2014/10

【2015 年度】

〔博士後期〕

小田佐智子「自然習得者の格助詞運用—談話データに見られる中間言語的特徴について—」第二言語習得研究会, 2015/12

張允娥「日韓の同性・異性間の談話における聞き手のボライトネス行動—「理解」と「同意・共感」を中心に—」韓国日本語学会, 2015/3

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

黒木邦彦・高木千恵・松丸真大・岩田美穂・藤本真理子・白岩広行・山本友美・久保菫愛・平塚雄亮・森勇太・野間純平・酒井雅史・坂井美日・門屋飛央「甑島里方言記述文法書」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦(編)『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究 アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明 サブプロジェクト 鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究』2015/3

黒木邦彦・高木千恵・松丸真大・岩田美穂・藤本真理子・白岩広行・山本友美・久保菫愛・平塚雄亮・森勇太・野間純平・酒井雅史・坂井美日・門屋飛央「甑島里方言記述文法書」森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦(編)『大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携研究 アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明 サブプロジェクト 鹿児島県甑島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究』2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

林貴哉(共著)『未来共生プログラム 東日本大震災被災地復興フィールドワーク報告書 vol.3』2016/3

林貴哉「書評: Bonny Norton, Identity and Language Learning: Extending the Conversation (2nd edition) Bristol: Multilingual Matters, 2013」『未来共生学』3, 2016/3

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 PD : 0 名 DC2 : 0 名 DC1 : 0 名 (計 0 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 0 名 大学院 : 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 2 名 (計 2 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

脇坂真彩子 九州大学留学生センター、講師、2014/9

野間純平 島根大学、講師、2016/4

原田走一郎 国立国語研究所、特任助教、2016/4

水戸貴久 別府溝部学園短期大学、講師、2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 3 名

2014 年度 : 0 名 2015 年度 : 3 名

＜内訳＞ 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 2 名
その他 1 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2014 年度 : 0 名 2015 年度 : 1 名

9. 刊行物

『阪大日本語研究』(機関誌・年 1 回) 定期刊行物

1989 年度～現在に至る

『阪大社会言語学研究ノート』(論文集・年 1 回) 逐次刊行物

1999 年度～現在に至る

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

日本語文法学会第 15 回大会 (2014 年 11 月 22 日～23 日)

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

阪大日本語学研究会 2014 年 10 月 4 日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館 2 F 会議室

研究発表：野間純平さん (D3) 「石川県若年層方言におけるノダ相当形式—バリエーションとその成立過程に注目して—」

講演：西尾純二先生（元助手、99D、大阪府立大学）「21 世紀の日本語生活に何が起きているか」

工藤真由美先生「阪大での 16 年」

阪大日本語学研究会 2015 年 10 月 4 日 於 大阪大学豊中キャンパス 待兼山会館 2 F 会議室

研究発表：小田（武藤）佐智子さん（D3）「自然習得者の談話データに見る格助詞の運用

—中間言語的特徴を中心に—」

東条佳奈さん（D3）

「「擬似助数詞」の用法と機能について」

講演：山東功さん（00D、大阪府立大学）

「近代国語辞書と文法—『官版 語彙』をめぐって—」

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 青木 直子 教授

1954 年生。1983 年、上智大学外国語学研究科言語学専攻博士前期課程修了。PhD（Trinity College Dublin, 2003）。産能短期大学助教授、静岡大学教育学部助教授、大阪大学助教授を経て、2004 年 4 月より現職。専攻：第二言語教育学。

1-1. 論文

青木直子「CLIL と日本語教育」*ASTE Newsletter*, (Association of Sophian Teachers of English), 62, Association of Sophian Teachers of English, pp. 11-20, 2014/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Aoki, Naoko, “Reality on the ground: Social and not so social aspects of learner autonomy”, Identity and Mobility in the Globalized World: Challenges for Education: Symposium, International Christian University, 2015/10

青木直子「21 世紀の言語学習：拡大する地平、ぼやける境界、新たな可能性」カナダ日本語教育振興会年次大会，カナダ日本語教育振興会，サイモン・フレーザー大学，2015/8

青木直子「教室外の学びを考慮した授業」カナダ日本語教育振興会年次大会，カナダ日本語教育振興会，サイモン・フレーザー大学，2015/8

Aoki, Naoko, Yukako Oku, Yoshio Nakai, “Benefits of simplification: From Japanese Language Portfolio to Learning Log”, 12th Nordic workshop on developing learner autonomy in language learning and teaching, Nordic Workshop, University College Capital, Zahle College of Education, 2015/8

Aoki, Naoko, “Benefits of tandem learning”, カナダ日本語教育振興会年次大会，カナダ日本語教育振興会，サイモン・フレーザー大学，2015/8

Aoki, Naoko, "Learning to help in tandem learning: Experience of pre-service teachers of Japanese", AILA World Congress 2014, International Association of Applied Linguistics, Brisbane Convention and Exhibition Centre, 2014/8
Ou, L., Wakisaka, M., Aoki, Naoko, "Long term effects of tandem learning", Independent Learning Association Conference 2014, Independent Learning Association, King Mongkut's University of Technology Thonburi, Bangkok, 2014/6(*Doing Research in Applied Linguistics 2 / Independent Learning Association Conference: Programme Book*, pp. 41-42, 2014/6)

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2013 年度～2015 年度、挑戦の萌芽研究、代表者: 青木直子

課題番号: 25580114

研究題目: タンデム学習を行う日本語学習者の学びの諸相に関する探索的研究

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2015 年度 直接経費 600,000 円 間接経費 180,000 円

研究の目的:

タンデム学習は、異なる言語を母語とする 2 人がパートナーとなり、互いの得意な言語を学び合うという学習方法である。本研究の目的は、タンデム学習を行う日本語学習者の学習活動の録音データを、言語コミュニケーション能力のどのような要素がどのように学ばれているのかという視点で、ヨーロッパ共通言語参照枠(以下 CEFR)の理論的枠組みに従って探索的に分析するケーススタディを行うことである。それによって、様々な利点があるとされているタンデム学習における学びの諸相をより具体的に明らかにし、タンデム学習研究を第二言語習得研究の文脈に結びつけることを目指す。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

International Association of Applied Linguistics Research Network for Learner autonomy・Convenor, 2011 年 11 月～2014 年 11 月

"Innovation in Language Learning and Teaching" Routledge・Editorial Board Member, 2006 年 1 月～現在に至る

2. 石井 正彦 教授

1958 年生。東北大学文学部卒、東北大学大学院文学研究科修了。博士(文学)(東北大学)。国立国語研究所研究員、同室長、大阪大学准教授を経て、2009 年 4 月より現職。専攻: 現代日本語学。

2-1. 論文

石井正彦「無性格語は実在するかー特化係数とその散布度による検討ー」斎藤倫明・石井正彦(共編著)『日本語語彙へのアプローチー形態・統語・計量・歴史・対照ー』おうふう, pp. 147-163, 2015/5

2-2. 著書

斎藤倫明, 石井正彦(共編著)『日本語語彙へのアプローチ—形態・統語・計量・歴史・対照—』おうふう, 2015/5

田野村忠温, 石井正彦, 杉本武他(共著)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, 2014/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

石井正彦「交互平均法とリジット解析」計量国語学会第 59 回大会:計量国語学会第 59 回大会, 計量国語学会, 神戸大学, 2015/9『計量国語学』30-3, 2015/12)

石井正彦(招待講演)「コーパス日本語学の基礎—「言語的連結パターン」によるマルチレベル分析—」コーパス日本語学の現状と展望:韓国日本語学会第 30 回国際学術発表大会, 韓国日本語学会, カトリック大学, 2014/9『韓国日本語学会第 30 回国際学術発表大会』pp. 1-7, 2014/9)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・大会企画運営委員長, 2012 年 6 月～2015 年 5 月

日本語学会・評議員, 2009 年 6 月～現在に至る

3. 田野村 忠温 教授

1958 年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学(言語学専攻)。文学修士(京都大学、1984)。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻:言語学・日本語学。

3-1. 論文

田野村忠温「「科学」の語史——漸次的・段階的変貌と普及の様相——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』56, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 123-181, 2016/3

田野村忠温「中国語の外来名表記に関する覚書——地名 Amsterdam の意識をめぐる議論の検討ほか——」『待兼山論叢』49(文化動態論篇), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 9-34, 2015/12

田野村忠温, 王晓云・赵平(译)「意译地名“牛津”、“剑桥”的产生和兴衰——近代中日语言中词汇交流的一面——」赵平・

刘利音(編)『跨文化交际与区域经济发展论』(光明日报出版社), pp.21-29, 2015/8

田野村忠温「意識地名「牛津」「劍橋」の発生と消長」『大阪大学大学院文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 81-137, 2015/3 [沈国威・内田慶市(編)『東アジア言語接触の研究』(関西大学出版部)に再録, pp.73-138, 2016/2]

田野村忠温「BCCWJ」の資料的特性——コーパス理解の重要性——」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 119-151, 2014/12

田野村忠温「日本語研究とインターネット」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 153-162, 2014/12

田野村忠温「スクリプト言語」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 163-172, 2014/12

3-2. 著書

田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, 2014/12

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田野村忠温「複合助詞」「文の構造」佐藤武義・前田富祺他(編)『日本語大事典』(朝倉書店), pp. 1729-1730, pp. 1785-1787, 2014/11

田野村忠温「コーパス言語学」日本語文法学会(編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp. 234-235, 2014/7

3-4. 口頭発表

田野村忠温「日本語コーパスの現在」中国海洋大学(青島), 2016/3

田野村忠温「日中語彙交流の過去と現在」中国海洋大学(青島), 2016/3

田野村忠温「「科学」の起源——中国起源説の検証——」2016 年度国際シンポジウム「東アジア言語の接触研究」, 漢字文化圏近代語研究会, 東華大学(上海), 2016/3『「東アジア言語の接触研究」予稿集』pp. 121-124, 2016/3)

田野村忠温「「科学」の語史」関西大学東西学術研究所 2015 年度第 10 回研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2016/1

田野村忠温「意译地名“牛津”、“剑桥”的产生和兴衰——近代中日语言中词汇交流的一面——」武汉大学史学博士论坛“新史料与新史学”, 武汉大学, 2015/7

田野村忠温「意識地名「牛津」「劍橋」の発生と消長」国際シンポジウム「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」, 漢字文化圏近代語研究会, 早稲田大学, 2015/3『「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」予稿集』pp. 101-106, 2015/3)

田野村忠温「近代日中両語における語彙交流の一面」“跨文化交际与区域经济发展”国际研讨会, 贵州财经大学, 2014/7『“跨文化交际与区域经济发展”国际研讨会会议手册』p. 7, 2014/7)

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費:2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円
2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本言語学会・会計監査委員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・常任委員, 2006 年 4 月～2015 年 3 月

日本言語学会・評議員, 2000 年 4 月～2015 年 3 月

4. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士(大阪大学)。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：日本語学。

4-1. 論文

渋谷勝己「山形市方言の文末詞の相互承接」『阪大日本語研究』28, 文学研究科日本語学講座, pp. 1-21, 2016/3

渋谷勝己「第二言語習得理論」『日本語学』34-14, 明治書院, pp. 138-150, 2015/11

渋谷勝己「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として—」『社会言語科学』(社会言語科学会), 18-1, 社会言語科学会, pp. 23-39, 2015/9

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:25370516

研究題目:江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 100,000 円 間接経費 30,000 円

2015 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

これまでの社会言語学研究は、基本的に現代語を対象とするものであったが、その方法は過去の言語にも適用できるはずである。本研究は、江戸後期に執筆活動を行った著作者が残した文献を総体的に分析することによって、その著作者がもっていたスタイル能力とスタイル運用能力を明らかにすることを目的とするものである。現在かたちをなしつつある歴史社会言語学的な研究のひとつの試みである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・理事、評議員, 2015 年 5 月～現在に至る

社会言語科学会・理事、研究大会委員長, 2015 年 4 月～現在に至る

日本文法学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014 年 10 月～現在に至る

5. マシュー・バーデルスキー 教授

1967 年生。2006 年 UCLA 大学院東アジア言語文化科 PhD 修了。カリフォルニア州立大学ロングビーチ校非常勤講師、スワスモア大学（米ペンシルバニア州）客員助教授・メロン財団ポストドックフェロー、同准教授を経て、2011 年 10 月より現職。専攻：日本語学。

5-1. 論文

BURDELSKI, Matthew, “We-focused and I-focused stories of World War II in guided tours at a Japanese American museum.” Teun van Dijk(ed.) *Discourse & Society*, 27-2, Sage, pp. 156-171, 2016/3

BURDELSKI, Matthew, “Reported speech as cultural gloss and directive: Socializing norms of speaking and acting in Japanese caregiver-child triadic interaction” Srikant Sarangi(ed.) *Text & Talk*, 35-5, De Gruyter, pp. 575-595, 2015/12

BURDELSKI, Matthew et al., (共著), “Storytelling in guided tours: Practices, engagement, and identity at a Japanese American museum.” Michael Bamberg(ed.) *Narrative Inquiry*, 24-2, John Benjamins, pp. 328-346, 2014/12

5-2. 著書

川島理恵, マシュー・バーデルスキー(共著) 『「全米日系ミュージアムの会話分析」』『日本人と日系人の物語一会話分析・ナラティブ・語られる歴史』山崎敬一・やまだようこ・山崎晶子・池田佳子・小林亜子編』世織書店, pp. 270-285, 2016/3

マシュー・バーデルスキー 『「養育者一子ども間の会話における謝罪表現の言語社会化」』『子育ての会話分析一大人と子どもの「責任」はどうか』高田明・嶋田容子・川島理恵(pp. 99-120).』昭和堂, 21p., 2016/3

BURDELSKI, Matthew, “Children instructing kin and peers in politeness routines in Japanese”. In B. Pizziconi & M. Locher (eds.), *Teaching and learning (im)politeness (pp. 211-246)*, de Gruyter Mouton, 21p. , 2015/9

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

BURDELSKI, Matthew, “Japanese personal stories of war, internment, and discrimination.”, 全国語学教育学会 (JALT) :Focus on the learner, JALT, 静岡コンベンションアーツセンター, 2015/11

BURDELSKI, Matthew, “Interactional routines, explicit instruction, and affective stance in child-child interactions in Japanese.”, International Pragmatics Association (IPrA) 14th Conference:Language and adaptability, International Pragmatics Association (IPrA), University of Antwerp, 2015/7

BURDELSKI, Matthew, (基調講演) “Verbal and embodied instruction and response in caring for a pet”, NII 湘南会議:Instruction and Instructed Action: Embodied Reciprocity in Interaction, 湘南国際村センター、神奈川県, 2015/3

BURDELSKI, Matthew, (パネリスト) “Interactional routines and explicit instruction in child-child interactions in a Japanese preschool”, American Association for Applied Linguistics Conference, American Association for Applied Linguistics , Fairmont Royal York Hotel, Toronto, Canada, 2015/3

マシュー・バーデルスキー, 川島理恵 「全米日系人ミュージアムの会話分析」第3回埼玉大学人文社会科学研究所連続シンポジウム:混成する文化:歴史と物語の交点, 埼玉大学人文社会科, 埼玉大学東京ステーションカレッジ, 2015/2

BURDELSKI, Matthew et al., (基調講演) “Storytelling and interactional techniques in guided tours at an ethnic history museum”, 4th International Conference on Conversation Analysis, International Society for Conversation Analysis, University of California, Los Angeles, 2014/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

マシュー・バーデルスキー 大阪大学総長顕彰 2015(教育学部), 大阪大学, 2015/7

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:マシュー・バーデルスキー

課題番号:15K02567

研究題目:子どもの言語社会化:感情、社会的行為とアイデンティティ

研究経費:2015 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

研究の目的:

子どもは、一般的に、生まれてからわずか 3～4 年の間に他者とコミュニケーションを行う能力の基盤を習得する。そして言語を習得すると同時に、社会的行為・規範・思いやり・責任・道徳性・ポライトネス(丁寧さ)・アイデンティティなどといった文化的要素も身につける。つまり、相互行為への参加が言語・文化習得に先立って可能となっているのである。本研究の目的は、この言語・文化習得といった言語社会化のプロセスにある相互行為(親子、子ども同士などの会話)に参加することがいかに可能となり、実現されているのかを、実際の相互行為場面や社会活動(食事、遊び、本読み聞かせなど)を観察・記録し、収録したデータから量的・質的分析を通して明らかにすることである。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 高木 千恵 准教授

1974 年生まれ、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻修了、博士（文学）。神戸松蔭女子学院大学非常勤講師、京都光華女子大学非常勤講師、関西大学専任講師、同准教授を経て、2010 年 10 月より現職。専攻：社会言語学・方言学。

6-1. 論文

高木千恵「現代関西方言」井上史雄・木部暢子(共編著)『はじめて学ぶ方言学 ことばの多様性をとらえる 28 章』ミネルヴァ書房, pp. 100-108, 2016/3

高木千恵「関西の接客場面における形式名詞ブンの拡張用法」『阪大日本語研究』27, 文学研究科日本語学講座, pp. 1-28, 2015/3

白坂千里, 高木千恵(共著)「宮津フィールドワーク概要」『阪大社会言語学研究ノート』13, 文学研究科日本語学講座社会言語学研究室, pp. 10-15, 2015/3

高木千恵「-azin」窪菌晴夫監修, 森勇太・平塚雄亮・黒木邦彦(編)『甕島里方言記述文法書』(大学共同利用機関法人人間文化研究機構連携研究「アジアにおける自然と文化の重層的関係の歴史的解明」サブプロジェクト(研究代表者・窪菌晴夫)「鹿児島県甕島の限界集落における絶滅危機方言のアクセント調査研究」研究成果報告書)『人間文化研究機構国立国語研究所窪菌晴夫研究室, pp. 139-140, 2015/3

6-2. 著書

高木千恵『地域方言の現在—ことばの地域差とその変容—』(市民大学叢書 87)『富山市教育委員会市民学習センター, 40p., 2014/11

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

なし

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 三宅 知宏 准教授

1965 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程退学。博士(文学) (大阪大学)。鶴見大学専任講師，同准教授，同教授を経て，2016 年 4 月より現職。専攻：日本語学・言語学。

7-1. 論文

三宅知宏 「日本語の「補助動詞」と「文法化」・「構文」」秋元実治・青木博史・前田満『日英語の文法化と構文化』ひつじ書房，pp. 220-249, 2015/11

三宅知宏 「対照方言研究の試み—不定語疑問文をめぐる—」『鶴見大学紀要』52，鶴見大学，pp. 1-28, 2015/3

三宅知宏 「日本語の「補助動詞」について」『鶴見日本文学』19，鶴見大学大学院，pp. 1-20, 2015/3

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

三宅知宏 「埋め込み」，「制限的」，「生成日本文法論」，「対格」，「文法性」，「名詞句」，佐藤武義 前田富祺『日本語大事典』朝倉書店，2014/11

三宅知宏 「エピステミック・モダリティ(epistemic modality)」日本語文法学会『日本語文法事典』大修館書店，pp. 59-60, 2014/6

7-4. 口頭発表

MIYAKE Tomohiro, “*Kakarimusubi* and *Wh*-Interrogative Sentences in Modern Japanese”, International Workshop: *Kakarimusubi* from a Comparative Perspective, 国立国語研究所，国立国語研究所，2015/9

青木博史，三宅知宏，川瀬卓，他（パネリスト）「日本語の「構文」と形態的有標性」日本語学会 2015 年度春季大会：ワークショップ「日本語の構文と構文変化」，日本語学会，関西学院大学，2015/5

三宅知宏 「日本語の「文法」を考えると」東京言語研究所 2015 年度春期講座，東京言語研究所，東京言語研究所，2015/4

三宅知宏 「対照研究の視点に基づく日本語研究」言語の対照および類型論的研究の会，津田塾大学言語文化研究所，津田塾大学，2014/12

三宅知宏 「否定疑問文と確認要求的表現—方言との対照をふまえて—」『日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究』研究発表会，国立国語研究所プロジェクト，大阪大学，2014/12

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・庶務委員長, 2015 年 6 月～現在に至る

日本語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・大会運営委員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本語文法学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

日本語学会・大会企画運営委員, 2012 年 6 月～2015 年 5 月

日本語文法学会・学会誌委員, 2010 年 4 月～2016 年 3 月

8. 東条 佳奈 助教

1984 年生。2016 年、大阪大学大学院文学研究科文化表現論専攻博士後期課程修了。博士（文学）。2016 年 4 月より現職。
専攻：現代日本語学。

8-1. 論文

東条佳奈 「名詞型助数詞の用法―準助数詞「セット」と「組」を中心に―」『阪大日本語研究』27, 文学研究科日本語学講座, pp. 109-136, 2015/3

東条佳奈 「名詞型助数詞の構文と傾向」『待兼山論叢』48(日本学篇), 文学研究科, pp. 83-100, 2014/12

東条佳奈 「名詞型助数詞の類型―助数詞・準助数詞・擬似助数詞―」『日本語の研究』(日本語学会), 10(4), 日本語学会, pp. 16-31, 2014/10

8-2. 著書

なし

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

8-4. 口頭発表

東条佳奈 (パネリスト)「Adobe Acrobat を用いた自作コーパスと文法研究への活用」コーパス日本語学の現状と展望: 韓国日本語学会第 30 回国際学術発表大会, 韓国日本語学会, カトリック大学, 2014/9『韓国日本語学会第 30 回国際学術発表大会論文集』pp. 15-22, 2014/9)

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

8-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-21 美学・文芸学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 4(兼任 1) 講師 1 助教 1

教授：藤田 治彦、内田 次信

准教授：加藤 浩、三宅 祥雄、高安 啓介、田中 均(兼任)

特任講師：西井 奨

助教：渡辺 浩司

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
37	8	8	0	4	0	0	0

*うち留学生 5名、社会人学生 0名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	15	4	2	1
2015	16	3	0	0
計	31	7	2	1

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部の教育においては、基礎的な講義、重要な個別の主題について探究する講義、原典講読の能力を養う演習を開講することによって、基礎的な知識の定着を図るとともに、自ら問題を探究する能力を育成する。卒業論文作成のための演習では、研究経過のプレゼンテーションとそれについての議論を通じて、卒業論文執筆へ向けて個々の学生の問題関心を深める。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、美学・文芸学研究の視野を広げることを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、学会での口頭発表にも耐える専門的な研究報告を行い、そ

れについて、教員と大学院生が互いの観点を尊重し討論を行う。

学部・大学院を通じて、オフィスアワーその他の機会において、指導教員による個別指導を充実させる。

加えて、芸術学講座の他の専門分野、芸術史講座、および文化動態論専攻アート・メディア論講座との連携をはかるとともに、ティーチング・アシスタント制度を通じて、大学院生に対する教育指導能力についてのトレーニングの場を提供し、学部教育や博士前期課程教育を充実させる。

2. 研究

本学では美学と文芸学が一つの専修・専門分野を構成しており、これは全国的に見ても特色のあることだが、古代以来の修辞学の伝統から美学が生まれた歴史的経緯に即したものである。

美学分野は哲学の一分野として、美や崇高などのカテゴリー、芸術の概念、感性の働きなどを原理的に考察するが、美術、デザイン、映画などの個別領域を専門とする芸術学とも密接な関係を保ち、理論的な深みと実証的な堅実さのどちらも重視して、多様化する美的・芸術的諸現象を探究する。

文芸学分野は、現代文芸学と西洋古典学との統一を理念とする。すなわち、研究の地歩を豊饒なる古典作品の世界に仮託しつつ、精力的に古今東西の文芸作品の研究も行う。

上記の専修・専門分野の特質を踏まえて、各教員は、期間中に 2 点以上の著書または論文を執筆すること、また翻訳、書評を積極的に執筆することを目標とする。博士後期課程の各大学院生は、積極的に国内外の学会で研究成果を発表し、期間中に 1 点以上の査読付き論文を執筆することを目標とする。また研究推進のため、科学研究費補助金その他の競争的外部資金、および日本学術振興会特別研究員に積極的に応募する。

研究に関してはさらに以下の目標を設定する。紀要『文芸学研究』、『美学研究』を継続的に刊行すること。美学会、意匠学会、民族芸術学会、映像学会など関係学会、および学内の文学会、待兼山芸術学会の運営に協力するほか、文芸学研究会、ギリシア・ローマ神話学研究会を開催し、学内外の共同研究に積極的に参画すること。また海外から研究者を招聘する、国際的な研究集会に参加するなど、国際的な学術交流を推進すること、以上である。

3. 社会連携

国・地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営、芸術祭の開催などに、専門的な知見を生かして協力する。

各種学会の運営に参画する。

研究会を広く公開して研究成果の普及を図るほか、ウェブサイト等を通じて研究室の活動内容を外部に発信するなどの活動を通じて、美学・文芸学という学問分野の社会的認知度の向上に努める。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

「Ⅱ. 掲げた目標」に対応する授業を開講した。ティーチング・アシスタント制度も積極的に活用し、教育の充実に努めた。

美学分野で特記すべき点は以下の通りである。藤田教授が G30（グローバル 30）の英語授業「日本の美学」を提供した。また非常勤講師として、樋田豊次郎、杉山卓史の各氏が授業を担当した。

文芸学研究室では、古代ギリシア語ならびにラテン語の教育に力を入れた。文学部の外国語科目にギリシア語とラテン語がなく、文学部において西洋の古典語を学ぶ機会が少なくなっている現状を考えると、当研究室が提供する古典語の教

育はますます重要になると思われる。

渡辺助教と竹内助教は英語の文献講読を担当した。

2. 研究

各教員の著書、論文等の刊行の実績、および科学研究費補助金の採択状況は、「V. 基本情報」の「12. 教員の研究活動」のとおりである。また大学院生の研究業績は、「2. 大学院生等による論文発表等」のとおりである。

美学分野では日本学術振興会特別研究員（DC2）に2名が採用された。

文芸学研究室はギリシアとローマの文学や神話を中心とする研究を行った。内田次信教授は、古代ギリシアの散文文学、ギリシア神話を研究し、加藤准教授はプラトンの文芸論やプロクロスの詩学などを、また渡辺助教がアリストテレスの悲劇論、ローマの弁論術などをそれぞれ研究した。文芸学研究会では、機関誌として『文芸学研究』が順調に定期刊行されてきている。この研究会は本研究室を事務局兼活動母体としながらも、広く西日本の他大学の多くの研究者、学生とも連携したものであり、研究発表会を年3回開催すると共に、機関誌を年1冊発行し、そのたびごとに合評会を催すなど、活発な活動を継続した。また日本学術振興会特別研究員（PD）を1名受入れている。

国際的な学術交流に関しては、Stephen Halliwell 教授（セント・アンドルーズ大学）の講演会を開催した。教員の国際学会での発表は下記「教員の研究活動」のとおりである。

3. 社会連携

外部役員等の引き受け状況および芸術評論の活動については、下記「教員の研究活動」および「大学院生等の業績」に挙げたとおりである。

文芸学研究室は facebook ページからの研究・教育活動の発信に努めた。

また文化庁補助金「大学を活用した文化芸術推進事業」の助成を受け、文学研究科を中心として運営された「アート・フェスティバル人材育成プログラム」に、田中准教授は事業担当者として、渡辺助教は事務局として参画した。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

教育については全体として目標を達成したと自己評価する。学生の自由な発想を重視しつつ、学問の基礎的な知識の確実な定着を図る取り組みを今後も継続する。

2. 研究

研究については、目標を上回る成果を上げたとして自己評価する。大学院生については、国内外の学会における口頭発表および学会誌への論文の投稿に向けた研究指導を今後も充実させる。

3. 社会連携

社会連携活動は全体として目標を達成したと自己評価する。専門的知見に基づく社会連携活動を今後も継続する。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	1	1	2
2015	0	1	1
計	1	2	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【論文博士】

栗山 和樹 「劇場用映画における背景音楽の理論的配置と作曲法」 2016/3

主査：三宅祥雄 副査：永田靖、伊東信宏、上倉庸敬

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	0(0)	2(2)	0(0)	2(2)	4(4)
2015	1(1)	0(0)	3(3)	0(0)	0(0)	4(4)
計	1(1)	0(0)	5(5)	0(0)	2(2)	8(8)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	2	7	0	0	0	9
2015	1	4	2	0	0	7
計	3	11	2	0	0	16

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)著書

なし

(2)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

TSURUTA, Etsuko. "Henry van de Velde and Japanese Anonymous Design", Proceedings of the 9th International

Committee of Design History and Design Studies, (University of Aveiro), pp.465-469, 2014/7

〔博士後期〕

川野恵子「J.-G.ノヴェール『手紙』(1760)における独創性概念——自然としての個別的な身体」『芸術学』, 三田芸術学会, 第18号, pp.52-66, 2014/3

KAWANO, Keiko "The narrative of the dance in the Letters by J. -G. Noverre : studying the concept of the action", Proceedings of the Thirty-seventh Annual Conference, (the Society of Dance History Scholars), pp.117-126, 2014/3

瀧波崇「D・ボードウェル『フィクション映画の語り』における『語り手』についての考察」『フィロカリア』待兼山芸術学会, 第32号, pp.1-9, 2015/3

【2015年度】

〔博士前期〕

KOBAYASHI, Tomoyo "Architectural Education in Sweden from the late 19th to the early 20th century—National Romanticism and the Stipendieresa (Stipendiary Study Trip)—" The Journal of the Asian Conference of Design History and Theory, No.1, 2016 pp.39-49. (オンラインでも閲覧可 <http://acdht.com/journal.html>)

〔博士後期〕

松岡佳世「ハンス・ベルメール作品における〈交換可能性〉の表象——戦時期の制作をめぐって」, 『フィロカリア』第33号, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, pp.1-25, 2016/3

佐藤紗良「研究ノート：アルハンブラ宮殿「ライオンのパティオ」——ラファエル・コントレラスの修復——」, 『美学研究』9, pp.59-64, 大阪大学大学院美学研究室, 2016/1

佐藤紗良「アルハンブラ宮殿の近代の修復」, 『待兼山論叢』49, 芸術篇, pp.19-31, 大阪大学大学院文学研究科, 2015/12

(3)口頭発表

【2014年度】

〔博士前期〕

鶴田悦子「Henry van de Velde のブリュッセル時代」第56回意匠学会大会, お茶の水女子大学, 2014/7/26

鶴田悦子「Henry van de Velde の世紀末」第65回美学会全国大会, 若手フォーラム, 九州大学, 2014/10/12

TSURUTA, Etsuko, "Henry van de Velde and Japanese Anonymous Design", The 9th International Committee for Design History and Design Studies, University of Aveiro, 2014/7/10

〔博士後期〕

KAWANO, Keiko, "The narrative of the dance in the Letters by J. -G. Noverre : studying the concept of the action", The 2014 SDHS/CORD joint annual conference: Writing Dancing/Dancing Writing, University of Iowa, 2014/11/15

川野恵子「J.-G.ノヴェール『手紙』(1760)における独創性概念——自然としての個別的な身体」美学会西部会第301回研究発表会, 京都工芸繊維大学, 2014/12/6

佐藤紗良「19世紀のアルハンブラ宮殿——ラファエル・コントレラスによる修復とその背景——」第65回美学会全国大会, 若手フォーラム, 2014/10/12

瀧波崇「映画の視点と語り手」第40回映像学会全国大会, 沖縄芸術大学, 2014/6/8

松岡佳世「ハンス・ベルメール作品における〈交換可能性 interchangeabilité〉をめぐって——ミル収容所でのマックス・エルンストとの共同制作から——」第65回美学会全国大会, 九州大学, 2014/10/13

関スラ「モガに対するまなざし、日本の『知人の愛』から朝鮮の『迷夢』まで」第 65 回美学会全国大会, 若手フォーラム, 九州大学, 2014/10/12

【2015 年度】

〔博士前期〕

胤森由梨「ディドロのブーシェ論--『1759 年のサロン評』から『1765 年のサロン評』を中心に」, 第 66 回美学会全国大会, 早稲田大学, 2015/10/10

Kobayashi Tomoyo "Architectural Education in Sweden from the late 19th to the early 20th century — National Romanticism and the Stipendieresa (Stipendiary Study Trip) —" at the the Asian Conference of Design History and Theory", 2015/10/04

小林朋世「ストックホルム市庁舎におけるスウェーデン建築の「ナショナル・ロマンティシズム」」第 66 回美学会全国大会, 若手研究者フォーラム, 2015/10/10

〔博士後期〕

佐藤紗良「19 世紀以降のアルハンブラ宮殿の修復—ライオン宮を中心に—」スペイン・ラテンアメリカ研究会研究発表会 口頭発表, 上智大学, 2015/4/19

佐藤紗良「19-20 世紀のアルハンブラ宮殿—パティオの修復とその背景—」意匠学会第 57 回大会, 武庫川女子大学, 2015/7/25

関スラ「1930 年代日本映画の中の近代女性像に対するスタイル研究—映画『淑女は何を忘れたか』『隣の八重ちゃん』にみられる「曖昧な女」を中心に—」日本映像学会第 41 回大会, 京都造形芸術大学, 2015/5/30

関スラ「朝鮮映画『迷夢』から見る朝鮮新女性に対する考察—映像分析を中心に」待兼山芸術学会第 26 回研究発表会, 大阪大学, 2016/3/26

(4)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

王シカ「記憶の旅路を遡って 「フィオナ タン まなざしの詩学」展」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2015/3/3

宋瀟「御堂筋の新しい顔見つける 「おおさかカンヴァス 2014」」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/11/25

宋瀟「記憶あせず後世に届ける 「阪神・淡路大震災から 20 年」展」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2015/2/10

米田千佐子「アートエリア B1『サーチプロジェクト vol.3 アpartment・ワンワンワン〜中之島 1 丁目 1-1 で繰り広げる 111 日〜』」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/5/13

米田千佐子「若林奮<<3.25 日のクロバエの羽>>」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/9/23

〔博士後期〕

佐藤紗良「『源氏物語』をたどる／「夕顔の君」の面影訪ね」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/6/24

佐藤紗良「阪神甲子園球場／球児の想いと重なる風情」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/9/30

松岡佳世「SIMONDOLL 四谷シモン」『大阪日日新聞』関西美術探訪, 2014/11/18

【2015 年度】

〔博士前期〕

小林朋世 インターンシップ 国立国際美術館学芸課教育普及室 2015/4/1～2016/3/31

〔博士後期〕

松岡佳世共訳、竹本忠雄監修、『霊性と東西文明 日本とフランス―「ルーツとルーツ」対話』、勉誠出版、2016、pp.143-159
 （ベルナール・フォール「太陽の暗黒面―伊勢再発見のために」）および pp.167-179（アミナ・タハ＝フセイン・オカ
 ダ「19世紀フランス絵画における「詩人礼讃」―ギュスターヴ・モローを例に」）
 松岡佳世、展覧会評「〈オブジェ〉は何でありうるか―ボンピドゥ・センター〈シュルレアリスムとオブジェ〉展（2013/10/30
 ～2014/3/3）をめぐって」、『美学研究』第9号、大阪大学大学院美学研究室、pp.71-79、2016/3
 佐藤紗良、展覧会評「高瀬川、一之船入の『高瀬舟』」『大阪日日新聞』2015/4/14 付朝刊、(10)
 関スラ、書評「映画『淑女は何を忘れたか』にみられる「曖昧な女」に対するスタイル演出」、『IMAGE ART AND
 SCIENCES-日本映像学会報』172号、p.13（日本映像学会、2015）

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

なし

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD：0名 DC2：2名 DC1：0名（計2名）
 2015年度 PD：0名 DC2：0名 DC1：0名（計0名）

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部：2名 大学院：0名（計2名）
 2015年度 学部：1名 大学院：1名（計2名）

6. 専門分野出身の研究者

（大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について）

福元崇志、博士後期課程、国立国際美術館、研究員、2015/4
 松岡佳代、博士後期課程、ベルナール・ビュフェ美術館、学芸員、2015/4

7. 専門分野出身の高度職業人

（2014年度～2015年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 3名
 2014年度：2名 2015年度：1名
 ＜内訳＞ 技術職 1名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 1名
 その他 1名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1名
 2014年度：1名 2015年度：0名

9. 刊行物

2014 年度	『フィロカリア』32 号
2014 年度	『文芸学研究』19 号
2015 年度	『美学研究』9 号
2015 年度	『文芸学研究』20 号
2015 年度	『フィロカリア』33 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

【学会等の開催】

美学会西部会第 300 回研究発表会	2014 年 9 月 27 日
待兼山芸術学会第 25 回研究発表会	2015 年 3 月 29 日
第 1 回アジア・デザイン史学論国際会議	2015 年 10 月 3～4 日

【事務局等の引き受け】

民族藝術学会事務局	2014 年度～2015 年度
待兼山芸術学会事務局	2014 年度～2015 年度

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

文芸学研究会	2014 年度～2015 年度
第 54 回研究会・『文芸学研究』第 18 号合評会	2014 年 6 月 21 日
第 55 回研究発表会	2014 年 9 月 20 日
第 56 回研究発表会	2014 年 12 月 20 日
ギリシア・ローマ神話学研究会	
第 13 回講演会・研究会	2014 年 8 月 1 日
Stephen Halliwell 教授（セント・アンドルーズ大学）講演会	2015 年 3 月 28 日

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 藤田 治彦 教授

1951 年生。大阪市立大学大学院生活科学研究科博士課程修了。学術博士（大阪市立大学 1983 年）。京都工芸繊維大学工芸学部助教授、ルーヴェン・カトリック大学客員教授、大阪大学大学院文学研究科准教授などを経て、現職。専攻：美学／芸術学。

1-1. 論文

藤田治彦「現代に生きるモリスと柳—アーツ・アンド・クラフツ運動と民藝運動—」『アーツ・アンド・クラフツと民藝』（調査研究最終報告書），文学研究科藤田研究室，pp. 1-10, 2015/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

Fujita, Haruhiko, "Nature, Architecture, and Urban Landscape", Pouvoirs de l'architecture, Université de Nice Sophia Antipolis, 2015/4

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤田治彦 大阪大学共通教育賞(2003 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2003/11

藤田治彦 意匠学会賞, 意匠学会, 2002/11

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(A) 一般、代表者: 藤田治彦

課題番号: 23242014

研究題目: アーツ・アンド・クラフツと民藝—ウィリアム・モリスと柳宗悦を中心に—

研究経費: 2014 年度 直接経費 5,500,000 円 間接経費 1,650,000 円

研究の目的:

イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動と日本の民藝運動は、ともに芸術文化史上重要な動向で、いまでは世界的に認知されているが、歴史的には難しい関係にある。民藝運動の指導者柳宗悦が、アーツ・アンド・クラフツ運動の先駆者ウィリアム・モリスに大きな刺激を受けながらも、それを否定的に乗り越えようとしたからである。この複雑な関係は現代にまで及び、両者の関係が、それぞれの専門家グループによって徹底的に論議されたことはない。本研究は、アーツ・アンド・クラフツ運動とウィリアム・モリスの研究者と、民藝運動と柳宗悦の研究者が互いに協力して、両運動の思想上および実践上の関係を解明するとともに、その徹底的比較を通じて初めて見えてくる事実を踏まえ、それぞれの運動の世界史的意味を明らかにすることである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

国立国際美術館評議会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

大学設置・学校法人審議会・専門委員, 2014 年 4 月～2015 年 10 月

美学会・委員, 2013 年 10 月～2016 年 9 月

国立美術館運営委員会・委員, 2013 年 4 月～現在に至る

独立行政法人国立文化財機構外部評価委員会・委員, 2008 年 4 月～現在に至る

Journal of Modern Craft・editorial board member, 2007 年 1 月～現在に至る

Design and Culture・editorial board member, 2007 年 1 月～現在に至る

神戸ビエンナーレ組織委員会・委員, 2006 年 4 月～現在に至る

意匠学会・会長, 2005 年 4 月～現在に至る

国立国際美術館作品購入委員会・委員, 2004 年 4 月～現在に至る

大阪美しい景観づくり推進会議・アドバイザー, 2004 年 4 月～現在に至る

大阪21世紀協会・企画委員, 2003 年 4 月～現在に至る

民族藝術学会・理事, 1999 年 4 月～現在に至る

日本デザイン学会・評議員, 1999 年 4 月～現在に至る

2. 内田 次信 教授

1952 年生。京都大学大学院文学研究科西洋古典文学専攻博士課程修了。博士（文学）。2006 年より現職。専攻：西洋古典文学／文芸学。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

内田次信「王制論」ディオ・クレソストモス著、内田次信訳『王制論』京都大学学術出版会, p. 275, 2015/8

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・委員, 2010 年 6 月～現在に至る

3. 加藤 浩 准教授

1960 年生。大阪大学文学部美学科（美学・文芸学）卒。大阪大学大学院文学研究科博士課程（芸術学）単位修得退学。文学修士。岡山大学文学部助手・講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：文芸学／神話論。

3-1. 論文

加藤浩「16 世紀イタリアにおけるアリストテレス『詩学』受容の一局面－三統一の規則を中心に－」『文学研究科共同研究成果報

告書』4, pp. 77-88, 2015/

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

加藤浩 「16 世紀イタリアにおけるアリストテレス『詩学』受容の一局面－「三統一の規則」を中心にして－」科学研究費研究発表会,
2014/7

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:加藤浩

課題番号:26284047

研究題目:近代ヨーロッパにおけるアリストテレス『詩学』の受容に関する分野横断的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 3,500,000 円 間接経費 1,050,000 円

2015 年度 直接経費 1,800,000 円 間接経費 540,000 円

研究の目的:

本年は、特にイタリアにおけるアリストテレス『詩学』の受容に関して研究した。つまり、『詩学』は 16 世紀のイタリアにおいて再発見された。その成果に基づいて、フランス、ドイツ、イギリスへと影響を及ぼしたのである。研究代表者である加藤浩は、特に「三統一の規則」という教説が『詩学』の解釈史において醸成される課程を究明し、研究会において発表した。他の研究分担者もそれぞれの専門分野において、『詩学』の受容過程の解明に務めた。

海外からはスティーブン・ハリウェル教授を文芸学研究室が招聘することに協力した。来年度は、国内外から復習の研究者を招聘する下準備ができた。特に、マールブルク大学の上級助教であるブリギッテ・カップル博士と緊密に連絡をとりあって、初期近代イタリアにおける『詩学』受容の解明のための道筋を調えた。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

4. 三宅 祥雄 准教授

1951 年生。岡山大学法文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士（大阪大学、

1977)。大阪外国語大学外国語学部講師、同准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：現代フランス哲学／映像論。

4-1. 論文

三宅祥雄「引用の戦略——「菊次郎の夏」とカンヌ映画祭」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, pp. 222-227, 2015/7

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事, 2011 年 10 月～現在に至る

5. 高安 啓介 准教授

1971 年生。一橋大学社会学部卒業。大阪大学大学院文学研究科博士課程修了（芸術学）。博士（文学）。愛媛大学法文学部准教授を経て、現職。専攻：美学／芸術学。

5-1. 論文

高安啓介「アドルノ美学における形象の問題」『形象』(形象論研究会), 号-1, pp. 56-77, 2016/3

Takayasu Keisuke, “The Development of Design Education for Children in Japan”『Asian Conference of Design History and Theory』(ACDHT), 1, pp. 119-127, 2015/10

5-2. 著書

高安啓介『危機に対峙する思考』梓書房, pp. 299-314, 2016/1

高安啓介『近代デザインの美学』みすず書房, 304p., 2015/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Takayasu Keisuke, “Design Education for Children in Japan”, Asian Conference of Design History and Theory, ACDHT, 大阪大学, 2015/10

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 田中 均 准教授

1974 年生。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了（美学芸術学、2007 年）。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員（PD、2005 年から 2008 年）、山口大学人文学部講師（2008 年から 2011 年）、同准教授（2011 年から 2012 年）を経て現職。日本シェリング協会第 7 回研究奨励賞（2011 年）。専攻：美学。

6-1. 論文

Tanaka, Hitoshi, “Art and “Emancipation”: Aesthetics and Politics of Jacques Rancière”『美学研究』9, 大阪大学美学研究室, pp. 1-14, 2016/1

田中均「ジャック・ランシエールとドイツ・ロマン主義——「芸術の美的体制」の二つの「場面」のあいだに——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 73-100, 2015/3

6-2. 著書

なし

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

田中均(報告)「リサーチとしてのアート・ワークショップ／国際ワークショップ——芸術と公共性」大阪大学文学研究科 国際的社

会連携型人文科学研究教育クラスター「アーツ&リサーチ」(編)『〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭Ⅰ,Ⅱ 2013-2014 年度報告書』大阪大学大学院文学研究科, pp. 38-45, 2015/3

田中均(書評)「Alexander García Düttmann, Teilnahme: Bewußtsein des Scheins. Konstanz: Konstanz University Press, 2011, 192 pp.」『日本 18 世紀学会年報』(日本 18 世紀学会), pp. 102-103, 2014/6

6-4. 口頭発表

田中均「テアトロクラシーとその敵たち」待兼山芸術学会第 26 回研究発表会, 待兼山芸術学会, 大阪大学 豊中キャンパス, 2016/3

田中均「芸術の美的体制における「公共性」の問題」文学研究科共同研究「芸術を介して生成する空間の公共性についての学際的研究」研究会, 大阪大学 豊中キャンパス, 2015/11

田中均「ド・マンのカント／シラー論における「美的なもの」の回帰？」日本シェリング協会第24回大会:クロス討論「美的なもの」のイデオロギーを再考する——ポール・ド・マンによる批判をめぐって, 日本シェリング協会, 神奈川大学 横浜キャンパス, 2015/7

田中均「「参加型アートにおける美的なもの」とその問題」フリンジ企画 使えるプログラム 批評講座-4, KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2014, 京都芸術センター, 2014/9

田中均「委託されたパフォーマンスとその問題」フリンジ企画 使えるプログラム 批評講座-1, KYOTO EXPERIMENT 京都国際舞台芸術祭 2014, 京都芸術センター, 2014/9

Tanaka, Hitoshi, “The Artist and His Poor: Hatred of Theatrocracy from Philosophy to Art Criticism”, The 14th International Conference of International Society for the Study of European Ideas: Images of Europe: Past, Present, Future, International Society for the Study of European Ideas, ポルトガル・カトリック大学(ポルト), 2014/8

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

田中均 日本シェリング協会第 7 回研究奨励賞, 日本シェリング協会, 2011/7

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2014 年度～2017 年度、若手研究(B)、代表者: 田中均

課題番号: 60510683

研究題目: 近代美学史における「テアトロクラティア」—美学と民主主義の相関関係の研究

研究経費: 2014 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

2015 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、プラトンに由来する概念「テアトロクラティア」が近代美学史およびその記述において担う意義を明らかにし、それを通じて、この概念が近代美学と民主主義の関係についての鍵概念であることを示すことである。具体的に分析するのは、①ジャック・ランシエールによる近代美学史記述、②フリードリヒ・ニーチェのヴァーグナー批判、③ヴァルター・ベンヤミンの叙事演劇論であり、それらに現れる「テアトロクラティア」の用法の意義を、各思想家の思想の変遷に即して解明する。それらの用法に含まれる、芸術を通じた共同体の結合の強化、美的経験の集団性と個性性、および観客の芸術への「参加」といった問題を分析して、近代美学と政治思想の交差の実相を解明する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

日本18世紀学会・書評委員, 2015年12月～現在に至る

日本シェリング協会・編集委員長代行, 2015年1月～現在に至る

日本シェリング協会・理事, 2008年10月～現在に至る

7. 西井 奨 特任講師（常勤）

1982年生。京都大学大学院文学研究科博士課程修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員PDを経て、2015年11月より現職。専攻：文芸学／西洋古典学。

7-1. 論文

西井奨「美学学会全国大会 研究発表要旨:ホラーティウス『詩論』338:proxima veris「できるだけ真実に近いもの」について」『美学』（美学会）, 66-2, pp. 131-131, 2015/12

西井奨「ミノスとアイアコスの邂逅」『地中海学会月報』（地中海学会）, 379, pp. 4-4, 2015/4

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

西井奨(書評)「書評:C. Kallendorf, The Protean Virgil -Material Form and the Reception of the Classics. Oxford 2015.」『西洋古典学研究』（日本西洋古典学会）, 64, 岩波書店, pp. 142-145, 2016/3

7-4. 口頭発表

西井奨「ホラーティウス『詩論』338:proxima veris「できるだけ真実に近いもの」について」第66回 美学学会全国大会, 美学会, 早稲田大学, 2015/10(『美学』66-2, pp. 131-131, 2015/12)

西井奨「媒体から見るウェルギリウス受容——C. Kallendorf The Protean Virgil 紹介」ギリシア・ローマ神話学研究会 第13回研究発表会, ギリシア・ローマ神話学研究会, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/8

西井奨「ホラーティウス『詩論』の受容研究について——M. T. Herrick による研究を手掛かりとして」文芸学研究会 第56回研究発表, 文芸学研究会, 同志社大学今出川キャンパス, 2014/12

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

日本西洋古典学会・HP 運営委員, 2012 年 6 月～現在に至る

8. 渡辺 浩司 助教

1962 年生。1994 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程単位修得退学。1994 年より現職。博士(文学、大阪大学、1998 年)。専攻: 文芸学／西洋古典学。

8-1. 論文

永田靖, 古後奈緒子, 渡辺浩司他(共編著)「フェスティバルの企画運営と実際 考察」『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭 I, II 2013-2014 年度報告書』(大阪大学文学研究科), pp. 11-13, 2015/3

8-2. 著書

渡辺浩司他(共著)『世界の名前』岩波書店, pp. 10-12, 2016/3

8-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

8-4. 口頭発表

なし

8-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

8-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2015 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 渡辺浩司

課題番号: 15K02110

研究題目: 美学と弁論術の交叉——コモン・センスを中心に

研究経費: 2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

古代ギリシア・ローマの弁論術が美学・芸術学へ受け継がれ変容していく過程を、西洋古典学および美学・芸術学の2つの観点から、歴史的かつ理論的に究明する。美学は 18 世紀半ばにバウムガルテンによって創建されたが、そのさい、弁論術が果たした役割は大きいとしばしば指摘されているが、美学成立において弁論術がどのような影響を与えたのか、美学成立後に弁論術がどのように変容したのかを解明した研究はほとんどない、本研究は、このような研究上の欠を補うべく、弁論術が美学成立に与えた影響を、とくにコモン・センスに焦点を当てて西洋古典学や美学・芸術学といった広い視点から解明するとともに、今日のコモン・センスに開

かれた美学の可能性をさぐる。

8-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

8-8. 外部役員等の引き受け状況

民族藝術学会・庶務委員, 1994 年 4 月～現在に至る

2-22 音楽学・演劇学

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 3(兼任 2)

教授：永田 靖、伊東 信宏

准教授：輪島 裕介、中尾 薫

助教：齋藤 桂、横田 洋(兼任)、古後奈緒子(兼任)

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
50	10	21	0	0	8	1	1

*うち留学生 5 名、社会人学生 2 名

3. 修了生・卒業生(2014 年度～2015 年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	12	3	4	2
2015	7	6	1	2
計	19	9	5	4

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

教育の中心となるのは学部レベル、大学院レベルそれぞれで開講されている各種演習である。ここでは、卒業論文、修士論文、博士論文の主題、研究手法、論文構成などについて真剣な討議を行う。これに加えて、年 1 回開催されている合宿などでも、学位論文についての中間報告会を行う。さらにオフィスアワーその他の個人指導の機会を通じて、よりきめ細かい指導を行う。また、複数の音楽ホールや劇場における音楽実務や演劇制作に関するインターンシップを実施し、文学研究科のインターンシップ報告書に掲載される報告集を作成する。

2. 研究

音楽学研究室・演劇学研究室ともに、開設から 40 年近くを経たが、今も我が国の総合大学における専攻分野としては極めて稀な存在でありつづけている。そのことも意識しながら、音楽学研究室は、芸術大学や教育大学音楽科における音楽学研究とは異なる問題を志向しており、いわゆる歴史学的美学的探究、作曲学的分析法、民族学的なフィールドワーク、カルチュラルスタディーズのアプローチなど、様々な方法を組み合わせながら音楽が文化の中でどのような意味を持っているか、ということについて取り組み続けてきた。また演劇学研究室も、西欧演劇史や日本演劇史一般の基礎教育や演劇学一般理論に加えて、文化研究やパフォーマンス・スタディーズなどの接触領域との学際性をも意識しつつ、演劇の現代世界の中での役割を解明し続けている。こういった特色を堅持しながら、教員は、学術的報告 2 本以上の発表を目標とする。院生においては、博士予備論文提出時に論文 2 本以上を発表していることを目標とする。また研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』の刊行を継続する。さらに科学研究費補助金、および他の競争的外部資金の獲得、日本学術振興会の特別研究員への応募を積極的に推し進める。また、各種大型プロジェクト研究、学内外の共同研究に積極的に参加し、研究の視野と可能性を拡大することなども目標とした。

3. 社会連携

音楽学研究室主催の「コレギウム・ムジクム」を年に 1～2 回程度開催し、本研究室で行われている多様な研究活動をレクチャー・コンサートという形で広く一般に還元する。また、演劇学研究室では博物館での企画展や、共催する関連講演会などを積極的に開催する。21 世紀懐徳堂などが主催するイベントに協力し、全学的な社会貢献にも参加している。さらに、各種学会には委員等として積極的に参加し、研究会、研究グループなどの活動にも参加して、研究成果の普及を図るよう努力することとした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

講義・演習では、卒業論文、修士論文、博士論文に向けてそれぞれのテーマに応用可能な方法論や論理構成を意識した教育を行った。さらに個別の指導において、より具体的な問題設定、先行研究の検討、各種調査方法の検討などについて議論を行い、綿密な指導をおこなってきた。インターンシップも予定通り実施され、文学研究科刊行のインターンシップ報告書に受講学生の報告を寄稿した。ただし 2015 年度のインターンシップは学生の応募がなく実施には至らないものがあった。学生にとって有意義な場であるため、今後さらなる広報に努めたい。

2. 研究

音楽学研究室では、教員 2 名がともに総長奨励賞（輪島准教授 2014 年度）、総長顕彰（伊東教授、2015 年度）を受賞したほか、両名とも著書、論文などを刊行しており、多くの成果を挙げたと言える。演劇学研究室では教員 3 名による著書、論文、博物館展覧会図録などが刊行され、学界で高く評価された。また教員の多くは、科学研究費での助成研究を続けている。さらに院生は国内外の多くの学会での発表、および学会誌ないし研究書への掲載を実現した。とりわけ国際的な研究集会での外国語による発表が増加しており、音楽学研究室では 2015 年 2 月、および同年 11 月にロンドン大学ゴールドスミス校と共催で国際フォーラムを開催し、院生、特別研究員が口頭発表を行った。演劇学研究室では、2014 年 11 月に The 2nd International Theatre Studies Conference; Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies を国立韓国芸術総合学校にて開催し、院生 5 名が英語の口頭発表を行った。2015 年 11 月には The 3rd International

Theatre Studies Conference; Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies を上海戯劇学院にて開催し、院生 7 名が英語での口頭発表を行った。また音楽学研究室の教員は、民族藝術学会、日本ポピュラー音楽学会の委員、理事としての活動を続けており、学会活動の拠点としての存在感を示している。演劇学研究室も、日本演劇学会の分科会近現代演劇研究会の運営や、能楽学会関西能楽フォーラムの開場校を務めるなど、積極的な活動を行っている。教員、招へい研究員による科学研究費、民間の財団への研究費の申請のほか、大学院生の日本学術振興会特別研究員への応募なども毎年おこなっている。卓越した大学院拠点や文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても各教員は中心的な役割を果たし、多くの院生がこれらの制度を活用して海外での調査や研究発表などを行った。さらに研究室が主催する『阪大音楽学報』『演劇学論叢』も予定通り出版された。

3. 社会連携

教員の多くが新聞、雑誌などへの批評寄稿、放送での解説などを定期的に行っており、研究成果の社会還元を果たしている。また院生も、音楽学、演劇学のそれぞれについて、新聞の大きい誌面を割いて月 1 回の寄稿の場が与えられ、自らの関心を幅広い読者に向けて発信する訓練ともなっている。また教員は、民族藝術学会、日本ポピュラー音楽学会などの委員、理事、日本演劇学会における会長、幹事などを務め、さらに各種財団の専門委員、選考委員などを務めて学外の職務にも応じている。「コレギウム・ムジクム」や 21 世紀懐徳堂の古典講座を含む各種レクチャー・コンサートや、ラボカフェ、大阪大学シンポジウムなどを学内外で企画立案運営また協力し、研究室を発信源とする社会連携に努めた。

IV. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

卒業論文、修士論文とも、例年どおりの水準を維持した。博士論文についても、掲げた目標は達成できたと自己評価できる。

2. 研究

教員、大学院生による研究成果の発表、刊行は極めて盛んであり、大きな成果を挙げたと評価できる。『阪大音楽学報』は、引き続き多くの論文を掲載し、学会でも評価が定着しつつある。2015 年 2 月にはロンドン大学ゴールドスミス校との共催で国際フォーラムをロンドンで開催した（日本学術振興会の助成）。これと並行して両大学の大学院生レベルでのフォーラムが開催され、博士前期課程の大学院生 4 名などがロンドン大で英語の発表を行った（大阪大学国際シンポジウム助成）。さらに、2015 年 11 月にはゴールドスミス側の教員 4 名、院生 3 名を大阪に招き、院生を中心とする国際フォーラムを開催した（大阪大学国際シンポジウム助成）。また、2014 年 11 月には国際シンポジウム The 2nd International Theatre Studies Conference; Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies を、2015 年 11 月には国際シンポジウム The 3rd International Theatre Studies Conference; Towards a New Perspective of Asian Theatre Studie を開催し、国立韓国藝術総合学校演劇院の大学院生、国立台北台湾芸術大学、上海戯劇学院の大学院生らとともに演劇学から教員と大学院生が参加し、英語での研究発表にのぞんだ。

3. 社会連携

上記のとおり、新聞雑誌への寄稿、演奏会や企画展の企画などの活動を通じての社会還元、民間財団委員や公立劇場企画運営委員としての専門知識の提供、学会活動への寄与など、多方面に渡って社会連携を達成できたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	2	1	3
2015	0	0	0
計	2	1	3

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

李 星坤「1950 年代日本戦後演劇における安部公房の位置」2014/9

主査：永田靖 副査：上倉庸敬、市川明、中尾薫

神崎 舞「ロベール・ルパージュ作品における「他者」」2014/9

主査：永田靖 副査：上倉庸敬、市川明、中尾薫

須川渡「戦後日本におけるコミュニティ・シアターの形成と展開」2015/3

主査：永田靖 副査：伊東宏信、中尾薫

【論文博士】

譲原 晶子「舞踊における「ヴァリエーション技法」の変遷：ダンスクラシックからポストモダンへ」2014/9

主査：永田靖 副査：上倉庸敬、市川明、中尾薫

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	4(3)	0(0)	3(3)	0(0)	4(0)	11(6)
2015	1(0)	2(2)	10(6)	0(0)	8(0)	21(8)
計	5(3)	2(2)	13(9)	0(0)	12(0)	32(14)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	10	5	6	0	0	21
2015	13	7	3	0	0	23

計	23	12	9	0	0	44

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

Ayako KAKINUMA, “Takarazuka and Revue “Mon Paris”- How did *Takarazuka* import Revue from France?”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.248-260, 2014/12

〔博士後期〕

(演劇学)

Fukiko OKADA, “Rio Kishida’s Three Plays about “the 2-26 Incident””, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.290-305, 2014/12

黄資絜「劇構造の効果と王の二つの身体 —野田秀樹『贋作・桜の森の満開の下』『TABOO』論『演劇学論叢』14号, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.140-163, 2015/3

Tzu-Chieh HUANG, “Communication Strategies and Language Use in Hideki NODA’s *Red Demon*”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.276-289, 2014/12

中川登美子「青年座初演『禿の女歌手』の意義 —石澤秀二による「対応」をめぐって—」『フィロカリア』32号, 待兼山芸術学会, pp.23-44, 2015/3

Tomiko NAKAGAWA, “Premiere of *The Bald Soprano* by the Seinenza Theatre Company in 1968”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.261-275, 2014/12

松本俊樹「「センチメンタリズム」から「朗らか」へ —堀正旗の『アルト・ハイデルベルク』受容と宝塚—」『演劇学論叢』14号, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.118-139, 2015/3

(音楽学)

家田恭「19世紀プラハの音楽文化における軍楽隊—切り捨てられたポピュラリティー—」『阪大音楽学報』第12号, pp.37-56, 2014/12

樋口騰迪「Monnot と Piaf—「シャンソン」の成立に於ける芸術音楽の影響をめぐる試論—」『シャンソン・フランセーズ研究』第6巻, pp.1-12, 2014/12

Kae Hisaoka “Structure of Authenticity of Polyphony and Musical Practices in Georgia,” in R.Tsurtsumia and J. Jordania eds., *Proceedings of The Sixth International Symposium on Traditional Polyphony*, pp.177-186, 2014/9

久岡加枝「シャルヴァ・ムシュヴェリゼ(1904-1984)の混声合唱曲『プシャウリ』(1934)にみる山岳民の表象：20世紀グルジア音楽におけるモダニズム」, 『民族藝術』, 第31号, pp.117-124, 2015/3

【2015 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

Ayako KAKINUMA, “The Takarazuka and the Representation of France in *Blue Trunk* (1939)”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.544-558, 2015/12

(音楽学)

- 中野太郎「Moshing as Active Audience Behavior: The Possibility and Significance of Moshing in Rock Culture」
『Proceedings of the Joint Forum “Musicology in the Multicultural Society”』, pp. 9-15, 2015/11
- 吉村汐七「A Live Concert of Hatsune Miku」『阪大音楽学報』特別号 2016, pp.55-60, 2016/3
〔博士後期〕
(演劇学)
- Fukiko OKADA, “The Influence of Heiner Müller in the works of Rio Kishida: As seen in the Play Shijuso - Quartet (四重奏-カルテット-, Quartet: Quartet)”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.528-543, 2015/12
- 黄資絜「野田地図番外公演における(多)言語使用と文化的問題—『赤鬼』、『Right Eye』、『農業少女』について」
『フィロカリア』vol.33, 大阪大学大学院文学研究科芸術学・芸術史講座, pp.59-84, 2016/03
- Tzu-Chieh HUANG, “The Change in Hideki Noda’s Methods and Steam from an Invisible Man”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.559-575, 2015/12
- Yubin KIM, “Satire on the War Era - The dual structure of Iizawa Tadasu’s(飯沢匡)Beijing’s Ghost(北京の幽霊)”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.514-527, 2015/12
- 中川登美子「日本における「不条理劇」受容の一断面—冥の会『ゴドーを待ちながら』をめぐって—」『演劇学論叢』第15号, 大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, pp.81-100, 2016/3
- Tomiko NAKAGAWA, “Nicolas Bataille’s Productions in Japan in the 1970s”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.591-605, 2015/12
- Ayano NISHI, “Focusing on femininity as seen in Kogaki of the Noh play Ama: Henjo Nanshi and Gedatsu no den”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.576-590, 2015/12
- Toshiki MATSUMOTO, “The Neue Sachlichkeit Revue by Hori SEIKI - the form of the epic drama in the Takarazuka Girl’s Opera”, *Forum of Theatre and Drama*, Korea National University of Arts, pp.606-620, 2015/12
(音楽学)
- 久岡加枝「ヴァレリアン・マグラゼ(1923-1988)によるメスヘティ民謡の復元—雪解け以降のフォーク・リヴァイヴァルと関連して」『スラヴ研究』, 北海道大学・スラヴ・ユーラシア研究センター, 第62号, 特集号「総力戦、その遺産と傷跡」, 第62号, pp. 219-236, 2015/7
- 久岡加枝「グリゴル・チュヒクヴァゼ(1900-1986)のグルジア音楽史研究(1939, 1940)にみる「純粋性」と「異種混交性」—グルジア音楽史の基礎概念をめぐって」『阪大音楽学報』, 大阪大学文学研究科・音楽学研究室, 第13号, pp.41-58, 2015/9
- Kae Hisaoka, “The Alternative Role of New Tushetian Songs in Contemporary Georgian Musical Culture”, *Musicology and Cultural Science*, Tbilisi State Conservatoire no.12 (2), pp. 63-74, 2016/2
- 久岡加枝「イネッサ・ハシュバ(1938-1967)の『アブハジアの民俗楽器』(1967)におけるアブハズ・アディゲ語族の文化的同族性: ソ連期のグルジア・ナショナリズムと関連して」『待兼山論叢』大阪大学文学研究科 第49号, pp. 1-17, 2015/3
- 藤下由香里「Divas in Dōjin Music : Female Producers in Otaku Culture」『阪大音楽学報 特別号 2016』pp.61-68, 2016/3
- 山本耕平「1950年代の音楽教育における情操教育の一側面—道徳教育から見た音楽教育、あるいは音楽教育から見た道徳教育—」『阪大音楽学報』第13号, pp. 59-73, 2015/9
- 鷺野彰子「ピアノロールのデータ分析の試み—パデレフスキによるショパン《ワルツ Op.34-1》演奏のワルツのリズム

部分に着目してー」『福岡県立大学紀要』24/1, pp.55-71, 2015

中藤広美, 鷺野彰子「実習前教育における学生教育の課題と方法ー環境構成に関する学生の理解状況を踏まえてー」『福岡県立大学紀要』24/1, pp.17-31, 2015

鷺野彰子『平成 25-26 年度 科学研究費補助金・若手研究(B)「録音から辿る 19 世紀の演奏様式」』(課題番号: 25770065), 2015/3

鷺野彰子「パデレフスキのルバートーピアノロールの分析試論 (1) ー」『フィロカリア』第 33 号, pp.27-58, 2016/3

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

Ayako KAKINUMA, “*Takarazuka* and Revue “Mon Paris”- How did *Takarazuka* import Revue from France?”, The 2nd International Asian Theatre Conference: A New Perspective of Theatre Studies, Korea National University of Arts, 2014/11/6

(音楽学)

秋山良都 “The Sound of Gemeinschaft.A Fieldwork Investigation of the Posaunenchor in Göttingen”, Postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ, 2015/2/19

金子享平 “Ototetsu and Sounds Surrounding Japanese Railways” Postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ, 2015/2/19.

川野未沙子 “Piano Sonata Op.2 by Muzio Clementi its Context” Postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ, 2015/2/19

黄惟愷 “Rock music in Taiwan and Taiwanese Rock” postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ, 2015/2/19

松井拓史 “The Folk Music Study in the Postwar Hungary: Through a Study of the Activities of Zoltán Kodály” Postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン: ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ, 2015/2/19

〔博士後期〕

(演劇学)

Fukiko OKADA, “Rio Kishida’s Three Plays about “the 2-26 Incident””, The 2nd International Asian Theatre Conference: A New Perspective of Theatre Studies, Korea National University of Arts, 2014/11/7

Tzu-Chieh HUANG, “Communication Strategies and Language Use in Hideki NODA’s *Red Demon*”, The 2nd International Asian Theatre Conference: A New Perspective of Theatre Studies, Korea National University of Arts, 2014/11/7

戸田健太郎「『わらんべ草』における「能の狂言」論再考ー大蔵虎明はなぜ狂言を能と区別するのか」日本演劇学会, 京都外国語大学, 2014/11/16

戸田健太郎「舞狂言の「アイ」と能の「教」アイ」六麓会, 神戸女子大学, 2014/12/25

Tomiko NAKAGAWA, “Premiere of *The Bald Soprano* by the Seinenza Theatre Company in 1968”, The 2nd International Asian Theatre Conference: A New Perspective of Theatre Studies, Korea National University of Arts, 2014/11/7

- 中川登美子「日本における「不条理劇」受容の一断面 —冥の会『ゴドーを待ちながら』(1973)をめぐって—」待兼山芸術学会, 大阪大学, 2015/3/29
- 西恵野「国広伝書における能作品の解釈—能《杜若》における「杜若の精」のとらえ方を例に—」咄半分芝居半分の会, 高槻市現代劇場, 2014/11/22
- 西恵野「「公家の能」における国広の分類—『融』『須磨源氏』は公家か—」六麓会, 神戸女子大学, 2014/12/25 (音楽学)
- 奥村京子「G・リゲティの往復書簡—社会主義体制下における諸コンフリクト」大阪大学卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」平成 25 年度大学院生調査研究助成(第 3 回)報告会, 大阪大学/大阪府吹田市, 2014/5
- 奥村京子「亡命作曲家ジェルジ・リゲティにおけるアイデンティティの拡散と再統合」大阪大学卓越した大学院拠点形成支援補助金「コンフリクトの人文国際研究教育拠点」平成 25 年度大学院生調査研究助成(第 1 回)報告会, 大阪大学/大阪府吹田市, 2014/5
- 樋口騰迪「Monnot と Piaf—『シャンソン』の成立に於ける芸術音楽の影響をめぐる試論—」第 23 回シャンソン研究会, 追手門学院大阪梅田サテライト/大阪府大阪市, 2014/5
- 樋口騰迪「20 世紀初頭の「シャンソン」に於ける民謡・古謡の影響—イヴェット・ギルベールの活動を中心に—」第 65 回日本音楽学会全国大会, 九州大学/福岡県福岡市, 2014/11
- 樋口騰迪「Belle Époque のシャンソン—19 世紀パリ大衆の旋律感性をめぐって—」民族芸術学会第 136 回研究例会, 大阪大学/大阪府豊中市, 2015/3
- 久岡加枝「「農民の合唱」から「ポリフォニー」へ : スターリン期グルジアにおける「農村音楽」の公民的普及と文化的真正性をめぐって」, 日本音楽学会 第 65 回全国大会, 福岡, 九州大学 大橋キャンパス, 2014/11/8
- 久岡加枝 “The Origin of the Bass Drone in Georgian Polyphony: The Historical Role of Wandering Musicians”, The Seventh International Symposium on Traditional Polyphony, Tbilisi State Conservatoire, Georgia, 2014/9/23
- 【2015 年度】
- 〔博士前期〕
- (演劇学)
- Ayako KAKINUMA, “The Takarazuka and the Representation of France in *Blue Trunk* (1939)”, The 3rd Asian Theatre Conference: Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/6 (音楽学)
- 中野太郎「Moshing as Active Audience Behavior: The Possibility and Significance of Moshing in Rock Culture」国際芸術フォーラム「多文化社会の音楽学」, 大阪大学/大阪府豊中市, 2015/11
- 中野太郎「能動的な観客行為としてモッシュ〜ロックカルチャーにおけるモッシュの可能性と重要性〜」第 27 回日本ポピュラー音楽学会, 京都精華大学/京都府左京区, 2015/12
- 名田青麻「John Cage's *Sonatas and Interludes* and its performance」, 国際学術フォーラム「多文化社会の音楽学 Musicology in the Multicultural Society」, 大阪大学/大阪府豊中市, 2015/11
- 吉村汐七「A Live Concert of Hatsune Miku」国際学術フォーラム「多文化社会の音楽学」, 大阪大学/大阪府豊中市, 2015/11
- 吉村汐七「初音ミクライブにおけるオーディエンス—『初音ミク「マジカルミライ 2013」』を事例に—」日本ポピュラー音楽学会第 27 回大会, 京都精華大学/京都府京都市, 2015/12

〔博士後期〕

(演劇学)

Fukiko OKADA, “Influence of Heiner Müller on the works of Rio Kishida”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/7

Yubin KIM, “Satire on the War Era - The dual structure of Iizawa Tadasu’s(飯沢匡)Beijing’s Ghost(北京の幽霊)”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/6

黄資絜「野田地図番外公演における（多）言語使用と文化の問題」近現代演劇研究会, 大阪大学, 2015/7/25

Tzu-Chieh HUANG, “The Change in Hideki Noda’s Methods and Steam from an invisible Man”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/7

Toshiki MATSUMOTO, “Neue Sachlichkeit Revue’ by HORI Seiki in Takarazuka”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/6

Tomiko NAKAGAWA, “Influence of Nicolas Bataille to Post-war Japanese Shingeki”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/6

西惠野「能における伝書の「公共性」—国忠系伝書から国広伝書に至る太鼓伝書の成立過程を例に—」日本演劇学会, 桜美林大学, 2015/6/21

Ayano NISHI, “Focusing on femininity as seen in Kogaki of the Noh play Ama”, The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies, Shanghai Theatre Academy, 2015/11/7

松本俊樹「堀正旗による叙事的演劇の「宝塚化」—『泥に塗れた党旗』から『青春』へ—」近現代演劇研究会10・12月合同例会, 大阪大学, 2015/12/26

(音楽学)

UEHATA Fumi, “Music’ In The Folk Spirit’: Conflicting Interpretations of ‘Orientalness’in Modern Serbia”, International Musicological Society East Asia 3rd Biennial Conference, 中国・香港大学, 2015/12

片岡リサ「箏/琴をめぐる伝統音楽社会の日韓比較」修論発表, 日本音楽学会西日本支部第25回(通算376回)例会(東洋音楽学会西日本支部第267回定例研究会と合同), 大阪音楽大学/大阪府豊中市, 2015/5

Masamichi HIGUCHI, L’histoire de l’acceptation de la «chanson française» au Japon: Focus sur la théorie de la composition musicale et œuvres de Tōroku Takagi (Colloque Le musicien japonais en France ou les rapports France-Japon, Paris, 2016/2/4 (樋口騰迪「日本におけるシャンソン受容史 :高木東六の作曲理論と作品を中心として」国際学会 フランスにおける日本人音楽家 :音楽界における日仏関係, パリ国立高等音楽院, 2016/2)

藤下由香里「Divas in Dōjin Music : Female Producers in Otaku Culture」JOINT FORUM “MUSICOLOGY IN THE MULTICULTURAL SOCIETY”(国際学術フォーラム「多文化社会の音楽学」), 大阪大学会館 21 世紀懷徳堂スタジオ /大阪府豊中市, 2015/11

藤下由香里「同人音楽の歌姫による自己の表現」日本ポピュラー音楽学会 第27回年次大会, 京都精華大学/京都府京都市, 2015/12

山本耕平「子どもとベートーヴェン—近代日本の教育現場における逸話「月光の曲」—」待兼山芸術学会第26回総会・研究発表会, 2015/3

鷺野彰子「ピアノロールの計量的解析によるパデレフスキのルバート奏法分析」日本音楽表現学会, 沖縄県立芸術大学(沖縄), 2015/6

中藤広美・鷺野彰子「実習前における学生の環境構成についての意識の現状と課題」保育士養成協議会第54回研究大会,
ロイトン札幌（北海道）, 2015/9

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

上島万理恵「世界へ羽ばたけ、日本発初演—ミュージカル『レディ・ベス』」『大阪日日新聞』, 2014/9/10

垣沼絢子「華麗なレビューに魅了され—大阪松竹座公演「道頓堀パラダイス〜夢の道頓堀レビュー誕生物語〜」」『大阪日日新聞』, 2014/10/8

(音楽学)

黄惟愷「関西の音と人—「台客音楽」で神戸まつりに参加した—」『大阪日日新聞』, 2014/6/25

〔博士後期〕

(演劇学)

岡田蒔子「ずらし、重ね、問う。—〈鳥公園〉「空白の色は何色か」」『大阪日日新聞』, 2015/2/25

金裕彬「戦争の持つ悲劇的本質 —『炎アンサンディ』—」『大阪日日新聞』, 2014/11/12

黄資絜「冷と熱を音楽で調和—松本雄吉『十九歳のジェイコブ』」『大阪日日新聞』, 2014/8/13

戸田健太郎「心軽く解きほぐす爽やか感覚—貴船祭「出雲神楽」奉納」『大阪日日新聞』, 2014/7/9

中川登美子「現代をめぐる近代のコラージュ—劇団地点「CHITENの近現代語」」『大阪日日新聞』, 2015/1/28

西恵野「4年間の青春懸け、挑む晴れの舞台—奈良女子大学能楽部観世会第57回自演会—」『大阪日日新聞』, 2014/12/24

松本俊樹「5月の「桜」の意味—O S K日本歌劇団『春のおどり』—」『大阪日日新聞』, 2014/6/11

(音楽学)

奥村京子「東京オペラシティ同時代音楽企画コンポーザム 2014 ペーテル・エトヴェシュの音楽」, 東京オペラシティコンサートホール, プログラムノート, pp.13-18, 2014/5/22

奥村京子「大阪大学大学院文学研究科アートフェスティバル—アンサンブル・ラロ:ハプスブルクと室内楽」, 大阪大学中之島センター10階佐治敬三メモリアルホール, プログラムノート, 2014/10/1

戸田直夫「尼崎市吹奏楽団「感謝のコンサート」」プログラムノート, 2014/6/22

戸田直夫「尼崎市吹奏楽団「特別演奏会」」プログラムノート, 2014/9/21

戸田直夫「尼崎市吹奏楽団「第50回記念定期演奏会」」プログラムノート, 2014/11/9

戸田直夫「音楽団がフラッシュモブ?本来の存在意義とは」『大阪日日新聞』「関西の音と人」第35回, 2014/10/22

戸田直夫「大阪市音楽団による《青春の吹奏楽 Part II》」『Jupiter』いずみホール音楽情報誌 Vol.150, 2015年2・3月号, pp.4-5, 2015/1/16

樋口騰迪「モノオペラとミニオペラ『人間の声』と『消えた男の日記』 演奏会批評」『明倫 art』, 7月号, 3p., 2014/6/20

樋口騰迪「京都市交響楽団第582回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』, 10月号, 3頁, 2014/9/20

樋口騰迪「アンサンブル・ラローハプスブルクと室内楽 演奏会プログラム楽曲解説」於・大阪大学中之島センター 佐治敬三メモリアルホール, 2014/10/1

樋口騰迪「田隅靖子ピアノ・リサイタル 演奏会批評」『明倫 art』, 1月号, 3p., 2014/12/20

樋口騰迪「大阪交響楽団第192回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』, 4月号, 3p., 2015/3/20

【2015 年度】

〔博士前期〕

(演劇学)

上島万理恵「夢持ち続ける力くれた—東宝ミュージカル『ラ・マンチャの男』—」『大阪日日新聞』, 2015/10/7

垣沼絢子「人々の思いに寄り添って—NODA MAP『エッグ』大阪公演」『大阪日日新聞』, 2015/5/20

(音楽学)

秋山良都「セイチェント—17 世紀歌曲の演奏解釈法を探って」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2015/8/12

中野太郎「ゲームバー”カフェ・ラ・シエスタ”～関西チップチューンの聖地～」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2016/2/3

名田青麻「カフェ・モンタージュ「月に憑かれたピエロ」二夜連続公演 演奏会批評」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2015/10/7

松井拓史「平野の町あるき—平野 町ぐるみ博物館」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2015/7/15

〔博士後期〕

(演劇学)

岡田蒔子「命ある幸せと日々の大切さ—戯曲「難病飛行」—」『大阪日日新聞』, 2016/2/3

金裕彬「一回限りではもったいない—新作能「オセロ」—」『大阪日日新聞』, 2015/6/17

黄資絜「公的舞台での私的空間—平田オリザ演劇展『忠臣蔵』武士編、OL 編—」『大阪日日新聞』, 2015/11/4

中川登美子「関西弁が織りなすユーモア—iaku 公演「walk in closet」」『大阪日日新聞』, 2015/12/2

西恵野「送り火に寄せる恩愛の情—第 13 回 大文字送り火能～蠟燭能～」『大阪日日新聞』, 2015/9/9

松本俊樹「他ジャンルと融合、視野広げる—はなしか宝塚ファン倶楽部」『大阪日日新聞』, 2015/7/15

(音楽学)

上畑史「クラシック音楽と大衆音楽——「オリエント」の受容と拒絶」, 『エアスタディーズ 137 セルビアを知るための 60 章』柴宜広・山崎信一編、明石書店, pp.287-291, 2015

上畑史「ドキュメンタリー映画「トゥーマスト～ギターとカラシニコフの狭間で——彼らの武器は音楽」, 大阪日日新聞「関西の音と人」6 月掲載, 2015

片岡りサ: **Homage**「奏者と観客が作り上げる空間」あいおいニッセイ同和損保 ザ・フェニックスホール機関紙「Salon」vol.99, 2015 年 11 月 冬号, 9 頁

戸田直夫「青春の吹奏楽 part II」プログラムノート, 2015/4/29

戸田直夫『〈戦後〉の音楽文化』青弓社（共著）全日本吹奏楽連盟, 音楽隊, 2016/1/26

樋口騰迪「大阪交響楽団第 192 回定期演奏会 演奏会批評」『明倫 art』, 4 月号, 3p., 2015/4/20

樋口騰迪「上方文化芸能委員会主催『町人文化を楽しむ』」『大阪日日新聞』, 10 面, 2015/5/20

樋口騰迪「大阪音楽大学『ファルスタッフ』演奏会批評」『朝日新聞』, 夕刊 5 面, 2015/11/5

樋口騰迪「鈴木陽子作品展 vol.9:『人魚姫』演奏会批評」『大阪日日新聞』, 18 面, 2015/12/2

樋口騰迪「ロームシアター京都・オペラ『フィデリオ』演奏会批評」『朝日新聞』, 夕刊 4 面, 2016/1/20

山本耕平「音楽室の歴史」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2015/11/4

鷺野彰子「ショパン《ワルツ Op.34-1》の作品分析」『Music Friends』92, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「もうひとつのショパン《ワルツ Op.34-1》: 2 つの楽譜からショパンの作曲行程を探る」『Music Friends』93, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「トリルをどう弾くか?」『Music Friends』94, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「シューマンの実像」『Music Friends』 95, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「作曲家による自作自演」『Music Friends』 96, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「ショパンの《ノクターン》に見られる旋律の「歌い回し」方」『Music Friends』 97, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「マルコム・ビルソン名誉教授」『Music Friends』 98, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「技術」『Music Friends』 99, 2015, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「楽器博物館」『Music Friends』 100, pp.20-24, 2015

鷺野彰子「アルバート・ロトというピアニスト」『Music Friends』 101, pp.20-24, 2016

鷺野彰子「子どものための音楽教育（１）：何を教えるか」『Music Friends』 102, 20-25, 2016

鷺野彰子「子どものための音楽教育（２）：どのように教えるか」『Music Friends』 103, pp.20-24., 2016

鷺野彰子「書評：シューマンの結婚—語られなかった真実」『週刊読書人』, 読書人, 2015/6/19

鷺野彰子「民音音楽博物館西日本館」『大阪日日新聞』「関西の音と人」, 2015/9/9

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

【2014 年度】

〔博士後期〕

中川登美子「優秀論文賞 (The 2nd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies)」

【2015 年度】

〔学部〕

柳川朔「第 16 回課外活動総長賞（大阪大学未来基金事業）」

〔博士後期〕

黄資梨「優秀論文賞 (The 3rd Asian Theatre Conference; Towards a New Conception of Asian Theatre Studies)」

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014 年度 PD : 1 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 2 名)

2015 年度 PD : 2 名 DC2 : 1 名 DC1 : 0 名 (計 3 名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014 年度 学部 : 1 名 大学院 : 1 名 (計 2 名)

2015 年度 学部 : 0 名 大学院 : 3 名 (計 3 名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず 2014 年度～2015 年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

枘井智英、博士後期課程、神戸松蔭女子大学、専任講師、2015/4

神崎舞、博士後期課程、摂南大学、専任講師、2015/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通

訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014 年度 : 0 名 2015 年度 : 0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 2 名

2014 年度 : 1 名 2015 年度 : 1 名

9. 刊行物

2014 年度 『阪大音楽学報』第 12 号 『演劇学論叢』第 14 号

2015 年度 『阪大音楽学報』第 13 号 『演劇学論叢』第 15 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際日韓演劇会議 New Landscapes of Contemporary Asian Theatre を国立韓国芸術総合学校と共催、2014 年 11 月
近現代演劇研究会事務局 2014 年度

Postgraduate Students Joint Forum 2015, ロンドン : ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ、2015 年 2 月

国際日中韓演劇会議 New Landscapes of Contemporary Asian Theatre を上海戯劇学院と共催、2015 年 11 月

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

(音楽学)

伊東信宏教授、輪島裕介准教授は、いずれもきわめて活発な研究活動を展開した。伊東教授は、科学研究費基盤 (B) によるバルカンの大衆音楽に関する研究会を「東欧演歌研究会」と称して主催しており、その成果は民族芸術学会創立 30 周年記念大会公開シンポジウムにおける基調報告 (2014 年 9 月 21 日) などにより発信されている。輪島准教授は 2015 年 2 月に著書『踊る昭和歌謡』を刊行するほか、学術書への論文の寄稿、各種研究会での報告、雑誌への連載などによって、日本の大衆音楽史にかかわる多くの成果を発表した。両教員は、新聞への寄稿や一般向けの講座など、アウトリーチ活動も活発に行っている。また、各教員は科学研究費の研究課題の代表、および分担研究者などとしても多様な課題に取り組んでいるほか、民族芸術学会、日本ポピュラー音楽学会などで理事や委員を務めている。さらに文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」など、文学研究科がかかわる大型資金においても、各教員は中心的な役割を果たし、結果的に多数の大学院生がこれらの制度を活用して海外での調査、国際学会での発表などを行った。また、大阪大学国際シンポジウム助成を得て、2014 年 2 月、2015 年 2 月、同年 11 月にロンドン大学ゴールドスミス校との共催で国際フォーラムをロンドン、および大阪で開催した。ここでは両大学の教員の講演等の他、大学院生レベルでのフォーラムが開催され、博士前期課程の大学院生のべ 13 名が英語による発表を行った。これらの成果は、音楽学研究室が発行している『阪大音楽学報』の特別号として出版された (2015 年 2 月、および 2016 年 3 月)。また、研究室主宰のコンサートシリーズ、大阪大学コレgium・ムジクムも毎年開催しているが、2014 年度は日本を代表するアングラ劇団、黒テントの創立メンバーである服部吉治氏などを招き、演劇公演と講演会を行った。

これらに加えて、外部査読を取り入れた『阪大音楽学報』は、従来どおりの規模で刊行され、「大阪日日新聞」における院生による連載 (「関西の音と人」) も転載した。また上記国際フォーラムの成果を『阪大音楽学報特別号 2014-15』『阪

大音楽学報特別号 2016』として英語で刊行した。これらを総合すると、阪大音楽学研究室は日本における音楽学研究の拠点の一つとして、確かな存在感を示したといえる。

(演劇学)

永田靖教授、中尾薫准教授、須川助教とも、いずれも多くの論文や著書、また学会等への出席、会議運営などきわめて活発に研究活動を行っている。本研究室には、永田教授が会長、中尾薫准教授が幹事を務める日本演劇学会の分科会である近現代演劇研究会を永田教授が主宰して、毎年 5 回ほどの研究会を行い、関西圏における数少ない演劇研究者の定期的な研究発表の機会を提供して関西での演劇研究の拠点となっている。永田教授は引き続き、国際会議への出席が頻繁となっており、主催する研究会「国際演劇学会アジア演劇ワーキング・グループ」毎年 2 回世界諸都市で開催し、アジア諸国における演劇研究との連携を図っている。また、2015 年には、豊中市立文化芸術センター開設プレ事業・鼎談『PORTAL』を開催するなど、社会学連携活動にも積極的である。演劇学研究室では、永田教授の企画で 2014 年 11 月 6 日～9 日に国際シンポジウム The 2nd International Theatre Studies Conference: Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies を国立韓国芸術総合学校にて開催し、国立韓国芸術総合学校の大学院生、台湾芸術大学の大学院生とともに、演劇学の大学院生 5 名が英語での研究発表にのぞんだ。2015 年 11 月 6 日～8 日にも The 3rd Asian Theatre Conference: Towards a New Conception of Asian Theatre Studies を上海戯劇学院にて開催し、同学院の学生や、国立韓国芸術総合学校と合同でのシンポジウムに参加し、7 名が英語での研究発表をおこない、大学院生の将来的な国際的活躍への意識をうながした。中尾准教授は、一般向け講座の講師を依頼される事例が多く、研究成果を積極的に公開するほか、能楽学会の関西例会・能楽フォーラムの世話人のひとりとして、2014 年度・2015 年度と 2 年引き続いて会場校を務め、社会学連携事業に積極的である。また、2015 年 2 月から一ヶ月、香港バプティスト大学にて海外研究をおこなうほか、国際会議、国際学会にも積極的に参加している。永田教授、中尾准教授、須川助教はそれぞれ、複数の科研グループの代表者や分担者、研究協力者、東京大学、京都市立芸術大学、羽衣国際大学など他大学の研究会に参画し、これらの成果は科研費成果報告書ばかりではなく、個別の論文や学会発表に反映されている。このことは大学院学生の研究活動の活発化につながっており、その評価は上記「教育活動」において触れた。これらのことを通して、日本伝統演劇と西欧近代演劇とを相互に参照しつつ多様で活発な研究を展開し、日本のみならず国際的にも評価されている演劇研究拠点として評価されている。

【研究会等実施状況】

能楽学会第 23 回能楽フォーラム「昭和期関西能楽界と能評—沼艸雨氏旧蔵の演能写真からたどる」、研究発表：中尾薫
「演劇と劇評-付：沼氏旧蔵写真資料概観」関屋俊彦（関西大学）「沼艸雨氏と能楽観賞会-関大沼氏旧蔵書におよぶ-」
恵阪悟（帝塚山大学）「沼氏旧蔵演能写真と能評」藤岡道子（聖母女学院大学）長田あかね（神戸女子大学）「沼氏旧蔵
の狂言写真と狂言評について」会場：大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ 2014 年 12 月 14 日
能楽学会第 24 回能楽フォーラム「この人に聞く—新・人間国宝 三島元太郎氏—」研究発表：中嶋謙昌（灘中学・高等
学校）「太鼓金春流小史」高橋葉子（京都市立芸術大学）三島元太郎（金春流太鼓方）インタビュー：「三島元太郎氏に
聞く」会場：大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ 2014 年 2 月 8 日
近現代演劇研究会 7 月合同例会 研究発表：柊井智英（大阪大学大学院）「教養主義から生まれた戦後新劇の葛藤—新劇合
同公演の変遷、二つのチェーホフ劇をヒントに—」、John Jannone（ニューヨーク市立大学）「『夜熊』と現代ニューヨ
ークのマルチメディア・パフォーマンス」 2014 年 7 月 19 日
近現代演劇研究会 10 月例会 研究発表：大場浩子（ボイス&スピーチコーチ、ポエトリーリーダー）「昨今の俳優音声訓

練の傾向-英国 MA ボイス学の学びを音声実践者の紹介と共に」平川大作（大手前大学）「ふたり芝居の詩学（1） 人数と世界像の相関」2014 年 10 月 25 日

近現代演劇研究会 12 月例会 報告：森陽平（銀河ホール学生演劇合宿事業 実行委員／西和賀町地域おこし協力隊）「ネットワーク形成の契機としての合宿事業 -演劇できれば満足か-」、研究発表：王冬蘭（帝塚山大学）「満州における梅若流 -謡曲師範や謡曲社中を中心に-」2014 年 12 月 20 日

近現代演劇研究会 3 月特別講演会 エステラ・ゼロムスカ（アダム・ミツキエヴィチ大学）「ポーランドにおける日本の演劇」2015 年 3 月 28 日

ポーランド日本演劇のタベ エステラ・ゼロムスカ（アダム・ミツキエヴィチ大学）「ポーランドにおける日本研究と私の目で見た日本の伝統芸能と現代演劇」2014 年 2 月 26 日

音楽学オープンセミナーシリーズ 阪大コレギウム・ムジクム Vol.17「剃刀横町のオペラ」特別講演＋講演会 出演：服部吉次（俳優）黒田京子（ピアノ）2014 年 11 月 14 日

能楽学会第 25 回能楽フォーラム「福王流の歴史と芸風①—播州江崎家の伝承から—」研究報告：朝原広基（能楽研究家）「ワキ方福王流小史」、インタビュー：江崎欽次郎（江崎家十二世当主、福王流ワキ方）、中尾薫（大阪大学）「江崎家における伝承とその芸風」会場：大阪大学豊中キャンパス文法経講義棟文 41 教室 2015 年 12 月 20 日

能楽学会第 26 回能楽フォーラム「福王流の歴史と芸風①—福王茂十郎氏に聞く—」研究報告：恵阪悟（帝塚山大学）「副王流歴代点綴」、大谷節子（成城大学）「福王流謡本二題—盛忠本・真名謡本—」、インタビュー：福王茂十郎（福王流十六世家元、福王流ワキ方）、天野文雄（京都造形芸術大学舞台芸術研究センター）「福王家における芸の継承と芸風」会場：大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ 2016 年 3 月 2 日

近現代演劇研究会 5・7 月合同例会 研究発表：黄資絜（大阪大学大学院）「野田地図番外公演における（多）言語使用と文化の問題」山田美幸（日本大学）「インドにおける「シェイクスピア」の翻案：受容と葛藤」平川大作（大手前大学）「ふたり芝居の詩学（2） 鶴山仁版『ロズギル』を中心に」2015 年 7 月 25 日

近現代演劇研究会 10 月・12 月合同例会 研究発表 松本俊樹（大阪大学博士後期課程）「堀正旗による叙事的演劇（新即物主義的演劇）の「宝塚化」—『泥に塗れた党旗』から『青春』へ— 朴英恵（韓国文化院長、大阪大学博士後期課程）「韓国のコンテンツ政策 —韓国の放送映像海外進出を中心に— 細井尚子（立教大学）「日本と中国の芸能から考えるローカライズド文化 The History and Development of Xinjiang Cinema: A Preliminary Studies Jessica Wai-ye YUENG, Hong Kong Baptist University」2015 年 12 月 26 日

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 永田 靖 教授

1957 年生。1981 年上智大学外国語学部ロシア語学科年卒業、1988 年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996 年から現職。専攻：演劇学。

1-1. 論文

永田靖「自文化接触演劇と再文脈化の手法—メイエルホリド演出『スペードの女王』を題材に—」『待兼山論叢』第 49 号、芸術篇、大阪大学文学研究科, pp. 1-31, 2016/3

永田靖「『森本薫関係資料』(演劇学研究室蔵)について」『Arts and Media』Vol.5, 大阪大学文化動態論専攻アートメディア論

コース, pp. 213-217, 2015/7

永田靖 「「伝統」の現代化—林文中舞踊団『小南管』シリーズをめぐって」『演劇学論叢』Vol.14, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 59-78, 2015/3

永田靖 「サイトスペシフィック・パフォーマンスから伝統芸術の現代化へ」『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭 I, II 2013-2014 年度報告書』大阪大学文学研究科, pp. 91-97, 2015/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「林文中舞踊団『小南管 II』について」『林文中舞踊団 WD dance 小南管 II プログラム』(劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭), 大阪大学文学研究科, pp. 2-3, 2014/11

永田靖 「改修と地層—大阪大学適塾記念センターのめざすもの」『適塾』大阪大学適塾記念センター, pp. 1-5, 2014/11

1-4. 口頭発表

永田靖 「文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭「伝統芸術の現代化」プロジェクトについて」大阪大学総合学術博物館教員研究会, 大阪大学総合学術博物館, 2015/12

Nagata, Yasushi, “Opening Remark”, The 3rd International Theatre Studies Conference: Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies, Shanghai Academy of Drama, 2015/11

Nagata, Yasushi, “Place and Performance”, Beyond Contamination: General Discussion, Performance Studies international, Tohoku Cluster, Aomori Prefectural Museum, 2015/8

Nagata, Yasushi, “Geography of Inter-Asian Theatre: Towards a New Perspective of Asian Theatres”, IFTR Hyderabad Conference: Theatre and Democracy, International Federation for Theatre Research, Hyderabad University, 2015/7

永田靖 「演劇と公共性」日本演劇学会全国大会オープニング・セッション: 演劇と公共性, 日本演劇学会, 桜美林大学, 2015/6

永田靖 「伝統芸術の現代化」《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭: フェスティバル運営の企画と実際, 大阪大学文学研究科, 大阪大学中之島センター, 2015/6

永田靖他 (パネリスト) 「東アジアの大学における演劇教育」シンポジウム: 東アジアの大学における演劇教育—劇場を活用した舞台教育の方法論的探求, 京都造形大学, 京都造形大学, 2015/2

橋爪節也, 富田大介, 永田靖他 「石橋宿舍おみおくりプロジェクト」トークイベント: 石橋宿舍おみおくりプロジェクト, 大阪大学総合学術博物館, 中之島公会堂, 2014/12

永田靖, 林文中, 井口淳子 「伝統芸術の現代化—林文中舞踊団『小南管 II』公演」セミナー: 伝統芸術の現代化—林文中舞踊団『小南管 II』公演, 劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭, 尼崎県立ピッコロ劇場, 2014/11

永田靖, 林公子, 松田正弘他 「能勢浄瑠璃と浄瑠璃シアター」セミナー, 劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭, 地黄公会堂, 2014/9

永田靖他「世界演劇史の中の小林一三・タカラヅカ」講演会, 宝塚歌劇 100 周年記念講演会, 逸翁美術館, 2014/8

Nagata, Yasushi, “Acceptance of Constantin Stanislavsky in Japan”, Theatre and Stratification, International Federation for Theatre Research World Congress 2014, Warwick University, 2014/8

Nagata, Yasushi, “Some Aspects of Modernization of Japanese and Asian Theatres”, Theatre and Stratification, International Federation for Theatre Research World Congress 2014, Warwick University, 2014/8

永田靖「芸術祭と人材育成」西洋比較演劇研究会5月例会, 西洋比較演劇研究会, 成城大学, 2014/5

Nagata, Yasushi, “Inter-Asian Theatre Research from a Japanese Viewpoint; on Two Anti-Japanese Songs in Contemporary Japanese productions”, 國際學術研討會:臺灣戲劇研究的回顧與前瞻, 国立台北藝術大學, 国立台北藝術大學, 2014/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:永田靖

課題番号:26284019

研究題目:アジア近現代演劇の動態論的国際共同研究

研究経費:2014 年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 960,000 円

2015 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

グローバリゼーションの進行する中で演劇学・演劇史のあり方を再考することは依然として課題である。近年は徐々にアジア演劇に対する関心も高まって来ているとはいふもの、相変わらず演劇学・演劇史のあり方は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されている。ポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にしたアジア諸国の演劇研究の機運の高まりを演劇学全般に反映させる試みが求められている。それは個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワーク構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。ここでは世界演劇史的視野に立った比較共同研究によってアジアにおける近現代演劇の特徴とアジア性を見出だすのが目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2013 年度～2015 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:永田靖

助成金名:大学を活用する文化芸術推進事業

研究題目:劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭

助成団体名:文化庁

助成金額:2014 年度 直接経費 15,000,000 円

2015 年度 直接経費 21,792,000 円

研究の目的:

本事業は、芸術祭を企画運営しつつアート・マネジメントについての人材を育てる人材育成プログラムで、演劇、音楽、美術、パフォーマンスなどの現代芸術を広くカバーして、多様な芸術ジャンルに対応できる人材育成を行い、単に芸術祭の実務面でのマネジメント能力のある人を育成するのではなく、芸術祭のコンセプトや内容にまで立ち入って企画運営に関与できる人材を育成

するのが目的です。大阪大学文学研究科芸術ブロックが中心になり、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、大阪大学国際公共政策研究科、大阪大学総合学術博物館と共催いたします。また本事業は平成27年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」による助成を受けており、過去2年で、芸術祭開催に向けたセミナーやワークショップや、芸術祭そのものの企画・運営を中心に行いました。3年目となる平成27年度は、受講生発案企画を含む、これまでの経験を活かした実践的な企画が始まります。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

吹公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015年～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014年6月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014年6月～現在に至る

大阪国際児童青少年アートフェスティバル・実行委員長, 2012年4月～2014年4月

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011年3月～現在に至る

University Malaya Panel of External Assessors・Member of Panel, 2011年3月～2014年4月

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009年7月～現在に至る

国立台北藝術大学戯劇系戯劇学刊 Taipei Theatre Journal・Editorial Board, 2009年6月～2015年5月

International Federation for Theatre Research ・Executive Committee, 2005年7月～2014年7月

芸術学関連学会連合・委員, 2005年6月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002年6月～現在に至る

日本演劇学会・事務局長, 2002年6月～2014年6月

日本映像学会関西支部・幹事, 2002年4月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000年11月～現在に至る

2. 伊東 信宏 教授

1960年、京都市生まれ。大阪大学文学部美学科（音楽学）卒業。同大学院修了。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、リスト音楽院（ハンガリー）客員研究員などを経て、1993年、大阪教育大学助教授。2004年、大阪大学助教授（後、准教授）、2010年4月より現職。専攻：音楽学。

2-1. 論文

伊東信宏「第一次大戦末期ウィーンにおける「歴史的演奏会」」藤原辰史(編)『第一次世界大戦を考える』京都大学人文科学研究所, 2016/3

伊東信宏「ケルンでのもう一つの騒乱」『レコード芸術』786, 音楽之友社, pp. 89-92, 2016/3

伊東信宏「ストラヴィンスキーのバレエ・カンタータ「結婚」の周辺」『レコード芸術』785, 音楽之友社, pp. 55-59, 2016/2

伊東信宏「コパチンスカヤとクルレンツィスの『結婚』」『レコード芸術』784, 音楽之友社, pp. 59-62, 2016/1

伊東信宏「カフカの『変身』に『奏』44, 日本室内楽振興財団機関誌, pp. 13-14, 2015/11

伊東信宏「バルトークの旋律の向こう側」『フィルハーモニー』2015年・5月号, NHK 交響楽団, pp. 35-38, 2015/5

伊東信宏「東欧演歌研究序説」『民族芸術』(民族芸術学会), 31, pp. 52-56, 2015/4

伊東信宏「プファルツの楽師村巡り」『奏』43, 日本室内楽振興財団機関誌, pp. 13-14, 2015/4

伊東信宏「ラブソディ史補論」『待兼山論叢美学篇』(大阪大学文学会), 48, pp. 1-17, 2014/12

2-2. 著書

山室信一, 岡田暁生, 伊東信宏他(共著)『現代の起点 第一次大戦、第3巻「精神の変容」』3, 岩波書店, pp. 193-214, 2014/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

伊東信宏 (招待講演)「日本の演歌と東欧のポップフォーク」, Institut für Japanologie, Heidelberg Universität., Institut für Japanologie, Heidelberg Universität., 2015/7

伊東信宏 (基調講演)「作曲された悪夢」日文研公開講演会:「夢を観る／夢を聴く:夢の文化と芸術世界」, 日本文化研究センター, 日本文化研究センター内講堂, 2015/3

Ito, Nobuhiro, (招待講演)“From Folk Song Arrangement to Rituals of Imaginary Folk: works by Minao Shibata and Masahiro Miwa, 17 February 2015at Goldsmiths, the Richard Hoggart Building”, Goldsmiths Music Research Series: ‘Nationalism, Folklorism and Exoticism in Modern Japan’, London University, Goldsmith, Goldsmiths, the Richard Hoggart Building, London, 2015/2

伊東信宏 (基調講演)「バルカン演歌を渉猟する」民族藝術学会創立 30 周年記念大会公開シンポジウム:「接触領域の芸術—美術・音楽・芸能」, 民族藝術学会, 民族学博物館講堂, 2014/9『民族藝術』31, pp. 52-56, 2015/4)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

伊東信宏 木村重信民族藝術学会賞, 民族藝術学会, 2010/5

伊東信宏 大阪大学教育研究功績賞, 大阪大学, 2010/2

伊東信宏 サントリー学芸賞, サントリー文化財団, 2009/12

伊東信宏 吉田秀和賞, 吉田秀和芸術振興財団, 1997/11

伊東信宏 アリオン賞奨励賞(音楽評論部門), アリオン音楽財団, 1990/10

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(B) 一般、代表者:伊東信宏

課題番号:24320039

研究題目:旧東欧地域における「演歌型」大衆音楽の比較研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

1989 年の体制転換以降、旧東欧諸国には欧米の情報が流れ込み、文化の面でも急速な変化が起こった。その中でも注目すべき現象は、「演歌型」大衆音楽ともいべき新ジャンルの登場である。「演歌型」大衆音楽とは、欧米のポップスの基本語彙であるベース&ドラムスを基礎としながら、発声、楽器法などの点で、民俗音楽の要素を暗示しつつ、テレビなどの媒体により大衆に浸透したジャンルで、ブルガリアの「チャルガ」、ルーマニアの「マネレ」、旧ユーゴスラヴィアの「ターボフォーク」などがその代表である。

欧米のポピュラー音楽に接した大衆が、単にそれらの虜になるだけでなく、独自の新しいジャンルを生み出したことは注目される。本研究は、これら旧東欧諸国における「演歌型」大衆音楽の生成と展開(または不在)について比較し、文化の接触と変容の問題に新しい視座を提供することを目的としている。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

2-7-1. 2015 年度～2015 年度、6：研究助成、助成金獲得者：伊東信宏

助成金名：稲盛財団研究助成金

研究題目：バルカンとアジアにおける「演歌型」大衆音楽の国際比較

助成団体名：稲盛財団

助成金額：2015 年度 直接経費 1,000,000 円

研究の目的：

1989 年の体制転換後、東欧・バルカン諸国には西側の情報が一気に流れ込んだが、音楽の領域では欧米（西欧）の音楽が流行しただけではなく、自国の民俗音楽と西側のポップミュージックとを混ぜ合わせた民俗的ポップミュージックが登場し、大流行した。旧ユーゴの諸国（特にセルビア）では、この種の音楽は「ターボフォーク」と呼ばれ、ブルガリアでは「チャルガ」ないし「ポップフォーク」、ルーマニアでは「マネレ」、アルバニアでは「タツラバ」と呼ばれて、それぞれ独自の展開を見せると同時に、バルカン音楽流通圏とも呼び得る共通性をも示している。これらの音楽は、

1) 音楽的要素（旋律／リズム／発声法／楽器／装飾法）、視覚的要素（衣装／踊り）、歌詞内容（歌詞の主題／人物／場所／事件）など様々な点で、民俗的なものと関連を持っていたり、暗示していたり、強調していたりする。

2) しかし、オーセンティックな民族性／民俗性をあえて強調せず、事実上の標準である欧米のポップミュージックとの関連を示そうとしている。つまり、旋法やリズムは単純化され、ベース&ドラムスのリズム・セクションが加えられ、その都度のファッションが取り入れられる。

3) 社会の都市化、工業化、非一次産業化に伴って生まれた新しい「庶民」が主な消費者であり、ここには彼らの心性に寄り添う情感が示されている。おそらくはその故にインテリ層には嫌われ、社会の上層の人々には俗悪であるとして非難される傾向がある（そのようなものとして、これまで研究対象にはなりにくかった。）

申請者は、これらのジャンルを、その音楽的な特徴の故に「演歌型」大衆音楽と呼び、国内外の東欧、バルカン地域の研究者たちをメンバーとする研究会を組織し、検討を重ねてきた。その結果、これらの音楽において、ロマの汎バルカン的な文化が重要な役割を果たしていること、旧オスマントルコの支配圏では大流行しているのに対し、その影響が相対的に薄かったハンガリー以北には広がっていないこと、といった興味深い傾向が浮かび上がりつつある。

今回の研究では、上記のような成果を、さらにアジアにおける近似した現象との比較へと展開し、国際研究集会の開催や共著研究書の刊行を通じて、多言語、多文化社会における大衆文化の比較研究のモデルを構築することを目指している。

2-8. 外部役員等の引き受け状況

文化庁「次代を担う子供の文化芸術体験事業」・選考委員, 2013 年 4 月～2016 年 3 月

日本芸術文化振興会・音楽専門委員, 2013 年 4 月～現在に至る

ザ・フェニックスホール・プログラム・アドバイザー, 2011 年 4 月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2008 年 4 月～現在に至る

アリオン音楽財団・柴田南雄賞選考委員, 2006 年 4 月～2016 年 3 月

サントリー音楽財団・専門委員／音楽賞選考委員, 2000 年 6 月～現在に至る

朝日新聞音楽懇話会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

3. 輪島 裕介 准教授

1974 年生。東京大学大学院人文社会系研究科（美学芸術学）博士課程単位修得退学。博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、国立音楽大学ほか非常勤講師を経て、2011 年 4 月より現職。専攻：音楽学。

3-1. 論文

輪島裕介「美空ひばり―生きられた神話」杉田敦(編)『終焉する昭和-980 年代(ひとびとの精神史 第 7 巻)』岩波書店, pp. 281-306, 2016/2

輪島裕介「音楽史の可能性」佐藤卓己(編)『歴史のゆらぎと再編(岩波講座 現代 第 5 巻)』岩波書店, pp. 269-292, 2015/11

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(13)カタコト歌謡の遙かな道」『アルテス』2015, アルテスパブリッシング, pp. 76-86, 2015/9

輪島裕介「演歌的誕生(何東洪訳)」『共誌』10, 共誌(<http://commagazine2011.blogspot.jp/>), 2015/6

輪島裕介「大衆音楽の「戦後」はいつはじまったのか?」『nippon.com』(nippon.com), nippon.com, 2015/6

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(12) セ・ジャマ・フジャマ―60 年代ラテン歌謡のカタコト」『アルテス』2015-5, アルテスパブリッシング, pp. 37-51, 2015/5

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(11)トランスナショナル・ドドンパ(2)」『アルテス』2015-2, アルテスパブリッシング, pp. 112-125, 2015/2

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(10) トランスナショナル・ドドンパ」『アルテス』2015-1, アルテスパブリッシング, pp. 89-104, 2015/1

輪島裕介「演歌は日本人の心の故郷か?」JASEAC 創立 75 周年記念事業実行委員会(編)『うたのチカラ-JASRAC リアルカウントと日本の音楽の未来』集英社, pp. 94-104, 2014/11

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(9) ニューリズムとホニオリン」『アルテス』2014-10, アルテスパブリッシング, pp. 37-46, 2014/10

輪島裕介「「カタコト歌謡」から近代日本大衆音楽史を再考する」東谷護(編)『ポピュラー音楽から問う―日本文化再考』せりか書房, pp. 47-80, 2014/10

輪島裕介「カタコト歌謡の近代(8) 銀座でロックするジャズ小僧―ロカビリー・ブームに見るカタコト歌謡」『アルテス』2014-7, アルテスパブリッシング, pp. 15-28, 2014/7

Wajima, Yusuke, “The Birth of Enka” Toru Mitsui(ed.) *Made in Japan: Studies in Popular Music*, Routledge, pp. 71-83, 2014/7

3-2. 著書

神崎宣武, 白幡洋三郎, 輪島裕介他(編)『日本文化事典』丸善出版, pp. 596-599, (「演歌と歌謡曲」「J ポップ」の項目執筆), 2016/1

戸ノ下達也, 輪島裕介(編)『<戦後>の音楽文化』青弓社, (計 8 項目執筆 演歌(pp. 44-45), アメリカ軍キャンプ・将校クラブの音楽(pp. 53-55), ロカビリー旋風(pp. 165-167), エレキブーム(pp. 193-195), ビートルズ(pp. 197-199), ロック(pp. 241-243), ライブハウス(pp. 260-261), J-POP(pp. 269-271)), 2016/1

輪島裕介『踊る昭和歌謡―リズムからみる大衆音楽』NHK 出版, 272p., 2015/2

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

輪島裕介「「踊る昭和歌謡」を分析する―ドドンパを中心に」日本リズム協会第 52 回例会: 昭和歌謡のリズム, 日本リズム協会, 国

立オリンピック記念青少年総合センター, 2016/3

輪島裕介 「服部良一と道頓堀ジャズ・エイジ」21 世紀懷徳堂 OSAKAN CAFÉ vol.8:服部良一と道頓堀ジャズ・エイジ, 21 世紀懷徳堂, 大阪大学中之島センター, 2016/3

輪島裕介 「新民謡・ご当地ソング・ローカルアイドル」音楽創造都市浜松の音楽文化資源を探るゼミナール:大衆音楽の歴史とご当地ソング, はままつプラチナ倶楽部, 鴨江アートセンター, 2015/11

輪島裕介 「踊る阪神間」懷徳堂記念会秋期講座:関西の風景・音楽・身体—幕末から昭和まで, 懷徳堂記念会, 大阪大学中之島センター, 2015/11

輪島裕介 「近代大阪の大衆音楽」大阪大学公開講座:文化の遠心力, 大阪大学, 大阪大学中之島センター, 2015/10

輪島裕介 「越境するダンス・リズム—オフビート・チャチャ/ドドンパから「恋をするなら」/「墓仔埔也敢去」へ」台湾流行歌謡—日本・中国との文化的交錯:台湾流行歌謡—日本・中国との文化的交錯, 名古屋大学大学院国際言語文化研究科、愛知大学国際問題研究所、愛知大学現代中国学会、東呉大学人文社会学院, 名古屋大学, 2015/7

Wajima, Yusuke, “In Search of the Japanese Idol: From Nationwide Attraction to the Local/Transnational Subculture”, 18th Biennial IASPM Conference:Back to the Future: Popular Music and Time, International Association for the Study of Popular Music, Universidade Estadual de Campinas, Unicamp, São Paulo, Brazil , 2015/7

Wajima, Yusuke, “Transatlantic and Transpacific Connections in Popular Music: a case study on localization of ”Latin” music in East Asia ”, HeKKSaGon University consortium 4th German-Japanese University Presidents’ Conference:Building venues for the creation of new knowledge and values, , HeKKSaGon University consortium, Tohoku University, 2015/4

Wajima, Yusuke, “Dodonpa, a Latin Rhythm Made in Japan?: Transatlantic and Transpacific Connections in Popular Music”, Music Research Series Paper Presentation:Nationalism, Folklorism, and Exoticism in Modern Japan, Department of Music, Goldsmiths, University of London, Goldsmith, 2015/2

輪島裕介 「「演歌」をめぐる戦後大衆音楽史」けいはんな文化カフェ, けいはんな文化カフェ, けいはんな文化カフェ, 2014/9

輪島裕介 「音楽における「痕跡」の諸問題」書学書道史学会大会:伝承と生成のかたち—書学書道史と芸術書学, 書学書道史学会, 花園大学, 2014/9

Wajima, Yusuke, “Japanese Popular Music after 1970s”, KAKEHASHI PROJECT 学生クリエイター交流, 国際交流基金, 国際交流基金, 2014/6

Wajima, Yusuke, (招待講演) “Orientalism and Self —Orientalism in Postwar Japanese Popular Music”, Oddelek za muzikologijo, Mednarodno združenje za tradicionalno glasbo (ICTM) ter Kulturno in etnomuzikološko društvo Folk Slovenije vabijo na predavanja v ciklu Aplikativna etnomuzikologija, Faculty of Philosophy, Ljubljana University, Ljubljana University, 2014/4

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

輪島裕介 第 33 回サントリー学芸賞 芸術・文学部門, サントリー文化財団, 2011/11

輪島裕介 The 2011 IASPM Book Prize for a book written in a language other than English, International Association for the Study of Popular Music, 2011/8

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013 年度～2015 年度、若手研究(B)、代表者:輪島裕介

課題番号:25770064

研究題目:戦後日本大衆文化における放送と音楽:〈家庭〉の表象を中心に

研究経費:2014 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 0 円
2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 0 円

研究の目的:

本研究は、戦後大衆音楽において放送が果たした役割について、〈家庭〉イメージの変遷という観点から読み解くことを目指す。放送はその草創期以来、レコード産業及び映画産業とは一線を画し、一種の啓蒙主体として「健全」で「国民的」な文化を創出し普及しようとしてきた。その志向は、戦後初期においては健全で明るい(なおかつ「洋風」の)〈家庭〉イメージを強調する「ホームソング」という音楽形態に表現された。さらに、昭和 40 年代以降、既存のレコード・映画産業の制作方式の解体と、対抗文化的な潮流の影響下に新たな大衆娯楽の形態が形成される。その代表的な存在が、「お茶の間」に適合的な「素人っぽさ」を人工的に強調する「アイドル歌謡」であり、その歴史的な特質を、音楽番組のみならず「ホームドラマ」との関連において明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本ポピュラー音楽学会・理事, 2012 年 12 月～現在に至る

4. 中尾 薫 准教授

1978 年生。2001 年、奈良女子大学文学部言語文化学科日本アジア言語文化学卒業、2008 年、大阪大学大学院文学研究科(演劇学)博士後期課程修了。博士(文学)。2009 年、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館助手。2011 年、大阪大学大学院文学研究科専任講師を経て、2014 年 4 月より現職。専攻: 演劇学、能楽研究。

4-1. 論文

なし

4-2. 著書

泉紀子, 辰巳満次郎, 中尾薫他(共編)『新作能マクベス』和泉書院, pp. 102-111, (pp. 152-177 のローマ字を泉紀子氏の共編), 2015/10

松岡心平, 中尾薫, 山中玲子他(共著)『観世元章の世界』檜書店, pp. 181-204, pp. 379-422, pp. 425-426, pp. 433-532, 2014/6

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

中尾薫「能《実盛》と老後の思い出」廣田鑑賞会『廣田鑑賞会能第25回パンフレット』廣田鑑賞会, pp. 8-9, 2015/10

中尾薫「観世大夫元章の革新と明和改正謡本」国立能楽堂営業課『国立能楽堂』383, 独立行政法人日本芸術文化振興会, pp. 24-27, 2015/7

中尾薫(編)(資料目録)「演劇学研究室蔵『森本薫関係資料』目録」『演劇学論叢』14, 大阪大学演劇学研究室, pp. 165-183, 2015/3

中尾薫「観世文庫の文書64『大和国猿楽関係図』」『観世』80-7, 檜書店, (頁割宛てがない表紙裏に記載), 2014/7

4-4. 口頭発表

中尾薫 「江戸時代における謡文化と庶民教育」ハイデルベルク大学・大阪大学 ジョイント・シンポジウム「人文学における日本研究:江戸庶民文化の諸相」,ハイデルベルグ大学・大阪大学文学研究科,ハイデルベルグ大学, 2015/12

江崎欽次郎, 中尾薫 「江崎家における伝承とその芸風」第 25 回能楽フォーラム:福王流の歴史と芸風(1)―播州江崎家の伝承から―, 能楽学会、大阪大学大学院文学研究科演劇学研究室, 大阪大学, (インタビュー司会、コーディネーター), 2015/12

中尾薫 「「夢幻能」という用語の使用例から能の近代史をたどる」2014 年度第二回研究会東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」―「伝統」の相対化と「文化」の動態把握の試み―:東アジア古典演劇の「伝統」と「近代」―「伝統」の相対化と「文化」の動態把握の試み―, 国際高等研究所, 国際高等研究所, 2015/3

中尾薫 「演劇と劇評―付:沼氏旧蔵写真資料概観―」第 23 回能楽フォーラム:「昭和期関西能楽界と能評―沼艸雨旧蔵の演能写真からたどる―」, 能楽学会, 大阪大学21世紀懐徳堂スタジオ, 2014/12

山路興造, 大谷節子, 中尾薫 「シンポジウムⅡ「京都における「伝統」という言語―大念仏狂言・能楽・京舞・祇園祭を例として―」日本演劇学会 2014 年度秋の研究会:演劇・地域・言語」, 日本演劇学会, 京都外国語大学, 2014/11(司会、シンポジウムコーディネーター),『演劇学論集』60, pp. 93-114, 2015/6)

Mike Ingham, Nakao, Kaoru, ““Come, you spirits”: An Alternative Afterlife to Shakespeare’s Macbeth as Perceived through Japanese Classical Noh Theatre”, The 12th Biennial International Conference of the Australian and New Zealand Shakespeare Association: The 12th Biennial International Conference of the Australian and New Zealand Shakespeare Association, the Australian and New Zealand Shakespeare Association, University of southern Queensland, 2014/10

中尾薫 「「物着」の身体―人格変化の演技法からみる能の演劇性―」Théâtralité(s) Orient - Occident : Théâtralité(s) Orient - Occident, ストラスブール大学、早稲田大学、ストラスブール大学, 2014/10

中尾薫 「能の自然と身体―稽古理論を読み解きながら」国際ワークショップ&レクチャー「自然を教育する？」コンテンポラリーダンスと能にみる身体の訓練:国際ワークショップ&レクチャー「自然を教育する？」コンテンポラリーダンスと能にみる身体の訓練, 大阪大学 CSCD、日本学術振興会基盤研究(C)「英国における児童美術教育の成立と自然観の変容」(課題番号:24520110), 大阪大学会館アセンブリー・ホール, 2014/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

民族藝術学会・理事, 2015 年 5 月～現在に至る

日本演劇学会・幹事, 2012 年 6 月～現在に至る

能楽学会・総務実行委員, 2012 年 5 月～現在に至る

芸能史研究会・事務局, 2003 年 6 月～現在に至る

5. 齋藤 桂 助教

1980 年生。2010 年 3 月、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（音楽学）修了。博士（文学）。2011 年 4 月～2014 年 3 月、日本学術振興会特別研究員 PD。2014 年 4 月～2016 年 3 月、シベリウス音楽院博士研究員。2016 年 4 月より現職。専攻：音楽学。

5-1. 論文

齋藤桂 「赤松克麿の労働歌と近代日本の大衆概念」『阪大音楽学報』12, 大阪大学大学院文学研究科音楽学研究室, pp. 1-18, 2014/12

5-2. 著書

齋藤桂 『〈裏〉日本音楽史——異形の近代』春秋社, 232p., 2015/4

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Saito, Kei, “Socialistic Songs Written by the Right: Katsumaro Akamatsu and Political Functions of Music in 1920–30s Japan”, IMSEA2015 The 3rd Biennial Conference in Hong Kong, The University of Hong Kong, The University of Hong Kong, 2015/12

Saito, Kei, “Problems of Music Historiography: A Perspective from Japan”, Antropologija glasbe-glasbe sveta (Music Anthology-World Musics), The University of Ljubljana, The University of Ljubljana, 2015/11

Saito, Kei, “Imagined History of Japanese Music”, Academic Links between Finland and Japan, JSPS Stockholm Office, JSPS Alumni Club in Finland, Hokkaido University Helsinki Office, The University of Helsinki, 2015/10

Saito, Kei, “History of Research on Japanese Music”, Special Research Forums: Goldsmiths University of London and Osaka University: Nationalism, Folklorism and Exoticism in Modern Japan, Osaka University & London University, Goldsmiths, London University, 2015/2

Saito, Kei, “Japanese Music Historiography as Conflict within Tradition”, The Third Sibelius Academy Symposium on Music History, Sibelius Academy, Sibelius Academy, 2014/5

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

齋藤桂 柴田南雄音楽評論賞奨励賞(2006 年度), アリオン音楽財団, 2007/4

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

6. 横田 洋 助教

1976 年生まれ。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士(文学)。2008 年、大阪大学総合学術博物館研究支援推進員。2011 年より、大阪大学総合学術博物館助教。

6-1. 論文

なし

6-2. 著書

橋爪節也, 横田洋他(共著)『待兼山少年 大学と地域をアートでつなぐ《記憶》の実験室』大阪大学出版会, pp. 8-12, 2016/3

神山彰, 横田洋『商業演劇の興亡』森話社, pp. 187-220, 2014/12

神山彰, 横田洋『忘れられた演劇』森話社, pp. 203-240, 2014/5

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

6-4. 口頭発表

横田洋「明治期の警視庁の芸能取り締まり方針からみる都市の変貌」日本演劇学会 2015 年度大会, 日本演劇学会, 桜美林大学, 2015/6

横田洋「明治期の映画取り締まり」日本映像学会第 40 回沖縄大会, 日本映像学会, 沖縄県立芸術大学, 2014/6

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

6-6-1. 2012 年度～2014 年度、若手研究(B)、代表者:横田洋

課題番号:24720068

研究題目:日本の初期映画の制度的環境に関する研究

研究経費:2014 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 240,000 円

研究の目的:

本研究は日本の初期映画のさまざまな環境について特に法制度的側面からの検証を試みるものである。映画が人々の間でつまり社会の中でいかなる役割を持ち、いかに位置づけられたか、という問題を検証しようとする時、映画に関わる法制度を理解することはきわめて重要である。検閲の問題のみならず、映画館の構造、上映の形態や時間、興行を行う上でのさまざまな制度の検証を通して、初期の映画の置かれた環境を明らかにする。

6-6-2. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:横田洋

課題番号:15K02174

研究題目:芸能史的環境における映画とその影響に関する研究

研究経費:2015 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

研究の目的:

明治末期に新しい興行物として登場した映画は既存の芸能や興行の環境にきわめて大きな影響を与え、そこにさまざまな変化をもたらした。その映画の登場という歴史的な事象を客観的に検証するには既存の芸能との関連で議論されなければならないが、従来の芸能史では芸能としてあるいは興行物としての映画を本格的な研究対象として扱ってこなかった。本研究では芸能をめぐる環境の制度的側面とその変化を中心に調査することにより、映画の登場が芸能史あるいは文化史に与えた影響を実証的に検証する。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

7. 古後 奈緒子 助教

1972 年生。2004 年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師を経て、2014 年より現職。2001 年日本演劇批評家協会主催第 5 回「シアターアーツ賞」受賞。2001 年舞踊学会研究奨励賞。専攻:舞踊学

7-1. 論文

古後奈緒子 「『エクセルシオール』に見られる共同体意識 ―記念碑としての一九世紀末バレエ―」大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室『Arts and Media』5, 大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室, pp. 119-127, 2015/7

古後奈緒子 「シー・シー・ポップの『引き出し(シュプラーデン)』―誰が誰に語っているのか―」大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室『Arts and Media』5, 大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室, pp. 119-127, 2015/7

古後奈緒子 「二つの『七つの大罪』―バランシンとパウシュが二人のアンナに見たもの―」大阪大学大学院文学研究科 演劇学研究室『演劇学論叢』14, 大阪大学大学院文学研究科 演劇学研究室, pp. 100-117, 2015/3

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高梨友宏, 副島博彦, 古後奈緒子(共訳)(ガブリエレ・クライン著)「通過途上にあること ― コンテンポラリー・ダンスにおける文化の翻訳の実践 ―」藤原央人、ほか(共編)『シアターアーツ』(国際演劇評論家協会日本センター), 58, 国際演劇評論家協会日本センター, 2015/5

7-4. 口頭発表

古後奈緒子 「舞踊と共同体 ―『アテネの廃墟』を例に―」日本演劇学会秋の研究集会 2014: 日本演劇学会秋の研究集会 2014, 日本演劇学会, 京都外国語大学, 2014/11

古後奈緒子 「ドイツ語版『エクセルシオール』の共同体意識」第66回舞踊学会大会: 第66回舞踊学会大会, 舞踊学会, 日本女子体育大学, 2014/11(『舞踊学』37, pp. 61-61, 2014/12)

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

古後奈緒子 舞踊学会研究奨励賞, 舞踊学会, 2002/12

古後奈緒子 第五回シアターアーツ賞, 国際演劇評論家協会日本センター, 2001/9

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

7-8. 外部役員等の引き受け状況

国際演劇評論家協会関西支部・事務局長, 2010年5月～現在に至る

2-23 美術史学

I. 現在の組織

1. 教員(2016年5月現在)

教授 5(兼任 1) 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：奥平 俊六、園府寺 司、橋爪 節也(兼任)、藤岡 穰、岡田 裕成

准教授：桑木野幸司

助教：高志 緑

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*							
学部	大学院 博士前期 (M)	大学院 博士後期 (D)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
35	13	20	0	0	8	2	0

*うち留学生 5名、社会人学生 1名

3. 修了生・卒業生(2014年度～2015年度)

年度	学部卒業生	大学院 博士前期(M)修了者	大学院 博士後期(D) 単位修得退学者	大学院 博士後期(D) 博士号学位取得者
2014	6	4	1	4
2015	11	5	3	2
計	17	9	4	6

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

学部の教育においては、初歩的な講義・演習により専門基礎学力の充実をはかるとともに、美術作品を観察し、記述する能力を養う演習、専門分野の論文を批判的に読む能力、美術史に関わる史料講読の能力を養う演習を開講し、基礎能力の育成に努める。また、卒業論文作成のための演習では、研究経過の発表を通じてプレゼンテーション能力の向上をはかり、かつ相互に批判する能力を培う。

大学院の教育においては、最新の研究動向を踏まえた講義・演習を開講し、専門学力の充実をはかるとともに、美術作品の調査を指導あるいは奨励し、実証的な作品研究能力を養い、隣接領域への関心を喚起し、美術史研究の新たな視点を

ひらくことを目指す。また、修士論文作成演習、博士論文作成演習を開講し、さらに個別に論文指導を行う。加えて、文化動態論専攻アート・メディア論との連携をはかり、日本学術振興会特別研究員制度、TA や RA、美術館や博物館でのインターンシップなどの積極的利用を促進する。

2. 研究

教員は、一人平均で年間 1 本以上の論文を執筆し、他に作品解説、書評、調査報告書等を執筆することを目標とする。かつ、科学研究費などの外部資金の獲得につとめ、研究を遂行する。博士後期課程の大学院生は、積極的に国内外の学会で口頭発表し、1 人平均で年間 1 本以上の論文、作品解説等を執筆することを目標とする。この他、研究を促進するため、学外においては美術史学会をはじめとする関係学会等の運営に協力し、学内においては待兼山芸術学会の運営、開催に協力する。また、外国人研究者の招聘、受け入れ等を通じて、研究室の国際性を高める。

3. 社会連携

国、地方公共団体、博物館・美術館等の美術作品に関わる学術調査およびその成果報告に協力するとともに、国、地方公共団体の文化行政、博物館・美術館の運営等に協力する。また、国、地方公共団体、博物館・美術館等が必要とする美術作品の評価に協力する。研究室のホームページを運営し、活動内容を外部に発信する。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

目標に定めた通りの美術史の講義、演習を開講し、十分な教育効果をあげた。また、教育実践センターにおける教育に協力し、2014 年度には 5 セメ分、2015 年度には 4 セメ分の授業を担当した。

日本・東洋美術史においては、伝統の授業である見学演習を継続し、美術史学の基礎となる作品の観察、記述能力の育成に効果をあげた。また、オプションとして日本画実習を行い、素材に直接触れ、自ら技法等を確認する機会を提供した。大学院生には、科研に関わる、あるいは博物館、地方自治体が実施する作品調査、種々の研究会への参加を促し、所期の目標を達成した。西洋美術史においては、学部レベルでは論文を読むための授業が定着し、ゼミにおける研究発表、質疑応答を通じて、大学院、学部ともに論文作成にいたる過程を着実に定着させた。この間 2 名が欧米に留学し、高度な語学力を養いつつ、本格的な実地調査、研究を行うとともに、大学院授業を受けている。

なお、非常勤講師については、2014 年度は日本近世～近代絵画（古田亮・東京藝術大学大学美術館准教授）、戦後アメリカ美術（池上裕子・神戸大学准教授）の専門家、2015 年度は東アジア絵画史（板倉聖哲・東京大学教授）、イタリア・ルネサンス美術の専門家（京谷啓徳・九州大学准教授）をお招きし、専任教員ではカバーができない範囲の、そして最も先進的な研究についての講義を提供し、大きな教育効果をあげた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

前記の活動の結果、学部生、大学院生ともに水準以上の成績を残すことができた。2014 年度には修了生が文学研究科賞を、2015 年には学部卒業生が楠本賞を受賞した。なお、学内からの大学院進学者が 2014 年度 2 名あり、教育について着実な成果を挙げている。

2. 研究

前記の活動の通り、著書、論文等の執筆や学会発表については、教員・大学院生ともに目標をほぼ達成した。加えて、4人の専任教員が科学研究費の助成を受けるなど、研究については十分に目標が達成できたと自己評価できる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014年度～2015年度)

1. 博士学位授与

1-1. 課程博士および論文博士の授与件数

年度	課程博士	論文博士	計
2014	4	0	4
2015	2	0	2
計	6	0	6

1-2. 博士論文の提出者、題目、審査教員等

【課程博士】

金子 岳史	「日本における画馬の伝統の研究」 2015/3 主査：奥平俊六 副査：橋爪節也、藤岡穰
鈴木 雅子	「来迎図の図像解釈 ―往生の様相と伝統―」 2015/3 主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、橋爪節也
山口 隆介	「鎌倉時代彫刻史研究序説―様式・図像・機能―」 2015/3 主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、橋爪節也
曾田 めぐみ	「幕末明治期の美術における祈りと遊びの表象―河鍋晩斎筆「地獄極楽めぐり図」を中心に―」 2015/3 主査：橋爪節也 副査：奥平俊六、藤岡穰
三本 周作	「仏像の金属製荘厳具をめぐる諸問題―鎌倉時代の事例を中心として―」 2016/3 主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、橋爪節也
西谷 功	「鎌倉時代における宋代仏教文化受容の研究―泉涌寺流を中心として―」 2016/3 主査：藤岡穰 副査：奥平俊六、橋爪節也、横内裕人氏（京都府立大学准教授）

2. 大学院生等による論文発表等

2-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	6(4)	2(0)	4(1)	2(0)	0(0)	14(5)
2015	2(1)	2(0)	1(1)	0(0)	2(0)	7(2)
計	8(5)	4(0)	5(2)	2(0)	2(0)	21(7)

括弧内は査読付き論文数。

2-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	2	4	4	3	13
2015	0	4	7	3	1	15
計	0	6	11	7	4	28

2-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

〔博士前期〕

中村真菜美「谷文晁筆「公余探勝図」の制作について」『フィロカリア』32, pp.45-69, 2015/3

〔博士後期〕

橋本 遼太「高階隆兼の画業再考—彫像への彩色について—」『待兼山論叢 美学篇』第48号, pp.1-22, 2014/12

西谷功「視覃雜記著者「長典」と醍醐寺本『十巻抄』所持者「長典」」『智山学報』64, pp.73-90, 2015/3

西谷功「蘭溪道隆と泉涌寺僧の交流 東アジアのなかの建長寺—宗教・政治・文化が交叉する禅の聖地」『東アジアのなかの建長寺』, 勉誠出版, pp.109-134, 2014/11

西谷功「文物からみた日中僧俗ネットワーク—京都・泉涌寺を例として」『東アジアのなかの日本美術（日本美術全集6）』, 小学館, pp.188-189, 2015/2

藤本真名美「近代のカブキ者・バンカと「田園趣味」」『和歌山県立近代美術館ニュース』第80号, pp.5-6, 2014/9

藤本真名美『月映』前史—東京美術学校と田中恭吉を中心に（展覧会カタログ）『月映』, 和歌山県立近代美術館, NHKブラネット近畿, pp.283-295, 2014/11

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」について(四) —田鶴に投影された摩耶夫人の表象」河鍋暁斎研究誌『暁斎』, 第115号, pp.208-213, 2015/1

曾田めぐみ「歌川国芳「源頼光公館土蜘蛛妖怪図」における図像と構想の源泉をめぐって」東京国立博物館研究誌『MUSEUM』, 第653号, pp.7-32, 2014/12

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」について(三) —「賽の河原」に描かれた赤い欄干に注目して」, 河鍋暁斎研究誌『暁斎』, 第113号, p.100-103, 2014/6

山口隆介「各論 醍醐寺三宝院弥勒菩薩像と仏師快慶—後白河院追善像としての側面に注目して—」『国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—』, 奈良国立博物館特別展図録, 2014/7

鏡山智子「法輪寺薬師如来像・伝虚空蔵菩薩像をめぐって」『美術史』第178冊, pp.332-349, 2015/3

高志緑「浜松に伝わる二つの二十四善神（諸天）像」『浜松市博物館報』27号, pp.1-16, 2015/3

畑井恵「ピート・モンドリアンのアトリエパリ、デパール街 26 番地」『フィロカリア』第 32 号, pp.71-104, 2015/3

【2015 年度】

〔博士後期〕

竹中哲也「日本における西洋美術コレクション——展覧会と作品の行方」『姫路市立美術館研究紀要』第 15 号, 姫路市立美術館, pp.13-22, 2016/3

李鎮榮「統一新羅の十二神将に関する考察」『フィロカリア』33, pp.85-107, 2016/3

西谷功「泉涌寺旧蔵「涅槃変相図」とその儀礼の復元的考察—鎌倉時代に於ける葬式涅槃儀礼の受容」『佛教藝術』344, pp.54-85, 2016/1

西谷功「南宋時代における普陀山観音信仰の展開とその造形—泉涌寺伝来観音菩薩坐像を中心に—」稲本泰生代表『東アジア仏教美術における聖地表象の諸様態』, 平成 25 年度～27 年度科学研究費補助金 基盤研究 (B) 研究成果報告書, pp.113-140, 2016/3

西谷功『『南山北義見聞私記』の研究』, 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター共同研究「中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究」研究成果報告書, iii+160p., 2016/3

中山龍一「芸術理念・市場戦略としてのディエゴ・リベラの「汎アメリカ主義」—《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》(1940 年)—」『美術史』179 号, pp.170-186, 2015/10

金岡直子「神への讃歌—ギュスターヴ・モロー作《ユピテルとセメレ》における竖琴の象徴性—」『待兼山論叢』第 49 号芸術篇, pp.39-60, 2015/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

〔博士前期〕

中村真菜美「谷文晁筆「公余探勝図」の制作について」美術史学会西支部例会, 大阪市立東洋陶磁美術館 講堂, 2014/11/15

〔博士後期〕

橋本遼太「高階隆兼の画業再考—「絵仏師」としての一面に注目して—」第 67 回美術史学会全国大会, 早稲田大学, 2014/5/18

西谷功『『視覃雜誌著者「長典」と醍醐寺建久本『十巻抄』所持者「長典」』智山勧学会, 川崎大師, 2014/5/23

西谷功「中世寺院における宋代仏教文化受容の諸相」東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター共同研究ワークショップ, 京都市・泉涌寺, 2014/7/28

西谷功「泉涌寺旧蔵「涅槃変相図」とその儀礼の復元的考察」東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター共同研究ワークショップ, 東京大学, 2015/3/15

藤本真名美「谷口香嶠が遺したもの—画塾「自邇会」出身画家の活動を中心に—」, 大正イマジュリィ学会第 32 回研究会, 和歌山県立近代美術館, 2014/7/12

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」について (四) —田鶴に投影された摩耶夫人の表象」第 35 回暁斎研究発表会, 蔵眼科レクチャールーム, 2014/9/28

曾田めぐみ「河鍋暁斎筆「地獄極楽めぐり図」について (五) —第三十七図「極楽行きの列車」と下絵との比較を通して」第 36 回暁斎研究発表会, 河鍋暁斎記念美術館, 2015/2/15

山口隆介「中世律宗の鎌倉進出と善派仏師」奈良国立博物館公開講座, 奈良国立博物館, 2014/4/19

山口隆介「東大寺僧形八幡神像と手搔会」科研基盤研究(B)「東大寺史の総合的再構成 —『東大寺要録』を中心に—」

研究会, 東大寺ミュージアム, 2014/9/20

山口隆介「奈良国立博物館を楽しむ」, はびきの市民大学, L I C はびきの, 2014/11/9

山口隆介「運慶・快慶と奈良の仏像」, 奈良学セミナー, 中部公民館, 2014/11/30

中山龍一「ディエゴ・リベラの「パン・アメリカ主義」—《この大陸にある北と南の芸術表現の結婚》(1940 年)におけるメキシコの文明の表象—」第 67 回美術史学会全国大会, 早稲田大学, 2014/5/18

【2015 年度】

〔博士前期〕

中村真菜美『薩州蟲品』の世界—木村兼葭堂とその交流ネットワーク—」第 10 回博物科学会, 金沢大学, 2015/6/26

〔博士後期〕

菊川亜騎「京都市立美術工芸学校の彫刻家たち—北村西望作・幸野樸嶺像を中心に」屋外彫刻調査保存研究会第 15 回研究会, 武蔵野美術大学, 2015/7/19

笹野摩耶「カンディンスキーと革命後のロシア美術界」第 26 回待兼山芸術学会, 大阪大学, 2016/3/26

寺澤慎吾「舞い降りた吉祥天女」, 特別展「国宝 吉祥天女が舞い降りた!」, 仙台市博物館, 2015/5/16

高志緑「陸信忠筆「仏涅槃図」の再検討—図像源泉と懸用法を中心に—」, 美術史学会西支部例会, 大和文華館, 2016/3/19

鏡山智子「7 世紀後半の斑鳩造像における亡命百済人の影響」, グローバル日本研究国際シンポジウム, 大阪大学豊中キャンパス, 2016/3/24

西谷功「泉涌寺と禅寺の意外な関係—禅律寺院のくらしと文化」, 花園大学京都学講座, 花園大学, 2015/7/30

西谷功「南宋制作「涅槃（変相）図」とその儀礼の復元的考察」, 古典解釈の東アジア的展開—宗教文献を中心課題として, 第 24 回研究発表, 京都大学人文科学研究所, 2015/12/12

西谷功「鎌倉時代における泉涌寺のくらしと文化—時代の最先端としての宋文化」, 歴史美術懇話会, 花園大学, 2016/2/20

西谷功「醍醐寺僧」長典の活動」, 東京大学史料編纂所一般共同研究「醍醐寺文書聖教における泉涌寺関係史料の基礎的研究」公開講座, 醍醐寺, 2016/3/13

西谷功「泉涌寺における宋代仏教儀礼文化の受容—伽藍、文物、僧」, 東京大学東洋文化研究所附属東洋学研究情報センター共同研究「中世寺院における宋代仏教文化受容の統合的研究」シンポジウム, 東大東洋文化研究所, 2016/3/17

藤本真名美「谷口香嶠と近代京都の歴史画」, 近代大阪美術研究会, 高津宮, 2015/6/20

藤本真名美「谷口香嶠と京都の歴史画」, 近代京都科学研究会, 京都工芸繊維大学, 2016/2/27

浜野真由美「近衛信尹筆「檜原いろは歌屏風」に関する考察」, 美術史学会西支部例会, 同志社大学, 2015/11/21

袴田舞「兼葭堂蔵『奇貝図譜』について」和歌山地方史研究会, 和歌山市立博物館, 2016/3/12

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

〔博士後期〕

西谷功(図版解説)「69 観音菩薩坐像」『東アジアのなかの日本美術(日本美術全集 6)』, 小学館, pp.238-239, 2015/2

西谷功(作品解説)「04 東山泉涌律寺図」『京を描く—洛中洛外図の時代—』, 京都文化博物館, pp.236-237, 2015/3

西谷功(書評)『大徳寺伝来五百羅漢図』, 中外日報, 中外日報社, p.16, 2014/8/22

山口隆介「十二神将立像のうち戌神(鎌倉国宝館蔵)」『奈良国立博物館だより』89 号, 2014/4

山口隆介『法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り』特別展図録(作品解説)『法隆寺展—聖徳太子と平和への祈り』, 読売新聞社, 2014/4

- 山口隆介「古巢の仏たちとの再会」(「奈良博手帖」), 読売新聞奈良版, 2014/4/16
- 山口隆介「水月観音菩薩遊戲坐像(東慶寺蔵)」(「特別展 鎌倉の仏像」列品紹介), 読売新聞朝刊, 2014/04/26
- 山口隆介「十二神将立像(奈良国立博物館蔵)」(「名宝細見」作品紹介), 朝日新聞朝刊, 2014/05/24
- 山口隆介「弥勒菩薩坐像(京都・醍醐寺蔵)」『美術の窓』(「日本美術のススメ 今月の逸品」作品解説, 2014/7
- 山口隆介『国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—』奈良国立博物館特別展図録(作品解説)『国宝 醍醐寺のすべて—密教のほとけと聖教—』, 奈良国立博物館, 2014/7
- 山口隆介『第六十六回 正倉院展』奈良国立博物館特別展図録(作品解説), 『第六十六回 正倉院展』, 奈良国立博物館, 2014/10
- 山口隆介『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』奈良国立博物館仏像写真展図録(作品解説), 『大和の仏たち—奈良博写真技師の眼—』, 奈良国立博物館, 2014/12
- 濱住真有「美術工芸品 (廬山寺蔵) 金銅三鈷杆 1 口・金銅独鈷杆 1 口(指定) 附『由緒書』1 卷「廬阜冬嶺桑門良秀」の署名がある, 木製木瓜型厨子 1 基」, 京都市文化財ブックス第 29 集『剣鉾のまつり 附 第 32 回京都市指定・登録文化財』京都市文化市民局 文化芸術都市推進室 文化財保護課, pp. 94-95, 2015/3(※共著者 安井雅恵)
- 高志緑(コラム)「初山宝林寺と妙見山大雄寺の二十四菩薩(善神)」及び作品解説 5 点, 特別展図録『浜松にもたらされた黄檗文化』, 浜松市博物館, p.70, pp.97-99, p.101, 2014/11
- 鈴木慈子(翻訳)『Norio Imai』に寄せて『今井祝雄—具体とその後』アートコートギャラリー, pp.33-34, 2014/7
- 鈴木慈子「それぞれの近代—東京・ソウル・台北・長春」『アートランブル』Vol.44, 兵庫県立美術館, p.6, 2014/9
- 鈴木慈子「コレクションから 下村良之介《匣》」『アートランブル』Vol.45, 兵庫県立美術館, p.1, 2015/1
- 鈴木慈子「それぞれの近代」『民族藝術』Vol.31, 民族藝術学会, pp.176-177, 2015/3
- 【2015 年度】**
- 〔博士前期〕
- 鈴木寛和(作品解説)「無題」など 3 点, 『北大阪の絵画』, 関西大学博物館, 2015/12
- 〔博士後期〕
- 菊川亜騎「第 4 章 実施スケジュール」・「第 5 章 実施内容、修復作業の概要、先行事例の調査」・「付録 修復作業緒日誌」『文化庁 平成 27 年度メディア芸術連携促進事業 連携協働事業「タイムベースト・メディアを用いた美術作品の修復／保存に関するモデル事業 実施報告書』, 京都市立芸術大学, pp.13-23, pp.31-32, pp.39-43, 2016/2
- 菊川亜騎「ワークショップ〈メディアアートの生と転生 保存修復とアーカイブの諸問題を中心に〉」『芸術資源研究センター ニュースレター』Vol.1, 京都市立芸術大学芸術資源研究センター, pp.18-19, 2016/3
- 鈴木慈子「草木とともに—現代の隠者」『堀文子 一所不住・旅 展』図録, 兵庫県立美術館, pp.182-185, 2015/4
- 鈴木慈子(翻訳) ジュージ・ヴェッキ「モランディの印」『ジョルジョ・モランディ—終わりになき変奏』展図録, 兵庫県立美術館, pp.25-29, 2015/12
- 鈴木慈子「Stardust Letters—星々の文」『アートランブル』Vol.49, 兵庫県立美術館, pp.2-3, 2015/12
- 鈴木慈子「もうひとつの近代」『民族藝術』Vol.32, 民族藝術学会, pp.202-203, 2016/3
- 竹中哲也「画家シャガールのアイデンティティ」・「シャガールの芸術と日本人画家たち」・展覧会解説(第 1 章「パリと故郷のはざままで」・第 4 章「シャガールと日本」)・作品解説 (Nos.1-7, 18-31)・作家解説『没後 30 年 シャガール展—愛と色彩のファンタジー』図録, 姫路市立美術館/神戸新聞社, pp.7-15, 19, 103, 118-122, 132, 134-137, 2015/4
- 竹中哲也(作品解説)『姫路市立美術館蔵 國富奎三コレクション—近代フランス絵画 モネからマティスまで』図録, 姫路市立美術館 pp. 18, 30, 38, 40, 42, 44, 46, 48, 50, 52, 54, 56, 58, 62, 68, 70, 76, 2016/3

寺澤慎吾(作品解説)「吉祥天女像」など7点、『国宝 吉祥天女が舞い降りた！奈良薬師寺未来への祈り』, pp.116,119-122
仙台市博物館, 2015/4

寺澤慎吾(作品解説)「豊臣秀吉画像」など14点、『宇和島伊達家の名宝 政宗長男・秀宗からはじまる西国の伊達』,
pp.104,112-114,121-124, 2015/10

李鎮榮(作品解説)「観音菩薩立像」など4点、『金銅仏きらきらしーいにしへの技にせまる』展覧会図録兼平成25年度
～平成28年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「8～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」,
pp.18-21, 2015/10

高志緑(作品解説)「菩薩立像」, 『金銅仏きらきらしーいにしへの技にせまる』展覧会図録兼平成25年度～平成28年
度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「8～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」, pp.42,
2015/10

鏡山智子(作品解説)「仏立像」など16点、『金銅仏きらきらしーいにしへの技にせまる』展覧会図録兼平成25年度～
平成28年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「8～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」,
pp.8-12,17,24-32, 2015/10

西谷功「泉涌寺修正会—宋式金光明懺法の世界」, 泉涌寺宝物館展示解説書, 4p, 2015/4

西谷功「釈迦十六羅漢図—「苦行」の釈迦と泉涌寺の儀礼」『鴨東通信』98, pp.18-20, 2015/7

西谷功「禅律寺院における宋式「首楞嚴呪」「施餓鬼」儀礼」『明日の東洋学』34, pp.2-5, 2015/10

藤本真名美「恩地孝四郎のデッサンを見る」『美術の窓』390号, pp.36-39, 2016/3

浜野真由美「ぶらり美術散歩」『書の教室』444号, 日本教育書道研究会, p.35, 2015/4

浜野真由美「ぶらり美術散歩」『書の教室』445号, 日本教育書道研究会, p.35, 2016/3

丹村祥子(作品解説)「仏坐像」など9点、『金銅仏きらきらしーいにしへの技にせまる』展覧会図録兼平成25年度～平
成28年度科学研究費補助金基盤研究(A)研究成果報告書「8～9世紀東アジアの金銅仏に関する日韓共同研究」,
pp.33-41, 2015/10

3. 大学院生・学部学生等の受賞状況

〔学部生〕多田羅珠希, 楠本賞, 大阪大学, 2015年度

4. 日本学術振興会研究員採択状況

2014年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 3名 (計4名)
2015年度 PD: 0名 DC2: 1名 DC1: 0名 (計1名)

5. 大学院生・学部学生等の留学

2014年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)
2015年度 学部: 0名 大学院: 1名 (計1名)

6. 専門分野出身の研究者

(大学院修了者・在籍者・学振特別研究員・研究生等で、在籍年度にかかわらず2014年度～2015年度に大学・短大・高専の常勤職員として就職が決まった者について)

袴田舞 博士後期課程 和歌山県立博物館 学芸員 2015/4

畑井恵	博士後期課程 千葉市美術館 学芸員 2015/5
田村允英	博士前期課程 北海道立近代美術館 学芸員 2016/4
高志緑	博士後期課程単位修得退学 大阪大学大学院文学研究科 助教 2016/4
橋本遼太	博士後期課程 神奈川県立歴史博物館 2016/4

7. 専門分野出身の高度職業人

(2014 年度～2015 年度の大学院博士前期／後期課程中退・修了者および学部卒業者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

8. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

9. 刊行物

2015 年度 『フィロカリア』第 33 号

10. 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催や事務局等の引き受け状況

国際シンポジウム 「金銅仏の制作技法の謎にせまる」担当委員 藤岡穰 2015 年 12 月 12 日

国際研究ワークショップ 美術における「境界上の現象」企画：岡田裕成 2016 年 1 月 14 日

11. 専門分野主催の研究会等活動状況

なし

12. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 奥平 俊六 教授

1953 年生。東京大学文学部（美術史）卒、同大学院人文科学研究科博士課程単位修得退学。文学修士。國華社研究員、大阪府立大学総合科学部専任講師、大阪大学文学部助教授を経て現職。京都国立博物館客員研究員、大和文華館評議員など。専攻：日本美術史／中近世絵画史。

1-1. 論文

奥平俊六 「宗達の目の記憶、あるいは音符としての形」『琳派—京を彩る』京都国立博物館, pp. 216-223, 2015/10

Okudaira, Shunroku, "Sotatsu's Gold-and-Silver Paintings :The interaction Between Painting and Calligraphy" Yukio Lippit, James Urak *Sotatsu: Making Waves*, The Freer Gallery of Art, pp. 42-63, 2015/10

Okudaira, Shunroku, “Fans of the Zen Community: A Study of the Nanzen-ji Screens” *Ink and Gold – Art of Kano*, Philadelphia Museum of Art, pp. 12-21, 2015/3
奥平俊六 「江阿弥と若冲」『大和文華』127, 大和文華館, pp. 1-11, 2015/1

1-2. 著書

宇野日出生, 日向進, 奥平俊六他 『京都 実相院門跡』思文閣出版, pp. 69-77, 2016/2
河野元昭, 奥平俊六, 並木誠士他(共著) 『年譜でたどる琳派 400 年』淡交社, pp. 9-16, 2015/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

奥平俊六 「黒田日出男『洛中洛外図・舟木本』紫明の会『紫明』38, 丹波古陶館, p. 76, 2016/3
奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦(共編著) 「公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画Ⅱ」(共編著)『公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画Ⅱ』渡辺美術館, pp. 1-42, 共編および作品解説, 2016/3
Okudaira, Shunroku, “作品解説:「鹿下絵和歌巻」シアトル美術館、「樹木図屏風」フリーア美術館等 6 点”, Yukio Lippit, James Urak, *Sotatsu: Making Waves*, The Freer Gallery of Art, p. 223, 「鹿下絵和歌巻」シアトル pp.223-225, 「新古今屏風」pp.230-231, 「誰ヶ袖屏風」pp.240-241, 「樹木図屏風」pp.284-285, 「鶏頭玉葱図屏風」pp.292-295, 「鳥窠和尚図」クリーブランド pp.260, 2015/10
奥平俊六(監修) 「風神雷神図の画家: 俵屋宗達の正体」『NHK:BS プレミアム』NHK, 10 月 31 日放送番組の美術史監修, 2015/10
奥平俊六 「辻邦生『嵯峨野明月記』紫明の会『紫明』37, 丹波古陶館, p. 84, 2015/10
奥平俊六 「美術と絵画資料の展覧会企画と運営 [B プログラム]日本美術関連」『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成教育—声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声芸術祭Ⅰ、Ⅱ—2013-2014 年度報告書』大阪大学大学院文学研究科, pp. 69-75, 2015/3
奥平俊六, 門脇むつみ, 森道彦 「公益財団法人渡辺美術館所蔵品調査報告書 狩野派絵画」渡辺美術館, pp. 1-32, 全 32 頁, 2015/3
Okudaira, Shunroku, “Kano School, Assembled Fan Paintings”, , *Ink and Gold – Art of Kano*, Philadelphia Museum of Art, p. 248, 2015/3
奥平俊六 「若冲、金地と向きあう」『別冊太陽 若冲百図』平凡社, pp. 152-153, 2015/2
奥平俊六 「桃山時代」『別冊太陽 日本美術史入門』平凡社, pp. 189-222, 2015/1
奥平俊六 「JAWSのこと」『鹿島美術財団 30 年史』公益財団法人鹿島美術財団, p. 56, 2014/10
奥平俊六 「古田亮『特講 漱石の美術世界』」『紫明』35, 紫明の会, p. 101, 2014/8

1-4. 口頭発表

奥平俊六 「若冲と大坂」, 徳島城博物館, 2016/3
奥平俊六 「実相院の襖絵について」, 京都文化博物館, 2016/2
奥平俊六 「宗達の目の記憶」, 京都国立博物館, 2015/11
Okudaira, Shunroku, (基調講演) “宗達の目の記憶、あるいは音符としての形”, *Sotatsu: Making Waves* 展覧会記念シンポジウム: *Sotatsu: Making Waves*, The Freer Gallery of Art, The Freer Gallery of Art, 2015/10
奥平俊六 「近世の風俗画」, 「物語絵と風俗画」展記念講演, 大和文華館, 2015/4
奥平俊六 「洛中洛外図を楽しく見る」, 「京を描く—洛中洛外図の時代—」展記念講演, 京都文化博物館, 2015/3

奥平俊六「謎の絵師 宗達を追う」,フリーア美術館「宗達展」プレシンポジウム,国際交流基金、フリーア美術館,東京藝術大学美術館,2015/3

奥平俊六「自閉症の人はなぜ電車が好きなのか?—絵画作品を手がかりに—」アール・ブリュット☆アート☆日本2,ボーダレス・アートミュージアムNOMA,近江八幡・酒遊館,2015/2

奥平俊六「遍在する異文化—布袋・蜆子・猪頭の図像」日本のアールブリュット 国際シンポジウム,チューリッヒ大学,2014/10

奥平俊六「露殿の大冒険」物語と絵画」展特別講演,逸翁美術館,2014/9

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

奥平俊六 國華賞(第2回),国華社・朝日新聞社,1990/10

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

京都市文化財観光資源財団・専門委員,2015年4月～現在に至る

国際交流基金・フリーア美術館「SOTATSU 展(仮称)」・日本側学術委員,2013年8月～2016年3月

豊中市・文化財保護審議会委員,2012年4月～現在に至る

丹波市・植野記念美術館運営委員,2010年4月～現在に至る

大和文華館・評議員,2005年4月～現在に至る

丹波市・文化財保護審議会委員,2005年4月～現在に至る

京都国立博物館・客員研究員,1999年4月～現在に至る

山口県立美術館・収集審査委員,1998年4月～現在に至る

2. 園府寺 司 教授

1957年生。大阪大学文学部美学科(西洋美術史)卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren(文学博士・アムステルダム大学)。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史／アート・メディア論。

2-1. 論文

Kodera, Tsukasa, ““Art - Nations - World” The 1960 International Congress of the AICA in Poland and Discussions on the International Character of Modern Art” Jerzy Malinowski *Pamiętnik Sztuk Pięknych Fine Arts Diary*, Numer 9, POLSKI INSTYTUT STUDIÓW NAD SZTUKĄ ŚWIATA/POLISH INSTITUTE OF WORLD ART STUDIES, pp. 203-216, 2015/10

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

圀府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

圀府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

圀府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:圀府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 6,000,000 円 間接経費 1,800,000 円

2015 年度 直接経費 4,300,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Art の研究基盤と方法を構築したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010 年 4 月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009 年 4 月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2000 年 4 月～現在に至る

3. 橋爪 節也 教授

1958 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。東京芸術大学美術学部附属古美術研究施設助手、大阪市立近代美術館（仮称）建設準備室主任学芸員。専攻：日本美術史／近世近代絵画史。

3-1. 論文

橋爪節也, 明尾圭造他「北野恒富の“逆説”再考—新しい画家像を求めて—」大阪商業大学商業史博物館『北野恒富と中河内 —知られざる大阪画壇の発信源』大阪商業大学商業史博物館, pp. 38-41, 2015/10

橋爪節也「明治二十一年の巨獣たち —大阪府立博物館美術館の天井画群—」『大阪の歴史』82, 大阪市史編纂所, pp. 69-95, 2014/10

3-2. 著書

橋爪節也, 横田洋他(共編著)『待兼山少年—大学と地域をアートでつなぐ《記憶》の実験室』12 巻-大阪大学総合学術博物館叢書, 大阪大学出版会, 96p., 2016/3

水田紀久, 橋爪節也他(監修)『木村兼葭堂全集』第8巻-兼葭堂顕彰・年譜・研究文献目録抄, 藝華書院, 406p., 2015/9

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

橋爪節也「美学な幕切れ 60 天才画家と文豪の幕切れ—それでもしかし、まだ終わっていない—」『上方芸能』199, pp. 78-78, 2016/3

橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑩「挿絵」の心得」『大阪春秋』42-156, 株式会社 新風書房, pp. 93-95, 2016/1

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」第 8 回なにが目出度いと言って、絵を飾れることが一番目出度い」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, p. 1, 2015/12

橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑩キャラクター ～かわいい系～」『大阪春秋』42-155, 株式会社 新風書房, pp. 101-103, 2015/10

橋爪節也「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくままに～レオ・フェレの『悪の華』が好きである秋の御堂筋を“エアー・ヴィオロン”でお散歩？」『MtS Publishing Factory(WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO)』3-11, FM COCOLO, pp. 44-44, 2015/10

橋爪節也「大阪の文化再生に向けて・私はこう思う大阪を愛する市民のプライドはどこに？」『OCOS』39-207, 大阪文化団体連合会, pp. 7-7, 2015/10

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 61 回 負けても勝ち 心の中の真田十勇士」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』394, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/9

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」第 7 回“モノ”こそ物狂おしけれ 立体物を飾るキモチ」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, p. 1, Web 掲載, 2015/8

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 60 回 夏の味覚と文学の味わい 上司小剣の「鱧の皮」」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』393, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/8

橋爪節也「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくままに～チャビちゃんは天使になったンダにゃねこなき世界も音楽は ねこ尽くし」『MtS Publishing Factory(WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO)』3-10, FM COCOLO, pp. 36-36, 2015/7

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 59 回 「残念石」はいつまで残念か」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』392, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/7

橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑩あぶな絵 ～エロとは何かを考える～」『大阪春秋』42-159, 株式会社 新風書房, pp. 101-103, 2015/7

橋爪節也「おおさか KEY わーど 第 58 回 《大阪ホフマン物語》というのはいかが 浅草だけではないオペラの町」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』391, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/6

橋爪節也(新日本海新聞社・大阪日日新聞 2015年5月24日 高知新聞 2015年5月26日 徳島新聞 2015年5月27日掲載)「選択の意味 大阪住民投票を考える 上「大大阪」のプライド」『新日本海新聞社(大阪日日新聞)』2015/5

橋爪節也「おおさかKEYワード 第57回 しる人ぞ知る汁屋の汁 ―オダサクも愛したB級グルメ―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』390, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/5

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」 第6回すべて世は事もなし、か? As Time Goes By 私の部屋を飾るもの…むかし/いま」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, p. 1, Web 掲載, 2015/4

橋爪節也「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくままに～ 黛敏郎(BUNRAKU)トザイトーザイ あいつとめます大夫はチェロ奏者」『MtS Publishing Factory (WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO)』3-9, FM COCOLO, pp. 36-36, 2015/4

橋爪節也「おおさかKEYワード 第56回 ライオン橋物語 ―大大阪の誇りを今に伝える名橋―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』389, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/4

橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑩ 粋筆 ～心おもむくままに～」『大阪春秋』42-158, 株式会社 新風書房, pp. 101-103, 2015/4

橋爪節也「芸能・文化ジャーナル アヴァンギャルドな村野藤吾 ―大阪エッセンスに満ちた建築の去就は―」『上方芸能』195, 『上方芸能』編集部, p. 82, 2015/3

橋爪節也「おおさか KEY ワード 第55回 花から花へかつて咲き誇った“桃花”幻想」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』388, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/3

橋爪節也「歴史を語り継ぐ[明治・大正・昭和] モダン中之島、アート探訪。」『中之島の足あと』中之島連合新興町会, pp. 10-15, 2015/3

橋爪節也「大阪名所 じっくり MAP ―絵になる街・中之島―」『ぞうさん通信「よんどこ」2015 春～初夏』大阪市民共済生活協同組合, p. 1, 2015/3

橋爪節也「大坂美術学校を創設した画家 矢野橋村 没後 50 周年特別所蔵展 美術育んだ枚方を知る機会に」『広報 ひらかた』1219, 枚方市, p. 40, 2015/3

橋爪節也「発表要旨 旧そごう心斎橋本店・藤川勇造《飛躍》の像再考 ―商都の象徴としてのメルクリウスとかかわって―」『大正イマジユリ』(大正イマジユリ学会), 10, 大正イマジユリ学会, p. 228, 2015/3

橋爪節也「おおさか KEY ワード 第54回 色彩の都オオサカ ―画材と塗料の大手がこの街に―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』387, 大阪市教育委員会, p. 3, 2015/2

橋爪節也「エッセイ 冬 季節の言葉 これが冬、しかし、これが喜びをもたらす」『阪神ハイウェイ』197, (一財)阪神高速地域交流センター, p. 1, 2015/1

橋爪節也「おおさか KEY ワード 第53回 ネオンサインの大阪は・・・ ―赤い灯青い灯どうとんぼり―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』386, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/12

橋爪節也「「絵を飾る人のキモチ」 第5回 都心ノ病院ニテ“絵画”ヲ見タルコト」『SUMUFUMULAB COLUMN[いしかたのカタチ]』積水ハウス, p. 1, Web 掲載, 2014/12

橋爪節也「おおさかKEYワード 第52回 母校の歴史も知りたいし・・・ ―動きはじめた大阪の大学博物館―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』385, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/11

橋爪節也「たゆまず『全集』刊行に進むべし」『兼葭堂だより』14, 木村兼葭堂顕彰会, p. 7, 2014/11

橋爪節也「おおさかKEYワード 第51回 「時空の旅」学童疎開 70 年 ―成瀬少年の見たもの―」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』384, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/10

橋爪節也「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑩ おおさかの風俗画」『大阪春秋』42-156, 株式会社 新風書房, pp. 99-101,

2014/10

橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくままに～ 自転車こぎのボレロ」『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』
2-7, MtS Publishing Factory, p. 36, 2014/10

橋爪節也 「エッセイ 秋 季節の言葉 てるやまもみじ」『阪神ハイウェイ』196, (一般)阪神高速地域交流センター, p. 1, 2014/10

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第50回 道頓堀に幻の名水 秋田屋の井戸はいずこに・・・」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』
383, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/9

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第49回 もちこんだ化石は大発見 発見50周年マチカネワニ化石を見よ」『生涯学習情報誌「い
ちよう並木」』382, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/8

橋爪節也 「特集◎大阪のほんまもん[第2部]近代モダンの花開いた大阪の百貨店文化」『ひととき』14-8, 株式会社ウェッジ, pp.
54-61, 2014/7

橋爪節也 「“遊歩者”よろしく、モダニズム逍遥。—戎橋筋の文化史遊覧—」『戎橋とともに400年 なんば戎橋筋商店街100周年
記念誌』戎橋筋商店街振興組合, pp. 57-63, 2014/7

橋爪節也 「美しき装釘 ——藤澤恒夫と美術家たち」『大阪春秋』42-155, 株式会社 新風書房, pp. 30-33, 2014/7

橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑨ 落語を描く」『大阪春秋』42-155, 株式会社 新風書房, pp. 87-89, 2014/7

橋爪節也 「「絵を飾る人のキモチ」第4回 まことのとこのま／とこのまのこと —日本流アンチーム(intime)な展示空間—」
『SUMUFUMULAB COLUMN[いきかたのカタチ]』積水ハウス, p. 1, 2014/7

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第48回 通天閣がエッフェル塔 オオサカはパリ？」『生涯学習情報誌「いちよう並木」』381, 大
阪市教育委員会, p. 3, 2014/7

橋爪節也 「翼のある大阪をめぐる旅。」『THE ROYAL Summer 2014』株式会社ロイヤルホテル, p. 1, 2014/6

橋爪節也 「おおさか KEY ワード 第47回 “花”と“華”両方ありますが・・・「浪花百景」は花盛り」『生涯学習情報誌「いちよう並
木」』380, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/6

橋爪節也 「阪神高速開通50周年記念 HANSHIN HIGHWAY 時代の証言(1970年)日本万国博覧会」『阪神ハイウェイ』195, (一
般)阪神高速地域交流センター, p. 5, 2014/5

橋爪節也 「おおさか KEY ワード 第46回 ふるほん三昧なにわの日々 古書もまた、都市文化の精髓」『生涯学習情報誌「いちよ
う並木」』379, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/5

橋爪節也 「風雲エハガキ城の光芒 —奥まった書肆の棚にて—」『一枚の絵はがき』阪急古書のまち リーチアート, p. 1, 2014/4

橋爪節也 「なにわの画伯 成瀬國晴氏に聞く⑧ 時空の旅へ 学童集団疎開を描く」『大阪春秋』42-154, 株式会社 新風書房,
pp. 89-91, 2014/4

橋爪節也 「AS TIME GOES BY ～時の過ぎゆくままに～ 春野菜の天ぷらが食べたい……が。 ——わが生涯、最後に選ぶ曲」
『WHOLE EARTH MAGAZINE FM COCOLO』2-5, MtS Publishing Factory, p. 36, 2014/4

橋爪節也 「おおさかKEYワード 第45回 ユネスコの“インターナショナル・ジャズ・デイ”到来 世界のジャズの街、大阪」『生涯学
習情報誌「いちよう並木」』378, 大阪市教育委員会, p. 3, 2014/4

3-4. 口頭発表

橋爪節也 (招待講演)「大阪美術学校を語る —矢野橋村の熱き想い—」マナビスト講座, 御殿山生涯学習美術センター, 御殿
山生涯学習美術センター, 2016/3

橋爪節也 (基調講演)「100年前からさかのぼる、ライブ・エンターテインメントのまち「道頓堀」」第4回 道頓堀500 : 第4回 道頓
堀500, 道頓堀商店会, 難波御堂筋ホール, 2016/3

橋爪節也 (招待講演)「絵を描く殿さま—企画展「岡部家ゆかりの古文書と書画」にちなんで」岸和田市教育委員会郷土資料室・平成 27 年度 第 1 回歴史講座:岸和田市教育委員会郷土資料室・平成 27 年度 第 1 回歴史講座, 岸和田市教育委員会, 岸和田市立自集会館, 2016/3

山本智子, 橋爪節也 「unsichtbare Sichtbarkeit 不可視の可視 山本智子展 アーティスト・トーク」unsichtbare Sichtbarkeit 不可視の可視 山本智子展 アーティスト・トーク:unsichtbare Sichtbarkeit 不可視の可視 山本智子展 アーティスト・トーク, コウイチ・ファインアーツ, コウイチ・ファインアーツ, 2016/3

橋爪節也 (招待講演)「よみがえる恒富芸術—大阪画壇の悪魔派と呼ばれた巨匠」連続講座『北野恒富と中河内—知られざる大阪画壇の発信源—』, 大阪商業大学商業史博物館, 大阪商業大学図書館, 2015/11

橋爪節也 (基調講演)「北野恒富 この魅力的な美人画家 —大阪画壇を読み解くキーワード」シンポジウム「北野恒富と中河内—知られざる大阪画壇の発信源—」 パネルディスカッション:シンポジウム「北野恒富と中河内—知られざる大阪画壇の発信源—」 パネルディスカッション, 大阪商業大学商業史博物館, 大阪商業大学図書館, 2015/11

伊達伸明, チチ松村(ゴンチチ), 橋爪節也 「待兼山少年 最終章 ウクレレ」大阪大学総合学術博物館 第 8 回特別展「待兼山少年」スペシャル・トーク:大阪大学総合学術博物館 第 8 回特別展「待兼山少年」スペシャル・トーク, 大阪大学総合学術博物館, 大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ, 2015/11

高島幸次, 林家花丸, 橋爪節也 (招待講演)「近代の中之島」ナカノシマ大学特別講座 大阪都市魅力創造プロジェクト「落語×アート×歴史で旅する 中之島タイムトリップ:ナカノシマ大学特別講座 大阪都市魅力創造プロジェクト 落語×アート×歴史で旅する 中之島タイムトリップ, ナカノシマ大学事務局, 大阪市中央公会堂, 2015/11

橋爪節也 「“大大阪イメージ”とメディア・芸術—マンモス都市誕生との相克」第 47 回 大阪大学公開講座, 大阪大学, 大阪大学 中之島センター, 2015/10

橋爪節也 (招待講演)「昭和 12 年の映画「大大阪観光」～映像にみるモダン都市・大阪～」一般社団法人 大阪自由大学, 一般社団法人 大阪自由大学, 上田安子服飾専門学校, 2015/10

橋爪節也 「翼のある大阪 ～モダン建築と彫刻」Handai-Asahi 中之島塾, 大阪大学、朝日カルチャーセンター、大阪大学中之島センター, 2015/9

橋爪節也 (パネリスト)「西日本最大の都市、大阪は 本当にこのままで いいのか！？ 大阪の未来は！」メインフォーラム 日本を動かす「大阪の底力」:メインフォーラム 日本を動かす「大阪の底力」, 公益社団法人日本青年会議所, 高槻現代劇場, 2015/9

橋爪節也, 江弘毅 「部屋とインテリアと食器と道具」SUMUFUMULAB コラムニスト×研究員住ムフムセッション:SUMUFUMULAB コラムニスト×研究員住ムフムセッション, 積水ハウス, 積水ハウス住ムフムラボ[大阪], 2015/9

橋爪節也他 (パネリスト)「パネルディスカッション司会」パネルディスカッション サントリー文化財団研究助成プロジェクト 第 4 回国際シンポジウム「東アジアにおける大衆の図像の視覚文化論」:パネルディスカッション サントリー文化財団研究助成プロジェクト 第 4 回国際シンポジウム「東アジアにおける大衆の図像の視覚文化論」, 大正イマジュリ学会, 同志社大学, 2015/8

橋爪節也 (招待講演)「昭和 12 年のモダン都市へのタイムトラベラー映画「大大阪観光」の世界—」平成 27 年度大阪連続講座 おおさか時間旅行 —大大阪とよばれた時代—, 大阪市立中央図書館, 大阪市立中央図書館, 2015/7

中村真菜美, 橋爪節也 「『薩州蟲品』の世界—木村兼葭堂とその交流ネットワーク—」第 10 回博物科学会, 博物科学会, 金沢大学, 2015/6

橋爪節也 (招待講演)「大阪大学総合学術博物館について」はびきの市民大学大学博物館を識る:はびきの市民大学大学博物館を識る, 羽曳野市 市民人権部 市民協働ふれあい課, 時とみどりの交流館, 2015/6

橋爪節也 (招待講演)「モダニズムはここにあり—近代大阪と洋画家たち—」第 60 回新世紀展 記念講演:第 60 回新世紀展 記念講演, 新世紀美術協会, 天王寺都ホテル, 2015/6

橋爪節也 (基調講演)「今東光と大阪」今東光資料館 開館 1 周年講演会今東光と大阪の文学 ―河内八尾の発見―:今東光資料館 開館 1 周年講演会今東光と大阪の文学 ―河内八尾の発見―, 今東光資料館, 八尾市立青少年センター, 2015/5
伊藤謙, 小栗一輝, Hashizume, Setsuya 他, “Geological Materials in Japanese natural history: Focus on Morino stone collection in the Edo Period”, APRU Research Symposium on UNIVERSITY MUSEUMS 2014:APRU Research Symposium on UNIVERSITY MUSEUMS 2014, APRU, 台湾台北市 台湾大学, 2014/5

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2013 年度～2014 年度、挑戦的萌芽研究、代表者:橋爪節也

課題番号:25580032

研究題目:博物学標本資料に基づく大阪学の確立:木村兼葭堂と交遊ネットワークによる包括的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 2,400,000 円 間接経費 720,000 円

研究の目的:

18 世紀東西世界では、本草(中国起源の薬物学)と博物学(自然史)が並行的に発生し、後に両者は 19 世紀にかけて日本で遭遇する。それは、大航海時代による世界の拡大と東洋貿易・植民政策を背景とする欧州博物学と、日本の本草学の土壌に幕府や諸藩の殖産政策と外国貿易が大きな推力となった。『天下の太台所』として繁栄した大阪の民間活力は特筆すべき事例である。本研究の目的は、近世大阪の博物学者・木村兼葭堂(1736-1802)の膨大なコレクションや多彩な交遊録をツールとして、幕府薬種政策を支えた畿内(道修町・大和森野家等)町人文化を検証することで、文理融合した新たな大阪学の確立を目指す。地域社会構造の中で物産学がどの程度の広がりや深さをもって実現されていたのか、大阪独自の物とむすびついたリアリズムの影響を芸術・歴史・薬学の文理融合研究として展開する。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

第 53 回 なにわ芸術祭新人賞選出 新進落語家競演会審査委員会・委員, 2016 年 1 月～2015 年 1 月

堺市展 日本画部門審査委員会・審査委員, 2015 年 10 月～2015 年 10 月

和歌山県展 日本画部門審査委員会・委員長, 2015 年 9 月～2015 年 10 月

大阪市経済戦略局 文楽を特色とする地域魅力創出事業 有識者会議・委員, 2015 年 8 月～現在に至る

八尾市 今東光資料館・企画展示アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る

大阪市中央公会堂・文化財保護アドバイザー, 2014 年 4 月～現在に至る

大阪市市民表彰審査会・臨時委員, 2012 年 4 月～現在に至る

大正イメージリ学会・常任委員, 2012 年 3 月～現在に至る

4. 藤岡 穰 教授

1962 年生。東京芸術大学大学院修士課程修了。芸術学修士。大阪市立美術館学芸員、大阪大学大学院文学研究科助教授、

同准教授を経て、2009 年 4 月より現職。1991 年に第 3 回国華賞、2014 年に大阪大学総長顕彰受賞。専攻：東洋美術史。

4-1. 論文

藤岡穰「京都・某寺と兵庫・慶雲寺の半跏思惟像」中谷伸生『美術フォーラム 21』32, 美術フォーラム 21, pp. 89-96, 2015/11

藤岡穰「野中寺弥勒菩薩像について——蛍光X線分析調査を踏まえて——」『MUSEUM』(東京国立博物館研究誌), 649, pp. 35-63, 2014/4

4-2. 著書

藤岡穰(共著)『日本美術全集 第 11 巻 テーマ巻② 信仰と美術』小学館, 303p, pp. 207-209, pp. 239-240, pp. 243-244, pp. 252-256, pp. 260-261, 2015/10

藤岡穰他(共著)『古寺巡礼 京都南山城の仏たち』京都南山城古寺の会, 95p, pp. 63-64, pp. 68-70, pp. 87-91, 2014/4

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

藤岡穰 (パネリスト)「東アジア金銅仏の成分分析からわかること」国際シンポジウム「金銅仏の制作技法の謎にせまる」:国際シンポジウム「金銅仏の制作技法の謎にせまる」, 基盤研究 (A)「5~9 世紀東アジア金銅仏に関する日韓共同研究」、大阪大学総合学術博物館, 大阪大学Σホール, 2015/12

藤岡穰 (招待講演)「茨木・龍王山と山岳信仰の美術」テーマ展「龍王山をめぐる信仰と人々」特別講演会:テーマ展「龍王山をめぐる信仰と人々」特別講演会, 茨木市立文化財資料館, 茨木市立文化財資料館, 2015/11

藤岡穰 (パネリスト)「中国南朝造像とその伝播」The International Symposium on “Masterpieces of Early Buddhist Sculpture, 100BCE - 700CE”:The International Symposium on “Masterpieces of Early Buddhist Sculpture, 100BCE - 700CE”, 韓国国立中央博物館, 韓国国立中央博物館講堂, 2015/10

藤岡穰 (招待講演)「東アジアのなかの白鳳仏」奈良国立博物館公開講座:奈良国立博物館公開講座, 奈良国立博物館, 奈良国立博物館講堂, 2015/8

藤岡穰 (招待講演)「仏像さらさらー金銅仏の魅力にせまるー」逸翁美術館 2015 早春展 神さま 仏さま〜祈りの美術〜 講演会:逸翁美術館 2015 早春展 神さま 仏さま〜祈りの美術〜 講演会, 逸翁美術館, 逸翁美術館マグノリアホール, 2015/2

藤岡穰 (招待講演)「八尾市史[美術編]のための寺社文化財調査〜概要とこれまでの成果(仏教美術を中心に)〜」平成 26 年度八尾市史編纂記念講演会:平成 26 年度八尾市史編纂記念講演会, 八尾市史編纂委員会, 八尾市文化会館, 2014/11

藤岡穰 (招待講演)「半跏思惟像についてー三井寺本尊の源流ー」第 603 回れきはく講座:第 603 回れきはく講座, 大津市歴史博物館, 大津市歴史博物館, 2014/11

藤岡穰 (招待講演)「東アジアの金銅仏への多角的アプローチ」2014 年大阪大学文学研究科研究・教育フォーラム:2014 年大阪大学文学研究科研究・教育フォーラム, 大阪大学文学研究科, 大阪大学文学研究科大会議室, 2014/11

藤岡穰 (パネリスト)「曹仲達様の継承ー鎌倉時代の仏像にみる宋風の源流ー」2014 シルクロード国際研究フォーラム ひと・もの・知の往来ー国際比較日本文化研究の可能性を探るー:2014 シルクロード国際研究フォーラム ひと・もの・知の往来ー国際比較日本文化研究の可能性を探るー, タシケント国立東洋学大学, 2014/11

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

藤岡穰 大阪大学総長顕彰 研究部門, 2014/7

藤岡穰 第3回国華賞, 国華社, 1991/10

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2016 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:藤岡穰

課題番号:25244006

研究題目:5～9世紀東アジア金銅仏に関する日韓共同研究

研究経費:2014 年度 直接経費 9,500,000 円 間接経費 2,850,000 円

2015 年度 直接経費 8,800,000 円 間接経費 2,640,000 円

研究の目的:

5～9世紀東アジアの金銅仏および関連の金銅製品、青銅製品を対象として、蛍光X線分析、マイクロスコープ撮影、X線CTスキャン等の科学的調査を実施し、時代や地域による成分の異同、鑄造や彫金技法等の特色を抽出する。また、美術史学と文化財科学の分野の交流を深め、相互に有効な研究方法の開発に努めるとともに、考古学や文献史学との領域横断的研究により、金銅仏をはじめとする文物の東アジアにおける伝播の様相について検討する。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

神戸市立博物館リニューアル検討委員会・副委員長, 2015 年 4 月～2016 年 3 月

摂津市史・執筆委員, 2015 年 4 月～現在に至る

美術史学会・常任委員, 2013 年 6 月～現在に至る

神戸市立博物館外部評価委員会・委員, 2012 年 9 月～現在に至る

和歌山県文化財保護審議会・委員, 2012 年 4 月～現在に至る

八尾市史編集委員会・編集委員, 2011 年 4 月～現在に至る

八尾市文化財保護審議会・委員, 2009 年 9 月～現在に至る

大阪歴史博物館・評価委員, 2009 年 3 月～現在に至る

藤井寺市文化財審議会・審議員, 2008 年 9 月～現在に至る

奈良国立博物館・調査員, 2006 年 4 月～現在に至る

茨木市史編さん委員会・委員, 2000 年 4 月～現在に至る

5. 岡田 裕成 教授

1963 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士。大阪大学文学部助手、福井大学教育地域科学部准教授、大阪大学文学研究科准教授を経て現職。Archivo Español de Arte 誌 (CSIC, Madrid) 編集顧問。専攻：西洋美術史。

5-1. 論文

岡田裕成 「接触領域の芸術 ～美術・音楽・芸能」『民族藝術』31, 民族藝術学会, pp. 45-46, 2015/3

岡田裕成 「せめぎあうヴィジョン ～スペイン植民地世界」『西洋美術研究』18, 三元社, pp. 210-217, 2014/12

5-2. 著書

Luisa E. Alcalá, Jonathan Brown, Okada, Hiroshige et al., (共著), *Painting in Latin America 1550-1820*, Yale University Press, pp. 403-435, 2015/3

Luisa E. Alcalá, Jonathan Brown, Okada, Hiroshige et al., (共著), *Pintura en Hispanoamérica 1550-1820*, El Viso, Madrid, pp. 403-435, 2014/11

岡田裕成 『ラテンアメリカ 越境する美術』筑摩書房, 350p., 2014/9

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Okada, Hiroshige, “Restructuring Visions: Art and Indigenous Communities after the Toledo Reforms”, Rethinking Forced Resettlement in the Colonial Andes, National Museum of Ethnology, Osaka, Vanderbilt University, Vanderbilt University, 2015/11

Okada, Hiroshige, ““Lo indígena” en el arte colonial: expresión inconsciente o imagen manipulada?”, VIII Encuentro Internacional del Barroco: Mestizajes en Diálogo, Fundación Visión Cultural, Universidad Católica San Pablo, 2015/6

岡田裕成 「「アメリカの再発見」？ 草創期ラテンアメリカ美術史から問う植民地美術論の現在」日本における「美術」概念の再構築: 「美術」の脱植民地化-グローバル化の中で, 金沢美術工芸大学, 福岡アジア美術館, 2014/11

岡田裕成 (招待講演) 「聖母、征服者、先住民首長 アンデスにおける聖像受容の政治学」宗教の衝突、和解と融合: その歴史的・美術史的考察: 宗教の衝突、和解と融合: その歴史的・美術史的考察, 早稲田大学ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所, 早稲田大学, 2014/9

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田裕成 第12回木村重信民族藝術学会賞, 民族藝術学会, 2015/4

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2014年度～2017年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 岡田裕成

課題番号: 26370133

研究題目: 初期近代植民地美術における「文化境界上の現象」: 事象研究と方法論の探求

研究経費: 2014年度 直接経費 1,100,000円 間接経費 330,000円

2015年度 直接経費 1,200,000円 間接経費 360,000円

研究の目的:

大航海時代以降、今日に至る「グローバル化」の最初の段階に踏み出した世界において、ヨーロッパと非ヨーロッパの接触は、その文化の境界上に、特異な美術の領域を生みだした。とりわけメキシコやアンデス地域を中心とする、ラテンアメリカのスペイン植民地には、そうした異文化の接触と交渉の場が、多様なかたちで出現する。本研究は、この異文化接触領域における「境界上の

美術」に特有の現象を、個別的な事例の詳細な研究を通して明らかにする。同時に、比較可能な事例に取り組む研究者との共同研究を通して、「文化境界上の美術」といべきものの特性を明確にし、その研究に固有の方法論を探究する。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

Archivo Español de Arte 誌・編集顧問, 2015 年 1 月～現在に至る

民族藝術学会・理事, 2007 年 5 月～現在に至る

6. 桑木野 幸司 准教授

1975 年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了（西洋建築史）。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo（文学博士（美術史）・ピサ大学）。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011 年 4 月より現職。専攻：西洋美術・建築・庭園史。

6-1. 論文

桑木野幸司「記憶のアーティスト：心を造形する者たち」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アートメディア論研究室, pp. 6-29, 2015/7

桑木野幸司「記憶のかたちーコスモ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』(一五七九年)における天国と地獄の表象」東京文化財研究所『「かたち」再考ー開かれた語りのためにー』東京文化財研究所, pp. 301-315, 2014/12

6-2. 著書

桑木野幸司, 稲川直樹, 岡北一孝(共編)『ブラマンテ：盛期ルネサンス建築の構築者』NTT 出版, pp. 377-433, pp. i-viii, 2014/12

6-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司(翻訳)「印刷という革命：ルネサンス時代の本と日常生活」白水社, pp. 1-645, 2015/8

桑木野幸司「リゴッツィとブラマンテ：二〇一四年を彩った二人の芸術家」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アートメディア論研究室, pp. 204-207, 2015/7

6-4. 口頭発表

桑木野幸司「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園：トスカーナおよびローマ近郊のヴィッラの空間受容史と、その観光資源としての可能性」「観光資源としての庭園」に関する研究会, 奈良文化財研究所, 奈良文化財研究所, 2016/2

Kuwakino, Koji, “From *domus sapientiae* to *artes excerpenti*: Lambert Schenkel’s *De memoria* (1593) and the Transformation of the Art of Memory”, International Workshop “Forgetting Machines. Knowledge Management Evolution in Early Modern Europe”, Alberto Cevoloni, Palazzo Dossetti, Viale Allegrì 9, 42121 Reggio Emilia, 2015/7

Kuwakino, Koji, “Transforming the Art of Memory: Schenkel’s *De memoria* (1593)”, The 3rd International Conference: Renaissance Humanism and Japan’s Christian Century (1549-1650), Japanese Association for Renaissance Studies, Gakushuin Women’s

College (Tokyo), 2015/7

桑木野幸司 「モンテニョが見た庭: 知の空間としての初期近代イタリアの庭園」第50回ラブレール・モンテニョ研究フォーラム, 日本フランス語フランス文学会, お茶の水女子大学, 2015/5

桑木野幸司 「記憶の中のイェルサレム: 初期近代西欧の聖都表象と夢・幻視・想像力」国際研究集会「夢と表象—その国際的・学際的展開の可能性」, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター(桂), 2015/3

桑木野幸司 「ダニエーレ・バルバロとパドヴァ植物園: 多様性(varietas)の観点を中心に」第25回待兼山芸術学会, 待兼山芸術学会, 大阪大学工学部Σホール, 2015/3

桑木野幸司 「初期近代イタリアの百科全書庭園」イタリア研究会 10 月例会(412 回), イタリア研究会, 南青山会館, 2014/10

6-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

6-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2015 年度、若手研究(A) 一般、代表者: 桑木野幸司

課題番号: 25704002

研究題目: テキストの中の建築: 初期近代イタリアの芸術文化における文字、図像、空間の融合

研究経費: 2014 年度 直接経費 2,400,000 円 間接経費 720,000 円

2015 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

本研究は、テキストと建築の通底、というテーマを掲げるにより、いわゆる「姉妹芸術」、すなわち文学、視覚芸術、建築の各創作理論・実践を統一的な観点からとらえる視座の獲得を目指すとともに、初期近代の文芸・美術・哲学思想において、いかに文字と図像と空間が創造的な仕方で融合していたのかを、学際的なアプローチによって明らかにし、美術史学の新たな地平の開拓を目指す。

6-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

6-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012 年 4 月～現在に至る

7. 高志 緑 助教

1986 年生。2010 年関西学院大学文学部卒業、2012 年大阪大学院文学研究科博士前期課程修了。2016 年、同博士後期課程単位取得退学。修士(文学)。2012～2014 年度、日本学術振興会特別研究員、2015 年より相愛大学人文学部非常勤講師。2016 年 4 月より現職。専攻: 仏教美術史。

7-1. 論文

高志緑「浜松に伝わる二つの二十四善神(諸天)像」浜松市博物館『浜松市博物館報』27, 浜松市博物館, pp. 1-16, 2015/3

7-2. 著書

なし

7-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高志緑他(共著)『浜松にもたらされた黄檗文化』浜松市博物館, p.70(「初山宝林寺と妙見山大雄寺の二十四菩薩」), pp. 97-101 (作品解説), 2014/11

7-4. 口頭発表

高志緑「陸信忠筆「仏涅槃図」の再検討—図像源泉と懸用法を中心に—」美術史学会西支部例会:美術史学会西支部例会, 美術史学会, 大和文華館, 2016/3

高志緑「大阪市立美術館蔵「菩薩立像」について」中国美術史倶楽部例会:中国美術史倶楽部例会, 中国美術史倶楽部, 大阪大学, 2015/12

高志緑「陸信忠筆「仏涅槃図」に関する考察」物語/絵画研究会例会:物語/絵画研究会例会, 物語/絵画研究会, 龍谷ミュージアム, 2015/8

7-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

7-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

7-7. その他の外部資金の受け入れ状況

6-7-1. 2012 年度～2014 年度、5：その他補助金、助成金獲得者:高志緑

助成金名:科学研究費補助金(特別研究員奨励費)

研究題目:宋元時代における水陸系絵画の復元的研究

助成団体名:日本学術振興会

助成金額:2014 年度 直接経費 900,000 円

研究の目的:

宋元時代の仏教絵画の中には、中国における施食法会である「水陸会」の本尊画像、即ち水陸画であったものが部分的に伝存している場合がある。水陸会は道教を含むあらゆる尊像を、ある種百科事典的に招請し、懺悔と施食を行う儀礼であり、多数の幅で一具が構成されるため、断片的に残っている各作品が水陸画であるのか他の儀礼の本尊であるのかを見極める定義が必要であった。当時の寺院ではさまざまな儀礼が行われていたが、南宋時代の水陸画について、二次史料と絵画表現からその位置づけを明らかにし、絵画作品を通じて、儀文に残っていない時期の儀礼の細部を復元的に考察した。これにより、発願者の名族の動向や宗教的営みもより明らかになった。

6-7-2. 2015 年度～2015 年度、6：研究助成、助成金獲得者：高志緑

助成金名：若手研究者研究奨励金

研究題目：陸信忠筆「仏涅槃図」に関する考察—南宋仏画の空間構成に着目して—

助成団体名：公益財団法人仏教美術研究上野記念財団

助成金額：2015 年度 直接経費 100,000 円

研究の目的：

本研究は、単なる作品一点研究にとどまらず、ある作例を通して、南宋時代の仏画の在り方に新たな視点を提供することを目的としている。一般的な仏涅槃図とは一見異なる図様をもつ本図に関する研究はこれまで少なかったが、本研究では、その図像が大陸の北方や中原の伝統的図像、すなわち国名にして遼や北宋などに制作された作例と比較しうること、さらに、当時の南宋寺院の涅槃会の儀礼や堂内荘厳の新しいスタイルに合わせて再構成されたものであることを指摘する。これは、本図が従来、庶民が台頭してきた新時代の思想に基づいて描かれたとする説に対し、新たな議論を提供する研究といえる。

7-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2-24 共生文明論

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 1

教授：藤川 隆男、堤 研二、堤 一昭

准教授：井本 恭子

助教：中村 翼

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
9	0	0	0	0	0

※うち留学生 0名、社会人学生 1名

3. 修了生(2014年度～2015年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2014	3
2015	3
計	6

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

教育においては、①本コースの教育・研究内容の特色を理解させるための「歴史的地域社会論講義」「地域文化構造論講義」などの講義科目を、また②高度専門職業人に向けた企画・調査・分析・プレゼンテーションなどの能力を養成するための「歴史的地域社会論演習」「地域文化構造論演習」などの演習科目を配置することを目標とした。さらに、③本コース所属以外の教員とも協力して、専攻がカバーする分野についての全般的な知識を得る「人文学と社会」、歴史学研究各分野の最新状況を知る「歴史学のフロンティア」、教育に関わる高度専門職業人に向けた能力を養成するため「歴史教育論」といった共同授業科目を設けることを目標とした。

2. 研究

教員全員により、合計4本の単著論文あるいは共著であれば第一著者となっている論文を執筆すること、加えて教員がメンバーである研究プロジェクト(科学研究費補助金等の研究)による研究集会の開催に協力することを目標とした。

3. 社会連携

高等学校教員等の研修の場としての月例研究会「大阪大学歴史教育研究会」の開催に協力することによって、研究成果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

各種の講義・演習により、コースの教育・研究内容の特色の理解をはじめとする目的はほぼ果たすことができた。各種の講義・演習は目的を果たすことができた。高度職業人に向けた能力の育成を目指す演習のうち、歴史教育論では高等学校教員のリカレント教育にも協力するとともに、受講者が共同で行う口頭報告および論文作成を行うグループ研究に参加してプレゼンテーション能力向上をはかった。

2. 研究

教員の研究活動の欄にあるように、論文執筆の目標は達成され、科学研究費ほかによる助成研究が複数行われた。

教員がメンバーである研究プロジェクト（科学研究費補助金等の研究）による国内・国際研究集会の開催に協力するという目標については、複数の教員が科研チームのメンバーとして、国内・国外での研究集会などにおいて開催協力や発表をおこない、研究活動の国際化を図るとともに、国内集会（大阪大学歴史教育研究会月例会など）も頻繁に開催した。

3. 社会連携

本コースの教員2名が世話役の一員として大阪大学歴史教育研究会月例研究会の開催に協力し、高等学校教員等の研修の場を提供することができた。また本コースの教員1名が、教員免許更新演習、および市民教養講座への出講を行った。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

修士論文提出による修了者は5名（2014年度2名、2015年度3名）であった。修了大学院生以外の学生（長期履修制度を利用する学生を含む）も、授業以外に研究会での模擬授業準備／グループ研究および報告書作成などをも通じて、目標とする能力を伸ばし得たといえる。したがって、掲げた目標はおおよそ達成できたと考えられる。なお1学期には、修士論文作成指導のための演習と、加えて修士論文作成への中間報告の場を設けて、入学時からの修士論文作成および進路についての指導・助言体制を強化している。

2. 研究

前記の活動をふまえると、全体的な目標は達成されたと考えられる。

3. 社会連携

前記の活動をふまえると、社会連携の項に掲げられた目標は達成されたといえる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)	2(0)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)	1(0)	2(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	2(0)	2(0)	4(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	0	1	0	0	1
2015	0	1	5	0	0	6
計	0	1	6	0	0	7

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

渋谷武弘「兵庫県の地名探索 船坂一坂と地名」『歴史と神戸』(神戸史学会, ISSN0288-7789) 307, pp.42-46, 2014/12
大上幹広, 郇宇浩, 下岸廉, 檜垣翔, 山崎達哉「軍事商業政権としての織豊政権」2014 年度大阪大学歴史教育研究会院
生グループ報告(1)『大阪大学歴史教育研究会成果報告書シリーズ』7, pp. 1-20, 2015/3

【2015 年度】

渋谷武弘「明石松平侯道中斬捨て異聞 一三島宿「言成地藏尊由来」」『歴史と神戸』(神戸史学会, ISSN0288-7789)
312 (第 54 巻第 5 号), pp.2-10, 2015/10
今泉奏, 竹中詩穂, 方園, 森下瑤子「2015 年度大阪大学歴史教育研究会院生グループ報告 (1)「ローマの平和 (パクス＝
ローマナ)」とユーラシア大陸」『大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ 12 研究者・教員・市民のための新
しい歴史学入門 (平成 26-29 年度科学研究費補助金・基盤研究 A・課題番号 26244034)』, pp.1-19, (担当箇所: 第
4 章(2), pp.12-16), 2016/03

(2)口頭発表

【2014 年度】

大上幹広, 郇宇浩, 下岸廉, 檜垣翔, 山崎達哉「16～17 世紀の東アジア世界と軍事商業政権—織豊政権を中心に—」大阪
大学歴史教育研究会第 83 回例会, 大阪大学 豊中キャンパス 文学研究科本館 2 階 大会議室, 2014/12/20

【2015 年度】

今泉奏「江戸期の長崎における他者との共生に関する研究—長崎の町に溶け込んだ「黒坊」たち—」日本生活学会第 42 回
研究大会, 於 武庫川女子大学中央キャンパス, 2015/5/24

伊藤崇展「モンゴル帝国期のネストリウス派キリスト教—モンゴル国における考古学調査の成果から—」東方キリスト教
圏研究会第 7 回例会, 於 京都大学文学部, 2015/10/24

今泉奏「戦前期における日本人のアフリカ認識: 日本エチオピア交流の事例から」アフリカ文学研究会, 於 大阪大学箕
面キャンパス, 2015/11/28

竹中詩穂, 方園, 森下瑤子, 今泉奏「「ローマの平和 (パクス＝ローマナ)」とユーラシア大陸」大阪大学歴史教育研究会
第 92 回例会, 於 大阪大学文学研究科, 2015/12/19

伊藤崇展「近世モンゴル年代記におけるテュルク民族に関する記述の一考察—16 世紀東トルキスタン周辺を事例に—」東

方キリスト教圏研究会第9回例会, 於 京都大学文学部, 2015/12/20

今泉奏「日本のアジア主義者のアフリカ認識-日本エチオピア交流とアメリカ黒人の事例から」アフリカ史研究会, 於 関西大学経済学部, 2016/2/21

(3)その他(書評・翻訳など)

【2015 年度】

今泉奏「Walk Around the Continent ～アフリカを写真でさるく～」(写真展), 於 くるる石橋, 2015/04/06～11

渋谷武弘「パルミラの青い空ー古代オリエント研究と関西学院ー」『学院史編纂室便り』(関西学院大学学院史編纂室) No.42, pp.2-3, 2015/12

今泉奏「中学生のためのアフリカ入門 アフリカを1周してみよう」(出前授業・写真展), 於 豊中市立第七中学校, 2016/01/22 (アフリカ一周～2年社会科特別授業～, <http://www.toyonaka-osa.ed.jp/cms/jh07/index.cfm/1,1400,14,95,html>)

伊藤崇展「モンゴル帝国期の景教ーモンゴル国における考古学調査の成果からー」(ポスター発表) 東方キリスト教圏研究会・ワークショップ「東西文化の多様と共存モデルー「東方キリスト教圏」を多角的に考える学際的試みー」於 京都大学文学部, 2016/1/31

今泉奏「スワヒリ語専攻にできること、スワヒリ語専攻だからできることー『産経新聞』曾野綾子氏のコラムへの抗議文」解説『JUA』(大阪大学スワヒリ語・アフリカ文化研究会) 第8号, pp.3-11, 2016/3

今泉奏「アフリカさるく紀行」『長崎新聞』, vol.16 2015年4月2日, vol.17 2015年4月16日, vol.18 2015年5月14日, vol.19 2015年6月4日, vol.20 2015年9月3日, vol.21 2015年9月17日, vol.22 2015年10月1日, vol.23 2016年1月14日, vol.24 2016年1月21日, vol.25 2016年2月1日

今泉奏「Visit Africa アフリカ一周の旅」『フリステ Walker』(成学社), pp.28-29, 5月号 79号(発行4月1日) pp.32-33「第4話」; 6月号 80号(発行5月1日) pp.32-33「第5話」; 7月号 81号(発行6月1日) pp.32-33「第6話」; 8月号 82号(発行7月1日) pp.32-33「第7話」; 9月号 83号(発行8月1日) pp.32-33「第8話」; 10月号 84号(発行9月1日) pp.32-33「第9話」; 11月号 85号(発行10月1日) pp.28-29「第10話」; 12月号 86号(発行11月1日) pp.28-29「第11話」; 1月号 87号(発行12月1日) pp.32-33「第12話」; 2月号 88号(発行1月1日) pp.28-29「第13話」; 3月号 89号(発行2月1日) pp.32-33「第14話」

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2014年度 大学院: 0名 (計0名)

2015年度 大学院: 0名 (計0名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2014年度～2015年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014年度: 0名 2015年度: 0名

<内訳> 技術職 0名 ジャーナリスト 0名 アーティスト 0名 中・高等学校の教員 0名
その他 0名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

なし

7. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 藤川 隆男 教授

1959 年生。大阪大学大学院文学研究科博士後期課程中退。文学修士（大阪大学）、MA（ANU）。帝塚山大学教養学部講師、同助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋史、とくにオーストラリアの歴史。

1-1. 論文

Fujikawa, Takao, “A new Imperial History is intriguing, but can we celebrate it?”『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 13, pp. 200-206, 2016/2

藤川隆男 「オーストラリアにおける地方の歴史博物館の変遷」『待兼山論叢』(大阪大学大学院文学研究科), 49, pp. 1-25, 2015/12

藤川隆男 「オーストラリア多文化主義の現在」『学会会報』(学会), 915, 学会, pp. 63-67, 2015/11

藤川隆男 「オーストラリアにおける歴史教育の統一的・全国的カリキュラムの導入」『パブリック・ヒストリー』(大阪大学西洋史学会), 12, pp. 15-28, 2015/2

1-2. 著書

藤川隆男, 後藤敦史, 森本慶太他(共編著)『アニメで読む世界史2』山川出版社, pp. 113-132, pp. 232-234, 2015/1

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

藤川隆男 「論説」『南の虹のルーシー』から移民博物館へ:2 世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷『立命館言語文化研究』(立命館大学国際言語文化研究所), 27-2・3, 立命館大学国際言語文化研究所, pp. 259-260, 2016/2

藤川隆男 「書評」山本正・細川道久編著『コモンウェルスとは何か—ポスト帝国時代のソフトパワー』『経済史研究』(大阪経済大学日本経済史研究所), 19, 大阪経済大学日本経済史研究所, pp. 119-129, 2016/1

藤川隆男 「新聞記事」歴史認識の根っこ—白人の国からの転換『朝日新聞』(朝日新聞社), 朝日新聞社, p. 6, 2014/10

藤川隆男 「書評」細川道久著『カナダの自立と北大西洋世界 英米関係と民族問題』『西洋史学』(日本西洋史学会), 253, 日本西洋史学会, pp. 78-80, 2014/6

1-4. 口頭発表

藤川隆男 (招待講演)「怪物バニヤップの神話の誕生」平成 27 年関西日豪協会秋の定期例会:平成 27 年関西日豪協会秋の定期例会, 関西日豪協会, アゴラシオン, 2015/12

藤川隆男 (招待講演)「妖獣バニヤップの歴史—比較史的・比較民俗学的考察」第 20 回ワークショップ西洋史・大阪:第 20 回ワークショップ西洋史・大阪, 大阪大学西洋史学会, 大阪大学, 2015/5

藤川隆男 (招待講演)「オーストラリアの歴史って! おもしろいかも——先住民から多文化主義まで」京都橘大学歴史系講演会:京都橘大学歴史系講演会, 京都橘大学歴史学会, 京都橘大学, 2015/1

Fujikawa, Takao, (招待講演)“A new Imperial History is intriguing, but can we celebrate it?”, Migration, Colonization, and Histories of the Nineteenth-Century World symposium:Migration, Colonization, and Histories of the Nineteenth-Century World, the Japanese Association for the Study of British Imperial and Commonwealth History, Seminar Room 4, UNITY, Academic Community Hall, Kobe, 2014/12

藤川隆男（招待講演）「いま、なぜコモンウェルスか」イギリス帝国史研究会：『コモンウェルスとは何か——ポスト帝国時代のソフトパワー』書評会，イギリス帝国史研究会，神戸大学人文学研究科 A 棟一階学生ホール，2014/12

藤川隆男（招待講演）『南の虹のルーシー』から移民博物館へ—2 世紀にわたるオーストラリアへの移民の構造と変遷—「日本人の国際移動研究会」シンポジウム：イギリス帝国と移民 太平洋を中心に，日本人の国際移動研究会，キャンパスプラザ京都，2014/11

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2014 年度～2016 年度、基盤研究(C) 一般、代表者：藤川隆男

課題番号：26360010

研究題目：オーストラリアにおける歴史博物館の発達—20 世紀最大の草の根運動

研究経費：2014 年度 直接経費 1,400,000 円 間接経費 420,000 円

2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的：

オーストラリアでは、1950 年代末から 1970 年代半ばまでに 1000 館以上の歴史博物館が新設された。これらの博物館は、政府からの援助を受けずに、草の根の運動によって開設されたものである。現在では、その数が 2000 に達するほどであり、この歴史博物館の誕生と発展を検討するのが、この研究の課題である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史学協会・委員，2015 年 9 月～現在に至る

日本西洋史学会・理事，2015 年 5 月～現在に至る

大阪大学西洋史学会・編集委員，2003 年 6 月～現在に至る

パブリック・ヒストリー・編集委員，2003 年 6 月～現在に至る

西洋史学・編集委員，1996 年 4 月～現在に至る

2. 堤 研二 教授

1960 年福岡県大牟田市生れ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了。文学修士（九州大学、1986）・博士（文学）（九州大学、2009）。佐世保工業高等専門学校助手・講師、島根大学法文学部講師・助教授、大阪大学文学研究科助教授・准教授を経て、2009 年 11 月より現職。地域地理科学学会賞（1997）、昭和シェル石油環境研究助成財団環境研究課題賞（2005）、大阪大学 教育・研究功績賞（2006）、大阪大学 総長顕彰（研究部門）（2015）、大阪府スポーツ少年団功労者表彰（2016）。専攻：人文地理学、とくに社会経済地理学。

2-1. 論文

Tsutsumi, Kenji, “Trial for Sustaining Regional Life in a Peripheral Island Town: A Case of Okinoshima” Kobayashi, K., Wetlund, H., Matsushima, K. and Ohno(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 11, Marginal Areas Research Group, pp. 223-236, 2016/3

堤研二「計量的地域分析の体系とその教育上の課題」大阪大学文学研究科『待兼山論叢（日本学篇）』（大阪大学文学研究科），49，大阪大学文学研究科，pp. 1-16, 2015/12

堤研二「社会的不平等」上野和彦・椿真智子・中村康子(共編著)『地理学概論 第2版』朝倉書店, pp. 108-112, 2015/10

Tsutsumi, Kenji, “Marginality and Sustainability of Mountainous Village and Forestry” Matsushima, K., Westlund, H. and Kobayashi, K.(共編著) *Social Capital and Development Trends in Rural Areas*, (Marginal Areas Research Group), 9, Marginal Areas Research Group, pp. 39-48, 2014/7

2-2. 著書

堤研二『人口減少・高齢化と生活環境：山間地域とソーシャル・キャピタルの事例に学ぶ』九州大学出版会, 295p., 2015/9

堤研二, 豊中市スポーツ少年団『豊中市スポーツ少年団 50 年の歩み:1963 ～ 2013』豊中市スポーツ少年団本部, 125p., 2015/6

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Tsutsumi, Kenji, “Population Outflow and Regional Attributes of Peripheral Regions in Japan: Two Cases of Mountain Village and Ex-coalmining Region”, “Open Japan, Closed Japan: Towards Interdisciplinary Studies in Human Mobility (International Symposium on Japanese Studies in Global Contexts), Graduate School of Letters, Osaka University, Sigma Hall, Osaka University, Toyonaka, Japan, 2016/3

Tsutsumi, Kenji, “A Compact Town Model in Peripheral Regions in Japan: Some Cases and Trials”, The 4thd Global Conference on Economic Geography, Organising Committee of the 4th Global Conference of Economic Geographoy, Oxford University, Oxford, England, 2015/8

Tsutsumi, Kenji, “Trial for Sustaining Regional Life in a Peripheral Island Town – A Case of Okinoshima ”, The 12th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Hida Earth Wisdom Center, Takayama, Japan, 2015/5

Tsutsumi, Kenji, (招待講演) “Regional Social Capital in Rural Regions: Some Cases in Depopulated Areas in Japan and the Other Countries”, The 28th Taoyaka Program Seminar, TAOYAKA PROGRAM for creating a flexible, enduring, peaceful society: Organization of the Leading Graduate Education Program, Graduate School of Letters, Hiroshima University, 2014/12

Tsutsumi, Kenji, “Junior Sports Club and Regional Social Capital in Japan”, The 11th Workshop on Social Capital and Development Trends in the Japanese and Swedish Countryside, Marginal Areas Research Group, Mid-Sweden University, Östersund, Sweden, 2014/8

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

堤研二 市民スポーツ・レクリエーション指導者表彰, 豊中市民体育振興協議会, 2012/10

堤研二 大阪府スポーツ少年団優良団表彰, 大阪府スポーツ少年団本部, 2012/2

堤研二 国立大学法人大阪大学教育・研究功績賞, 国立大学法人大阪大学, 2006/2

堤研二 昭和シェル石油環境研究課題賞, 昭和シェル石油環境研究助成財団, 2005/9

堤研二 地域地理科学会賞, 地域地理科学会, 1997/7

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:堤研二

課題番号:26244051

研究題目:中山間地域における林業合理化・森林管理・住民生活の為のマネジメント=モデルの構築

研究経費:2014 年度 直接経費 5,200,000 円 間接経費 1,560,000 円

2015 年度 直接経費 6,000,000 円 間接経費 1,800,000 円

研究の目的:

本研究の目的は、中山間地域における基幹産業である林業の再生と森林環境の維持管理とを結びつけ、林業を支える兼業形態と地域生活機能の持続可能性を高めるための「フォーレストタウン=マネジメント=モデル (FTMM)」を構築する目的でのパイロット研究を行うことにある。具体的には、(1) 林業再生のための合理的方策に関するモデル、(2) 森林環境保全のための管理モデル、(3) 中山間地域における産業・兼業と生活のリーズナブルな持続性を可能にするモデルを設計し、(4) それらを統合的にアレンジして、中山間地域に適用可能な具体的な総体的社会経済モデルとしての“FTMM”のパイロット=モデルを試験的に構築しつつ、並行して、あるいはそれに沿って調査研究を実行し、成果の社会への発信と政策提言を行っていく。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

人文地理学会・代議員, 2014 年 10 月～現在に至る

静岡県・人口減少問題に関する有識者会議委員, 2014 年 6 月～2015 年 3 月

人文地理学会・学会賞候補者選考委員会委員(一般図書部門), 2013 年 12 月～2014 年

豊中市スポーツ少年団本部・本部委員、副本部長, 2012 年 4 月～現在に至る

豊能地区スポーツ少年団連絡協議会・役員・事務局担当, 2012 年 4 月～現在に至る

日本地理学会・代議員, 2010 年 4 月～現在に至る

3. 堤 一昭 教授

1960 年生。京都大学文学部卒業、京都大学大学院文学研究科博士後期課程(東洋史学専攻)学修退学。文学修士(京都大学、1988)。大阪外国語大学外国語学部国際文化学科比較文化講座専任講師、同助教授、同准教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2013 年 6 月より現職。専攻：東洋史学。

3-1. 論文

堤一昭 『『フフ・トグ(青旗)』ほか近代史資料の調査/整理の現状と公開にむけて』田中仁、堤一昭(共編著)『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築・公開に向けて OUFU ブックレット第9巻』大阪大学中国文化フォーラム, pp. 5-14, 2016/3

堤一昭 「大阪大学附属図書館所蔵石濱文庫の隋唐時代墓誌拓本」『待兼山論叢 文化動態論篇』(大阪大学文学会), 48, pp. 1-17, 2014/12

3-2. 著書

田中仁、堤一昭(共編著)『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築・公開に向けて』大阪大学中国文化フォーラム, pp.i-ii, pp. 5-14, 2016/3

南塚信吾、秋田茂、堤一昭他(共著)『新しく学ぶ西洋の歴史ーアジアから考える』ミネルヴァ書房, pp. 5-6, (ISBN978-4-623-06681-0, 「序論 世界の一体化の始まり」pp.5-6, 「Column マルコ・ポーロと日本」p.23), 2016/2

大阪大学歴史教育研究会、公益財団法人史学会、堤一昭他(共著)『史学会125周年リレーシンポジウム 2014 教育が開く新しい歴史学』山川出版社, pp. 30-31, (ISBN978-4-634-60021-8, 桃木至朗・堤一昭・秋田茂・飯塚一幸「阪大史学系の歴史教育改革」pp.10-35), 2015/11

堤一昭、田中仁(共編著)『戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性ー東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録ー(OUFC BOOKLET vol.7)』大阪大学中国文化フォーラム, pp. 5-13, 2015/3

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

堤一昭 「政治・軍事・外交史についての概観－世界史(おもに東洋)から－」大阪大学歴史教育研究会 第93回例会, 大阪大学歴史教育研究会, 大阪大学豊中キャンパス・文学研究科, 2016/1

堤一昭 『『フフ・トグ(青旗)』ほか近代史資料の調査/整理の現状と公開にむけて』ワークショップ「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』データベースの構築・公開に向けて, 21世紀課題群と中国(大阪大学未来研究イニシアティブ)他, 大阪大学豊中キャンパス, 2015/8

堤一昭 「石濱純太郎と石濱文庫:整理・調査・研究の現状」研究セミナー「戦前期モンゴル語新聞『フフ・トグ(青旗)』のデジタル化と公開の可能性－東洋文庫政治史資料研究班・研究セミナーの記録－」, NIHU 現代中国研究・東洋文庫拠点, 大阪大学豊中キャンパス, 2014/12

堤一昭 「近代国民国家シンボルとしての君主／指導者図像の出現－中日の比較から－」第八屆現代中国与東亜新格局国際學術討論會 暨第三屆近現代河南与中国學術研討會, 鄭州大学歴史学院, 鄭州大学近現代河南与中国研究中心, 日本大阪大学中国文化論壇, 台湾東華大学歴史学系, 南開大学歴史学院, 中国・鄭州大学, 2014/8

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2014年度～2016年度、基盤研究(C) 一般、代表者:堤一昭

課題番号:26370822

研究題目:東洋学術資産としての石濱文庫の基礎的研究

研究経費:2014年度 直接経費 2,100,000 円 間接経費 630,000 円

2015年度 直接経費 650,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

内藤湖南ら第一世代を継いだ第二世代の東洋学者・石濱純太郎(1888－1968 年)の収集した図書および研究資料(大阪大学総合図書館所蔵)の中から、現在の研究水準から見て資料価値の高い資料群を重点的に調査し、それらの概要の把握と各資料群が当該分野の将来の研究にどのように資するか展望を得ることを第一の目的とする。また本研究を基盤としてどのような総合的調査・研究が企画しうるか、「学術資産」としてどのようなデジタルアーカイブの形成と公開がなし得るかについての展望を得ることを第二の目的とする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本モンゴル学会・理事、紀要編集委員, 2008 年 5 月～現在に至る

4. 井本 恭子 准教授

1963 年生。大阪外国語大学大学院外国語学研究科修士課程(イタリア語学専攻)修了。文学修士(大阪外国語大学, 1990)。大阪外国語大学外国語学部地域文化学科ヨーロッパ III 講座助手、講師、同助教授、同准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻:人類学。

4-1. 論文

井本恭子「カトリックの「民間信心」に関する一考察―「小さな」聖人祭のなかに示されるもの―」『待兼山論叢』48, 大阪大学文学会, pp. 19-32, 2014/12

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

5. 中村 翼 助教

1984 年生。2013 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程（日本史学専攻）単位取得退学。博士（文学）（大阪大学 2014 年）。学術振興会特別研究員（PD）を経て、2014 年 10 月より現職。専攻：日本史学（中世史・東アジア交流史）

5-1. 論文

Nakamura, Tsubasa, “The Maritime East Asian Networks in the Song-Yuan Period” *The Movements of the People, Goods, Culture under the Political Situation in Eurasia: Working Paper*. 21, 世界システムと海域アジア史研究会, pp. 49-55, 2016/3

中村翼「平安中期における貿易管理体制の変容」『待兼山論叢(文化動態論編)』49, 大阪大学文学会, pp. 1-25, 2016/2

中村翼「鎌倉禅の形成過程とその背景」『史林』97-4, 史学研究会(京都大学), pp. 38-67, 2014/7

中村翼「11～12 世紀初頭の日麗交流と東方ユーラシア情勢」『世界史のしおり』2014 年度1学期号, 帝国書院, pp. 2-4, 2014/4

5-2. 著書

大阪大学歴史教育研究会, 桃木至朗, 中村翼『教育が開く新しい歴史学(史学会 125 周年リレーシンポジウム 2014)』山川出版社, 20p., pp. 36-55, 2015/11

藤川隆男, 後藤敦史, 中村翼他(共著)『アニメで読む世界史2』山川出版社, 22p., pp. 53-74, 2015/1

村井章介, 横内裕人, 中村翼他(共著)『東アジアのなかの建長寺』勉誠出版, 12p., pp. 236-247, 2014/10

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

5-4. 口頭発表

Nakamura, Tsubasa, “Japan’s Admiration for “China” and East Asian Networks in the Song-Yuan Period”, Global History Workshop: “Globalization from East Asian Perspectives”, the Institute for Academic Initiatives (IAI), Osaka University and University of Oxford Center for Global History, 大阪大学(中之島センター), 2016/3

中村翼「宋元代の中国に渡った日本の禅僧」グローバル日本研究国際シンポジウム 開く日本・閉じる日本 ―「人間移動学」事始め―, 大阪大学大学院文学研究科, 大阪大学(豊中キャンパス), 2016/3

中村翼「中学校歴史教育と日本史研究の課題」大阪歴史科学協議会1月例会, 大阪歴史科学協議会, クレオ西部館, 2016/1

Nakamura, Tsubasa, Fujita Kayoko, “How to Locate Japan in Global History: The Eurasian Protected Zone or Sino-centred East Asia?”, Writing Global History from Southeast Asian Perspectives: In Honor of Professor Victor Lieberman’s 70th Birthday, 大阪大学文学研究科グローバルヒストリー研究クラスター, 大阪大学(豊中キャンパス), 2015/12

中村翼「平安中期における貿易管理体制の変容」第165回博多研究会, 博多研究会, 福岡市営地下鉄3号線工事現場調査事務所, 2015/11

Nakamura, Tsubasa, “The settlements of Maritime Merchants in Japan and the Song/Yuan-Japan trade”, The third Congress of the Asian Association of World Historians: Migration in Global History: Peoples, Plants, Plagues, and Ports, the Asian Association of World Historians, Nanyang Technological University, 2015/5

中村翼, 中村武司, 後藤敦史他「大阪歴史教育研究会の活動と若手のネットワーク」史学会創立125周年記念事業リレーシンポジウム 2014: 高大連携による大学歴史系専門教育・教員養成教育の刷新, 史学会(東京大学), 大阪大学中之島センター, 2014/9

Nakamura, Tsubasa, “The Maritime East Asian Network in the SongYuan Period.”, Conference on Middle Period China, 800-1400, Fairbank Center for Chinese Studies, Harvard University, 2014/6

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2015年度～2019年度、若手研究(B)、代表者: 中村翼

課題番号: 15K16828

研究題目: 元代～明代初期における日中交流の歴史的変遷の研究

研究経費: 2015年度 直接経費 700,000円 間接経費 210,000円

研究の目的:

本研究は、元代～明代初期(13世紀後期～15世紀初頭)における日中交流の把握のための実証的基盤の構築を課題とする。《民間交流が自由で盛況な宋元代》と《それが抑圧された明代》という対比的理解を開き、①元～明初に日中間を往来した人々をとりまく政治・経済的環境、②日中間を結ぶ人的ネットワークの変遷を、それぞれ実証的に跡づけた上で、③日明外交成立の歴史的位置を明確化する。以上を通じ、宋/元～明初における日中交流の連続面・断絶面を総合的に捕捉することを目指す。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

高大連携歴史教育研究会・事務・会計責任者, 2015年7月～現在に至る

大阪歴史学界中世史部会・代表・会計責任者, 2014年6月～現在に至る

大阪歴史科学協議会・研究委員, 2010年6月～現在に至る

2-25 アート・メディア論

I. 現在の組織

1. 教員(2016年4月現在)

教授 2 准教授 2 講師 0 助教 1

教授：永田 靖、園府寺 司

准教授：三宅 祥雄、桑木野幸司

助教：古後奈緒子

2. 在学生(2016年5月現在)

2016年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
20	0	0	0	0	0

※うち留学生 12名、社会人学生 6名

3. 修了生(2014年度～2015年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2014	7
2015	8
計	15

II. 掲げた目標(2014年度～2015年度)

1. 教育

1. アート・メディア論に関する基礎的教育のシステムを構築するとともに、学生にそのような基礎的素養を身につけてもらうこと。
2. さまざまな〈現場〉で活動する専門職の人々と接触する機会をつくり、フィールド的な知のありかたを教育すること。
3. 学生各自が自身のフィールドを見つけ、選択し、そこでの活動を進めていけるような環境を作り出すこと。
4. サイバーメディアを中心としたメディアリテラシーを高めること。

2. 研究

従来の芸術、文化研究にはなかった新領域での研究を行う。萌芽的な研究の成果を徐々に出していければよいと考える。新領域の研究者との接点を増やしつつ、また、〈現場〉との接点も重視した研究を推進する。

3. 社会連携

劇場や博物館、美術館での芸術活動に積極的に参加し、芸術の実践を行い、また作家の創作活動を背後から支えること

で、芸術の社会的意義を明確にし、社会に伝えていく。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

授業においては全体演習において、各院生の研究テーマへの個別的、集中的な指導を行った。また学外での実践的活動も推奨したので、院生の多くは学外のさまざまなフィールドで活動、研修を重ねている。具体的には美術館等における展覧会企画やその補助、芸術雑誌への寄稿、上演活動への参加等である。メディア実習は前後期に実施し、授業を通じて各自のメディア運用能力は着実に高まっている。

2. 研究

著書、論文、国内外での研究発表、上演活動、阪大総合学術博物館などにおける展覧会企画など、「書物」「実践」とともに研究はますます順調に遂行されている。なお紀要『アーツ&メディア』については、2014 年度号の刊行はなし、2015 年 7 月に第 5 号（2015 年度版）を刊行。

3. 社会連携

美術館における講演、演劇企画・展覧会企画への参加等、さまざまな社会連携活動を進めてきている。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

上記 1～3 の諸項目についてはいずれもほぼ計画通りに遂行できている。各院生の個人研究はもちろん、研究室の HP（2015 年 10 月に旧版を全面的に刷新）から、ブログの作成なども自発的に行うなど、院生は学内外で積極的に活動を進めており、基本方針の指導は浸透しているといつてよい。

2. 研究

成果の質・量にある程度の個人差はあるものの、教員、院生ともに各自の研究は着実に遂行している。紀要『アーツ&メディア』第 5 号（2014 年度版）については、教員・学生 の原稿は集まっていたが、予算と編集の都合で 2015 年度に刊行持ち越しとなった。2015 年 7 月、第 5 号を刊行。本号を 2015 年度版とし、2014 年度版は欠号とする。したがって第 6 号（2016 年度版）以降は刊行月を 7 月に変更する。

3. 社会連携

これも上記同様研究テーマによってある程度の個人差はあるが、社会との連携は教員、院生ともに十分に意識し、遂行できているといつてよい。

Ⅴ. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	1(1)	0(0)	0(0)	0(0)	1(1)

2015	0(0)	1(1)	8(8)	0(0)	0(0)	9(9)
計	0(0)	2(2)	8(8)	0(0)	0(0)	10(10)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	0	0	0	0	0
2015	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

井上真央「現代日本におけるオルタナティブ・スペースをめぐる諸問題」、『待兼山論叢』第 48 号, 「文化動態論篇」, pp. 73-94, 大阪大学文学研究科, 2014/12

【2015 年度】

久野はるな「ボルタンスキー、個人的記憶と集団的記憶の狭間で」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 78-99, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

高木繭絹子「仏領コーチシナの身体尺研究—サイゴン・ノートル＝ダム大聖堂の平面構成について」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 100-118, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

高木繭絹子「仏領コーチシナにおける聖堂建築の尺度—サイゴン・ノートル＝ダム大聖堂の平面寸法について」『待兼山論叢』第 49 号, 「文化動態論篇」, pp. 53-77, 大阪大学文学研究科, 2015/12

片岡浪秀「柴田英利と我が国のテレビ放送」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 128-139, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

岡本紀子「ふたつの《麦藁帽子》—立原道造と堀辰雄」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 140-149, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

澤田花野「シェイクスピアの国での演劇体験」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 150-156, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

北岡志織「都市を映す演劇—ドイツ・ハンブルグ多文化社会とどう向き合うか」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 157-168, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

木村美和「〈恋〉と〈言葉〉の小林一三」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 182-190, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

松本祐香「ユートピアを創った言葉—小林一三のメディア戦略」 *Arts and Media*, no. 5, pp. 191-201, 大阪大学文学研究科アート・メディア論研究室, 2015/7

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

【2014 年度】

松井浩子「orusuban」(映像作品上映), 「ショートアニメーション姫路 Doki ! Doki ! アニメ大行進」姫路文学館, 2014/8

松井浩子「Include」(映像作品上映), 「Animation Factory Festival 2014」玉造さんくすホール (大阪)・デザインフェスタギャラリー原宿 (東京), 2014/9・2014/10

松井浩子「Include」(映像作品上映),「PEAS 上映会」Art House (大阪), 2014/12

松井浩子「ある家族の肖像」(映像作品上映),「トーク」Lazy Bones (香川), 2015/2

岡本紀子「Winterreise -- fuyu no tabi --」,「CSCD 映像展——記録と表現のはざま」大阪大学コミュニケーション・デザインセンター主催,アートエリア B1, 2015/3

大谷晋平「京都芸術センター 小学校跡地が現代芸術聖地に」,『大阪日日新聞』「関西美術探訪」, 2015/3/17

【2015 年度】

松井浩子「ある家族の肖像」(映像作品上映),「VIDEO PARTY 2015」PERSONAL EYES + AF 主催, @Lumen gallery, 2015/8

松井浩子「Include」「Orusuban」(映像作品上映),「Animation Factory Festival 2015」Animation Factory Festival 2015 実行委員会主催, @ART HOUSEA,「Animation Factory Festival 2015 in 姫路」姫路シネマクラブ主催, @南風会サロン, 2015/8

岡本紀子「坂をのぼれば おもいだす—記憶の扉がひらくとき」, 大阪大学総合学術博物館特別展『待兼山少年』寄稿, 2015/8/18

松井浩子「ある家族の肖像」(映像作品上映),「高松レインボー映画祭」香川レインボー映画祭実行委員会 (PROUD) 主催, @情報通信交流館 e-とびあ・かがわ,「名古屋フィルムミーティング 2015」日本映像学会ショートフィルム研究会主催, @愛知芸術文化センター12 階スペース EF, 2015/10

伊藤凜「Architecture and visual arts in the *Orlando furioso* by Ludovico Ariosto (ルドヴィーコ・アリオスト『狂乱のオルランド』における建築と視覚芸術)」講演会告知ポスターデザイン作成, 2015/11

松井浩子「ある家族の肖像」(映像作品上映),「ハンダイ映像祭」ハンダイ映像祭実行委員会主催, @大阪大学 21 世紀懐徳堂スタジオ, 2015/11

伊藤凜「大阪大学中之島センター・エクステンション講座『芸術計画論演習』」科目等履修生募集チラシデザイン作成, 2015/12

伊藤凜「『間』のアニメーション Animation Café——上映と対話——」和田淳作品特集上映会告知チラシ・ポスターデザイン作成, 2016/1

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2014 年度 学部: 0 名 大学院: 2 名 (計 2 名)

2015 年度 学部: 0 名 大学院: 1 名 (計 1 名)

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2014 年度～2015 年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 8 名

2014 年度: 4 名 2015 年度: 4 名

<内訳> 技術職 1 名 ジャーナリスト 3 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 1 名
その他 3 名 (イマジカ・ウエスト、梅田芸術劇場、大学職員)

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 1 名

2014 年度: 1 名 2015 年度: 0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

紀要『アーツ&メディア』第5号(2015年度版)を2015年7月31日に発行。

7. 教員の研究活動(2014年度～2015年度の過去2年間)

1. 永田 靖 教授

1957年生。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授を経て、1996年から現職。専攻：演劇学。

1-1. 論文

永田靖 「自文化接触演劇と再文脈化の手法ーメイエルホリド演出『スぺードの女王』を題材にー」『待兼山論叢』第49号,芸術篇, 大阪大学文学研究科, pp. 1-31, 2016/3

永田靖 「『森本薫関係資料』(演劇学研究室蔵)について」『Arts and Media』Vol.5, 大阪大学文化動態論専攻アートメディア論コース, pp. 213-217, 2015/7

永田靖 「「伝統」の現代化ー林文中舞踊団『小南管』シリーズをめぐって」『演劇学論叢』Vol.14, 大阪大学文学研究科演劇学研究室, pp. 59-78, 2015/3

永田靖 「サイトスペシフィック・パフォーマンスから伝統芸術の現代化へ」『劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業ー〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭Ⅰ,Ⅱ 2013-2014 年度報告書』大阪大学文学研究科, pp. 91-97, 2015/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

永田靖 「林文中舞踊団『小南管Ⅱ』について」『林文中舞踊団 WD dance 小南管Ⅱ プログラム』(劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業ー〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭), 大阪大学文学研究科, pp. 2-3, 2014/11

永田靖 「改修と地層ー大阪大学適塾記念センターのめざすもの」『適塾』大阪大学適塾記念センター, pp. 1-5, 2014/11

1-4. 口頭発表

永田靖 「文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭「伝統芸術の現代化」プロジェクトについて」大阪大学総合学術博物館教員研究会, 大阪大学総合学術博物館, 2015/12

Nagata, Yasushi, "Opening Remark", The 3rd International Theatre Studies Conference: Towards a New Perspective of Asian Theatre Studies, Shanghai Academy of Drama, 2015/11

Nagata, Yasushi, "Place and Performance", Beyond Contamination: General Discussion, Performance Studies international, Tohoku Cluster, Aomori Prefectural Museum, 2015/8

Nagata, Yasushi, "Geography of Inter-Asian Theatre: Towards a New Perspective of Asian Theatres", IFTR Hyderabad Conference: Theatre and Democracy, International Federation for Theatre Research, Hyderabad University, 2015/7

永田靖 「演劇と公共性」日本演劇学会全国大会オープニング・セッション: 演劇と公共性, 日本演劇学会, 桜美林大学, 2015/6

永田靖 「伝統芸術の現代化」《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭: フェスティバル運営の企画と実際,

大阪大学文学研究科, 大阪大学中之島センター, 2015/6

永田靖他 (パネリスト)「東アジアの大学における演劇教育」シンポジウム: 東アジアの大学における演劇教育—劇場を活用した舞台教育の方法論的探求, 京都造形大学, 京都造形大学, 2015/2

橋爪節也, 富田大介, 永田靖他「石橋宿舍おみおくりプロジェクト」トークイベント: 石橋宿舍おみおくりプロジェクト, 大阪大学総合学術博物館, 中之島公会堂, 2014/12

永田靖, 林文中, 井口淳子「伝統芸術の現代化—林文中舞踊団『小南管Ⅱ』公演」セミナー: 伝統芸術の現代化—林文中舞踊団『小南管Ⅱ』公演, 劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭, 尼崎県立ピッコロ劇場, 2014/11

永田靖, 林公子, 松田正弘他「能勢浄瑠璃と浄瑠璃シアター」セミナー, 劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業—〈声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声〉芸術祭, 地黄公会堂, 2014/9

永田靖他「世界演劇史の中の小林一三・タカラヅカ」講演会, 宝塚歌劇 100 周年記念講演会, 逸翁美術館, 2014/8

Nagata, Yasushi, “Acceptance of Constantin Stanislavsky in Japan”, Theatre and Stratification, International Federation for Theatre Research World Congress 2014, Warwick University, 2014/8

Nagata, Yasushi, “Some Aspects of Modernization of Japanese and Asian Theatres”, Theatre and Stratification, International Federation for Theatre Research World Congress 2014, Warwick University, 2014/8

永田靖「芸術祭と人材育成」西洋比較演劇研究会5月例会, 西洋比較演劇研究会, 成城大学, 2014/5

Nagata, Yasushi, “Inter-Asian Theatre Research from a Japanese Viewpoint; on Two Anti-Japanese Songs in Contemporary Japanese productions”, 国際學術研討會: 臺灣戲劇研究的回顧與前瞻, 国立台北藝術大學, 国立台北藝術大學, 2014/5

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2014 年度～2017 年度、基盤研究(B) 一般、代表者: 永田靖

課題番号: 26284019

研究題目: アジア近現代演劇の動態論的国際共同研究

研究経費: 2014 年度 直接経費 3,200,000 円 間接経費 960,000 円

2015 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

グローバリゼーションの進行する中で演劇学・演劇史のあり方を再考することは依然として課題である。近年は徐々にアジア演劇に対する関心も高まって来ているとはいっても、相変わらず演劇学・演劇史のあり方は西欧演劇中心の概念や演劇史観で研究されている。ポスト植民地主義的なアジア諸国の自立を背景にしたアジア諸国の演劇研究の機運の高まりを演劇学全般に反映させる試みが求められている。それは個々の個人的研究にのみ依存するのではなく、アジアの研究者のネットワーク構築を進めながら行う比較共同研究がより効果的である。ここでは世界演劇史的視野に立った比較共同研究によってアジアにおける近現代演劇の特徴とアジア性を見出だすのが目的である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2013 年度～2015 年度、5: その他補助金、助成金獲得者: 永田靖

助成金名: 大学を活用する文化芸術推進事業

研究題目: 劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業《声なき声、いたるところにかかわりの声、そして私の声》芸術祭

助成団体名: 文化庁

助成金額: 2014 年度 直接経費 15,000,000 円

2015 年度 直接経費 21,792,000 円

研究の目的:

本事業は、芸術祭を企画運営しつつアート・マネージメントについての人材を育てる人材育成プログラムで、演劇、音楽、美術、パフォーマンスなどの現代芸術を広くカバーして、多様な芸術ジャンルに対応できる人材育成を行い、単に芸術祭の実務面でのマネージメント能力のある人を育成するのではなく、芸術祭のコンセプトや内容にまで立ち入って企画運営に関与できる人材を育成するのが目的です。大阪大学文学研究科芸術ブロックが中心になり、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター、大阪大学国際公共政策研究科、大阪大学総合学術博物館と共催いたします。また本事業は平成 27 年度文化庁「大学を活用した文化芸術推進事業」による助成を受けており、過去 2 年で、芸術祭開催に向けたセミナーやワークショップや、芸術祭そのものの企画・運営を中心に行いました。3 年目となる平成 27 年度は、受講生発案企画を含む、これまでの経験を活かした実践的な企画が始まります。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

吹公益財団法人吹田市文化振興事業団・理事, 2015 年～現在に至る

日本演劇学会・会長, 2014 年 6 月～現在に至る

豊中市文化審議会・委員, 2014 年 6 月～現在に至る

大阪国際児童青少年アートフェスティバル・実行委員長, 2012 年 4 月～2014 年 4 月

兵庫県立ピッコロ劇場企画運営委員会・運営委員, 2011 年 3 月～現在に至る

University Malaya Panel of External Assessors・Member of Panel, 2011 年 3 月～2014 年 4 月

International Federation for Theatre Research Asian Theatre Working Group・Convenor, 2009 年 7 月～現在に至る

国立台北藝術大学戲劇系戲劇学刊 Taipei Theatre Journal・Editorial Board, 2009 年 6 月～2015 年 5 月

International Federation for Theatre Research ・Executive Committee, 2005 年 7 月～2014 年 7 月

芸術学関連学会連合・委員, 2005 年 6 月～現在に至る

日本演劇学会・理事, 2002 年 6 月～現在に至る

日本演劇学会・事務局長, 2002 年 6 月～2014 年 6 月

日本映像学会関西支部・幹事, 2002 年 4 月～現在に至る

日本演劇学会近現代分科会・主宰, 2000 年 11 月～現在に至る

2. 園府寺 司 教授

1957 年生。大阪大学文学部美学科（西洋美術史）卒、アムステルダム大学美術史研究所大学院修了。Doctor der Letteren（文学博士・アムステルダム大学）。広島大学総合科学部講師・助教授、大阪大学文学部助教授を経て現職。専攻：西洋美術史／アート・メディア論。

2-1. 論文

Kodera, Tsukasa, ““Art - Nations - World” The 1960 International Congress of the AICA in Poland and Discussions on the International Character of Modern Art” Jerzy Malinowski *Pamiętnik Sztuk Pięknych Fine Arts Diary*, Numer 9, POLSKI INSTYTUT STUDIÓW NAD SZTUKĄ ŚWIATA/POLISH INSTITUTE OF WORLD ART STUDIES, pp. 203-216, 2015/10

2-2. 著書

なし

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

なし

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

園府寺司 大阪大学総長顕彰 2015 研究部門, 大阪大学, 2015/7

園府寺司 大阪大学共通教育賞(2009 年度前期), 大阪大学共通教育機構, 2009/11

園府寺司 Praemium Erasmunianum(エラスムス研究賞), Stichting Erasmusprijs エラスムス財団, 1989/2

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2014 年度～2018 年度、基盤研究(A) 一般、代表者:園府寺司

課題番号:26244009

研究題目:西洋近世・近代美術における市場、流通、画商の地政経済史的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 6,000,000 円 間接経費 1,800,000 円

2015 年度 直接経費 4,300,000 円 間接経費 1,350,000 円

研究の目的:

西洋の近世・近代美術を対象に、美術市場における流通メカニズムと画商の国際的活動の全体像を、経済史の方法や成果を取り入れつつ明らかにする。具体的には、一般市場とは異なる美術市場の特質、美術作品の市場価値決定のメカニズム、市場において画商や批評家、美術史家らが果たしてきた役割などを、歴史的史料と豊富なデータに基づいて解明する。さらに、経済活動と資本主義の発達とともに急速に国際化した美術市場を「世界システム」として理解するため、各研究分野での調査・研究成果を共同研究のなかで擦り合わせつつ分析し、経済史家との議論を通じて「美術の地政経済史」Geo-Economics of Art の研究基盤と方法を構築したい。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

独立行政法人 国立美術館・外部評価委員, 2010 年 4 月～現在に至る

国際美術史学会 CIHA・国内委員, 2009 年 4 月～現在に至る

民族芸術学会・理事, 2000 年 4 月～現在に至る

3. 三宅 祥雄 准教授

1951 年生。岡山大学法文学部哲学科卒業、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。文学修士（大阪大学、1977）。大阪外国語大学外国語学部講師、同准教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科准教授。専攻：現代フランス哲学／映像論。

3-1. 論文

三宅祥雄 「引用の戦略——「菊次郎の夏」とカンヌ映画祭」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 文学研究科文化動態論専攻アート・メディア論研究室, pp. 222-227, 2015/7

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

なし

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本映像学会関西支部・幹事, 2011 年 10 月～現在に至る

4. 桑木野 幸司 准教授

1975 年生。東京大学大学院工学系研究科修士課程修了(西洋建築史)。ピサ大学大学院博士課程修了。Dottore di Ricerca in Storia delle arti visive e dello spettacolo(文学博士(美術史)・ピサ大学)。Kunsthistorisches Institut in Florenz 研究生を経て、2011 年 4 月より現職。専攻：西洋美術・建築・庭園史。

4-1. 論文

桑木野幸司「記憶のアーティスト:心を造形する者たち」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アートメディア論研究室, pp. 6-29, 2015/7

桑木野幸司「記憶のかたち—コスモ・ロッセリ『人工記憶の宝庫』(一五七九年)における天国と地獄の表象」東京文化財研究所『「かたち」再考—開かれた語りのために—』東京文化財研究所, pp. 301-315, 2014/12

4-2. 著書

桑木野幸司, 稲川直樹, 岡北一孝(共編)『ブラマンテ:盛期ルネサンス建築の構築者』NTT 出版, pp. 377-433, pp. i-viii, 2014/12

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

桑木野幸司(翻訳)「印刷という革命:ルネサンス時代の本と日常生活」白水社, pp. 1-645, 2015/8

桑木野幸司「リゴッツィとブラマンテ:二〇一四年を彩った二人の芸術家」『Arts and Media』編集委員会『Arts and Media』5, 大阪大学文学研究科文化動態論専攻アートメディア論研究室, pp. 204-207, 2015/7

4-4. 口頭発表

桑木野幸司「文化的景観とイタリア・ルネサンス庭園:トスカーナおよびローマ近郊のヴィッラの空間受容史と、その観光資源としての可能性」「観光資源としての庭園」に関する研究会, 奈良文化財研究所, 奈良文化財研究所, 2016/2

Kuwakino, Koji, “From *domus sapientiae* to *artes excerptendi*: Lambert Schenkel’s *De memoria* (1593) and the Transformation of the Art of Memory”, International Workshop “Forgetting Machines. Knowledge Management Evolution in Early Modern Europe”, Alberto Cevoloni, Palazzo Dossetti, Viale Allegrì 9, 42121 Reggio Emilia, 2015/7

Kuwakino, Koji, "Transforming the Art of Memory: Schenkel's *De memoria* (1593)", The 3rd International Conference: Renaissance Humanism and Japan's Christian Century (1549-1650), Japanese Association for Renaissance Studies, Gakushuin Women's College (Tokyo), 2015/7

桑木野幸司 「モンテニョが見た庭: 知の空間としての初期近代イタリアの庭園」第50回ラブレ・モンテニョ研究フォーラム, 日本フランス語フランス文学会, お茶の水女子大学, 2015/5

桑木野幸司 「記憶の中のイエルサレム: 初期近代西欧の聖都表象と夢・幻視・想像力」国際研究集会「夢と表象—その国際的・学際的展開の可能性」, 国際日本文化研究センター, 国際日本文化研究センター(桂), 2015/3

桑木野幸司 「ダニエーレ・バルバロとパドヴァ植物園: 多様性(varietas)の観点を中心に」第25回待兼山芸術学会, 待兼山芸術学会, 大阪大学工学部Σホール, 2015/3

桑木野幸司 「初期近代イタリアの百科全書的庭園」イタリア研究会 10 月例会(412 回), イタリア研究会, 南青山会館, 2014/10

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

桑木野幸司 大阪大学総長賞, 大阪大学, 2013/5

桑木野幸司 大阪大学総長奨励賞, 大阪大学, 2012/8

桑木野幸司 地中海学会「ヘレンド賞」, 地中海学会「ヘレンド賞」, 2012/6

桑木野幸司 日本学術振興会賞, 日本学術振興会, 2012/2

桑木野幸司 第五回美術に関する研究奨励賞, 公益財団法人 花王芸術・科学財団, 2011/3

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2015 年度、若手研究(A) 一般、代表者: 桑木野幸司

課題番号: 25704002

研究題目: テキストの中の建築: 初期近代イタリアの芸術文化における文字、図像、空間の融合

研究経費: 2014 年度 直接経費 2,400,000 円 間接経費 720,000 円

2015 年度 直接経費 3,300,000 円 間接経費 990,000 円

研究の目的:

本研究は、テキストと建築の通底、というテーマを掲げることにより、いわゆる「姉妹芸術」、すなわち文学、視覚芸術、建築の各創作理論・実践を統一的な観点からとらえる視座の獲得を目指すとともに、初期近代の文芸・美術・哲学思想において、いかに文字と図像と空間が創造的な仕方と融合していたのかを、学際的なアプローチによって明らかにし、美術史学の新たな地平の開拓を目指す。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

地中海学会・事務局員, 2012 年 4 月～現在に至る

5. 古後 奈緒子 助教

1972 年生。2004 年大阪大学 文学研究科文化表現論(美学)修了、修士(文学)。京都造形芸術大学、大阪外国語大学、龍谷大学、神戸市外国語大学、奈良大学、神戸女学院大学等の非常勤講師を経て、2014 年より現職。2001 年日本演劇批評家協会主催第 5 回「シアターアーツ賞」受賞。2001 年舞踊学会研究奨励賞。専攻: 舞踊学

5-1. 論文

古後奈緒子 『『エクセルシオール』に見られる共同体意識 — 記念碑としての一九世紀末バレエ —』大阪大学大学院文学研究科

文化動態論専攻 アート・メディア論研究室『Arts and Media』5, 大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室, pp. 119-127, 2015/7

古後奈緒子 「シー・シー・ポップの『引き出し(シュプラーデン)』―誰が誰に語っているのか」大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室『Arts and Media』5, 大阪大学大学院文学研究科 文化動態論専攻 アート・メディア論研究室, pp. 119-127, 2015/7

古後奈緒子 「二つの『七つの大罪』―バランシンとパウシュが二人のアンナに見たもの―」大阪大学大学院文学研究科 演劇学研究室『演劇学論叢』14, 大阪大学大学院文学研究科 演劇学研究室, pp. 100-117, 2015/3

5-2. 著書

なし

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

高梨友宏, 副島博彦, 古後奈緒子(共訳)(ガブリエレ・クライン著)「通過途上にあること ― コンテンポラリー・ダンスにおける文化の翻訳の実践 ―」藤原央人、ほか(共編)『シアターアーツ』(国際演劇評論家協会日本センター), 58, 国際演劇評論家協会日本センター, 2015/5

5-4. 口頭発表

古後奈緒子 「舞踊と共同体 ―『アテネの廃墟』を例に―」日本演劇学会秋の研究集会 2014: 日本演劇学会秋の研究集会 2014, 日本演劇学会, 京都外国語大学, 2014/11

古後奈緒子 「ドイツ語版『エクセルシオール』の共同体意識」第66回舞踊学会大会: 第66回舞踊学会大会, 舞踊学会, 日本女子体育大学, 2014/11『舞踊学』37, pp. 61-61, 2014/12)

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

古後奈緒子 舞踊学会研究奨励賞, 舞踊学会, 2002/12

古後奈緒子 第五回シアターアーツ賞, 国際演劇評論家協会日本センター, 2001/9

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

国際演劇評論家協会関西支部・事務局長, 2010年5月～現在に至る

2-26 文学環境論

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 3 准教授 1 講師 0 助教 0

教授：清水 康次、平田 由美、三谷 研爾

准教授：石割 隆喜

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
1	0	0	0	2	0

※うち留学生 2 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2014 年度～2015 年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2014	2
2015	2
計	4

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

文学環境論コースでは、広い視野を持った研究を求めて、日本文学・東洋文学から欧米文学にわたる文学世界を広く研究領域とし、作品とそれを取り巻く外界(環境)との関わりを多角的に捉え、文学に対する根源的な問いを試みていくことをめざしている。そのために、教育においては、文学テキストの読解力、文学環境論にかかわる研究理論についての理解力、研究分野における基本的文献の分析力の増進を目標とした。同時にまた、高度専門職業人の養成のための基礎教育を充実させることを目標とした。

2. 研究

本コースの研究は、多岐にわたる。1つの時代・地域のあり方や社会通念と文学作品との関係、異文化交流や他言語との接触、サブカルチャーの研究など、テーマが多く、領域横断的なアプローチや新しい研究理論も必要となり、翻訳も研究の1方法となる。そのような文学環境論のディシプリンの確立をめざして、各方面で研究活動を積極的に進めていくことを目標とした。また、科研費等の外部資金の獲得をめざし、努力すること、大学院生については個々の研究課題にしっかりと取り組み、着実に進めていくこと、研究室態勢としても、設備・備品の充実と、研究環境の維持・改善に努めること、などを目標とした。

3. 社会連携

本コースは、今日的知見と広範な素養を修得し、ジャーナリズム・マスコミ・教職関係等での活動をはじめ、国際的環境において活躍できる高度な専門的職業人の養成をめざしている。国際化し、情報化していく現代社会について、またさまざまな問題を孕んで多様化していく現代文化について、視野の拡大や知識の拡充に努め、具体的には、翻訳や出版についての実際に触れ、実践を試みて、専門的な知識や知見を増強することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

ほぼ当初の計画通りの成果があがっている。日本語文献と英語文献を中心に読解力と分析力の基礎学力を鍛えるトレーニングを行い、それらの諸力を増進させることにかなりの進歩が見られた。修士論文の作成についても、全教員による集団指導体制で充実した指導と助言ができた。また、イタリア・台湾・タイからの留学生が在籍し、広く日本・東洋・西洋の文学を研究領域とすることの実が挙げられた。

2. 研究

教員は、活発な研究活動が行い、著作、論文、翻訳などの刊行・出版等の点数は多数にのぼる。また、学会や各種研究会への参加等にも積極的に取り組んだ。院生は、2014 年度には 2 人の修了生を出すことができ、修了者の中には、学外での研究集会においてコメンテーターを務める者もあった。2015 年度にも 2 人の修了生を出すことができた。研究室の設備・備品についても、着実に充実してきており、研究環境もコース全体の活気も高い。

3. 社会連携

教育においては、所属院生が地方自治体の運営する文学館に所蔵される資料を調査するなど、専門的な知識を社会の中で培い、主体的に活用するための力の涵養が進んだ。教員による国内外の学術講演や一般に向けた講演会等への参加も積極的に行われた。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

2014 年度に提出された 2 本の修士論文は、いずれも留学生による充実した個性的な研究である。入学後の日本語能力の著しい向上のみならず、研究したいにも高い評価が得られ、うち 1 本は研究科が刊行する雑誌に掲載される予定である。2015 年度に提出された 2 本の修士論文は、日本人学生と外国人留学生によるもので、これもそれぞれに充実した個性的な研究である。イギリスを中心とする文学テキストを研究対象とした日本人学生は、コース外の授業への積極的な参加やチューターによる個人レッスンなどを通じて、英語の運用能力を着実に伸長させた。また、日本の近代文学を研究対象とした留学生にも入学後の日本語能力の著しい向上が見られ、チューラーロンコーン大学との研究交流集会では、修論の一部に該当する研究発表を日本語で行った。また修了生以外の院生についても、専門的研究の基礎となる読解力・理解力・分析力などが着実に向上しており、総じて目標の達成は実現できたと評価する。

2. 研究

教員の論文発表や学術書の刊行、国内外における学会、シンポジウム、ワークショップへの参加などを通じた研究成果が目標どおりに上がっている。大学院生の中にも学会誌に論文等を発表する者があった。また研究者にとどまらず広く一般聴衆にも開かれた国際シンポジウムを他の専門分野とともに主催するなど、目標の達成は実現できたと評価する。

3. 社会連携

前記の活動をふまえて自己評価すれば、社会連携の目標についても十分に達成されたと考えられる。

V. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	1(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	1(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	0	1	0	0	1
2015	0	0	1	0	0	1
計	0	0	2	0	0	2

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

【2014 年度】

キアラ・コマストリ「被爆体験を<書く>——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に」『原爆文学研究』(原爆文学研究会) 13 号, pp. 196-210, 2014/12

(2)口頭発表

【2014 年度】

キアラ・コマストリ「報告 1 被爆体験を<書く>——山代巴と『原爆に生きて』『この世界の片隅で』を中心に」第 45 回原爆文学研究会,名古屋大学, 2014/8/3

【2015 年度】

ラチャニーウォン・チャールパー「島崎藤村の『千曲川のスケッチ』と『破戒』における風景描写—『千曲川のスケッチ』にあるミレーの「百姓画」から『破戒』へ—」第 6 回大阪大学・チューラーロンコーン大学研究交流集会, 大阪大学, 2015/6/27

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2014 年度 学部: 0 名 大学院: 0 名 (計 0 名)

2015 年度 学部：0 名 大学院：0 名（計 0 名）

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

（2014 年度～2015 年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について）

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

＜内訳＞ 技術職 0 名 ジャーナリスト 1 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2016 年 2 月 20、21 日の両日にわたり大阪大学中之島センターにおいて、モビリティ・スタディーズをテーマとする国際シンポジウム「移動という経験——東アジアから考える」を日本学研究室との共同主催により開催した。

7. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 清水 康次 教授

1954 年生まれ。京都大学文学部（国語学国文学専攻）卒業、京都大学大学院文学研究科修士課程（国語学国文学専攻）修了。博士（文学）（京都大学、1995）。大阪女子大学助教授、京都光華女子大学教授等を経て、2009 年 10 月より現職。専攻：日本近代文学、書誌出版文化研究。

1-1. 論文

清水康次 「武者小路実篤「それから」に就て」論—実篤の問題意識と漱石作品との隔たり— 京都大学文学部国語学国文学研究室『国語国文』83-11, 臨川書店, pp. 1-16, 2014/11

清水康次 「「玄鶴山房」—「暗澹」たる日常の形象化」宮坂覺(編)『芥川龍之介と切支丹物—多声・交差・越境』翰林書房, pp. 102-114, 2014/4

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者：清水康次
課題番号：24520212

研究題目：雑誌『白樺』における文学の営為についての総体的な研究

研究経費:2014 年度 直接経費 500,000 円 間接経費 150,000 円

研究の目的:

明治 40 年代から大正期にかけて刊行された同人雑誌『白樺』についての研究は、これまで文学史的記述や画壇への影響の指摘に限定されたものであった。この研究では、『白樺』の活動についての、より領域横断的な、総体的な把握をめざす。『白樺』における文学と美術との共存、文壇及び画壇への提起や提言、同人たちの意識など、さまざまな情報の受信と発信をメディアとしての側面にも注目しながら捉え、広く当時の時代状況の中での位置づけをはかるものである。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

2. 平田 由美 教授

1956 年生。大阪外国語大学外国語学研究科修士課程日本語学専攻修了。博士（文学）（京都大学）。京都大学人文科学研究所助手、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：日本文学・文化研究／ジェンダー研究。

2-1. 論文

なし

2-2. 著書

テッサ・モーリス＝スズキ、平田由美他(共著)『ひとびとの精神史:朝鮮の戦争 1950 年代』岩波書店, pp. 77-102, 2015/8

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

2-4. 口頭発表

Hirata, Yumi, (パネリスト)“Sounds, Memory and History: Spaces of Korean War in Short Stories by Kim Dal-Su”, Exploring Space in Japanese Literature: Exploring Space in Japanese Literature, ベルリン自由大学歴史文化学部, ベルリン自由大学, 2015/11

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

平田由美 第 15 回女性史青山賞を賞, 東京女子大学女性学研究所, 2000/11

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:平田由美

課題番号:25370414

研究題目:移動する作家たちの東アジア:交渉の場としての文学運動

研究経費:2014 年度 直接経費 1,100,000 円 間接経費 330,000 円

2015 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 360,000 円

研究の目的:

20 世紀東アジアにおける文化活動を領土越境的な相互行為として調査分析し、国家や民族といった集团的帰属関係とは異なった、多様な社会関係から生まれる文学の可能性を開示することを目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

なし

3. 三谷 研爾 教授

1961 年生。1987 年、大阪大学大学院文学研究科博士課程中退。博士（文学、大阪大学）。大阪府立大学助手、講師、大阪大学准教授をへて 2008 年 4 月から現職。専攻：ドイツ、オーストリア文学および文化研究。

3-1. 論文

三谷研爾, 中村真(共著)「19 世紀ボヘミアにおける民俗学的思考の変容 ― ホスチンスキーの言説を手がかりに」『大阪大学文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 43-59, 2015/3

Mitani, Kenji, “Literaturforschung als moderne Wissenschaft. Japanische Philologie bei Haga Yaichi und Anglistik bei Natsume Soseki”『独文学報』(大阪大学ドイツ文学会), 30, 大阪大学ドイツ文学会, pp. 5-23, 2014/11

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

三谷研爾「近世と初期近代のあいだ」江戸庶民文化の諸相: 人文学における日本研究, 大阪大学文学研究科、ハイデルベルク大学日本学科, ハイデルベルク大学, 2015/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

3-6-1. 2011 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 三谷研爾

課題番号: 23520379

研究題目: ボヘミア文学史・民俗誌記述におけるローカリズムの位相

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,200,000 円 間接経費 36,000 円

研究の目的:

本研究課題は、中欧の典型的な多言語・多文化地域だったボヘミアを対象とし、ナショナリズム対立がきわめて深刻化した 1890 年代～両大戦間期に、ドイツ系知識人によって蓄積された、この地域の文学史・民俗誌的な学術情報のディスクリール分析をおこなう。それによって、彼らがボヘミア周縁地域の文化伝統をいかに理解・表象していたかを検証するとともに、ナショナリズムに並行・拮抗するローカリズムの思考特性を明らかにし、ナショナルなものとローカルなものが相関する知の位相に光を当てる。

3-6-2. 2015 年度～2018 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 三谷研爾

課題番号: 15K02414

研究題目: 〈プラハのドイツ語文学〉受容の社会文化史的研究

研究経費: 2015 年度 直接経費 800,000 円 間接経費 24,000 円

研究の目的:

本研究課題は、世紀転換期のプラハの複数文化的環境の経験と記憶、およびその環境を背景に生まれたドイツ語文学が、第二次世界大戦後に受容されてきた過程を検証する。そこでは、受容者自身が社会的・文化的な「境界」に身を置いたとき、プラハの

過去との対話をとおして積極的な表現活動の主体となるという文化生産・創造のメカニズムが働いてきた。このメカニズムを、1960年代から2000年代にかけて、それぞれ異なった社会文化的コンテキストのもとで著述をおこなった知識人グループに即して検討し、〈プラハのドイツ語文学〉受容の意義を明らかにする。

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本独文学会・学会賞審査委員, 2013年6月～2015年5月

関西チェコ／スロバキア協会・会長, 2009年4月～現在に至る

大阪大学ドイツ文学会・会長, 2008年1月～現在に至る

4. 石割 隆喜 准教授

1970年生まれ。大阪外国語大学外国語学部（英語学科）卒、大阪大学大学院文学研究科博士課程（英文学専攻）修了。博士（文学）（大阪大学、1999）。大阪外国語大学助手、講師、助教授、准教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科准教授。日本英文学会第22回新人賞(1999)。専攻：アメリカ文学。

4-1. 論文

石割隆喜「小説の非人間化——ポストモダニズムとポストヒューマン」大庭幸男教授退職記念論文集刊行会(編)『言葉のしんそう（深層・真相）——大庭幸男教授退職記念論文集』大庭幸男教授退職記念論文集刊行会, pp. 137-147, 2015/3

4-2. 著書

麻生享志, 木原善彦, 石割隆喜他(共著)『現代作家ガイド7 トマス・ピンチョン』彩流社, pp. 148-167, pp. 219-220, pp. 226-228, pp. 239-41, pp. 242-244, 2014/6

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

石割隆喜 日本英文学会第22回新人賞, 日本英文学会, 1999/12

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本アメリカ文学会関西支部・評議員, 2011年4月～現在に至る

2-27 言語生態論

I. 現在の組織

1. 教員(2016 年 4 月現在)

教授 5 准教授 0 講師 0 助教 0

教授：加藤 正治、田野村忠温、神山 孝夫、渋谷 勝己、岡田 禎之

2. 在学生(2016 年 5 月現在)

2016 年度の学生数*					
大学院 修士 (M)	特別 研究学生	特別 聴講学生	科目等 履修生	学部 研究生	大学院 研究生
2	0	0	0	0	0

※うち留学生 1 名、社会人学生 0 名

3. 修了生(2014 年度～2015 年度)

年度	大学院 修士(M)修了者
2014	5
2015	0
計	5

II. 掲げた目標(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

従来の方法にとらわれない柔軟な姿勢で、より広い総合的な見地から言語を見る素地を養うべく、5 名の教員が個々に担当する講義および演習等をとおして、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけさせることを目標とした。

2. 研究

院生各自が既存の枠組みにこだわらず独自に研究課題を設定して、5 名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の成果に立脚しつつ、新たな分析方法を模索して言語を分析するための実践的な研究能力を身につけることを目標とした。

3. 社会連携

研究者を養成するばかりでなく、実際に言語教育に携わっている学校教員、新聞・雑誌、出版・宣伝広告等に関わっている社会人を高度専門職業人として養成し、その結果を社会に還元することを目標とした。

Ⅲ. 活動の概要(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

院生は各自の関心に従い、教員が担当する言語生成論、言語接触論、言語変化論、言語分析論、比較言語学の講義および演習を選択履修し、各自の研究のための基礎を養った。

2. 研究

院生は各自の関心に従い、英語の either の意味分析、古英語の硬口蓋化、日本語の指示詞の機能、日本語類義動詞の意味分析、近代日本における文化語彙・概念の形成などのさまざまな課題を独自に設定し、必ずしも既存の枠組みにとらわれない独自の方法で研究を進めた。その成果を教員と院生の全員が出席する演習において順次発表し、さまざまな議論を交わすなかで修士論文作成の準備を進めた。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。2014～2015 年度入学者に社会人は含まれなかった。

Ⅳ. 自己点検・自己評価(2014 年度～2015 年度)

1. 教育

学生は各自の関心に従い、5 名の教員が個々に担当する講義および演習を履修して、言語や言語が伝える情報の実態を言語生成や変化、言語の比較対照、言語データの数量的把握などのさまざまな観点から総合的に分析するための基礎的な知識を身につけた。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

2. 研究

院生各自は既存の枠組みにとらわれずに、自由に実践的な課題を設定し、5 名の教員とコースに在籍する院生の全員が出席する演習において研究発表を行い、さまざまな議論を交わすなかで、従来の言語研究の考え方に立脚しつつ、新たな分析方法を模索した。よって掲げた目標はほぼ達成されたと考える。

3. 社会連携

特筆すべき活動はなかった。

Ⅴ. 基本情報(2014 年度～2015 年度)

1. 大学院生等による論文発表等

1-1. 論文

年度	学会誌	紀要	講座等 機関誌	学術的 商業誌	論文集	計
2014	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
2015	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)
計	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)	0(0)

括弧内は査読付き論文数。

1-2. 口頭発表

年度	国際学会	国内学会	研究会	自治体等 講演会	その他	計
2014	0	0	0	0	0	0
2015	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0

1-3. 発表年度において在籍した大学院生等による業績

(1)論文

なし

(2)口頭発表

なし

(3)その他(書評・翻訳など)

なし

2. 大学院生等の受賞状況

なし

3. 大学院生等の留学

2014 年度 学部：0 名 大学院：0 名（計 0 名）

2015 年度 学部：0 名 大学院：0 名（計 0 名）

4. 専門分野出身の高度職業人・研究者

(2014 年度～2015 年度の大学院修士課程中退・修了者で、システムエンジニア・プログラマー・通訳などの技術職、ジャーナリスト、アーティスト、中・高等学校の教員、その他の職業に就いた者について)

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

<内訳> 技術職 0 名 ジャーナリスト 0 名 アーティスト 0 名 中・高等学校の教員 0 名
その他 0 名

5. 外国人研究者の受け入れ状況

計 0 名

2014 年度：0 名 2015 年度：0 名

6. その他特筆すべき事項(刊行物発行、学会・シンポジウム・研究会の開催など)

2014 年 7 月 5 日 第 92 回 待兼山ことばの会を開催。

講演者：柴谷方良氏（ライス大学・神戸大学名誉教授）

講演タイトル："Rethinking Relative Clauses"

2014 年 12 月 19 日 第 93 回 待兼山ことばの会を開催。

講演者：小野尚之氏(東北大学教授)

講演タイトル：『N をする』構文における述語合成のしくみ

2015 年 8 月 8 日 第 94 回 待兼山ことばの会を開催。

シンポジウム：Nominalization Festival

登壇者：柴谷方良氏（ライス大学・神戸大学名誉教授）野間純平氏（関西大学非常勤）西岡美樹氏（大阪大学）

Akua Campbell 氏（ライス大学）Haowen Jiang 氏（ライス大学）

2015 年 12 月 18 日 第 95 回 待兼山ことばの会を開催。

講演者：吉村あき子氏（奈良女子大学教授）

講演タイトル：「コミュニケーションにおける推論導出プロセスと推論規則」

7. 教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 加藤 正治 教授

1955 年生。名古屋大学大学院文学研究科博士前期課程修了（英語学講座）。文学修士（名古屋大学、1979 年）。名古屋大学助手、甲南女子大学講師、大阪外国語大学助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻：英語学。

1-1. 論文

加藤正治 「If = though である可能性」『待兼山論叢』49, 大阪大学文学会, pp. 1-8, 2016/3

加藤正治 「Beowulf にみられる否定辞 ne について」『言葉のしんそう(深層・真相) 一大庭幸男教授退職記念論文集一』英宝社, pp. 193-202, 2015/3

1-2. 著書

なし

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

なし

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

1-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英文学会関西支部・編集委員, 2013 年 4 月～2015 年 3 月

2. 田野村 忠温 教授

1958 年生。京都大学大学院文学研究科博士後期課程学修退学（言語学専攻）。文学修士（京都大学、1984）。奈良大学文学部講師、大阪外国語大学外国語学部講師、同助教授、同教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教

授。専攻：言語学・日本語学。

2-1. 論文

- 田野村忠温 「「科学」の語史——漸次的・段階的変貌と普及の様相——」『大阪大学大学院文学研究科紀要』56, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 123-181, 2016/3
- 田野村忠温 「中国語の外来名表記に関する覚書——地名 Amsterdam の意識をめぐる議論の検討ほか——」『待兼山論叢』49 (文化動態論篇), 大阪大学大学院文学研究科, pp. 9-34, 2015/12
- 田野村忠温, 王晓云・赵平(译)「意译地名“牛津”、“剑桥”的产生和兴衰——近代中日语言中词汇交流的一面——」赵平・刘利音(编)『跨文化交际与区域经济发展论』(光明日报出版社), pp.21-29, 2015/8
- 田野村忠温 「意識地名「牛津」「劍橋」の発生と消長」『大阪大学大学院文学研究科紀要』55, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 81-137, 2015/3 [沈国威・内田慶市(編)『東アジア言語接触の研究』(関西大学出版部)に再録, pp.73-138, 2016/2]
- 田野村忠温「BCCWJ」の資料的特性——コーパス理解の重要性——」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 119-151, 2014/12
- 田野村忠温「日本語研究とインターネット」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 153-162, 2014/12
- 田野村忠温「スクリプト言語」田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, pp. 163-172, 2014/12

2-2. 著書

- 田野村忠温(編)『講座日本語コーパス6 コーパスと日本語学』朝倉書店, 2014/12

2-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

- 田野村忠温 「複合助詞」「文の構造」佐藤武義・前田富祺他(編)『日本語大事典』(朝倉書店), pp. 1729-1730, pp. 1785-1787, 2014/11
- 田野村忠温 「コーパス言語学」日本語文法学会(編)『日本語文法事典』(大修館書店), pp. 234-235, 2014/7

2-4. 口頭発表

- 田野村忠温 「日本語コーパスの現在」中国海洋大学(青島), 2016/3
- 田野村忠温 「日中語彙交流の過去と現在」中国海洋大学(青島), 2016/3
- 田野村忠温 「「科学」の起源——中国起源説の検証——」2016 年度国際シンポジウム「東アジア言語の接触研究」, 漢字文化圏近代語研究会, 東華大学(上海), 2016/3(『「東アジア言語の接触研究」予稿集』pp. 121-124, 2016/3)
- 田野村忠温 「「科学」の語史」関西大学東西学術研究所 2015 年度第 10 回研究例会, 関西大学東西学術研究所, 関西大学, 2016/1
- 田野村忠温 「意译地名“牛津”、“剑桥”的产生和兴衰——近代中日语言中词汇交流的一面——」武汉大学史学博士论坛“新史料与新史学”, 武汉大学, 2015/7
- 田野村忠温 「意識地名「牛津」「劍橋」の発生と消長」国際シンポジウム「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」, 漢字文化圏近代語研究会, 早稲田大学, 2015/3(『「東アジアにおける漢字漢語の創出と共有」予稿集』pp. 101-106, 2015/3)
- 田野村忠温 「近代日中両語における語彙交流の一面」“跨文化交际与区域经济发展”国际研讨会, 贵州财经大学, 2014/7(『“跨文化交际与区域经济发展”国际研讨会会议手册』p. 7, 2014/7)

2-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

2-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

2-6-1. 2012 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者: 田野村忠温

課題番号: 18061004

研究題目: コーパスを用いた日本語研究の精密化と新しい研究領域・手法の開発

研究経費: 2014 年度 直接経費 1,000,000 円 間接経費 300,000 円

2015 年度 直接経費 900,000 円 間接経費 270,000 円

研究の目的:

本研究は、応募者が従来継続的に行ってきた研究に基づき、コーパス(電子媒体の言語研究資料)を用いた日本語研究の新たな領域と手法を開拓し発展させ、それを通じてコーパスに基づく日本語研究の高度化を推進することを主たる目的とする。

2-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

2-8. 外部役員等の引き受け状況

日本言語学会・会計監査委員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本言語学会・常任委員, 2006 年 4 月～2015 年 3 月

日本言語学会・評議員, 2000 年 4 月～2015 年 3 月

3. 神山 孝夫 教授

1958 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了。博士(文学)(東北大学)。大阪外国語大学外国語学部教授を経て、2007 年 10 月より大阪大学大学院文学研究科教授。専攻: 歴史言語学、音声学、ヨーロッパ文化史。

3-1. 論文

神山孝夫「OE *byrðen* “burden” vs. *fæder* “father” —英語史に散発的に見られる [d] と [ð] の交替について—」『言葉のしんそう(深層・真相) —大庭幸男教授退職記念論文集—』英宝社, pp. 155-166, 2015/3

神山孝夫「ヨーロッパ諸語における様々な r 音について —起源と印欧語学への示唆—」『待兼山論叢 文化動態論篇』48, 文学研究科・文学会, pp. 33-71, 2014/12

3-2. 著書

なし

3-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

3-4. 口頭発表

神山孝夫(招待講演)「Vinaver の秘められた経歴」. シンポジウム「Bédier, Vinaver そして Field へ —Malory 学への最新情報—」, 国際アーサー王学会日本支部 2015 年度年次大会, 立教大学, 2015/12

3-5. 受賞歴(年度を限定しない)

神山孝夫 大阪大学共通教育賞(2008 年前期), 大阪大学共通教育機構, 2008/11

3-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

なし

3-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

3-8. 外部役員等の引き受け状況

日本歴史言語学会・会長, 2016 年 1 月～現在に至る

日本古代ロシア研究会・理事, 2015 年 4 月～現在に至る

日本歴史言語学会・理事, 2011 年 12 月～現在に至る

大阪言語研究会・世話人, 2007 年 1 月～現在に至る

4. 渋谷 勝己 教授

1959 年生。東京外国語大学大学院外国語学研究科日本語学専攻修了、大阪大学大学院文学研究科日本学専攻中退。学術博士（大阪大学）。梅花女子大学講師、京都外国語大学助教授、大阪大学准教授等を経て、2009 年 4 月より現職。専攻：日本語学。

4-1. 論文

渋谷勝己「山形市方言の文末詞の相互承接」『阪大日本語研究』28, 文学研究科日本語学講座, pp. 1-21, 2016/3

渋谷勝己「第二言語習得理論」『日本語学』34-14, 明治書院, pp. 138-150, 2015/11

渋谷勝己「書きことばにおけるスタイル生成のメカニズム—山東京伝を例として—」『社会言語科学』(社会言語科学会), 18-1, 社会言語科学会, pp. 23-39, 2015/9

4-2. 著書

なし

4-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

4-4. 口頭発表

なし

4-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

4-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

4-6-1. 2013 年度～2015 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:渋谷勝己

課題番号:25370516

研究題目:江戸後期の著作者を対象とするスタイル能力の歴史社会言語学的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 100,000 円 間接経費 30,000 円

2015 年度 直接経費 400,000 円 間接経費 120,000 円

研究の目的:

これまでの社会言語学研究は、基本的に現代語を対象とするものであったが、その方法は過去の言語にも適用できるはずである。本研究は、江戸後期に執筆活動を行った著作者が残した文献を総体的に分析することによって、その著作者がもっていたスタイル能力とスタイル運用能力を明らかにすることを目的とするものである。現在かたちをなしつつある歴史社会言語学的な研究のひとつの試みである。

4-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

4-8. 外部役員等の引き受け状況

日本語学会・理事、評議員, 2015 年 5 月～現在に至る

社会言語科学会・理事、研究大会委員長, 2015 年 4 月～現在に至る

日本文法学会・評議員, 2015 年 4 月～現在に至る

日本学術会議・連携会員, 2014 年 10 月～現在に至る

5. 岡田 禎之 教授

1965 年生。大阪大学大学院文学研究科博士課程(英語学専攻)中途退学。文学博士 (大阪大学、2001 年)。第 37 回市河賞 (2003 年)。大阪大学助手、岡山大学講師、金沢大学助教授、神戸市外国語大学助教授、大阪大学大学院文学研究科准教授を経て、2010 年 4 月より現職。専攻：英語学。

5-1. 論文

岡田禎之 「日英語名詞表現の語彙概念拡張と項・付加詞の非対称性」『大阪大学大学院文学研究科紀要』56, 大阪大学大学院文学研究科, pp. 21-60, 2016/3

岡田禎之 「名詞の語彙概念拡張と歴史的変遷に関する初期的調査」大庭教授退職記念論文集刊行会(共編著)『言葉のしんそう (深層・真相)』英宝社, pp. 597-608, 2015/3

5-2. 著書

Okada, Sadayuki, Tanaka, Eri, (eds.) *Osaka University Papers in English Linguistics*, 17, 大阪大学大学院文学研究科 英語学研究室, pp. 1-90, 2015/12

岡田禎之, 大庭幸男教授退職記念論文集刊行会他(共編著)『言葉のしんそう(深層・真相)』英宝社, 681p. , pp. 597-608, 2015/3

5-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

岡田禎之 「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」(日本英文学会北海道支部 59 回大会 Proceedings) 『日本英文学会 2014 年度支部大会 Proceedings』 pp.109-110. 2015/9

5-4. 口頭発表

Okada, Sadayuki, “Asymmetrical Distributions in Nominal Conceptual Expansion”, International Cognitive Linguistics Conference 13, International Cognitive Linguistics Society, Northumbria University, Newcastle, 2015/7

岡田禎之 (招待講演)「日英語の語彙概念拡張に関する一考察」日本英文学会北海道支部 59 回大会, 日本英文学会北海道支部, 北海道武蔵女子短期大学, 2014/10

5-5. 受賞歴(年度を限定しない)

岡田禎之 10 papers selection, Annual Report of Osaka University Academic Achievement 2009-2010, Osaka University, 2010/12

岡田禎之 第 37 回市河賞, 財団法人語学教育研究所, 2003/10

5-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

5-6-1. 2013 年度～2017 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:岡田禎之

課題番号:25370551

研究題目:語彙概念拡張の非対称性と意味変化

研究経費:2014 年度	直接経費	500,000 円	間接経費	150,000 円
2015 年度	直接経費	700,000 円	間接経費	210,000 円

研究の目的:

名詞の語彙概念拡張に関して、項位置と付加詞位置における概念拡張可能性には非対称的な関係があることを、英語や日本語を中心としてコーパスからデータを集積し、証明するとともに、意味変化の方向性として、項位置において発現した新しい意味解釈が慣習化することによって、付加詞位置にも浸透していくという意味変化の方向性を仮定し、これを検証していく。このためには、現代語のコーパスだけではなく歴史的なコーパスデータの集積、検証も必要であり、またある程度広範な名詞表現についての検証を行わなければならないため、多くの時間と労力が必要となる。

5-7. その他の外部資金の受け入れ状況

なし

5-8. 外部役員等の引き受け状況

日本英語学会・事務局長, 2013 年 9 月～2015 年 4 月

日本英文学会関西支部・理事, 2013 年 4 月～現在に至る

日本英語学会・評議員, 2013 年 4 月～現在に至る

阪大英文学会・幹事, 2010 年 4 月～現在に至る

2-28 留学生専門教育

はじめに. 教育・研究活動の概要とその特色

留学生専門教育では、留学生の勉学・研究をサポートするために、日本語の授業やオフィスアワーを設けている。日本語の授業では、論文作成法、発表や議論の仕方などを学ぶ。とくに論理的思考の訓練に重点をおき、質を落とさずにわかりやすく文章(論文)を書けるようにすることを目指している。

教員の研究活動(2014 年度～2015 年度の過去 2 年間)

1. 鄭 聖汝 講師

1957 年生。神戸大学大学院文化科学研究科博士後期課程修了。博士(学術)。日本学術振興会外国人特別研究員を経て現職。
専攻：日韓対照言語学／言語類型論。

1-1. 論文

鄭聖汝「使役構文の形成と結合価再考ー日本語と韓国語の証拠からー」『大阪大学大学院文学研究科紀要』55, 大阪大学, pp. 139-173, 2015/3

Yoshinari Yuko, Prashant Pardesh, Chung Sung-Yeo(共著), "Usage of Transitive Verbs in the Depiction in the Accidental Events in Japanese and Korean" Seungho Nam, Heejeong Ko, and Jongho Jun(eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, (Japanese/Korean Linguistics Conference), 21, CSLI Publications & SLA, pp. 231-245, 2014

Masayoshi Shibatani, Chung Sung-Yeo, Bayaerduleng(共著), "Genitive Modifiers: Ga/no Conversion Revisited" Mikio Giriko, Naonori Nagaya, Akiko Takemura, & Timothy J. Vance(eds.) *Japanese/Korean Linguistics*, (Japanes/Korean Linguistics Conference), 22, CSLI Publications & SLA, pp. 355-394, 2014

1-2. 著書

鄭聖汝(編)『平成 24 年度ー平成 26 年度科学研究費研究成果報告書:他動性のプロトタイプ理論と類型論的仮説に関する理論的・実証的研究』大阪大学, p. 389, 2015/3

1-3. 翻訳・書評・解説・辞典項目等

なし

1-4. 口頭発表

鄭聖汝「韓国語における二種類の属格について」平成 27 年度国際共同研究促進プログラム研究会, 大阪大学国際共同研究促進プログラム, ライス大学, 2016/2

鄭聖汝「現代韓国語の疑問形式-kka の成立と文タイプー慶尚・済州方言を手掛かりにー」第 8 回日本語疑問文の通時的・対照言語学研究プロジェクト, 日本語疑問文の通時的・対照言語学的研究プロジェクト, 国立国語研究所, 2015/12

鄭聖汝「日本語の「消失文」における属格の場所名詞句の性質についてー中国語との比較を通してー」第 4 回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム, 延辺大学外国語学院・延辺大学日本学研究所, 延辺大学, 2015/8

鄭聖汝, 秋田喜美「実験結果からみた他動性と意図性の関係ー中国語・日本語・英語の場合ー」第 6 回中日対照言語学会, 中日対照言語学会, 中国人民大学, 2014/8

1-5. 受賞歴(年度を限定しない)

なし

1-6. 科学研究費補助金の獲得状況(研究代表者となったもの)

1-6-1. 2012 年度～2014 年度、基盤研究(C) 一般、代表者:鄭聖汝

課題番号:24520426

研究題目:他動性のプロトタイプ理論と類型論的仮説に関する理論的・実証的研究

研究経費:2014 年度 直接経費 1,300,000 円 間接経費 390,000 円

研究の目的:

本研究は他動性に関する二つの仮説―他動性のプロトタイプ理論(普遍性)と類型論的仮説(スル型言語とナル型言語)―の關係に焦点をあて、両者の整合性の可否を検証し、より包括的な言語類型論の枠組みを構築しようとするものである。この目的の達成のために本研究では心理学的な実験手法を用い、実際の発話資料を調査する。調査対象の言語は、日本語(なる型)と英語(スル型)の他に、類型特徴の異なるアジア諸言語(韓国語、中国語、タイ語、マレー語、ヒンディー語、ウルドゥー語、テルグ語)である。

1-7. その他の外部資金の受け入れ状況

1-7-1. 2015 年度～2017 年度、2: その他共同研究、助成金獲得者:鄭聖汝

助成金名:国際共同研究促進プログラム

研究題目:準体法研究を中心とした機能文法理論の新展開

助成団体名:大阪大学

助成金額:2015 年度 直接経費 4,136,000 円

研究の目的:

本研究は、過去 50 年間にわたり学会を席卷してきたチョムスキーによる哲学的理論から経験的で実証的な学問へと言語学のパラダイムを念頭に、近年発達してきた認知・機能文法の展開を目標としている。準体法研究を具体的な課題に掲げ、当分野で先進的研究に取り組んできた(米)Rice University の Masayoshi Shibatani 教授の研究チームと文学研究科ならびに言語文化研究科の専門教員・大学院生からなる研究グループとの国際共同研究を促進することによって、本学における個別言語ならびに言語学研究の一層の発展を図るとともに、その研究成果を海外発信に繋げようとするものである。

1-8. 外部役員等の引き受け状況

関西言語学会・学会誌編集委員, 2014 年 10 月～現在に至る

関西言語学会・大会運営委員, 2011 年 4 月～現在に至る

編集後記

ここに発刊する『年報 2016』は、文学研究科および文学部の 2014 年度および 2015 年度の 2 年間の教育・研究活動の記録である。

本書収録のデータの収集については、これまでと同様、全ての文学研究科所属教職員の多大な協力を賜った。また、データの統合と点検については、評価・広報室の倉智聖子さん・瀬島梨奈さんのご尽力によるものである。

「発刊の趣旨」でも述べたように、前刊『年報 2014』からは紙媒体による発行形態を取り止め、PDF ファイルのみでの発行とした。そのことにより、編集作業については、省力化できた部分も大きかった。しかし、そのことでデータ収集の手間が軽減されたわけではない。研究科の研究・教育活動が盛んになればなるほど、当然その成果についてのデータ収集や整理の労力も増大する道理であり、苦勞が多いことは一面では喜ぶべきことともいえようが、教育・研究により多くの力を傾注するためにも、広くアイデアを頂きつつ、この作業に関しては可能な限り合理化・効率化を図っていく必要があろう。

第 1 部には、研究科全体・各室・各種プロジェクト・各種委員会等の活動報告を収録した。基本的な編集方針や形式は、前刊『年報 2014』を踏襲し、それぞれ関係する教員や各事務部局にデータ収集と執筆をお願いしたものである。プロジェクトに関しては、「劇場・音楽堂・美術館等と連携するアート・フェスティバル人材育成事業」並びに（後述の「人文学クラスター」において一足先に開始されていた）「アーツ&リサーチ」の実施期間が満了した一方、新たに「文学研究科国際的・社会連携型人文学研究教育クラスター（略称：人文学クラスター）」が開始され、分野横断的な新しい人文学研究の拠点を形成すべく個の力を結集し組織全体の力を向上させるための多様な活動が行われている。

第 2 部は、各専門分野・コースの教育・研究活動に関するデータを収録した。教員個人のデータの収集は、本『年報 2016』もこれまでに引き続き、2007 年度より導入・活用された、入力用のエクセルシートを使用した。改善しうる点はなお存するが、基本的な方法は軌道に乗ってきたと言える。その他の情報、殊に大学院生の業績データの収集にあたっては、コースオーガナイザーを初めとする各専門分野の教員や、助教の方々を大いに煩わせた。学生の在学形態やキャリアパスの複雑化といった変化もデータ収集の難しさの一つの背景となっているが、そうしたことにとも対応する形での作業の効率化について、今後特に検討を重ねたい。

繰り返しになるが、万事繁多な中、本『年報 2016』を遅滞なく計画通りに発行することが出来たのは、ひとえに、データの収集から校正に至るまで、快くご協力下さった関係の皆さまのおかげである。改めて厚く御礼申し上げ、結びの言葉としたい。

2017 年 1 月

加藤 正治、清水 康次、園府寺 司

大阪大学大学院文学研究科
年報 2016
教育・研究 (2014-2015 年度)

2017 年 3 月発行

編 集 大阪大学大学院文学研究科／評価・広報室
発 行 大阪大学大学院文学研究科
〒560-8532 豊中市待兼山町 1-5
TEL:FAX 06-6850-5107 (評価・広報室)

後乃為用也

要之終一也丁卯大略

一經乃由中而外之曰業之內焉

今臨切磔焉

一人切磔焉又為之經外乃傍人
子之及之也

望

安永七年 戌六月